

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第37集

富士岡1古墳群他

富 士 市

平成21・22・24年度地域活性化基幹農道
愛鷹2期地区農道整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

静岡県埋蔵文化財センター



富士岡 1 古墳群 1 区第 1 遺構面調査区東側

カラー図版 2



富士岡 1 古墳群 古墳時代土師器集合



向山遺跡 古墳時代土師器集合



中尾沢遺跡 古墳時代土師器集合

カラー図版 4



向山遺跡 繩文土器集合



富士岡 1 古墳群 顔面把手付土器



向山遺跡 顔面装飾

序

富士市の富士山南麓から愛鷹山南西麓には多くの遺跡が所在しています。

本書では、愛鷹農道の建設事業に伴い調査が実施された、富士岡1古墳群・向山遺跡・中尾沢遺跡・分地遺跡について報告をします。

富士岡1古墳群では古墳時代後期の古墳の周溝と前期の竪穴建物と方形周溝墓が検出され、縄文時代前期の土器が多量に出土しました。向山遺跡では古墳時代前期の竪穴建物が検出されました。縄文時代は、中期の竪穴建物、前期の竪穴状遺構と共に、早期から後期にかけての様々な時期のバラエティーに富んだ縄文土器が出土しました。中尾沢遺跡では古墳時代前期の竪穴建物が検出され、分地遺跡では、溝や土坑が検出されました。

古墳時代前期の集落である富士岡1古墳群・向山遺跡・中尾沢遺跡という隣接する尾根に位置する遺跡の調査ができ、非常に有意義な成果となりました。富士岡1古墳群では、当地域で検出例が少なかった方形周溝墓が確認されたことで、居住域から墓域へのあり方や変遷など、集落内における人々の営みをさらに具体的な形で知ることができます。

縄文時代では富士岡1古墳群・向山遺跡で特に前期後半から中期前半にかけての土器が多量に出土しました。北陸や東北地域、西日本の影響を受けた土器などが出土していることから、当時の人々の地域間交流の広さを窺い知ることができます。富士山南麓から愛鷹山南西麓にかけて、この時期の土器が多く出土した遺跡は類例がなく、当地域の縄文時代前期から中期前半の様相を究明する上で貴重な遺跡となるでしょう。こうした成果は地域の歴史、文化を知る上で欠かせない資料となることと思います。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県富士農林事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2013年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝田順也

例 言

- 1 本書は静岡県富士市富士岡に所在する富士岡1古墳群、同市中里に所在する向山遺跡、中尾沢遺跡、分地遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は地域活性化基幹農道愛鷹2期地区農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県富士農林事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。
- 3 富士岡1古墳群他の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

確認調査 平成20年8～11月（静岡県教育委員会文化課）

	調査対象面積119m ²	実掘面積119m ²
平成21年9月～10月・平成22年3月	調査対象面積40m ²	実掘面積40m ²
本 調 査 平成21年8月～平成22年8月	調査対象面積3,487.9m ²	実掘面積6,975.8m ²
平成24年6月～8月	調査対象面積167m ²	実掘面積327m ²

資料整理 平成24年4月～平成25年3月

- 4 調査体制は以下のとおりである。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

平成21年度

所長兼常務理事 天野 忍	次長兼総務課長 松村 享	総務係長 山内小百合
会計係長 杉山 和枝	次長兼調査課長 及川 司	次長兼事業係長 稲葉 保幸
保存処理室長 西尾太加二	次長兼東部統括係長 中鉢 賢治	
東部調査係長 笹原千賀子	中部調査係長 河合 修	西部調査係長 富樫 孝志
調査研究員 薬科 泰裕	常勤嘱託員 三好 元樹	

平成22年度

所長兼常務理事 石田 彰	次長兼総務課長 松村 享	専門監兼事業係長 稲葉 保幸
総務係長 瀧 みやこ	調査課長 中鉢 賢治	調査第一係長 勝又 直人
調査第二係長 岩本 貴	調査第三係長 溝口 彰啓	調査第四係長 富樫 孝志
常勤嘱託員 三好 元樹・杉山 和徳・中島金太郎		

静岡県埋蔵文化財センター

平成24年度

所 長 勝田 順也	次長兼総務課長 八木 利眞	調 査 課 長 中鉢 賢治
主幹兼事業係長 前田 雅人	総務係長 瀧 みやこ	調査第一係長 富樫 孝志
調査第二係長 溝口 彰啓	主 査 岩崎しのぶ	常勤嘱託員 西田真由子

- 5 本書の執筆は岩崎・西田が行った。
- 6 平成24年度の発掘調査における掘削業務は、株式会社関道建設に委託した。
- 7 発掘調査における測量業務は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 8 資料整理・保存処理業務については、株式会社パソナに委託した。
- 9 出土炭化物の樹種同定及び放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 10 出土石器の石材鑑定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

- 11 発掘調査・資料整理では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
佐藤祐樹・佐野五十三・篠原和大・瀧谷昌彦・谷藤保彦・戸田哲也・藤村 翔・前嶋秀張・渡井
英善（五十音順・敬称略）
- 12 発掘調査の資料はすべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いる方位は国土座標の方位である。座標値は世界測地系に準拠し、標高は海拔高を表す。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
富士岡1古墳群 (X = -91800, Y = 20700) = (A, 1)
向山遺跡 (X = -91800, Y = 21000) = (A, 1)
中尾沢遺跡 (X = -91930, Y = 21160) = (A, 1)
分地遺跡 (X = -92200, Y = 21300) = (A, 1)
- 3 遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれにスケールを付した。
- 4 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』(農林水産省技術会議事務局監修1992)を使用した。
- 5 第3章第2節の周辺遺跡地図（第4図）は国土地理院発行1:50,000地形図「吉原」「沼津」「富士宮」「御殿場」を複写し加工・加筆した。
- 6 本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。

S H	竪穴建物	P	(竪穴建物内) 柱穴	S Z	方形周溝墓	S D	溝状遺構
S K	土坑	S P	小穴	S X	性格不明遺構		

目 次

第1章 調査の経緯	1
第2章 調査の方法と経過	
第1節 調査の方法	2
第2節 調査の経過	3
第3章 遺跡の概要	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第4章 資料の分類	10
第5章 富士岡1古墳群	
第1節 調査履歴	14
第2節 基本土層と土層の堆積状況	14
第3節 1区古墳時代の遺構と遺物	20
第4節 1区縄文時代の遺構と遺物	48
第5節 1区旧石器時代の遺物	83
第6節 2区古墳時代の遺構と遺物	84
第7節 2区縄文時代の遺構と遺物	93
第6章 向山遺跡	
第1節 調査履歴	119
第2節 基本土層と土層の堆積状況	119
第3節 古墳時代以降の遺構と遺物	122
第4節 古墳時代の遺構と遺物	126
第5節 縄文時代の遺構と遺物	142
第6節 旧石器時代の遺物	219
第7章 中尾沢遺跡	
第1節 基本土層と土層の堆積状況	238
第2節 古墳時代前期以降の遺構	240
第3節 古墳時代の遺構と遺物	242
第4節 縄文時代の遺物	253
第8章 分地遺跡	
第1節 基本土層と土層の堆積状況	259
第2節 遺構と遺物	259

第9章　まとめ	266
---------	-----

附編

分析1　富士岡1古墳群、向山遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	272
分析2　富士岡1古墳群、向山遺跡、中尾沢遺跡出土炭化材の樹種	276

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 静岡県と富士市の位置	1
第2図 遺跡位置図	2
第3図 富士市域の地質の概略	6
第4図 周辺遺跡地図	9
第5図 調査区位置図	15
第6図 グリッド配置図	16
第7図 基本土層柱状図	16
第8図 第1遺構面遺構配置図	17
第9図 第1遺構面遺構配置拡大図1	18
第10図 第1遺構面遺構配置拡大図2	19
第11図 1号古墳周溝	21
第12図 2号古墳周溝	22
第13図 S D13	23
第14図 第1遺構面 土坑	24
第15図 遺構出土遺物（古墳時代後期）	24
第16図 S H1	25
第17図 S H2	26
第18図 S H3	27
第19図 S H4	28
第20図 S H5	29
第21図 T A2	30
第22図 S B1	31
第23図 S Z1	32
第24図 S Z2	33
第25図 S Z3	34
第26図 S Z3遺物出土状況	35
第27図 S Z4・S Z5	36
第28図 遺物集中1・2	37
第29図 S K1	38
第30図 遺構出土遺物（古墳時代前期） 1	39
第31図 遺構出土遺物（古墳時代前期） 2	40
第32図 遺構出土遺物（古墳時代前期） 3	41
第33図 遺構出土遺物（古墳時代前期） 4	42
第34図 第1遺構面 溝状遺構	43
第35図 第2遺構面遺構配置図	45
第36図 第2遺構面遺構配置拡大図1	46
第37図 第2遺構面遺構配置拡大図2	47
第38図 T A1	48
第39図 集石	49
第40図 第2遺構面 土坑	50
第41図 配石土坑・埋甕	51
第42図 第2遺構面 S X4	52
第43図 1区 遺構出土遺物1	53
第44図 1区 遺構出土遺物2	55
第45図 1区 遺構出土遺物3	56
第46図 1区 遺構出土遺物4	57
第47図 1区 包含層出土土器1	59
第48図 1区 包含層出土土器2	60
第49図 1区 包含層出土土器3	63
第50図 1区 包含層出土土器4	66

第51図	1区 包含層出土土器5	67	第91図	第1遺構面 土坑1	123
第52図	1区 包含層出土土器6	68	第92図	第1遺構面 土坑2	124
第53図	1区 包含層出土土器7	69	第93図	遺構出土遺物	124
第54図	1区 包含層出土石器1	72	第94図	第2遺構面遺構配置図	125
第55図	1区 包含層出土石器2	73	第95図	S H 1	127
第56図	1区 包含層出土石器3	74	第96図	S H 2	128
第57図	1区 包含層出土石器4	75	第97図	S H 10	129
第58図	1区 包含層出土石器5	76	第98図	S H 11	130
第59図	1区 包含層出土石器6	77	第99図	S H 11遺物出土状況	131
第60図	1区 包含層出土石器7	78	第100図	T A 7	132
第61図	1区 包含層出土石器8	79	第101図	S B 1	133
第62図	1区 包含層出土石器9	80	第102図	第1遺構面 溝状遺構・土坑	134
第63図	1区 包含層出土石器10	81	第103図	S K 134・S K 135	135
第64図	1区 包含層出土石器11	82	第104図	性格不明遺構	136
第65図	1区 包含層出土石器(旧石器)	83	第105図	遺構出土土器(古墳時代前期)	
第66図	2区 第1遺構面遺構配置 拡大図3	84		1	138
第67図	3号古墳周溝1	85	第106図	遺構出土土器(古墳時代前期)	
第68図	3号古墳周溝2	86		2	139
第69図	S D20	87	第107図	遺構出土遺物(古墳時代前期)	140
第70図	遺構出土遺物(古墳時代後期)	87	第108図	第3遺構面遺構配置図	141
第71図	T A 3	88	第109図	S H 14	143
第72図	S D22	89	第110図	S H 14遺物出土状況	144
第73図	第1遺構面 土坑	90	第111図	T A 1	145
第74図	2区 遺構出土遺物1	91	第112図	T A 2・T A 3	146
第75図	2区 遺構出土遺物2	92	第113図	T A 4・T A 5	147
第76図	第2遺構面遺構配置拡大図3	93	第114図	T A 6	148
第77図	集石・第2遺構面 土坑	94	第115図	集石1	149
第78図	2区 遺構出土遺物	95	第116図	集石2	150
第79図	2区 包含層出土土器1	96	第117図	第3遺構面 土坑1	151
第80図	2区 包含層出土土器2	98	第118図	第3遺構面 土坑2	152
第81図	2区 包含層出土土器3	99	第119図	S X 3	153
第82図	2区 包含層出土土器4	101	第120図	遺構出土遺物1	156
第83図	2区 包含層出土石器1	102	第121図	遺構出土遺物2	157
第84図	2区 包含層出土石器2	103	第122図	遺構出土遺物3	158
第85図	2区 積状耳飾	104	第123図	遺構出土遺物4	159
第86図	調査区位置図	119	第124図	遺構出土遺物5	160
第87図	グリッド配置図	120	第125図	遺構出土遺物6	161
第88図	基本土層柱状図	120	第126図	遺構出土遺物7	162
第89図	第1遺構面遺構配置図	121	第127図	遺構出土遺物8	163
第90図	第1遺構面 溝状遺構	122	第128図	遺構出土遺物9	164
			第129図	包含層出土土器1	166

第130図	包含層出土土器2	167
第131図	包含層出土土器3	170
第132図	包含層出土土器4	171
第133図	包含層出土土器5	173
第134図	包含層出土土器6	174
第135図	包含層出土土器7	177
第136図	包含層出土土器8	178
第137図	包含層出土土器9	179
第138図	包含層出土土器10	180
第139図	包含層出土土器11	181
第140図	包含層出土土器12	182
第141図	包含層出土土器13	184
第142図	包含層出土土器14	185
第143図	包含層出土土器15	187
第144図	包含層出土土器16	189
第145図	包含層出土土器17	190
第146図	包含層出土土器18	191
第147図	包含層出土土器19	194
第148図	包含層出土土器20	195
第149図	包含層出土土器21	197
第150図	包含層出土石器1	199
第151図	包含層出土石器2	200
第152図	包含層出土石器3	201
第153図	包含層出土石器4	202
第154図	包含層出土石器5	203
第155図	包含層出土石器6	204
第156図	包含層出土石器7	205
第157図	包含層出土石器8	206
第158図	包含層出土石器9	207
第159図	包含層出土石器10	208
第160図	包含層出土石器11	209
第161図	包含層出土石器12	211
第162図	包含層出土石器13	212
第163図	包含層出土石器14	213
第164図	包含層出土石器15	214
第165図	包含層出土石器16	215
第166図	包含層出土石器17	216
第167図	包含層出土石器18	217
第168図	包含層出土石製品	218
第169図	包含層出土石器（旧石器）	220
第170図	調査区位置図	238
第171図	グリッド配置図	239
第172図	基本土層柱状図	239
第173図	第1遺構面遺構配置図	240
第174図	第1遺構面 土坑・小穴	241
第175図	第2遺構面遺構配置図	242
第176図	S H 1	243
第177図	S H 2	244
第178図	S H 2 遺物出土状況	245
第179図	S H 3	246
第180図	S H 4	247
第181図	S B 1	248
第182図	第2遺構面 溝状遺構	249
第183図	遺構出土遺物1	250
第184図	遺構出土遺物2	251
第185図	包含層出土土器（古墳時代前期）	
		252
第186図	包含層出土土器	254
第187図	包含層出土石器1	255
第188図	包含層出土遺物2	256
第189図	調査区位置図	259
第190図	グリッド配置図	260
第191図	基本土層柱状図	260
第192図	遺構配置図	261
第193図	溝状遺構	262
第194図	土坑・小穴	263
第195図	遺構出土遺物	264
第196図	包含層出土遺物	264
第197図	富士岡1古墳群遺構変遷図	267

附編

第198図	曆年較正年代グラフ	275
第199図	富士岡1古墳群の炭化材	280
第200図	向山遺跡の炭化材(1)	281
第201図	向山遺跡の炭化材(2)	282
第202図	中尾沢遺跡の炭化材	282

挿表目次

第1表 工程表	4
第2表 周辺遺跡地名表	9
第3表 発掘調査された古墳の概要	14
第4表 富士岡1古墳群の調査歴	14
第5表 富士岡1古墳群1区 古墳周溝の概要	104
第6表 富士岡1古墳群1区 竪穴建物の概要	104
第7表 富士岡1古墳群1区 掘立柱建物の概要	104
第8表 富士岡1古墳群1区 方形周溝墓の概要	104
第9表 富士岡1古墳群1区 溝状遺構の概要	104
第10表 富士岡1古墳群1区 竪穴状遺構の概要	104
第11表 富士岡1古墳群1区集石の概要 ..	105
第12表 富士岡1古墳群1区 土坑・小穴の概要	105
第13表 富士岡1古墳群1区 古墳時代土器観察表	107
第14表 富士岡1古墳群1区 縄文時代土器観察表	108
第15表 富士岡1古墳群1区 土製品観察表	113
第16表 富士岡1古墳群1区 縄文時代石器属性表	113
第17表 富士岡1古墳群1区 旧石器時代石器属性表	114
第18表 富士岡1古墳群2区 古墳周溝の概要	114
第19表 富士岡1古墳群2区 竪穴状遺構の概要	114
第20表 富士岡1古墳群2区 溝状遺構の概要	115
第21表 富士岡1古墳群2区集石の概要 ..	115
第22表 富士岡1古墳群2区 土坑・小穴の概要	115
第23表 富士岡1古墳群2区 古墳時代土器観察表	115
第24表 富士岡1古墳群2区 縄文時代土器観察表	116
第25表 富士岡1古墳群2区 縄文時代石器属性表	118
第26表 富士岡1古墳群2区縄文時代 块状耳飾属性表	118
第27表 向山遺跡竪穴建物の概要	221
第28表 向山遺跡竪穴状遺構の概要	221
第29表 向山遺跡掘立柱建物の概要	221
第30表 向山遺跡溝状遺構の概要	221
第31表 向山遺跡集石の概要	221
第32表 向山遺跡土坑・小穴の概要	222
第33表 向山遺跡中世・古墳時代 土器観察表	224
第34表 向山遺跡古墳時代 金属製品属性表	224
第35表 向山遺跡古墳時代 石製品属性表	224
第36表 向山遺跡縄文時代土器観察表	225
第37表 向山遺跡縄文時代土製品観察表 ..	234
第38表 向山遺跡縄文時代石器属性表	235
第39表 向山遺跡縄文時代石製品属性表 ..	237
第40表 向山遺跡旧石器時代石器属性表 ..	237
第41表 中尾沢遺跡竪穴建物の概要	257
第42表 中尾沢遺跡掘立柱建物の概要	257
第43表 中尾沢遺跡溝状遺構の概要	257
第44表 中尾沢遺跡土坑・小穴の概要	257
第45表 中尾沢遺跡古墳時代土器観察表 ..	257
第46表 中尾沢遺跡縄文時代土器観察表 ..	258
第47表 中尾沢遺跡縄文時代石器属性表 ..	258
第48表 分地遺跡溝状遺構の概要	265
第49表 分地遺跡土坑・小穴の概要	265
第50表 分地遺跡縄文時代土器観察表	265
第51表 分地遺跡縄文時代石器属性表	265

附編

- 第52表 富士岡 1 古墳群、向山遺跡における
放射性炭素年代 274
表53表 富士岡 1 古墳群、向山遺跡における
放射性炭素年代（参考値）... 274

- 表54表 富士岡 1 古墳群（SFJO）の
樹種同定結果 276
表55表 向山遺跡（SMY）の
樹種同定結果 278

図版目次

カラー図版 1 富士岡 1 古墳群	図版 7 富士岡 1 古墳群 1 区
1 区第 1 遺構面調査区東側	S Z 3 土層帶南壁
カラー図版 2 富士岡 1 古墳群 古墳時代	S Z 3 北側土層帶西壁
土師器集合	S Z 3 遺物出土狀況
カラー図版 3 向山遺跡 古墳時代	遺物集中 2
土師器集合	S Z 3 遺物出土狀況
中尾沢遺跡 古墳時代	S Z 5 土層斷面
土師器集合	図版 8 富士岡 1 古墳群 1 区
カラー図版 4 向山遺跡 繩文土器集合	S K 1 遺物出土狀況
富士岡 1 古墳群 顔面把手付土器	T A 1
向山遺跡 顔面裝飾	図版 9 富士岡 1 古墳群 1 区 S Y12
	S Y11
	S X 4
富士岡 1 古墳群	富士岡 1 古墳群 1 区
図版 1 富士岡 1 古墳群 1 区 第 1 遺構面遺構	第 2 遺構面調査区東側土坑群
1 号古墳周溝	S K80 遺物出土狀況
図版 2 富士岡 1 古墳群 1 区	S P193
1 号古墳周溝縫出土狀況	図版 11 富士岡 1 古墳群 1 区
2 号古墳周溝検出狀況	遺構出土土師器
図版 3 富士岡 1 古墳群 1 区 S H 1	図版 12 富士岡 1 古墳群 1 区
S H 2	遺構出土土師器
図版 4 富士岡 1 古墳群 1 区 S H 3	T A 1 出土土器
S H 4	S Y11 出土土器
図版 5 富士岡 1 古墳群 1 区 S H 5 挖方	S Y11・S X 4 出土石器
T A 2 遺物出土狀況	図版 13 S K 出土遺物
T A 2	S P 出土土器
図版 6 富士岡 1 古墳群 1 区 S Z 1 ~ 3	S P193 埋甕
S Z 1 土層斷面	S X 4 出土土器
S Z 2 土層斷面	I 群 1 類 c
S Z 1 遺物出土狀況	I 群 1 類 h · i
遺物集中 1	

図版14	II群1類b・c・e・f・g・i・j II群2類d	向山遺跡	
図版15	II群2類c II群2類e II群2類f・g・h III群1類a 頭面把手土器	図版29	向山遺跡 第2遺構面東側全景 第2遺構面西側全景
図版16	III群1類a III群1類a 小型鉢 III群1類c・d・2類d III群3類c・e・f IV群b 土製円板	図版30	向山遺跡 第1遺構面土坑 S D 1 S K 3 S K49遺物出土状況
図版17	1区出土石鎌・石匙・石錐・石核	図版31	向山遺跡 S H 1
図版18	1区出土スクレイパー・打製石斧	図版32	S H 2 挖方
図版19	1区出土打製石斧・磨製石斧 1	図版33	向山遺跡 S H 10 挖方
図版20	1区出土打製石斧・磨製石斧 2 1区出土旧石器	図版34	S H 11 遺物出土状況
図版21	富士岡1古墳群2区 第1遺構面全景 第2遺構面全景	図版35	向山遺跡 S H 11 挖方
図版22	富士岡1古墳群2区 3号古墳周溝	図版36	T A 7
	3号古墳周溝出土状況		向山遺跡 S H 1
図版23	富士岡1古墳群2区 T A 3 S D 22	図版37	S H 2 置石炉
図版24	富士岡1古墳群2区 S Y 20 S K 101 S K 104	図版38	S H 10 遺物出土状況
図版25	富士岡1古墳群2区 遺構出土土師器	図版39	S H 11 置石炉
図版26	富士岡1古墳群2区 遺構出土土器 I群1類b I群1類h・II群1類b・c・g・h	図版40	S K 4
図版27	II群1類k II群2類a	図版41	T A 2
図版28	II群2類a II群2類d・f 富士岡1古墳群2区 出土石器・块状耳飾		T A 3
			T A 4
			T A 5
			T A 6
			T A 7
			S Y 2
			S Y 5
			S Y 6
			S Y 9
			S Y 11
			S Y 4
			S Y 3
			S Y 10

図版42	向山遺跡 S Y 8 S Y 1 S X 3	図版56	III群3類a・b・d III群3類c III群3類e
図版43	向山遺跡古墳時代土師器	図版57	III群3類e・IV群a
図版44	古墳時代土師器 他 S H14出土土器 S H14出土土器 T A 2 ~ 4 出土土器 T A 6 出土土器 S K・S P出土土器 S X 3 出土土器	図版58	IV群b 有茎尖頭器・石鎌・石匙 石鍤 スクレイバー 打製石斧 磨製石斧・蝶器・石核 石核
図版45	遺構出土石器	図版59	玉類
図版46	I群1類a・c I群1類e・f・g		旧石器
図版47	I群2類a・b・c・d	中尾沢遺跡・分地遺跡	
図版48	I群2類e・f・g・h・i II群1類a・b・c・d・II群1類k	図版60	中尾沢遺跡 第2遺構面全景 分地遺跡 全景
図版49	II群1類g II群1類i	図版61	中尾沢遺跡 S H 1 S H 2 遺物出土状況
図版50	II群2類a II群2類b II群2類c	図版62	中尾沢遺跡 S H 3 S H 4
図版51	II群2類c	図版63	分地遺跡 S D 1 S D 2
図版52	II群2類c II群2類c II群2類d II群2類d	図版64	中尾沢遺跡古墳時代土師器 図版65
図版53	II群2類f II群2類g・h II群2類i	中尾沢遺跡II群2類a 中尾沢遺跡III群1類a 中尾沢遺跡剥片石器 中尾沢遺跡打製石斧 分地遺跡出土土器 分地遺跡石鎌	
図版54	III群1類a		
図版55	III群1類c・d・III群2類a・b・c・d III群3類a		

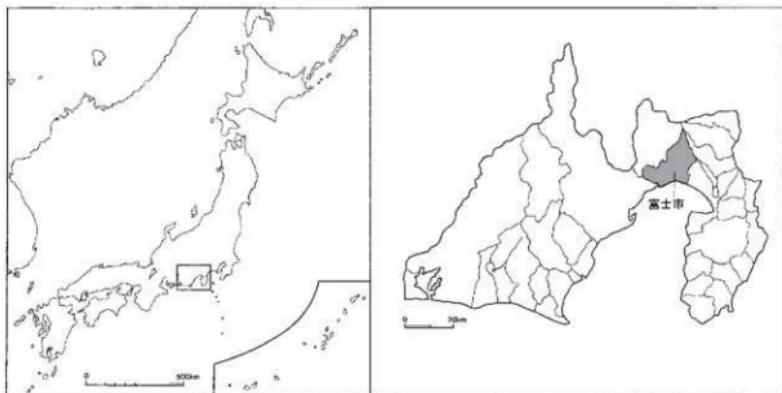
第1章 調査の経緯

日本のほぼ中央に位置する静岡県は、富士山や赤石山地を背景に駿河湾、相模湾、遠州灘に面している。その駿河湾の奥部に位置する富士市は古くから交通の要所として発展してきた。市内には東名高速道路、西富士道路、新東名高速道路など、主要な交通網が整備されている。その一方で市内山間部の道路整備は先述の幹線道路ほど進んでおらず、農工業などの産業に支障をきたしている。

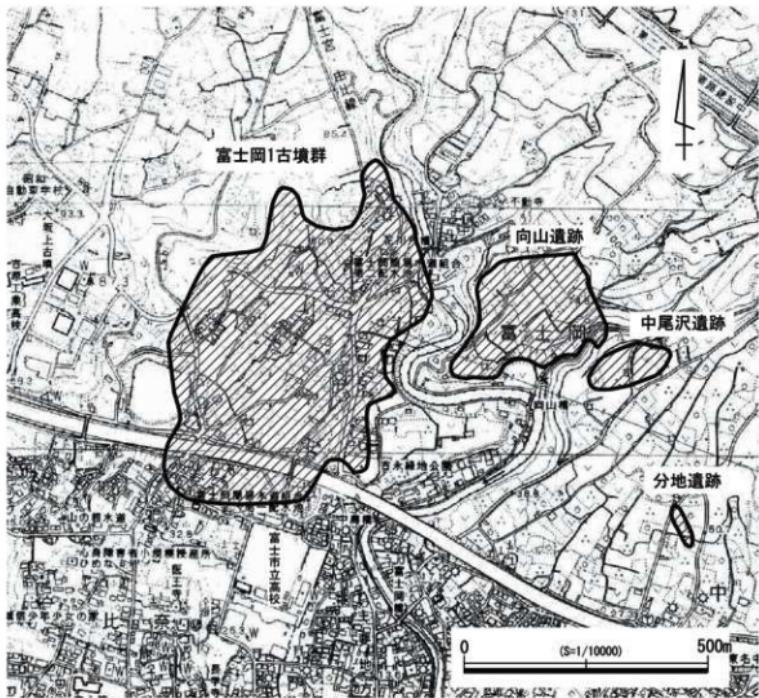
静岡県富士農林事務所（以下富士農林）は地域活性化基幹農道愛鷹2期地区農道整備事業の一環として、富士市富士岡及び中里に農道建設を計画した。富士農林は静岡県教育委員会文化課（平成22年度に文化財保護課に課名変更）の事業照会に対して、この事業を計画していると回答した。文化課は工事計画範囲における周知の埋蔵文化財包蔵地の存在の有無を調べた結果、工事計画範囲内に富士岡1古墳群、向山遺跡、中尾沢遺跡が含まれていることが明らかとなり、富士農林にこの旨を回答した。

文化課は、平成20年度にこれら3遺跡と、中尾沢遺跡の南東側に位置する尾根の計4地点の確認調査を実施した。この結果、4地点とも遺構を検出し、包含層中から遺物が出土した。工事によって遺跡が破壊されることから、文化課は4地点とも本发掘調査が必要であると判断し、富士農林と調整を進めた。文化課は南東側の尾根を分地遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地として新規登録した。分地遺跡は平成21年度に北西及び南東の隣接地で新たに確認調査を実施したところ、遺構が検出された。文化課はこの結果を踏まえて遺跡の範囲を拡大した。

発掘調査は文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（平成23年3月解散 以下埋文研）が実施する運びとなった。平成21年8月、富士農林は埋文研と埋蔵文化財調査に関する委託契約を結び、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。発掘調査は平成22年8月まで継続した。また、富士岡1古墳群については、平成21年度に文化課が実施した近接地の確認調査で遺構及び遺物が検出、出土したことから、平成24年6月から同8月まで、埋文研の業務を引き継いだ静岡県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。（岩崎）



第1図 静岡県と富士市の位置



第2図 遺跡位置図

第2章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

1 発掘調査

調査対象範囲には国土座標の方位に従って10mごとにグリッド杭を打設し、各遺跡において南から北に向かってアルファベット、西から東に向かってアラビア数字を付した。グリッドの名称は南西隅の記号を称した。富士岡1古墳群については、平成21~22年度の調査区を1区とし、平成24年度の調査区を2区とした。

遺構の検出状況や土層断面などの記録保存には6×7判（モノクロ・カラーリバーサル）フィルムカメラと35mm（カラーリバーサル）フィルムカメラを使用した。また、発掘作業の工程記録等の撮影はデジタルカメラを使用した。全景写真や景観写真については、ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。

遺構の測量、遺物の取り上げ位置、地形は光波で測定し、座標内での位置（X・Y座標）と標高（Z

座標)を記録した。遺構図面の作成及び各種座標の管理に当たっては、株式会社シン技術コンサルの「遺跡管理システム」を使用し、すべての遺構図面をデジタルデータで作成した。

遺物は遺跡別に製品の種類を問わず1番から通しで遺物番号を付して取り上げた。なお、この番号は本報告書図版番号とは一致しない。(岩崎)

2 資料整理

洗浄、注記等の基礎整理作業の一部は現地調査と並行して実施したが、本格的な資料整理は中原事務所(静岡市駿河区)で実施した。一部の作業は長泉事務所(駿東郡長泉町)で実施した。資料整理は株式会社パソナに委託した。

石器の実測は原則として第三角投影図法に準拠した。

遺構図版は「遺跡管理システム」で作成したデジタルデータの図面をAdobe Illustrator CS3に取り込み、編集して作成した。遺物図版の一部もAdobe Illustrator CS3で編集して作成した。

遺物写真は6×7判(モノクロ・カラーリバーサル)フィルムカメラと4×5判(モノクロ・カラーリバーサル)フィルムカメラを使用して撮影した。

黒曜石及びホルンフェルス以外の石器石材鑑定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。出土炭化物の樹種同定及び放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

出土品のうち、金属製品は保存処理を実施した。保存処理は株式会社パソナに委託した。(岩崎)

第2節 調査の経過

1 富士岡1古墳群

平成21~22年度の調査区を1区、平成24年度の調査区を2区とした。廃土処理の都合上、1区は東区と西区に区分した。

平成21年9月上旬に1区東区の重機による表土除去を実施した。9月中旬から10月中旬にかけて包含層第1層の人力掘削を実施した。10月中旬から12月上旬にかけて第1遺構面から検出された遺構を掘削した。12月上旬から平成22年1月下旬にかけて包含層第2層の人力掘削を実施した。1月下旬から2月上旬にかけて第2遺構面から検出された遺構を掘削した。各検出面において写真撮影及び遺構実測を実施した。2月中旬に下層の遺構・遺物を確認するためのテストピットを掘削して東区の調査が終了した。

2月下旬から3月上旬にかけて1区西区の重機による表土除去を実施した。3月上旬から下旬にかけて包含層第1層の人力掘削を実施した。4月上旬から下旬にかけて第1遺構面から検出された遺構を掘削した。5月上旬から下旬にかけて包含層第2層の人力掘削を実施した。これと並行して、5月下旬から6月上旬にかけて第2遺構面から検出された遺構を掘削した。各検出面において写真撮影及び遺構実測を実施した。6月上旬に下層の遺構・遺物を確認するためのテストピットを掘削して西区の調査が終了した。

平成24年6月下旬に2区の重機による表土除去を実施した。7月上旬から中旬にかけて、包含層第1層の人力掘削を実施した。7月中旬から8月上旬にかけて第1遺構面から検出された遺構を掘削した。8月上旬から下旬にかけて包含層第2層の人力掘削を実施した。8月下旬に第2遺構面から検出された遺構を掘削した。写真撮影及び遺構実測をして調査が終了した。(岩崎・西田)

2 向山遺跡

廃土処理の都合上、調査区は東区と西区に区分した。

平成21年10月中旬に東区の重機による表土除去を実施した。12月上旬から平成22年2月上旬にかけて包含層第1層の人力掘削を実施した。2月上旬から3月上旬にかけて第1遺構面から検出された遺構を掘削した。3月上旬から4月中旬にかけて包含層第2層の人力掘削を実施した。4月中旬から下旬にかけて第2遺構面から検出された遺構を掘削した。各検出面において写真撮影及び遺構実測を実施した。4月下旬に下層の遺構・遺物を確認するためのテストピットを掘削して東区の調査が終了した。

5月上旬から中旬にかけて西区の重機による表土除去を実施した。5月下旬から6月上旬にかけて包含層第1層の人力掘削を実施した。6月中旬から下旬にかけて第1遺構面から検出された遺構を掘削した。7月上旬から下旬にかけて包含層第2層の人力掘削を実施した。8月上旬に第2遺構面から検出された遺構を掘削した。各検出面において写真撮影及び遺構実測を実施した。8月中旬に下層の遺構・遺物を確認するためのテストピットを掘削して西区の調査が終了した。(岩崎)

3 中尾沢遺跡

平成21年11月上旬と平成22年1月下旬、5月上旬に重機による表土除去を実施した。5月中旬から下旬にかけてテストピットを掘削した。7月上旬に包含層第1層の人力掘削を実施した。7月中旬から8月上旬にかけて第1遺構面から検出された遺構を掘削した。8月中旬に包含層第2層の人力掘削を実施した。各遺構面において写真撮影及び遺構実測をして調査が終了した。(岩崎)

4 分地遺跡

平成21年10月上旬に重機による表土除去を実施した。10月中旬に包含層の人力掘削を実施した。10月下旬に作業は一時中断し、11月上旬に再度重機による表土除去を実施した。11月上旬から11月下旬まで再度包含層の人力掘削を実施した。12月上旬に検出された遺構を掘削した。写真撮影及び遺構実測を経て、12月中旬に調査が終了した。(岩崎)

第1表 工程表

	平成21年				平成22年								平成24年		
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	6月	7月	8月
富士岡1古墳群															
向山遺跡		-													
中尾沢遺跡			-			-									
分地遺跡				-											

第3章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

富士岡1古墳群、向山遺跡、中尾沢遺跡、分地遺跡はJR富士駅から北東に約7km離れた地点に位置する。各遺跡から南に約200から400m離れた位置には東名高速道路が東西に走っている。

これら4遺跡は富士山とその南東側にそびえる愛鷹山が形成するなだらかな丘陵上に立地する。富士岡1古墳群と向山遺跡を隔てる谷には赤淵川が、向山遺跡と中尾沢遺跡を隔てる谷には赤淵川の支流の沢が流れている。

富士山の土台となる小御岳火山は愛鷹山や箱根火山（箱根外輪山）とともに約40万年前から火山活動を開始した。火口は現在の富士山より北北東に約3km離れた地点に位置する。約40万年前から約17万年前の活動で主に玄武岩質の溶岩を流出させ、山腹に降下した噴出物は大量の凝灰角礫岩を生成した。約17万年前からは、主な火山活動の場所が南東側に移り、噴出物は安山岩質のもので占められるようになった。小御岳火山の活動が停止した約8万年前以前に、現在の富士山頂がある付近に火口を開いた古富士火山は、その噴出物で小御岳火山を覆い尽くし、標高は2,700mに達したとされる。その後、約1万5千年前以前に古富士火山の火口に火道を開いた新富士火山は、大小の噴火活動を繰り返し、その噴出物により古富士火山を覆い尽した。有史時代に入つてからも引き続き活動し、現在の山体を形成した。

新富士火山は大量の玄武岩質岩板溶岩を主とする溶岩流を連続して発生させ、現在の富士山麓を形成している。この溶岩流によって形成された溶岩源は、開析谷に流れる大小河川のひとつである赤淵川が富士山系と愛鷹山系の境界となっている。従つて富士岡1古墳群は富士山南麓、向山遺跡、中尾沢遺跡、分地遺跡は愛鷹山山西麓に立地する遺跡となる。

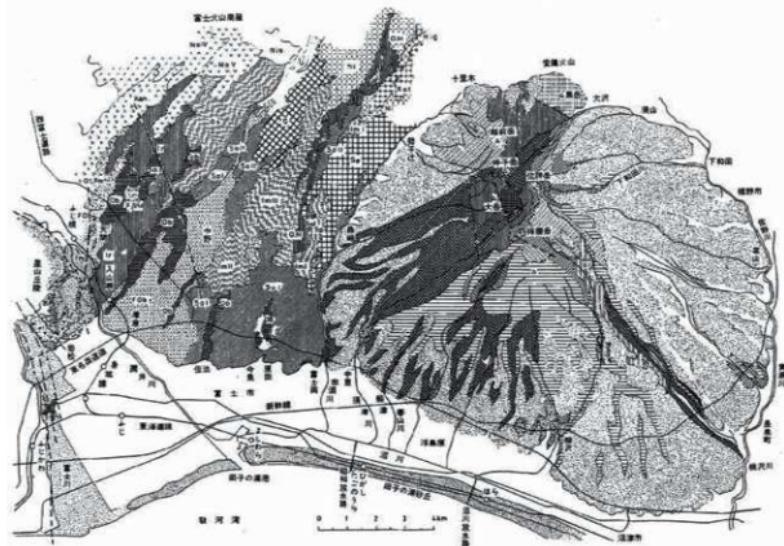
愛鷹山は約40万年前に小御岳火山とともに火山活動を開始した。愛鷹山の活動は新旧2期に分かれている。そのうち旧期の火山活動は新期の火山活動と比較してその規模が極めて大きく、現在の愛鷹山の山体はほとんどが旧期活動の噴出物によって構成されている。新旧2期の間には火山活動の休止期があり、この時に山体の浸食が進んでいる。

約10万年前に火山活動を終えた愛鷹山は浸食にさらされるとともに、約3万5千年前から約1万1千年前の古富士火山と新富士火山の活動によって、愛鷹ローム層が堆積した。愛鷹ローム層は下部、中部、上部とこれに重なる現世腐植質風化火山灰層の4分層から形成される。このうち上部ローム層は風化の進んだ腐植質土壤とされる黒色帯と、激しい噴火で短時間に堆積したスコリア層が交互に折り重なる。その上にクロボクと呼ばれる腐植質火山灰層が堆積している。さらに富士山南麓の寄生火山である高鉢山から噴火したと考えられる大淵スコリア（註）がクロボクの上に堆積している。（岩崎）

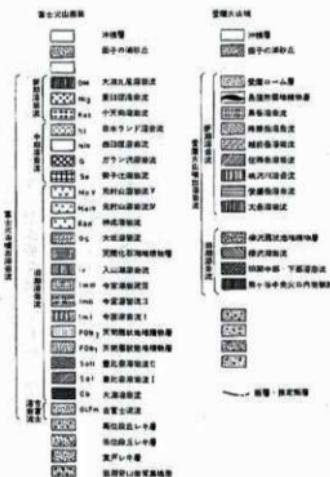
第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

富士市域の旧石器時代の遺跡は、かつては愛鷹山山西麓を市域に含むにも関わらず極めて少なく、遺物の多くは表面採取によって得られていた。富士山南麓では天間沢遺跡で報告書にナイフ形石器などが採取されたとの記述が見られるが、詳細は不明である。また、愛鷹山山西麓ではナイフ形石器や小型石



凡例



第3図 富士市域の地質の概略（富士市教委2005より抜粋）

刃などが出土した峰山遺跡、陣ヶ沢A・B遺跡、矢川上C遺跡などが知られていた。

平成10年以降、埋文研による新東名高速道路建設事業に伴う発掘調査で、古木戸A遺跡、古木戸B遺跡、天ヶ沢東遺跡において石器ブロックや礫群が確認され、ナイフ形石器や細石刃などが出土した。さらに矢川上C遺跡では多数の石器ブロックや礫群が確認され、ナイフ形石器や角錐形石器が出土した。

2 繩文時代

縄文時代の遺跡は主に愛鷹山南西麓、富士山南麓、岩本山丘陵に分布している。

草創期の遺跡は確認されていない。早期は、富士山南麓に押型文や茅山下層式土器が出土したシンゲン沢遺跡、岩本山丘陵に押型文や田戸式土器が出土した万野遺跡などがある。愛鷹山南西麓には押型文土器や絡条帯压痕文土器が出土した陣ヶ沢A・B遺跡、押型文土器が出土した矢川上A・B遺跡などがある。前期は、遺跡数は少ないが、天間沢遺跡、愛鷹山南西麓の花川戸遺跡などでは木島式土器が出土しており、時代幅の長い複合遺跡で当該期の資料が挙げられる。中期は遺跡数が多く、集落の規模も大きくなる。天間沢遺跡は縄文時代から律令期まで続く複合遺跡であり、竪穴建物、配石遺構、土坑が検出され、勝坂式、曾利式、加曾利E式土器が出土した。愛鷹山南西麓の椎木平遺跡では遺構は検出されていないが、五領ヶ台式、曾利式土器などが採集されている。後期は遺跡数が減少し、規模も小さくなる。富士山南麓の宇東川遺跡は柄鏡形敷石建物を含む竪穴建物と土坑が検出され、曾利IV式から堀之内式、加曾利B式土器が出土した。同じく富士山南麓の藤夜姫遺跡では堀之内式の注口土器が出土した。また、埋文研が新東名建設に伴って発掘調査をした愛鷹山南西麓の不動棚遺跡、富士山南麓の松板遺跡では、遺構はほとんど確認できなかったが、堀之内式土器の良好な資料が出土した。田子浦砂丘に立地する三新田遺跡では晩期の土器片が出土した。

3 弥生時代

愛鷹山南西麓、富士山南麓及びその近辺の平野部においては、前期の遺跡は見られない。

富士山南麓に立地する大坂遺跡、岩倉遺跡、愛鷹山南西麓に立地する富士岡中尾遺跡では中期の土器の出土が伝えられる。沖積平野に立地する神田遺跡は弥生時代から古墳時代に至る複合遺跡であり、中・後期の土器に加えて大量の木製品が出土した。

後期の遺跡数は増加する。愛鷹山南西麓では、低湿地の縁辺部の台地上に立地する宮添遺跡で後期から平安時代の竪穴建物が検出された。的場遺跡では東海道新幹線建設に伴う発掘調査によって後期から古墳時代前期にわたる竪穴建物が検出された。丘陵上に立地する遺跡は神谷遺跡、花川戸遺跡、峰山遺跡などが挙げられる。平椎遺跡では埋文研が実施した新東名建設に伴う発掘調査によって後期前半と古墳時代前期の集落が検出された。

4 古墳時代

集落遺跡は、高徳坊遺跡、天間沢遺跡、東平遺跡、沢東A・B遺跡、祢宜ノ前遺跡、宮添遺跡、三新田遺跡などが挙げられる。沢東A遺跡は中期から奈良時代の集落で、竪穴建物のほか、子持勾玉など祭祀関連の遺構・遺物も確認されている。祢宜ノ前遺跡では前期と後期から平安時代までの竪穴建物が確認された。三新田遺跡は前期から平安時代にわたる集落で、竪穴建物が多数確認されている。

富士市内ではおよそ600基の古墳が確認されている。市内で最初に築造された古墳は浅間古墳である。この古墳は全長93mの前方後方墳で、4世紀末から5世紀初頭の築造と考えられている。前期末には東坂古墳が築造された。この古墳は全長60mの前方後円墳で、副葬品として、七連弧紋を持つ内行花文鏡、四獸鏡、琴柱形石製品、碧玉製石劍、玉類、大刀などが出土した。中期初頭には琴平古墳や薬師塚古墳

(船津L－第131号墳)などが築造された。

約半世紀の空白を経て、5世紀後半から6世紀前半には全長51.5mの天神塚古墳(須津J－第91号墳)、径54mの二段築成の円墳である伊勢塚古墳が築造された。田子浦砂丘には、埴輪を伴う全長41.5mの前方後円墳である山ノ神古墳や、全長40mの双方中方墳とされる庚申塚古墳が存在する。^{すざか}

6世紀後半になると、横穴式石室を埋葬施設とした小型の円墳が群をなして造営され、東駿河地域は古墳が多く築造される日本全国的に見ても特徴的な地域となり、中里1～4古墳群、神谷古墳群、船津1～8古墳群など100基を超える群集墳が築造されている。この他にも富士山南麓に石坂1～12古墳群、一色1～9古墳群、間門古墳群、比奈1～7古墳群、富士岡1～4古墳群、愛鷹山山西麓に増川古墳群など、数多くの古墳群が奈良時代前半まで築造される。

5 奈良～平安時代

天間代山遺跡、沢東A・B遺跡、東平遺跡、三日市廃寺、舟久保遺跡、宇東川遺跡、沖田遺跡、三新田遺跡が代表的な遺跡である。

東平遺跡では約350軒の堅穴建物、約70棟の掘立柱建物が確認され、駿東型壺、甲斐型壺、西駿型長胴甕、「布自」「厨」などの墨書き土器、跨帶金具が出土した。これらの遺構・遺物から富士郡都と想定され、官衙の性格の強い計画的集落である可能性が指摘されている。また、遺跡の南東部には多くの古瓦や「寺」と墨書きされた土師器が出土した三日市廃寺が位置する。この寺は「日本三代実録」所載の定額寺「法照寺」と推定されている。舟久保遺跡では堅穴建物が確認され、「倉」と記載された墨書き土器が出土した。宇東川遺跡では180軒以上の堅穴建物、4棟の掘立柱建物が確認され、「布」「寺」などと記載された墨書き土器が出土した。沖田遺跡では条里型畦畔と水田跡が検出された。

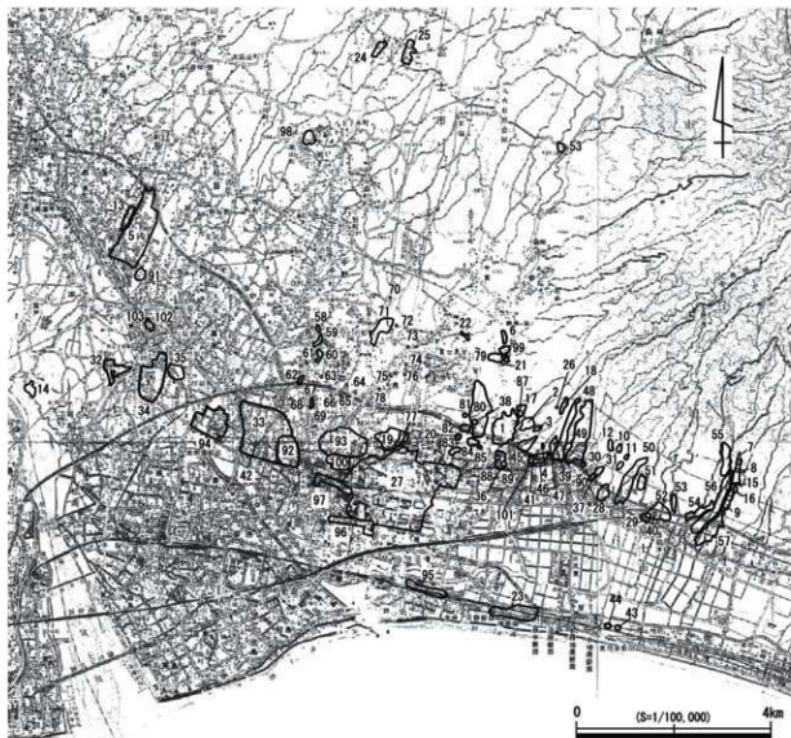
平安時代の遺跡は前述した舟久保遺跡、祢宜ノ前遺跡、三新田遺跡の他に、中村・中ノ坪遺跡で10世紀まで続く集落が確認された。宮添遺跡では皇朝十二銭の第11番目「延喜通宝」や、鍛冶に関係する鍔の羽口が出土した。^{むかげた}

6 中近世

中近世の遺跡は、元吉原宿遺跡、中吉原宿遺跡、新吉原宿遺跡など、東海道の宿駅に関わる遺跡が知られている。鎌倉時代初期に吉原漢の前身といえる見付が構えられ、これが発展して江戸時代の宿駅となつた。中吉原宿遺跡では多量の肥前、瀬戸、美濃産などの陶磁器が出土している。

戦国期の城館跡では、後北条氏により築城された「河東十二星」の一つあるいは武田氏に由来する大淵衆との関係が考慮される大淵城跡、後北条氏の「河東十二星」の一つと想定される夷城跡、応永24年(1417年)に今川範政により河東一帯への今川支配の拠点として築城されたとされる善得寺城跡、天神川城跡、入山漸城跡、林泉寺砦跡などが所在するが、ほとんどが開発により消滅し、詳細な様相は不明である。(岩崎)

註 大淵スコリアの降灰時期については諸説あるが、近年になって考古学における発掘調査の成果や自然科学分析の結果などから、およそ1500年前後に定まりつつある。



第4図 周辺遺跡地図

第2表 周辺遺跡地名表

1 富士岡1古墳群	27 伸田遺跡	53 船津4古墳群	79 開門古墳群
2 向山遺跡	28 宮浜道跡	54 船津5古墳群	80 北京1古墳群
3 中尾沢遺跡	29 の場遺跡	55 船津6古墳群	81 北京2古墳群
4 分地遺跡	30 神谷遺跡	56 船津7古墳群	82 北京3古墳群
5 天間川遺跡	51 幸稚遺跡	57 船津8古墳群	83 北京4古墳群
6 峰山遺跡	32 門地坊遺跡	58 石坂1古墳群	84 北京5古墳群
7 陣ヶ沢古道跡	33 東平遺跡	59 石坂2古墳群	85 北京6古墳群
8 陣ヶ沢古道跡	34 沢東A遺跡	60 石坂3古墳群	86 北京7古墳群
9 矢川上C遺跡	35 沢東B遺跡	61 石坂4古墳群	87 富士岡2古墳群
10 古木A・B遺跡	36 遠宜ノ前遺跡	62 石坂5古墳群	88 富士岡3古墳群
11 古木C・D遺跡	37 浅間古墳	63 石坂6古墳群	89 富士岡4古墳群
12 天ヶ沢東遺跡	38 東坂古墳	64 石坂7古墳群	90 墓川古墳群
13 ピンゲン古道跡	39 幸平古墳	65 石坂8古墳群	91 天照代山遺跡
14 万野遺跡	40 鶴御塚古墳	66 石坂9古墳群	92 三日市庵寺
15 矢川上A遺跡	41 天神塚古墳	67 石坂10古墳群	93 舟久保遺跡
16 矢川上B遺跡	42 伊勢塚古墳	68 石坂11古墳群	94 中村・中ノ坪遺跡
17 花川口遺跡	43 山ノ神古墳	69 石坂12古墳群	95 元吉原宿遺跡
18 稲木平遺跡	44 庚申塚古墳	70 一色1古墳群	96 中吉原宿遺跡
19 宇東川遺跡	45 中里1古墳群	71 一色2古墳群	97 新吉原宿遺跡
20 離夜姫遺跡	46 中里2古墳群	72 一色3古墳群	98 大瀬城跡
21 不動塚遺跡	47 中里3古墳群	73 一色4古墳群	99 斎城跡
22 松坂遺跡	48 中里4古墳群	74 一色5古墳群	100 駒得寺城跡
23 三新田遺跡	49 神谷古墳群	75 一色6古墳群	101 天神川城跡
24 大坂遺跡	50 船津1古墳群	76 一色7古墳群	102 人山城跡
25 肥倉遺跡	51 船津2古墳群	77 一色8古墳群	103 林泉寺跡
26 富士岡中尾遺跡	52 船津3古墳群	78 一色9古墳群	

第4章 資料の分類

1 古墳時代前期の土器

平成20～21年度に沼津市教育委員会により高尾山古墳の発掘調査が実施された（沼津市教委2012）。高尾山古墳は古墳時代前期の前方後方墳で、現在発掘調査が行われた駿河・伊豆地域の古墳の中では最も古い時期のものである。古墳の墳丘や周溝を中心に多量の土器が出土した。これらと今回の調査で出土した土器には類似する点が多く見られることから、比較検討を行うために、器種分類は高尾山古墳出土土器の分類（渡井2012）に準じて行った。

2 繩文時代土器・土製品の分類

報告にあたり、以下のように時期を主体にI群からIV群まで各群類に分類した。

I群 早期の土器

1類 早期前葉～中葉の土器

- a 撥糸文土器
- b 表裏綱文土器
- c 押型文土器
- d 田戸下層式土器
- e 子母口式土器
- f 子母口式併行の土器
- g 清水柳E類土器
- h 野島式土器
- i 鶴ヶ島台式土器

2類 早期後葉の土器

- a 柏畠式土器
- b 入海I・II式土器
- c 入海I・II式併行の土器
- d 石山式土器
- e 天神山式土器
- f 茅山上層式以降の条痕文土器
- g 打越式土器
- h 神之木台式土器
- i 木島II式土器
- j 早期末条痕文土器
- k 早期末無文土器
- l 早期末～前期初頭のその他の土器

II群 前期の土器

1類 前期前半の土器

- a 下吉井式土器
- b 木島VIII式土器

- c 木島IX式土器
 - d 木島IX・X式土器
 - e 木島式土器
 - f ニツ木式～閑山I式併行の土器
 - g 閑山II式土器
 - h 黒浜式土器
 - i 上の坊式土器
 - j 清水ノ上II式土器
 - k 積迦堂Z式土器
- 2類 前期後半の土器
- a 諸磯b式土器
 - b 規ヶ森式風の土器
 - c 諸磯c式土器
 - d 十三菩提式土器
 - e 大木6式併行の土器
 - f 北白川III式土器
 - g 大歳山式土器
 - h 大歳山式併行の土器
 - i 大歳山式系土器
 - j 前期末～中期初頭のその他の土器
- III群 中期の土器
- 1類 中期前葉の土器
- a 五領ヶ台式土器
 - b 五領ヶ台式併行の土器
 - c 鷹島式土器
 - d 北裏c式土器
- 2類 中期中葉の土器
- a 洛沢式土器
 - b 新道式土器
 - c 阿玉台式土器
 - d 勝坂式土器
- 3類 中期後葉の土器
- a 曾利III式土器
 - b 曾利III・IV式土器
 - c 曾利IV式土器
 - d 曾利IV・V式土器
 - e 加曾利E3式土器
 - f 加曾利E4式土器
- IV群 後期の土器
- a 加曾利B式土器
 - b 堀之内式土器

3 縄文時代石器の分類

石鎌、石匙、打製石斧、磨・敲石・凹石類については以下のように細分を行い、石皿の器種分類についても以下に記載する。

石鎌

富士岡1古墳群他3遺跡から出土した石鎌は全て無茎石鎌である。基部と側縁の形態を基準に分類した。

I類：平基

II類：凹基

A 正三角形に近いもの（長幅比1.2まで）

1 兩側縁が比較的真っ直ぐなもの

2 兩側縁が外弯するもの

B 二等辺三角形のもの（長幅比1.2以上）

1 兩側縁が比較的真っ直ぐなもの

2 兩側縁が外弯するもの

3 側縁及び基部の形態が左右で異なるもの

III類：円基

IV類：その他

石匙

長幅及び平面形態によって分類した。

横型：長幅比0.8以下のもの。

縱型：長幅比1.2以上のもの。

さらに平面形が比較的の左右対称なものと非対称のものに細分した。

打製石斧

平面形態によって分類した。

I類：短冊形（兩側縁が並行するもの）

II類：撥形（側縁が刃部に向かって広がるもの）

III類：分銅形（脛部に括れがあるもの）

IV類：尖頭形（基部が尖るもの）

V類：その他（小型のもの、I～IV類に該当しないもの）

磨・敲石類（磨石・敲石・凹石を含む）

自然礫をほぼそのままの形で用い、使用により変形したと考えられる石器で、使用の痕跡と考えられる変形を次の3つに区分する。

・「磨面」：磨りに使用したと想定される面。平滑でなくとも凹凸のない平坦面あるいはゆるやかな凸面と認識されるものはこれに含めた。

・「敲打痕」：石の表面があばた状の凹凸。

・「凹み」：周囲より明確に低くなっている、敲打のみで形成されるのではなく、内面が磨滅しているものの。敲打のみで低くなっている場合は敲打痕に分類する。

器種名はこれらの使用痕跡によって呼び分け、磨面のみを持つものを磨石、敲打痕のみを持つものを敲石、磨面、敲打痕の両方を持つものを磨敲石と表記することとする。

さらに形状と使用痕跡の部位との関係から次のように分類した。

I類：円盤状の礫を用いた磨石。片面だけに磨面があるものと両面に磨面があるもの、さらに側縁にも磨面があるものがある。

II類：台形の礫を用いた磨石。下面に磨面がある。

III類：棒状の礫を用いた磨石。側面だけでなく角にも磨面があるため、横断面が多角形を呈しているものも見られる。

IV類：円盤状の礫を用いた磨敲石。平坦面及び側縁に敲打痕がある。

V類：円盤状の礫を用いた敲石。平坦面及び側縁に敲打痕がある。

VI類：円盤状の礫を用いた凹石。平坦面に凹みがある。

石皿

手持ちではなく、据え置いて使用したと思われる大型の礫石器。形状と使用痕跡との関係から次のように分類した。

I類：円盤状の礫を用い、かつ磨面（平坦面或いは凹面）を持つもの。

II類：角礫を用い、かつ磨面（平坦面或いは凹面）を持つもの。

(岩崎)

第5章 富士岡1古墳群

第1節 調査履歴

富士岡古墳群は愛鷹山麓と富士山麓を隔てる赤渕川沿いの富士山南麓側に位置する古墳群であり、それぞれ、1～4の古墳群の名前が付されている。「吉原市の古墳」により古くからその存在が知られている古墳群である（中野・後藤1958）。分布調査により27基以上の後期古墳の存在が想定されているものの、そのほとんどが消滅したとされている（富士市教委1988）。調査は富士市教育委員会によって過去に3度の本調査が行われているほか、農道整備や宅地造成によって複数回の試掘調査が行われている（第3表・第4表）。また、未報告ではあるが、平成23年度の宅地造成における調査では古墳が検出されたほか、縄文土器が出土したという。（西田）

第3表 発掘調査された古墳の概要

名 称	墳形・周溝	埋葬施設	石室全長	副 著 品 等	文 獣
富士岡F-22 不明	無袖形 横穴式石室		6.5m	直刀・鉄鏃・須恵器（环埴・环身・はそう・長頸壺・壺・瓶）・灰釉陶器	富士市教委1998 「下前原遺跡・富士岡F-22号墳」
花川戸第1号墳 円墳？	無袖形 横穴式石室		6.0m以上	刀子・鉄鏃・耳環・土師器环	富士市教委1995『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集花川戸第1号墳』
花川戸第2号墳 不明	無袖形 横穴式石室		4.7m	須恵器环埴・鐵製品	富士市教委2003
花川戸第3号墳 不明	無袖形 横穴式石室		4.5m	玉顎・銅鏡・大刀・小刀・刀子・鉄鏃・須恵器（环埴・环身・長頸壺・はそう・平瓶）・土師器环	「花川戸第2・3号墳発掘調査報告書」

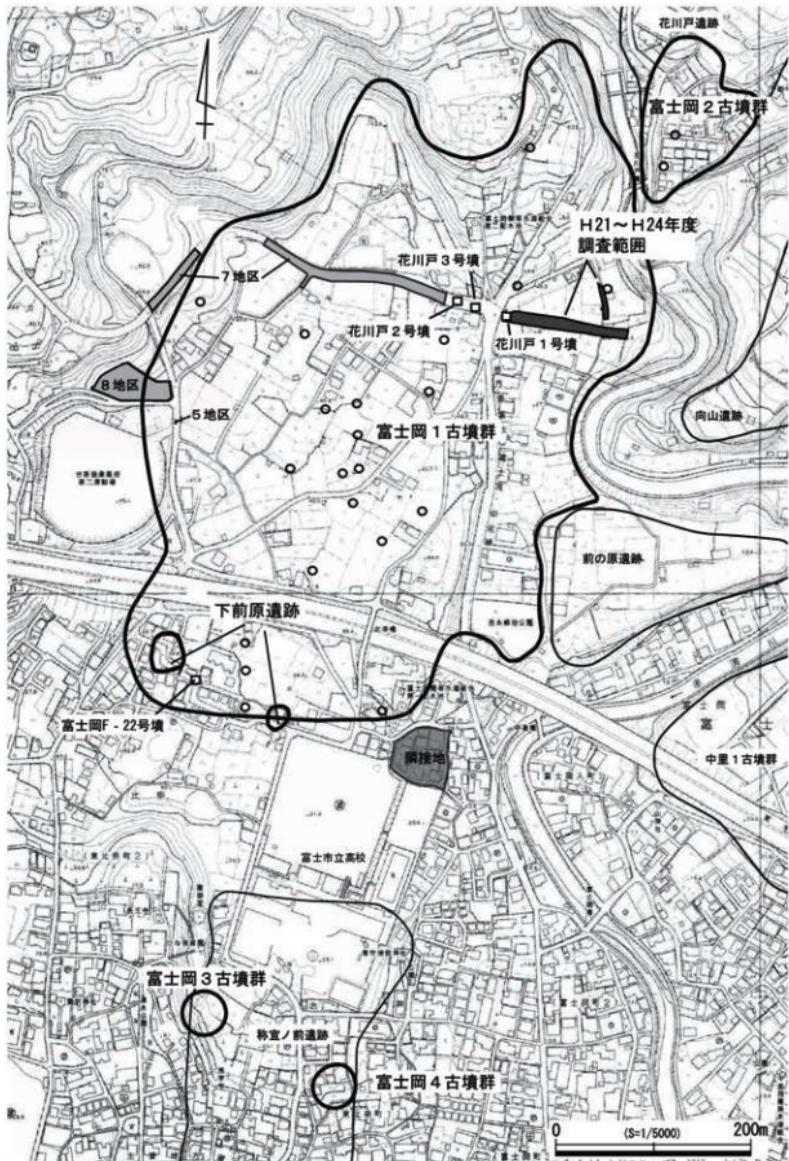
第4表 富士岡1古墳群の調査歴

地区名・古墳名	調査年次	調 査 原 因	報 告 書 等
花川戸1号墳（2地区）	1994	富士宮山比線改修工事	富士市教委1995 『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集花川戸第1号墳』
富士岡F-22号墳（3地区）	1997	宅地造成工事	富士市教委1998 「下前原遺跡・富士岡F-22号墳」
隣接地	2000	宅地造成工事	富士市教委2012「平成11・12年度 富士市内遺跡発掘調査報告書」
5地区	2001	防火水槽整造工事	富士市教委2012「平成11・12年度 富士市内遺跡発掘調査報告書」
花川戸2号墳・3号墳（6地区）	2001・2002	農道整備工事	富士市教委2003「花川戸第2・3号墳発掘調査報告書」
7地区	2003	農道整備工事	富士市教委2009「平成15・19年度 富士市内遺跡発掘調査報告書」
8地区	2004	農道整備工事	富士市教委2006「平成16年度 富士市内遺跡発掘調査報告書」
—	2008	高校寄宿舎建設工事	富士市教委2010「平成14・20年度 富士市内遺跡発掘調査報告書」
—	2009・2012	農道整備工事	静岡埋文センター2013・本書 ※ 報告書が刊行された調査のみ掲載

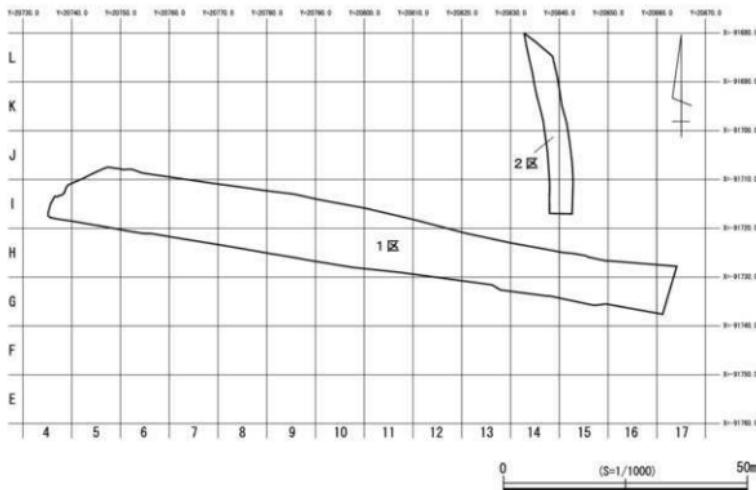
第2節 基本土層と土層の堆積状況

富士岡1古墳群は富士山南麓に立地する遺跡であるが、愛鷹ローム層が赤渕川を越えて堆積している。第2層の大渕スコリア層は本遺跡では部分的に堆積している。第3層は新富士火山から噴出した火山灰層である黒色土層と第4層の黒褐色土層、その下部に火山灰層である第5層栗色土層を挟んでいる。堅穴建物、方形周溝墓、古墳の周溝等の遺構の大部分が第5層上面で検出されている。第6層の休場層上面で縄文時代の遺構が検出された。またこの層は旧石器時代の遺物包含層でもある。愛鷹上部ローム層の堆積状況は悪く、休場層の直下は中部ローム層となる。

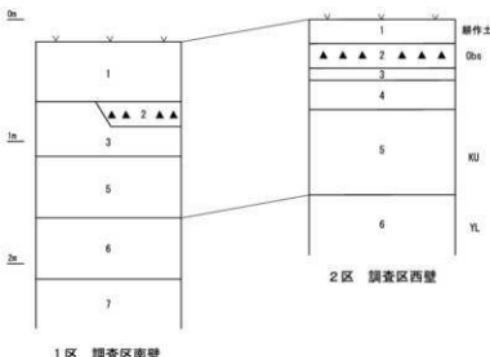
調査区は西から東にかけてゆるやかに傾斜しているが、第3層以下はほぼ水平に堆積している。（岩崎）



第5図 調査区位置図



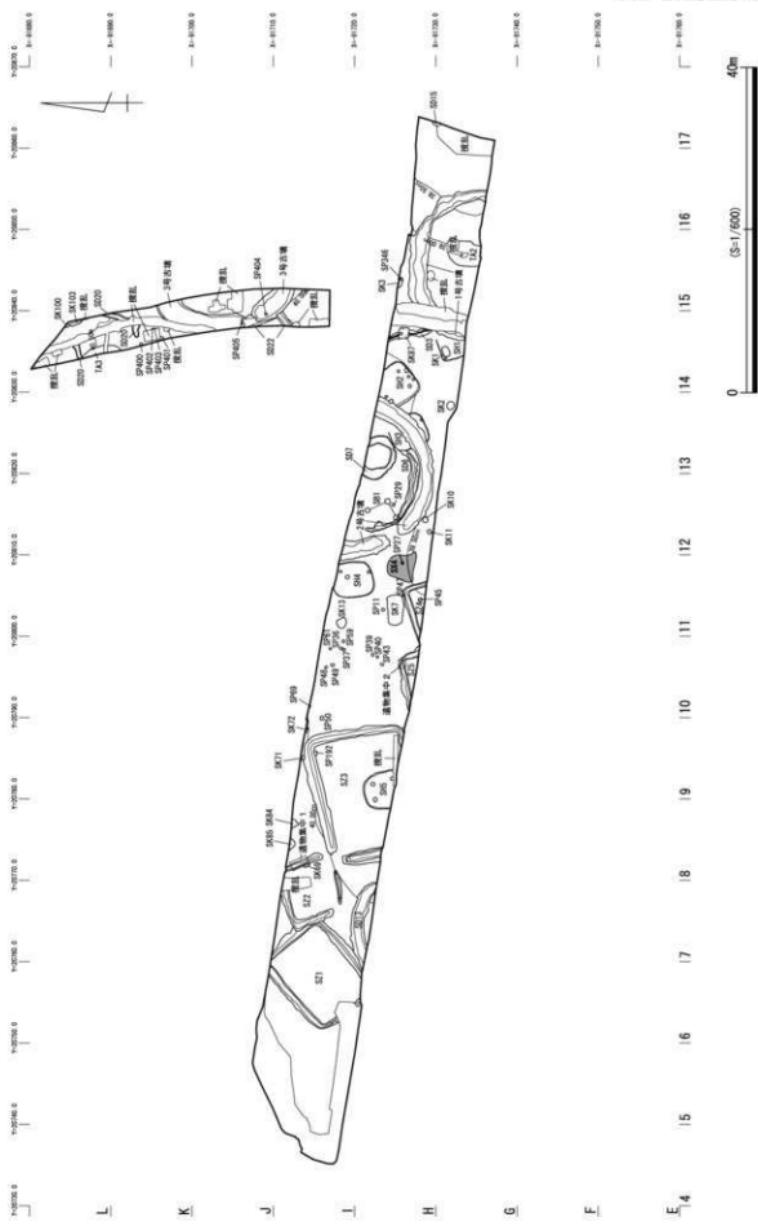
第6図 グリッド配置図



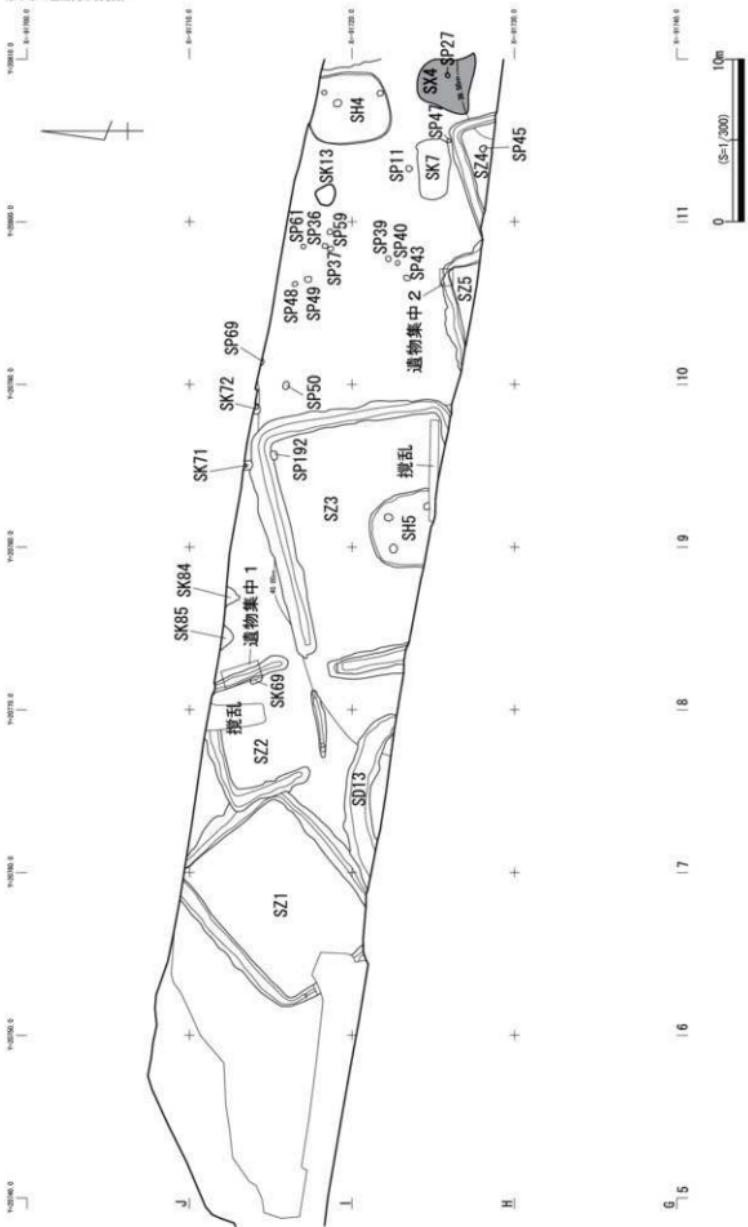
第1層 耕作土	第4層 黒褐色土層 7.5YR4/1 黒褐	第6層 休場相当層 10YR4/4 棕
第2層 大園スコリア層 10YR1.7/1 黑	粘性あり しまり弱	粘性あり しまり強
粘性なし しまり弱	カワゴ芋バミスと考えられる白色	1~5mmの赤色スコリア
5~10mmの赤色スコリア多量に含む	バミス、赤褐色スコリアをわずかに含む	1~2mmの黒褐色スコリアを少量含む
第3層 黒色土 10YR2/2 黒褐	第5層 黑色土層 7.5YR4/3 黑	第7層 中部ローム
粘性あり しまり弱	粘性あり しまりや強	
1~2mmの大园スコリアと考えられる	赤色スコリアを少量含む	
赤色スコリアを含む		

第7図 基本土層柱状図

第2節 基本土層と土層の堆積状況

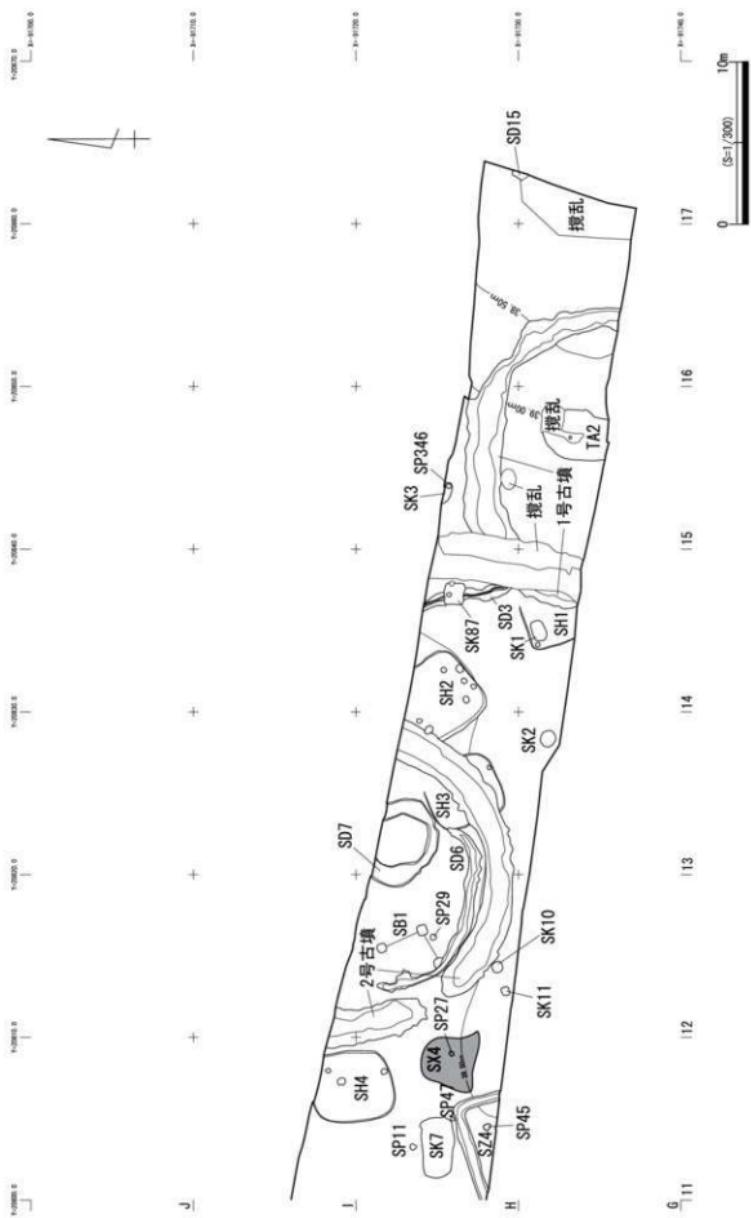


第8圖 第1邊構面遺構配置圖



第9圖 第1遺構面遺構配置擴大圖

第2節 基本土層と土層の堆積状況



第10図 第1回 逆標面遺構記載図大図2

第3節 1区古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は第5層の縄文時代の包含層である栗色土層を掘り込み構築されている。本来の掘り込み面は第2層の大淵スコリア層または第3層の黒色土であるが、遺構覆土と包含層の判別がつきにくいため、第5層の栗色土層上面で検出した。そのため、上層から掘り込まれ、栗色土層にまで達していた古墳時代の遺構と、栗色土層の縄文時代の遺構と遺物が同じ面で検出されることとなった。これを第1遺構面とする。複数の時期にわけられるため、遺物を出土しない遺構は、詳しい時期を特定することができなかつたものがある。よって本節では遺物や覆土から明らかに縄文時代と判断された遺構を除いた、第1遺構面で検出された遺構を掲載し報告することとする。

1 古墳時代中期以降の遺構と遺物

大淵スコリアを覆土とする遺構をまとめた。大淵スコリアの噴出時期について諸説あるため、大きく古墳時代中期以降の遺構として捉えることとした。古墳の周溝が2基、古墳の周溝のある溝状遺構が1基、土坑3基を検出した。

(1) 古墳周溝（第5表）

ア 1号古墳周溝（SD1・2）（第11図）

H-14・H-15・H-16グリッド、調査区東寄りに位置する。南側半分が調査区外であり、北側半分を検出した。14.1mを測る周溝内側は、墳丘に相当する部分は削平を受け、盛土及び主体部は検出されなかった。調査区内では遺構を全て検出できなかつたが、平面形は円形をなしていたと考えられる。断面は底部に平坦面を残し、緩やかに立ち上がる皿状で、最大深は60cmである。

遺物は河原石が多量に周溝内から出土しているが、古墳の年代を示す遺物は出土していない。この周溝内の河原石は古墳を構成していた石材であったと考えられる。特に北側では集中して出土しており、方形に集石されていた。後世にこの古墳の石材を何らかの理由で集石したのか、または調査区外の北側に古墳が存在していたとするならば、他の古墳の石材がこの周溝内に落ち込み後に集石された可能性も考えられる。

イ 2号古墳周溝（SD4・5・6）（第12図）

I-12・H-12・H-13グリッドの、調査区中央に位置する。墳丘に相当する部分は削平を受け、盛土、及び主体部は検出されなかつた。

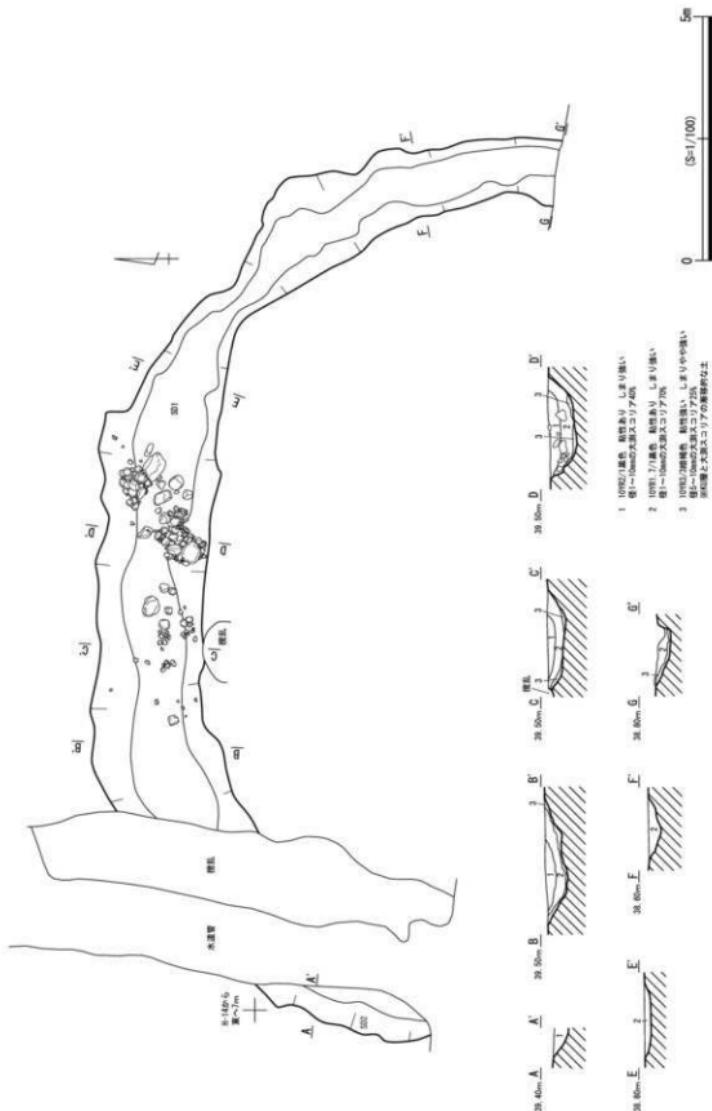
調査区内では遺構を全て検出できなかつたが、平面形は円形をなしていたと考えられる。断面は底部に平坦面を残し、緩やかに立ち上がっており、溝の最大深は50cmを測る。南東側は周溝が途切れる箇所が確認できた。

周溝内側は15.5mであるが、ここでは古墳に沿う様に1本の浅い長さ11m、深さ20cm程の溝状遺構SD6が検出された。この溝については、長泉町原分古墳で類似する事例が存在している。墳丘の旧表土側に浅い掘り込みが確認されており、報告書では墳丘内埋没溝と呼称されている。古墳構築の際に盛土の範囲や墳丘規模を規定するために掘り込まれたものの可能性が指摘されている（井鍋2008）。

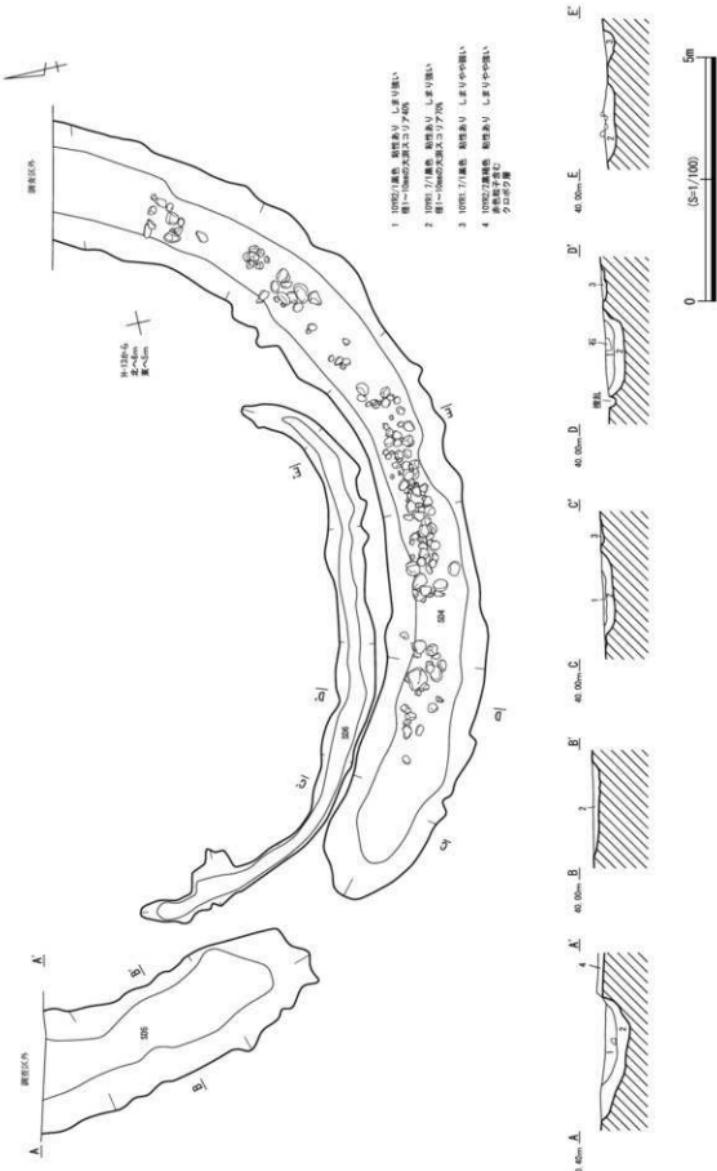
遺物は1号古墳周溝と同じく、周溝内から多量の河原石が出土した。この河原石に関して、古墳を構成する石材が流れ込んだ可能性が考えられる。

(2) 溝状遺構（SD13）（第13図・第9表）

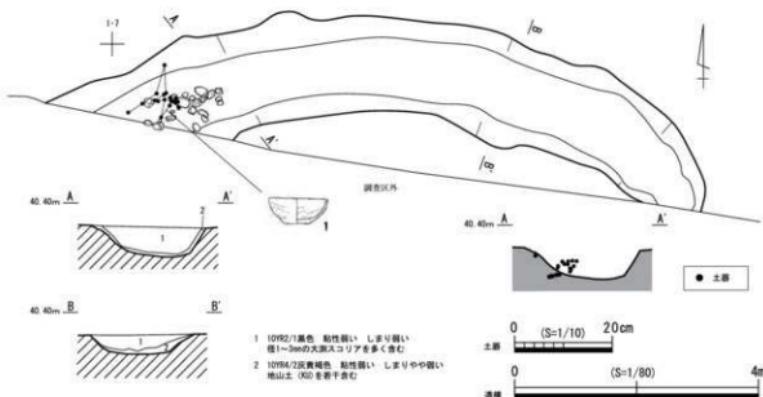
H-7グリッド、調査区西寄りに位置する溝状遺構である。遺構は緩やかにアーチ状をなしており、調査区外へ続いている。溝内の覆土から流れ込みで古墳時代後期の壺が出土している。1号・2号古墳



第11図 1号古墳剖面



第12圖 2號古墳開溝



第13図 SD13

周溝が検出されている状況からみて古墳の周溝である可能性が考えられる。

(3) 土坑（第14図・第12表）

大淵スコリアを覆土とする土坑を3基図示した。

ア SK7

H-11グリッド、調査区中央に位置する。比較的大型の土坑で、平面形は方形をなし、断面は立ち上がりが急である。遺物の出土はない。

イ SK84

I-8グリッド、調査区西寄りの北壁に位置する。土坑の北側は調査区外で検出した部分の平面形は不整形である。断面形は皿状で最大深約10cmである。覆土には大淵スコリアを多く含み、土坑底面には焼土と硬化面が確認された。遺物の出土はない。

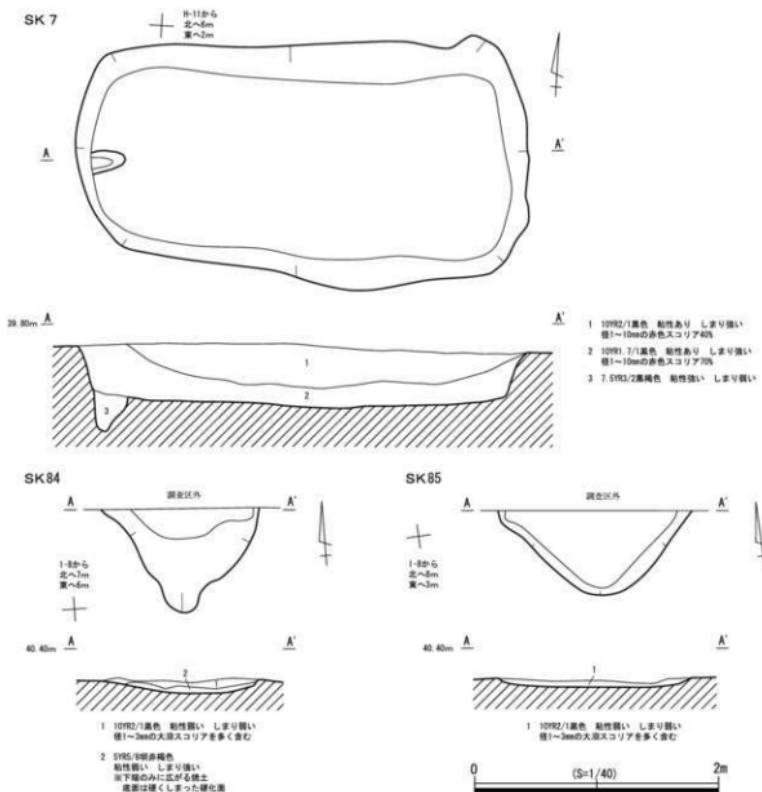
ウ SK85

I-8グリッド、調査区西寄りの北壁にSK84の西隣に位置する。北側は調査区外で、平面形がコナー状になった部分のみ出土した。遺構上面は削平を受けているため非常に浅い土坑となっており、断面形は皿状で最大深は6cmである。遺物の出土はない。(西田)

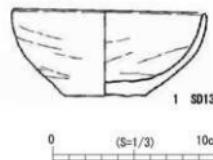
(4) 遺物（第13表）

SD13出土遺物（第15図1 図版11）

土師器の壺である。平底の底部に塊状の体部が付く。口縁部は横ナデを施し、体部は外内面とも丁寧なナデで器面を整えている。(岩崎)



第14図 第1造構面 土坑



第15図 造構出土遺物（古墳時代後期）

2 古墳時代前期の遺構

古墳時代前期の遺構は、第1遺構面で確認された。竪穴建物5基・竪穴状遺構1基・方形周溝墓5基・土坑1基を検出した。

(1) 竪穴建物（第6表）

古墳時代の竪穴建物は5基検出されている。出土遺物からは大きな時期差は見られないようであるが、平面形や主軸が異なっている。

ア SH1（第16図）

H-14グリッド、調査区中央に位置する。遺構東側は1号古墳周溝により切られ、さらに南側は調査区外となっているため、北西のコーナー部分のみ検出した。遺構上面が深く削平を受けている。なお、SK1との切り合い関係は不明である。

構造 平面形は不明であるが、方形に近いものと考えられる。一部は壁に沿うように溝が掘り込まれており、壁溝である可能性が考えられる。

遺物出土状況 遺物の出土はないが、他の竪穴建物と同じく、前期の遺構である可能性がある。

イ SH2（第17図）

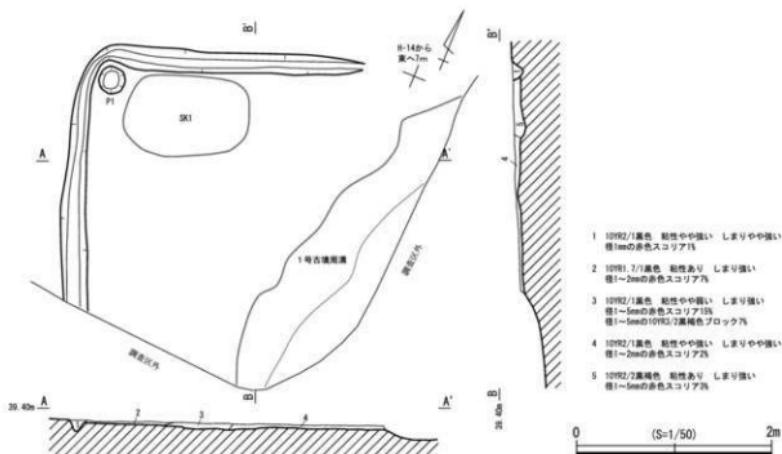
H-13・H-14グリッド、調査区東寄りに位置する。遺構東側は2号古墳に切られ、調査区外であるため、北側部分は検出できなかった。

構造 平面形は隅丸方形をなす。第5層と第6層は床面構築土で、厚さ8~23cmとなる。主柱穴はP1~P3であり、径30~60cmを測る。平面形はP1・P3が円形で、P2が隅丸方形をなしている。また、南側から柱穴が3基検出されているが、おそらくこの竪穴建物の入口部分にあたるものと思われる。

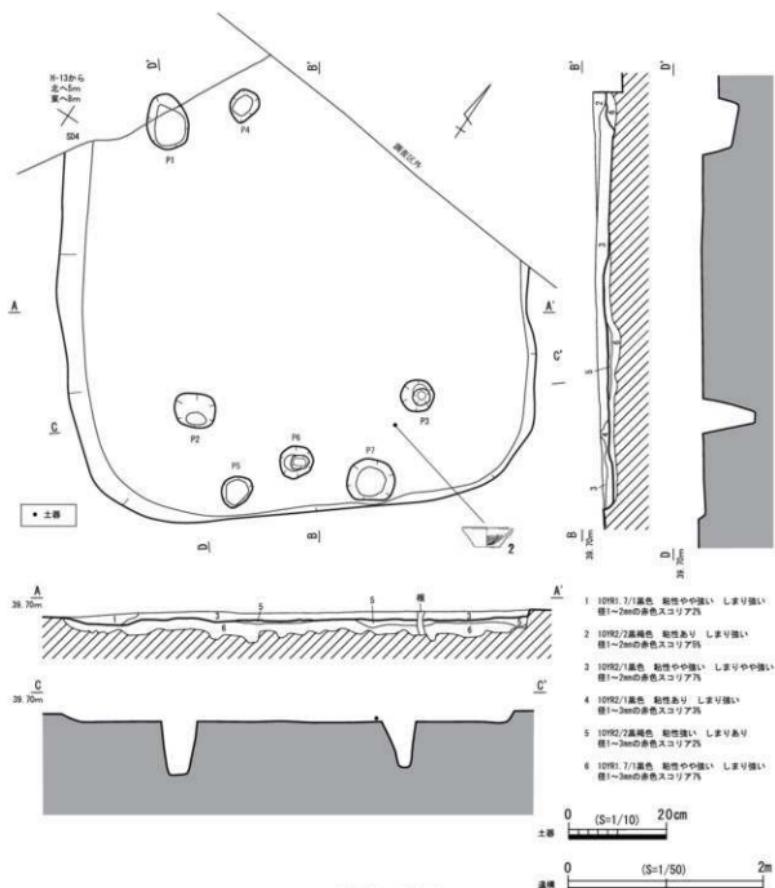
遺物出土状況 建物南側の床面直上から小型鉢が出土した。

ウ SH3（第18図）

H-13グリッド、調査区東寄りに位置する。遺構を東西に横断するように2号古墳周溝により大きく切られ、北側の一部は擾乱を受けている。



第16図 SH1



第17図 SH 2

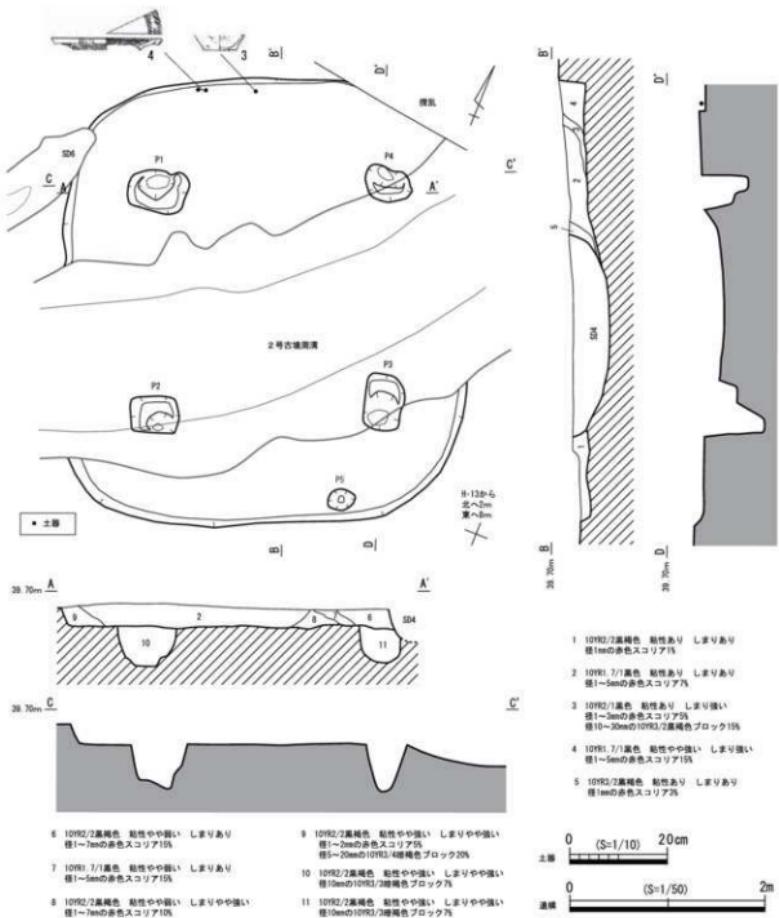
構造 平面形は隅丸方形である。床面構築土は確認されなかった。主柱穴はP 1～P 4の4基確認され、P 1とP 3は長さ60cm、幅40cm、P 2とP 4は長さ50cm、幅40cmとなる。P 1～P 3は平面形は多少不整形であるが方形に近く、P 1は不整形である。南側のP 5に関しては、炭化材が出土しており、柱材の可能性が指摘されている。

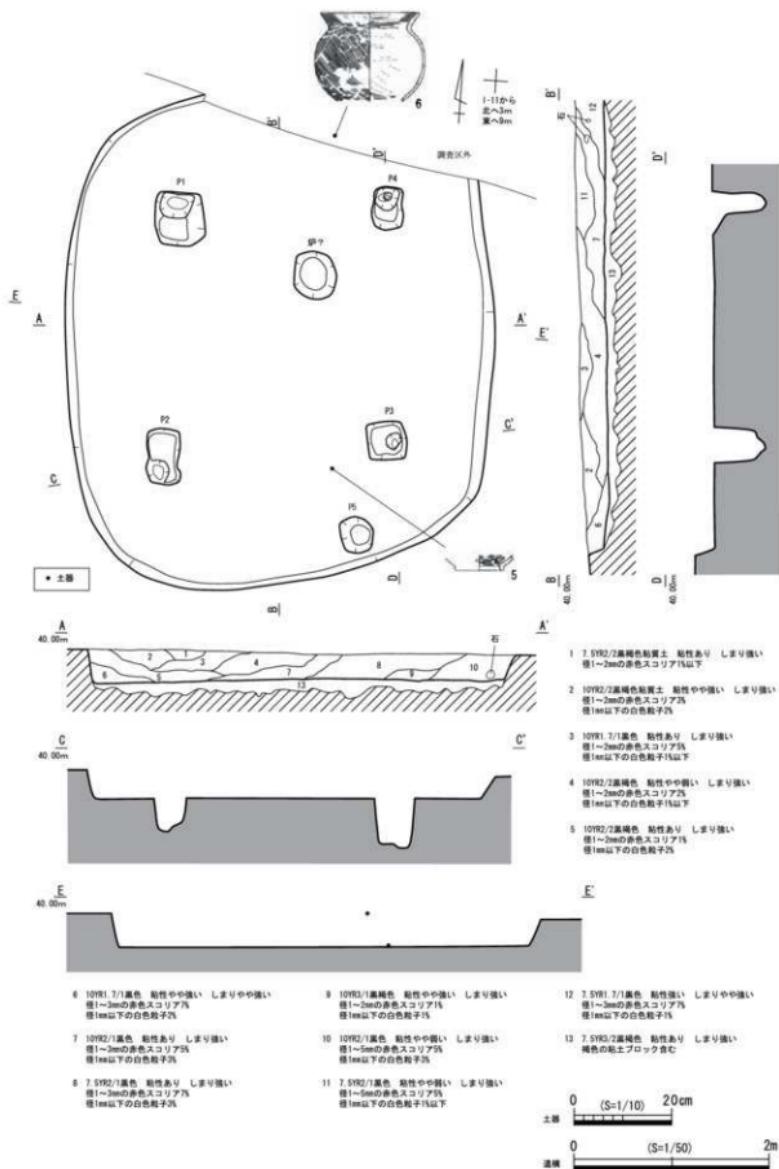
遺物出土状況 壺の口縁部と底部が建物跡北側の壁付近の床面から出土した。

エ SH 4 (第19図)

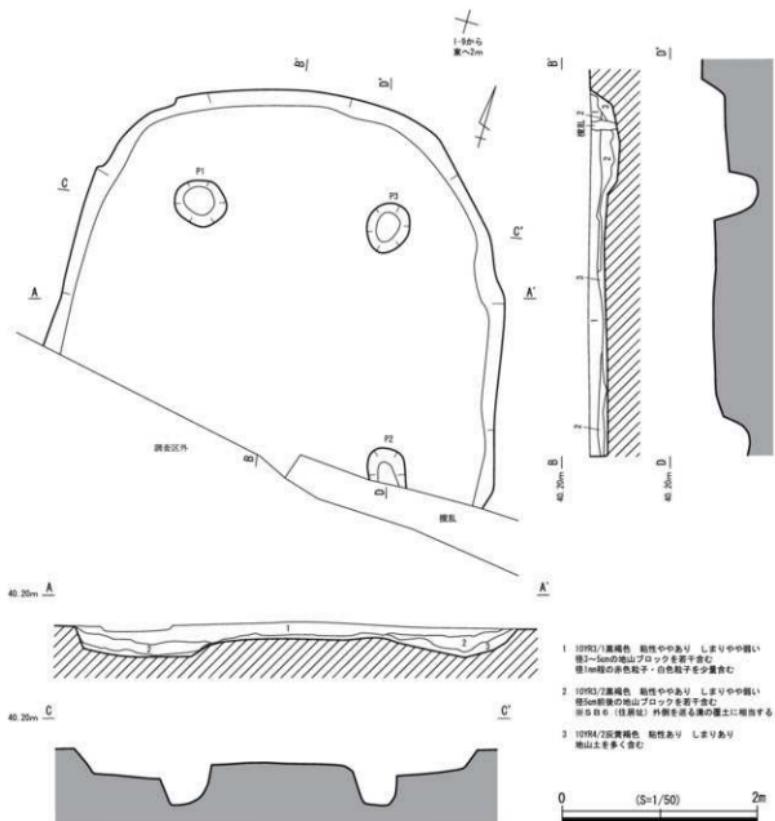
H-11・I-11グリッド、調査区中央北側に位置する。SH 4の北側は調査区外である。

構造 平面形は隅丸方形をなす。第13層は床面構築土で、厚さ8～20cmを測る。建物中央のやや北寄りに小穴が確認され、焼土の検出はないものの炉の可能性が考えられる。柱穴はP 1～P 4で4基確認さ





第19図 SH4



れた。いずれも平面形は方形または長方形をなす。P 1 は長さ56cm、幅50cm、P 2 は長さ60cm、幅30cmを測る。P 3 は一辺40cmを測り、P 4 は長さ40cm、幅30cmを測る。ほか、南側に小穴が検出された。

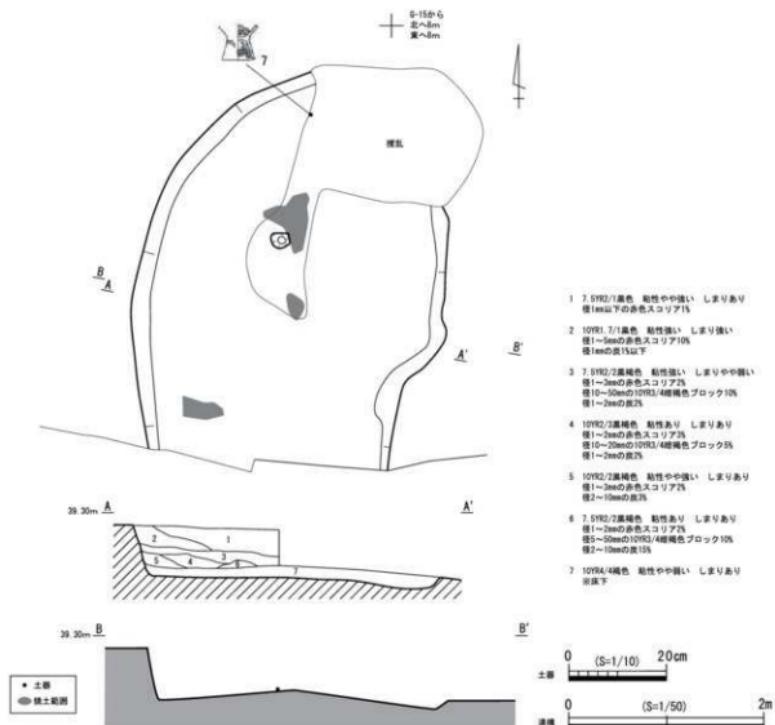
遺物出土状況 床面直上から壺の底部、覆土からは甕（註）が出土している。

オ SH 5（第20図）

H-8・H-9グリッド、調査区中央西寄りに位置する。遺構南側が調査区外である。

構造 全てを検出していないが、平面形は小判形をなす。掘方は建物に沿って幅1m～1.5mの溝を円形状に1周させ、床面構築土にあたる第1層～第3層を充填している。建物は上面が削平を受けており、床面は残存していなかった。柱穴はP 1～P 3で平面形は円形であり、径は約60cmを測る。

遺物出土状況 遺物の出土がないことから詳しい時期は不明であるが、周囲の遺構の状況から考え、他の竪穴建物と大きく時期差はないものと考えられる。



(2) 壇穴状遺構 T A 2 (第21図・第10表)

G-15グリッド、調査区東側に位置する。土層の堆積状況や周辺に壇穴建物が検出されている事から考えて、壇穴建物の可能性が高いが、壇穴建物としては平面形が不整形である事と、柱穴と考えられる小穴も検出されなかつたため、壇穴状遺構として報告する。

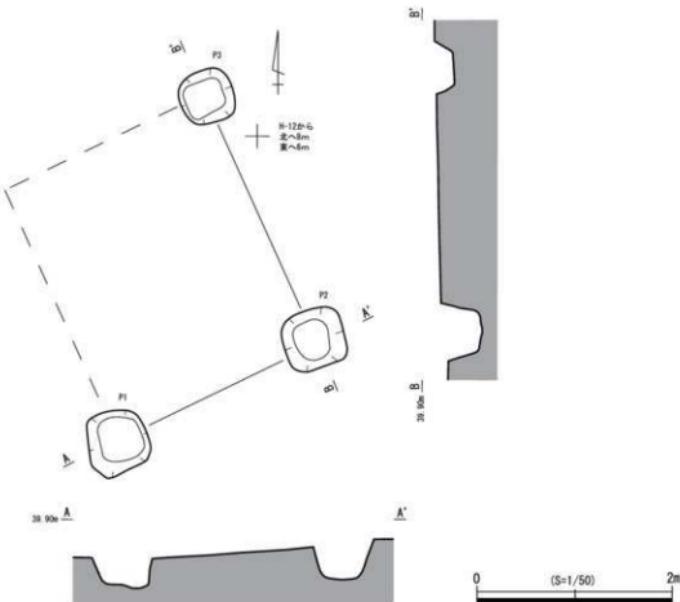
遺物は炭化材が第7層直上で出土し、樹種同定によりアカガシ亜属、ハイノキ節に同定されている（壇穴建物と言えるのであれば、7層が床面構築土となると考えられる）。また、台付甕の脚部1点が遺構の底面から出土した。

(3) 捩立柱建物 S B 1 (第22図・第7表)

H-12グリッド、調査区中央部分に位置する。

規模は1×1間で柱穴間の距離は南北2.1m、東西1.5mを測る。主軸はN-25°Wで、壇穴建物のSH3と値が近い。

柱穴の平面形は隅丸方形をなし、底部は平面的である。P1は一辺60cm前後、P2は一辺50cm、P3は一辺56cm前後である。擗立柱建物として報告するが、柱穴の位置やその規模から、本来は壇穴建物であった可能性が考えられる。



第22図 SB 1

(4) 方形周溝墓（第8表）

方形周溝墓は、調査区西側に集中しており、1区では5基検出した。

ア SZ 1（第23図）

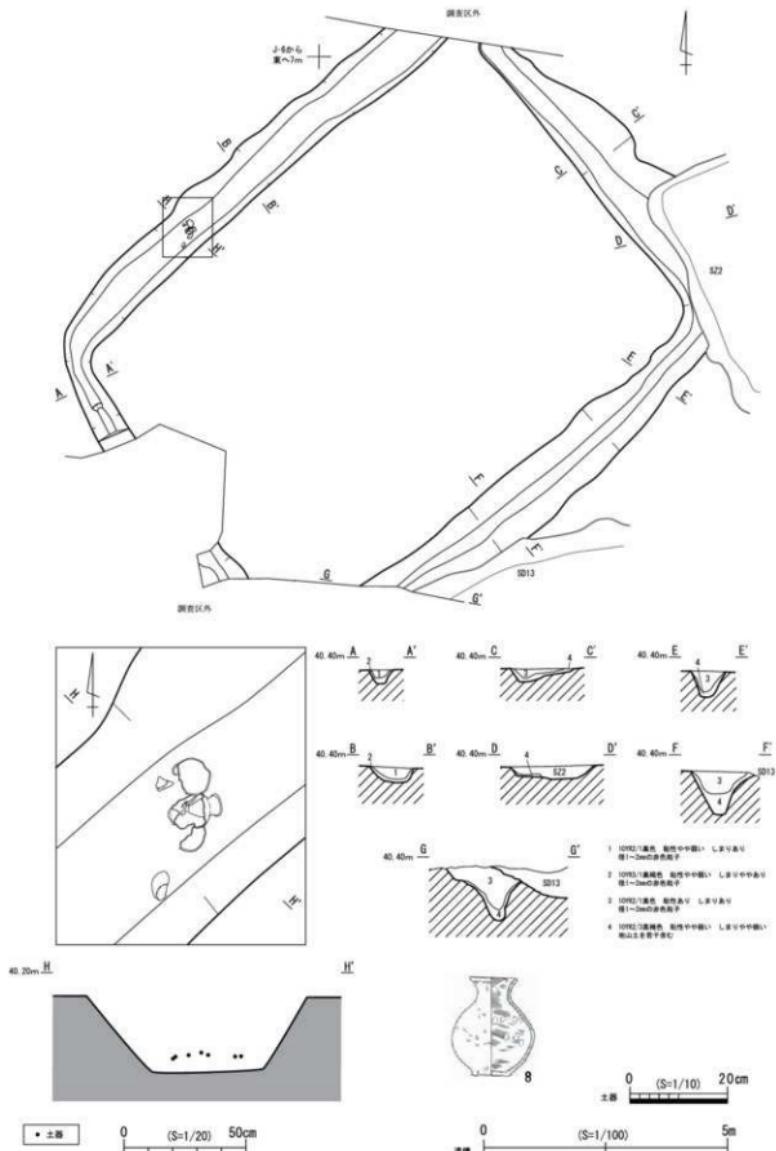
H-6・I-6・J-6・I-7グリッドにまたがり、調査区西側に位置する。平面形は正方形に近い長方形である。方台部は削平を受けている。主体部は検出されていない。西の角のみ残存しているが、その他の角は調査区外であることと、遺構に切られていることで確認できなかった。周溝の断面形は底部に平坦面を持ち、ハの字形に立ち上がる逆台形状のものと、緩やかな皿状のものがあり、形は一定でない。西側の周溝の底面付近の覆土から折り返し口縁を持つ壺がほぼ完形で出土した。

イ SZ 2（第24図）

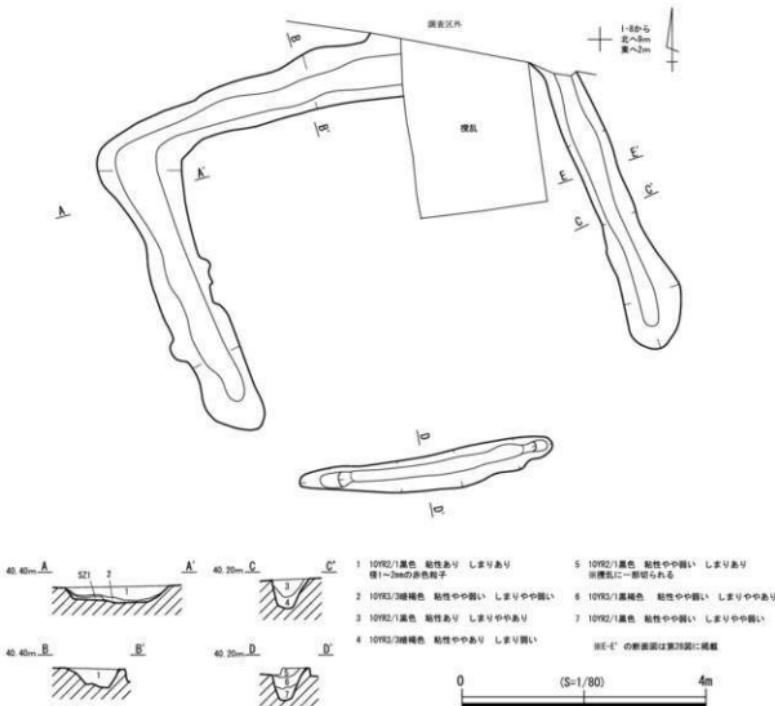
I-7・I-8グリッド、調査区西側に位置する。北東の角は調査区外である。方台部及び主体部は削平を受け残存していない。平面形は正方形に近く、南側周溝の両端が途切れている。南側の周溝は両端部分にテラス状の段構造を持つ。断面形は底面に平坦面をもち、鋭角に立ち上がるものと、西側部分は東側部分よりも削平を受けたためか、A-A'部分の断面形は皿状である。この部分はSZ 1と溝を共有している。遺物の出土はなかったが、東側溝部分の直上で1個体分の壺の破片が集中して出土しており、本来的にはSZ 2の遺物である可能性が高い。遺物集中1として後述する。

ウ SZ 3（第25・26図）

H-8・H-9・I-8・I-9グリッド、調査区西側に位置する。本調査区内では最大の方形周溝墓で、正方形に近似する長方形をなしている。方台部は削平を受けているため、主体部は検出されてい



第23図 S Z 1



第24図 SZ 2

ない。北側、南側部分は、周溝が連結しているが、北西の角では溝が途切れる。南西部部分は調査区外となっている。

北東の角及び、西側周溝にて遺物が集中して出土した。北東の角部分では甕や台付甕が溝上面から、西側周溝では甕が溝上面から出土した。

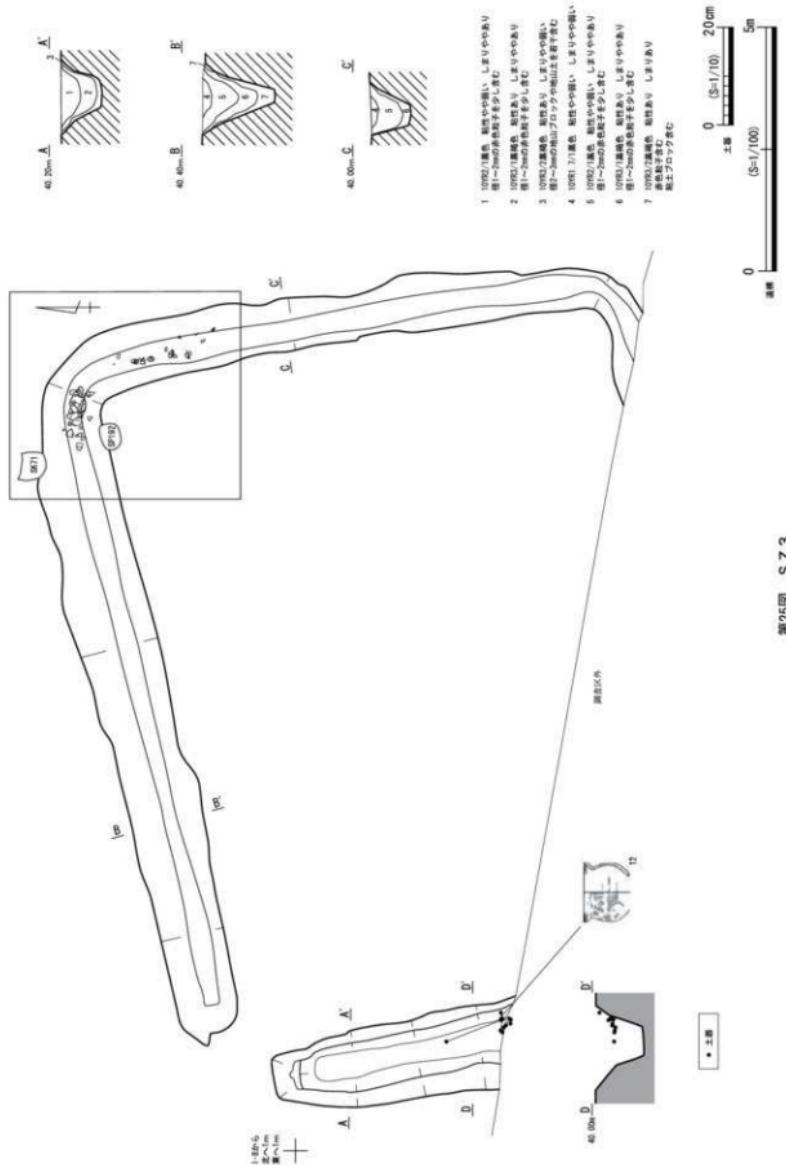
エ SZ 4 (第27図)

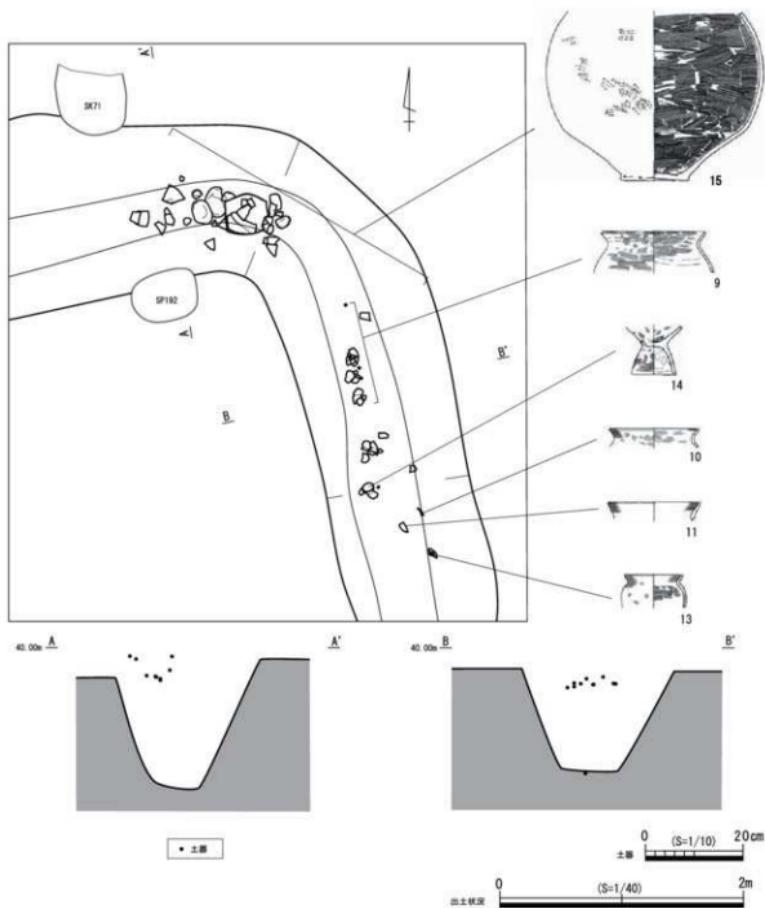
H-10・H-11グリッド、調査区中央部分南側に位置する。遺構の南側が調査区外で、北東の角が検出された。検出された部分の周溝はSZ 5と連結している様で、周溝の角も連結する。方台部は削平を受けており、主体部も検出されていない。周溝の断面形は逆台形状をなし、立ち上がりは急角度である。

遺物の出土はなかった。

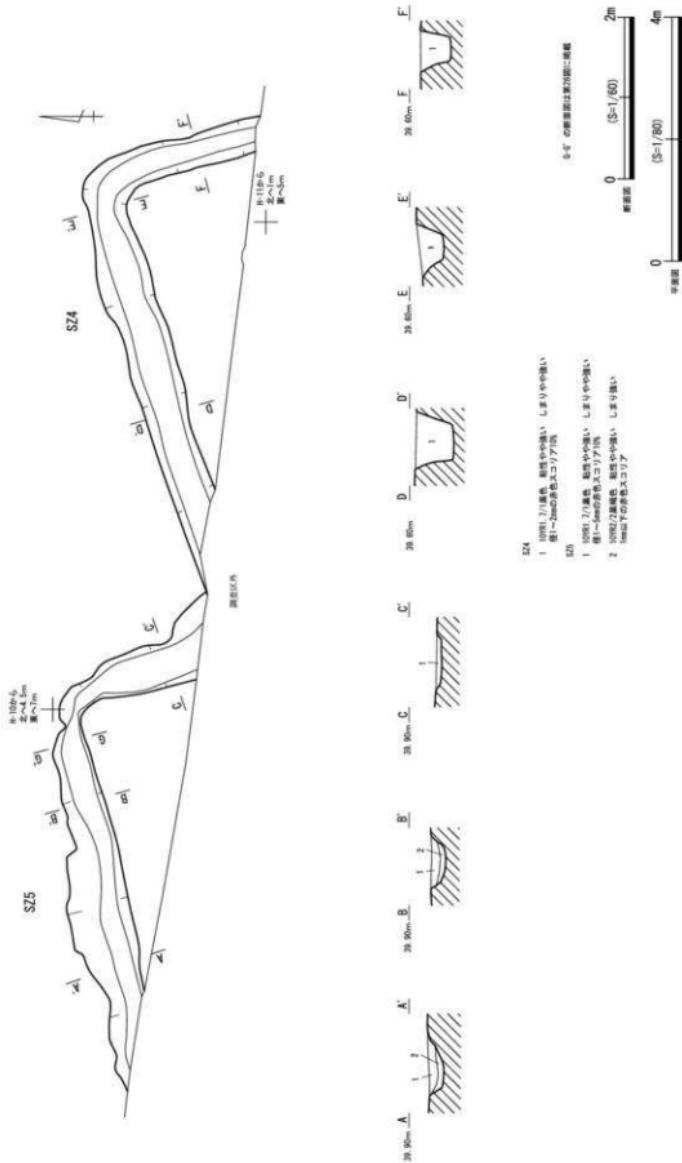
オ SZ 5 (第27図)

H-10グリッド、調査区中央部分南側に位置する。遺構の南側部分が調査区外で、北東の角部分が検出された。角は連結している。方台部は削平を受けている。周溝の断面形は底面に平坦部を残す皿状である。角直上の包含層からは土器がまとまって出土し遺物集中2としている。周溝の直上から出土したことから、この部分を調査時に周溝を認識できなかつた可能性があり、SZ 4に伴う遺物であった可能



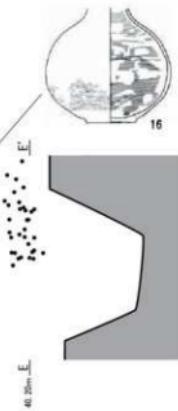
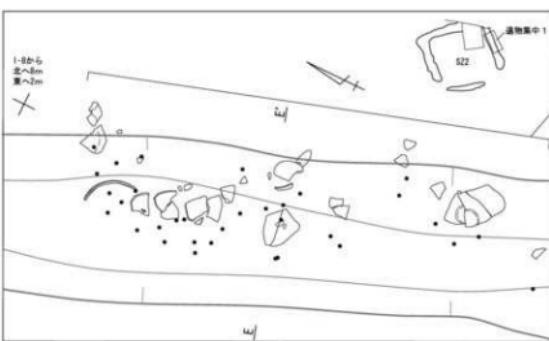


第26図 S Z 3 遺物出土状況

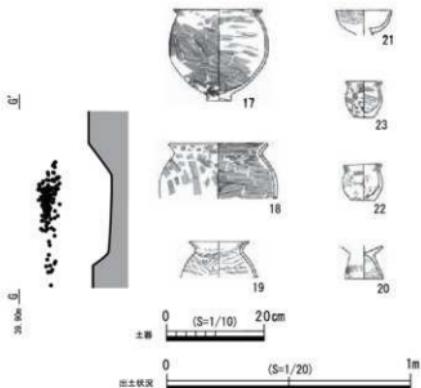
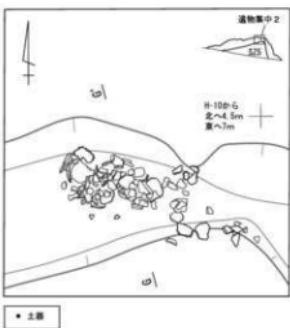


第27図 SZ4・SZ5

遺物集中1 (SZ2) 遺物出土状況



遺物集中2 (SZ5) 遺物出土状況



第28図 遺物集中1・2

性が高い。

(5) 遺物集中 (第28図)

ア 遺物集中1

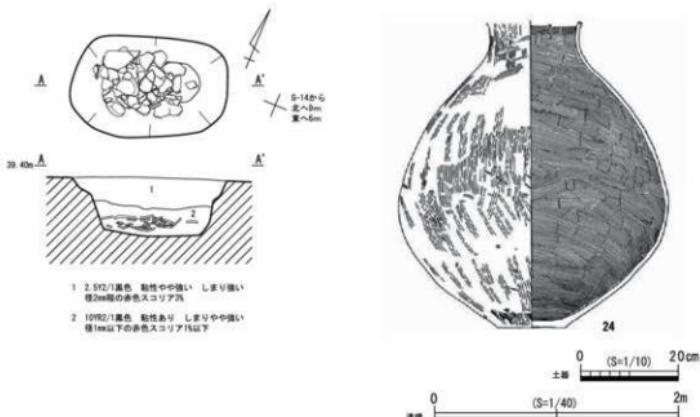
I-8グリッド、SZ2の東側周溝上面の包含層から遺物が集中して出土した。1m90cmほどの範囲に口縁部を欠いた壺1個体の破片が出土している。

前述の通り本来的にはSZ2の遺物である可能性が高い。

イ 遺物集中2

H-10グリッド、SZ5の北東の角の直上の包含層から遺物が集中して出土した。1mほどの範囲に遺物が集中しており、甕・高环等が集中して出土している。

前述の通り本来的にはSZ5の遺物である可能性が高い。



第29図 SK 1

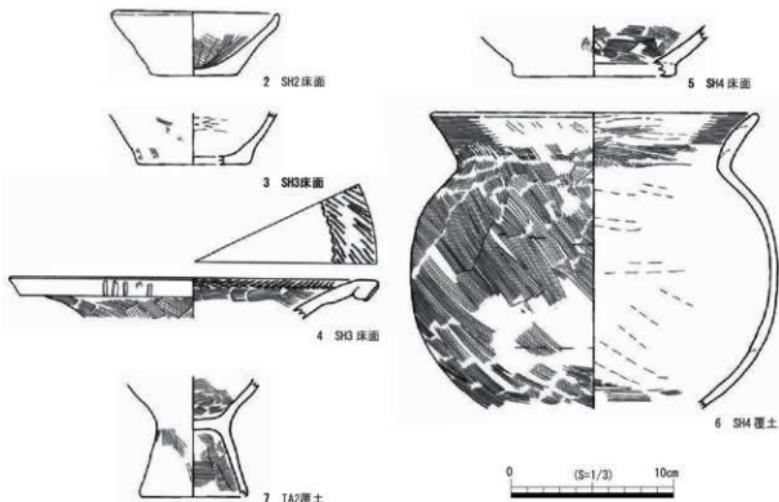
(6) 土坑 SK 1 (第29図・第12表)

G-14グリッド、調査区東側に位置する。

平面形が1m28cm、深さ50cmを測る長梢円形の土坑である。土坑の中からは古墳時代前期の口縁部がない壺の胸部が出土した。底部が上層で反転して出土したことから、壺を反転させて埋納した土器埋納土坑なのか、それとも割れた壺を捨てた廃棄土坑である可能性を考えられるが、判断がつかない。

SH 1は残存状態が悪く、遺構の大部分が削平されていたため、SK 1との切り合い関係を土層から判断することができなかった。よってSK 1はSH 1に伴う土坑なのか、後に掘り込んだ遺構であるのか不明である。(西田)

(註) 静岡県東部地域で出土した古墳時代前期の壺は台付壺が主体であるが、稀に平底の壺も見られる。本報告書では、脚部または底部が欠損し、形状が特定できないものについては「壺」と表記した。



第30図 遺構出土遺物（古墳時代前期）1

(7) 遺物（第13表）

ア SH2出土遺物（第30図2 図版11）

2は小型鉢である。平底の底部に直線的に外傾する体部が付く。

イ SH3出土遺物（第30図3・4）

4は折り返し口縁壺である。口縁部は大きく外反して開き、内面にS字状結節を伴うL Rの縄文を施文している。口唇部には棒状浮文を貼り付けている。

ウ SH4出土遺物（第30図5・6 図版11）

6は壺の胴部である。胴部は丸く、中央部に最大径を有する。頸部の屈曲は明瞭である。口縁部は直線的に開き、横ナデを施している。口唇部は丸い。

エ TA2出土遺物（第30図7）

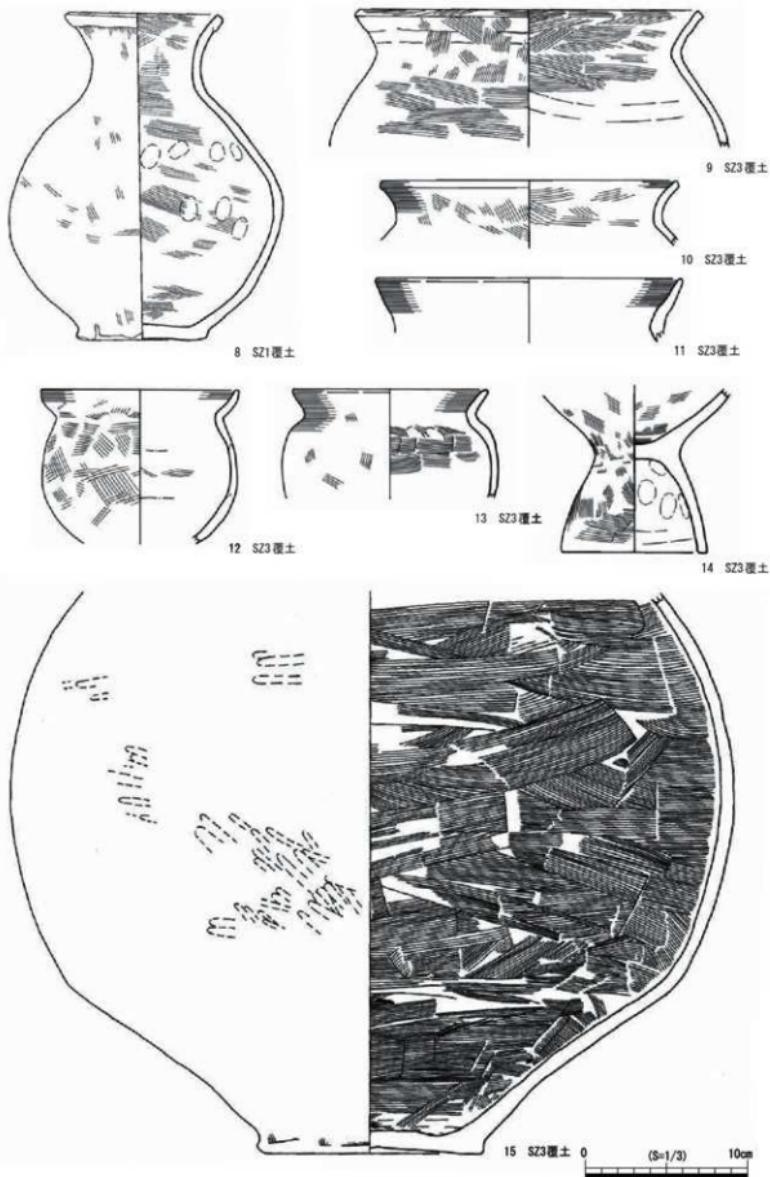
7は台付壺の脚部である。低脚で開きは小さく、直線的である。

オ SZ1出土遺物（第31図8 図版11）

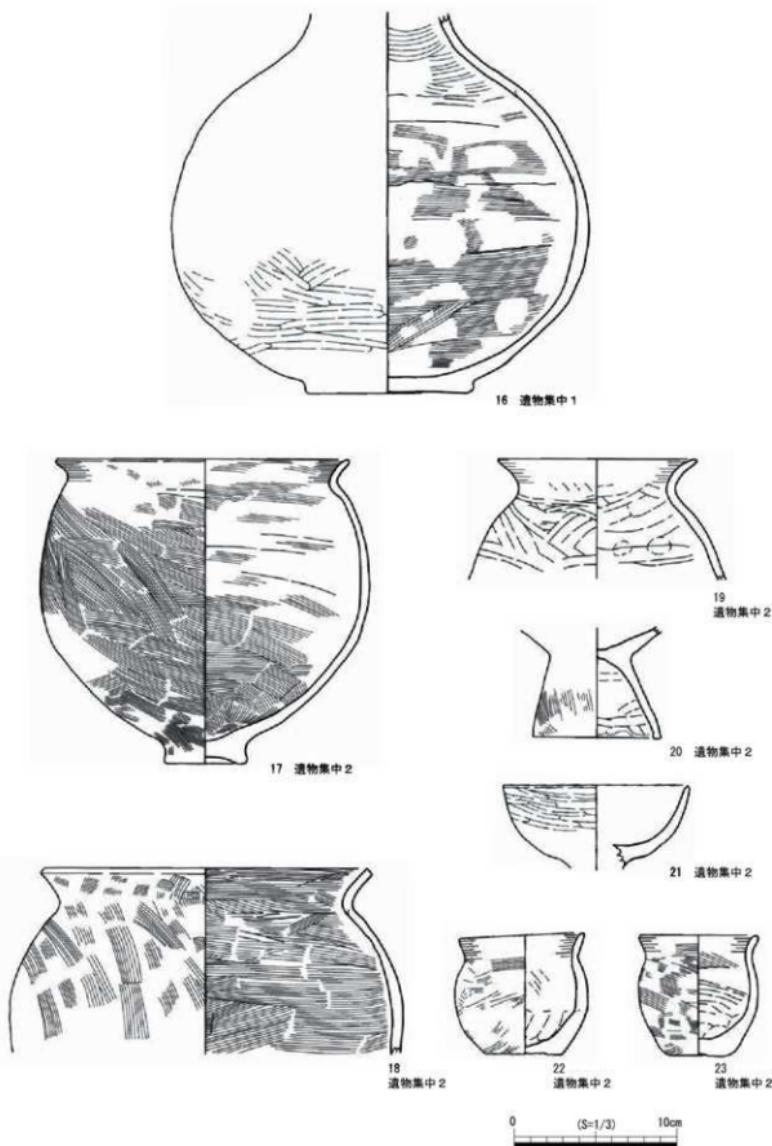
8は折り返し口縁壺である。胴部は丸く、中央部に最大径を有する。頸部は短く、口縁部の開きは小さい。

カ SZ3出土遺物（第31図9～15 図版11）

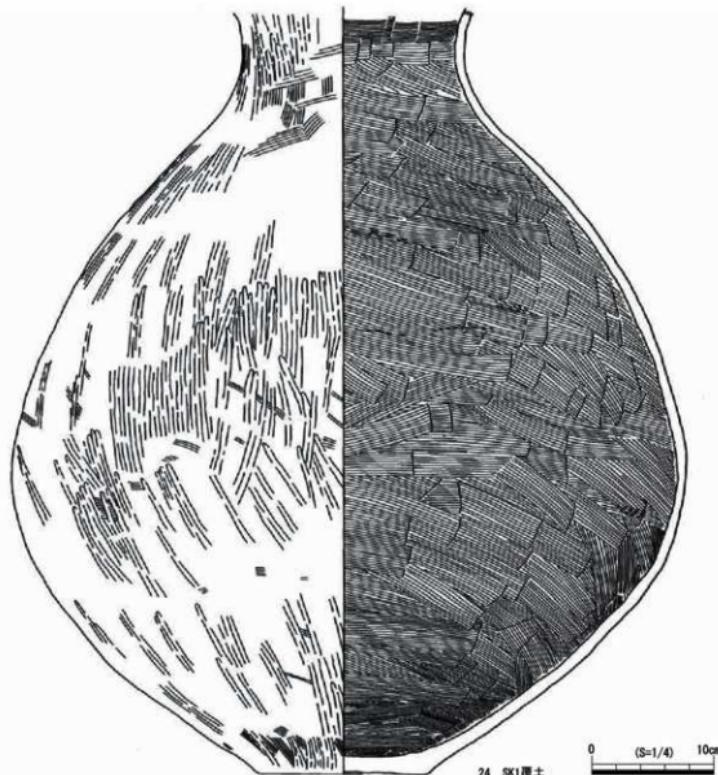
9から11は壺の口縁部である。9は頸部の屈曲が明瞭である。口縁部は直線的に開き、口唇部は面取りしている。10は9に比して頸部の屈曲が緩やかである。口唇部を面取りし、横ナデを施している。11は口縁部の開きが小さく、横ナデを施している。口唇部は丸い。12と13は小型の壺の胴部である。12は胴部が丸く、中央部に最大径を有する。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は内弯して開く。口唇部を面取りし、横ナデを施している。13は胴上部がやや張る。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開く。外面の横ナデの範囲は頸部まで及ぶ。口唇部は丸い。14は台付壺の脚部である。短く内弯して開く。



第31図 遺構出土遺物（古墳時代前期）2



第32図 遺構出土遺物（古墳時代前期）3



第33図 遺構出土遺物（古墳時代前期）4

15は壺の胴部である。駿河地域で出土する大型の複合口縁壺である可能性が高い。

キ 遺物集中1出土遺物（第32図16 図版11）

16は壺の胴部である。胴部の形状は潰れた球形である。

ク 遺物集中2出土遺物（第32図17～23 図版11・12）

17は鉢である。底部径は小さく、平底で中央部が凹んでいる。胴部の形状は台付甕の甕部に似ており、中央部に最大径を有する。頸部の屈曲は明瞭である。口縁部は短く外反して開き、横ナデを施している。口唇部は丸い。

18と19は甕の胴部である。18は頸部の屈曲が明瞭である。口縁部は直線的に開き、口唇部は面取りしている。19は器面全体をナデ調整している。頸部の屈曲は明瞭である。口縁部は大きく外反して開き、横ナデを施している。口唇部は丸い。20は台付甕の脚部である。開きはやや内弯気味である。

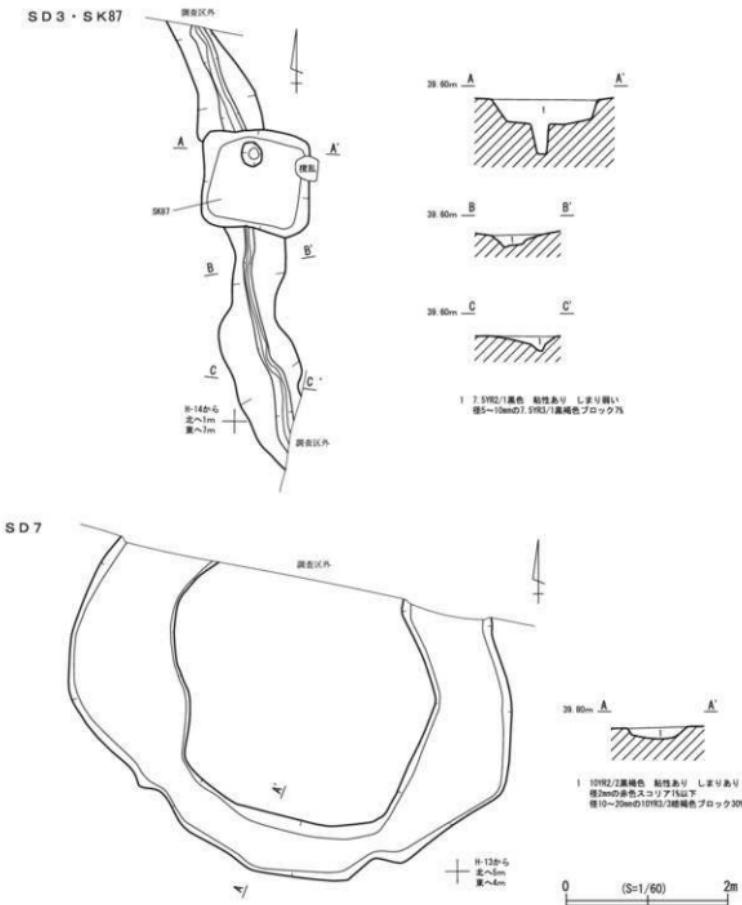
21は塊形の高坏の坏部である。

22と23は小型壺である。ともに底部径は大きい。口縁部は緩やかに外傾し、横ナデを施している。口

脣部は丸い。

ケ SK1出土遺物（第33図24 図版12）

24は壺の胴部である。15と同様、駿河地域で出土する大型の複合口縁壺である可能性が高い。（岩崎）



第34図 第1遺構面 溝状遺構

3 溝・土坑・小穴

第1遺構面から検出された溝・土坑・小穴で、遺物の出土もなく、時期をわけられなかったものである。掘り込み面は縄文包含層の栗色土層上面からなされた、と考えられる。多くが黒色土または黒褐色土を覆土とすることから、古墳時代の遺構である可能性が高い。しかしながら縄文時代の遺構面を破壊して古墳時代の遺構が作られているという点を考えると、慎重にならざるを得ないため、ここに便宜的にまとめる。時期不明な遺構は、溝状遺構2基・土坑10基・小穴17基である。

(1) 溝状遺構（第9表）

ア SD3（第34図）

H-14グリッドに位置し、調査区を南北に縦断する溝状遺構である。立ち上がりも不明瞭で、性格は不明である。S K87に切られている。1号古墳周溝との先後関係が気になる所であるが、水道管が通っていたため、切り合いが分かる部分は調査できなかった。

イ SD7（第34図）

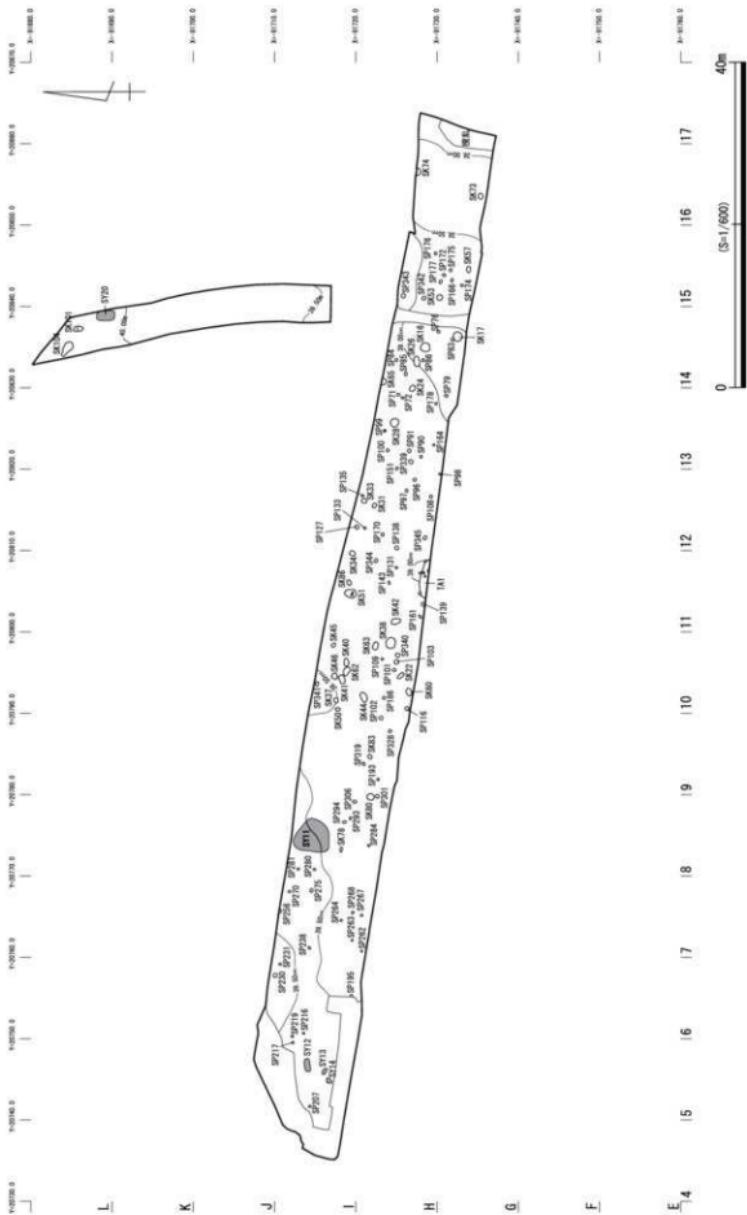
H-13グリッド、調査区中央に位置する。調査区外により、北側は検出されていない。平面形は不整形な円形の溝である。上面が削平された堅穴建物の掘方部分である可能性が考えられる。断面形は浅い皿状をなす。SD3と同じく性格は不明である。

(2) 土坑および小穴について

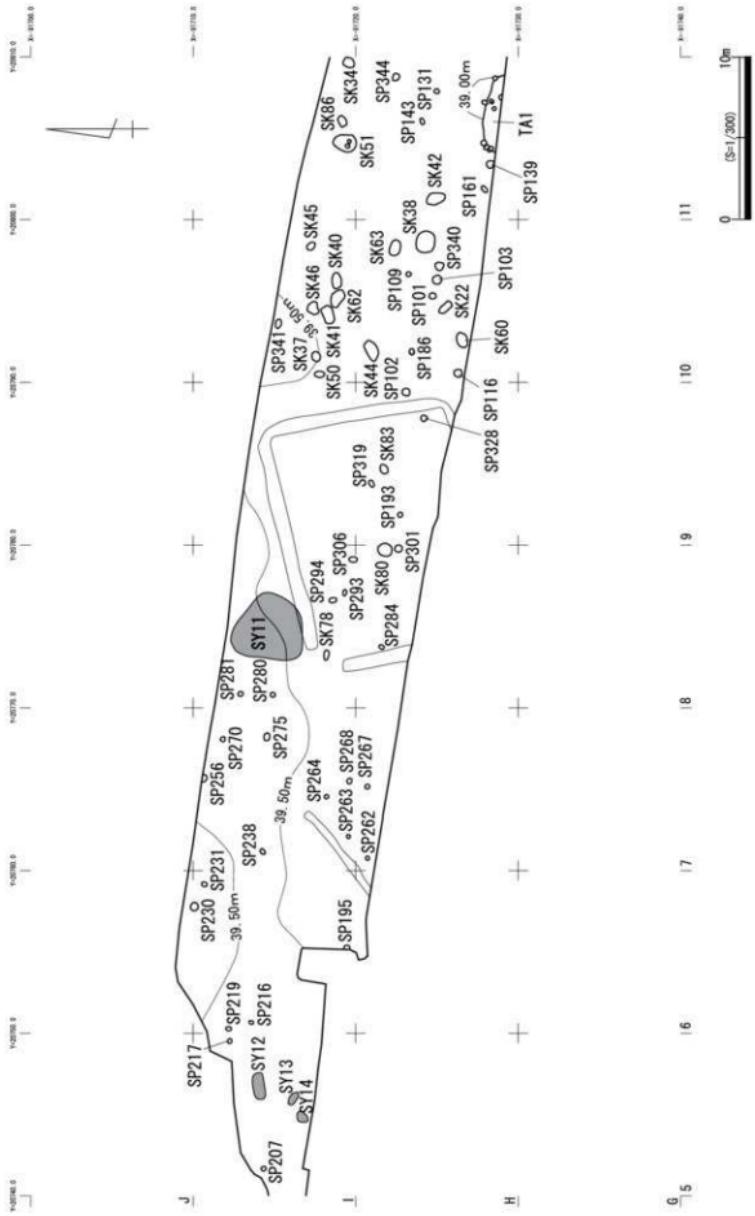
規模などは別表に記載する（第12表）。

平面形と規模が類似し、柱穴になる可能性を指摘できる土坑がいくつか確認できたが、その大半は性格が不明である。平面形や深さの違い、または断面形に違いが認められる土坑、小穴が検出されている。平面形は円形や楕円形、不整形なものなど、断面形は壁面の立ち上がりの急なもの、皿状もの、捕鉢状のものを確認した。（西田）

第3節 1区古墳時代の遺構と遺物

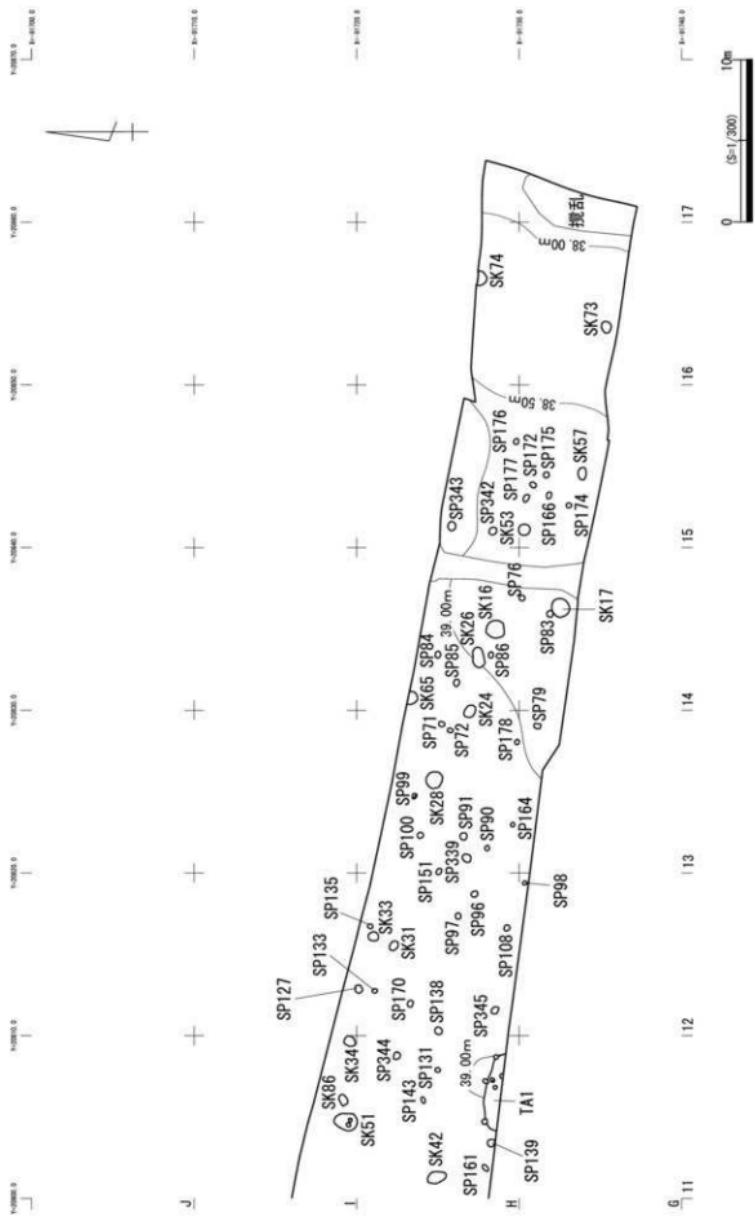


第35図 第2遺構面遺構配置図



第36圖 第2邊構面遺構配置擴大圖1

第3節 1区古墳時代の遺構と遺物



第2章 第2章 橋面遺構記載図大図2

第4節 1区縄文時代の遺構と遺物

1 遺構

1区の縄文時代の遺構は、古墳時代の遺構が主となる第1遺構面（栗色土層中）で、性格不明遺構を1基検出した。第2遺構面（休場層相当層上面）では調査区の全体で縄文時代の遺構が確認でき、堅穴状遺構1基、集石4基、土坑33基、小穴73基を検出した。

(1) 堅穴状遺構 TA 1 (第38図・第10表)

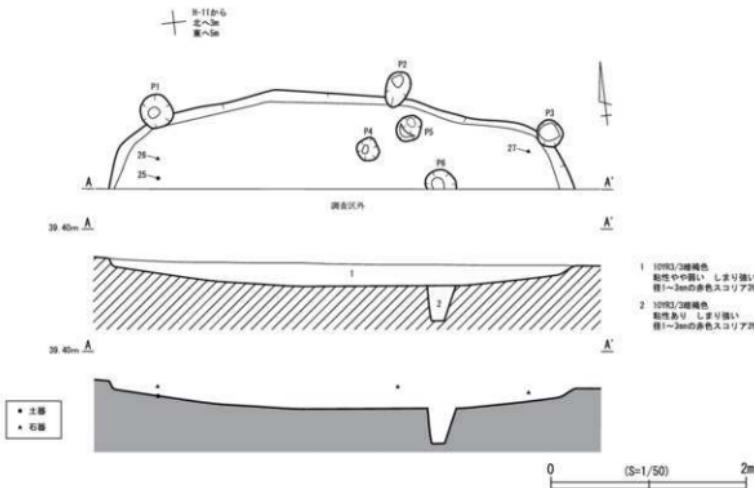
H-11グリッドに位置する。堅穴住居跡である可能性があるが、遺構の大半が調査区外である事から、堅穴状遺構として報告する。

遺構の脇にはコーナー部分とその間の壁面にそれぞれ円形の小穴が配置されている。P 1で径32cm、深さ45cm、P 2で径38cm、深さ60cm、P 3で径28cm、深さ15cmとなる。さらに遺構底面ではP 4～P 6の3基の円形の小穴が検出されている。これらは掘り込みが深く、P 4は径20cm、深さ60cm、P 5は径24cm、深さ85cm、P 6は径28cm、深さ40cmとなる。遺物はII群2類d土器の十三菩提式土器と石鎌・磨石を遺構底面で出土した。

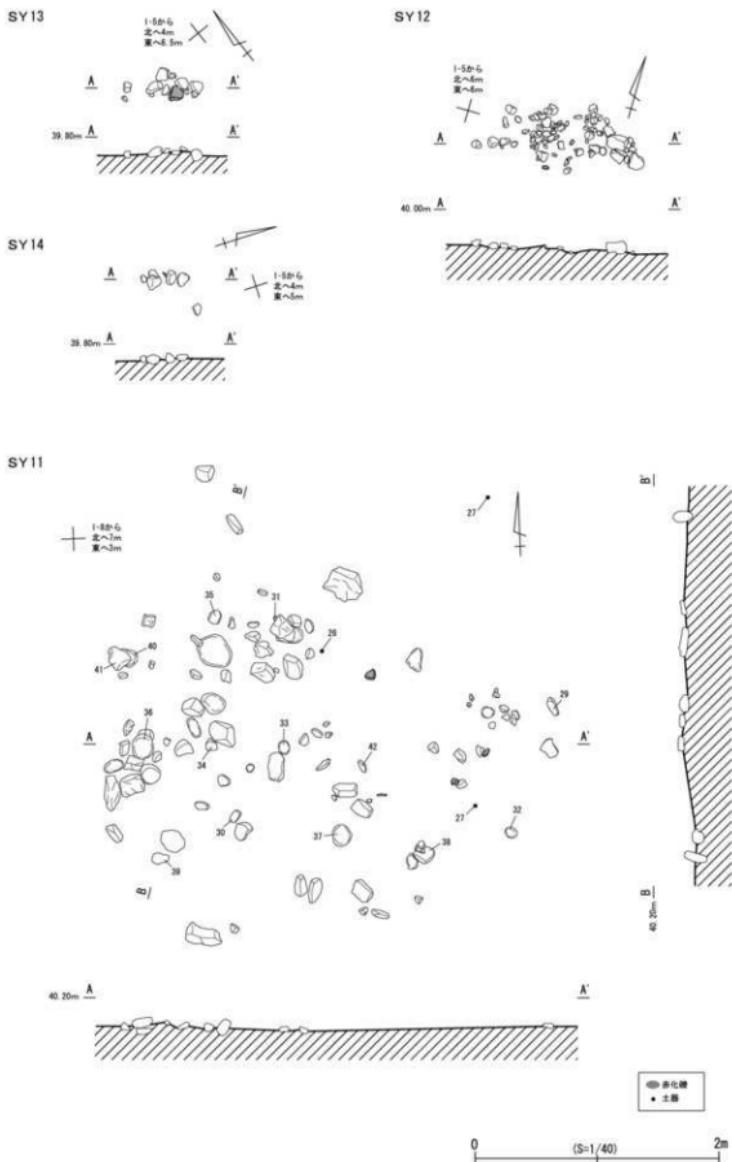
(2) 集石 (第39図・第11表)

集石は4基検出されており、土坑を伴わない集石である。疊数が7点あるものから、83点ある集石が認められた。赤化比率は0%から8%と低く、受熱により赤化した疊は少ない。使用頻度が低かったのか、調理施設としての機能以外の機能を持つ可能性も考えられる。

S Y12～14はI-5グリッド、調査区西側に近接し位置している。S Y13・14は、15cm程度の疊が60cmの範囲に分布し、赤化比率はS Y13では1%、S Y14は8%である。S Y12は1.5mの範囲に8～20cmの疊が83点集められていた。S Y11は、I-8グリッド、調査区西側に位置する。3.9mの範囲に79点の

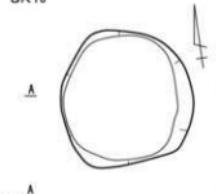


第38図 TA 1

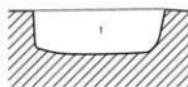


第39図 集石

SK16

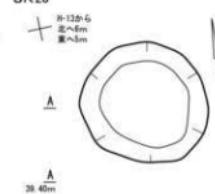


38.20m

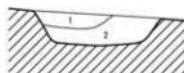


1 10YR2/3基褐色 粘性あり しまり強い
径1~2mの赤色スコリア5%
径1~2mの基色粘子5%
径1mm以下の白色粘子3%

SK28

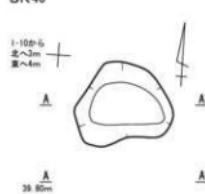


38.40m



1 10YR2/3基褐色 粘性やや強い しまり強い
径1~3mの赤色スコリア25%
径1mm以下の白色粘子15%
2 10YR2/2基褐色 粘性やや強い しまり強い
径1~5mの赤色スコリア25%
径10~50mmの10YR2/4基褐色ブロック10%

SK46

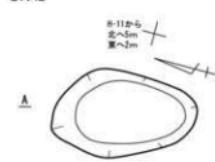


38.80m

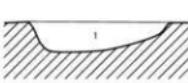


1 10YR2/2基褐色 粘性あり しまり強い
径1~5mの赤色スコリア25%

SK42

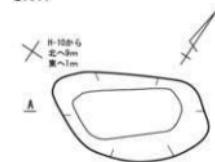


38.80m

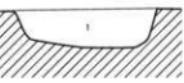


1 10YR2/2基褐色 粘性やや弱い しまり強い
径1~3mの赤色スコリア25%
径10~20mmの10YR2/4基褐色ブロック10%

SK44

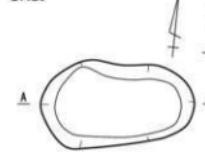


38.60m

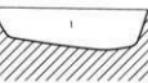


1 10YR2/2基褐色 粘性やや弱い しまり強い
径1~3mの赤色スコリア25%
径10~20mmの10YR2/4基褐色ブロック10%

SK26



38.20m



1 10YR2/2基褐色 粘性あり しまり強い
径1~3mの赤色スコリア25%
径10~20mmの10YR2/4基褐色ブロック30%

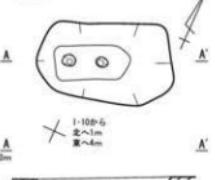
SK86



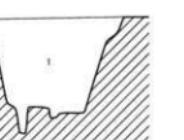
1 10YR2/2基褐色 粘性あり しまりあり
径1~3mの赤色スコリア5%
径1~2mの基色粘子2%

2 10YR2/4基褐色 粘性あり しまり強い

SK62

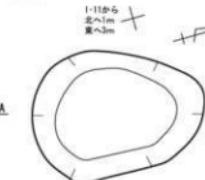


38.60m

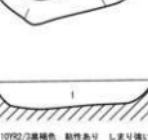


1 10YR2/2基褐色 粘性あり しまり強い
径1~3mの赤色スコリア25%

SK51



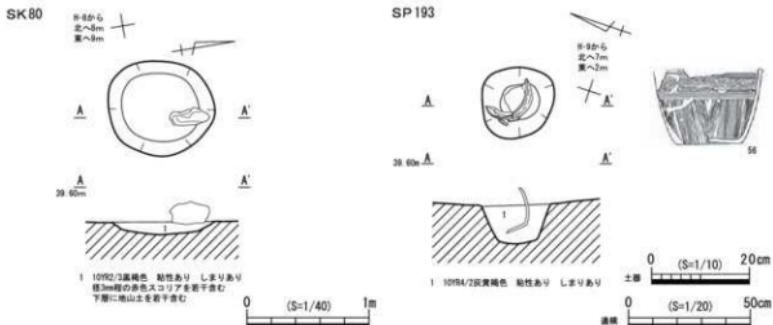
38.60m



1 10YR2/2基褐色 粘性あり しまり強い
径1~3mの赤色スコリア25%



第40図 第2遺構面 土坑



第41図 配石土坑・埋甕

礫が分布し赤化比率は4%である。III群1類aの五領ヶ台式土器と石器が出土した。

(3) 土坑・小穴(第12表)

調査区全体に平面形や深さの違い、断面形の違いが認められる土坑、小穴が検出された。壁面の立ち上がりの急なもの、皿状、捕鉢状のものがみられる。

遺物が出土しているものは、土坑はSK 16・28・46・42・44・26・62・51、小穴はSP 139・166である。

S K 62は表面が不定形で底面も方形に近い不定形で小穴が2基並んでいる。ここからは土器が出土しているが、落とし穴に使用した可能性がある。

配石土坑 SK 80(第41図)

H-8・H-9グリッド、調査区中央西寄りで、埋甕であるSP 193西側で配石土坑と考えられる遺構を1基検出した。平面は径90cmの円形をなし、断面形が皿状、残存する深さが10cmの土坑内に、およそ30cmの礫が出土した。

(4) 埋甕 SP 193(第41図・第12表)

H-9グリッド、調査区中央の西寄りに位置する。土坑は径70cm、深さ40cmで平面形は円形である。III群1類aの五領ヶ台式土器の深鉢を正位の状態で埋設している。

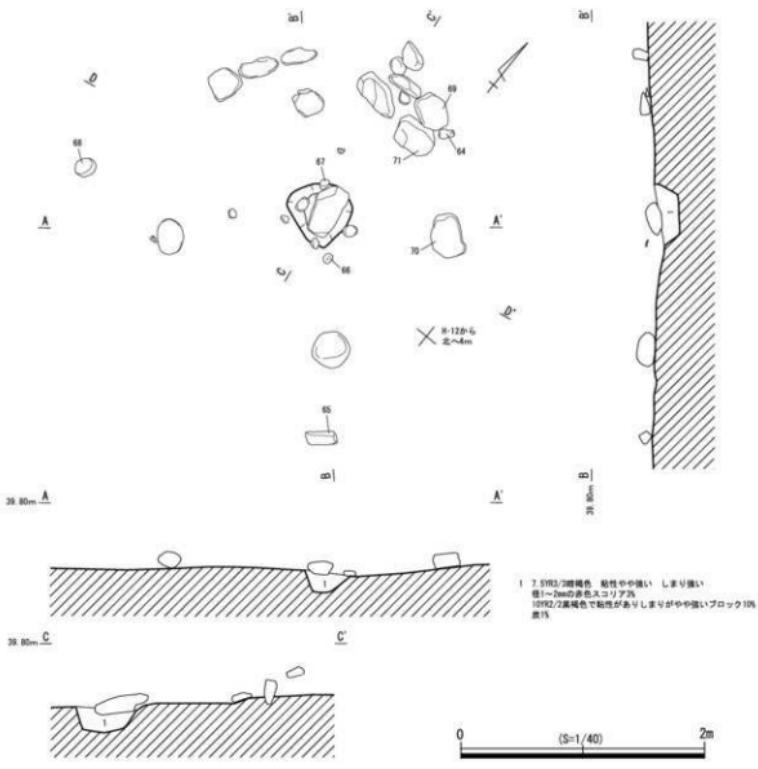
検出時は埋甕のみであり、周辺では建物跡とみられる遺構は検出されなかった。埋甕の上面とその周囲が削平を受けている事から、建物に伴う埋甕であったのか、屋外埋甕であるのかは判断ができない。

(5) 性格不明遺構 SX 4(第42図)

H-11グリッド、調査区中央にて検出した。SX 4のみ休場層相当層上面の第2遺構面でなく、第1遺構面の栗色土層中から検出している。

遺構は、径3m30cmの範囲の中心に径50cm、深さ18cmなどの、覆土にわずかに炭化物が含まれる小穴が掘り込まれていた。その周辺で、北側から北西にかけて、石皿および礫が並べられて出土した。その他の出土遺物は縄文時代中期前半と考えられる土器片と、打製石斧、磨石がまばらに出土した。

性格不明遺構として報告したが、本来は建物跡であった可能性があり、遺構のプランを示す掘方はすでに削平を受けているものとみられる。(西田)



第42図 S X 4

2 遺 物

(1) 遺構出土遺物（第14表）

ア T A 1 (第43図25~27 図版12)

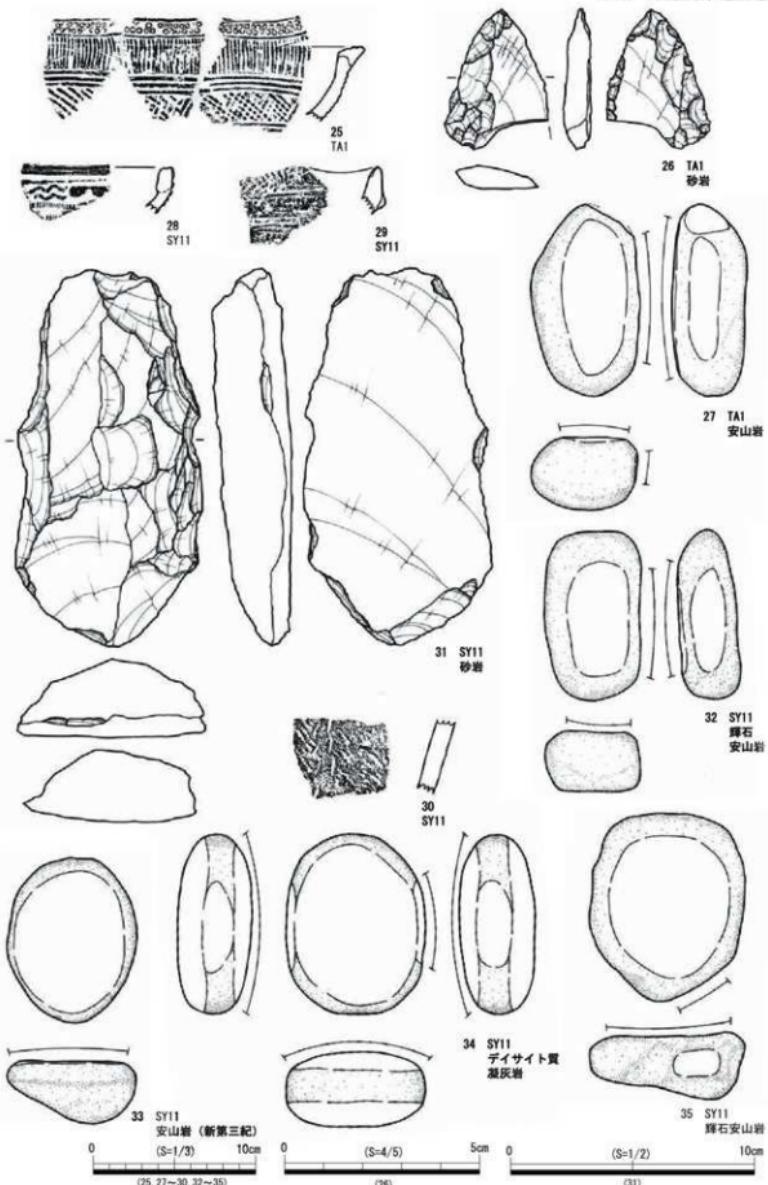
土器、石鎚、磨石が1点ずつ出土した。25はII群2類d、前期後半の十三菩提式に比定される深鉢の口縁部が出土している。口唇部に粘土紐で円形の浮線文を付け、口唇部直下からも縦位のソーメン状浮線文を施している。横位の密接蒲鉾状平行沈線文を付け、斜位の密接蒲鉾状平行沈線を施した上に、斜位の浮線文を貼り付けて斜格子文を作り出している。

26は大型の石鎚である。石材は砂岩を使用している。基部が欠損しているため形態は不明である。27はI類の磨石である。両面と側縁に磨面がある。

イ S Y11 (第43図28~第44図42 図版12)

III群1類a、五領ヶ台式土器が出土している。28、29は口縁部である。28は口縁部に沿って横位の区画を作出し、波状文を貼り付け、その下部にはヘラ状工具で刻みを入れている。29は波状口縁を有する。半截竹管状工具で矢羽根状沈線文を付け、連続爪形文を施し、その下部には横位と斜位の沈線文を付ける。

第4節 I区縄文時代の遺構と遺物



第43図 1区 遺構出土遺物 1

30は胸部でL Rの結節縄文を付けている。

31はII類の打製石斧である。厚手の砂岩を素材としている。基部から刃部への広がりは小さい。刃部は中央部が尖る。表面に比較的大きな剥離を施して作り出している。裏面は剥離が刃部以外にほとんど見られない。

32から35はI類の磨石である。側面にも磨面が見られるものが多い。36と37はI類、38~42はII類の石皿である。

ウ S K16 (第44図43・44 図版13)

縄文を施した土器が2点出土した。43は口縁部、44は底部の小片である。

エ S K28 (第44図45 図版13)

隆帯を横位に貼り付け、上部に圧痕を施す。I群2類bの入海I・II式土器の可能性がある。

オ S K46 (第44図46 図版13)

波状口縁に沿って幅約6mmの粘土紐を貼り付けた口縁部の破片である。この土器はII群2類d種の十三菩提式土器である。

カ S K42 (第44図47 図版13)

R Lの縄文を施した胸部の破片で、前期末の土器の可能性がある。

キ S K44 (第44図48 図版13)

粘土紐を貼り付け、半截竹管状工具による連続爪形文を施している。前期末の土器の可能性がある。

ク S K26 (第48図49・50 図版13)

49はR Lの縄文を施す土器の口縁部で、時期は前期末の可能性がある。50の文様は風化により不明である。

ケ S K86出土遺物 (第44図52)

I類の磨石である。

コ S K62 (第44図51 図版13)

縦位に粘土を2本貼り付け、そのうち1本には連続爪形文を施している。前期末の可能性がある。

サ S K51 (第44図53)

II類の磨石である。

シ S P139 (第45図55 図版13)

I群1類hの野鳥式土器が出土している。縦位、横位、斜位に沈線文を施す。

ス S P166 (第45図54 図版13)

無文の土器で、表裏ともに擦痕が見られる。胎土に纖維を含んでいることから、早期後半の土器と考えられる。

セ S P86出土遺物 (第45図57)

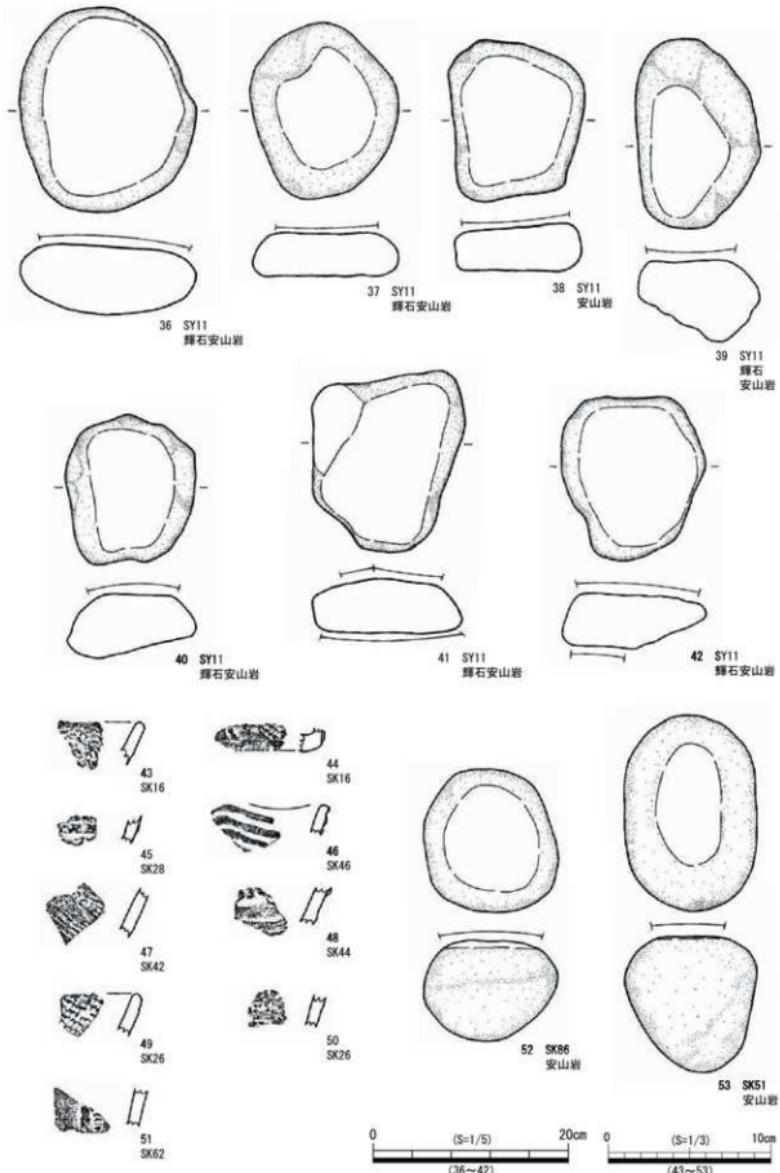
I類の磨石である。

ソ S X4出土遺物 (第45図58~第46図71 図版13)

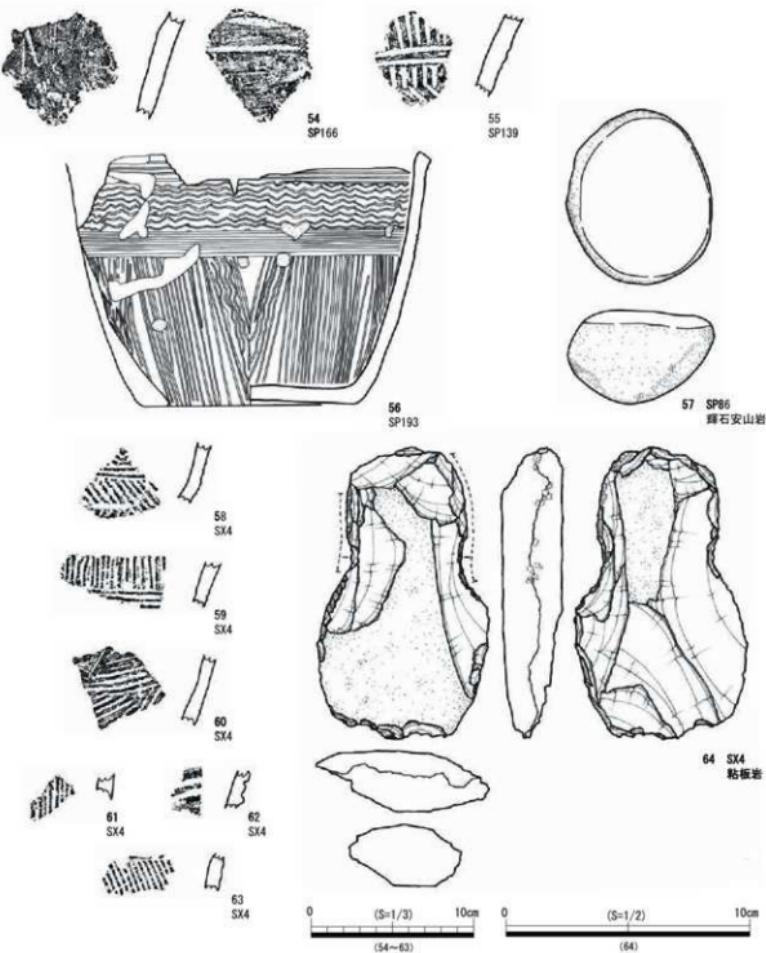
58・59・61・63は五領ヶ台式土器で、平行沈線を施すIII群1類aの土器である。60は沈線が横位と斜位に施されている。62は横位に沈線が2条施された土器片である。

64はIII類の打製石斧である。扁平な橢円碟を素材としている。両側縁に括れがあり、刃部が基部より幅広となる。刃部は直線的である。

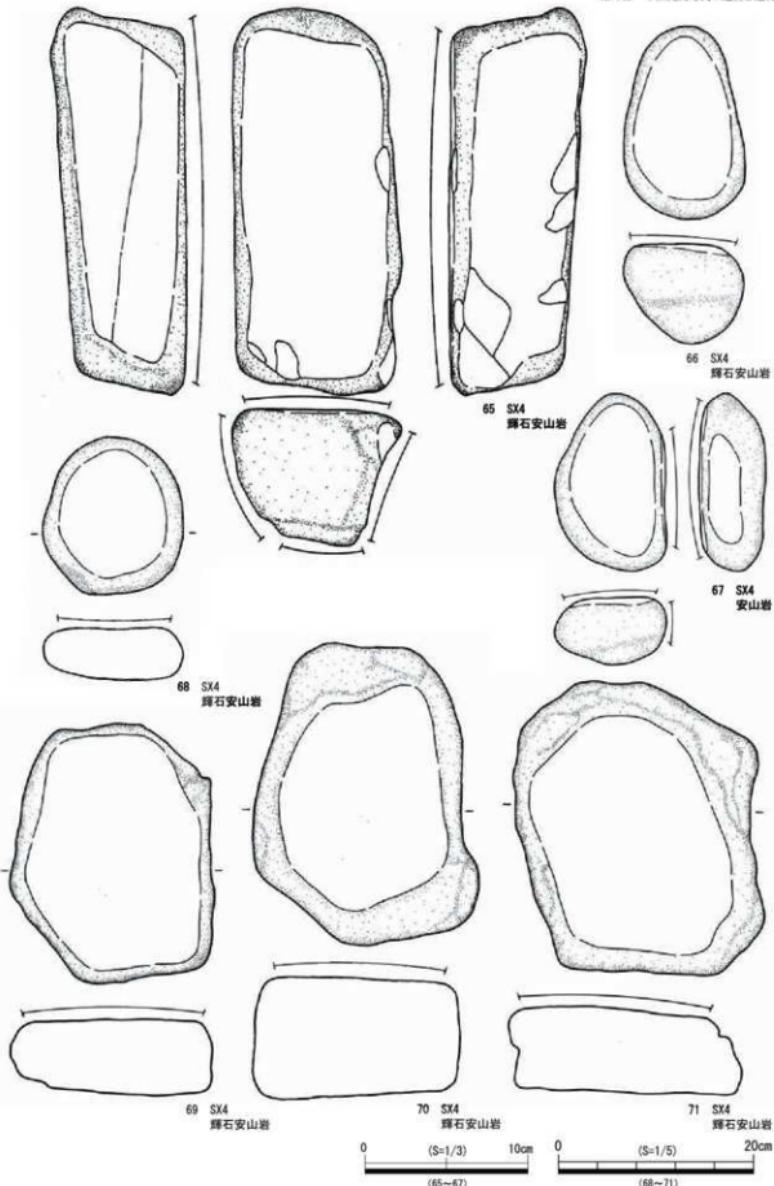
66と67はI類の磨石である。65はIII類の磨石である。四角柱の碟の長辺4方向に磨面がある。68は小型のI類の石皿、69~71はII類の石皿である。



第44図 1区 遺構出土遺物2



第45図 1区 遺構出土遺物3



第46図 1区 遺構出土遺物4

タ 埋甕 (S P193) (第45図56 図版13)

III群1類a、五領ヶ台式の鉢56が口縁部を欠いて出土している。口縁部は、横位区画内に密接蒲鉾状平行沈線を施し、横位区画の下には縦位の密接蒲鉾状平行沈線で縦位区画を施す。縦位区画内には三角形状に蒲鉾状沈線を施し、その内部にはさらに波状沈線を施している。(岩崎・西田)

(2) 包含層出土土器 (第14表)

富士岡1古墳群1区では、早期～後期にかけての縄文土器が出土した。出土した土器・土製品のうち、198点を図化した。出土層位は第5層栗色土層～第6層休場相当層にかけてである。特に前期から中期の土器が多く出土した。

I群1類c (第47図73～75 図版13)

回転押型文を施す土器を本類とした。73～75は山型文を縦位密接施文する。73の胎土は「軽しょう」な胎土(註)に類似する。

I群1類h (第47図76～99 図版13)

胎土に纖維があり、口縁部から胴部上半に沈線を施す土器で、主に三角形といった幾何学文様を施文する野島式土器を当類とした。施文方法からさらに2分した。

ア 沈線により文様を施すもの

斜位沈線をはさんだ矢羽根状とも言える、「ハの字」状に施すものは79・81・83～85である。さらにこの中で、縦位の区画内に「ハの字」状の沈線を充填するものは83～85・97である。

縦位と斜位区画内に沈線を充填するものは86・95である。

斜位沈線を三角形状に区画し、その中に短沈線を施すものは91・93・94である。

縦位・横位区画内に短沈線を縦位・斜位に施す土器は90・92である。90は口唇部に沈線を付けており、斜位の沈線部分には段を作出している。99は斜位に沈線を引いた後、幅の広い指頭状工具で縦位と弧状に擦り消した太い沈線を施している。

77・96・97はいずれも縦位と斜位沈線を組み合わせて文様を構成している。82は方向の異なる斜位沈線を上下に施し、79と類似した文様をもつものと思われる。

沈線により縦位・斜位に文様を施すものは80・88・98の3点を図示した。80は口唇部に半截竹管状工具により刻目を付け、口縁部は沈線を縦位とX字状に施している。98は縦位の沈線を引いた後、斜位の沈線を施す。

イ 指頭による沈線区画内に沈線を施すもの

指頭による沈線で区画した中に沈線で文様を付けるのは76・87・89である。指頭で縦位に区画し、逆ハの字など斜位の沈線を付ける。78は口唇部に刻目を付け、斜位沈線を引き、それを指頭状のもので弧状に擦り消することで、文様をなしている。

I群1類i (第47図100～102 図版13)

3点図示した。纖維を含む厚手の土器で、沈線区画内に文様を充填するという点ではI群1類h土器に類似するが、刺突に近い押引を充填する点が異なる。

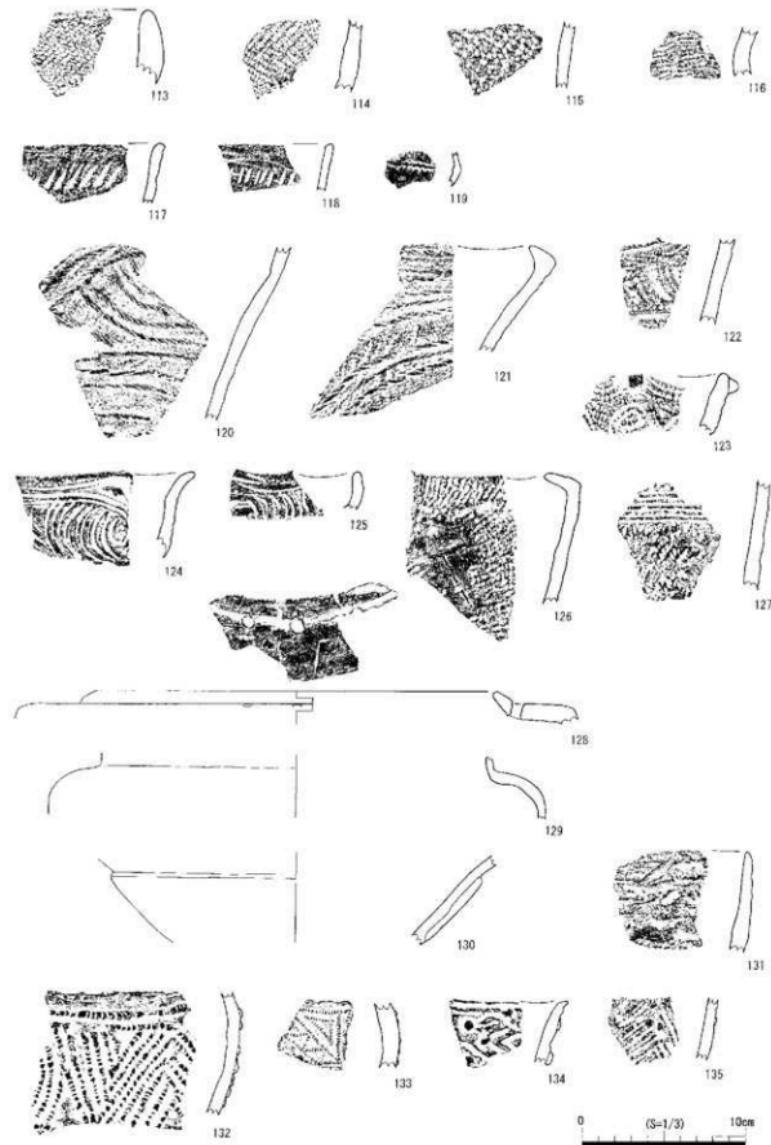
100・101は同一個体と考えられる。口唇部には刻目を施し、外面は斜位の三角状の幾何学的な沈線区画内に半截竹管状工具によって、押引状に刺突を施し充填している。102は小片で文様構成がわからないものの、I群1類iの可能性のある土器として図示している。内面は横位に擦痕が付き、半截竹管状工具で矢羽根状に太い沈線を施している。

I群2類i (第47図103)

早期末から前期初頭と考えられる土器で、型式が不明なものである。103は纖維を含む厚手土器で、羽状縄文を施文している。



第47図 1区 包含層出土土器1



第48図 1区 包含層出土土器2

II群1類f (第47図104 図版14)

ニツ木式から関山I式併行の土器1点を図示した。104はループ文を施し、その上から半截竹管状工具で横位沈線を付けている。

II群1類b (第47図105~108 図版14)

105・106・108は口縁部を欠くが木島V式と思われる。薄手で内面に指頭痕を施した土器で、表面に半截竹管状工具や櫛歯状工具で斜位沈線を付けるものである。107は摘み痕を横位に付けている。外面には竹管状工具で斜格子状の細い沈線が施される。

II群1類c (第47図109・110 図版14)

109は無文の土器であり波状口縁で、口縁部と胴部の間に折返し状に粘土紐帯を貼り付けることにより段を設けている。中越式系土器の可能性もある。110は半截竹管状工具により口縁部に沿って刺突文を付けている。木島IX式土器である。

II群1類e (第47図111・112 図版14)

111は口縁部を欠いている土器で、横位に長さ4mm程の爪痕を施している。直径3mmほどの補修孔が付けられている。112は木端状工具で連続刺突文を施している。

II群1類g (第48図113~116 図版14)

関山II式で、纖維を含み縄文を施す土器である。113は器壁が厚く、組紐風の縄文が施される。114は多条のLRとRLの羽状縄文、115・116はLRの縄文を施している。

II群1類i (第48図117・118 図版14)

薄手の土器の口縁部に沿って、斜位の沈線を施す土器であり、117・118の2点を図示した。

II群1類j (第48図119 図版14)

119は清水ノ上II式の可能性がある土器である。器厚が5mmの薄手の土器で、外面には貝殻腹縁文を横位に施している。

II群2類a (第48図120~130)

諸磯b式で、浮線文を施すものは120~122である。縄文を施し、口縁部がくの字形に内反するのは126である。

縄文の地文に半截竹管状工具により沈線を施すものは、123~125・127である。渦巻状沈線を付けるものは、123・124である。123は波状口縁で、波頂部に円形突起を貼り付けている。124は口縁部が外反する。125は弧状沈線を施す。127は平行沈線を施す。

128~130は無文土器である。128是有孔浅鉢形土器である。129は口縁部が立ち上がる。130も口縁部を欠くが、同じく浅鉢形をなす。

II群2類b (第48図131)

北陸地方の規ヶ森式に類似する土器である。131は口縁部のみの出土で、外面は工具や指頭で調整痕が付けられている。

II群2類c (第48図132~135 図版15)

諸磯c式で、結節浮線文と円形貼付文を施しており、4点図示した。結節浮線文を貼り付け、文様を構成する132・133と、沈線と円形貼付文を施す134・135に分かれる。132は粘土紐を鋸歯状や弧状に貼り付け、結節浮線文を施している。134は口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を横位に施し、その下部には矢羽根状沈線を付け、円形貼付文を施す。

II群2類d (第49図136~第50図167・第52図233 図版14)

前期末の十三菩提式である。1区の縄文土器で、五領ヶ台式とともに出土量が多かった。文様・器形・胎土から複数の系統に分かれることが考えられる。このため、口縁部の文様や形から分類して報告する。

ア 口縁部に三角印刻および刺突を施す土器

口縁部に三角印刻文を施すのは136・137・139・140・141・144・149・150・152～155である。136・137・145・139は耳朶状の添付文が付く。136・141・145は刺突が施されている。

140は三角印刻文の下部にR Lの縄文を施す。144は波状口縁の口唇部に玉抱三叉状に印刻文を付けている。口縁に沿って細かい三角印刻文を付け、円形の突起の中心に円形刺突を施す。

149・153は口唇部に粘土紐を貼り付け、凹凸のある口唇部を作出している。150・154・155は三角印刻文と半截竹管状工具による沈線を横位および斜位に施す。

イ 口縁部が筒形波状を呈する土器

167は富山県真脇遺跡の真脇式土器である。この土器は、口縁部を筒形波状に作っている点が特徴的である。筒形部分は長径53mm、短径28mmの梢円形をなしている。内面にはR L縄文の地文に粘土紐を貼り付け、結節浮線文を施す。外面も同じ様に同心円状や三角形に粘土紐を貼り付け、結節浮線文を施す。三角形に貼り付けた部分は削り抜いて、三角印刻文を作出している。148も同じく筒形波状口縁で連続爪形文が施されている。

ウ 口唇部に連続爪形文を施す土器

138は波状口縁の突起状の波頂部である。ソーメン状の粘土紐を縱位に貼り付ける。142は突起の付いた波状口縁の波頂部である。三角形に結節浮線文を貼り付ける。147は外面に半截竹管状工具による沈線を縱位に施し、内面には沈線とソーメン状の粘土紐で、格子状の文様を作出している。156はソーメン状の粘土紐で格子状の文様を作出し、その下部には沈線を施文している。

エ 結節浮線文を施す土器

142は波状口縁であり、三角形に隆帯・結節浮線文を貼り付けている。

オ その他

143は無文で口唇部を指頭でつまんで、小波状の突起を作出した土器である。146は平縁で隆帯により文様を作出している。

カ 胴部・底部

胴部の157～163、底部の164～166を分類した。

157～163は胴部である。157は半截竹管状工具による密接蒲鉾状平行沈線をY字状とU字状に施文し、印刻を施す。158・159・162は縄文の地文に結節浮線文を施す。160は半截竹管状工具によって刻みを施す。163は小波状の蒲鉾状平行沈線を引き、その下部に斜位沈線を施す。165は底部にかけて地文縄文、浮線文、三角印刻文などが付く。底面付近がわずかに屈曲して胴部へ続くことが特徴的である。

II群2類e（第50図168～170 図版15）

東北地方を中心に分布する大木6式に併行する厚手の土器であり、3個体出土した。

168の口唇部は粘土紐を貼り付け、凹凸を有する。半截竹管状工具で「くの字」状の沈線を施文し、円形の印刻文を施している。折り返し部の境目の屈曲部分には、横位沈線を引く。169・170は、「くの字」状の沈線内に三角印刻文を施文している。

II群2類f（第50図171・172 図版15）

2点図示した。北白川III式土器である。171・172は粘土紐を横位に貼り付け、半截竹管状工具により刻目を施す。

II群2類g（第50図173～180 図版15）

173～180は西日本を中心に分布する大歳山式土器であり、8点を図示した。薄手で胎土は固く精緻で、結節浮線文の断面が三角形である事から、文様も非常にシャープに施文されているのが特徴的である。173は口唇部に2本の隆帯を施し、小波状の口唇部で断面Σ字状の刺突を施す。内面にはR L縄文を施



第49図 1区 包含層出土土器3

す。外面は同じくR L縄文を地文とし、貼り付けた粘土紐上には刺突を施す。その下部には円形に貼り付けた粘土紐を結節浮線文としている。174～176・178は口縁部である。176は波状口縁の頂部で、粘土を内面へ折り返す事により、楕円形の孔を作出している。外面は地文にR L縄文、縦位に貼り付けた粘土紐には結節浮線文を施す。177～180は胴部である。いずれも地文に縄文を施し、粘土紐を貼り付ける。177・178は結節浮線文を施し、180には縄文が施される。

II群2類h（第50図181～184 図版15）

大歳山式に併行する土器である。大歳山式としたものは、胎土が精緻で固く焼きしめられ薄手なのに對し、II群2類hはそれに類似するが、比較的厚手で胎土の粒子も粗く、結節浮線文の断面が蒲鉾形で、文様が粗雑なものとしている。4点を図示した。181は口唇部につまみを施し、口縁部に沿って刻みを施す。182は口唇部の内面側にはヘラ状工具で刻みを入れ、口唇部に沿って外面には隆帯を貼り付け、刻みを入れている。内面には段を作出する。183は口唇部に連続爪形文を施す。折返し口縁で、その下部には横位に沈線が施される。184は口唇部に刺突がなされ、内面に縄文を1条付け外面にも縄文を施している。

III群1類a（第50図185～第52図232・234～245 カラー図版4・図版15・16）

半截竹管状工具による集合沈線を施した土器で中期初頭に位置付けられる、五領ヶ台式土器を本群とした。

口縁部に蒲鉾状沈線を横位区画し、区画内に文様を充填し、胴部には同じく蒲鉾状沈線を施すものや、縄文の地文と結節縄文を施す土器とそれの底部と考えられるものが多く出土した。

185は小型鉢である。口唇部に刻目を付け、口唇部と底部に横位沈線を付ける。その間に縦位沈線を付けている。

186・187・191・192・197・200は口縁部に半截竹管状工具により、横位区画内に波状沈線文様を施す土器である。188・193・194・205は口縁部の横位区画内に格子目状沈線を施す。

196・201・206・207・208・210・238は横位区画内に矢羽根状の沈線を施す。

211～214は胴部片で、結節縄文を縦位に回転し、施文する。

223～231は同一個体である。幅3～4mmの細い蒲鉾状平行沈線を斜位や弧状に区画している。区画内を縦位沈線および円形印刻文、三角印刻文、三叉状の印刻文を充填する。

239は波状口縁で、口唇部から4.5cm下が無文部となり屈曲している。その下部には、R L縄文を施した後、工具で三角状の沈線を引き、文様を作出している。

245は顔面把手付土器の把手部である。顔面部分は土器の内側を向いていたものと考えられる。

顔面部は長さ5.5cm、幅5.5cm、奥行き5.9cmである。粘土紐をあらかじめ積み上げた生地の上部に高さ5mm、幅12mmの粘土紐を半椭円形状に貼り、その中に厚さ3mmの粘土板を付け、この上に幅11mmの粘土紐で眉・鼻部分を作出する。両目は三叉状に切り込みを入れ作出し、鼻部分は5mm程度に刺突をしている。顔の輪郭と眉部分は半截竹管状工具により連続爪形文を施す。頭部を眉部分に切れ込みを入れる様に額部分には三叉文を両端に施している。頭頂部はドーナツ状に粘土帶を貼り付け、R L縄文を施している。その内側には、空洞が作られ、円錐状である。後頭部に当たる部分は、横位の粘土紐を貼り付け、半截竹管状工具で連続刺突文を付ける。さらにその下部にはR L縄文を地文として施し、三角刻目文、三叉文を施している。その上から粘土紐を椭円形に貼り付け、同じく連続爪形文を付ける。

215～222、241～244はIII群1類a土器の底部と考えられるものを集めた。

III群1類c（第52図246～249 図版16）

主に近畿地方を中心として分布する、鷹島式土器の可能性がある土器をまとめた。色調が白色～橙色を帯びる薄手の土器である。246は縦位に多条縄文を施文した後、二枚貝の貝殻を押捺圧痕している。247

はR L縄文を地文とし、円形に貼り付けた粘土に半截竹管状工具で連続爪形文を付ける。また、渦巻状の文様と綴位沈線を付けている。他の個体と比べ胎土の粒子が粗く、焼成も異なる。248は地文にR Lの縄文を施し、薄い隆带上に工具で円形刺突を施し、文様を作出している。249は多条縄文を施す胸部片である。

III群1類d（第52図250～252 図版16）

中期の東海系の土器である。3点図示した。

250・251は同一個体の可能性がある口縁部である。波状口縁で、外面はR L縄文の地文を施し、三角印刻文を付ける。三角印刻文を挟んだ上部と下部には半截竹管状工具で連続爪形文を施す。

252は横位に貼り付けた粘土紐に半截竹管状工具で連続爪形文を付ける。連続爪形文の下部は蒲鉾状の平行沈線を横位に施し区画している。

III群2類d（第52図253 図版16）

図化できたものは1点のみであった。小片であるが、253はIII群2類dの可能性がある。文様は粘土紐を付け、刺突と縄文を施す。

III群3類c（第52図254～256 図版16）

3点を図示した。254～256は全て同一個体であると考えられる。幅8m程の太い沈線を施し、周辺に工具で横位に数段刺突を施している。中期後葉の土器である。

III群3類e（第52図257～258 図版16）

257・258は同一個体の口縁部付近の把手の一部で、双環状であることが特徴である。中期後葉に比定される。

III群3類f（第52図259～260 図版16）

259・260は沈線区画内に縄文を充填する土器である。259はR L縄文を施している。

IV群b（第53図261～266 図版16）

鉢261と、特殊な原体で施文する土器262～266を本類とした。261は口縁部に沿って隆帯を貼り付け、ナデを施し隆帯と体部の境目を平らにした後、上から横位の沈線を引いている。262～264は太めのR縄文に細いL縄文を卷いた縄文を回転施文している。265はR縄文にLを巻き付けて回転施文している。266はR縄文にLを巻き付け回転施文している。

型式不明の土器（第53図267～268）

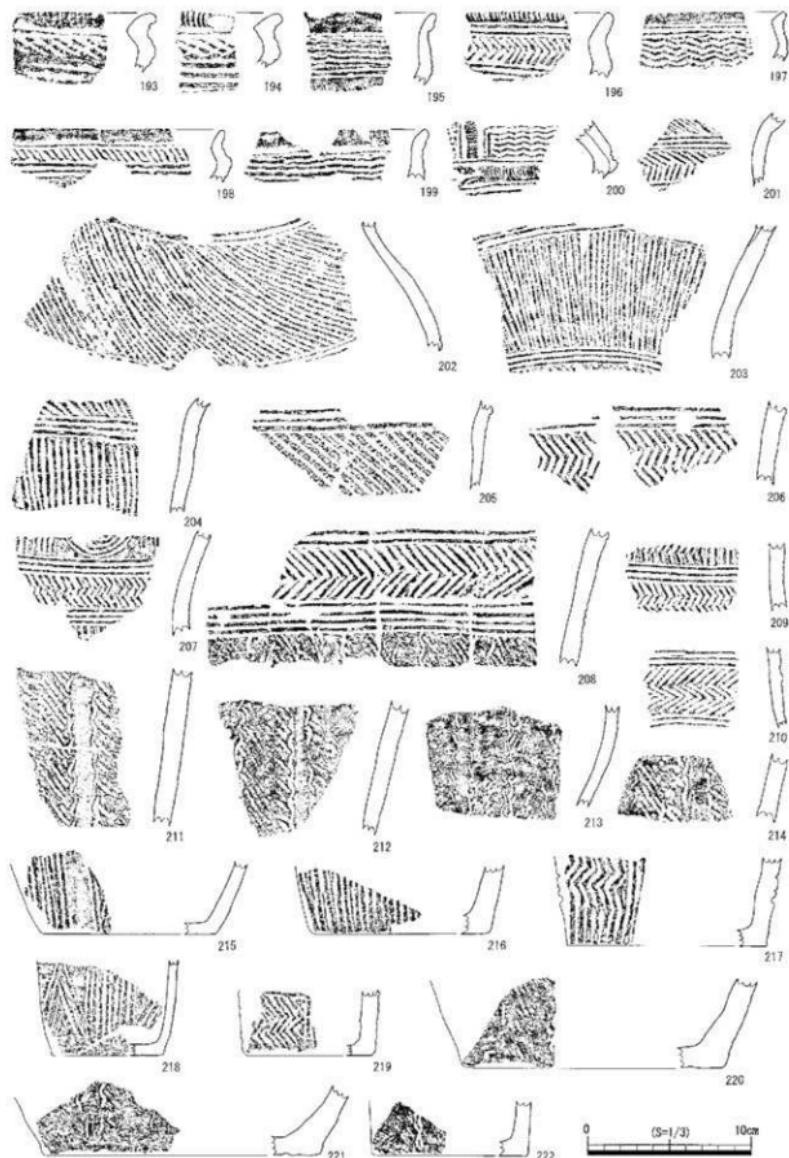
267・268は型式不明の底部である。267は木葉痕の他に敷物状の圧痕が付いている。268は底面に木葉痕が付いている。

土製品（第53図269～271・第15表 図版16）

土製円板を3点図示した。全てIII群1類aと考えられる土器片を利用しており、それぞれ断面に擦痕が確認できる。（西田）



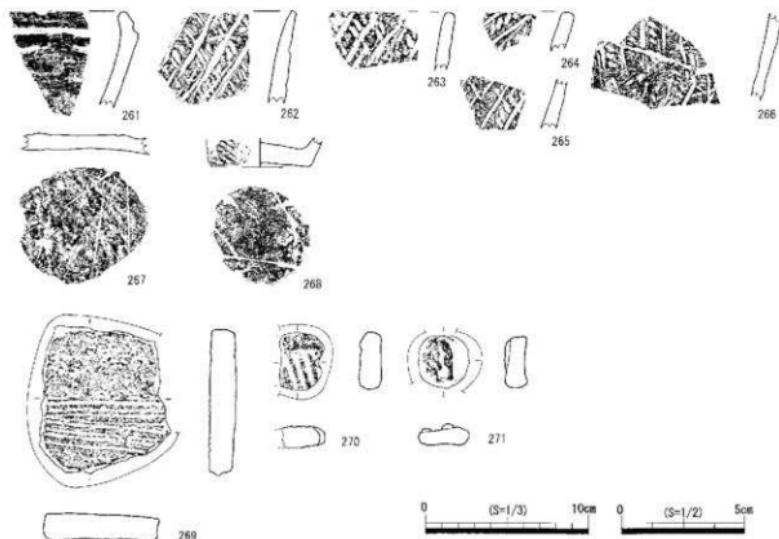
第50図 1区 包含層出土土器4



第51図 1区 包含層出土土器5



第52図 1区 包含層出土土器6



第53図 1区 包含層出土土器7

(3) 包含層出土石器（第16表）

石鎚（第54図272～291 図版17）

272はI類である。平面形が横長である。素材剥離面を残し、裏面側縁部に未加工の部分が見られるところから、未製品である可能性がある。

273と274はII A 1類である。273は小型の製品である。274は脚部に平坦面を有するいわゆる鉗形鎚である。基部に逆U字状の抉りを入れている。275から279はII A 2類である。275は下半部に最大幅を有し、幅が長さを凌駕する。基部は最大幅をはかる位置よりも深く抉っている。276は下半部が外弯する。277は上半部が外弯する。278と279は上半部が内弯し、下半部が外弯する。279は基部の抉りも深く、細長い脚部を有する。

280と281はII B 1類である。形状はともに長辺の長い二等辺三角形を呈する。282と283はII B 2類である。ともに下半部に最大幅を有する。282の基部の抉りは非常に浅く、右半部の基部は平基に近い形状を呈する。284から287はII B 3類である。285と286は厚手の剥片を用いている。287はホルンフェルスの横長剥片を用いている。裏面の加工が基部の周縁剥離以外ほとんど見られず、素材剥離面を残していることから、未製品である可能性がある。

288はIII類である。厚手の剥片を用いている。

290はIV類である。上半部に最大幅を有するいわゆる五角形鎚である。石材は珪質頁岩を使用している。291は未製品である。

石匙（第55図292～第56図300 図版17）

292から295は比較的対称的な平面形態を呈する横型の石匙である。294と295はともに右辺が切断されているが、素材剥片の形状とつまみの位置から鑑みて、対称的なものとして取り扱う。296と297はつまみの位置がやや片寄る横型の石匙である。298と299は左右非対称の横型の石匙である。石材は295が砂岩、296がチャート、その他のものはすべてホルンフェルスである。チャート製の296は表裏面とも精緻な加工を施しているが、これ以外の石材を使用したものは少ない加工で製品を作り出している。

300は縱型の石匙である。つまみの位置はやや左に片寄る。つまみは両面から剥離を加えて作り出し、刃部は右側縁が表面に、左側縁が裏面に剥離を加えている。

石錐（第56図301～308 図版17）

301と302は三角形の基部に細長い尖頭部が付く。301は薄い剥片を用い、表面は全周、裏面は部分的に大きな剥離を加えて尖頭部を作成している。302は風化が著しい。表面は両側縁、裏面は基部と両側縁に剥離を加えて尖頭部を作成していると考えられる。303から305は基部に抉りが入り、T字またはY字状の形状を呈する。303と304は大きな剥離を加えて整形している。305は基部の抉りが浅く、尖頭部の先端を磨いている。306は棒状に近い二等辺三角形を呈する。表面は全周、裏面は部分的に剥離を加えて整形している。307の形状は不規則な五角形を呈する。最も鋭角的な角を尖頭部の先端とし、裏面の側縁部に剥離を施して整形している。308の形状は二等辺三角形を呈する。全体に剥離を加えて整形している。

スクレイパー（第57図309～第58図314 図版18）

309は逆台形の形状を呈するサイドスクレイパーである。横長剥片の両側縁を切断し、左側縁に連続した平坦剥離を両面に加えて刃部を作り出している。310の形状は半円形を呈する。横長剥片の左半部を切断し、右側縁に表面は連続的に、裏面は部分的に剥離を加えて刃部を作り出している。311の形状は橢円形を呈する。横長剥片の打面を左に置き、表面の外縁部に平坦剥離を加えて刃部を作り出している。312は細長い剥片を素材としている。両面に断続的な平坦剥離を加えて刃部を作り出している。313と314は横長剥片の打面を上に置き、剥片の端部を刃部としている。313は外縁部右側に表面側から急角度の剥離を加えている。314は表面が外縁部全体、裏面は部分的に剥離を加えている。

打製石斧（第58図315～第60図324 図版18～20）

315はI類である。刃部は直線的で、右側縁に打痕が見られる。

316から321はII類で、刃部は弧状をなしている。316と317は刃部の開きが小さく、幅広のものである。316は薄い円碟の形状を生かし、左側縁から刃部にかけては、表面は細かく、裏面はやや大きめの周縁加工が施されている。317は表皮付き剥片に側縁部は両面から、刃部は表面から剥離を施している。318から321は長さが短く、刃部の開きが大きいものである。318は周縁の尖った円碟の形状を生かして刃部としている。319は素材剥片の銳利な縁辺をほぼそのまま刃部としている。320の刃部は表皮が残る表面は加工を施さず、裏面にのみ剥離を施している。321は小型の製品である。厚手の表皮付き剥片に右側縁と刃部は表面、基部と左側縁は裏面に剥離を施して作成されている。

322はIII類である。刃部は比較的直線的である。大型の表皮付き剥片の両側縁に大きめの剥離を施して括れを作り出している。

323と324はIV類である。ともに厚手の表皮付き剥片を素材とし、刃部は比較的直線的である。比較的大きめの剥離で基部を尖頭状に作り出している。

磨製石斧（第60図325・326 図版19・20）

325と326はともに断面がレンズ状となり、刃部は両刃である。325は乳棒状磨製石斧である。326は基部が破損している。

石核（第61図327～329 図版17）

いずれも3～4cm大の黒曜石の原石から、打面転移を繰り返して小型の剥片が剥離されている。

石錘（第61図330～337）

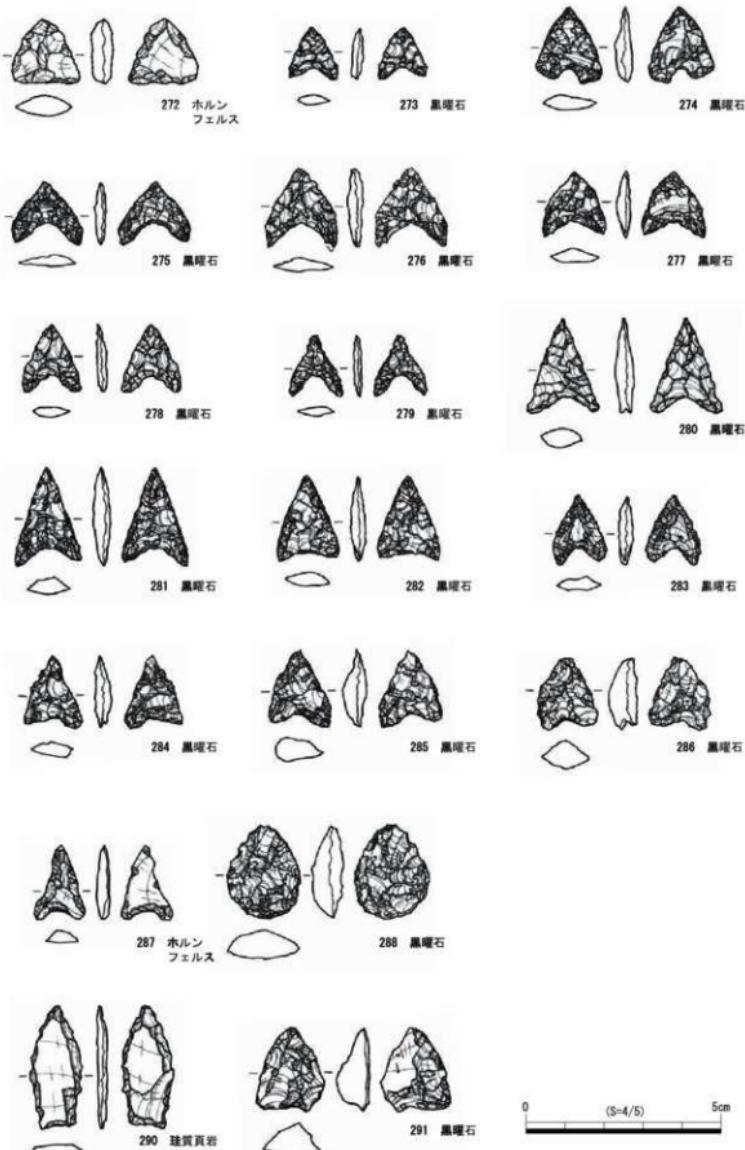
いずれも円碟の両端を打ち欠いて紐掛け部を設けている。

磨石・敲石・凹石・石皿（第62図338～第64図373）

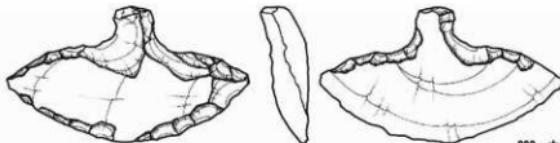
338から355はI類の磨石である。338から350は片面だけに磨面がある。351から355は両面に磨面がある。357と358はII類の磨石である。359から362はIV類の磨敲石である。いずれも敲打痕は少ない。359はI類の磨石の磨面に敲打痕がある。360は磨面の裏にも敲打痕がある。361はII類の磨石の側面に敲打痕がある。362は円盤状の碟の平坦面に敲打痕があり、側縁に近い部分に磨面がある。363と364はV類の敲石である。363は円盤状の碟の平坦面に、364は側縁に敲打痕がある。

365から369はI類の石皿である。365は磨りにより中央部が大きく凹んでいる。370から373はII類の石皿である。（岩崎）

（註）戸田哲也氏の御教示による。



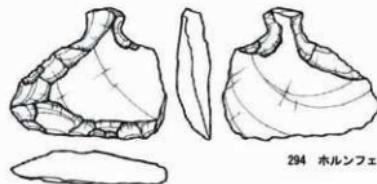
第54図 1区 包含層出土石器1



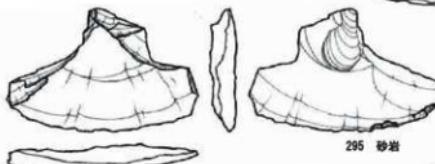
292 ホルンフェルス



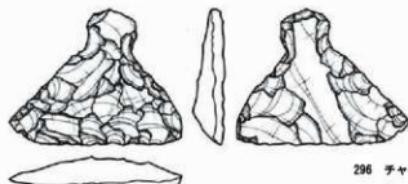
293 ホルン
フェルス



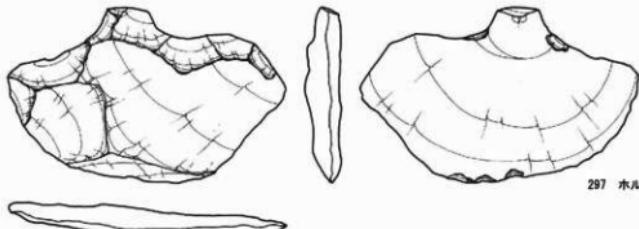
294 ホルンフェルス



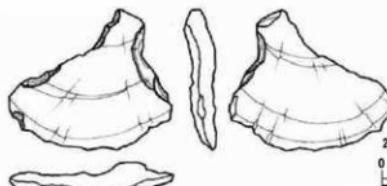
295 砂岩



296 チャート

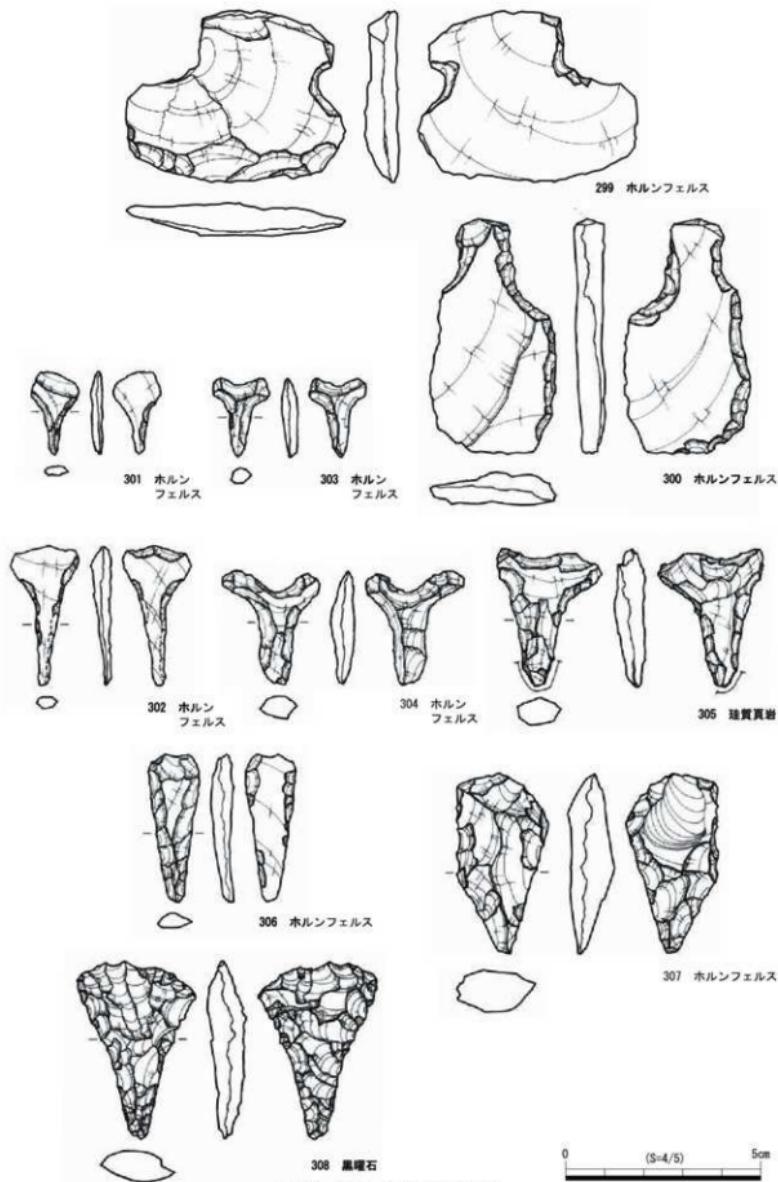


297 ホルンフェルス

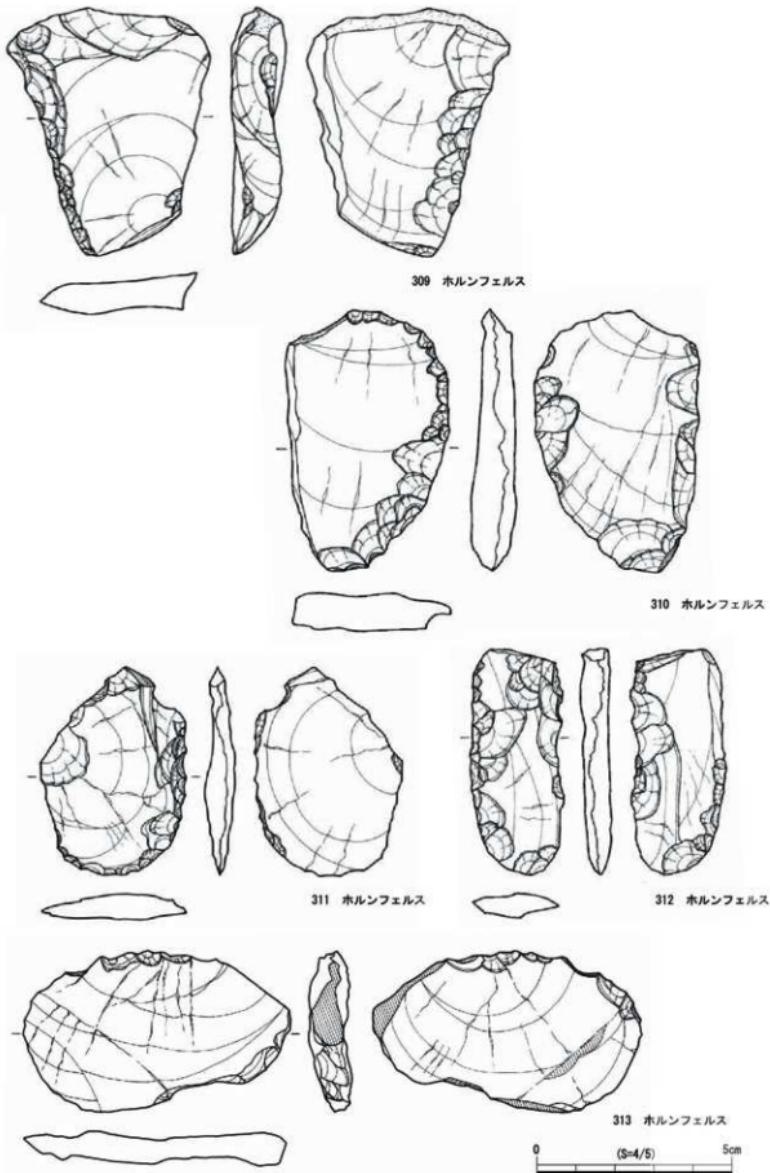


298 ホルンフェルス
0 (S=4/5) 5cm

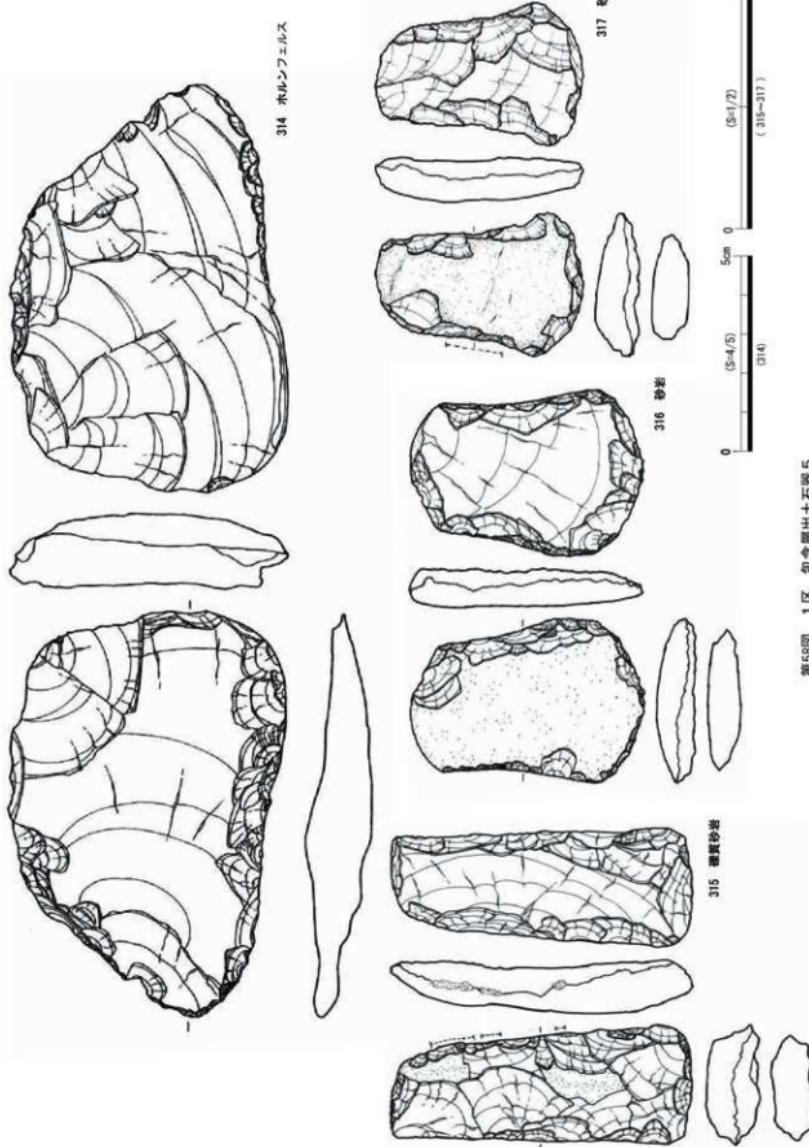
第55図 1区 包含層出土石器2



第56図 1区 包含層出土石器3



第57図 1区 包含層出土石器4





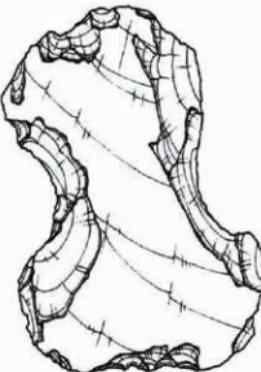
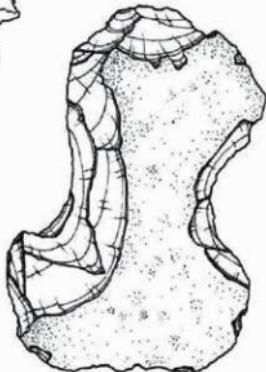
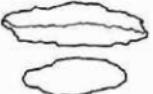
318 石器

319 ホルンフェルス



320 砂岩

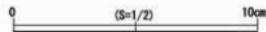
321 砂岩



322 砂質頁岩

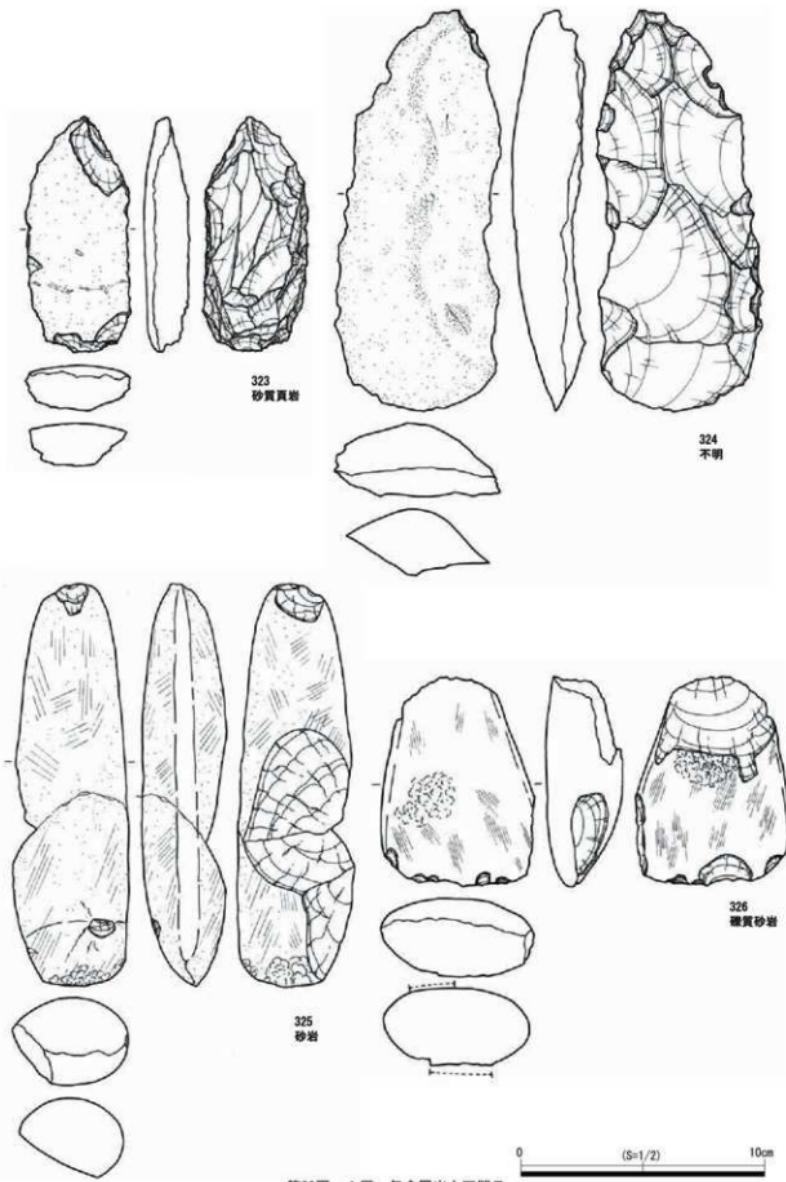


第59図 1区 包含層出土石器6

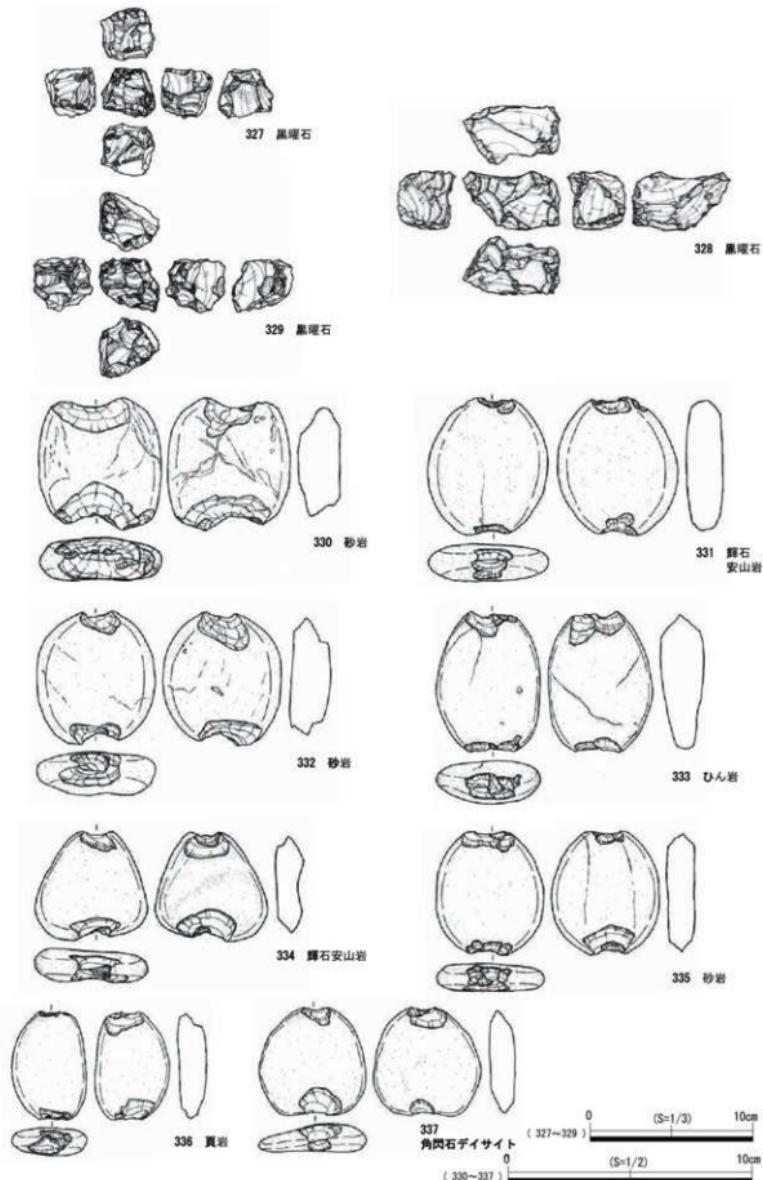


(S=1/2)

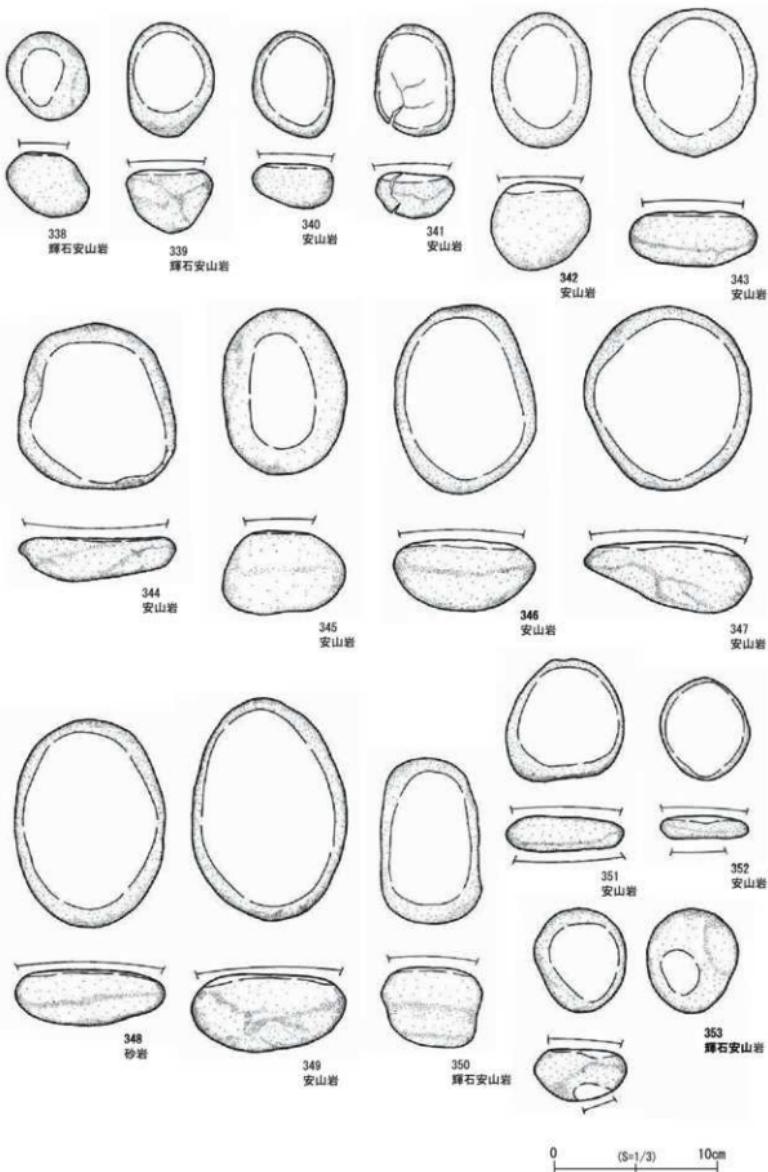
10cm



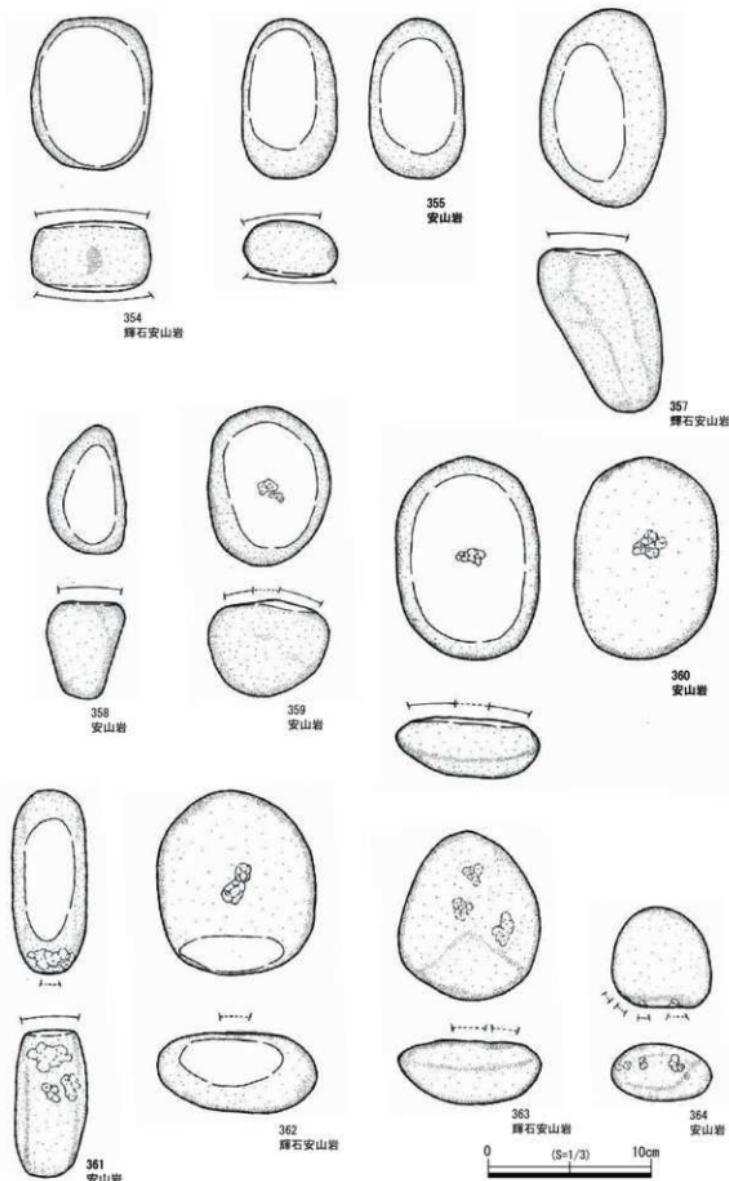
第60図 1区 包含層出土石器7



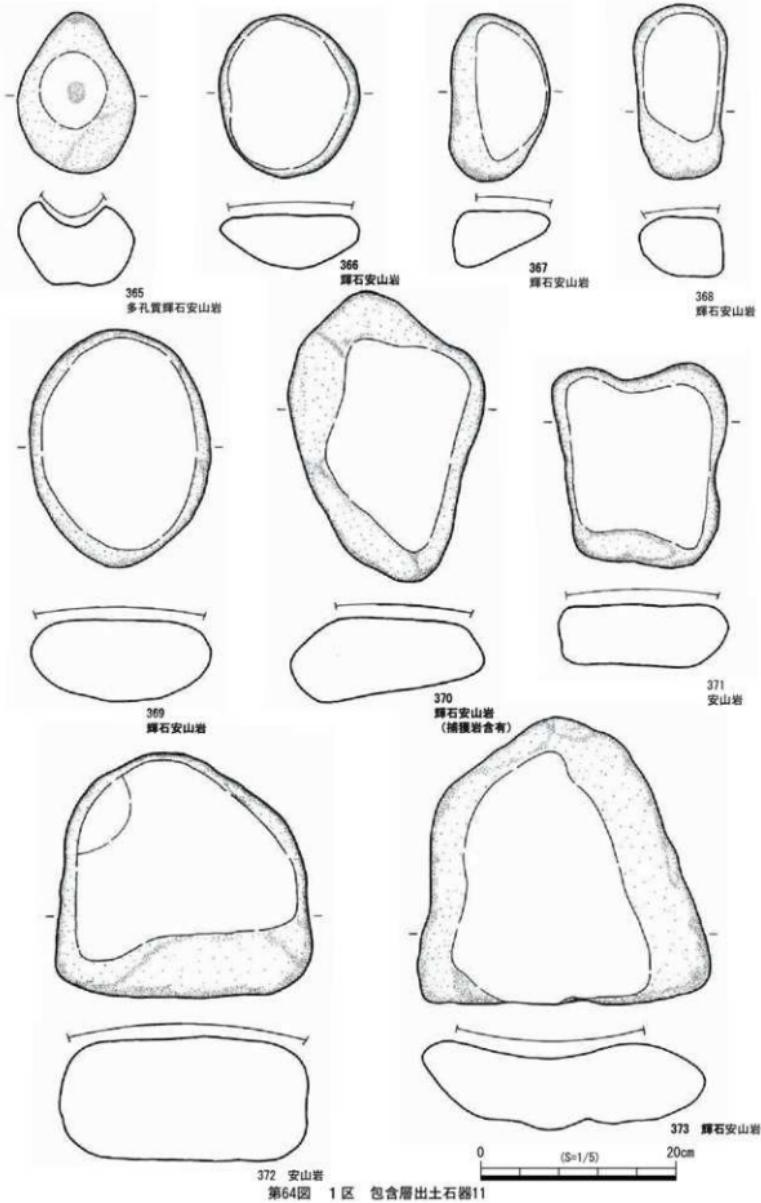
第61図 1区 包含層出土石器8



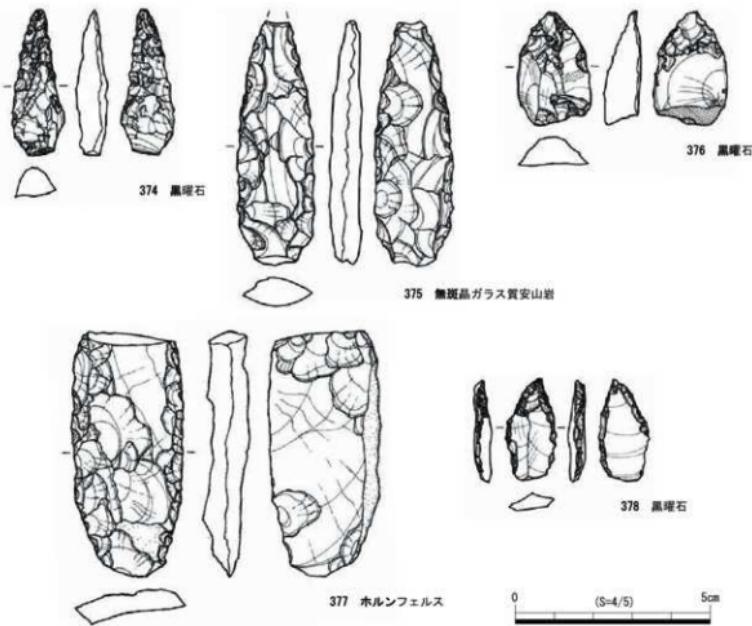
第62図 1区 包含層出土石器9



第63図 1区 包含層出土石器10



第64図 1区 包含層出土石器11



第65図 1区 包含層出土石器（旧石器）

第5節 1区旧石器時代の遺物

本遺跡で出土した旧石器時代の遺物は、第6層休場層より上位の遺物包含層で出土したものである。5点を図示した。

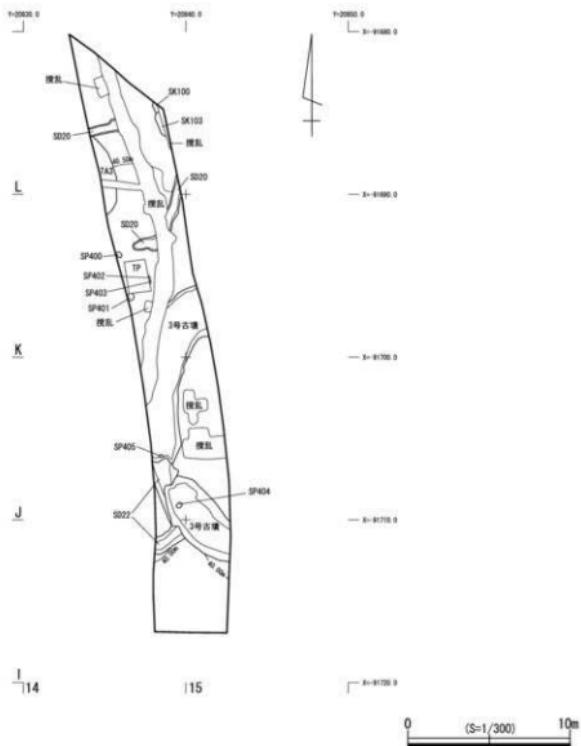
尖頭器（第65図374～377・第17表 図版20）

374は両面加工の尖頭器である。やや反りがある剥片素材の両面に剥離を加えて整形している。基部を欠損する。375は半両面加工の尖頭器である。横長の剥片を用い、表裏面の周縁を主体に剥離を加えて整形している。先端部と基部を欠損する。376は片面加工の尖頭器である。厚手の横長剥片を用いている。表面は先端部の加工は細かいが、側縁部の加工は粗い。裏面は先端部のみ平坦剥離を加えて整形している。先端部と基部を節理により欠損する。377は未製品である。表面に自然面を残していることから、石核から早い段階で得られた横長剥片を用いていると考えられる。表面のみ周縁を主体に剥離を加えて整形している。先端部を欠損する。

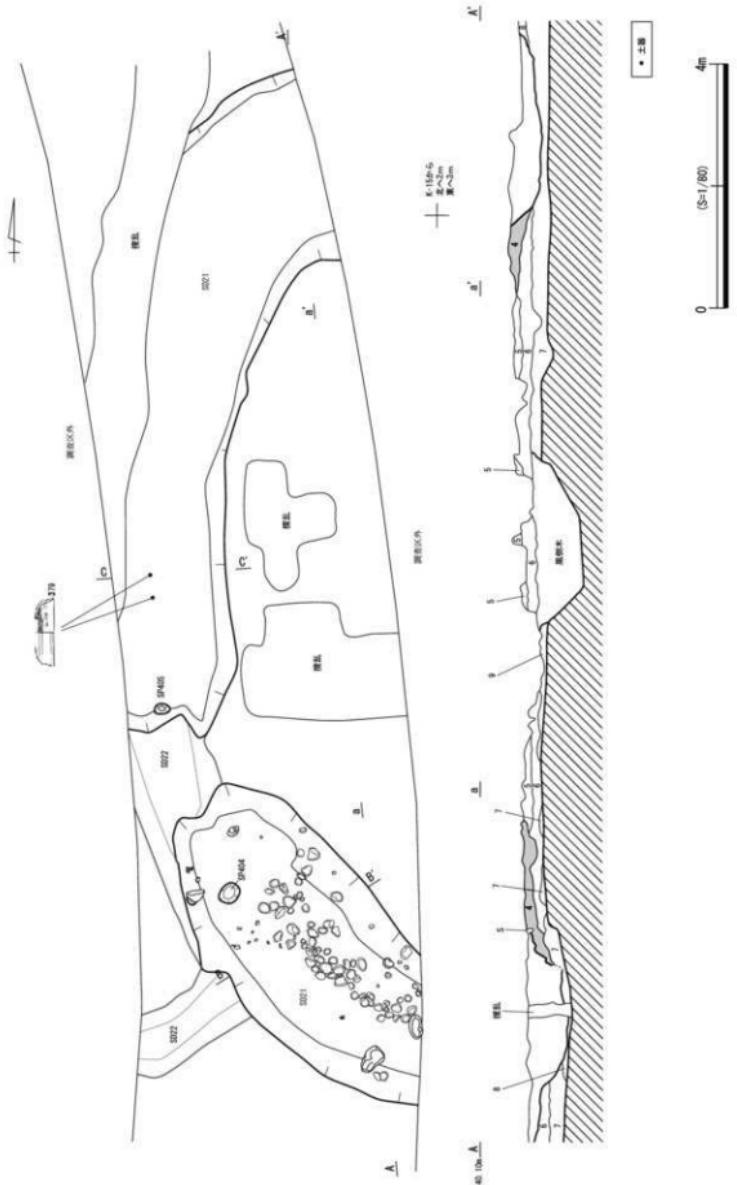
ナイフ形石器（第65図378・第17表 図版20）

378は二側縁加工のナイフ形石器である。縱長の剥片を用い、打面側を先端として、両側縁にプランディングを施している。基部には加工を施さず、素材剥片の端部の形状をそのまま利用している。（岩崎）

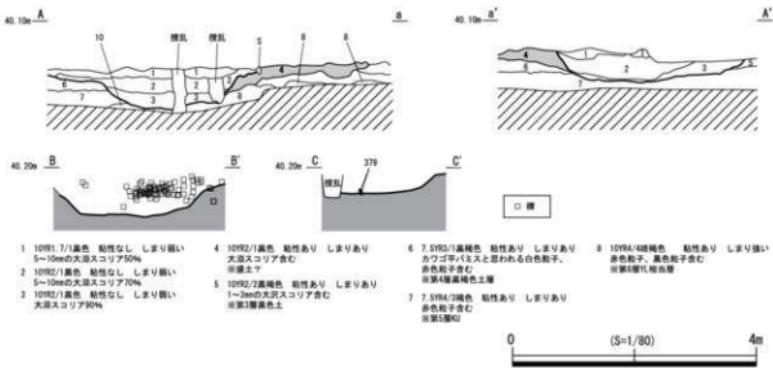
第6節 2区古墳時代の遺構と遺物



第66図 2区 第1追構面遺構配置 拡大図3



第67圖 3號古墳周溝1



第68図 3号古墳周溝2

1 古墳時代中期以降の遺構

古墳時代中期以降の遺構は古墳の周溝が1基、溝状遺構1基、小穴6基を検出した。

(1) 3号古墳周溝 S D21 (第67・68図・第18表)

I-15・J-14・K-15グリッド、調査区中央から南側にかけて検出し、周溝東側は調査区外である。周溝外側は17.1m、内側は11.4mで、平面形は1号・2号古墳周溝の様に半円形をなさず、半楕円形に近い。周溝の幅は最大3.2m、深さは最大0.6mで、断面形は底部に平坦面を持ち、緩やかに立ち上がっている。調査区は北から南にかけて緩斜面となって標高が下っているが、周溝も南側は北側に比べ深くなっている。南東側では極端に溝が浅くなり、途切れる部分が確認され、S D22を切っている。

溝が途切ることは、溝を構築する際にこの部分の底面を他の部分よりも浅く掘りこんだのか、または古墳の入口であった可能性が考えられる。しかし、周溝の内側は搅乱を受けており、墓坑の痕跡は確認されず、調査区壁面の東側土層でも痕跡は確認できなかった。

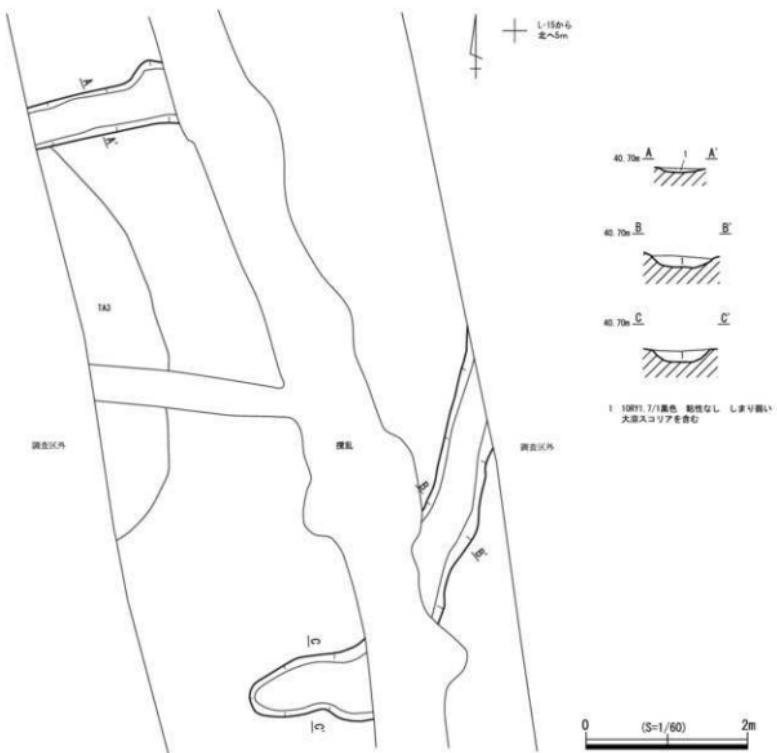
周溝の調査区東壁の土層堆積状況を確認した所、墳丘盛土と確実に言える土層堆積は削平されて確認できない。しかし、第4層に関しては、堆積している土に周溝を掘ったならば、土層が途切れた状態で検出されるはずであるが、周溝に沿うように土層が堆積していたため、盛土された土である可能性がある。

遺物は古墳時代後期の模倣灰が、西側周溝内の底面付近で出土した。南側の周溝内では多量の礫が出土した。20cmほどの礫が多くその中に人頭大の礫が混じって出土していた。古墳の石材が落ち込んだものと考えられる。また、南側の墳丘立ち上がり部分には拳大よりも少々大きい河原石が据えられていたことを、土層断面から確認した。

(2) 溝状遺構 S D20 (第69図・第20表)

調査区北側にて出土した。T A 3を切って構築されている。

本来は半円状に溝が巡っていたものが削平を受け、部分的に消失したものと考えられる。残存している断面は非常に浅く、皿状をなす。遺物は流れ込みの繩文土器片が少々出土したが、溝状遺構自体の年代を示す遺物は出土していない。遺構覆土の黒色土に大淵スコリーカを大量に含むことから3号古墳周溝時期が近いものと判断した。(西田)

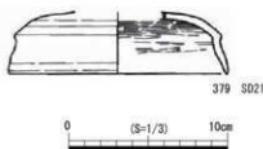


第69図 S D20

(3) 遺 物

3号古墳周溝 S D21出土遺物（第70図379・第23表 図版25）

379は須恵器を模倣した土師器の环蓋である。6世紀後半の時期のものと考えられる。(岩崎)



第70図 遺構出土遺物（古墳時代後期）

2 古墳時代前期の遺構

古墳時代前期の遺構は、竪穴状遺構1基、溝状遺構1基、土坑2基が検出された。

(1) 竪穴状遺構 TA 3 (第71図・第19表)

L-14グリッド北東に位置する。遺構の大半が調査区外であるため遺構の本来の平面形は不明である。遺物は覆土から流れ込みと考えられる縄文時代の遺物が出土したが、遺構本来の時期を示す遺物は出土しなかった。S D22と同じく、古墳時代前期の遺構である可能性が高い。

(2) 溝状遺構 SD 22 (第72図・第20表)

I-14・J-14グリッド、調査区南側にて検出した。東側を3号古墳周溝に切られている。

3号古墳周溝の南東側で溝が浅くなる部分があり、そこからSD22の第1層覆土が露出しており、南側で検出された溝と連結する、本来はL字状の溝であったと考えられる。溝の断面形は逆台形状である。

溝状遺構の角に当たる部分は古墳周溝構築時に削られたが、角付近の第1層の上層からは壺・甕・高坏といった土器が集中して出土した。

1区西側で5基の方形周溝墓が確認されている点と、それらの遺構覆土と類似する事、L字状になると考えられる部分から、遺物が集中して出土した状況から鑑みて、方形周溝墓である可能性がある。

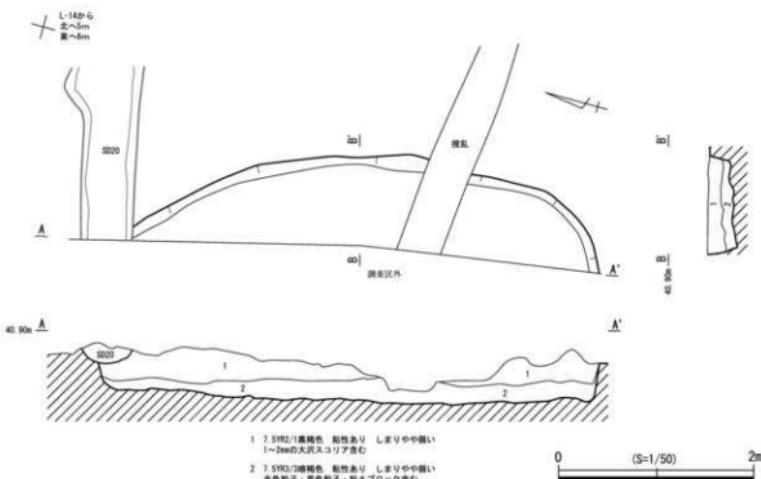
(3) 土坑 (第22表)

ア SK100 (第73図)

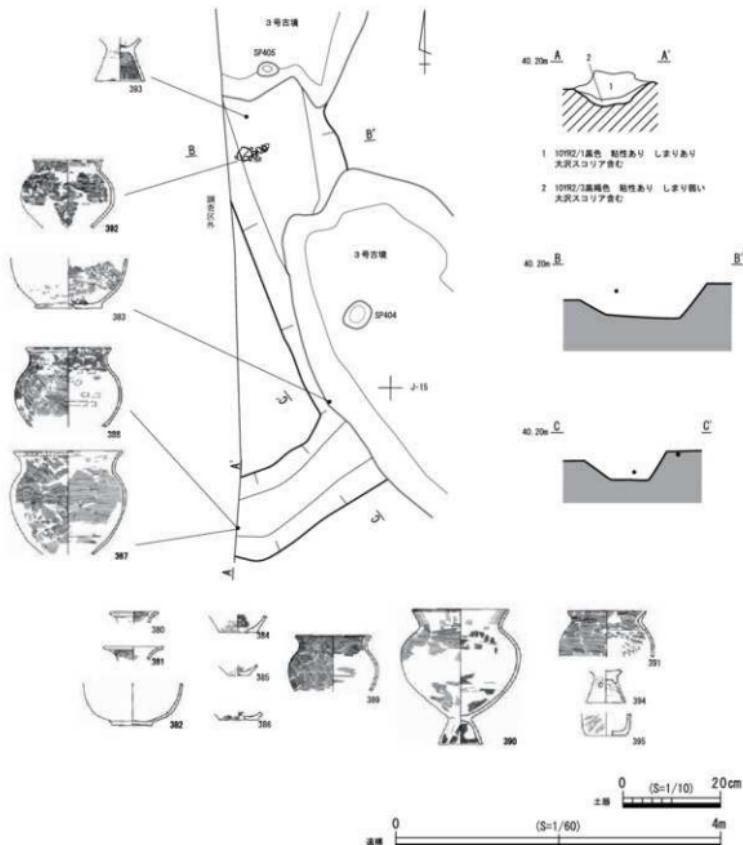
L-14グリッド調査区北側に位置する。搅乱とSK103により切られ、本来の平面形は不明である。遺物の出土はないが、覆土の特徴から古墳時代前期に近い時期に属する可能性がある。

イ SK103 (第73図)

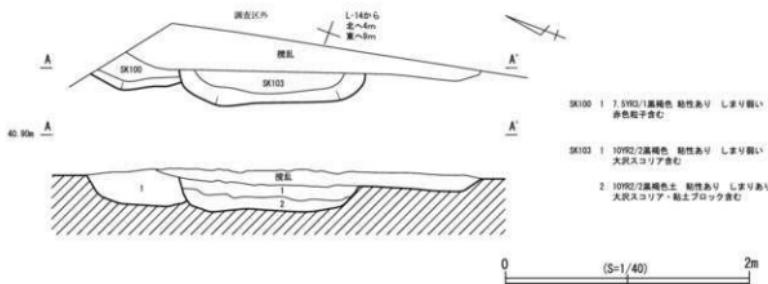
L-14グリッド調査区北側に位置する。搅乱に切られ、本来の平面形は不明である。遺物の出土はないが、覆土の特徴から古墳時代前期に近い時期に属する可能性がある。(西田)



第71図 TA 3



第72図 SD22



第73図 第1遺構面 土坑

(4) 遺物（第23表）

ア S D22出土遺物（第74図380～第75図395 図版25）

380と381は折り返し口縁壺である。380は口縁部が外反して開く。381は口縁部が大きく外反して開く。382から386は壺の底部である。

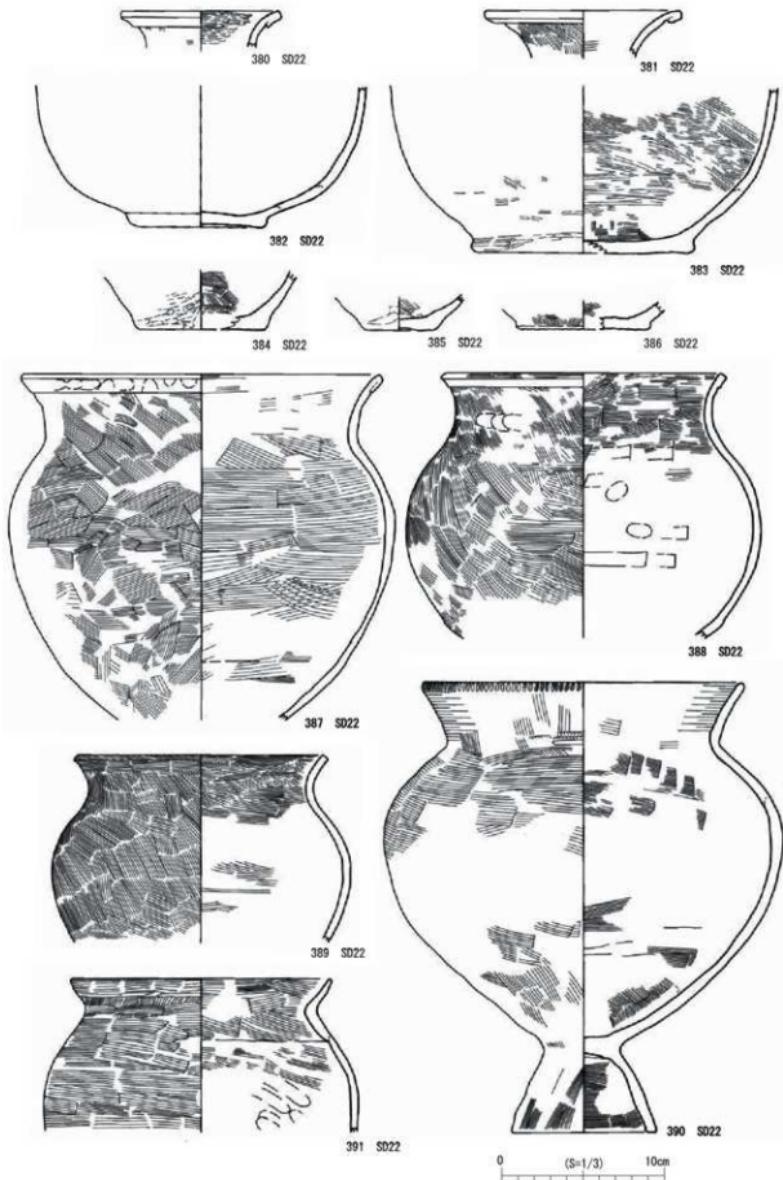
387と388は折り返し口縁を有する壺である。387は胴上部に最大径を有する。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部の開きは小さい。388は胴部が丸く、中央部に最大径を有する。口縁部から頸部の形状は387と類似する。389は壺である。胴上部に最大径を有する。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部の開きは小さい。口唇部は面取りしている。390は台付壺である。胴上部に最大径を有する。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開き、横ナデを施している。口唇部は丸い。口唇部には刻みを施している。胴部に対して脚部は小さく、内窓気味に開く。391と392は壺である。391は胴部の張りが小さい。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開く。口唇部は丸い。外面口唇部直下に弱い横ナデを施している。392は胴部が丸く、中央部に最大径を有する。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開く。口唇部は丸い。393は台付壺の脚部である。開きは直線的である。

394は高壺の脚部である。短く直線的に開き、壺部との接合部が太い。円形の孔を3方に有する。

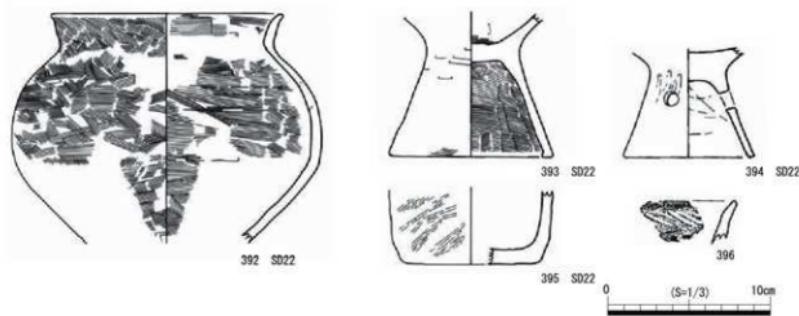
395は小型鉢の底部である。直立する胴部を有する。

イ 包含層出土遺物（第75図396）

396は壺または壺の口縁部である。外面にヘラ状工具による斜方向の刻みを施している。口唇部は丸い。内面に弱い屈曲が見られ、屈曲より上はナデ、下は横ハケを施している。（岩崎）

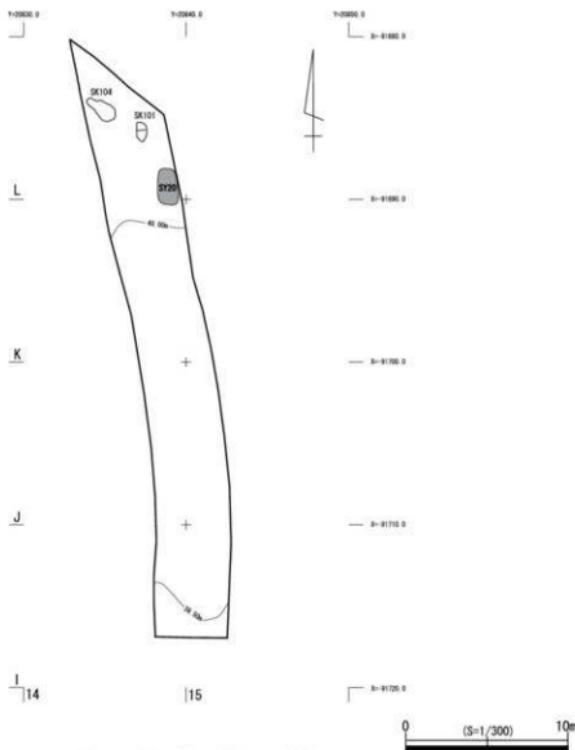


第74図 2区 遺構出土遺物 1



第75図 2区 遺構出土遺物2

第7節 2区縄文時代の遺構と遺物



第76図 第2遺構面遺構配置 拡大図3

1 遺構

富士岡1古墳群2区の縄文時代の遺構は集石が1基、土坑が2基検出された。調査区北側を除いて、溶岩礫が露頭しており、遺構は検出されなかった。

(1) 集石

ア SY20 (第77図・第21表)

L-14グリッド、調査区北側の第5層栗色土層中で検出した。1区で出土した集石同様、掘り込みを有さない集石である。

2 mほどの集石の範囲内からは縄文時代前期後葉と考えられる土器片が出土した。

(2) 土坑

イ SK101 (第77図・第22表)

L-14グリッド、調査区北側で検出した。土坑の平面形は不整橢円形であり、明確な形をもたない。

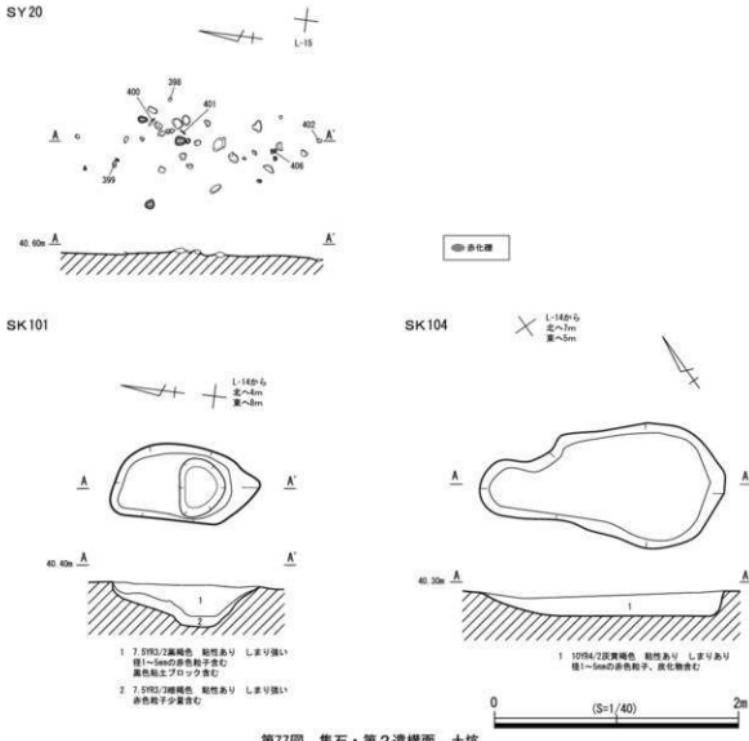
遺構の覆土は2層で、1層上面の壁面近くからII群2類d土器が出土した。

ウ SK104（第77図・第22表）

L-14グリッド、調査区北側部分に位置し、栗色土層相当層の下層で検出した。

調査区北側の遺物が特に集中して出土する場所に位置し、遺構の上面およびその付近5m四方の包含層からは、II群2類a土器や破損した石器、礫が多量に出土した。礫は明らかに赤化しているものも含まれていた。報告書では土坑として報告するが、周辺の遺物の出土状況も含め本来は別の性格をもつ遺構であった可能性もある。

遺構は明確な平面プランは持たず、不整橢円形である。断面形は緩やかに立ち上がり、皿状をなす。遺物は熱を受けた小型の礫数点と、前期前葉のII群1類e、II群1類i土器と後葉のII群2類a、II群2類d土器と考えられる土器片が出土した。土器はそれぞれ時期差があり、流れ込みである可能性もあるため、遺構の年代を示すものではない。（西田）



第77図 集石・第2遺構面 土坑

2 遺 物

(1) 遺構出土の遺物（第24表）

ア S Y20（第78図398～402・406 図版26）

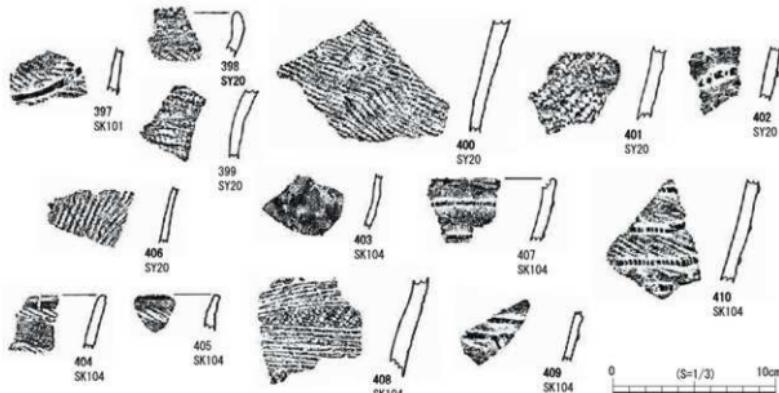
図示できた土器は6点である。II群2類dの十三菩提式、II群2類jの前期末から中期初頭の土器が出土した。398はII群2類dの口縁部で、幅5mmの粘土紐を横位に貼り付け、上部に刺突を施す。R Lの多条縄文を付ける。399～401はII群2類d、406はII群2類jで前期末の東海系土器と考えられる。さらに、図示はできなかったが、黒曜石の片断が出土している。

イ SK101（第78図397 図版26）

縄文土器が1点出土した。397は条の太さ約4mmのRL縄文を地文とし、弧状の粘土紐を貼り付けている。II群2類dで前期後葉土器の可能性がある。

ウ SK104（第78図403～405・407～410 図版26）

図化できたのは土器7点である。403はII群1類eの木島式、404・405はII群1類iの上の坊式土器である。408は縄文の地文に横位沈線を引くII群2類aである。407・409・410は結節浮線文を横位に付けるII群2類d土器である。その他、黒曜石の片断と礫が出土した。（西田）



第78図 2区 遺構出土遺物

(2) 包含層出土の土器（第24表）

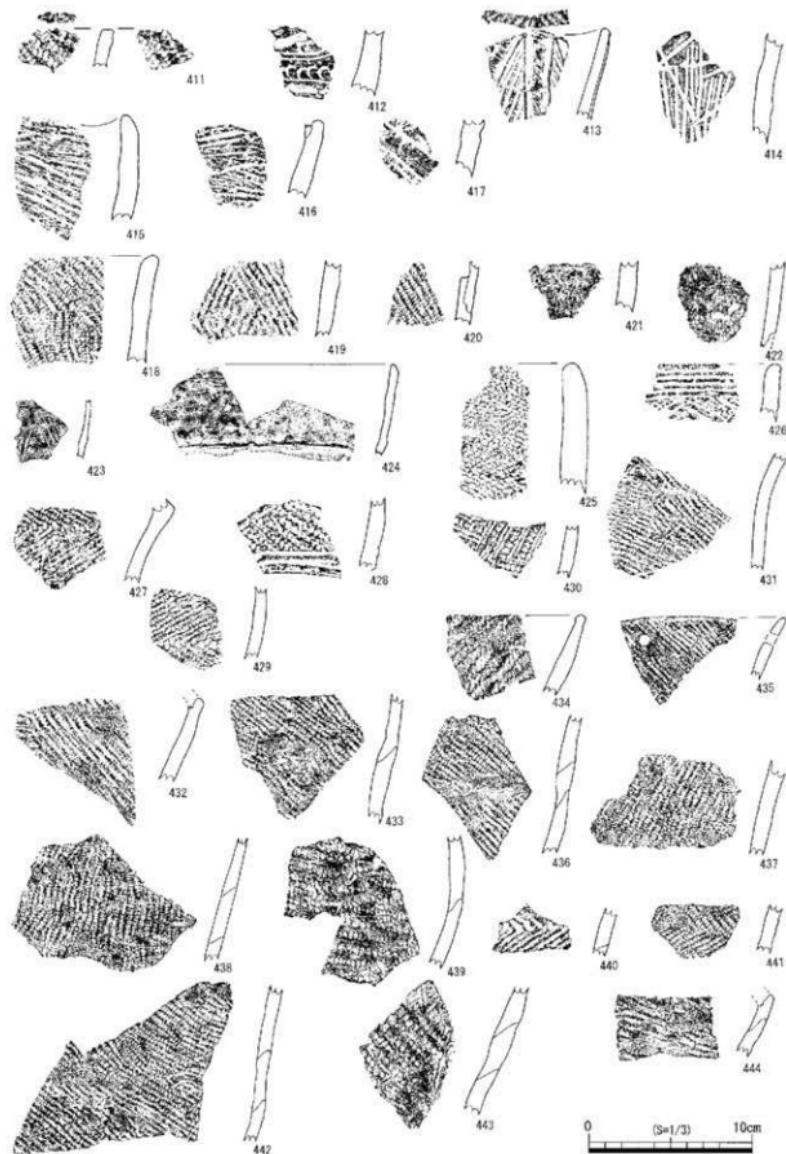
2区の縄文土器は第4層～第6層上面の包含層で出土した。特に前期後葉のII群2類a土器の出土が調査区北側において顕著であった。その反面1区で主体となって出土した中期初頭のIII群1類a土器の出土は少量であった。

I群1類b（第79図411 図版26）

411は表裏縄文土器であり、口唇部・内外面にRL縄文を施したにぶい黄褐色の土器である。早期前葉の土器と考えておきたい。

I群1類d（第79図412）

412は器厚が1cm～1.5cmと厚手の土器で、沈線区画内に、半截竹管状工具で刺突を施している。田戸下層式である。



第79図 2区 包含層出土土器1

I群1類h（第79図413・414 図版26）

野島式土器を2点図示した。413は波状口縁の口縁部に幅3mmの絡条体を付け、微隆起線文により縦位の区画をし、区画内には半截竹管状工具により、斜位に沈線を施している。1区・2区のI群1類i土器で微隆起線文が施文されるものは4131点のみの出土であった。414は縦位沈線を付けた後、斜格子状沈線を施している。

I群2類j（第79図415・416）

415・416は条痕文を施す土器で、2点図示した。口縁部片で外面に条痕文を施しており、胎土に纖維を含む。

I群2類l（第79図417～422）

早期末から前期初頭のその他の土器である。417は纖維を含み、外面に斜位の沈線が施文される。418～420は縄文を施す土器で纖維を含む。420はL Rの多条縄文で羽状縄文を施している。421・422は厚手の無文土器で、纖維を多く含む。422は調整痕を付けている。

II群1類b（第79図423 図版26）

木島VII式土器である。423は外面に半截竹管状工具で斜位の沈線を付け、一部は交差している。

II群1類c（第79図424 図版26）

424は内外面に指痕が付いた無文の土器で、口縁部と胴部の間には段が付いている。中越式系土器の可能性も考えられる。

II群1類g（第79図425～430 図版26）

関山II式で胎土に纖維を含み羽状縄文などを施す土器である。425・426は口縁部である。425は口縁部から組紐風の縄文を付けている。426は地文に縄文を付けた後、沈線を横位に施し、鋸歯状の沈線を付けている。427は多条縄文と結節羽状縄文を施している。428はR L縄文を付け、半截竹管状工具で横位・斜位に施文している。429はR L縄文の結節羽状縄文を付けている。430は胴部に正反合で

$L \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \\ R \end{array} \right. \text{ と } R \left\{ \begin{array}{l} R \\ R \\ L \end{array} \right.$ の羽状縄文を付けている。

II群1類h（第79図431 図版26）

黒浜式で431はR L縄文を施す土器である。胎土には纖維が混入されている。関山II式土器よりも色調が黒みがかり、胎土の特徴が異なる。

II群1類k（第79図432～第80図465 図版27）

縄文や羽状縄文、結節縄文を施し、胎土に纖維が混入しない土器群をII群1類kとした。いずれも破片で器形がわかる資料は出土していない。

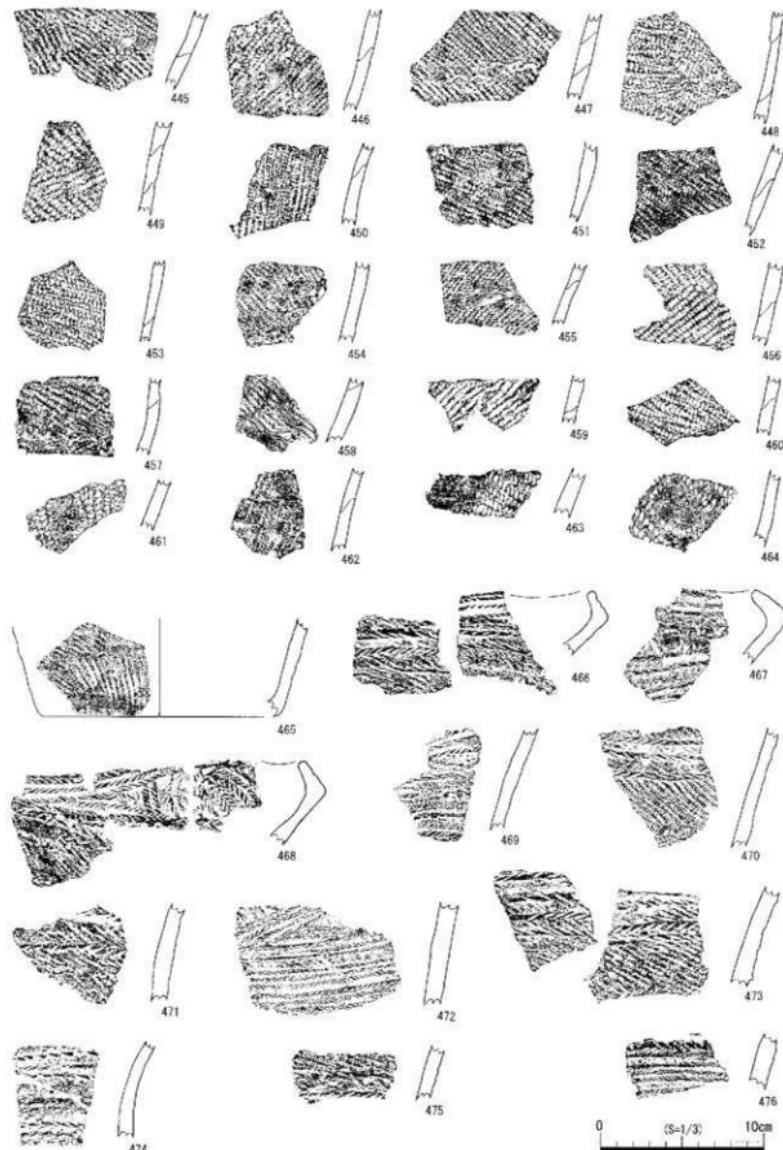
前期中葉の帆迎堂Z式に相当する土器であり、併行すると思われるII群1類hは1片が出土したのみであった。しかし、II群2類a諸磯b式土器とは分布が重なって出土する状況が確認できた。この2類a土器に入るものや併行する縄文土器が混入している可能性もある。

435は補修孔が穿たれ、口縁は外反する。432・444は口縁部がくの字状に内反し、外面にR L縄文を施す。440はR LとR L縄文で結節羽状縄文を付けている。457はR L縄文とL縄文を付けている。447はR Lの端部を結節した縄文を施す。羽状縄文を施すのは441・449・456である。

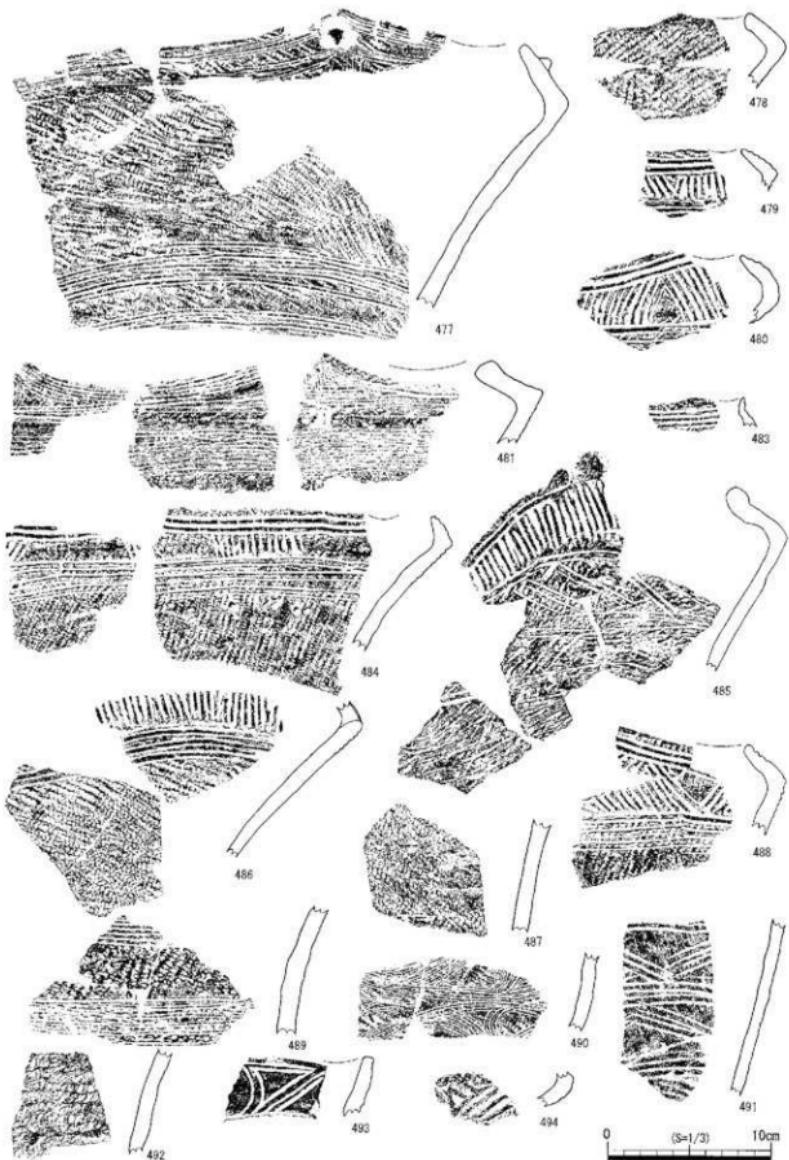
II群2類a（第80図466～第82図499・503 図版27）

2区の中で最も多く出土した土器である。特に調査区北側の集石や土坑周辺で集中して出土した。

これらII群2類a土器としたものの中では、胎土の違いが顕著に見られた。外面が白みを帯びた黄橙色の土器は466・468・470～472・475・476があげられる。この土器は全て縄文の地文に浮線文を施すものに限られるという特徴が見られた。また、胎土が白みを帯びており、砂粒を多く含む器厚の薄い491



第80図 2区 包含層出土土器2



第81図 2区 包含層出土土器3

と、赤褐色や褐色または橙色の胎土をもつその他の土器のように数種に分けることができた。これらのII群2類a土器は文様の特徴から、さらに以下5つに分類して報告する。

ア 浮線文を施すもの

縄文の地文に浮線文を施すものは466~471・473~475である。468は波状口縁の口縁部をくの字状に内反させている。内反する外面の部分には、RLの縄文を地文に付け、口縁に沿って扁平な浮線文を横位または渦巻状に施して文様を作出している。

また、縄文を地文とし、扁平な浮線文を横位や斜位につけ、細い棒状工具の先端で刺突をなすものは472・476・494である。483はミニチュア土器で、波状口縁をなし、RL縄文の地文に半截竹管状工具で横位に引いた後、浮線文を付けている。

イ 縄文の地文に平行沈線を施し、文様を構成するもの

477・479~481・484~490である。484は「くの字」状に口縁が内反する口縁部から脣部にかけての破片である。口縁に沿って半截竹管状工具で平行沈線を施し、脣部にも横位の沈線を引く。口縁部と脣部の沈線の間に縦位の沈線を施している。485は波状口縁で、波頂部には突起が付いている。3個単位で付けられたと考えられる。外面はL縄文を地文とし、口唇部に沿って山形に沈線を引き区画した中には縦位に密接平行沈線を施している。また、下部には斜位・横位の沈線を引いている。490はRL縄文を地文とし、半截竹管状工具で蕨手状沈線を作出している。503は沈線のみで文様を構成するがおそらくは485と類似する口縁部があるのでここに含める。

ウ 平行沈線のみで文様を構成しているもの

491・493である。493は口縁に沿って沈線を横位や斜位に引くことで、文様を作出している。491は半截竹管状工具で、横位に区画した後、三角状の沈線を施す。

エ 文様が縄文のみのもの

478・487・492の3点を図示した。

478は口縁部を「くの字」状に内反させてLR縄文を施す土器で、下部には同一原体で羽状に施文している。492はL縄文を施す。これ等は出土分布が重なる点や胎土が諸磲b式と類似する事から本類に含めた。

オ 無文土器（有孔浅鉢形土器・浅鉢）

496・497は有孔浅鉢形土器の口縁部である。498・499は無文の浅鉢で、横位の研磨痕が付けられている。

カ 底部

495の1点を図示した。横位に平行沈線が施文されている。

II群2類d（第82図500~502・504~509 図版28）

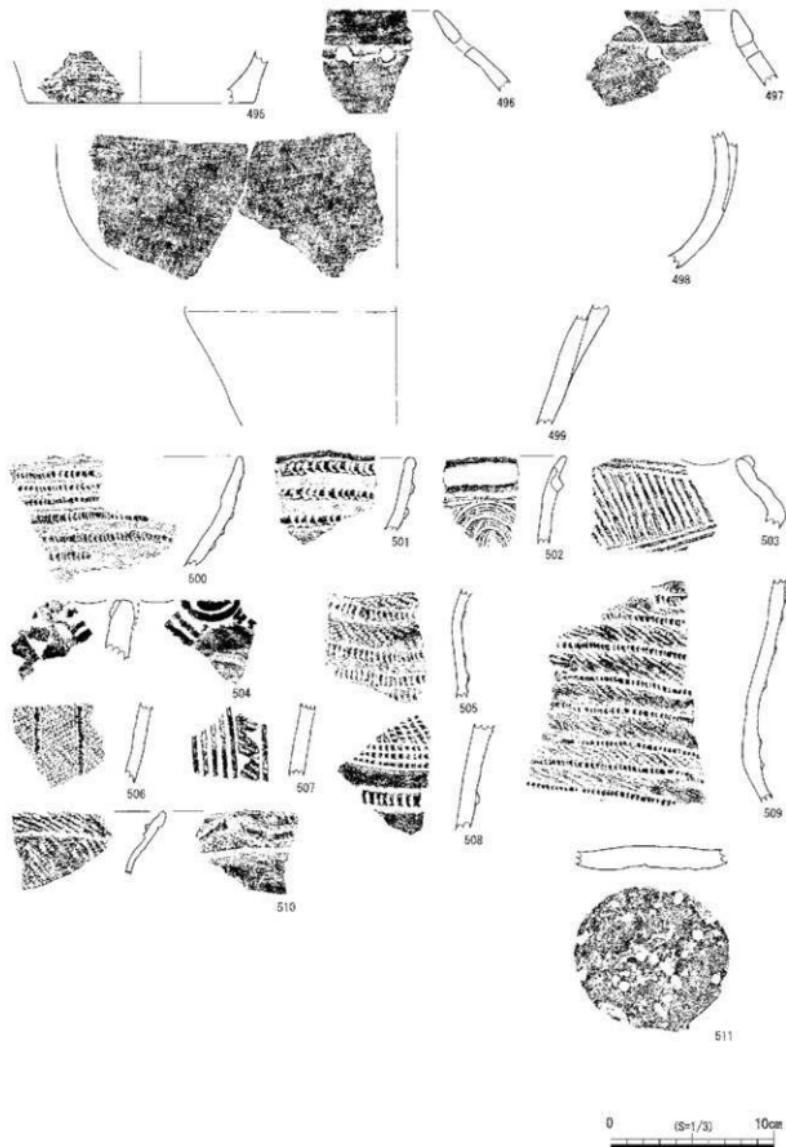
504は波状口縁で外面に三角印刻文を施す。500・505・506・509はRL縄文を付け、結節浮線文を付けるものである。501は地文が無文で結節浮線文を付ける。502は口縁に沿った横位粘土紐の下に円形沈線を付けている。508は沈線を付け、隆帶上には刻みを入れている。

II群2類f（第82図510 図版28）

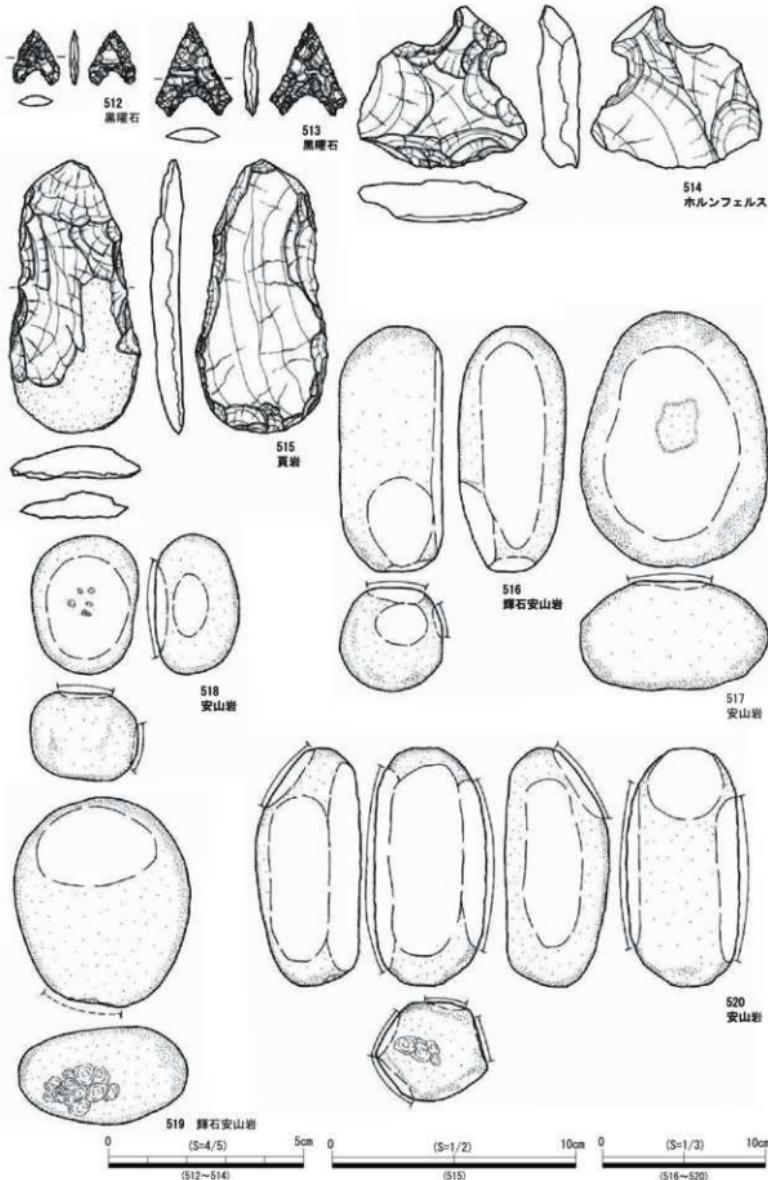
510は内面にRLの縄文を施文した後、断面が三角形の粘土紐を付けている。外面の口縁は折り返し口縁で、RLの縄文を付けている。II群2類fの北白川式としたが、胎土や文様の付け方が向山遺跡例とは異なるため、「北白川系」とすべきか。

III群1類a

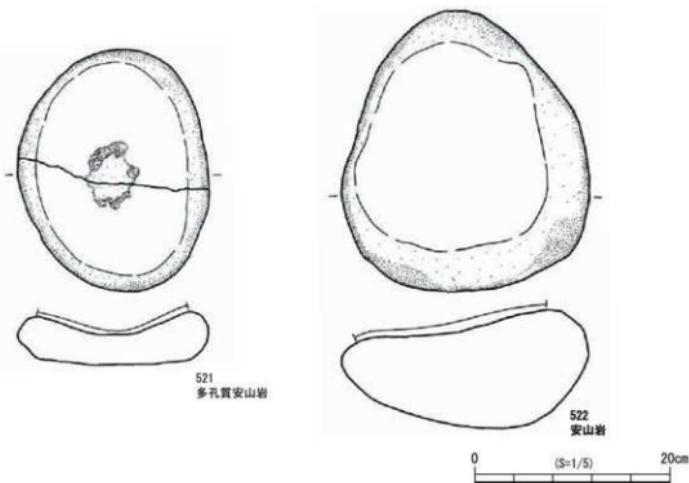
圓化はしていないが、五領ヶ台式土器が少量出土した。III群1類a土器とした五領ヶ台式の中でも1区と同じく半截竹管状工具による集合沈線と縄文で文様を付ける土器が主体を占める。



第82図 2区 包含層出土土器4



第83図 2区 包含層出土石器1



第84図 2区 包含層出土石器2

型式不明の土器（第82図511）

511は型式不明の土器の底部である。底面には2~7mm程度の植物の種子とみられる円形の圧痕が付いている。(西田)

(3) 石器（第25表）**石鎌（第83図512・513 図版28）**

512と513はII A 1類である。512は小型の製品である。513は基部に逆U字状の抉りを入れている。

石匙（第83図514 図版28）

514は左右非対称の横型の石匙である。刃部は表面のみに剥離を加えている。

打製石斧（第83図515 図版28）

515はII類である。薄い円盤を素材としている。刃部は弧状で、開きは小さい。表皮が残る表面は剥離を施さず、裏面に平坦剥離を施している。

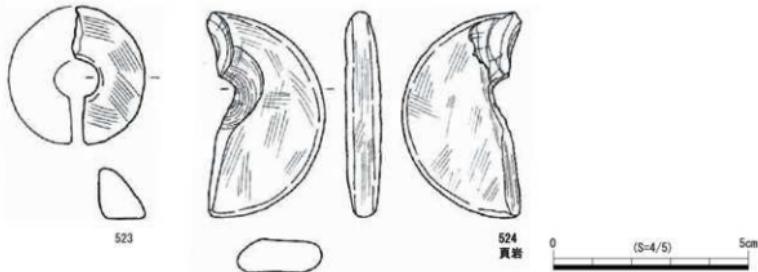
磨石・敲石・凹石・石皿（第83図516~第84図522）

516はIII類の磨石である。磨面が3箇所見られる。517から520はIV類の磨敲石である。517と518はI類の磨石の磨面に敲打痕がある。519は平坦な円盤の側縁寄りに磨面があり、反対側の側縁に強い敲打痕がある。520はIII類の磨石の先端部に敲打痕がある磨敲石である。磨面が4箇所あり、断面形は五角形を呈する。

521と522はI類の石皿である。521は磨面の中央に敲打痕が見られる。

(4) 块状耳飾（第85図523・524・第26表 図版28）

523は土製の块状耳飾である。形状は金環形を呈する。断面形は表面の中央部が盛り上がり、裏面は平坦である。524は頁岩製の块状耳飾である。523と同じく形状は金環形を呈する。切れ目の長さが中央孔の径より長い。中央孔の位置はやや上に片寄る。両面から穿孔し、全面を研磨して仕上げている。断面形は平坦である。(岩崎)



第85図 2区 塊状耳飾

第5表 富士岡1古墳群1区古墳周溝の概要

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	平面形態	規模(m) 長軸×短軸	規模(m) 東西×南北	最大幅 (m)	最大深 (m)
1号古墳周溝(SD1, SD2)	8, 10, 11	1, 2	KU	H-15, 16, G-14, 16	N-17°W	方形	(3.4) × (3.0)	(18.3) × (8.3)	2.5	0.5
2号古墳周溝(SD4, SD5)	8, 10, 12	2	KU	H-11, 12, 13, I-11, 12	N-22°W	隅丸方形	4.8 × (4.3)	3	平坦	—

第6表 富士岡1古墳群1区竪穴建物の概要

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	平面形態	規模(m) 長軸×短軸	主柱穴数	掘方	炉形態	出土遺物
SH1	8, 10, 16	3	KU	G-14	N-17°W	方形	(3.4) × (3.0)	1	—	—	—
SH2	8, 10, 17	3	KU	H-13, 14	N-39°W	隅丸方形	4.8 × (4.3)	3	平坦	—	第30回2
SH3	8, 10, 18	4	KU	H-13	N-22°W	隅丸方形	4.6 × (4.1)	4	—	—	第30回3, 4
SH4	8, 9, 19	4	KU	H, I-11	N-7°W	隅丸方形	5.1 × 4.4	4	平坦	—	第30回5, 6
SH5	8, 9, 20	5	KU	H-8, 9	N-7°W	梢円形	4.6 × (4.0)	3	円形	—	—

第7表 富士岡1古墳群1区掘立柱建物の概要

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	柱間規模	桁行(m)	梁間(m)	柱穴平面形態
SB1	8, 10, 22	—	KU	H-12	N-25°W	1間 × 1間	2.8	2.2	隅丸方形

第8表 富士岡1古墳群1区方形周溝墓の概要

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	方台部(m) 長軸×短軸	規模(m) 長軸×短軸	周溝裁大 幅(m)	周溝裁大 深(m)	出土遺物
SZ1	8, 9, 23	6	KU	H, I-6, 7	N-37°W	10.5 × 7.7	12.1 × 10.0	1.3	0.9	第31回8
SZ2	8, 9, 24	6	KU	I-7, 8	N-20°W	6.2 × 6.0	7.8 × 7.6	1.1	0.4	—
SZ3	8, 9, 25	6, 7	KU	H-8, 9, I-8, 9	N-12°W	13.9 × 10.5	16.6 × (12.6)	1.7	1.1	第31回9～15
SZ4	8, 9, 27	—	KU	H-10, 11	N-16°W	(4.4) × (2.2)	(7.4) × (2.6)	0.9	0.5	—
SZ5	8, 9, 27	7	KU	H-10	N-13°W	(4.5) × (1.9)	(6.9) × (2.4)	1.1	0.2	—

第9表 富士岡1古墳群1区溝状遺構の概要

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	全長(m)	最大幅(m)	最大深(m)	遺物
SD3	8・10, 34	—	KU	H-14	(5.2)	0.8	0.2	—
SD6(1号古墳周溝)	8, 10	—	KU	H-12, 13	13.9	1.2	0.2	—
SD7	8・10, 34	—	KU	H-12, 13	(9.2)	1.4	0.1	—
SD15	8, 10	—	KU	G, H-17	(1.0)	(0.4)	(0.2)	—
SD13	8, 9, 13	—	KU	H-6, 7, I-7	(9.6)	1.7	0.5	第15回1

第10表 富士岡1古墳群1区竪穴状遺構の概要

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	規模(m) 長軸×短軸	深さ	ピット数	出土遺物
TA1	35, 37, 38	8	YL	H-11	—	4.8 × (1.0)	0.1	6	第30回7 第43回25
TA2	8, 10, 21	5	KU	G-15	N-5°W	(4.1) × 3.2	0.1	1	—

第11表 富士岡1古墳群1区集石の概要

造構名	坪 園	図版	検出面	グリッド	規模 (m) 長径×短径	罐数	赤化比率	遺 物
SY12	35, 36, 39	9	YL上面	I-5	1.4×0.6	83	1%	
SY13	35, 36, 39	—	YL上面	I-5	0.6×0.5	12	8%	
SY14	35, 36, 39	—	YL上面	I-5	0.5×0.4	7	0%	
SY11	35, 36, 39	9	KU	I-8	3.9×3.8	79	4%	第43回28~35 第44回36~42

第12表 富士岡1古墳群1区土坑・小穴の概要

() は残存値

造構名	坪 園	図版	検出面	グリッド	種 類	規模 (m) 長径×短径	最大深 (m)	平面形態	遺 物
SK1	8, 10, 29	8	KU	G-14	土坑	1.3×0.8	0.5	長椭円形	
SK2	8, 10		KU	G-13	土坑	1.0×0.9	0.1	円形	
SK3	8, 10		KU	H-15	土坑	1.3×0.5	0.2	不整形	
SK7	8, 10		KU	H-11	土坑	3.7×2.0	0.5	長椭円形	
SK10	8, 10		KU	H-12	土坑	0.7×(0.5)	0.5	椭円形	
SK11	8, 10		KU	H-12	土坑	0.5×0.5	0.2	椭円形	
SK13	8, 9		KU	I-11	土坑	1.4×1.2	0.1	椭円形	
SK69	8, 9		KU	I-8	土坑	0.8×(0.4)	0.1	不整形	
SK71	8, 9		KU	I-9	土坑	0.6×(0.5)	0.2	長椭円形	
SK72	8, 9		KU	I-9	土坑	0.6×(0.4)	0.4	椭円形	
SK84	8, 9, 14		KU	I-8	土坑	(1.3)×0.8	0.1	不整形	
SK85	8, 9		KU	I-8	土坑	(1.6)×0.7	0.1	不整形	
SK87	8, 10, 34		KU	H-14	土坑	1.3×1.2	0.3	椭円形	
SP11	8, 10		KU	H-11	小穴	0.4×0.4	0.5	椭円形	
SP27	8, 10		KU	H-11	小穴	0.3×0.2	0.5	円形	
SP29	8, 10		KU	H-12	小穴	0.4×0.4	0.2	円形	
SP36	8, 9		KU	I-10	小穴	0.4×0.3	0.6	椭円形	
SP37	8, 9		KU	I-10	小穴	0.4×0.3	0.5	椭円形	
SP39	8, 9		KU	H-10	小穴	0.3×0.3	0.4	円形	
SP40	8, 9		KU	H-10	小穴	0.2×0.3	0.4	円形	
SP43	8, 9		KU	H-10	小穴	0.4×0.3	0.2	椭円形	
SP45	8, 10		KU	H-11	小穴	0.4×0.4	0.4	椭円形	
SP47	8, 10		KU	H-11	小穴	0.2×0.2	0.5	円形	
SP48	8, 9		KU	I-10	小穴	0.4×0.3	0.3	椭円形	
SP49	8, 9		KU	I-10	小穴	0.4×0.4	0.7	椭円形	
SP50	8, 9		KU	I-9, 10	小穴	0.5×0.4	0.2	椭円形	
SP59	8, 9		KU	I-10	小穴	0.4×0.3	0.6	椭円形	
SP61	8, 9		KU	I-10	小穴	0.3×0.3	0.5	円形	
SP69	8, 9		KU	I-10	小穴	0.4×(0.2)	0.4	円形	
SP192	8, 9		KU	I-9	小穴	0.5×0.4	0.2	椭円形	
SP346	8, 10		KU	H-15	土坑	0.3×0.3	0.3	椭円形	
SK16	35, 37, 40		YL	H-14	土坑	1.1×1.1	0.4	椭円形	第44回43, 44
SK17	35, 37		YL	G-14	土坑	1.2×1.1	0.5	円形	
SK22	35, 36		YL	H-10	土坑	1.0×0.4	0.3	長椭円形	
SK24	35, 37		YL	H-13, 14	土坑	0.8×0.6	0.3	長椭円形	
SK26	35, 37, 40		YL	H-14	土坑	1.3×0.7	0.3	長椭円形	第44回49, 50
SK28	35, 37, 40		YL	H-13	土坑	1.1×1.0	0.3	円形	第44回45
SK31	35, 37		YL	H-12	土坑	0.6×0.5	0.4	長椭円形	
SK33	35, 37		YL	H-12	土坑	0.6×0.6	0.6	椭円形	
SK34	35, 36		YL	I-11	土坑	0.7×0.6	0.3	椭円形	
SK37	35, 36		YL	I-10	土坑	0.6×0.5	0.3	椭円形	
SK38	35, 36		YL	H-10	土坑	1.4×1.2	0.2	椭円形	
SK40	35, 36		YL	I-10	土坑	1.0×0.6	0.2	長椭円形	
SK41	35, 36		YL	I-10	土坑	1.2×0.7	0.2	不整形	
SK42	35, 36, 40		YL	H-11	土坑	1.2×0.7	0.2	長椭円形	第44回47
SK44	35, 36, 40		YL	H-10	土坑	1.2×0.7	0.3	長椭円形	第44回48
SK45	35, 36		YL	I-10	土坑	0.6×0.4	0.2	椭円形	
SK46	35, 36, 40		YL	I-10	土坑	0.8×0.7	0.2	不整形	第44回46
SK50	35, 36		YL	I-10	土坑	0.6×0.4	0.3	長椭円形	
SK51	35, 36, 40		YL	I-11	土坑	1.4×1.1	0.2	長椭円形	第44回53
SK53	35, 37		YL	G-15	土坑	0.7×0.7	0.3	円形	
SK57	35, 37		YL	G-15	土坑	0.8×0.5	0.1	長椭円形	
SK60	35, 36		YL	H-10	土坑	1.0×0.6	0.3	長椭円形	
SK62	35, 36, 40		YL	I-10	土坑	1.1×0.6	0.8	長椭円形	第44回51
SK63	35, 36		YL	H-10	土坑	1.0×0.6	0.2	長椭円形	
SK65	35, 37		YL	H-14	土坑	0.8×(0.6)	0.2	椭円形	
SK73	35, 37		YL	G-16	土坑	0.7×0.6	0.2	椭円形	
SK74	35, 37		YL	H-16	土坑	0.9×(0.6)	0.2	椭円形	
SK78	35, 36		YL	I-8	土坑	0.6×0.3	0.2	長椭円形	
SK80	35, 36, 41	10	YL	H-8, 9	土坑	0.9×0.8	0.1	円形	
SK83	35, 36		YL	H-9	土坑	0.6×0.5	0.1	椭円形	
SK86	35, 36, 40		YL	I-11	土坑	0.7×0.5	0.6	椭円形	第44回52

遺構名	拝 囲	図版	検出面	グリッド	種 類	規模 (m) 長径×短径	最大深 (m)	平面形態	遺 物
SP71	35, 37		YL	H-13	小穴	0.4×0.3	0.3	梢円形	
SP72	35, 37		YL	H-13	小穴	0.3×0.3	0.4	梢円形	
SP76	35, 37		YL	G-14	小穴	0.3×0.3	0.5	円形	
SP79	35, 37		YL	G-13	小穴	0.4×0.3	0.4	不整形	
SP83	35, 37		YL	G-14	小穴	0.4×0.4	0.6	円形	
SP84	24, 37		YL	H-14	小穴	0.4×0.3	0.2	円形	
SP85	24, 37		YL	H-14	小穴	0.5×0.4	0.4	梢円形	
SP86	35, 37		YL	H-14	小穴	0.4×0.3	0.4	円形	第45E857
SP90	35, 37		YL	H-13	小穴	0.3×0.3	0.4	梢円形	
SP91	35, 37		YL	H-13	小穴	0.4×0.4	0.2	梢円形	
SP96	35, 37		YL	H-12	小穴	0.4×0.4	0.4	梢円形	
SP97	35, 37		YL	H-12	小穴	0.4×0.3	0.4	梢円形	
SP98	35, 37		YL	G-12	小穴	0.3×0.2	0.5	梢円形	
SP99	35, 37		YL	H-13	小穴	0.4×0.3	0.4	梢円形	
SP100	35, 37		YL	H-13	小穴	0.4×0.4	0.4	円形	
SP101	35, 36		YL	H-10	小穴	0.4×0.3	0.1	梢円形	
SP102	35, 36		YL	H-9	小穴	0.5×0.4	0.2	梢円形	
SP103	35, 36		YL	H-10	小穴	0.6×0.6	0.1	円形	
SP108	35, 37		YL	H-12	小穴	0.4×0.4	0.6	梢円形	
SP109	35, 36		YL	H-10	小穴	0.3×0.3	0.3	円形	
SP116	35, 36		YL	H-10	小穴	0.5×0.5	0.2	梢円形	
SP127	35, 37		YL	H-, 1-2	小穴	0.5×0.4	0.5	梢円形	
SP131	35, 36		YL	H-11	小穴	0.3×0.3	0.3	梢円形	
SP133	35, 37		YL	H-12	小穴	0.3×0.3	0.5	梢円形	
SP135	35, 37		YL	H-12	小穴	0.3×0.3	0.7	梢円形	
SP138	35, 37		YL	H-12	小穴	0.5×0.4	0.5	円形	
SP139	35, 36		YL	H-11	小穴	0.5×0.5	0.3	梢円形	第45E855
SP143	35, 36		YL	H-11	小穴	0.4×0.2	0.3	長梢円形	
SP151	35, 37		YL	H-12, 13	小穴	0.4×0.3	0.4	長梢円形	
SP161	35, 36		YL	H-11	小穴	0.5×0.3	0.4	長梢円形	
SP164	35, 37		YL	H-13	小穴	0.3×0.3	0.4	円形	
SP166	35, 37		YL	G-15	小穴	0.4×0.3	0.3	梢円形	第45E854
SP170	35, 37		YL	H-12	小穴	0.4×0.3	0.2	梢円形	
SP172	35, 37		YL	G-15	小穴	0.4×0.3	0.3	梢円形	
SP174	35, 37		YL	G-15	小穴	0.3×0.3	0.3	円形	
SP175	35, 37		YL	G-15	小穴	0.4×0.4	0.7	梢円形	
SP176	35, 37		YL	H-15	小穴	0.4×0.3	0.5	梢円形	
SP177	35, 37		YL	G-15	小穴	0.5×0.3	0.1	長梢円形	
SP178	35, 37		YL	H-13	小穴	0.3×0.3	0.5	梢円形	
SP186	35, 36		YL	H-10	小穴	0.4×0.3	0.3	梢円形	
SP193	35, 36, 41	10	YL	H-9	小穴	0.3×0.3	0.2	梢円形	第45E856
SP195	35, 36		YL	I-6	小穴	0.4×(0.3)	0.3	長梢円形	
SP207	35, 36		YL	I-5	小穴	0.3×0.3	0.4	円形	
SP216	35, 36		YL	I-6	小穴	0.3×0.2	0.4	梢円形	
SP217	35, 36		YL	I-5	小穴	0.3×0.3	0.5	円形	
SP219	35, 36		YL	I-6	小穴	0.3×0.2	0.6	梢円形	
SP230	35, 36		YL	I-, J-6	小穴	0.5×0.5	0.3	円形	
SP231	35, 36		YL	I-6	小穴	0.3×0.3	0.6	梢円形	
SP238	35, 36		YL	I-7	小穴	(0.4)×0.2	0.5	梢円形	
SP256	35, 36		YL	I-7	小穴	0.5×(0.3)	0.2	梢円形	
SP262	35, 36		YL	H-7	小穴	0.2×0.2	0.4	円形	
SP263	35, 36		YL	I-7	小穴	0.2×0.2	0.3	円形	
SP264	35, 36		YL	I-7	小穴	0.3×0.2	0.3	円形	
SP267	35, 36		YL	H-7	小穴	0.3×0.3	0.5	円形	
SP268	35, 36		YL	I-7	小穴	0.4×0.3	0.2	梢円形	
SP270	35, 36		YL	H-7	小穴	0.3×0.3	0.3	梢円形	
SP275	35, 36		YL	I-7	小穴	0.5×0.3	0.6	梢円形	
SP280	35, 36		YL	I-8	小穴	0.3×0.3	0.5	梢円形	
SP281	35, 36		YL	I-8	小穴	0.3×0.3	0.3	円形	
SP284	35, 36		YL	H-8	小穴	0.3×0.2	0.5	梢円形	
SP293	35, 36		YL	I-8	小穴	0.4×0.2	0.4	長梢円形	
SP294	35, 36		YL	I-8	小穴	0.5×0.3	0.5	長梢円形	
SP301	35, 36		YL	H-8	小穴	0.5×0.4	0.2	円形	
SP306	35, 36		YL	H-, I-8	小穴	0.5×0.3	0.1	長梢円形	
SP319	35, 36		YL	H-9	小穴	0.4×0.3	0.2	長梢円形	
SP328	35, 36		YL	H-9	小穴	0.4×0.4	0.2	梢円形	
SP339	35, 37		YL	H-13	小穴	0.5×0.5	0.3	梢円形	
SP340	35, 36		YL	H-10	小穴	(0.5)×0.5	0.2	梢円形	
SP341	35, 36		YL	I-10	小穴	0.6×0.4	0.4	長梢円形	
SP342	35, 37		YL	H-15	小穴	0.5×0.4	0.2	円形	
SP343	35, 37		YL	H-15	小穴	0.5×0.5	0.4	円形	
SP344	35, 36		YL	H-11	小穴	0.5×0.4	0.2	梢円形	
SP345	35, 37		YL	H-12	小穴	0.5×0.4	0.3	梢円形	

第13表 富士岡1古墳群1区古墳時代土器観察表

拂因 番号	國版 番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	調 整	備 考	
1	11	SD13覆土	土師器	环身		85	5.4	11.9	5.2	2.5YR5/6明赤褐	外面部：口縁部横ナデ 体部ナデ 内面部：口縁部横ナデ 体部ナデ		
2	11	SH2床面	土師器	小型鉢		100	4.1	10.3	5.4	7.5YR6/6橙	外面部：ナデ 内面部：口縁部横ナデ 体部放射状のハケ		
3		SH3床面	土師器	壺	底部	29	(3.2)		(7.0)	7.5YR7/6橙	外面部：縦ハケ後ナデ 内面部：ナデ		
4		SH3床面	土師器	壺	口縁部	15	(2.5)	(22.6)		7.5YR7/6橙	外面部：口縁部横ナデ 條状浮文 内面部：口縁部横ナデ S字状結節を伴うRL織		
5		SH4床面	土師器	壺	底部	10	(3.2)		(10.2)	7.5YR6/4にぼい黄	外面部：横ヘラミガキ? 内面部：横ハケ	外面部	
6	11	SH4覆土	土師器	壺	口縁部～胴部	30	(18.4)	(20.0)		7.5YR4/3褐	外面部：口縁部横ナデ 脚部斜めハケ 内面部：口縁部横ナデ後横ナデ 脚部ナデ 脚下部横ハケ		
7		TA2覆土	土師器	台付壺	脚部～脚部		(7.3)		(6.4)	10YR6/4にぼい黄	脚部外面部：不明 脚部内面部：横ハケ 脚部外面部：縦ハケ 脚部内面部：横ハケ	外面部	
8	11	SZ1覆土	土師器	壺		90	20.5	9.1	8.2	7.5YR7/4にぼい黄	外面部：縦ハケ・斜めハケ 内面部：横ハケ後ナデ	外面部	
9	11	SZ3覆土	土師器	壺	口縁部～胴部	10	(8.5)	(21.8)		10YR7/4にぼい黄	外面部：口縁部～頸部縦ハケ 脚部横 ハケ内面部：口縁部～頸部横ハケ 脚 部ナデ		
10		SZ3覆土	土師器	壺	口縁部		(4.1)	(18.4)		7.5YR5/4にぼい褐	外面部：斜めハケ後横ナデ 内面部：横ハケ後横ナデ		
11		SZ3覆土	土師器	壺	口縁部		(3.9)	(19.0)		10YR5/4にぼい黄	外面部：横ナデ 内面部：横ナデ		
12	11	SZ3覆土	土師器	壺	口縁部～胴部	40	(9.6)	(12.4)		5YR6/4にぼい黄	外面部：口縁部横ナデ 脚部横ハケ・ 斜めハケ 内面部：口縁部横ナデ 脚部横ハケ後 ナデ?		
13	11	SZ3覆土	土師器	壺	口縁部～胴部	20	(6.8)	(12.2)		10YR6/4にぼい黄	外面部：口縁部横ナデ 脚部横ハケ・ 斜めハケ 内面部：口縁部横ナデ 脚部横ハケ後 ナデ	外面部	
14	11	SZ3覆土	土師器	台付壺	脚部～脚部		(10.3)		9.1	10YR6/4にぼい黄	脚部外面部：斜めハケ 脚部内面部：横ハケ後ナデ 脚部外面部：縦ハケ・横ハケ 脚部内面部：指頭ナデ		
15	11	SZ3覆土	土師器	壺	脚部～底部	50	(35.1)		14.2	7.5YR7/6橙	外面部：横ヘラミガキ 内面部：横ハケ	外面部	
16	11	遺物集中1	土師器	壺	頸部～底部	70	(23.6)		10.0	7.5YR6/6橙	外面部：横ヘラミガキ 内面部：横ハケ後ナデ	外面部 底部本垂張	
17	11	遺物集中2	土師器	鉢		85	18.9	18.1	4.7	7.5YR6/3にぼい褐	外面部：口縁部横ナデ 脚部斜めハケ 内面部：全体横ハケ後口縁部横ナデ 脚上部ナデ	外面部	
18		遺物集中2	土師器	壺	口縁部～胴部		(11.5)	20.0		7.5YR4/4褐	外面部：口縁部横ナデ 脚部斜めハケ 内面部：横ハケ	外面部	
19		遺物集中2	土師器	壺	口縁部～胴部		(7.5)	12.3		7.5YR6/4にぼい黄	外面部：口縁部横ナデ 脚部ナデ 内面部：口縁部横ナデ 脚部ナデ		
20	11	遺物集中2	土師器	台付壺	脚部～脚部		(7.5)			10YR6/4にぼい黄	脚部外面部：不明 脚部内面部：ナデ 脚部外面部：縦ハケ 脚部内面部：指頭ナデ	外面部	
21	11	遺物集中2	土師器	高环	环部		(5.2)	11.6		7.5YR3/1黒褐	外面部：横ヘラミガキ 内面部：不明	外面部	
22	12	遺物集中2	土師器	小型壺			95	7.6	7.7	4.7	7.5YR6/6橙	外面部：口縁部横ナデ 脚部横ハケ・ 斜めハケ 内面部：口縁部横ナデ 脚上部ナデ 脚下部横ナデ	
23	12	遺物集中2	土師器	小型壺			60	7.5	7.2	4.1	5YR5/4にぼい赤褐	外面部：口縁部横ナデ 脚部横ハケ・ 斜めハケ 内面部：口縁部横ナデ 脚部横ハケ 脚上部ナデ 脚下部指頭ナデ	
24	12	SK1覆土	土師器	壺	頸部～底部	85	(62.9)		14.4	7.5YR7/6橙	外面部：縦ハケ・斜めハケ後横ヘラミ ガキ 内面部：横ハケ		

第14表 富士岡1古墳群1区縄文時代土器観察表

検出番号	段級番号	遺構番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
25	12	TA1	覆土	II群2類d	10YR6/4に赤い黄橙	長石・灰色・黑色粒子	口肩部に円形浮線文、外面部の浮線文、横位の箇跡状平行沈線、密接箇跡状平行沈線と浮線の斜格子文
28	12	SY11	田群1類a	7.5YR5.4/に赤い褐	長石・石英・灰色・黑色粒子	波状、瓶競合の貼付文、横位の粘土紐に刻目	
29	12	SY11	田群1類a	7.5YR6.6橙	長石・灰色砂粒	波状口縁、矢羽根状沈線、横位の粘土紐に連続爪形文、斜位沈線	
30	12	SY11	田群1類a	7.5YR7.6橙	長石・灰色・黑色粒子	LR筋節繩文を継位施文	
43	13	SK16	覆土	不明	7.5YR7.6橙	長石・金雲母・灰色・黑色砂粒	RL繩文
44	13	SK16	覆土	II群2類d	5YR5/4に赤い赤褐	長石・金雲母・灰色・黑色砂粒	5YR5/4に赤い赤褐
45	13	SK28	覆土	I群2類b	5YR5/6赤褐色	長石・灰色砂粒	横位の粘土紐に圧痕
46	13	SK46	覆土	II群2類d	7.5YR4/3褐色	長石・金雲母	波状口縁、口縁に沿った粘土紐
47	13	SK42	覆土	II群2類j	7.5YR5/4に赤い黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒	RL繩文
48	13	SK44	覆土	II群2類j	10YR6/4に赤い黄橙	長石・灰色砂粒	粘土紐に連続爪形文
49	13	SK26	覆土	II群2類j	5YR5/4に赤い赤褐	長石・金雲母・灰色砂粒	RL繩文
50	13	SK26	覆土	II群2類j	7.5YR5/4に赤い褐	長石・石英・灰色砂粒	黒化により文様不明
51	13	SK62	覆土	II群2類j	10YR4/2灰黃褐	長石・金雲母・灰色砂粒	縦位の粘土紐2本うち1本に連続爪形文
54	13	SP166	覆土	I群2類I	7.5YR6.6橙	長石・石英・灰色砂粒・繩維	外面部擦痕、内面部擦痕
55	13	SP139	覆土	I群1類i	10YR5/3に赤い黄橙	長石・石英・灰色砂粒	縦位・横位・斜位の疣状
56	13	SP193	覆土	III群1類a	7.5YR7.6橙	長石・茶色・灰色砂粒	肩上部横位・横状波の密接箇跡状平行沈線、肩下部縦位の密接箇跡状平行沈線区画内に三角形状・斜位波状の密接箇跡状平行沈線
58	13	SX4	III群1類a	10YR5/4に赤い黄橙	長石・石英・灰色砂粒	横位・矢羽根状の密接箇跡状平行沈線	
59	13	SX4	III群1類a	7.5YR7.6橙	長石・石英・灰色砂粒	縦位・横位の密接箇跡状平行沈線	
60	13	SX4	II群2類c	5YR5/6赤褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	弧状・斜位の沈線	
61	13	SX4	III群1類a	10YR6/4に赤い黄橙	長石・石英・灰色砂粒	縦位の密接箇跡状平行沈線	
62	13	SX4	III群1類a	10YR6/4に赤い黄橙	長石・金雲母・灰色・黑色粒子	斜位沈線	
63	13	SX4	III群1類a	7.5YR5/4に赤い褐	長石・金雲母・灰色砂粒	横位・斜位・密接箇跡状平行沈線と沈線の斜格子文	
73	13	KU	I群1類c	2.5Y7/4浅黄橙	長石	縦位の山形押型文	
74	13	KU	I群1類c	7.5YR6.6橙	長石・灰色砂粒	縦位の横円文をつないだような山形押型文	
75	13	KU	I群1類c	10YR7/4に赤い黄橙	長石	縦位の横円文をつないだような山形押型文	
76	13	KU	I群1類h	10YR7/4に赤い黄橙	長石・灰色砂粒・繩維	地文に斜位沈線・指頭で縦位・斜位沈線、内面調整痕	
77	13	KU	I群1類h	7.5YR6.6橙	長石・灰色・茶色・灰色砂粒・繩維	波状口縁、口肩部に刻目・斜位沈線・内面調整痕	
78	13	KU	I群1類h	10YR7/4に赤い黄橙	長石・石英・灰色・茶色砂粒・繩維	波状口縁、口肩部に刻目・斜位沈線を指頭に張り出す	
79	13	KU	I群1類h	7.5YR7.6橙	長石・石英・灰色砂粒・繩維	波状口縁、口肩部に刻目・矢羽根状沈線	
80	13	—	I群1類h	7.5YR6/4に赤い褐	長石・石英・灰色・茶色砂粒・繩維	口肩部に刻目・縦位沈線・X字状沈線	
81	13	KU	I群1類h	10YR6/4に赤い黄橙	長石・石英・灰色砂粒・繩維	波状口縁、口肩部に刻目・斜位沈線	
82	13	KU	I群1類h	7.5YR6/4に赤い褐	長石・石英・黑色粒子・繩維	斜位沈線	
83	13	KU	I群1類h	7.5YR6.6橙	長石・灰色・黑色粒子・繩維	縦位の沈線区画内に斜位沈線	
84	13	KU	I群1類h	7.5YR6/4に赤い褐	長石・石英・灰色砂粒・繩維	縦位・横位の伏線区画内に斜位沈線	
85	13	KU	I群1類h	10YR6/4に赤い黄橙	長石・石英・灰色砂粒・繩維	縦位の沈線区画内に斜位沈線	
86	13	KU	I群1類h	7.5YR7.6橙	長石・灰色砂粒・繩維	縦位・斜位・刺突状の沈線	
87	13	KU	I群1類h	7.5YR7/4に赤い褐	長石・金雲母・灰色砂粒・繩維	縦位の指頭による伏線区画内にハの字状沈線	
88	13	KU	I群1類h	5YR6/6橙	長石・石英・灰色・茶色砂粒・繩維	横位・斜位沈線・内面擦痕	
89	13	KU	I群1類h	10YR7/4に赤い黄橙	長石・灰色・黑色粒子・繩維	縦位の指頭による伏線区画内に斜位沈線	
90	13	KU	I群1類h	7.5YR7.6橙	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒・繩維	口肩部に沈線・外面部横位・縦位の沈線区画内に縦位・斜位沈線	
91	—	KU	I群1類h	10YR6/3に赤い黄橙	長石・石英・金雲母・灰色・茶色砂粒・繩維	斜位の沈線区画内に斜位の沈線	
92	—	KU	I群1類h	7.5YR6.6橙	長石・石英・繩維	縦位・横位の沈線区画内に縦位沈線・内面調整痕	
93	—	KU	I群1類h	10YR6/4に赤い黄橙	長石・石英・灰色・茶色砂粒・繩維	縦位・斜位の沈線	
94	—	KU	I群1類h	7.5YR6/4に赤い褐	長石・石英・灰色・茶色・黑色粒子・繩維	斜位の沈線区画内に斜位沈線・内面擦痕	
95	13	KU	I群1類h	7.5YR7.6橙	金雲母・灰色・茶色砂粒・繩維	波状口縁、口肩部に沈線・斜位の沈線区画内に斜位沈線・内面擦痕	
96	13	KU	I群1類h	7.5YR7/4に赤い褐	長石・灰色・茶色砂粒・黑色粒子・繩維	波状口縁、口肩部に沈線・斜位の沈線区画内に斜位沈線・内面擦痕	
97	13	KU	I群1類h	7.5YR6/4に赤い褐	長石・灰色・茶色砂粒・繩維	口肩部に沈線・外面部横位・斜位の沈線区画内に斜位沈線	
98	—	KU	I群1類h	7.5YR5/3に赤い褐	長石・石英・灰色・茶色・黑色粒子・繩維	格子状の沈線	
99	13	KU	I群1類h	7.5YR6/4に赤い褐	長石・灰色・黑色粒子・繩維	地文に斜位沈線・太い沈線で縦位と弧状の区画	
100	13	—	I群1類i	7.5YR6/4に赤い褐	長石・灰色・黑色粒子・繩維	波状口縁、口肩部に刻目・ハの字状の沈線区画内に刺突文・内面擦痕	

拵番号	図版番号	造構番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
101	13	KU	I群1類 i	7.5YR6/8にぼい橙	長石・灰色・黒色粒子・織維	口唇部に刻目、外面部の沈線区間に網突文、内面部根	
102		KU	I群1類 i	7.5YR7/6橙	長石・灰色砂粒・織維	矢羽根状沈線	
103		KU	I群2類 i	5YR4/3にぼい赤褐	長石・金雲母・灰色砂粒・織維	LRとRLの羽状繩文	
104	14	KU	II群1類 f	10YR7/4にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒	ループ文、横位沈線	
105	14	KU	II群1類 b	10YR6/4にぼい黄橙	長石・灰色砂粒	斜位沈線	
106	14	KU	II群1類 b	7.5YR6/4にぼい橙	長石・灰色砂粒	斜位沈線	
107	14	KU	II群1類 b	2.5Y6/3にぼい黄	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒	横位の撫み痕、斜格子状の細い沈線	
108		KU	II群1類 b	10YR6/4にぼい黄橙	長石・灰色砂粒	斜位沈線	
109	14	KU	II群1類 c	5YR5/6壁	長石・金雲母・灰色砂粒	波状口縁、口頂部と胴部の間に段、外内面に指頭痕、中越式系の可能性も	
110	14	KU	II群1類 c	10YR7/3にぼい黄橙	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	連続網突文、擦痕	
111	14	KU	II群1類 e	10YR7/4にぼい黄橙	長石・金雲母・茶色砂粒	横位の爪痕、補修孔	
112	14	KU	II群1類 e	10YR7/4にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒	木端状工具で横位の連続網突文	
113	14	KU	II群1類 g	5YR5/4にぼい赤褐	長石・灰色・黒色粒子・織維	組紐風繩文	
114	14	KU	II群1類 g	5YR5/6明赤褐	長石・金雲母・灰色砂粒・織維	LRとRLの羽状繩文	
115	14	KU	II群1類 g	7.5YR5/6明褐	長石・石英・灰色・黒色粒子・織維	LR繩文	
116	14	KU	II群1類 g	5YR5/4にぼい赤褐	長石・石英・灰色砂粒・織維	LR繩文	
117	14	KU	II群1類 i	7.5YR4/3褐	長石・石英	斜位沈線	
118	14	—	II群1類 i	7.5YR4/3褐	長石・石英・黑色粒子	斜位沈線	
119	14	KU	II群1類 jか	10YR6/4にぼい黄橙	長石・灰色砂粒	横位の貝殻縫合線文	
120		KU	II群2類 a	7.5YR4/3褐	長石・金雲母・灰色・黑色粒子	地文にRL繩文、横位・弧状の扁平な浮線文	
121		KU	II群2類 a	7.5YR5/4にぼい褐	長石・石英・金雲母・灰色・黑色粒子	地文にRL繩文、横位・弧状の扁平な浮線文	
122		—	II群2類 a	10YR8/4浅黃橙	長石・灰色・黑色粒子	地文にRL多条繩文、横位・斜位・弧状の扁平な浮線文、刺突文	
123		KU	II群2類 a	5YR5/6明赤褐	長石・灰色・黑色粒子	波状口縁、地文にRL繩文、波頂部下に突起、渦巻状の沈線	
124		KU	II群2類 a	10YR5/3にぼい黄橙	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	波状口縁、地文に繩文、波頂部下に突起、渦巻状の沈線	
125		KU	II群2類 a	2.5Y6/3にぼい黄	長石・金雲母・灰色砂粒	波状口縁、地文に繩文、弧状の沈線	
126		KU	II群2類 a	7.5YR5/4にぼい黄	長石・灰色・黑色の砂粒	LR繩文	
127		KU	II群2類 a	7.5YR5/4にぼい褐	長石・灰色・黑色の砂粒	地文にLR繩文、横位の鉢底状沈線	
128		KU	II群2類 a	7.5YR5/4にぼい橙	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	無文の有孔丸形土器	
129		KU	II群2類 a	10YR6/4にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒	無文、口縁部が立ち上がる	
130		KU	II群2類 a	10YR7/6明黄褐	長石・石英・金雲母・灰色・茶色砂粒	無文の浅鉢	
131		KU	II群2類 b	10YR4/4褐	長石・金雲母・灰色砂粒	調整痕	
132	15	KU	II群2類 c	10YR6/4にぼい黄橙	長石・灰色・茶色砂粒	横位・鉢底状・弧状の粘土紐に結節浮線文	
133	15	KU	II群2類 c	2.5Y7/2赤黄	長石・石英	三角形に組み合わせた粘土紐に結節浮線文	
134	15	KU	II群2類 c	10YR8/6黄橙	長石	波状口縁、口縁に沿った沈線・腰位矢羽根状沈線・円形貼付文	
135	15	KU	II群2類 c	10YR4/3にぼい黄褐	長石・黃橙色砂粒	腰位矢羽根状沈線・円形貼付文	
136	14	KU	II群2類 d	10YR7/6明黄褐	長石・金雲母・灰色砂粒・黑色粒子	口縁部耳朶状の添付文、刺突文、三角印刻文、口縫部と胴側の境に横位の結節浮線文、胴部横位・斜位の結節浮線文、三角形・菱形等の印刷文	
137		KU	II群2類 d	7.5YR6/4にぼい橙	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒・黑色粒子	耳朶状の添付文、三角印刻文	
138	14	KU	II群2類 d	10YR6/4にぼい黄橙	長石・金雲母・石英・灰色砂粒・黑色粒子	波状口縁、波頂部の粘土紐を折って突起を作り、中央に円孔を貫通、地文にRL繩文、ソーメン状の粘土紐を横位に貼付、両縁部に連続弧形文	
139	14	KU	II群2類 d	7.5YR5/3にぼい褐	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	耳朶状の添付文、三角印刻文	
140	14	KU	II群2類 d	7.5YR6/6橙	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	折り返し口縁、三角印刻文、RL繩文	
141	14	KU	II群2類 d	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英・灰色・黑色粒子	波状口縁、刺突文、三角印刻文	
142	14	KU	II群2類 d	5YR5/4にぼい赤褐	長石・石英・金雲母・灰色・茶色砂粒	波状口縁、波頂部に突起、三角形に組み合わせた粘土紐に結節浮線文、内面も粘土紐貼付	
143	14	KU	II群2類 d	10YR6/4にぼい黄橙	長石・灰色・黑色粒子	小波状口縁、無文、内面に段	
144	14	KU	II群2類 d	7.5YR5/4にぼい褐	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	波状口縁、口頂部玉抱三叉状印刻文、口縁に沿って縦かい三角印刷文と段、円形の薄い粘土板を貼り付け、外縁に結節浮線文、中央に円形の刺突文	
145	14	KU	II群2類 d	10YR7/4にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒・黑色粒子	耳朶状の添付文、刺突文、横位・弧状の粘土紐に結節浮線文	
146	14	KU	II群2類 d	10YR5/4にぼい黄褐	長石・金雲母・灰色砂粒・黑色粒子	口縁部横位の集合沈線とソーメン状の粘土紐の斜格子文、連続爪形文、外縁部沈線	
147	14	KU	II群2類 d	5YR5/4にぼい赤褐	長石・金雲母・灰色砂粒・黑色粒子	口縫部斜位の集合沈線とソーメン状の粘土紐の斜格子文、連続爪形文、外縁部沈線	

番号	図版番号	遺構番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
148	14		KU	II群2類d	10YR7/4にぼい黄橙	長石・灰色・黒色粒子	筒形波状口縁、弧状・斜位・横位の密接薄鉢状平行沈線、斜位の沈線に沿って連續爪彫文、区画内に横位沈線
149	14		KU	II群2類d	10YR6/4にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒	口唇部に刻目、外側三角印刻文、連續爪彫文
150	14		KU	II群2類d	7.5YR5/4にぼい褐	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒	口唇部压痕、折り返し口縁に三角印刻文、横位・矢羽根状の集合沈線
151	14		—	II群2類d	5YR6/4にぼい橙	長石・金雲母・灰色砂粒・黒色粒子	波状口縁、口縁に沿って連續爪彫文、弧状・横位の薄鉢状の沈線区画内に斜位の密接薄鉢状平行沈線
152	14		KU	II群2類d	7.5YR5/4にぼい褐	長石・金雲母・灰色砂粒	口唇部RL繩文、粘土紐をリボン式に駆け、口唇部横位・斜位の粘土紐に結節浮線文、三角印刻文
153	14		KU	II群2類d	7.5YR5/4にぼい褐	長石・石英・灰色砂粒	口唇部に刻目、三角形・方形・菱形の印刻文、横位・斜位の粘土紐に結節浮線文
154	14		KU	II群2類d	7.5YR6/6橙	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	縱位・横位・弧状の粘土紐に結節浮線文、三角印刻文、斜位沈線
155	14		KU	II群2類d	5YR6/8橙	長石・金雲母・灰色砂粒	口縁に沿って沈線、連續刻文、横位の集合沈線に三角印刻文、斜位沈線
156	14		KU	II群2類d	10YR6/4にぼい黄橙	長石・石英・灰色砂粒	口唇部連續爪彫文、口縁部横位の薄鉢状沈線の区画内に密接薄鉢状平行沈線と粘土紐の斜格子文、脚部には横位沈線
157	14		KU	II群2類d	5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色・黑色粒子	Y字形・U字形の密接薄鉢状平行沈線、無文部は印刻文
158	14		KU	II群2類d	5YR5/4にぼい赤褐	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒	地文にLR結節繩文、縱位・横位・歛圓状の粘土紐に結節浮線文
159	14		KU	II群2類d	10YR7/4にぼい黄橙	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	歛圓状・横位の粘土紐に結節浮線文、LR繩文
160	14		KU	II群2類d	10YR5/4にぼい黄褐	長石・灰色・黑色粒子	縱位斜秩・同心円秩の粘土紐に刻目、円形印刻文
161	14		KU	II群2類d	10YR6/4にぼい黄橙	長石・灰色・黑色粒子	横位の粘土紐に刻目、横位沈線
162	14		KU	II群2類d	10YR5/3にぼい黄橙	長石・石英・茶色砂粒	地文にRL繩文、連續菱形の粘土紐に結節浮線文
163	14		KU	II群2類d	10YR7/4にぼい黄橙	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	横位小波状の密接薄鉢状平行沈線、斜位沈線
164	14		KU	II群2類d	5YR5/4にぼい赤褐	長石・金雲母・灰色・黑色粒子	歛圓状沈線
165	14		KU	II群2類d	5YR5/6明赤褐	長石・石英・金雲母・灰色・茶色砂粒	縱位・横位・斜位の結節浮線文、三角印刻文
166	14		KU	II群2類d	7.5YR6/6橙	長石・灰色・黑色粒子	地文にRL繩文、縱位の粘土紐に結節浮線文
167	14		FB	II群2類d	10YR6/4にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒	筒形大波状口縁、筒型の上部は梢形を呈する。外面文にRL繩文、三角形・同心円秩・弧状・横位・波状の粘土紐に結節浮線文、内面地文にRL繩文、三角形・弧状の粘土紐に結節浮線文
168	15		KU	II群2類e	10YR6/3にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒	口唇部に連續刻目文、外側への字状沈線、円形印刻文、横位沈線
169	15		KU	II群2類e	7.5YR6/6橙	長石・灰・茶色砂粒	口唇部からくの字状沈線、三角印刻文
170	15		KU	II群2類e	7.5YR5/4にぼい橙	長石・金雲母・灰色砂粒	V字状沈線、三角印刻文
171	15		—	II群2類f	4YR5/4にぼい赤褐	長石・石英・灰色・茶色砂粒	縱位の粘土紐に刻目
172	15		—	II群2類f	10YR6/4にぼい黄橙	長石・灰色・黑色粒子	横位の粘土紐に刻目
173	15		KU	II群2類g	10YR7/4にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒	小波状口縁、口唇部Z字状刻突文、外内面RL繩文、横位の粘土紐に刻目、円形の粘土紐に結節浮線文、補修孔
174	15		KU	II群2類g	10YR5/3にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒	LR繩文、H状の粘土紐に結節浮線文
175	15		KU	II群2類g	10YR7/6明黄褐	長石・石英・灰色砂粒	折り返し口縁、外内面RL繩文
176	15		KU	II群2類g	10YR7/6明黄褐	長石・灰色砂粒	波状口縁、波頂部の粘土を折って突起を作りて字状刻突、中央に孔を貫通、外内面RL繩文、縱位・山形の粘土紐に結節浮線文
177	15		KU	II群2類g	10YR7/4にぼい黄橙	長石・金雲母・灰色砂粒	RL多条繩文、横位の粘土紐に結節浮線文
178	15		KU	II群2類g	7.5YR6/4にぼい橙	長石・石英・灰色砂粒	波状口縁、口唇部Z字状刻突文、外内面RL繩文、山形の粘土紐に結節浮線文、兩側縁に連續爪彫文
179	15		KU	II群2類g	10YR7/4にぼい黄橙	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	RL繩文、弧状の粘土紐に刻突を付ける
180	15		KU	II群2類g	10YR6/4にぼい黄橙	長石・石英・灰色砂粒	LR繩文、縱位の粘土紐にLR繩文
181	15		KU	II群2類h	7.5YR6/4にぼい橙	長石・石英・灰色砂粒	口唇部に備み痕、外内面LR繩文、横位・弧状の粘土紐に刻突
182	15		KU	II群2類h	10YR7/4にぼい黄橙	灰色砂粒	口唇部に刻突、外側調整板、内面段
183	15		KU	II群2類h	7.5YR5/4にぼい褐	長石・金雲母・灰色砂粒・黒色粒子	口唇部連續爪彫文、外側横位の薄鉢状沈線
184	15		KU	II群2類h	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色砂粒	口唇部に棒状工具の刻目、外内面RL繩文
185	16		KU	III群1類a	7.5YR5/4にぼい褐	長石・金雲母	口唇部に刻目、口縁部と底部に横位、脚部には横位沈線
186	16		KU	III群1類a	7.5YR7/6橙	長石・石英・灰色砂粒・黒色粒子	波状口縁、口唇部連續爪彫文、口縁に沿った薄鉢状沈線区画内に横位の波状の密接薄鉢状平行沈線
187	16		KU	III群1類a	10YR7/4にぼい黄橙	長石・灰色砂粒・黑色粒子	波状口縁、幅広の口唇部の両角に連續爪彫文、区画内に横位の密接薄鉢状平行沈線、横位の薄鉢状沈線区画内に小波状の密接薄鉢状平行沈線

拝団番号	図版番号	造構番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
188		KU	III群1類a	7.5YR4/3褐	長石・石英・金雲母		口唇部直下連續爪形文、側上部横位の蒲鉾状沈線区画内に密接蒲鉾状平行沈線と沈線の斜格子文、脚下部被集合沈線
189	16	KU	III群1類a	5YR5/4にぶい赤褐	長石・石英・金雲母・灰色砂粒		波状口縁、口唇部連續爪形文、口縁に沿って密接蒲鉾状平行沈線、横位の密接蒲鉾状平行沈線区画内に斜位の密接蒲鉾状平行沈線
190		KU	III群1類a	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色砂粒		口唇部直下連續爪形文、横位小波状、斜位の密接蒲鉾状平行沈線
191	16	KU	III群1類a	7.5YR4/2灰褐	長石・金雲母・灰色砂粒		横位・横位小波状の密接蒲鉾状平行沈線、T字状の粘土柱に連續爪形文、方形区画内にLRの結節縦文を被位施文
192	16	KU	III群1類a	10YR4/2灰黄褐	長石・石英・灰色・茶色・黑色粒子		口唇部連續爪形文、横位小波状、横位・斜位の密接蒲鉾状平行沈線
193		KU	III群1類a	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒		口唇部連續爪形文、横位の密接蒲鉾状平行沈線区画内に斜格子状の密接蒲鉾状平行沈線
194		KU	III群1類a	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英・金雲母・灰色砂粒		口唇部連續爪形文、横位の密接蒲鉾状平行沈線区画内に斜格子状の密接蒲鉾状平行沈線
195		YL	III群1類a	5YR6/6盤	長石・灰色・黑色粒子		口唇部直下無文帯、横位小波状の密接蒲鉾状平行沈線、斜位沈線
196	16	—	III群1類a	7.5YR5/4にぶい褐	長石・石英・金雲母・灰色・茶色砂粒		口唇部連續爪形文、横位の密接蒲鉾状平行沈線区画内に横矢羽根状の密接蒲鉾状平行沈線
197		—	III群1類a	2.5YR6/6橙	長石・灰色・黑色粒子		口唇部連續爪形文、横位・横位小波状の密接蒲鉾状平行沈線
198		KU	III群1類a	10YR5/4にぶい黄褐	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒・黑色粒子		口唇部直下無文帯、横位・斜位の密接蒲鉾状平行沈線
199		KU	III群1類a	10YR7/6明黄褐	長石・灰色・茶色・黑色粒子		口唇部直下無文帯、横位・横位小波状の密接蒲鉾状平行沈線
200		—	III群1類a	7.5YR6/4にぶい橙	長石・灰色・黑色粒子		透T字状の粘土柱に連續爪形文、区画内に横位小波状の密接蒲鉾状平行沈線
201		KU	III群1類a	5YR6/6盤	長石・石英・灰色・茶色・黑色粒子		横位の密接蒲鉾状平行沈線区画内に斜位・横矢羽根状の密接蒲鉾状平行沈線
202	16	KU	III群1類a	7.5YR6/6淡黄褐	長石・灰色・黑色粒子		横位の密接蒲鉾状平行沈線区画内に斜位の密接蒲鉾状平行沈線
203	16	KU	III群1類a	5YR6/6盤	長石・金雲母・灰色・黑色粒子		横位の密接蒲鉾状平行沈線区画内に縱位・斜位の密接蒲鉾状平行沈線
204		KU	III群1類a	5YR5/4にぶい赤褐	長石・石英・黑色粒子		斜位・横位・縱位の密接蒲鉾状平行沈線
205	16	KU	III群1類a	7.5YR6/6盤	長石・灰色砂粒・金雲母		横位の密接蒲鉾状平行沈線、密接蒲鉾状平行沈線と沈線の斜格子文
206	16	KU	III群1類a	10YR6/6明黄褐	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒		横位・縱矢羽根状の密接蒲鉾状平行沈線
207	16	KU	III群1類a	7.5YR7/4にぶい橙	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒・黑色粒子		横位の密接蒲鉾状平行沈線区画内に縱位・円形・縱矢羽根状の密接蒲鉾状平行沈線
208	16	KU	III群1類a	7.5YR6/6橙	長石・石英・灰色・黑色粒子		横位・縱矢羽根状の密接蒲鉾状平行沈線、LRとLの結節縦文を縱位施文
209		KU	III群1類a	7.5YR5/4にぶい褐	長石・金雲母・灰色砂粒		地文に縦文、縱矢羽根状・横位の密接蒲鉾状平行沈線
210		KU	III群1類a	7.5YR5/3にぶい褐	長石・石英・金雲母・灰色・茶色砂粒		横位の密接蒲鉾状平行沈線区画内に縱矢羽根状の密接蒲鉾状平行沈線
211	16	KU	III群1類a	10YR7/6明黄褐	長石・金雲母・灰色砂粒・黑色粒子		LRとLの結節縦文を縱位施文、Lは開端を縛る
212	16	KU	III群1類a	7.5YR7/6盤	長石・石英・金雲母・灰色砂粒・黑色粒子		LRとLの結節縦文を縱位施文、Lは開端を縛る
213		KU	III群1類a	5YR5/6明赤褐	長石・金雲母・灰色砂粒		RLの結節縦文を縱位施文
214		KU	III群1類a	10YR7/4にぶい黄褐	長石・金雲母・灰色・黑色粒子		LRとの結節縦文を縱位施文
215		KU	III群1類a	2.5Y/2/6淡黄	長石・石英		縱位の密接蒲鉾状平行沈線
216		KU	III群1類a	2.5YR6/6盤	長石・石英		縱位の密接蒲鉾状平行沈線
217		KU	III群1類a	5YR6/6盤	長石・灰色砂粒		縱位・縱矢羽根状の密接蒲鉾状平行沈線
218		—	III群1類a	10YR4/2灰黄褐	長石・灰色砂粒		縱位・へ形の密接蒲鉾状平行沈線
219		—	III群1類a	7.5YR6/6盤	長石・石英・黑色粒子		縱矢羽根状の密接蒲鉾状平行沈線
220		KU	III群1類a	5YR7/6盤	長石・石英・黑色粒子		LRの結節縦文を縱位施文
221		KU	III群1類a	5YR6/6盤	長石・石英・黑色粒子		Lの2淮結節縦文を縱位施文
222		KU	III群1類a	7.5YR6/6盤	長石・石英		Lの結節縦文を縱位施文
223		KU	III群1類a	5YR5/6明赤褐	長石・金雲母・灰色砂粒		三角印削文、横位の沈線区画内に縱位の密接蒲鉾状平行沈線、波状・横位の蒲鉾状沈線
224		KU	III群1類a	5YR6/8盤	長石・灰色砂粒		弧状の蒲鉾状沈線区画内に縱位の密接蒲鉾状平行沈線、波状の蒲鉾状沈線
225		KU	III群1類a	5YR5/6明赤褐色	長石・灰色・黑色粒子		横位・斜位の蒲鉾状沈線区画内に縱位の密接蒲鉾状平行沈線、波状の蒲鉾状沈線、三角印削文
226		KU	III群1類a	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英		横位の蒲鉾状沈線区画内に縱位の密接蒲鉾状平行沈線、波状の蒲鉾状沈線、三角印削文

拝団番号	団版番号	造構番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
227		クロ	III群1類a	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英		横位の瀬接縫状平行沈線・波状の瀬接縫状平行沈線・三角印刷文
228		KU	III群1類a	2.5YR5/6明赤褐	長石・石英		横位・弧状の瀬接縫状平行沈線・波状の瀬接縫状平行沈線・三角印刷文
229		一	III群1類a	5YR5/8明赤褐	長石・灰色砂粒		弧状の瀬接縫状平行沈線・波状の瀬接縫状平行沈線・三角印刷文
230		KU	III群1類a	2.5YR6/8橙	長石・灰色砂粒		弧状・方形の瀬接縫状平行沈線・波状の瀬接縫状平行沈線・波状の瀬接縫状平行沈線・三角印刷文
231		KU	III群1類a	5YR6/8橙	長石・灰色砂粒		横位・斜(の)瀬接縫状平行沈線・面内に横位の密接縫状平行沈線・波状の瀬接縫状平行沈線・三角印刷文
232		KU	III群1類a	5YR6/6橙	長石・灰色砂粒		横位の瀬接縫状平行沈線・面内に横位の密接縫状平行沈線・三角形・円形・三叉状の印刷文
233		KU	II群2類d	10YR4/3にない黄褐	長石・金雲母・灰色砂粒		横位・斜(の)粘土繊に筋節浮線文
234		KU	III群1類a	10YR6/4にない黄褐	長石・石英・灰色・茶色砂粒		横位の瀬接縫状平行沈線・弧状の粘土繊
235		KU	III群1類a	10YR6/4にない黄褐	長石・金雲母・灰色砂粒・黒色粒子		地文に網文、縱位の密接縫状平行沈線・弧状の瀬接縫状平行沈線
236	16	KU	III群1類a	5YR6/6橙	長石・石英・灰色砂粒		横位の密接縫状平行沈線・面内に横位・半円形・弧状の波状の密接縫状平行沈線
237	16	KU	III群1類a	10YR5/4にない黄褐	長石・金雲母・灰色砂粒		横位・縱位の波状の密接縫状平行沈線・アーチ状の瀬接縫状沈線
238		KU	III群1類a	7.5YR5/4にない褐	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒		円形の瀬接縫状平行沈線・面内に横位の密接縫状平行沈線・横位瀬接縫状平行沈線・矢羽根状の密接縫状平行沈線
239	16	KU	III群1類a	7.5YR5/4にない褐	長石・金雲母・灰色砂粒		波状口絆・地文にRL繩文・三角形の沈線区画
240	16	KU	III群1類a	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色砂粒		横位沈線・U字状沈線の中心部に半槽円形の印刷文
241		KU	III群1類a	7.5YR5/4にない褐	長石・石英		八状の瀬接縫状平行沈線・面内に横位の密接縫状平行沈線・三角印刷文
242		KU	III群1類a	2.5YR6/6橙	長石		横位の瀬接縫状平行沈線・面内に横位の密接縫状平行沈線
243		KU	III群1類a	7.5YR6/6橙	長石・石英・黑色粒子		斷面状の瀬接縫状平行沈線・面内に横位の密接縫状平行沈線・三角印刷文
244		KU	III群1類a	5YR6/8橙	長石・石英		三角印刷文
カラー 4 ・ 15		KU	III群1類a	2.5YR5/6明赤褐	長石・金雲母・砂粒		側面把手・側面部は粘土繊で輪郭・眉・鼻を作り連続系用火・両目と三叉状の切り込み・頭頂部は粘土をトーナー状に貼り付けRL繩文・後頭部は横位の粘土繊に連続爪形文・背面は横円形の粘土繊に連続爪形文・三叉文など
245		KU	III群1類c	10YR8/4浅黄緑	長石・金雲母・灰色砂粒		RL多条繩文を縱位施文、二枚貝殻の殻頭部を押捺痕
246	16	KU	III群1類c	10YR8/4浅黄緑	長石・金雲母・灰色砂粒		地文にRL繩文・円形の粘土繊に連続爪形文・弧状・縱位沈線
247	16	KU	III群1類c	5YR6/8橙	長石・石英・灰色・茶色砂粒		LR繩文・横位の低い粘土繊に円形の連続刺突文
248	16	KU	III群1類c	10YR7/6明黄褐	長石・金雲母・灰色砂粒		RL多条繩文
249	16	KU	III群1類c	7.5YR7/4にない橙	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒		地文にRL繩文・三角印刷文・連続爪形文
250	16	KU	III群1類d	2.5YR7/4金黄	長石・石英・金雲母・灰色砂粒		波状口絆・地文にRL繩文・三角印刷文・連続爪形文
251	16	KU	III群1類d	2.5YR7/4金黄	長石・金雲母・灰色砂粒		波状口絆・地文にRL繩文・三角印刷文・連続爪形文
252	16	KU	III群1類d	7.5YR5/4にない褐	長石・石英・灰色・茶色砂粒		横位の粘土繊に連続爪形文・横位の瀬接縫状沈線
253	16	クロ	III群2類d	7.5YR6/6橙	長石・灰色・黑色粒子		粘土繊・連続刺突文・繩文
254	16	クロ	III群3類c	7.5YR6/4にない褐	長石・灰色・黑色粒子		円形の沈線文・横位の連続刺突文
255	16	KU	III群3類c	10YR6/4にない黄褐	長石・石英・茶色・黑色粒子		弧状の沈線・横位の連続刺突文
256	16	KU	III群3類c	7.5YR6/6明赤褐	長石・石英・金雲母・茶色砂粒		横位波状の沈線・横位の連続刺突文
257	16	クロ	III群3類c	7.5YR7/6橙	長石・灰色・黑色粒子		双環状の把手
258		クロ	III群3類c	7.5YR7/4にない褐	長石・灰色・黑色粒子		双環状の把手
259	16	KU	III群3類e	7.5YR6/6橙	長石・石英・金雲母・灰色砂粒		隠帶と沈線の区画内にRL繩文
260	16	KU	III群3類e	5YR5/6明赤褐	長石・金雲母・灰色砂粒		隠帶と沈線の区画内に繩文
261	16	KU	IV群b	7.5YR6/6橙	長石・灰色・黑色粒子		横位沈線
262	16	一	IV群b	7.5YR6/4にない褐	長石・石英・灰色・茶色砂粒		Rの太い繩にしの細い繩を巻いた繩文
263	16	クロ	IV群b	7.5YR6/6橙	長石・灰色・茶色・黑色粒子		Rの太い繩にしの細い繩を巻いた繩文
264	16	KU	IV群b	7.5YR6/6橙	長石・石英・灰色砂粒		Rの太い繩にしの細い繩を巻いた繩文
265	16	クロ	IV群b	7.5YR6/4にない褐	長石・石英・灰色・黑色粒子		Rの太い繩にしの細い繩を巻いた繩文
266	16	KU	IV群b	7.5YR6/6橙	長石・石英・灰色砂粒		Rの太い繩にしの細い繩を巻いた繩文
267		一	底部	10YR6/4にない黄褐	長石・灰色・茶色砂粒		底面敷物状の压脈の上に木葉瓶
268		KU	底部	7.5YR5/4にない褐	長石・灰色砂粒		外側繩文・底面木葉瓶

第15表 富士岡1古墳群1区土製品観察表

拂団番号	國版番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)
269	16	クロ	Ⅲ群1類a	5YR4/6赤褐色	石英・長石・雲母・黒色粘土	横位沈線	6.0	4.6	1.1
270	16	KU	Ⅲ群1類a	7.5YR5/4に赤褐色	白色砂粒	粘土紐で区画した中に斜位の縦糸状沈線	2.4	1.5	1.0
271	16	KU	Ⅲ群1類a	5YR4/4に赤褐色	金・石英砂粒	粘土紐を斜位に貼り付け	2.2	2.0	0.9

第16表 富士岡1古墳群1区織文時代器属性表

拂団番号	國版番号	出土遺構	層位	器種	分類	石材	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
26		TA1	覆土	石繩	不明	砂岩	3.55	2.05	0.70	5.94
27		TA1	覆土	磨石	I	安山岩	(1.90)	6.80	4.50	578.50
31	12	SY11	打製石器	石繩	II	砂岩	15.50	7.70	3.00	430.30
32		SY11		磨石	I	輝石安山岩	10.40	5.85	4.70	389.30
33		SY11		磨石	I	安山岩(新第三紀)	10.10	8.00	3.90	348.00
34		SY11		磨石	I	ディサイト質輝安灰岩	11.00	8.60	4.60	684.00
35		SY11		磨石	I	輝石安山岩	11.50	9.50	4.10	660.00
36		SY11		石繩	I	輝石安山岩	21.00	18.20	7.10	3850.00
37		SY11		石繩	I	輝石安山岩	18.10	15.30	4.50	2000.00
38		SY11		石繩	II	安山岩	16.60	13.70	4.90	1920.00
39		SY11		石繩	II	輝石安山岩	19.50	12.70	8.40	2830.00
40		SY11		石繩	II	輝石安山岩	14.90	13.30	6.40	2180.00
41		SY11		石繩	II	輝石安山岩	18.10	15.70	5.60	2600.00
42		SY11		石繩	II	輝石安山岩	16.70	14.70	5.50	2140.00
52		SK86	覆土	磨石	I	安山岩	8.70	8.20	6.20	689.00
53		SK51	覆土	磨石	II	安山岩	12.00	8.10	8.30	1194.00
57		SP86	覆土	磨石	I	輝石安山岩	11.70	9.00	5.70	695.80
64	12	SX4	打製石器	石繩	III	粘板岩	11.90	7.10	2.50	228.90
65		SX4		磨石	III	輝石安山岩	23.10	10.30	8.40	3460.00
66		SX4		磨石	I	輝石安山岩	11.80	7.40	6.10	790.00
67		SX4		磨石	I	安山岩	10.90	6.90	4.10	460.80
68		SX4		石繩	I	輝石安山岩	16.10	14.50	5.20	2200.00
69		SX4		石繩	II	輝石安山岩	26.40	20.90	7.90	7875.00
70		SX4		石繩	II	輝石安山岩	30.50	22.80	12.50	16500.00
71		SX4		石繩	II	輝石安山岩	29.70	24.80	8.50	12350.00
272	17	クロ	石繩	I	ホルンフェルス		1.65	1.72	0.55	1.56
273	17		石繩	II A 1	黑曜石		1.30	1.22	0.30	0.34
274	17	KU	石繩	II A 1	黑曜石		1.90	1.66	0.45	0.90
275	17	KU	石繩	II A 2	黑曜石		1.59	1.81	0.31	0.40
276	17	KU	石繩	II A 2	黑曜石		2.00	1.82	0.40	0.80
277	17	KU	石繩	II A 2	黑曜石		1.66	1.58	0.37	0.62
278	17	KU	石繩	II A 2	黑曜石		1.70	1.47	0.27	0.44
279	17	クロ	石繩	II A 2	黑曜石		1.52	1.27	0.23	0.24
280	17		石繩	II B 1	黑曜石		2.40	1.85	0.50	1.20
281	17	KU	石繩	II B 1	黑曜石		2.50	1.67	0.46	1.00
282	17	KU	石繩	II B 2	黑曜石		2.16	1.55	0.40	0.90
283	17	KU	石繩	II B 2	黑曜石		1.77	1.34	0.37	0.61
284	17	KU	石繩	II B 3	黑曜石		1.83	1.46	0.43	0.68
285	17	KU	石繩	II B 3	黑曜石		1.91	1.47	0.58	0.99
286	17	KU	石繩	II B 3	黑曜石		1.82	1.52	0.75	1.42
287	17	KU	石繩	II B 3	ホルンフェルス		1.88	1.27	0.35	0.56
288	17	KU	石繩	III	黑曜石		2.37	1.85	0.80	3.24
290	17	KU	石繩	IV	黒質頁岩		3.15	1.30	2.80	1.33
291	17	KU	石繩未製作品		黒曜石		2.10	1.73	0.86	2.11
292	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		3.50	6.20	1.10	13.66
293	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		1.80	3.15	0.70	2.98
294	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		3.35	0.44	0.85	10.54
295	17	KU	石繩	模型	砂岩		3.15	4.80	0.70	6.69
296	17	KU	石繩	模型	チャート		3.45	4.30	0.80	8.59
297	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		4.50	7.10	0.90	22.88
298	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		3.60	4.20	0.80	6.79
299	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		4.40	5.60	0.85	21.96
300	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		6.00	3.22	0.80	15.94
301	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		2.10	1.20	0.30	0.62
302	17	クロ	石繩	模型	ホルンフェルス		3.55	1.75	0.50	1.96
303	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		2.00	1.45	0.40	0.76
304	17	クロ	石繩	模型	ホルンフェルス		2.90	2.55	0.60	2.12
305	17	KU	石繩	模型	黒質頁岩		3.50	2.70	0.80	4.70
306	17	KU	石繩	模型	ホルンフェルス		3.75	1.30	0.60	2.70
307	17	クロ	石繩	模型	ホルンフェルス		4.60	2.35	1.20	12.05
308	17		石繩	模型	黒曜石		4.55	3.05	1.00	7.90
309	18	KU	スクレイバー		ホルンフェルス		6.35	5.17	1.41	39.84
310	18	KU	スクレイバー		ホルンフェルス		6.65	4.25	1.20	38.27
311	18	KU	スクレイバー		ホルンフェルス		5.32	3.73	0.81	15.05
312	18	KU	スクレイバー		ホルンフェルス		5.77	2.40	0.80	14.43
313	18	KU	スクレイバー		ホルンフェルス		4.14	6.79	1.10	29.18
314	18	KU	スクレイバー		ホルンフェルス		7.20	10.47	1.95	134.82

拂田番号	国版番号	出土遺構	層位	器種	分類	石材	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
315	18	KU	打製石斧	I	穢質砂岩	12.80	4.90	2.20	154.10	
316	19	KU	打製石斧	II	砂岩	9.58	6.75	1.60	134.60	
317	19	KU	打製石斧	II	砂岩	8.50	5.85	1.80	95.90	
318	19	KU	打製石斧	II	頁岩	7.87	5.11	2.38	92.20	
319	19	KU	打製石斧	II	ホルンフェルス	7.60	5.60	1.70	54.17	
320	19	KU	打製石斧	II	砂岩	12.80	6.00	1.80	130.80	
321	19	複数	打製石斧	II	砂岩	5.50	3.60	1.50	25.50	
322	20	KU	打製石斧	III	砂質頁岩	15.10	10.70	3.30	504.20	
323	18	クロ	打製石斧	IV	砂質頁岩	9.58	4.35	1.90	96.80	
324	18	クロ	打製石斧	IV	不明	16.40	6.80	3.00	323.77	
325	20	KU	磨製石斧		砂岩	16.52	4.38	3.60	401.80	
326	19	クロ	磨製石斧		穢質砂岩	8.60	6.30	3.20	266.30	
327	17	KU	石核		黑曜石	2.02	2.18	2.10	9.99	
328	17	KU	石核		黑曜石	4.00	2.40	2.40	20.91	
329	17	KU	石核		黑曜石	2.43	2.15	2.40	11.34	
330		クロ	石拂		砂岩	8.20	7.60	2.68	240.9	
331		KU	石拂		輝石安山岩	8.54	7.52	2.38	217.80	
332		KU	石拂		砂岩	8.30	7.40	2.65	225.90	
333		KU	石拂		ひん岩	8.80	6.50	2.70	223.30	
334		KU	石拂		輝石安山岩	6.80	7.00	2.10	121.00	
335		KU	石拂		砂岩	7.70	7.70	1.70	141.20	
336		KU	石拂		頁岩	6.70	4.70	0.75	83.20	
337		KU	石拂		角閃石輝イサイト	6.70	6.70	1.60	103.40	
338		KU	磨石	I	輝石安山岩	5.50	5.51	4.00	117.30	
339		KU	磨石	I	輝石安山岩	7.00	5.50	3.90	163.60	
340		KU	磨石	I	安山岩	6.50	5.10	2.80	130.10	
341		KU	磨石	I	安山岩	6.90	5.00	2.80	125.10	
342		KU	磨石	I	安山岩	8.40	6.20	5.50	359.60	
343		KU	磨石	I	安山岩	9.20	7.90	3.40	350.50	
344		KU	磨石	I	安山岩	10.30	9.80	2.60	371.20	
345		KU	磨石	I	安山岩	10.30	7.70	5.20	507.80	
346		KU	磨石	I	安山岩	11.80	8.80	4.40	580.40	
347		KU	磨石	I	安山岩	11.40	10.40	4.30	563.40	
348		KU	磨石	I	砂岩	12.90	9.30	3.50	637.00	
349		KU	磨石	I	安山岩	13.80	9.60	4.80	846.70	
350		KU	磨石	I	輝石安山岩	10.30	6.20	4.90	471.20	
351		KU	磨石	I	安山岩	7.50	7.30	2.20	171.70	
352		KU	磨石	I	安山岩	6.40	5.60	1.40	63.90	
353		KU	磨石	I	輝石安山岩	6.50	5.70	3.20	165.90	
354		KU	磨石	I	輝石安山岩	9.40	7.50	4.40	471.50	
355		KU	磨石	I	安山岩	9.90	5.90	3.50	321.70	
357		KU	磨石	II	輝石安山岩	12.30	7.80	8.10	1100.00	
358		KU	磨石	II	安山岩	8.00	4.90	6.00	322.50	
359		KU	磨礫石	IV	安山岩	9.90	7.60	6.00	600.90	
360		KU	磨礫石	IV	安山岩	12.60	9.00	3.70	549.50	
361		KU	磨礫石	IV	安山岩	11.40	4.50	9.10	688.50	
362		KU	磨礫石	IV	輝石安山岩	11.50	9.90	5.00	724.20	
363		KU	敲石	V	輝石安山岩	10.50	8.80	4.00	448.60	
364		KU	敲石	V	安山岩	6.20	6.20	3.50	190.80	
365		KU	石皿	I	多孔質輝石安山岩	16.40	12.10	8.00	1870.00	
366		KU	石皿	I	輝石安山岩	17.70	14.40	5.50	1870.00	
367		KU	石皿	I	輝石安山岩	17.10	10.00	5.70	1280.00	
368		KU	石皿	I	輝石安山岩	17.90	9.70	7.50	1790.00	
369		KU	石皿	I	輝石安山岩	24.30	18.60	8.30	4820.00	
370		KU	石皿	II	輝石安山岩(無端面含有)	28.30	20.10	8.40	7040.00	
371		KU	石皿	II	安山岩	20.70	17.90	6.30	4280.00	
372		KU	石皿	II	安山岩	25.00	26.40	12.50	12460.00	
373		KU	石皿	II	輝石安山岩	29.40	30.20	7.90	10010.00	

第17表 富士岡1古墳群1区旧石器時代石器属性表

拂田番号	国版番号	層位	器種	石材	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
374	20	KU	尖頭器	黒曜石	3.70	1.30	0.84	2.49
375	20	KU	尖頭器	無斑晶ガラス質安山岩	6.20	2.01	8.50	11.20
376	20	KU	尖頭器	黒曜石	2.90	1.85	0.90	4.07
377	20	KU	尖頭器未製品	ホルンフェルス	6.32	2.91	1.22	24.05
378	20	KU	ナイフ形石器	黒曜石	1.61	1.29	0.48	1.22

第18表 富士岡1古墳群2区古墳周溝の概要

()は残存値

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	規模(m) 東西×南北	最大幅(m)	最大深(m)
3号古墳周溝(SD21)	8, 66~68	22	KU	I-14, 15, J-14, 15, K-14, 15	(4.6) × (17.1)	3.2	0.6

第19表 富士岡1古墳群2区竪穴状遺構の概要

()は残存値

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	規模(m) 長軸×短軸	深さ(m)	ピット数
TA3	8, 66, 71	23	KU	K, L-14	N-11°W	(4.9) × (0.9)	0.4	0

第20表 富士岡1古墳群2区溝状遺構の概要

()は残存値

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	全長(m)	最大幅(m)	最大深(m)
SD20	8, 66, 69	—	KU	K, L-14	(13.5)	0.9	0.1
SD22	8, 66, 72	23	KU	I, J-14	(6.3)	1.5	0.4

第21表 富士岡1古墳群2区集石の概要

()は残存値

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	規模(m) 長径×短径	礫数	赤比率	遺物
SY20	76, 77	24	KU	L-14	2.0×1.0	31	26%	第78図398~402, 406

第22表 富士岡1古墳群2区土坑・小穴の概要

遺構名	挿図	図版	検出面	グリッド	種類	規模(m) 長径×短径	最大深(m)	平面形態	遺物
SK104	76・77	24	YL	L-14	土坑	2.0×0.8	0.2	不整形	第78図403~405, 407~410
SK101	76・77	24	YL	L-14	土坑	1.2×0.6	0.3	不整形	第78図397
SK103	8・66	KU	L-14	土坑	—	—	0.3	—	
SK103	8・66~73	KU	L-14	土坑	1.5×(0.3)	0.3	—	長楕円形	
SP400	8・66	KU	K-14	小穴	0.4×0.3	0.3	—	長楕円形	
SP401	8・66	KU	K-14	小穴	(0.5)×0.4	0.1	—	長楕円形	
SP402	8・66	KU	K-14	小穴	(0.3)×(0.1)	0.4	—	長楕円形	
SP403	8・66	KU	K-14	小穴	(0.2)×(0.1)	0.3	—	椭円形	
SP404	8・66	KU	J-14	小穴	0.4×0.3	0.1	—	椭円形	
SP405	8・66	KU	J-14	小穴	0.3×0.2	0.2	—	椭円形	

第23表 富士岡1古墳群2区古墳時代土器觀察表

埋蔵番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率(%)	高さ(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	調査	備考
379	25 3号古墳 周溝SD21 裏土	土師器	壺	蓋	30	(3.9)	(14.0)	5YR5/6明赤褐色	外側: 口縁部横ナデ 内側: 口縁部横ナデ	天井部凹印ヘラ削り 天井部横ヘマガキ	
380	SD22覆土	土師器	壺	口縁部	25	(2.3)	(9.8)	7.5YR5/3において	外側: 縦ハケ後ナデ 内側: 横ハラミガキ		
381	SD22覆土	土師器	壺	口縁部	30	(2.9)	(12.3)	5YR6/6橙	外側: 縦ハラ 内側: 縦ハケ後ナデ		
382	25 SD22覆土	土師器	壺	胴部~底部	30	(8.8)	7.8	10YR6/6明黄褐色	外側: 不明 内側: 不明	外側面磨滅 底部木葉痕	
383	25 SD22覆土	土師器	壺	胴部~底部	40	(10.4)	(13.0)	10YR4/6褐	外側: 斜めハケ後横シガキ 内側: 横ハラ		
384	SD22覆土	土師器	壺	底部	20	(3.7)	(8.0)	5YR6/8橙	外側: 横ハラミガキ 内側: 横ハケ・斜めハケ		
385	SD22覆土	土師器	壺	底部	80	(2.1)	4.6	5YR6/6橙	外側: 横ナデ 内側: 斜めハケ		
386	SD22覆土	土師器	壺	底部	40	(1.7)	(8.4)	5YR6/4において	外側: 縦ハケ 内側: 横ハケ後ナデ?	底部木葉痕	
387	25 SD22覆土	土師器	壺	口縁部~胴部	45	(21.5)	(22.4)	5YR7/6橙	外側: 1脚部~頸部斜めハケ 脚下部横ハケ 内側: 口縁部横ハケ後ナデ	脚上部横ハケ	
388	25 SD22覆土	土師器	壺	口縁部~胴部	45	(16.5)	(17.9)	7.5YR6/6橙	外側: 斜めハケ 内側: 口縁部横ハケ	脚部板ナデ	
389	25 SD22覆土	土師器	壺	口縁部~胴部	70	(11.6)	(15.2)	7.5YR5/3において	外側: 口縁部横ハケ 脚部横ハケ 内側: 口縁部横ハケ	脚部横ハケ後 ナデ?	

神岡 番号	国版 番号	出土 位置	種別	器種	部 位	残存率 (%)	高さ (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	調 整	備 考
390	25	SD22覆土	土師器	台付甕		50	(28.0)	(20.0)	7.5YR4/2灰褐色	外面：口縁部横ハケ後横ナデ 脚上部横ハケ 脚下部横ハケ 口到部キザミ 内面：口縁部横ハケ後横ナデ 脚部横ハケ後ナデ		
391	25	SD22覆土	土師器	甕	口縁部～脚部	20	(9.6)	(16.2)	7.5YR5/3に近い褐	外面：口縁部横ハケ後ナデ 脚部横ハケ 脚部横ハケ 内面：口縁部～脚部横ハケ 脚上部横ハケ後ナデ 脚中央部斜め指添ナデ 脚部斜めハケ		
392	25	SD22覆土	土師器	甕	口縁部～脚部	35	(14.3)	(14.4)	5YR7/6橙	外面：口縁部～脚部斜めハケ 脚部斜めハケ後横ハケ 内面：口縁部横ハケ後横ナデ 脚部横ハケ		
393	25	SD22覆土	土師器	台付甕	脚部	100	(8.9)		(10.2) 10YR6/3に近い黄橙	外面：板ナデ 脚部内面：横ハケ 脚部内面：横ハケ		
394	25	SD22覆土	土師器	高杯	脚部	40	(6.8)		(8.2) 7.5YR7/6橙	外面：鐵マガキ 内面：ナデ		
395		SD22覆土	土師器	小型鉢	底部	25	(4.6)		(8.6) 10YR4/2灰黃褐色	外面：斜ナデヘラミガキ 縦面ナデ 内面：ナデ		
396	KU	土師器	不明	口縁部					7.5YR6/6橙	外面：口向のキザミ 内面：口斜部直下ナデ 横ハケ		

第24表 富士岡1古墳群2区繩文時代土器観察表

神岡 番号	国版 番号	遺構 番号	位置	分 類	色 調	胎 土	文 様・調整等
397	26	SK101	覆土	II群2類d	7.5YR5/4に近い褐	長石・灰色砂粒	地文にRL繩文、弧状の粘土紐
398	26	SY20		II群2類d	7.5YR5/4に近い褐	長石・金雲母・灰色砂粒	地文にRLの多条繩文、横位の粘土紐に筋目
399	26	SY20		II群2類d	7.5YR5/4に近い褐	長石・石英・灰色砂粒	RL繩文
400	26	SY20		II群2類d	7.5YR5/4に近い赤褐色	長石・石英・金雲母・茶色・灰色砂粒・黒色粒子	RL多条繩文
401	26	SY20		II群2類d	7.5YR4/3褐	長石・石英・金雲母・灰色・茶色砂粒	LR繩文
402	26	SY20		II群2類d	7.5YR5/4に近い褐	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	弧状の粘土紐に結節浮線文
403	26	SK104	覆土	II群1類e	10YR7/6明黄色	長石・灰色・半透明砂粒	指頭压痕
404	26	SK104	覆土	II群1類i	10YR5/4に近い黄褐色	長石・灰色砂粒	横位の刻目文
405	26	SK104	覆土	II群1類i	10YR5/4に近い黄褐色	長石・石英・灰色砂粒	横位の刻目文
406	26	SY20		II群2類j	10YR7/4に近い黄褐色	長石・雲母	LR多条繩文
407	26	SK104	覆土	II群2類d	10YR4/3に近い黄褐色	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒	横位の粘土紐に結節浮線文
408	26	SK104	覆土	II群2類a	10YR5/4に近い黄褐色	長石・石英・金雲母・灰色・茶色砂粒	地文にLR繩文、横位・斜位の集合沈線
409	26	SK104	覆土	II群2類d	2.5Y/6/3に近い黄褐色	長石・灰色・褐色砂粒	横位の粘土紐に繩文
410	26	SK104	覆土	II群2類d	10YR6/4に近い黄褐色	長石・灰色・茶色砂粒	地文にRL繩文、横位の粘土紐に結節浮線文
411	26	—	—	I群1類b	10YR5/4に近い黄褐色	長石・灰色・茶色砂粒	外側面と口縁部にRL繩文
412	—	—	—	I群1類d	7.5YR6/6橙	長石・灰色砂粒	沈線区画間に半截竹管の連続網突文
413	26	KU	I群1類h	10YR6/3に近い黄褐色	長石・石英・灰色砂粒	波状口縁、口肩部に結節体压痕、縦位の微隆起線の区画内に斜位沈線	
414	KU	I群1類h	7.5YR7/6橙	10YR7/4に近い黄褐色	長石・石英・灰色砂粒	縦位・斜位沈線	
415	KU	I群2類j	7.5YR7/6橙	10YR7/4に近い黄褐色	長石・砂粒	斜位条痕	
416	KU	I群1類j	10YR7/4に近い黄褐色	長石・石英・砂粒		斜位条痕	
417	KU	I群2類i	7.5YR7/4に近い黄褐色	長石・砂粒・黑色粒子・纖維		斜位沈線	
418	KU	I群2類i	10YR6/4に近い黄褐色	長石・石英・灰色砂粒・纖維		RL多条繩文の羽状繩文	
419	KU	I群2類i	7.5YR7/6橙	長石・砂粒・黑色粒子・纖維		RL多条繩文・LR多条繩文で羽状繩文	
420	KU	I群2類i	7.5YR7/6橙	長石・砂粒・纖維		RL多条繩文・LR繩文で羽状繩文	
421	KU	I群1類i	5YR6/6橙		長石・灰色・茶色・黑色粒子・纖維	無文	
422	KU	I群2類i	7.5YR5/4に近い褐	長石・灰色砂粒・纖維		調整痕	
423	26	KU	II群1類b	10YR6/4に近い黄褐色	長石・灰色砂粒	斜位沈線・一部交差	
424	26	KU	II群1類c	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色砂粒	外側面に指頭痕・中越式系の可能性	
425	26	KU	II群1類g	7.5YR5/4に近い褐	長石・黑色粒子・纖維	組紐風繩文	
426	26	KU	II群1類g	7.5YR6/6橙	長石・黑色粒子・纖維	地文に繩文、横位・踏圧痕沈線	
427	26	—	—	II群1類g	10YR7/6明黄色	長石・石英・茶色・黑色粒子・纖維	多条繩文、結節羽状繩文
428	26	KU	II群1類g	10YR7/6明黄色	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒・纖維	地文にRL繩文、斜位・横位沈線	
429	26	KU	II群1類g	7.5YR6/6橙	長石・灰色・茶色砂粒・纖維	LR繩文の結節羽状繩文	
430	26	KU	II群1類g	7.5YR5/4に近い褐	長石・石英・金雲母・灰色砂粒・纖維	正反の合の撫りの羽状繩文	
431	26	KU	II群1類h	7.5YR5/4に近い褐	長石・金雲母・灰色砂粒・纖維	RL繩文	
432	27	KU	II群1類h	10YR5/4に近い黄褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	RL繩文	
433	KU	II群1類h	7.5YR5/4に近い黄褐色	長石・灰・黒の砂粒・金雲母		RL繩文	
434	27	—	—	II群1類h	10YR7/4に近い黄褐色	長石・石英・灰色・茶色砂粒	L繩文
435	27	KU	II群1類h	7.5YR5/4に近い褐	長石・金雲母・灰色砂粒	RL繩文・補修孔	
436	KU	II群1類h	7.5YR6/4に近い褐	長石・金雲母・灰色砂粒		RL繩文	
437	耕作土	II群1類h	10YR4/6褐		長石・石英・灰色・黑色粒子	LR繩文	

番号	固版番号	造構番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
438		KU	II群1類k	5YR5/4に赤褐色	長石・灰色砂粒	RL繩文	
439	27	KU	II群1類k	7.5YR5/4に赤褐色	長石・灰色・茶色・黑色粒子	RL繩文	
440	27	KU	II群1類k	7.5YR5/3に赤褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	LRとRLの結節羽状繩文	
441	27	KU	II群1類k	10YR4/6褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	LRとRLの羽状繩文	
442	27	KU	II群1類k	7.5YR5/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	RL繩文	
443		KU	II群1類k	7.5YR6/4に赤褐色	長石・灰・茶・黑色粒子	RL繩文	
444	27	KU	II群1類k	10YR7/6明黄色	長石・金雲母・灰色砂粒	RL繩文	
445	27	KU	II群1類k	10YR5/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	RL異方向繩文	
446		KU	II群1類k	10YR5/4に赤褐色	長石・灰色・黑色砂粒	LR繩文	
447	27	KU	II群1類k	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色砂粒	端部を枯節したRL繩文	
448		KU	II群1類k	10YR5/4に赤褐色	長石・灰色・黑色粒子	RL繩文	
449	27	KU	II群1類k	7.5YR5/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色・茶色・黑色粒子	RLとLの羽状繩文	
450		KU	II群1類k	10YR5/4に赤褐色	長石・灰色・黑色の砂粒	RL繩文	
451		KU	II群1類k	10YR5/4に赤褐色	長石・石英・灰色・黑色粒子	RL繩文	
452		KU	II群1類k	10YR5/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色・黑色粒子	RL繩文	
453		KU	II群1類k	10YR6/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒	RL繩文	
454	27	KU	II群2類k	7.5YR4/4褐色	長石・石英	RL多条繩文	
455		—	II群1類k	10YR5/3に赤褐色	長石・石英・金雲母	LR繩文	
456	27	KU	II群1類k	7.5YR5/4に赤褐色	長石・茶色・黑色粒子	RLとLの羽状繩文	
457		KU	II群1類k	10YR5/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色・茶色砂粒	RLとLの羽状繩文	
458		KU	II群1類k	7.5YR5/4に赤褐色	長石・石英・灰色砂粒	RL多条繩文	
459		KU	II群1類k	10YR5/4に赤褐色	長石・灰色・黑色粒子	L繩文	
460		KU	II群1類k	10YR4/3に赤褐色	長石・石英・灰色・黑色粒子	RL繩文	
461		KU	II群1類k	7.5YR5/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色・茶色・黑色粒子	RL繩文	
462		YL	II群1類k	10YR5/4に赤褐色	長石・灰色砂粒	LR繩文	
463		KU	II群1類k	7.5YR5/4に赤褐色	長石・石英・灰色砂粒	RL繩文	
464		KU	II群1類k	5YR5/4に赤褐色	長石・石英・灰色・黑色粒子	RL繩文とLR繩文	
465	27	KU	II群1類k	7.5YR4/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	RL繩文	
466	27	KU	II群2類a	10YR8/4浅黃色	長石・石英・茶色・黑色砂粒	地文にRL多条繩文、横位・弧状の扁平な浮線文	
467		KU	II群2類a	5YR4/3に赤褐色	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	地文にRL繩文、斜位・弧状の扁平な浮線文	
468	27	KU	II群2類a	2.5YR4/4褐色	長石・灰色砂粒	地文にRL繩文、横位・弧状の扁平な浮線文	
469		KU	II群2類a	7.5YR5/4に赤褐色	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	地文にRL繩文、横位・弧状の扁平な浮線文	
470	27	KU	II群2類a	10YR7/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	地文にRL多条繩文、横位の扁平な浮線文	
471	27	KU	II群2類a	10YR7/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	地文にRL繩文、横位の扁平な浮線文	
472	27	KU	II群2類a	7.5YR7/6橙	長石・灰色砂粒	RL繩文、横位・斜位・弧状の扁平な浮線文	
473	27	KU	II群2類a	10YR8/4浅黃色	長石・金雲母・灰色砂粒	地文にRL多条繩文、横位の扁平な浮線文	
474	27	KU	II群2類a	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色砂粒	地文にRL繩文、横位・弧状の扁平な浮線文	
475	27	KU	II群2類a	10YR7/5に赤褐色	長石・黑雲母・灰色砂粒	地文にRL多条繩文、横位の扁平な浮線文	
476	27	KU	II群2類a	10YR6/2灰褐色	長石・灰色砂粒	地文にRL多条繩文、横位の扁平な浮線文、斜交文	
477	28	KU	II群2類a	10YR6/4に赤褐色	長石・石英・金雲母・灰色砂粒・黑色粒子	波状口縁、地文にRL繩文、口縁に沿った集合沈線、横位の集合沈線、波頂部に突起	
478	27	KU	II群2類a	7.5YR4/4褐色	長石・石英・金雲母・灰色・黑色粒子	波状口縁、LR羽状繩文	
479		KU	II群2類a	7.5YR5/4に赤褐色	長石・石英・灰色砂粒	波状口縁、地文にRL繩文、横位の密接薄鉗狀平行沈線の区画内に縦位・斜位の密接薄鉗狀平行沈線	
480		KU	II群2類a	5YR5/4に赤褐色	長石・石英・灰色砂粒	波状口縁、地文にRL多条繩文、口縁部に沿った集合沈線と横位沈線の区画内に横位の密接薄鉗狀平行沈線	
481		KU	II群2類a	5YR4/4に赤褐色	長石・石英・金雲母・灰色・黑色砂粒	波状口縁、地文にRL繩文、口縁部に沿った集合沈線と横位沈線の区画内に横位の密接薄鉗狀平行沈線	
483		KU	II群2類a	10YR3/2黒褐色	長石・灰色砂粒	波状口縁、地文にRL繩文、横位の密接薄鉗狀平行沈線	
484	27	KU	II群2類a	7.5YR4/3褐色	長石・金雲母・灰色・黑色粒子	波状口縁、地文にLR多条繩文、口縁部に沿った密接薄鉗狀平行沈線と横位集合沈線の区画内に横位の密接薄鉗狀平行沈線	
485	28	KU	II群2類a	7.5YR4/2灰褐色	長石・石英・金雲母・灰色砂粒・黑色粒子	波状口縁、地文にLR繩文、波頂部に円形の突起、縦位の密接薄鉗狀平行沈線、横位・斜位の不規則な沈線	
486	27	KU	II群2類a	5YR5/4に赤褐色	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	地文にRL繩文、縦位・横位の密接薄鉗狀平行沈線	
487		KU	II群2類a	7.5YR6/4に赤褐色	長石・金雲母・灰色砂粒	RL繩文	
488	27	KU	II群2類a	7.5YR5/4に赤褐色	長石・石英・灰色砂粒	波状口縁、地文にLR繩文、口縁部に沿った密接薄鉗狀平行沈線と横位集合沈線の区画内に斜位の密接薄鉗狀平行沈線	
489	27	KU	II群2類a	5YR4/6赤褐色	長石・石英・金雲母・灰色・黑色砂粒	波状口縁、地文にLR繩文、波頂部に円形の突起、縦位の密接薄鉗狀平行沈線	
490	27	KU	II群2類a	7.5YR5/4に赤褐色	長石・石英・金雲母・灰色・黑色粒子	RL繩文、縦位の沈線	
491	27	KU	II群2類a	10YR6/4に赤褐色	長石・石英・灰色砂粒	横位集合沈線の区画内に山形の集合沈線	
492	27	KU	II群2類a	10YR6/4に赤褐色	長石・石英・灰色砂粒	L繩文	

擇団番号	圓版番号	造構番号	位置	分類	色調	胎 土	文様・調整等
493	27		KU	II群2類a	10YR8/4浅黃橙	長石・金雲母・灰色砂粒	横位・弧状・斜位の沈線
494			KU	II群2類a	10YR5/4にせい黄橙	長石・灰色・黑色粒子	地文に鰐文、弧状の扁平な浮線文、刺突文
495			—	II群2類a	5YR4/4にせい赤褐	長石・石英・金雲母・灰色・茶色砂粒	横位集合沈線
496	27		KU	II群2類a	7.5YR6/4にせい般	長石・金雲母・灰色・茶色・黑色粒子	有孔浅鉢形土器
497	27		—	II群2類a	7.5YR6/6橙	長石・石英・金雲母・灰色・黑色粒子	有孔浅鉢形土器
498	27		—	II群2類a	7.5YR5/4にせい褐	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	無文の浅跡
499			KU	II群2類a	5YR5/4にせい赤褐	長石・石英・金雲母・灰色砂粒	地文に一部RL鰐文、横位の粘土紐に結節浮線文
500	28		KU	II群2類d	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色・黑色砂粒	地文に一部RL鰐文、横位の粘土紐に結節浮線文
501	28		KU	II群2類d	7.5YR5/3にせい褐	長石・石英・金雲母・灰色・黑色粒子	横位の粘土紐に結節浮線文
502	28		—	II群2類d	7.5YR5/4にせい褐	長石・石英・金雲母・灰色・黑色粒子	折り返し口縁、円形の沈線文、中心部に印刻文
503			—	II群2類a	10YR6/4にせい黄橙	長石・金雲母・灰色・茶色・黑色粒子	波状口縁、横位の密接面鉢状平行沈線文に斜位の密接面鉢状平行沈線
504	28		KU	II群2類d	7.5YR5/4にせい褐	長石・金雲母・灰色砂粒	波状口縁、外面部口縁に沿った粘土紐、三角印刻文、内面波頂部に半円形の突起
505			KU	II群2類d	7.5YR5/4にせい褐	長石・金雲母・灰色・黑色砂粒	地文にRLとLRの羽状鰐文、縦位の粘土紐に結節浮線文
506			KU	II群2類d	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色・黑色砂粒	地文にRL鰐文、縦位の密接面鉢状平行沈線、三角印刻文
507			KU	II群2類d	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色・黑色砂粒	格子状の沈線、横位の粘土紐に刻目
508			KU	II群2類d	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色・黑色砂粒	地文にRL鰐文、横位の粘土紐に結節浮線文
509			KU	II群2類d	7.5YR6/6橙	長石・金雲母・灰色・黑色砂粒	折り返し口縁、内面地文にRL鰐文、ハの字状の粘土紐、外面RL鰐文
510	28		KU	II群2類f	10YR5/4にせい黄褐	長石・金雲母・灰色砂粒	ハの字状の粘土紐、外面RL鰐文
511			KU	底部	10YR5/3にせい黄褐	長石・金雲母	底面円形・半円形の压痕

第25表 富士岡1古墳群2区繩文時代石器属性表

擇団番号	圓版番号	層 位	器 種	分 類	石 材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)
512	28		石器	II A 1	黒曜石	1.37	1.15	2.30	0.20
513	28	KU	石器	II A 1	黒曜石	2.37	1.96	3.60	0.81
514	28	KU	石匙	横型	ホルンフェルス	4.12	4.31	1.05	16.04
515	28		打製石斧	II	真岩	11.20	5.36	1.35	80.38
516		KU	磨石	III	輝石安山岩	15.60	11.50	6.70	1720.00
517		KU	磨歯石	IV	安山岩	15.00	6.30	6.30	900.00
518		KU	磨歯石	IV	安山岩	8.50	6.50	5.40	450.00
519	YL		磨歯石	IV	輝石安山岩	12.70	10.80	6.00	1200.00
520		KU	磨歯石	IV	安山岩	14.60	6.90	6.90	800.00
521			石皿	I	多孔質安山岩	24.80	19.50	4.90	2890.00
522		KU	石皿	I	安山岩	28.70	25.60	11.50	11950.00

第26表 富士岡1古墳群2区繩文時代块状耳飾属性表

擇団番号	圓版番号	位置	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	欠 損	石材	色 調	分 類	備 考
523	28	KU	3.50	1.20	1.30	1/2欠損	—	7.5YR7/6橙	土製块状耳飾	体部断面三角形
524	28		5.27	3.02	1.40	1/2欠損	頁岩	—	石製块状耳飾	体部平坦 重量19.48 g

第6章 向山遺跡

第1節 調査履歴

向山遺跡は愛鷹山麓の西端の舌状丘陵に位置し、南北250m、東西300mの範囲に広がる。

昭和53年、農道工事中に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての完形の土器が一括で出土して、本遺跡の存在が知られるようになった。平成3年、鉄塔増強工事に伴って富士市教育委員会による発掘調査が実施された(富士市教委1992)。この結果、縄文時代早期末と古墳時代初頭の竪穴建物が1軒ずつ検出された。出土した縄文土器は早期末から前期初頭の条痕文系土器が主体である。(岩崎)

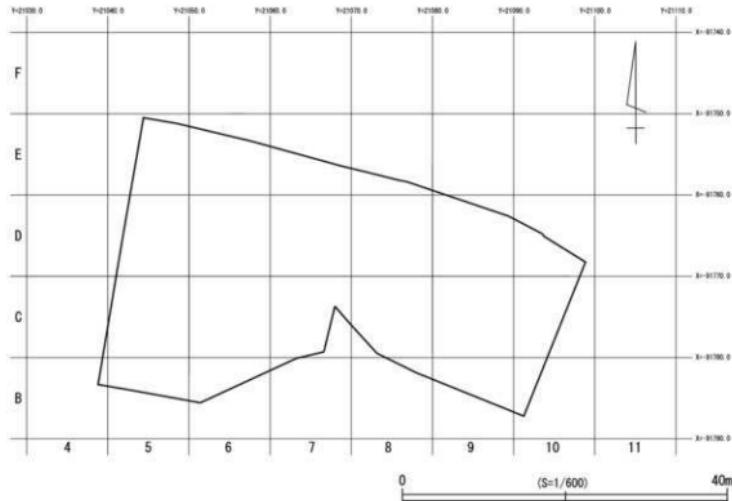
第2節 基本土層と土層の堆積状況

本遺跡は愛鷹山麓に立地する遺跡の中で最も西に位置する遺跡である。山体から離れているにもかかわらず上部ローム層の堆積が良好に残っている。

第2層の大瀬スコリア層と第3層のクロボク土層は調査区の北西側のみに堆積している。遺構は第3層上面で検出されたものと、第5層上面で検出されたものが見られる。第5層の火山灰層である栗色土層と腐食土層である富士黒色土層の境界は不明瞭である。第11層、第12層のニセローム層は始良丹沢バミス(AT)を包含する層であるが、本遺跡では確認できなかった。上部ローム層の残存状況は尾根上では良好であるが、谷部では休場層の直下は中部ローム層となる。(岩崎)



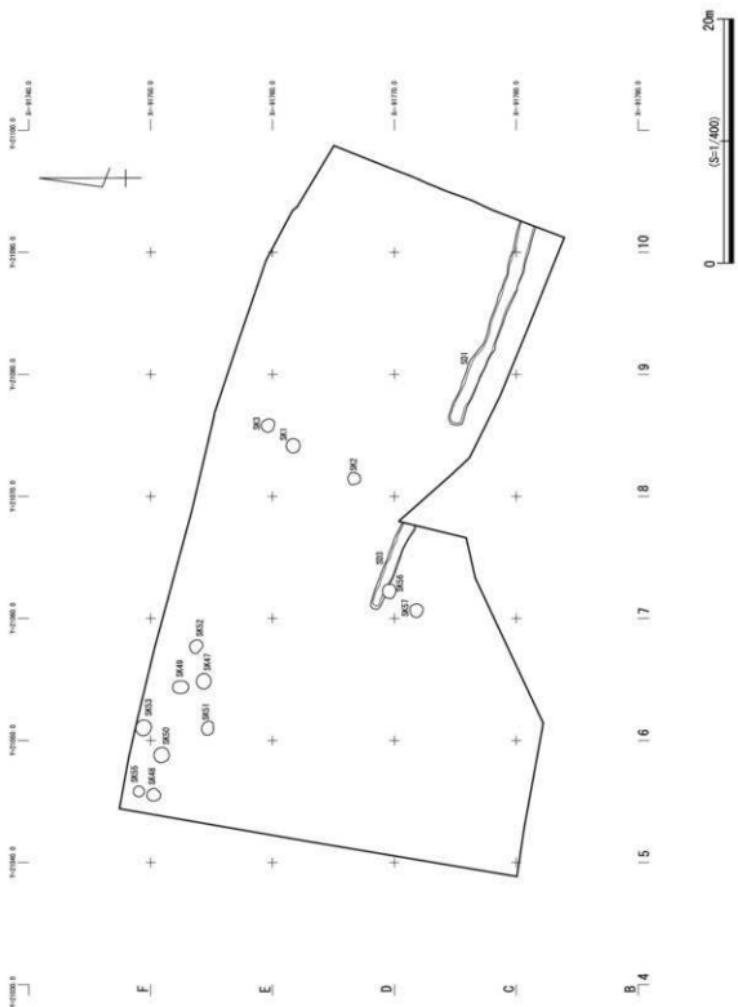
第86図 調査区位置図



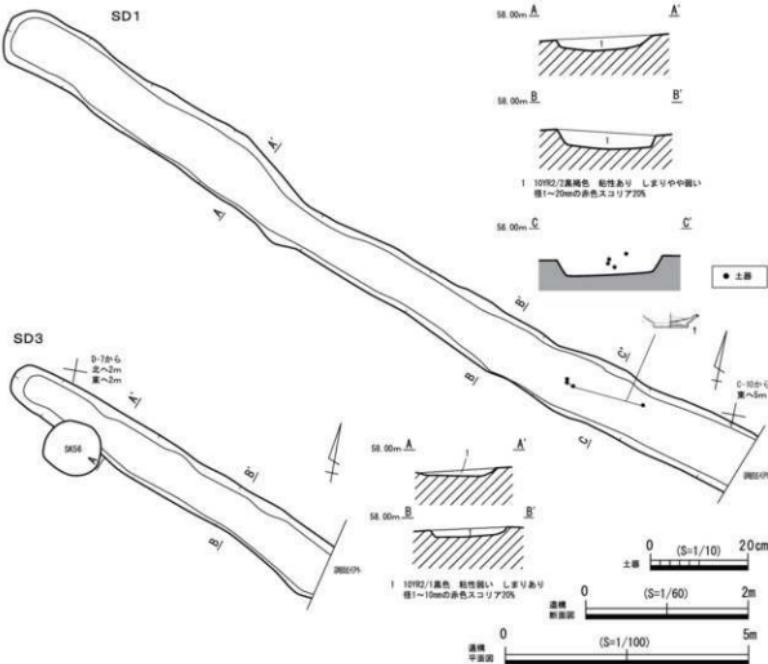
第87図 グリッド配置図

	V	V	V	第1層 表土	第10層 第1黒色带 10YR2/3黒褐
	1			第2層 大陸スコリア層 10YR1.7/1 黒 粘性やや弱 しまりやや弱 1~2mm大の 赤色スコリア少量含む	粘性あり しまり強 1~20mm大の赤色 スコリア少量含む 1~2mm大の黒色 ラビツア少量含む 同大の黄色ラビツア 少量含む
表土	▲▲▲ 2 ▲▲▲	Obs	第3層 クロボク土層 10YR1.7/1 黒 粘性やや弱 しまりやや弱	第11層 ニセヨーロム層 10YR2/4暗褐 粘性あり しまり強 1~10mm大の赤色 スコリア含む 同大の黒色ラビツア 含む 1~2mm大の黄色ラビツア少量 含む	
	3	クロ	第4層 基礎土層 10YR2/2 黒褐	第12層 ニセヨーロム層 b 7.5YR4/暗 粘性やや強 しまり強 1~10mm大の赤色 スコリア含む 1~5mm大の黒色ラビツア 少量含む 1~2mm大の黄色ラビツア 少量含む	
	4	AN	粘性あり しまりあり 1~3mm大の赤色 スコリア少量含む	第13層 第2黒色带 10YR2/4暗褐 粘性あり しまり強 1~10mm大の赤色 スコリア含む 1~10mm大の黒色ラビツア ラビツア少量含む 1~2mm大の黄色ラビツア 少量含む	
	5	KU ~ FB	第5層 艶色土~富士高層土層 10YR3/3暗褐 粘性あり しまりやや強 1~2mm大の 赤色スコリア少量含む	第14層 第3黒色带 10YR4/4褐 粘性やや強 しまり強 1~10mm大の赤色 スコリア含む 同大の黒色ラビツア ラビツア少量含む 1~2mm大の黄色ラビツア 少量含む	
	6	ZN	第6層 清掃層 10YR3/4暗褐 粘性強 しまりやや強 1~3mm大の赤色 スコリア少量含む	第15層 第4黒色带 10YR4/4褐 粘性やや弱 しまり強 1~5mm大の赤色 スコリア含む 同大の黒色ラビツア ラビツア少量含む 1~2mm大の黄色ラビツア 少量含む	
	7	YL	第7層 休耕層 10YR4/4褐 粘性強 しまりあり 1~3mm大の赤色 スコリア少量含む		
	8	BB	第8層 第5黒色带 10YR3/3暗褐 粘性弱 しまり強 1~3mm大の赤色 スコリア少量含む 1~2mm大の黒色 ラビツア少量含む 同大の黄色ラビツア 少量含む		
	9	Sc I	第9層 第1スコリア層 10YR3/4暗褐 粘性弱 しまり強 1~5mm大の赤色 スコリア少量含む 1~2mm大の黒色 ラビツア少量含む 同大の黄色ラビツア 少量含む		
	10	BB I	第10層 第2スコリア帶 10YR4/4褐 粘性やや弱 しまり極めて強 1~5mm大の 赤色スコリア含む 1~10mm大の黒色 ラビツア少量含む 1~2mm大の黄色ラビツア 少量含む		
	11	M.L.			
	12	NL.b			
	13	BB II			
	14	Sc II			
	15	BB III			

第88図 基本土層柱状図



第1 造機面道路配設図



第90図 第1遺構面 溝状造構

第3節 古墳時代以降の遺構と遺物

1 遺構

第1遺構面は第3層クロボク土層から検出された遺構である。溝状造構2基、土坑13基を検出した。遺構覆土は大淵スコリアが混入しているが、大淵スコリア層そのものではなく、上層の表土まじりの覆土であった。

(1) 溝状造構（第30表）

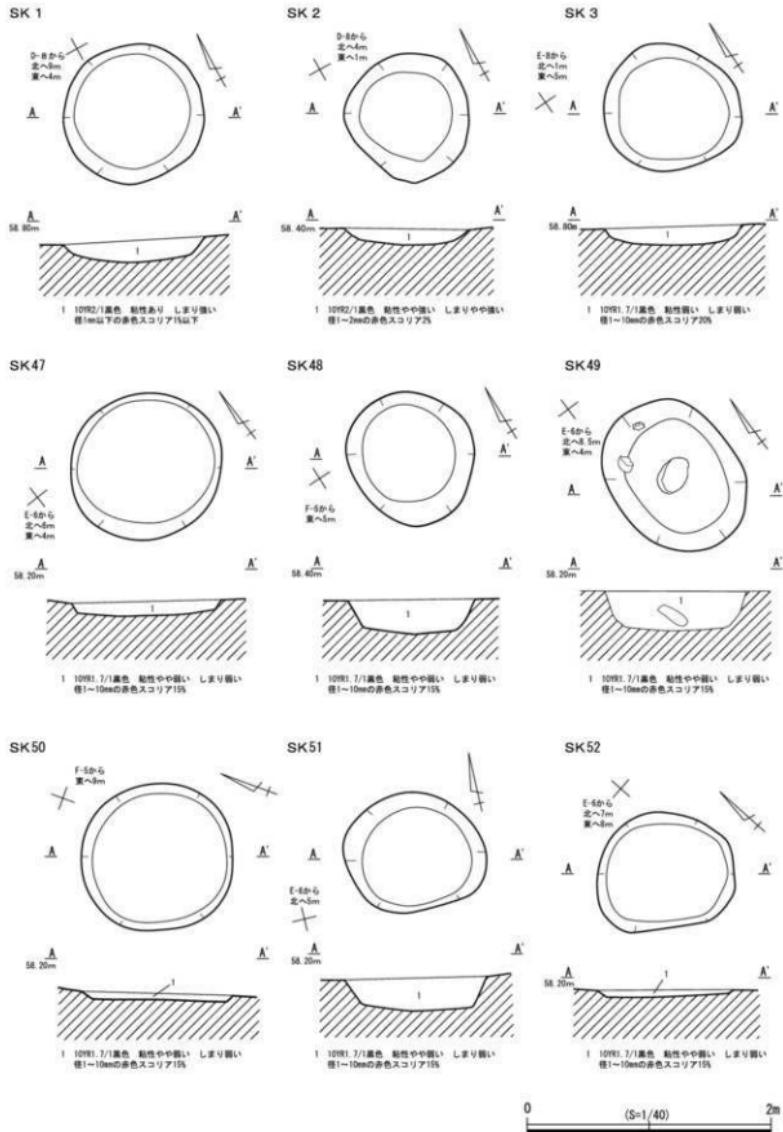
ア SD1（第90図）

C-8・C-9グリッド、調査区南東から北西にかけて伸びる全長17.5mの溝状造構である。断面形は台形状で、深さは15~20cm前後である。覆土内から中近世の遺物が1点出土した。

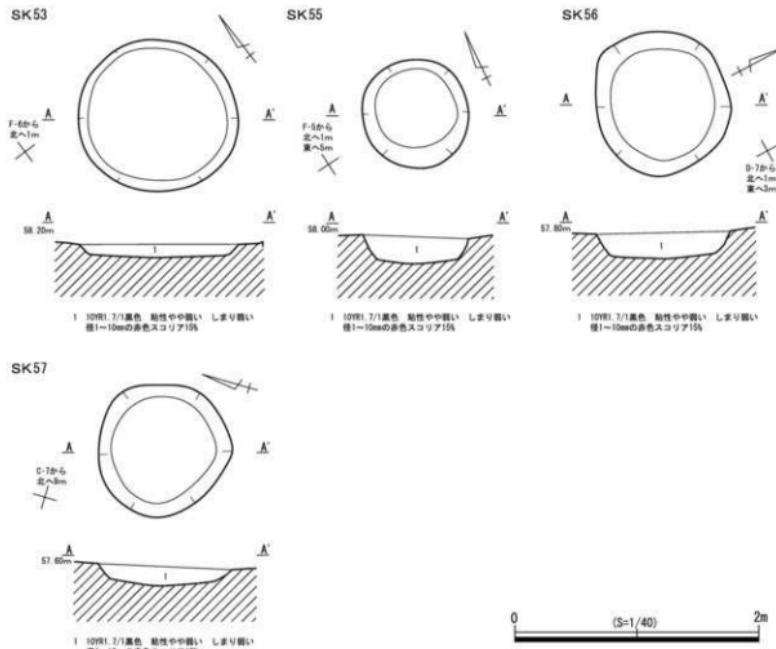
イ SD3（第90図）

C-7・D-7グリッド、調査区中央、南側にのびる全長7.5mの溝状造構である。削平を受けており、断面形は台形状または皿状、深さは10cm前後である。

SD1、SD2は一連の溝状造構であった可能性がある。



第91図 第1遺構面 土坑1



第92図 第1遺構面 土坑2

(2) 土坑(第91・92図・第32表)

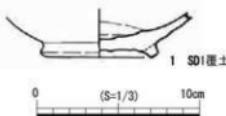
S K49を除いた全ての土坑は平面形が円形を呈する土坑である。断面形は底面に平坦面を持ち、立ち上がりっている。遺物の出土はない。

S K49は梢円形を呈する土坑である。土坑の底面付近では、長径31cmの河原石が出土している。遺構の形状から土坑墓の可能性も考慮されるが、根拠に乏しい。(西田)

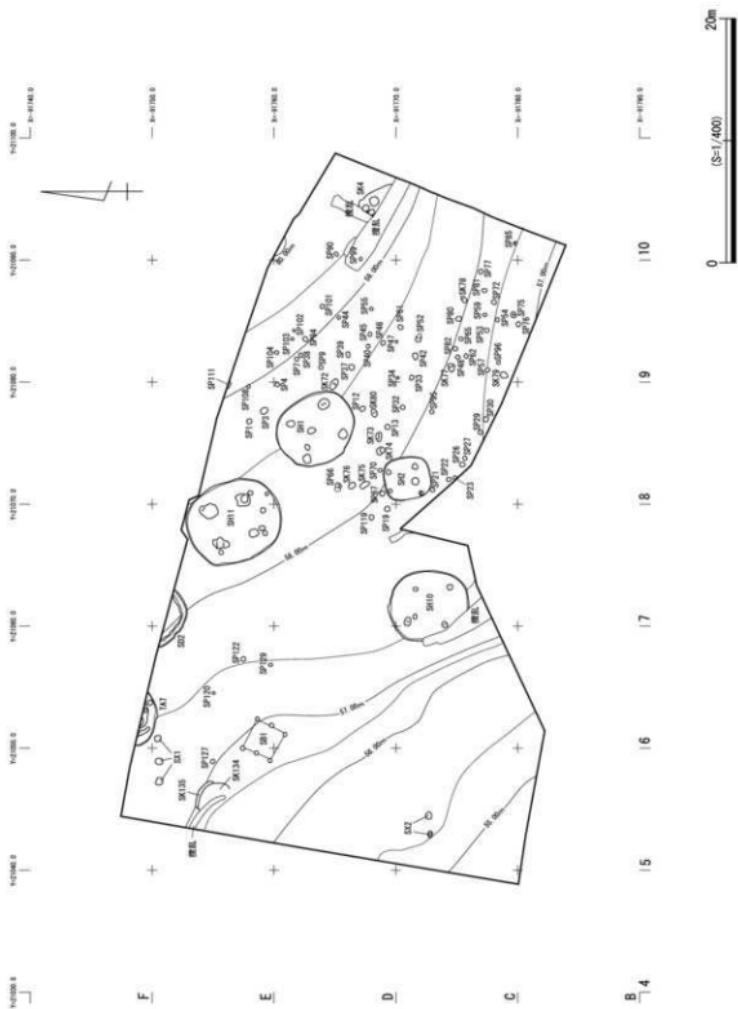
2 遺物

SD 1 出土遺物(第93図1・第33表)

1は陶器の塊である。貼付高台を有し、底面には糸切り痕が見られる。(岩崎)



第93図 遺構出土遺物



第94圖 第2邊構面遺構配置圖

第4節 古墳時代の遺構と遺物

1 遺構

古墳時代の遺構は本来の掘り込み面と遺構覆土の判別が困難であるため、第5層栗色土層上面にて遺構を検出した。遺構は竪穴建物5軒、掘立柱建物1棟、溝状遺構1基、土坑10基、小穴76基、不明遺構2基である。

調査区東側で検出されており、西側では竪穴建物や掘立柱建物が出土しているものの、土坑や小穴は西側ほど検出されなかった。

(1) 竪穴建物（第27表）

ア SH1（第95図）

D-8グリッド、調査区中央に位置する。

構造 平面形は小判形を呈する。長軸を北西と南東に向ける。掘方は円形に掘り込まれ、床面構築土（第5層）の厚さは4~15cmである。掘方は円形に掘り込まれているため、中心部分が高くなっている。主柱穴はP1~P4で4基検出され、不整円形をなしている。径50cm~80cmと規模は一定でない。炉は、建物中央のやや北東寄りで地床炉が検出されている。長径69cm、短径47cmの梢円形で深さ9cmとなる。
遺物出土状況 遺物は古墳時代前期の土師器が床面直上から出土し、南西の柱穴P2内からは小碟がまとまって出土した。

イ SH2（第96図）

C-8・D-8グリッド、調査区中央南側に位置し、竪穴建物南西部は削平を受けている。

構造 平面形は正方形に近い隅丸方形をなす。

掘方は円形に掘り込みがなされ、床面構築土（第6・7層）が確認され、最大で16cmの厚さを測る。主柱穴はP1~P4で4基検出されている。平面形は不整円形である。炉は中央南西寄りに置石炉が検出されている。径57cm深さ11cmの円形の掘り込み内に細長い石が2つ並べられていた。

遺物出土状況 遺物の出土はなかったため、遺物からは遺構の所属時期はわからない。平面形は他の竪穴建物とは異なった形態を示しているが、覆土の特徴から、他の竪穴建物と同じく古墳時代のものと判断した。

ウ SH10（第97図）

C-6・C-7・D-7グリッド、調査区中央の南側に位置する。

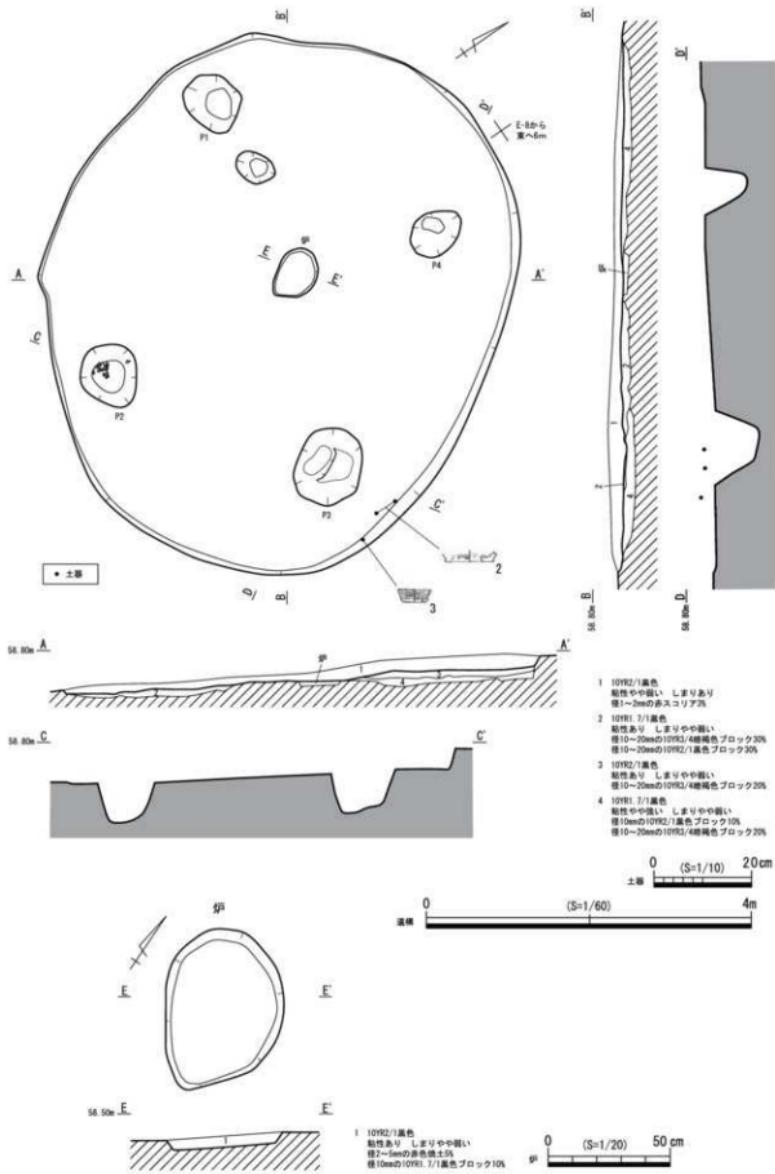
構造 平面形は円形に近い小判形を呈している。床面構築土（第3~5層）が確認され、最大で25cmの厚さを測る。主柱穴はP1~P4の4基が検出されており、いずれも平面形は梢円形である。P4は他の柱穴と比べてやや規模が小さいが柱穴と考えた。炉は、掘方を明確に持つものは検出されていないが、建物中央北東寄りで焼土の広がりが確認されている。焼土は50~60cmの範囲にわたって広がっている。

遺物出土状況 遺物は建物北西の覆土から出土したほか、建物中央の焼土の南西側の床面直上では、人為的に集められたとみられる壺や甕が集中して出土した。これらの遺物の時期から、遺構の所属時期は古墳時代前期と考えられる。

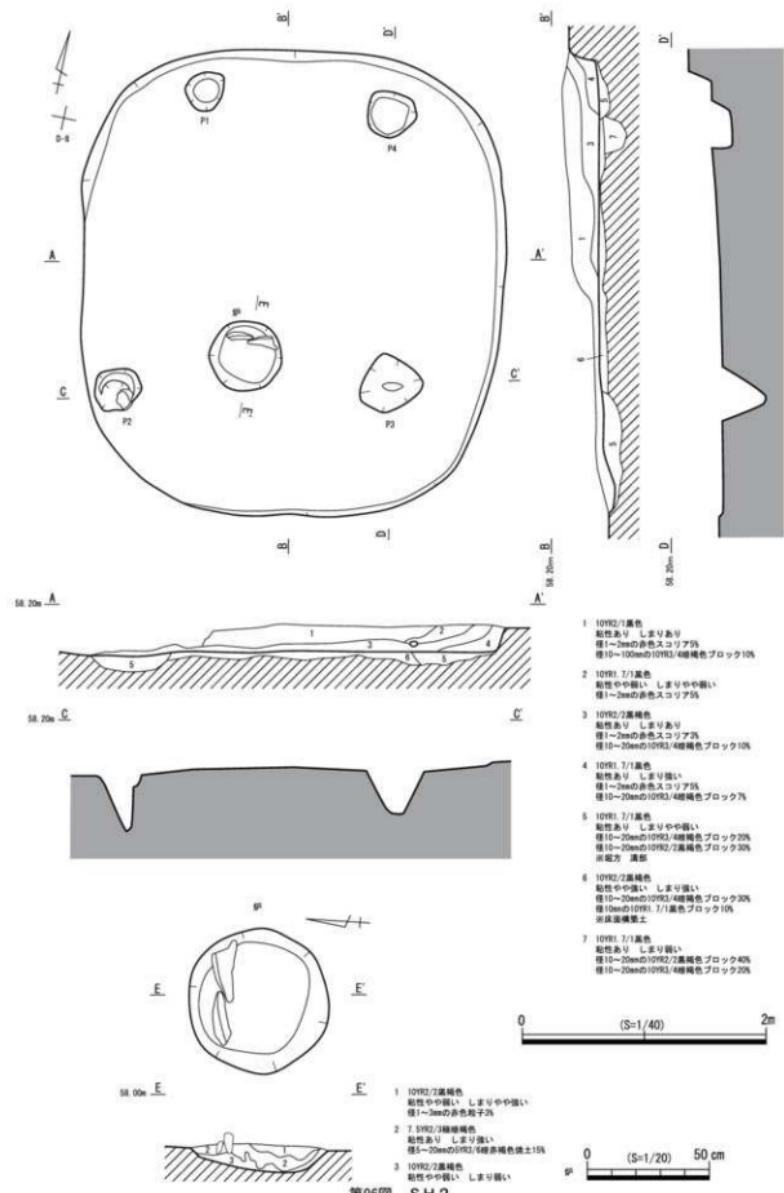
エ SH11（第98・99図）

E-7・E-8グリッド、調査区中央に位置する。

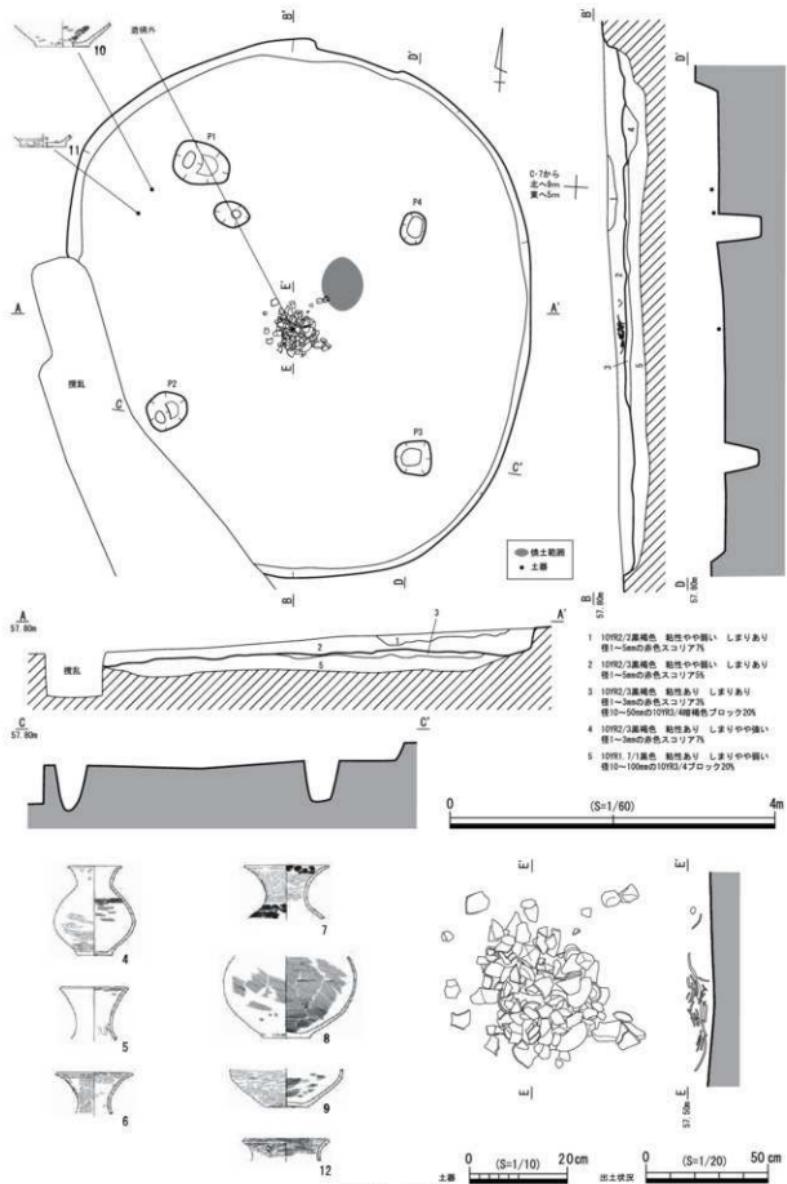
構造 平面形は小判形を呈する。主柱穴は4基検出され、平面形は不整形であるが、隅丸方形に近い。掘方は円形に掘り込まれ、床面構築土（第6・7層）が充填されていた。厚さは3~25cmを測る。炉は掘方や焼土は確認されていないが、建物中央の床面直上から炉石と思われる礫が検出されているため、



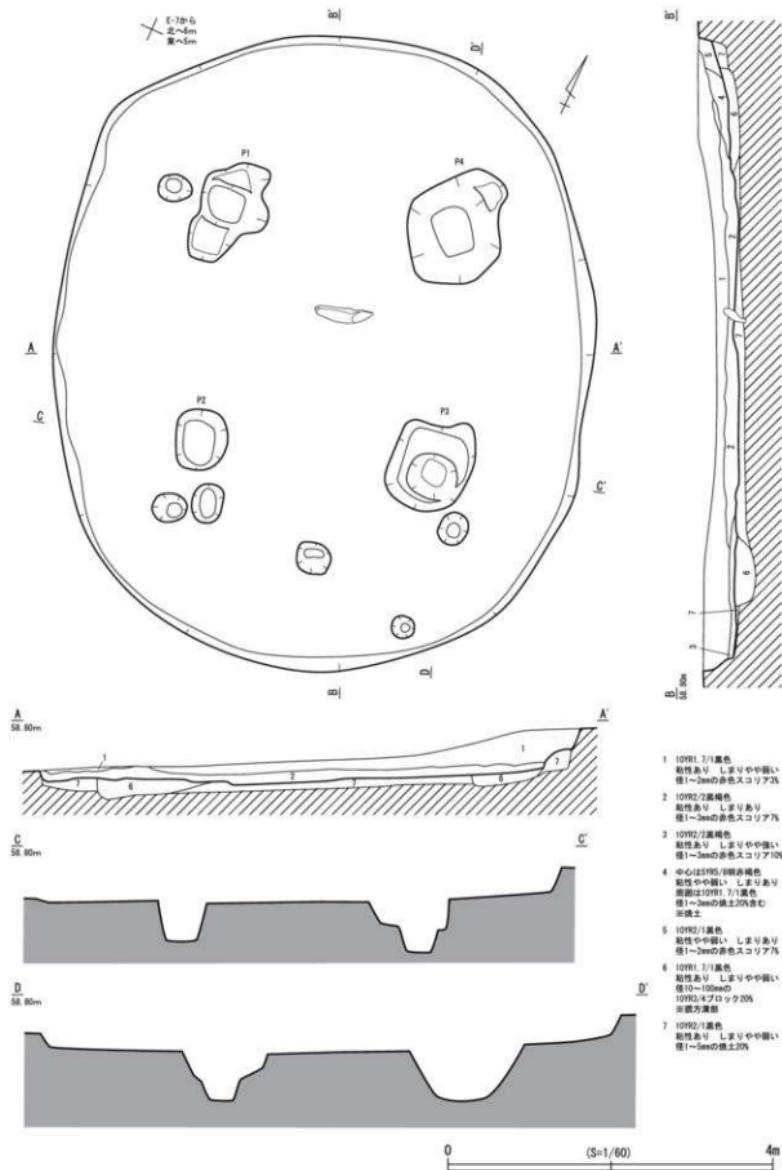
第95図 SH 1



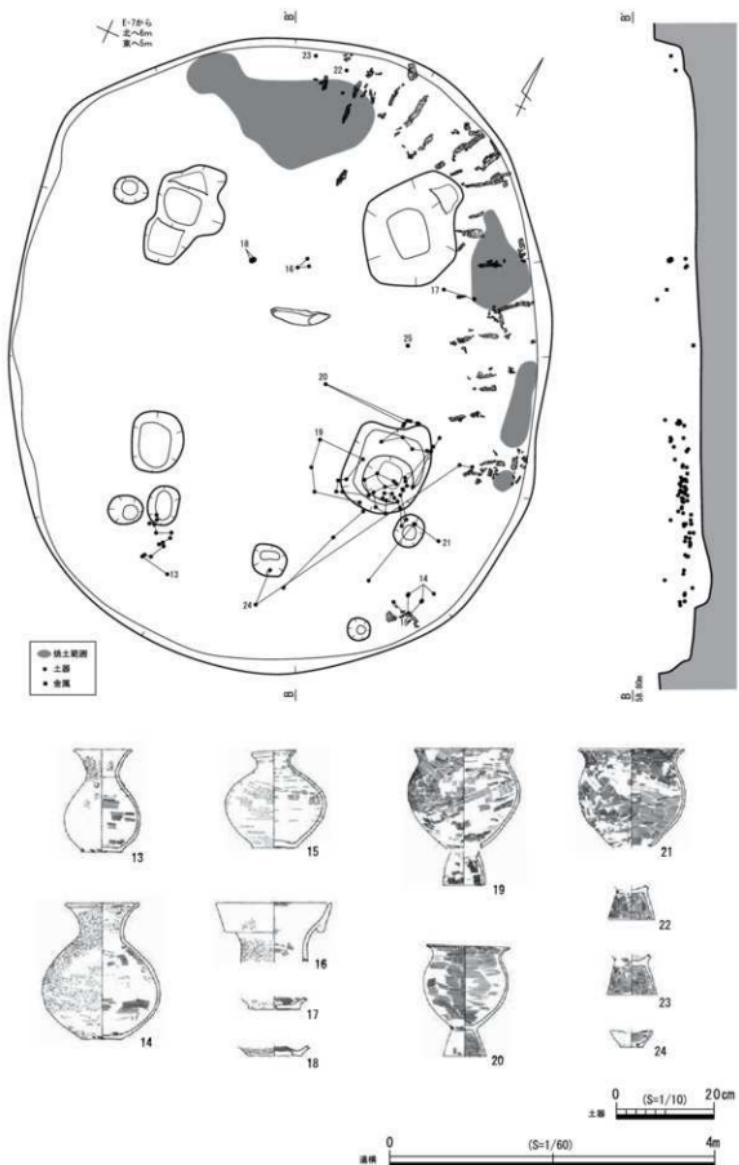
第96図 SH 2



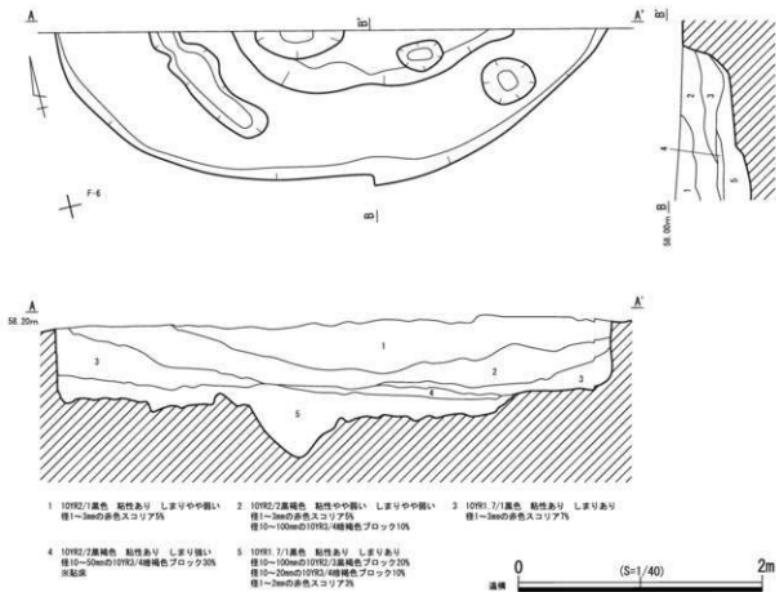
第97図 SH10



第98図 SH11



第99図 SH11遺物出土状況



第100図 TA 7

本来は存在していた可能性がある。

遺物出土状況 遺物は南東の柱穴P3周辺の床面で土器が集中して出土している。また、炭化材についても南東側で放射線状に散らばって出土している。SH11は出土遺物から古墳時代前期の遺構と考えられる。

(2) 壓穴状遺構 TA 7 (第100図・第28表)

E-6・F-6グリッド、調査区西側に位置する。遺構の大部分が調査区外であるため、遺構全体の構造がわからない。壓穴建物跡である可能性が高いが、壓穴状遺構として報告する。

TA 7内には溝と土坑が掘り込まれているほか、床面構築土とみられる厚さ6~24cmほどの堆積(第5層)がみられた。

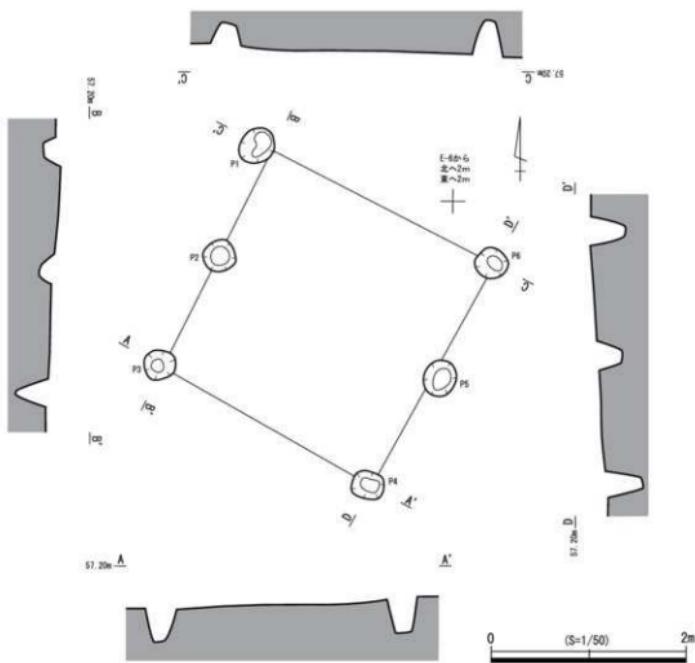
遺物の出土はなく、遺物からの遺構の所属時期を求ることはできないが、覆土の特徴から、壓穴建物と同じく古墳時代前期の遺構である可能性が高い。

(3) 捩立柱建物 SB 1 (第101図・第29表)

E-5・E-6・D-6グリッド、調査区北西に位置する。柱間規模は1×2間であり、やや不整形な長方形である。桁行2.5m、梁間2.6mを測る。建物を構成する柱穴の平面形は円形をなしており、径40~45cmを測る。覆土の特徴から、壓穴建物の時期と同じく、古墳時代前期の遺構と位置付けることができる可能性が高い。

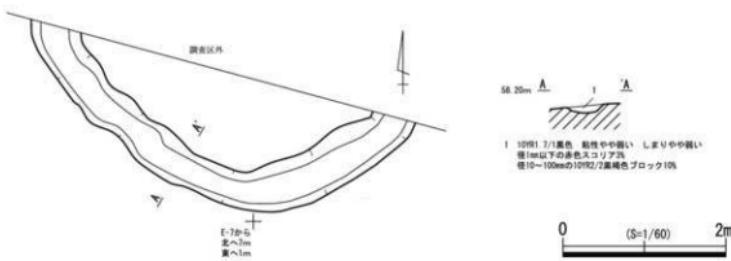
(4) 溝状遺構 SD 2 (第102図・第30表)

E-6・E-7グリッド、調査区中央西寄りから出土し、遺構の北側は調査区外となっている。全長3m27cmで平面形は半円状に掘り込まれ、断面は皿状で深さは10cmである。遺物の出土もなく、遺構の

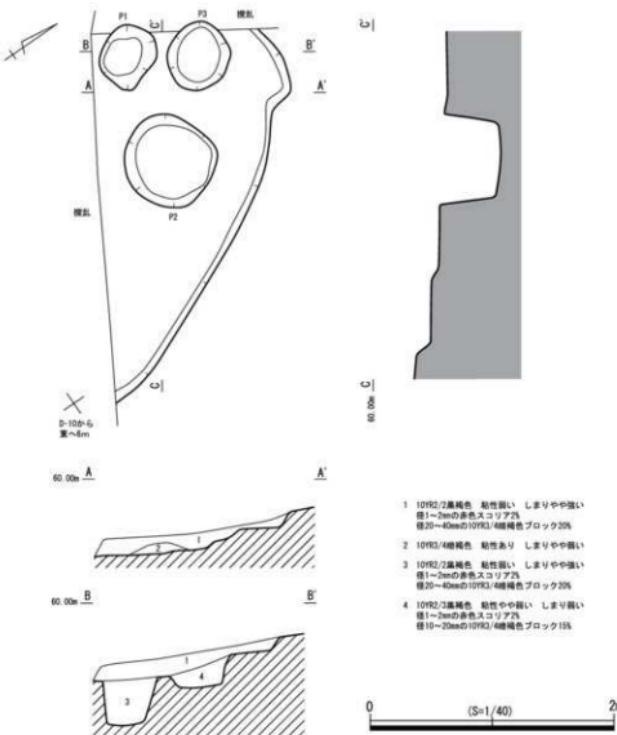


第101図 SB 1

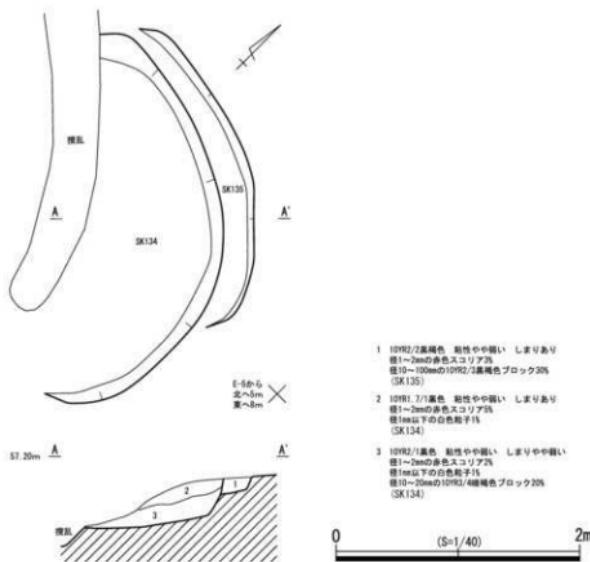
SD2



SK4



第102図 第1遺構面 溝状遺構・土坑



第103図 S K134・S K135

性格も不明である。

覆土の特徴から、堅穴建物の時期と同じく、古墳時代前期の遺構と位置付けることができる可能性が高い。

(5) 土坑および小穴（第32表）

土坑としたものは10基、小穴としたものは76基である。それぞれ平面形や深さの違いや断面形に違いが認められる。壁面の立ち上がりの急なもの、皿状もの、擂鉢状のものなどを検出した。

ア S K4（第102図）

D-10グリッド、調査区東側に位置する。擾乱によって大部分が削平されており本来の平面形は不明である。遺構内には50cm~80cm、深さ20~50cmの土坑が3基掘り込まれている。遺物の出土はない。

イ S K134（第103図）

E-5グリッド、調査区西側に位置する。遺構の大部分が削平を受け、本来の平面形は不明であるが、半円形の部分が残存している。遺物の出土はない。

ウ S K135（第103図）

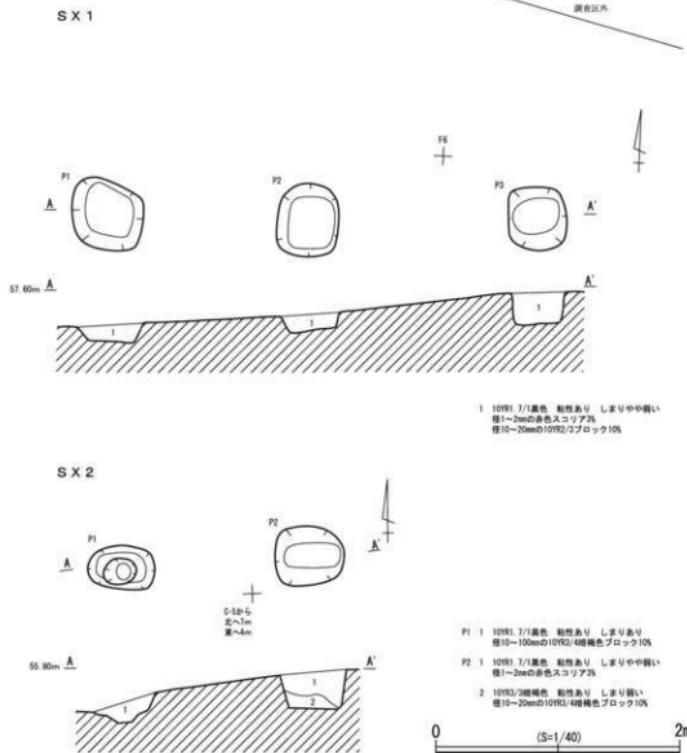
E-5グリッド、調査区西側に位置する。平面形はS K134に切られ不明である。遺物の出土はない。

(6) 性格不明遺構

性格不明遺構としたものは2基である。

ア S X1（第104図）

E-5・E-6・F-6グリッド、調査区北西側、柱穴とおぼしき小穴の並びが認められた。北側が調査区外であるために積極的に建物跡とできなかったものである。



小穴の平面形は隅丸方形で、断面形はやや急角度に立ち上がっている。P 1 は長径60cm、短径44cm、P 2 は長径60cm、短径38cmで、ともに深さはおよそ10cmを測る。P 3 は長径50cmで正方形に近く、深さは25cmを測る。柱間隔は P 1 ~ P 2 間では110cm、P 2 ~ P 3 間では140cmを測る。

イ SX 2 (第104図)

C-5グリッド、調査区南西側に位置する。小穴の並びが認められたものの、積極的に建物跡や柵列とできなかったものである。

P 1 の平面形は長楕円形で P 2 は隅丸方形に近い不整楕円形である。P 1 は長径50cm、短径38cm、深さは22cmで、断面形は急角度に立ち上がっている。P 2 は長径54cm、短径50cm、深さ32cmである。ともに遺構底面の標高は P 1 が55.38m、P 2 が55.36mと近い値を示している。(西田)

2 遺 物

(1) S H 1 出土遺物（第105図2・3・第33表）

3は小型鉢である。平底の底部に直立気味に外傾する体部が付く。

(2) S H 10 出土遺物（第105図4～12・第33表 図版43）

4と5は単純口縁壺である。4は胴部が丸く、中央部に最大径を有する。頸部は短く、口縁部は外反して開く。5は頸部がやや長く、口縁部は直線的に開く。6と7は最上段の輪積み痕を残して折り返し口縁に見せかけた単純口縁壺である。ともに口縁部は大きく外反して開く。7は外面胴上部と内面口縁部にRLの繩文を施文している。8から11は壺の胴部と底部である。8は胴部が丸く、中央部に最大径を有する。9は胴下部ににぶい稜を持つ。

12は折り返し口縁を有する壺の口縁部である。頸部の屈曲が緩やかで、口縁部の開きは小さい。

(3) S H 11 出土遺物（第106図13～第107図25・第33表 図版43・44）

13は単純口縁壺である。胴部は丸いが、張りは小さい。頸部が太く、口縁部は外反して開く。口唇部は磨滅が著しい。14と15は折り返し口縁壺である。14の胴部は丸く、中央部に最大径を有する。口縁部は外反して開く。15の胴部の形状は潰れた球形で、中央部に最大径を有する。頸部から口縁部が極端に細くて短く、口縁部の開きも小さい。16は大型の複合口縁壺である。胎土に白色粒子を多く含む。複合部は幅広の面を意識してわずかに屈折させた口縁部に粘土帯を貼り付けて作出している。

19と20は台付甕である。ともに胴上部に最大径を有し、頸部の屈曲は緩やかである。19は口縁部が直線的に外傾し、口唇部は面取りを施す。脚部は内弯して開く。20は口縁部が大きく外反して開き、口唇部は面取りの後、下端部に刻みを施している。脚部は直線的に開く。21は甕の胴部である。胴上部に最大径を有し、頸部の屈曲は緩やかである。口縁部が大きく外反して開き、口唇部は面取りを施している。22と23は台付甕の脚部である。ともに開きは小さく、直線的である。

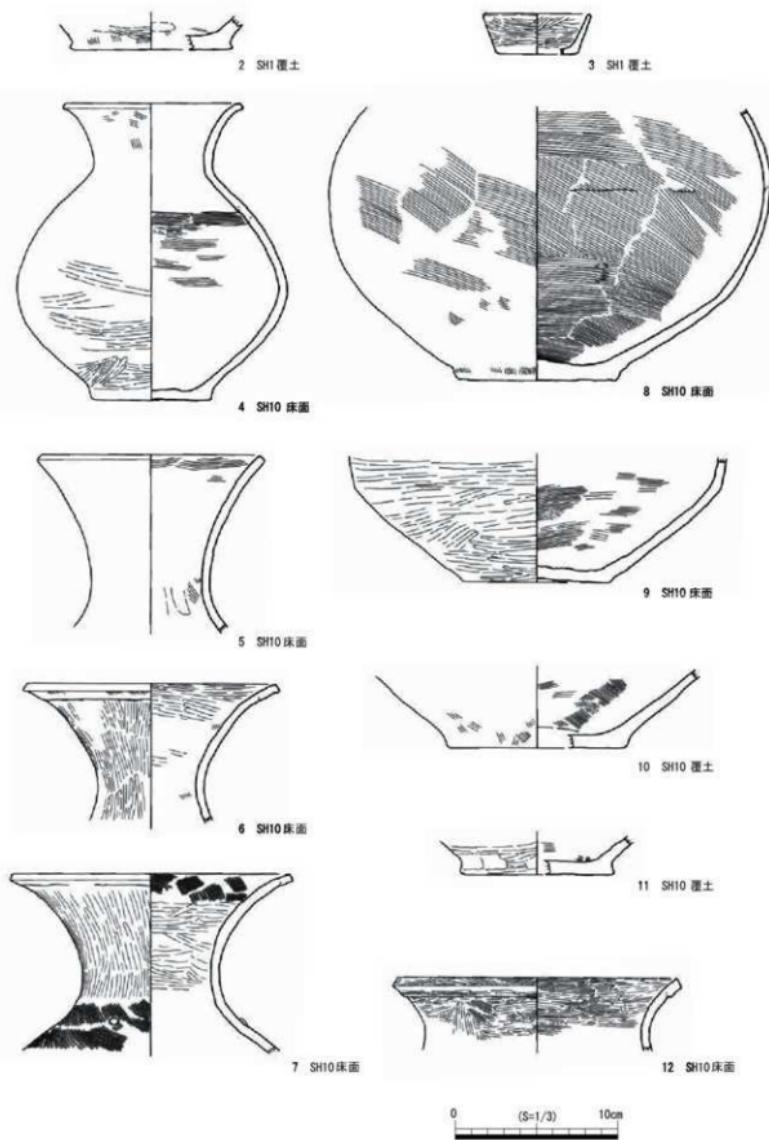
24は小型鉢である。平底の底部に直線的に外傾する体部が付く。口縁部は歪みがある。

25は銅鑑である。上下端部が破損し、著しく劣化しているため、形状は不明である。

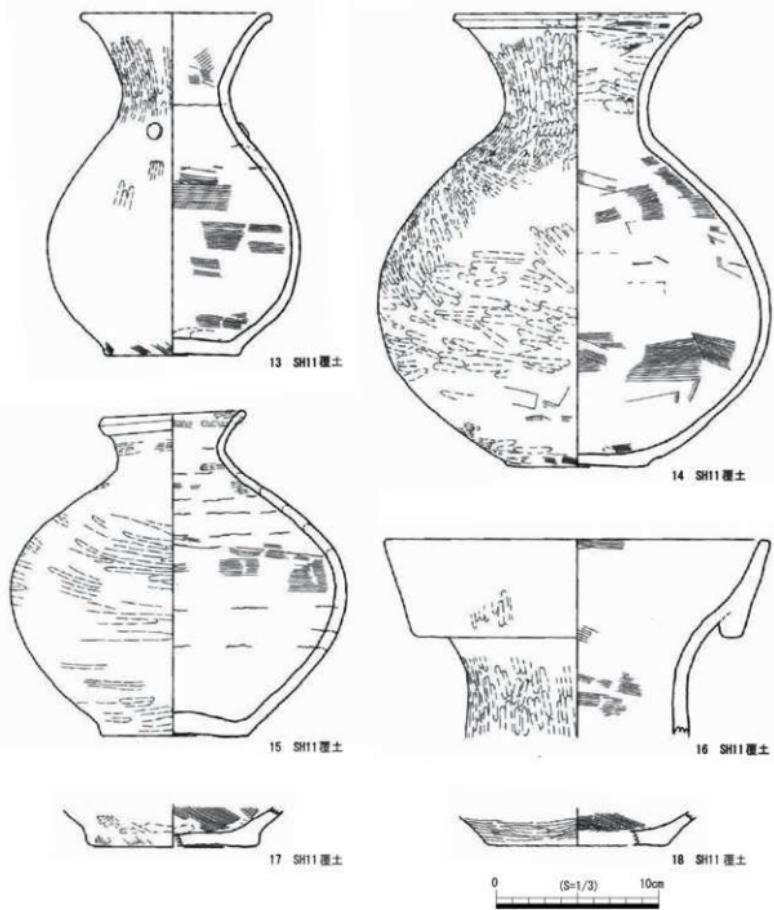
(4) 遺構外出土遺物（第107図26・27・第32・35表 図版44）

26はコップ形の小型鉢である。外内面ともに指頭による調整が明瞭に残る。

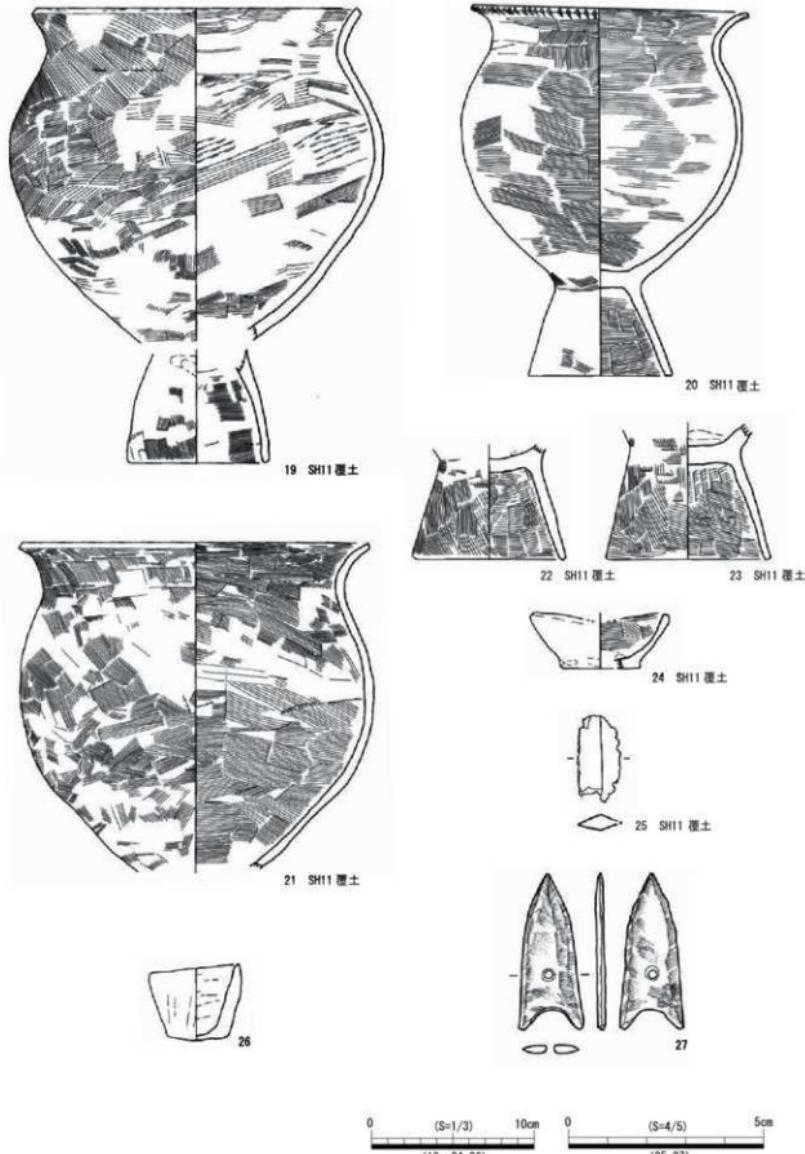
27は有孔磨製石鑑である。石材は珪質頁岩である。鑑身部両面を研磨した後、側縁部を研磨して刃部を作り出している。両面ともに研磨痕が明瞭に観察される。基部には円弧状の抉りを入れている。胴部の下方にある円孔は両面から穿孔している。（岩崎）



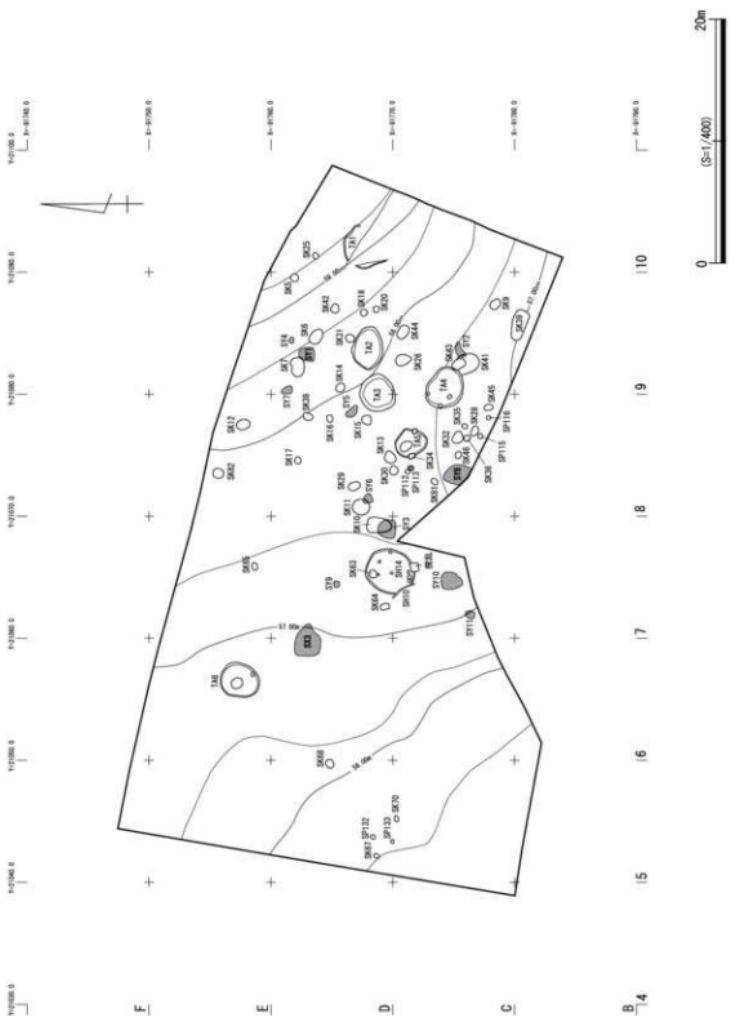
第105図 造構出土土器（古墳時代前期）1



第106図 遺構出土土器（古墳時代前期）2



第107図 遺構出土遺物（古墳時代前期）



第108圖 第3遺構面遺構配置圖

第5節 繩文時代の遺構と遺物

1 遺構

繩文時代の遺構は第3遺構面の第5層上面で検出された。検出された遺構の内訳は、堅穴住居跡1軒、堅穴状遺構6基、集石11基、土坑40基、小穴6基、性格不明遺構1基である。

(1) 堅穴住居跡 SH14 (第109・110図・第27表)

C-7・D-7グリッド、調査区中央南側に位置する。

構造 平面形は梢円形を呈している。主柱穴は不明な点があるものの、P5、P6の2基がそれにあたると考えられる。柱穴の平面形は梢円形である。第4層は床面構築土で、掘方は平坦に掘り込まれている。石囲炉は中央のやや北側寄りに設けられており、炉内に炭化物と焼土があった。P4は埋甕である。

埋甕 掘方の平面形は不整形な円形で長径34cm、短径30cm、検出面から底面までの深さは20cmである。埋甕は口縁部を欠いた深鉢を正位で埋めている。埋甕の上から長径30cm、短径20cmの扁平な礫が埋甕の掘方から少々ずれた状態で出土した。蓋石の可能性が考えられる。

遺物出土状況 床面上直上から、土器片、磨石、台石が出土している。また、東側にはクリの炭化材が出土しており、樹種同定では建築部材の可能性が指摘されている。石囲炉と埋甕があり、出土遺物から中期後葉、曾利式期の堅穴建物であると判断できる。

(2) 堅穴状遺構 (第28表)

堅穴住居跡の可能性があるものの、遺構プランが不整形であるなど、積極的に堅穴住居跡とできないものを堅穴状遺構として報告する。

ア TA1 (第111図・第28表)

D-10グリッド、調査区北東側に位置する。遺構の上面は削平を受け、さらに搅乱を受けているため、本来の平面形は不明である。周辺の地形は東から西側へ向かって斜面になっていることから、地形に合わせて東側から西側へ向かって掘り込みが深くなっている。コナラ節の炭化材が出土したが、土器などの出土はなかった。

イ TA2 (第112図・第28表)

D-9グリッド、調査区中央東寄りに位置する。平面形は不整梢円形である。単層の覆土中からは土器片が出土している。土器は前期前葉のII群1類gの関山II式、II群1類eの木島式である。

ウ TA3 (第112図・第28表)

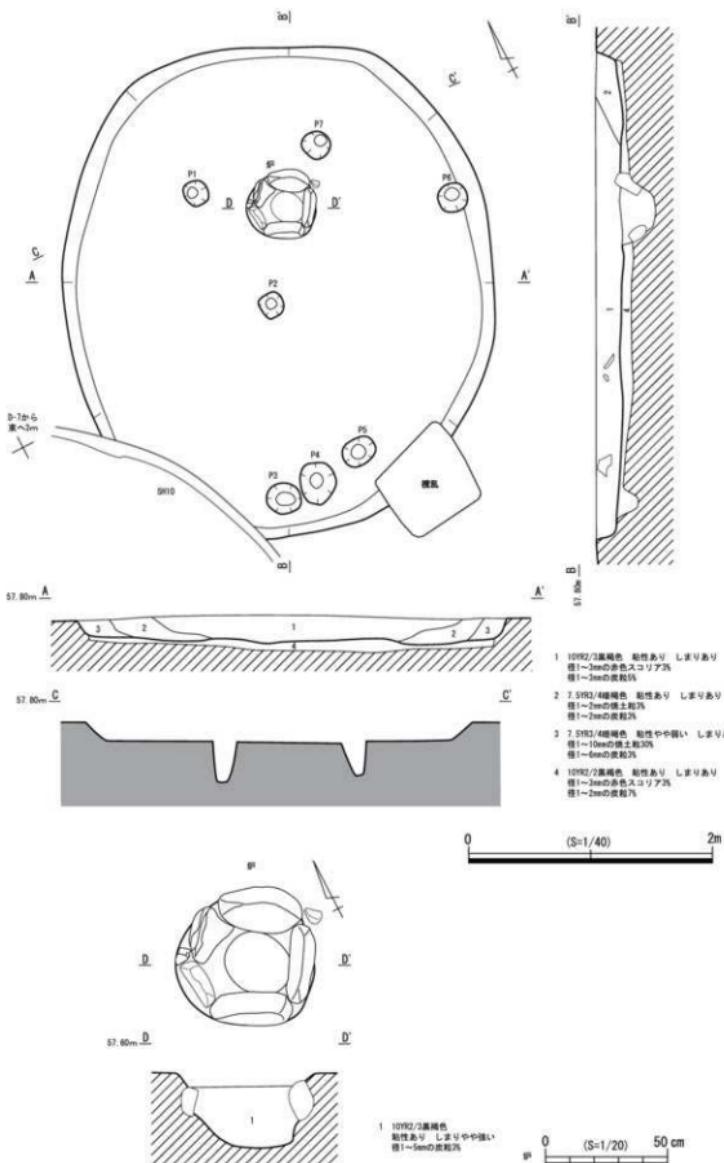
D-8・D-9グリッド、調査区中央東寄りに位置する。平面形はやや不整形な円形である。覆土の上面からII群1類bの土器片、打製石斧、磨石、石皿が出土している。その他、クリの炭化材が出土している。

エ TA4 (第113図・第28表)

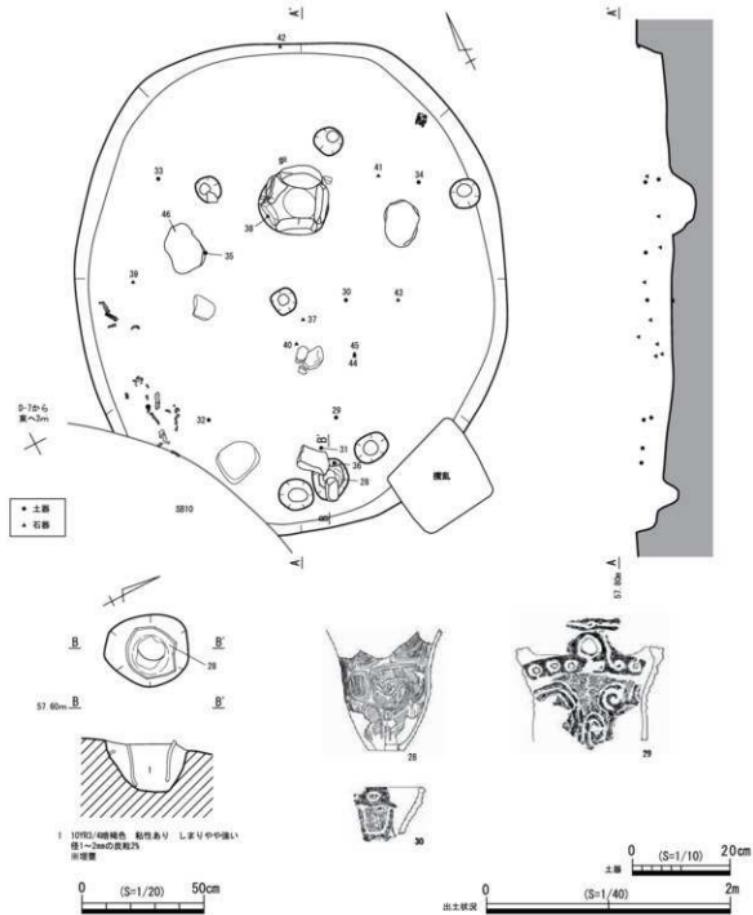
C-8・C-9グリッド、調査区南東に位置する。平面形は不整形な梢円形である。遺構内からは小穴を3基検出していることから、堅穴建物である可能性がある。絡条体を施す土器と、早期後葉の土器片と、磨石が出土した。出土遺物は流れ込みによるものと考えられ、出土遺物から遺構の時期は特定できない。

オ TA5 (第113図・第28表)

C-8グリッド、調査区中央南側に位置する。堅穴状遺構として報告するが、堅穴建物であった可能性がある。平面形は不整形な梢円形をなしている。遺構の北西寄りに長径1.1m、短径0.7mの土坑が掘り込まれており、炉として機能していた可能性がある。出土遺物は、図示するには至らなかったが、早



第109図 S.H14



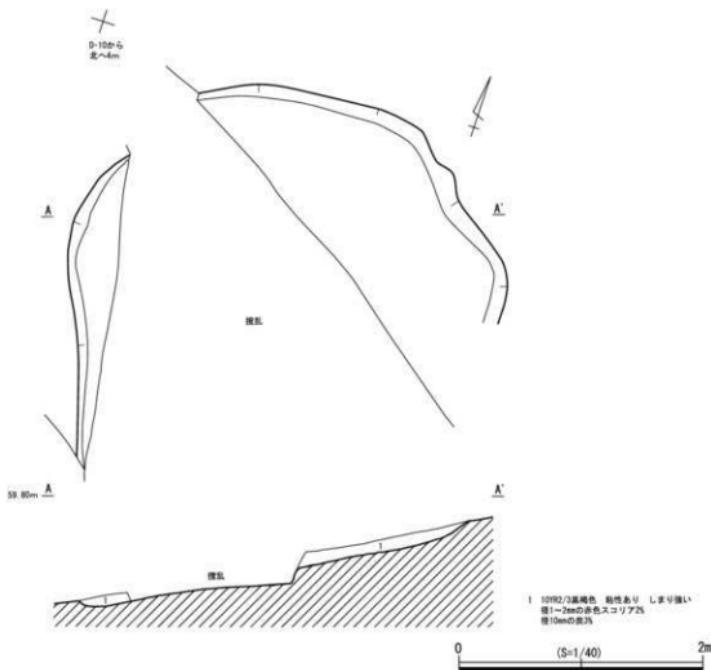
第110図 SH14遺物出土状況

期の撚糸文を施した土器の小片が出土している。流れ込みである可能性があり、遺物から遺構の時期を特定することはできない。その他クリの炭化材が出土した。

カ TA 6 (第114図・第28表)

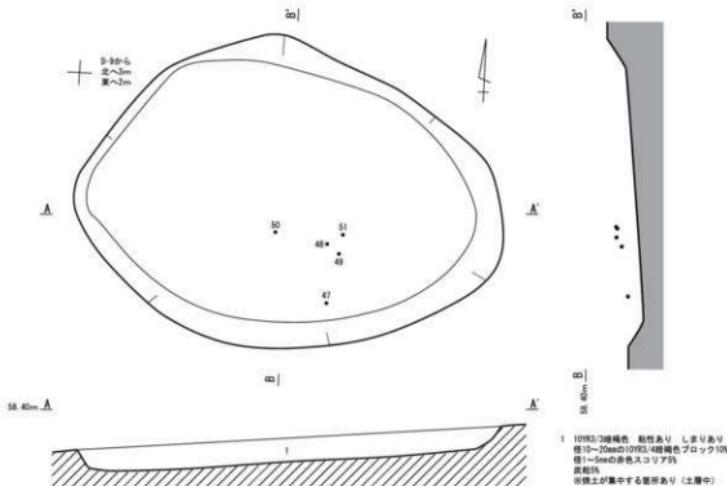
E-6グリッド、調査区北西寄りに位置する。平面形は梢円形を呈する。遺構の中央、やや北西寄りからは、長径1m、短径0.9mの炉が出土している。また、南側からは小穴が検出された。遺構覆土および遺構底面からはII群2類c土器と、石匙、磨石等が出土した。

出土遺物から、TA 6は前期後葉の諸磧c式期の遺構である。

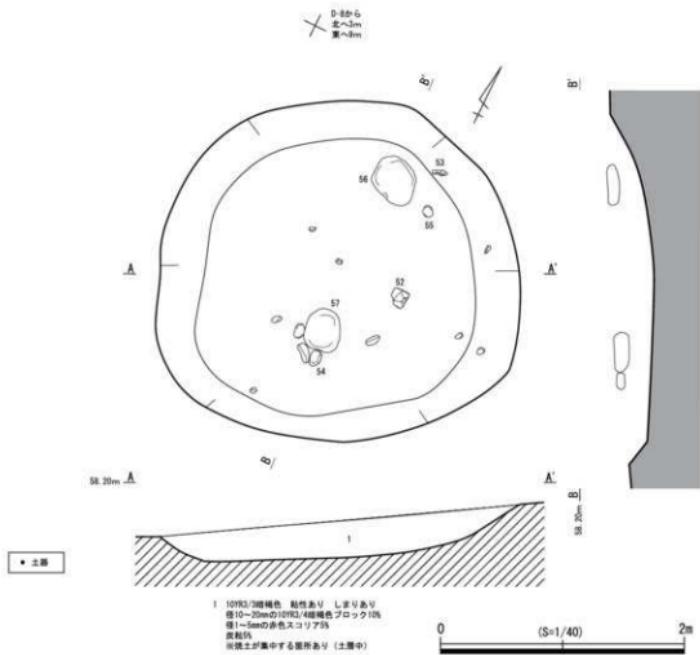


第111図 TA 1

TA2

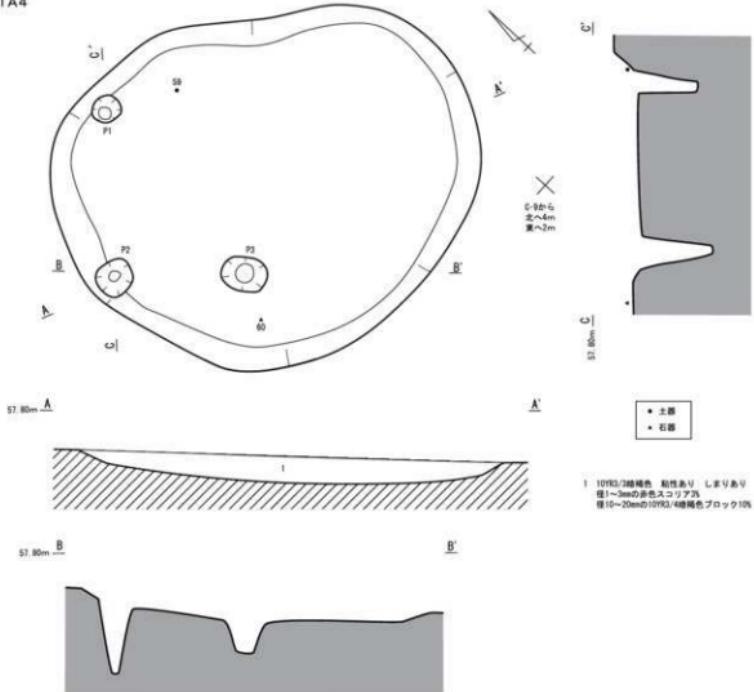


TA3

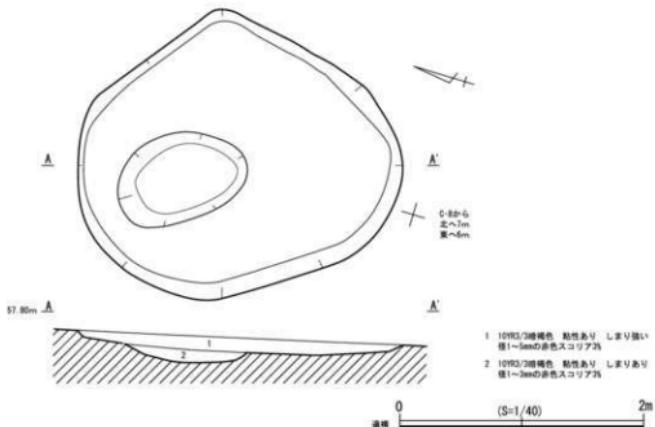


第112図 TA2・TA3

TA4

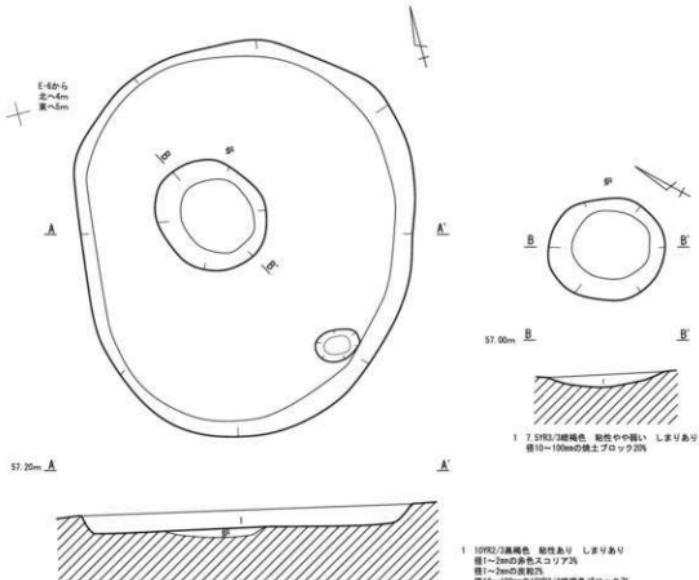


TA5

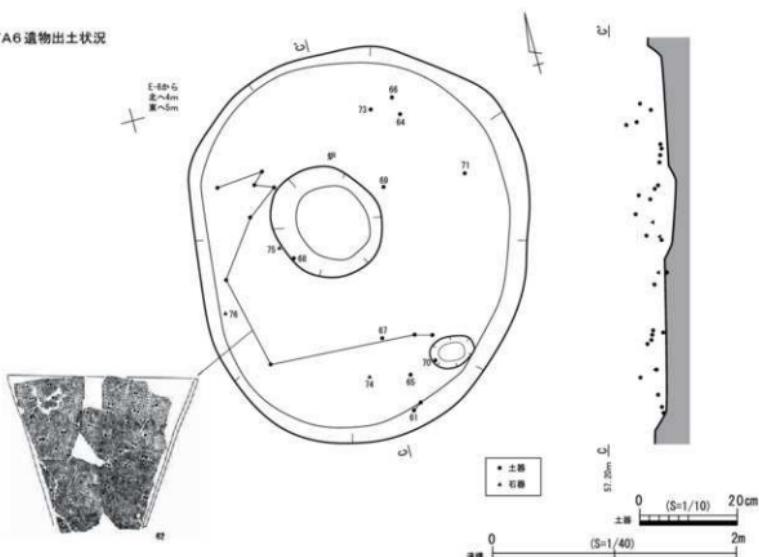


第113図 TA4・TA5

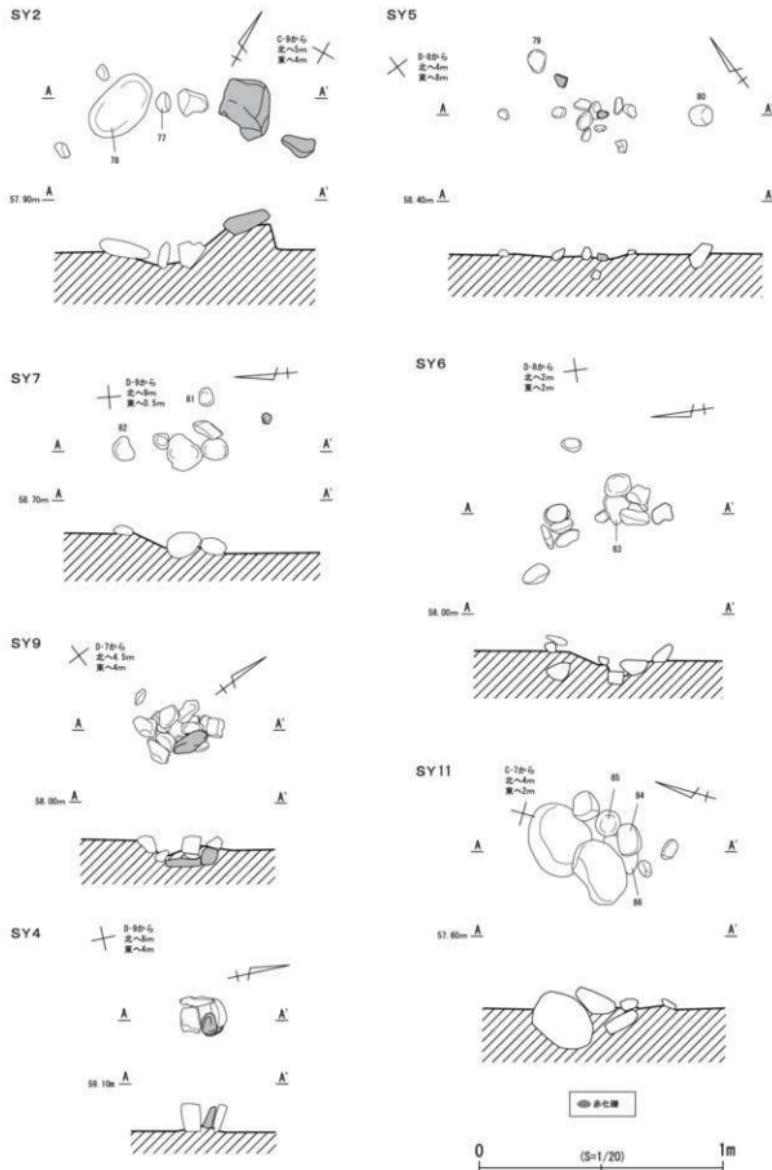
TAG



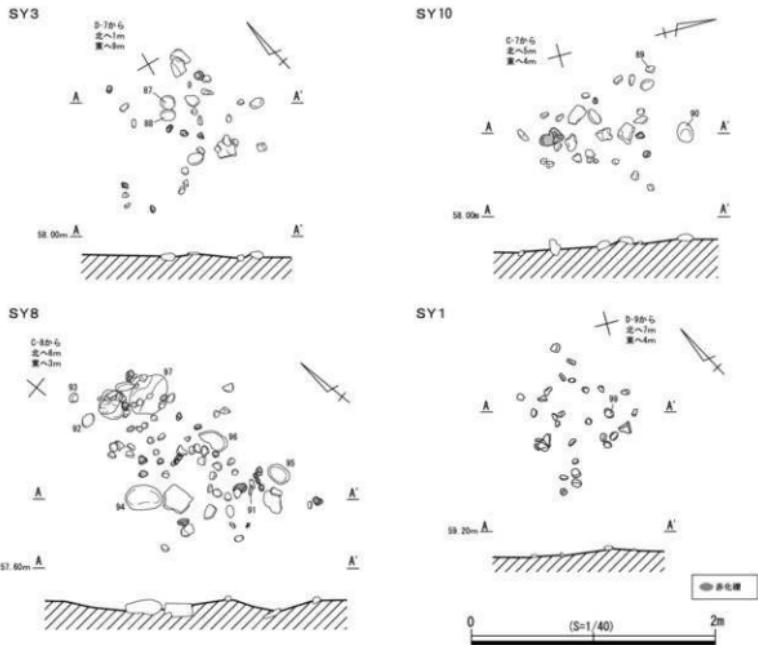
TA6 遺物出土狀況



第114圖 T A 6



第115図 集石1



第116図 集石2

(3) 集石（第115・116図・第31表）

集石は11基検出された。検出面は第6層～第7層の間で、竪穴状遺構の周辺で検出した。全て掘り込みを有さない集石である。第31表の赤化比率の割合からもわかる様に、受熱により赤化した礫の数は少なかった。集石内から出土した礫は5個～72個と様々であり、礫の大きさもそれぞれ異なる。調理施設としてひとくくりにできない用途があったと考えられる。

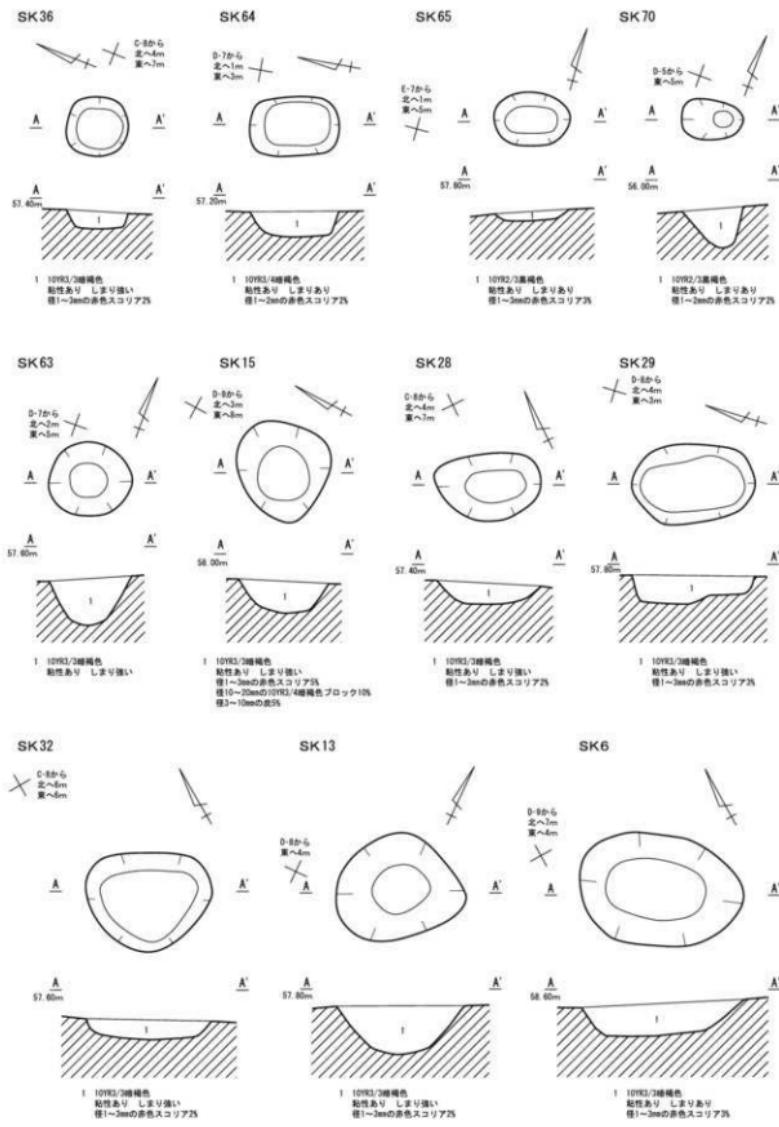
(4) 土坑（第117・118図・第32表）

土坑とした遺構は40基ある。調査区の中でも東側の緩やかな斜面上に集中している。平面形や深さの違いや断面形に違いが認められる。壁面の立ち上がりの急なもの、皿状、播鉢状のものなどが存在する。遺物の出土はSK29・SK36・SK13・SK15・SK70・SK28・SK32・SK11・SK10・SK43・SK39・SK41で認められた。

中でもSK11・SK43は掘り込みが深く、断面形は台形状である。SK10・SK41・SK39・SK7は平面形が不整形の土坑で、削平されたのか掘り込みも浅い。比較的大型の土坑であるが、用途は不明である。SK41はI群2類aの土器が出土していることから、早期後葉の粕烟式期の遺構の可能性がある。

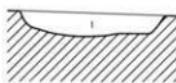
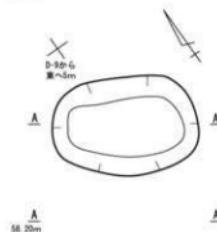
(5) 小穴（第32表）

小穴とした遺構は6基ある。調査区の南側と西側で検出した。平面形や深さの違い、断面形に違いが認められる。壁面の立ち上がりの急なもの、皿状のもの、播鉢状のものが認められた。遺物の出土はSP

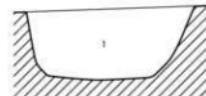
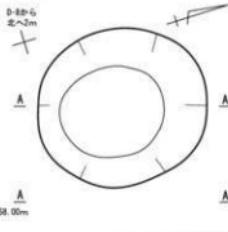


第117図 第3遺構面 土坑1

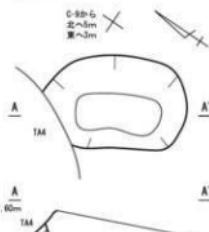
SK44



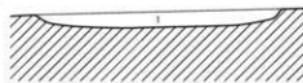
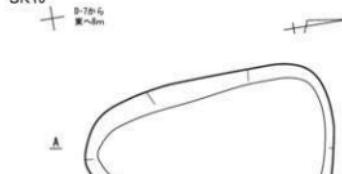
SK11



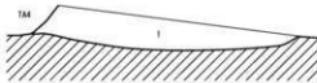
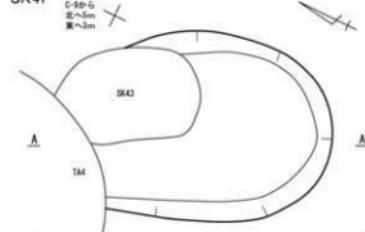
SK43



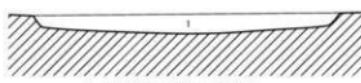
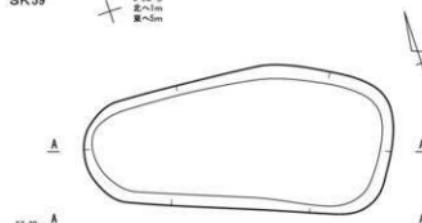
SK10



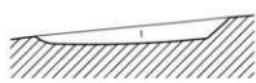
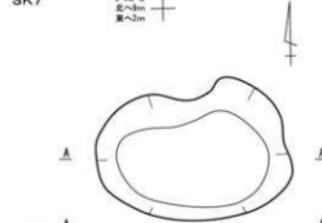
SK41



SK39



SK7



第118図 第3遺構面 土坑2

0 2m
(S=1/40)

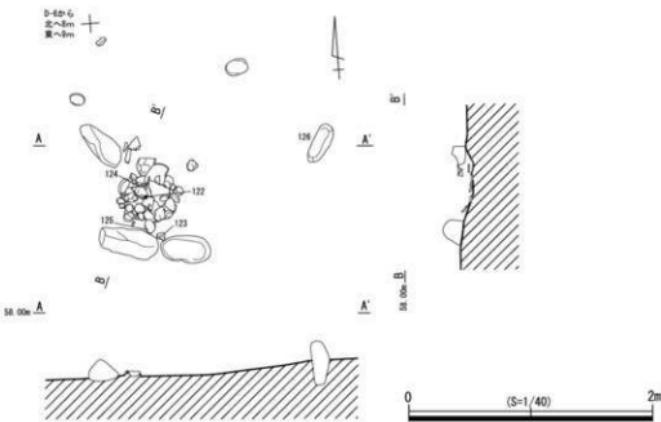
81で認められた。

(6) 性格不明遺構 S X 3 (第119図)

D-6・D-7グリッド、調査区中央西寄りに位置する。

碟の並びが検出され若干の遺物が出土した。炭化物や焼土の広がりがなく、周辺からは柱穴等建物の痕跡も検出できなかった。

遺構は、径2m30cmの範囲に碟が設置されていた。この範囲内からは、石皿・土器が出土した。南側の2点の並べられた碟の脇からはⅢ群3類a土器が出土している。曾利Ⅲ式期の遺構と考えられ、竪穴住居跡の炉部分のみが検出されたか、または独立した屋外炉の可能性が考えられる。(西田)



第119図 S X 3

2 遺物

(1) 造構出土遺物（第36・38表）

ア S H14出土遺物（第120図28～第122図46 図版44・45）

28は埋甕に使用されたIII群3類aの深鉢である。低い隆帯と半截竹管状工具で渦巻、梢円、逆U字状の区画をつくり、中に半截竹管状工具で沈線を縦位と斜位に付けている。29から34はIII群3類aの土器である。29は口唇部に沈線で渦巻文を施し、口縁に環状把手を受け、沈線で梢円形の区画を作り、中に棒状工具で刺突を付ける。胴部は渦巻文で縦位に区画し、中に半截竹管状工具で縦波状垂下沈線と斜位の沈線を付けている。30と31はいずれも隆帯で区画を作り、中に半截竹管状工具で沈線を付けている。32から34はいずれも隆帯と半截竹管状工具による沈線で渦巻文を施し、中に半截竹管状工具で沈線を縦位に付けている。35は曾利式の中でも特殊な器形を持つものである。口唇部は半截竹管状工具の沈線を梢円形に付けている。36はIII群3類cの土器である。外面は口縁に沿って波状文を付け、下にLの燃糸文を施し、半截竹管状工具で沈線を弧状に付けている。

37から39は石鎚である。37と38はII A 2類である。37は側縁を鋸歯状に加工している。38は基部に逆U字状の抉りを入れている。39はII B 1類である。側縁を鋸歯状に加工している。40は横型の石匙である。ほぼ左右対称で、両側縁に両面から平坦剥離を加えてつまみを作り出している。刃部も両面から平坦剥離を加えている。41はスクレイパーである。板状剥片の表裏両面を打ち欠いて梢円形の製品を作り出している。42と43は打製石斧である。42はIV類で、刃部が弧状をなす。梢円形の礫の表皮付き剥片の形状を生かして作り出している。43はII類で、刃部が直線的である。44は断面がレンズ状になる乳棒状磨製石斧である。刃部を欠損している。基部は尖り、打痕が見られる。45はI類の磨石である。46はII類の石皿である。

イ T A 2出土遺物（第122図47～51 図版44）

47と48はII群1類gの土器である。ともに胎土に纖維を含み、L Rの縄文を施文している。47は口縁部直下にL Rの原体端部を回転施文している。49から51は地文沈線のII群1類eの土器である。

ウ T A 3出土遺物（第123図52～57 図版44・45）

52は木鳥VIII式でII群1類bの土器である。口縁部と胸部の境に指頭の摘み痕を付け、地文に沈線が施されている。器面には外内面ともに指頭痕が付いている。

53は打製石斧である。刃部の先端が尖る矢印形の形状を呈する。54はI類、55はII類の磨石である。56と57はI類の石皿である。

エ T A 4出土遺物（第124図58～60 図版44）

58はI群1類gの土器である。口縁に沿って絡条体を横位に付けている。59は前期末の土器である。

60はI類の磨石である。

オ T A 6出土遺物（第124図61～76 図版44・45）

出土した土器はすべて諸殻c式でII群2類cに分類される。61は波状口縁に沿って結節浮線文を付け、半截竹管状工具による綾杉状の沈線と円形貼付文を施してから結節浮線文を付ける。胴部は縦矢羽根状の沈線を施し、円形貼付文を付けている。62は平縁の深鉢である。口縁部に沿って半截竹管状工具で結節浮線文を付ける。胴上部は地文に綾杉状の集合沈線を施してから縦位の結節浮線文を付けて方形の区画を作り出している。胴下部は綾杉状、底部付近は横位の集合沈線を付けている。器面に1個または2個1単位の円形貼付文を付けている。63から65は綾杉状、66は横位の半截竹管状工具による集合沈線を付けている。67は斜格子状の集合沈線を付けて、一部に菱形文を作っている。68は胴部の括れの位置に当たり、半截竹管状工具で結節浮線文を横位に付けている。69は半截竹管状工具で横位と斜位の集合沈線を付け、さらに斜位の結節浮線文を施している。70から72は底部である。70は半截竹管状工具で斜

位の集合沈線を付け、円形貼付文を付けている。71と72はともに横位の集合沈線を付けている。73是有孔無文浅鉢である。

74と75は横型の石匙である。74は小型で、石材は赤玉石である。ほぼ左右対称で、平坦剥離を加えてつまみを作り出している。刃部も両面から剥離を加えている。75の石材はチャートである。つまみの位置がやや右に片寄る。つまみは左側が両面に、右側は表面に平坦剥離を加えて作り出している。刃部は表面に急角度の剥離を加えて作り出している。76はI類の磨石である。

カ S Y 2 出土遺物（第125図77・78）

77はI類の磨石である。78はI類の石皿である。

キ S Y 5 出土遺物（第125図79・80）

79はI類の磨石である。80はV類の敲石である。

ク S Y 7 出土遺物（第125図81・82）

81と82はI類の磨石である。

ケ S Y 6 出土遺物（第125図83）

83はII類の石皿である。小型の製品である。

コ S Y 11 出土遺物（第125図84～86）

84はI類の磨石である。85はV類の敲石である。断面形が半球形の礫を用い、礫全体に敲打痕が見られる。86はII類の石皿である。小型の製品である。

サ S Y 3 出土遺物（第126図87・88）

87はI類の磨石である。88はIV類の磨敲石である。側縁に強い敲打による欠損が見られる。

シ S Y 10 出土遺物（第126図89・90）

89はI類の磨石である。90はI類の石皿である。小型の製品である。

ス S Y 8 出土遺物（第126図91～第127図98）

91と92はI類の磨石である。93はIV類の磨敲石である。94から98はI類の石皿である。96は磨面が凹み、その他の石皿は平坦な磨面を持つ。

セ S Y 1 出土遺物（第127図99）

99はI類の磨石である。

ソ S K 29 出土遺物（第127図100）

100はI類の磨石である。

タ S K 36 出土遺物（第127図101～103 図版44）

いずれもI群2類Iの土器である。101は竹管状工具で刻みを横位に付けている。

チ S K 13 出土遺物（第127図104）

104はII群1類eの木島式土器であり指頭痕と擦痕が施されている。

ツ S K 15 出土土器（第127図105 図版44）

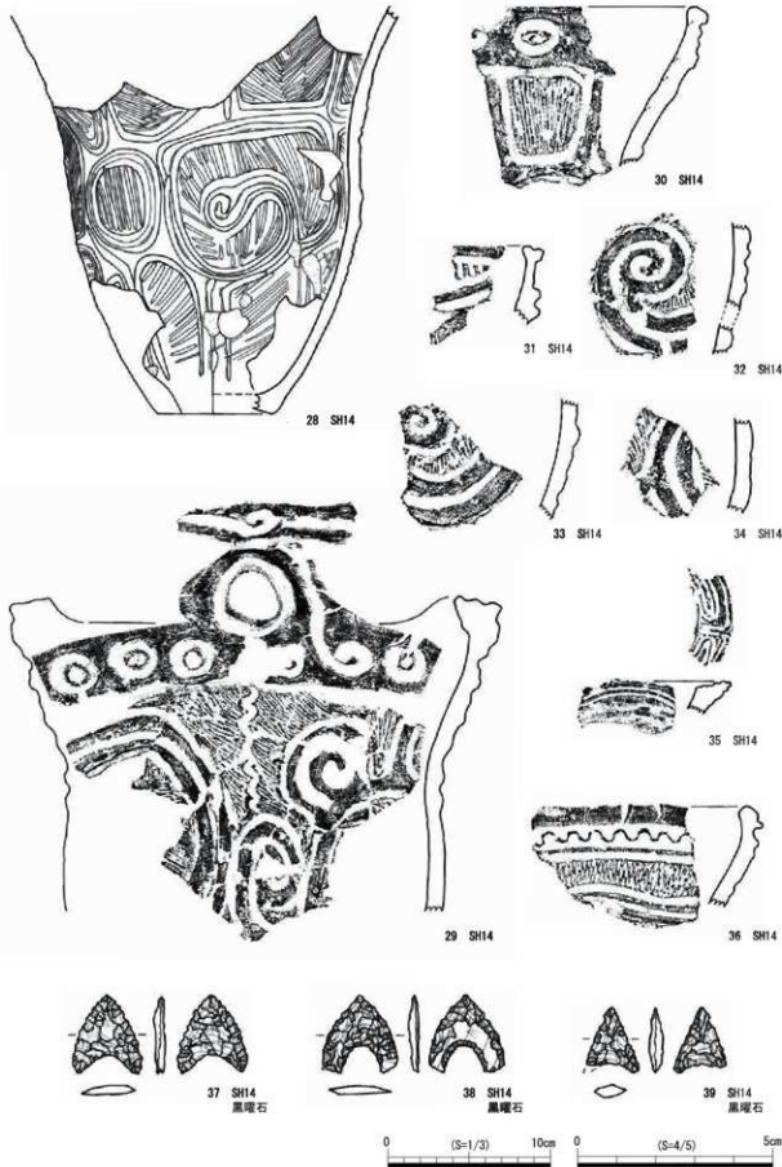
105は入海II式の土器である。口唇部に棒状工具で刻みを付ける。波状の口縁に沿って粘土紐を貼り付け、粘土紐上に棒状工具で斜位の刻みを施している。

テ S K 70 出土遺物（第127図106・107 図版44）

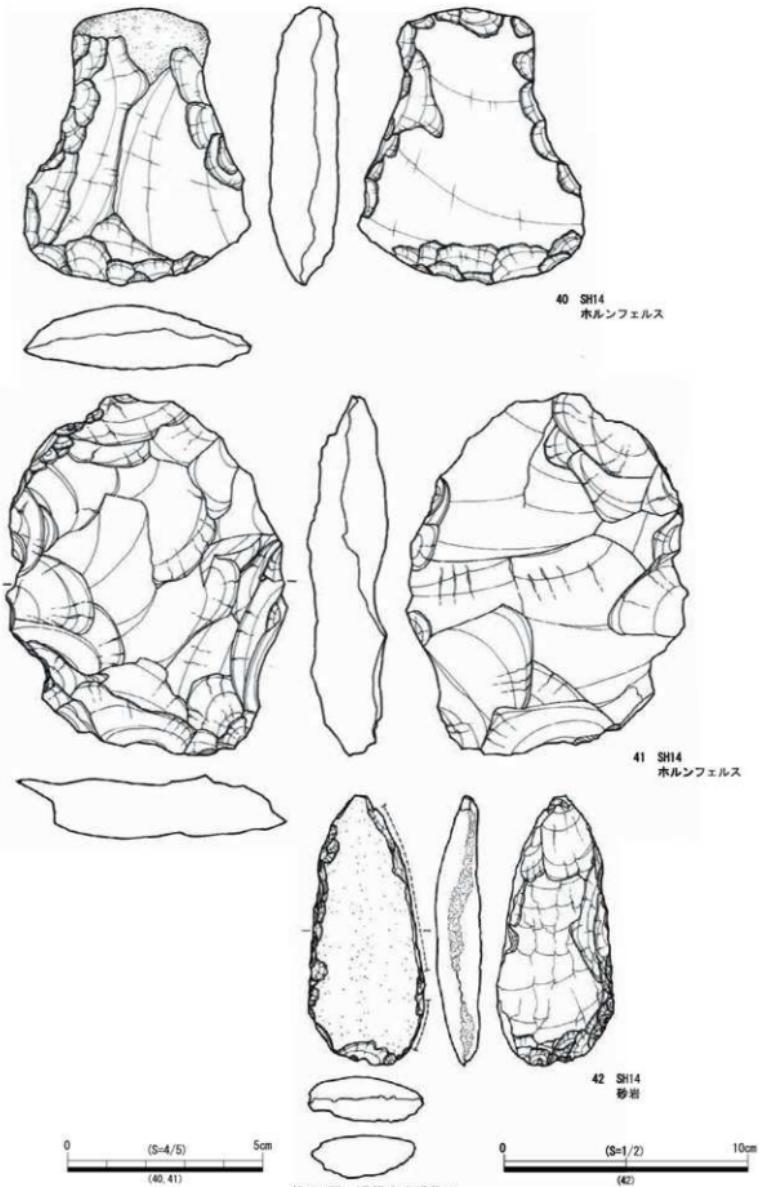
ともにIII群1類aの五領ヶ台式土器である。107はR Lの繩文を付け、半截竹管状工具で密接蒲鉾平行沈線を斜位に施している。

ト S K 28 出土遺物（第127図108）

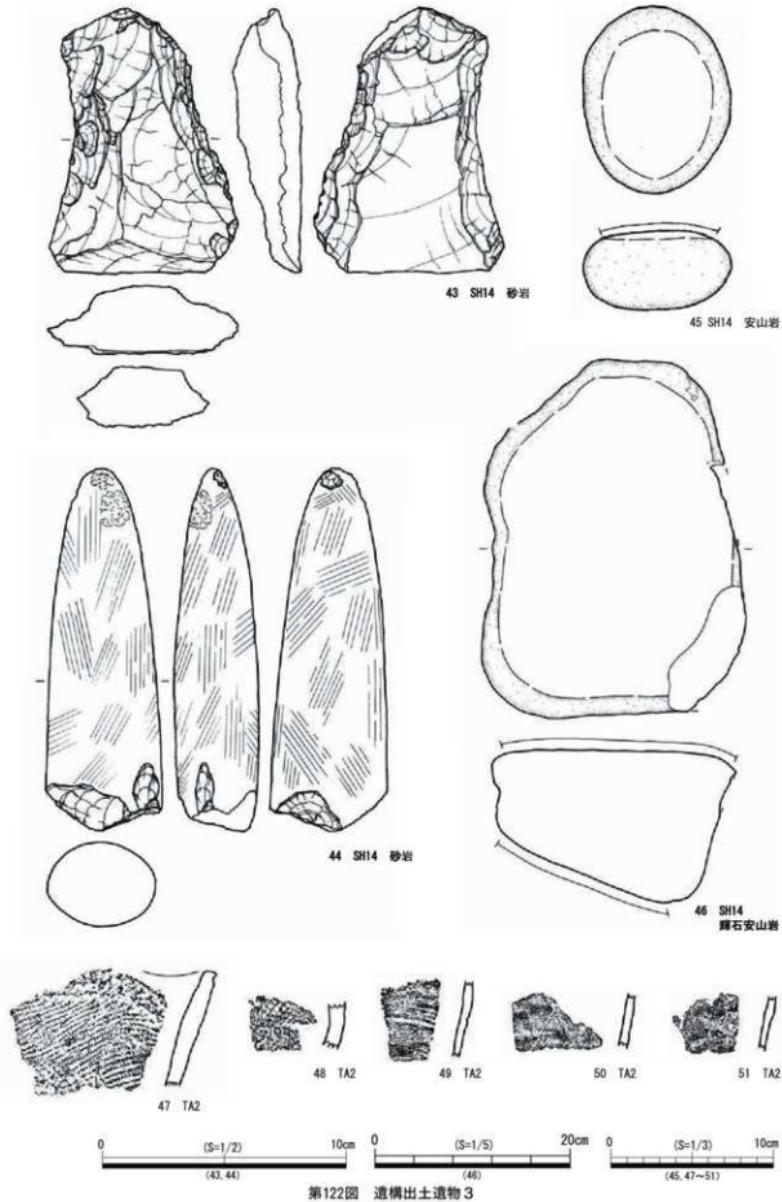
108はII群1類eの土器である。表面に擦痕が横位に付いている。

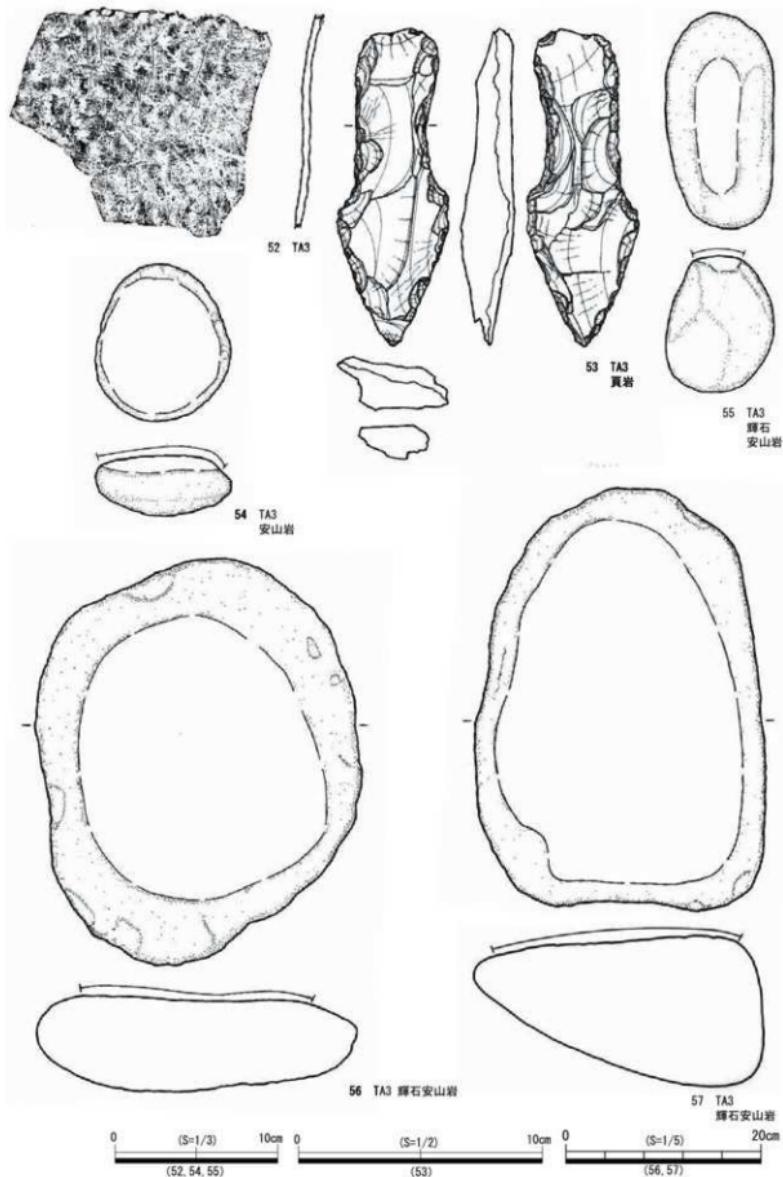


第120図 造構出土遺物 1

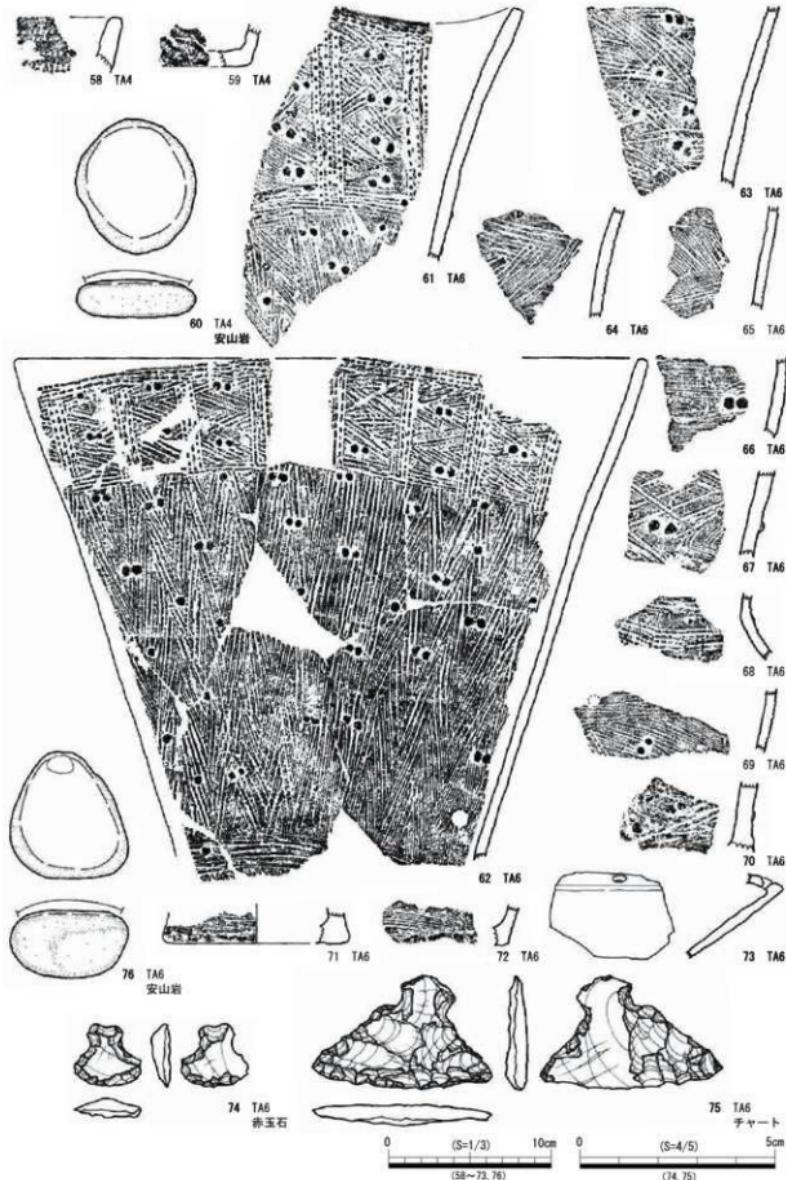


第121図 遺構出土遺物 2

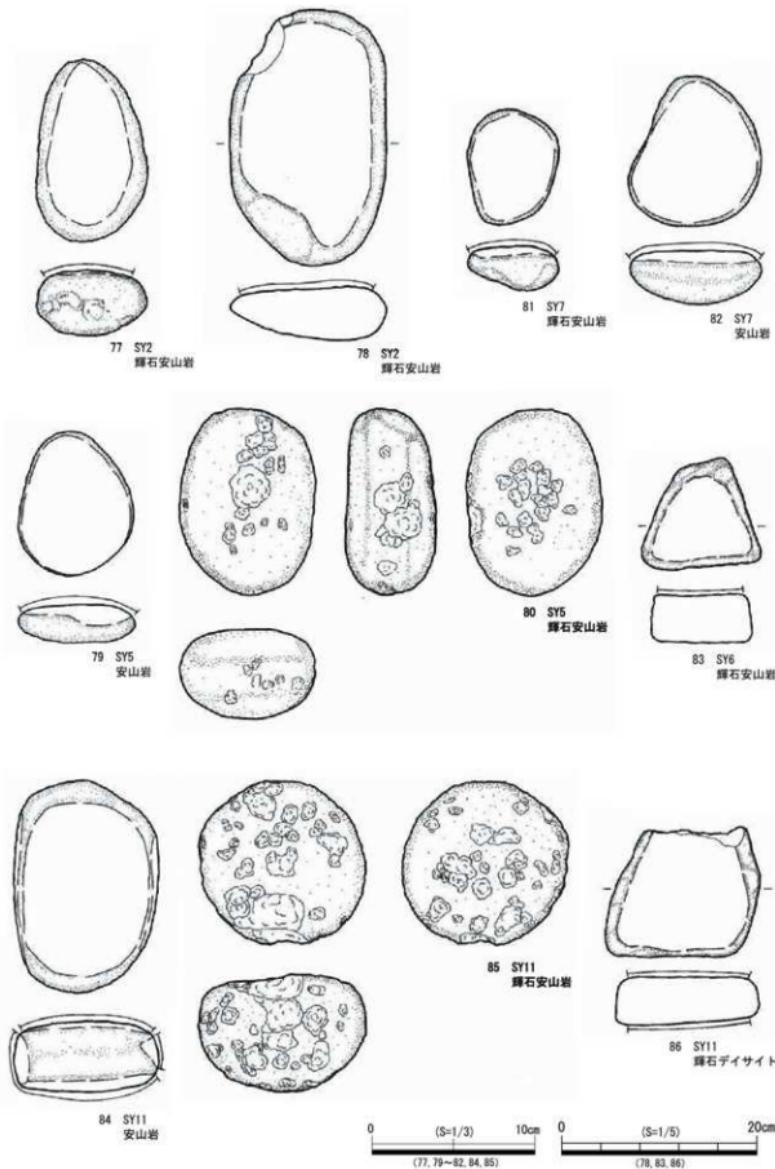




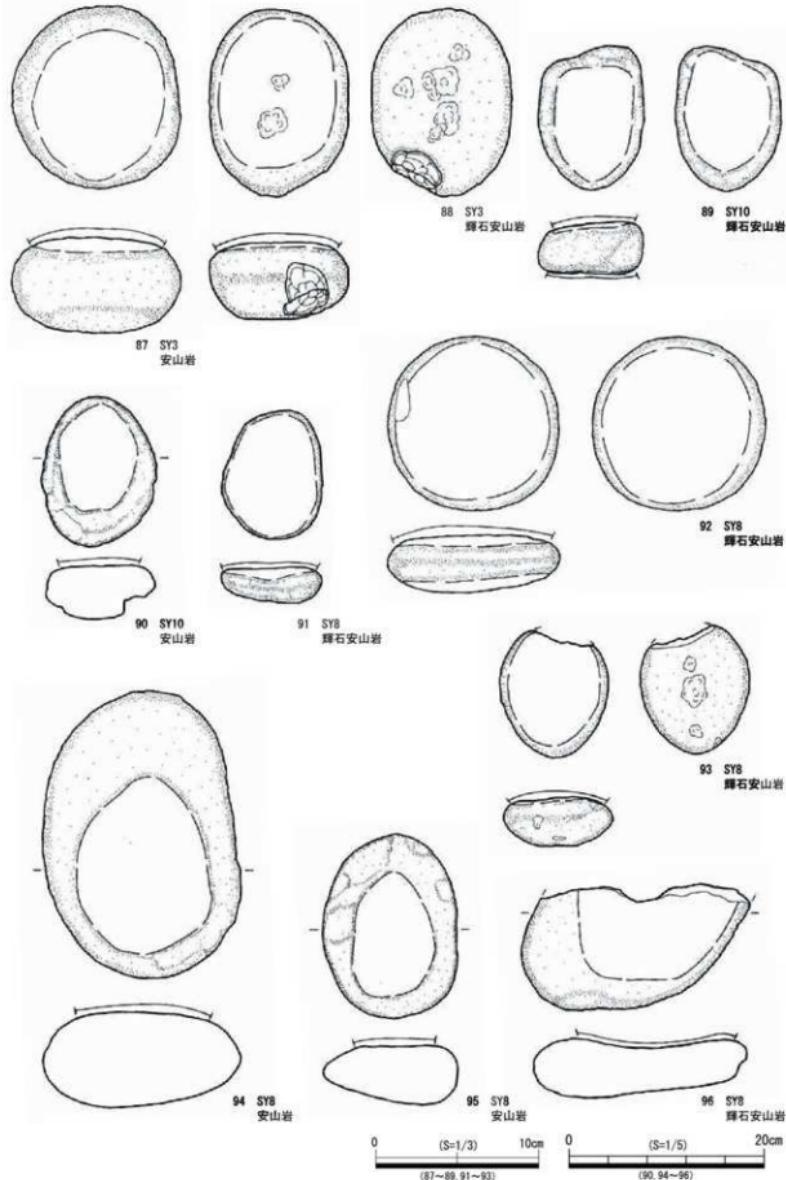
第123図 遺構出土遺物4



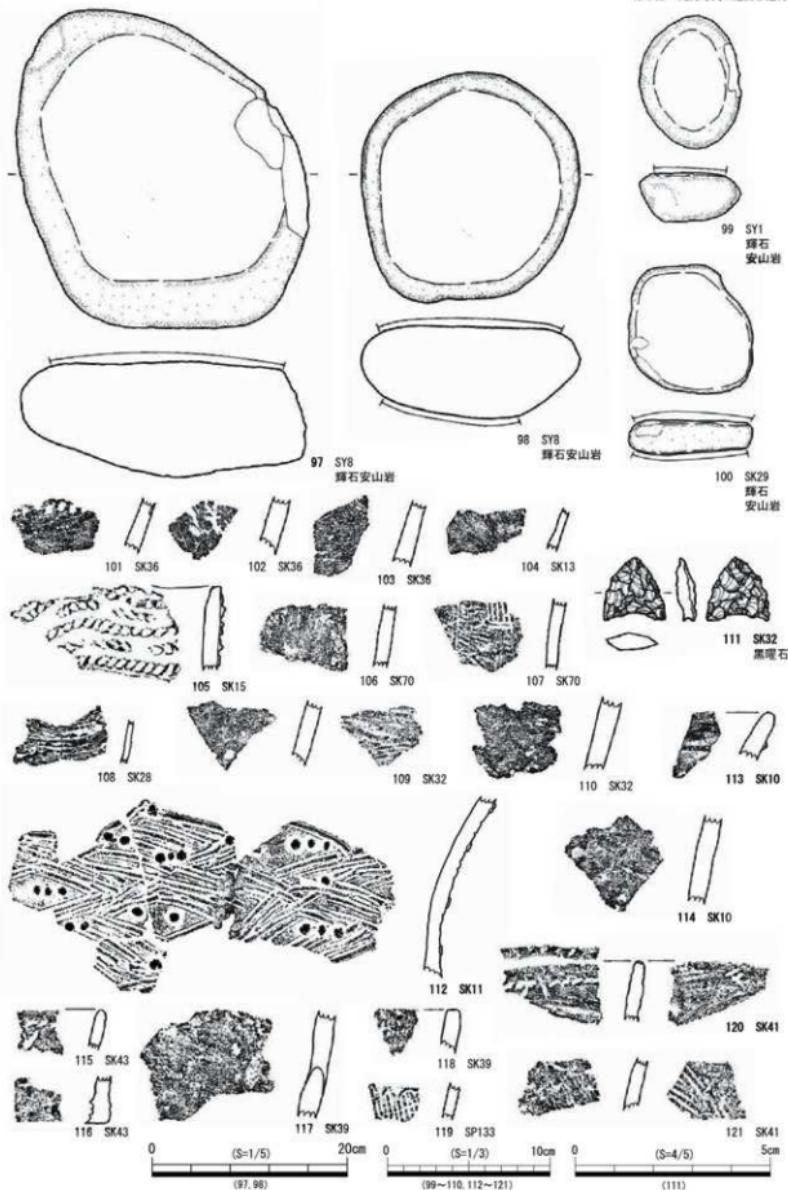
第124図 造構出土遺物 5



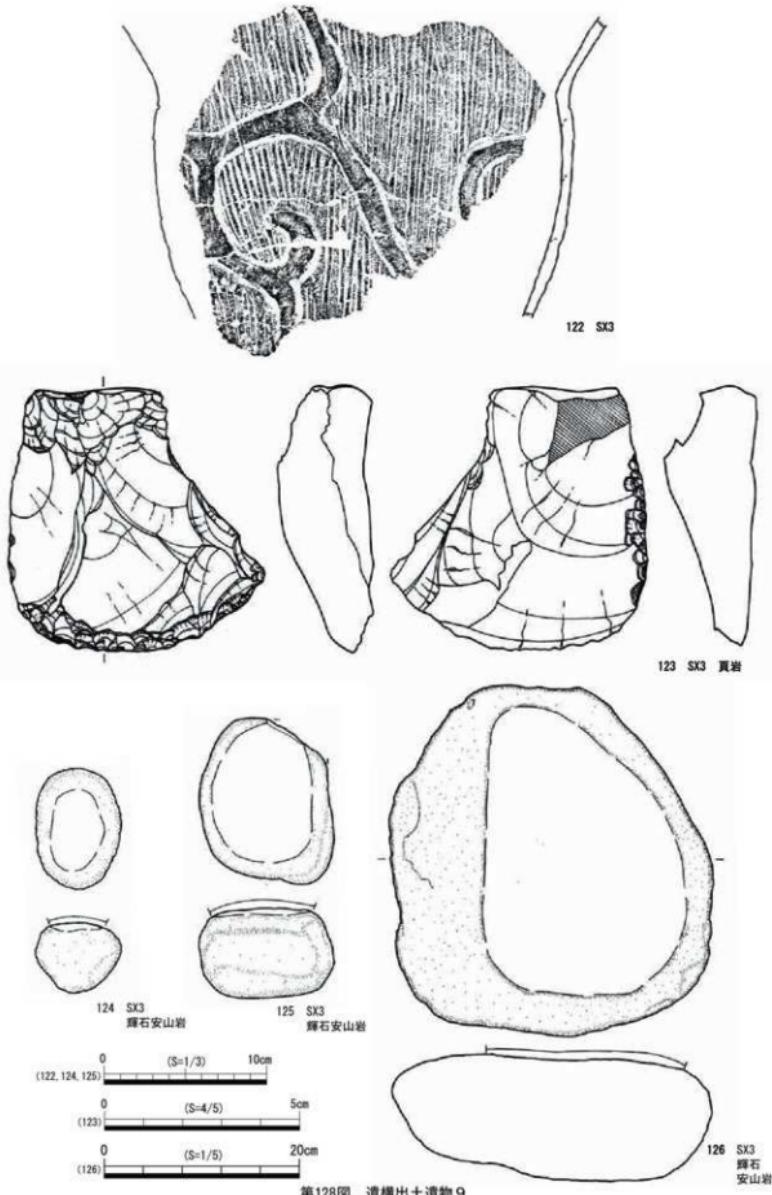
第125図 遺構出土遺物 6



第126図 造構出土遺物 7



第127図 遺構出土遺物 8



第128図 造構出土遺物 9

ナ S K32出土遺物（第127図109～111 図版45）

109と110はともにI群2類1の土器である。109は内面に条痕が付いている。

111はII A 2類の石鑿である。基部の抉りが浅い。

ニ S K11出土遺物（第127図112 図版44）

II群2類cの土器である。半截竹管状工具による集合沈線で菱形文を施す。円形貼付文を3個1単位で菱形の区画内に付けている。

ヌ S K10出土遺物（第127図113・114 図版44）

ともにI群1類gの土器である。113は口縁に沿って粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上に刻みを付けている。

ネ S K43出土遺物（第127図115・116 図版44）

ともにII群2類gの土器である。115は口縁部に沿って斜位の刻みを2段付けている。

ノ S K39出土遺物（第127図117・118 図版44）

ともにI群2類1の土器である。118は口唇部直下から絡条体圧痕文を斜位に付けている。

ハ S K41出土遺物（第127図120・121 図版44）

ともに舶式で、I群2類aの土器である。120は口縁に沿って棒状工具で刻みを付けている。口唇部も同一原体で刻みを付けている。121は内面に条痕が付いている。

ヒ S P133出土遺物（第127図119 図版44）

III群1類aの土器である。粘土紐をY字状に貼り付け、粘土紐上に半截竹管状工具で密接蘆鉢状平行沈線を斜位に施し、ヘラ状工具で浅い沈線を交差するように付けている。

フ S X3出土遺物（第128図122～126 図版44・45）

122はIII群3類aの土器である。口縁下部から胴部に低い隆帯を渦巻状に付けて区画を作り、中に半截竹管状工具で平行沈線を縱位と斜位に施している。

123はスクレイバーである。左側縁は裏面から、下部は表面から剥離を加えて刃部を作り出している。

124と125はI類の磨石である。126はII類の石皿である。（岩崎）

(2) 包含層出土土器（第36表）**I群1類a（第129図127～134 図版46）**

127は口唇部から約2cm下にRの撚糸文を縱位に付けている。形状、胎土から見て若宮型の土器で「軽しょう」な胎土（註）である。

128から134も若宮型の深鉢である。128は口唇部から約2cm下にRの撚糸文を縱位に回転施文している。129から134もRの撚糸文を縱位に付けている。

I群1類c（第129図135～159 図版46）

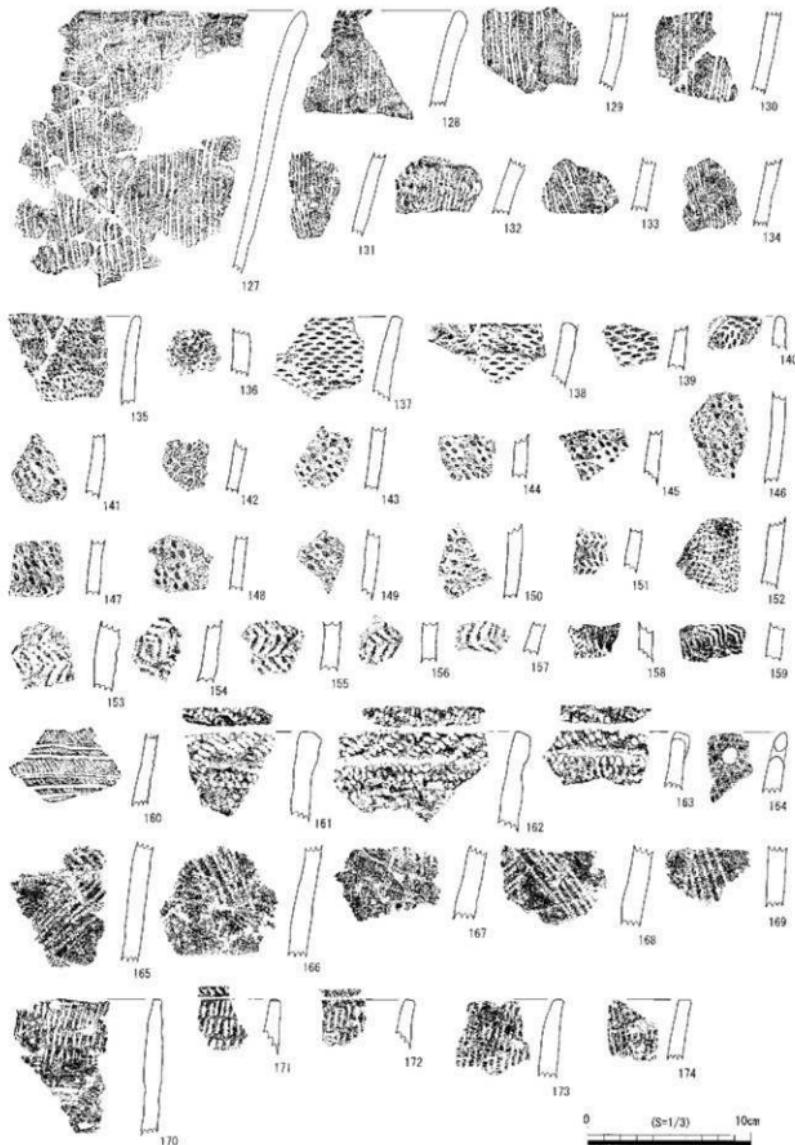
本型式の土器はいずれも細久保式に併行するものである。

135から152は梢円押型文を施文した一群である。135と136の施文は浅く、小さな粒の押型文を付けている。135は直立する口縁部、136は底部付近の破片である。137から139は細長い押型文を付けている。140は口縁部直下に押型文を横位に付け、下に同じ原体で押型文を縱位に付けている。141は押型文を斜位に付けている。142から150の施文は浅く、押型文を縱位や斜位に付けている。151は山形風、152は格子目に近い形状の梢円押型文を付けている。

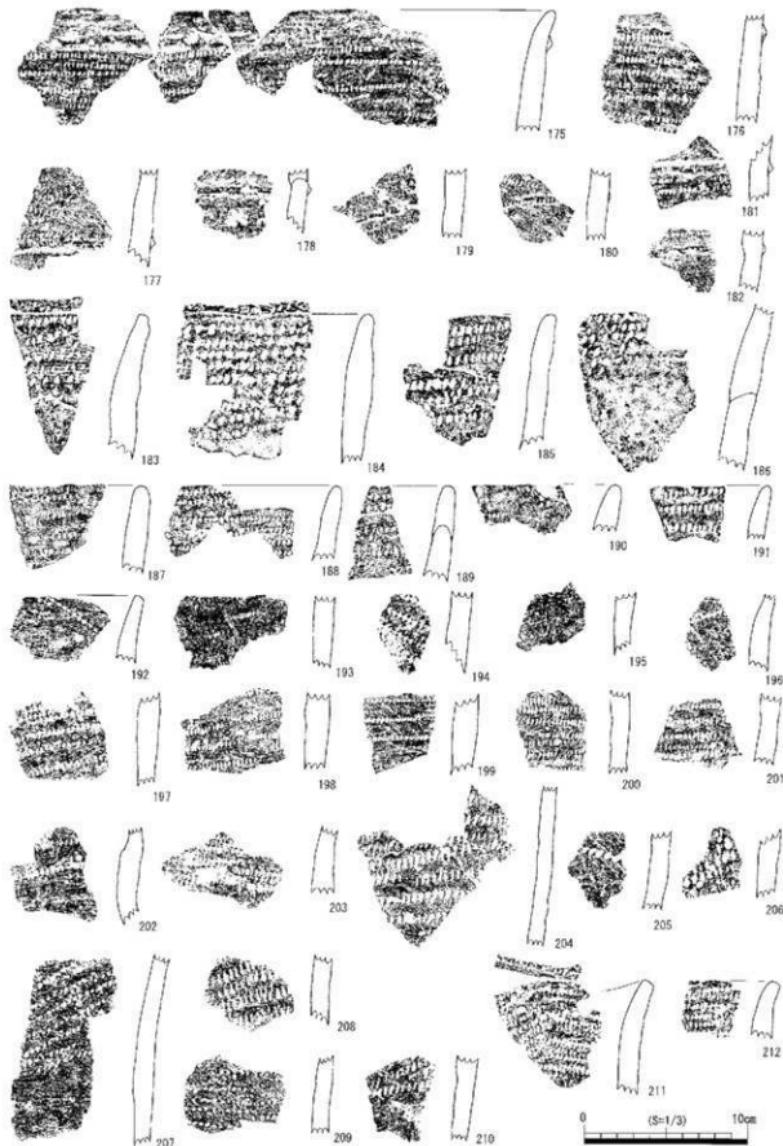
153から159は山形押型文を施文した一群である。153から157は縱位、158、159は斜位に施文していると思われる。

I群1類d（第129図160）

地文に沈線を斜位に付け、半截竹管状工具で太い横位沈線を施している。



第129図 包含層出土土器 1



第130図 包含層出土土器 2

I群1類e（第129図161～169 図版46）

いずれの土器も胎土に纖維と約2～5mm大の白色粒子を含む。161から163は有段口縁を持つ一群である。口唇部に絡条体圧痕文を斜位に付ける。有段部に161と163はl、162はrの絡条体圧痕文を斜位に施し、段の下に161と162は横位、163は横位と斜位の絡条体圧痕文を付けている。164から169は細かい絡条体圧痕文を付けた一群である。164はrの絡条体圧痕文を横位と斜格子状に付けている。165から169は同一個体の可能性がある。lの絡条体圧痕文を斜位に付けている。

I群1類f（第129図170～174 図版46）

形状や胎土が子母口式に似るが、口縁部の施文方法が異なるものを本類とした。

170から174は口縁に沿って長さ1cm程度の絡条体圧痕文を縦位に付けた一群である。170はrの絡条体圧痕文を3段付けている。171は口唇部もl、172はrの絡条体圧痕文を斜位に付けている。173と174はrの絡条体圧痕文を付けている。

I群1類g（第130図175～212 図版46）

175から182は微隆起線を横位に施し、粘土紐上と体部に絡条体圧痕文を横位と斜位に付けた一群である。いずれの土器も胎土に纖維と約2～5mm大の白色粒子を含む。175は口縁に沿って断面三角形の粘土紐を貼り付け、粘土紐上にlの絡条体圧痕文を施している。微隆起線の下は同一原体で絡条体圧痕文を横位と斜位に付けている。175と177と181はl、180と182はrの絡条体圧痕文を付けている。

183から186は胎土に纖維を含み、胴上部に長さ約6mm、幅が太めのlの絡条体圧痕文を横位と斜位に付けた一群である。183と184は口唇部にも絡条体圧痕文を付けている。183は絡条体の軸が梯子状に付いている。

187から191は短く細いlの絡条体圧痕文を付けた一群である。190は太さ約0.5mmの絡条体圧痕文を横位と斜位に付けている。187、188、189、191は太さ約1mmの絡条体圧痕文を横位に付けている。

192から196は絡条体の軸の片面が圧痕される一群である。192は口唇部直下にlの絡条体圧痕文を山形に付けている。193と195は非常に細い絡条体圧痕文を横位に付けている。194はlの絡条体圧痕文を斜位に付けている。196は絡条体圧痕文を横位と斜位に付けている。

197から203は短く細い絡条体圧痕文を横位に付けた一群である。197、198、200、201はr、199、202、203はlの絡条体圧痕文を付けている。

204から206は太いlの絡条体圧痕文を付けている一群である。204は横位、205と206は斜位に絡条体圧痕文を付けている。207から210は絡条体圧痕文を斜位や横位に付ける一群である。207、209、210はr、208はlの絡条体圧痕文を付けている。

211と212は絡条体圧痕文を密に付けている。211は波状口縁を有する。口唇部に絡条体圧痕文を施し、口縁部の形状に沿って同一原体の絡条体圧痕文を付けている。212は平縁で、lの絡条体圧痕文を横位に付けている。

I群1類h（第131図213）

半截竹管状工具で縦矢羽根状に沈線を施し、竹管状工具で円形刺突文を付けている。

I群2類a（第131図214～232 図版47）

粕煙式土器で、214は平縁で表面に擦痕を施し、竹管状工具で刻みを横位と斜位に付けている。215から218は波状口縁を有し、胎土に纖維を含む。外内面ともに条痕を付け、口唇部に竹管状工具で両面から刻みを施し、胴上部に爪状の刻目文を横位に付けている。219は平縁で口唇部に竹管状工具で刻みを施し、外側の口縁部に同一原体の刻目文を横位に付けている。

220から222は波状口縁に付けた突起である。いずれも胎土に纖維を含んでいる。220の突起は魚尾状の形状を呈する。突起の角に爪状または竹管状工具で刻みを付け、外側に爪状の刻目文を施している。221

と222の突起は梢円形を呈し、中央が凹む。221は地文に条痕を施し、竹管状工具で爪状の刻目文を横位に付けている。222は突起の角に竹管状工具で刻みを付け、口唇部に貝殻で刻みを施す。内面は口縁に沿って連続刺突文状の貝殻腹縁文を横位に付けている。

223と224は平線で、口唇部と外面口縁部に竹管状工具で刻目文を横位に付けている。

225から232は胎土に纖維を含む。外内面に条痕を施し、竹管状工具で横位と斜位の刻目文を付けている。

I群2類b（第131図233～第132図259 図版47）

入海I・II式土器で、233から238は薄手で、口縁部の形状に沿って粘土紐を貼り付け、粘土紐上に刻みを施した一群である。233は波状口縁を有し、口唇部と粘土紐上に棒状工具で刻みを付けている。234は平線で、口唇部に刻みを付け、粘土紐上に半截竹管状工具で刻みを施している。235から237は粘土紐上に棒状工具で刻みを付けている。238は粘土紐上にヘラ状工具で浅い刻みを付けている。

239から245は胎土が精緻で、外面に微隆起状の粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上に棒状工具で刻みを施した一群である。239は口唇部に半截竹管状工具で沈線を斜位に付けている。

246から250は、施文方法が233から238に似るが、器壁がやや厚い一群である。246は波状口縁を有し、口唇部に棒状工具で刻みを付け、外面は口縁に沿って粘土紐を一部断続的に貼り付け、粘土紐上に同一工具で刻みを施している。247と248は平線で、口唇部を指でつまんでいる。外面の施文方法は233とほぼ同じである。

251から255は胎土に纖維を含み、低い粘土紐上に貝殻で刻みを施した一群である。251は波状口縁を有する。口唇部に貝殻で刻みを付け、外面は低い粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上に貝殻で刻みを施している。口唇部と粘土紐の間の区画内は竹管状工具で刻目文を横位に付けている。252は弧状の粘土紐を断続的に貼り付けている。254と255は入海II式の土器である。254は波状口縁を有する。口唇部に刻みを付け、粘土紐を弧状に貼り付ける。口唇部と粘土紐の間の区画内は竹管状工具で刻目文を横位に施している。255は幅広の粘土紐を貼り付けている。

256は胸上部に半截竹管状工具で刺突文を横位に付けている。257から259は胸部に擦痕が付いている。

I群2類c（第132図260～267 図版47）

入海I・II式併行の土器で、いずれも厚手で胎土に纖維を含んでいる。

260から263は口唇部直下に貝殻腹縁文を付けた一群である。260は入海I式併行と考えられる。口唇部に貝殻腹縁文を付け、外面口唇部直下に貝殻腹縁文を斜位に付け、下に条痕を横位に付けている。内面も条痕を横位に付けている。261から263は入海II式併行と考えられる。261は貝殻腹縁文を斜位に付けている。262は口唇部に貝殻腹縁文を付け、外面口唇部直下に貝殻腹縁文を斜位に付けている。263は貝殻腹縁文を斜位に付けている。

264から267は口唇部直下に平坦な幅広の粘土紐を横位に貼り付けた一群である。264は粘土紐上に貝殻腹縁文を斜位に付けている。265と266は粘土紐上に貝殻腹縁文を斜位に付けていたが、266は刻目文を菱形に付けている。

I群2類d（第132図268・269 図版47）

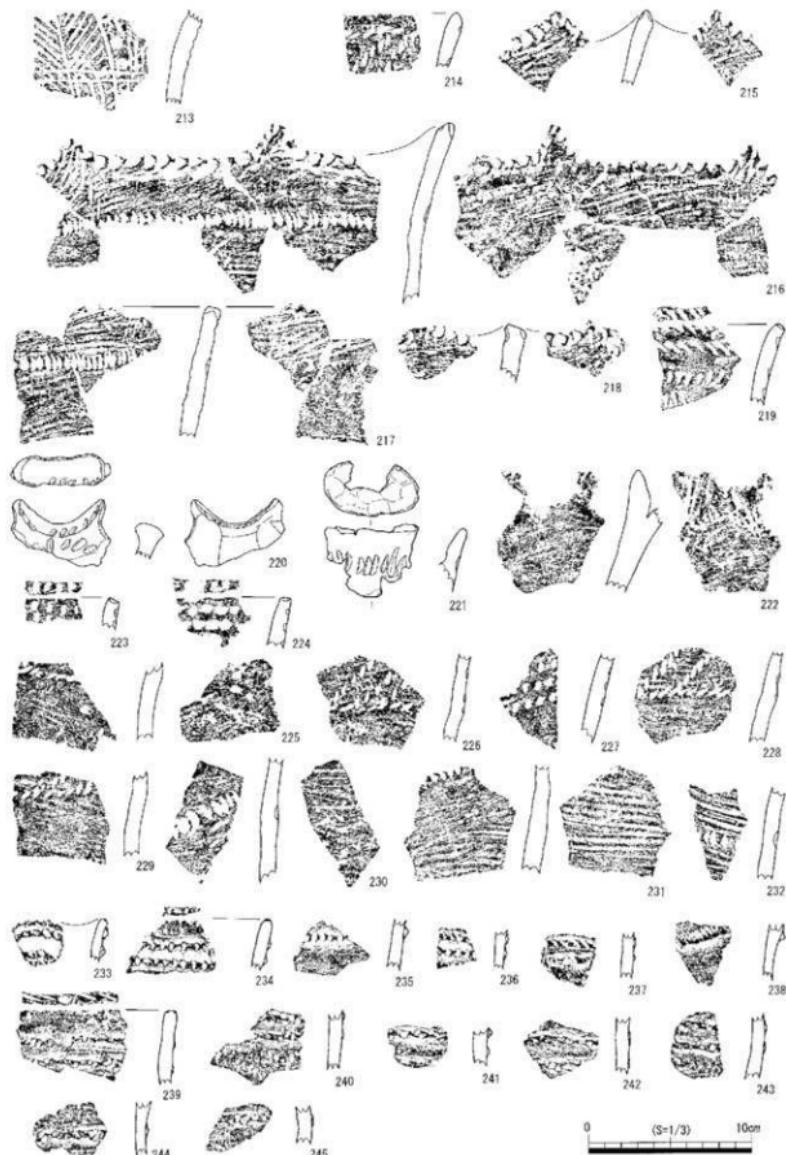
石山式土器で、268は口縁部に沿って木端状工具で刻目文を横位に付けている。269は竹管状工具で刻目文を菱形に付けている。

I群2類e（第132図270～272 図版48）

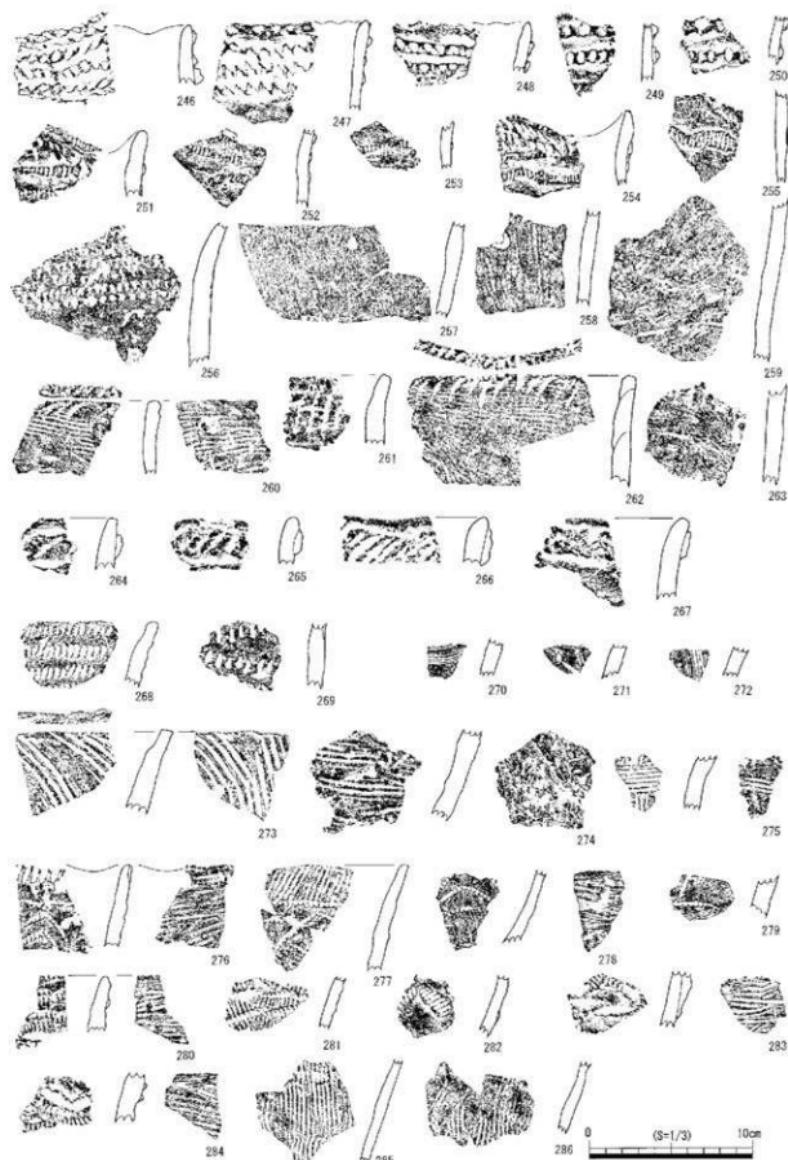
いずれも櫛齒状工具で沈線を弧状に付けている天神山式土器である。

I群2類f（第132図273～275 図版48）

273は平線で口唇部、外内面ともに条痕を斜位に付けている。274は外面に条痕を斜位に付け、内面は



第131図 包含層出土土器 3



第132図 包含層出土土器 4

擦痕を斜位に施している。275は外面に条痕を横位と縦位に付け、内面も条痕を斜位に施している。

I群2類g（第132図276～286 図版48）

打越式で、276から279は貝殻腹縁文を付けた一群である。276は波状口縁を有し、口唇部直下に沈線を斜位に施している。外面胴上部に貝殻腹縁文を横位と鋸歯状に付け、内面は条痕を斜位に施している。277は平縁で口唇部に条痕を付けている。胴上部に貝殻腹縁文を横位と菱形に施している。278は外面に貝殻腹縁文を鋸歯状に施し、内面は条痕を横位に付けている。

280から285は原体を引きずって貝殻腹縁文を付けた一群である。280は平縁で、口唇部に貝殻圧痕を付けている。外面には貝殻腹縁文を密に施している。内面も条痕を横位に付けている。281は地文に条痕を斜位に付け、貝殻腹縁文を地文と交差するように施している。282から284は貝殻腹縁文を鋸歯状に付けている。283と284は内面に条痕を横位に施している。285と286は条痕を縦位に付けている。

I群2類h（第133図287～291 図版48）

287と288は神之木台I式、289から291は神之木台II式である。287は波状口縁を有し、口縁に沿って粘土紐を貼り付け、粘土紐上と口唇部に刻みを施している。外面は竹管状工具で沈線を格子状に付けている。288は平縁で外面に高めの粘土紐を弧状に貼り付け、粘土紐上に刻みを施している。289も平縁である。口唇部に刻みを付け、外面に断面三角形の粘土紐を横位に貼り付け、ヘラ状工具で刻みを施している。290と291は外面に断面三角形の粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上に刻みを施している。

I群2類i（第133図292 図版48）

木島II式で、口縁部に低い粘土紐を横位と波状に貼り付け、粘土紐上に貝殻で刻みを施している。

I群2類k（第133図293～298）

293から295は平縁である。293は口唇部に刻みを付ける。297と298は内面に条痕を施している。

II群1類a（第133図299～302 図版48）

下吉井式で、299は平縁で、外面に断面三角形の粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上にヘラ状工具で刻みを施している。300も平縁である。口唇部に棒状工具で刻みを施し、外面に断面三角形の粘土紐を貼り付け、粘土紐上に刻みを施している。内面には条痕が見られる。301、302は外面に櫛齒状工具で沈線を弧状と横位に付けている。301は内面に条痕が見られる。

II群1類b（第133図303～307 図版48）

いずれも器壁が薄く、口縁部と胴部の境に摘み痕を横位に施し、内面には指頭痕が付いている。303は緩やかな波状口縁を有し、口縁部がやや弯曲しており、口縁部と胴部の境に摘み痕を横位に施している。器面全体に指頭痕が付いている。304は上に、305から307は下に地文の沈線を斜位に付ける。

II群1類c（第133図308～311 図版48）

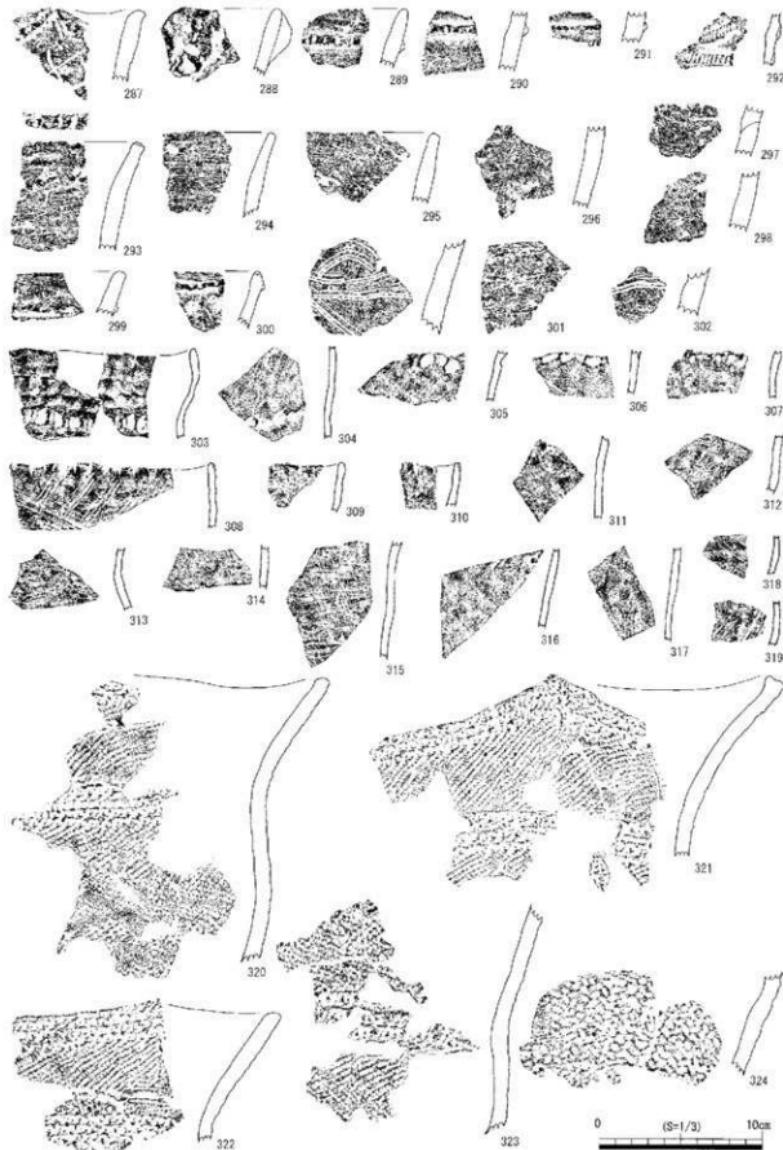
木島IX式で、いずれも器壁が薄く、内面に指頭痕が付いている。308から310は緩やかな波状口縁を有する。308は口唇部に爪状の刻みを付け、胴部は櫛齒状工具で斜格子状に沈線を施している。309と310は口唇部に爪状の刻みを付けている。

II群1類d（第133図312～319 図版48）

いずれも器壁が薄く、内面に指頭痕が付いている。312は外面に細線を斜位に施している。315は横位の調整痕が付き、細線を斜位に施している。318と319は櫛齒状工具で沈線を斜位に付けている。

II類1群g（第133図320～第134図330 図版49）

関山II式で、320から323は胴上部が開き、波状口縁を有し、器面全体に繩文を付け、口縁部と胴上部のくびれの位置に繩文原体のループを2～4段回転施文している一群である。320と321は器面全体にLRの繩文を付け、口唇部直下と胴上部のくびれの位置に0段多条のLRの繩文原体のループを回転施文している。322は口唇部直下と胴上部のくびれの位置にLRの繩文原体のループを回転施文している。323



第133図 包含層出土土器5



第134図 包含層出土土器 6

は器面全体に羽状縄文を付け、胴上部のくびれの位置に L R の縄文原体のループを回転施文している。324は多条縄文の組紐を回転施文している。

325から330は地文に正反の合の縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を施した一群である。325は平縁で、地文に正反の合の縄文を付け、口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を施し、下に同一工具による沈線で三角形と菱形の区画を作っている。326は地文に正反の合の羽状縄文を付けている。328は沈線の一部に同一工具による爪形の刺突を付けている。

II類1群i (第134図331~352 図版49)

上の坊式で、331から337は口縁部に竹管状工具で刻目文を付けた一群である。331は緩やかな波状口縁を有する。外面は斜位の擦痕が付き、口縁に沿って半截竹管状工具で刻目文を2段付けている。3段目は同一工具で部分的に浅い刻目文を付けている。332から337は平縁である。332から334、337は竹管状工具で、335は木端状工具で、336は半截竹管状工具の刻目文を横位に施している。

338は半截竹管状工具で浅い爪形を押しながら横位に付けている。339と340は平縁で、先端が2つに割れた竹管状工具で刻目文を横位に3段付けている。

341から345は幅約 1 cm の工具で刻目文を付ける一群である。341と344は平縁で、口縁に沿って木端状工具で刻目文を付ける。342は外面の口縁部と胴上部の境に段を有し、段の直上に木端状工具で刻目文を付けている。343は平縁で口縁部に沿って楔状工具で刻目文を横位に付け、口縁部と胴部の境にも同一工具で刻目文を横位に施し、内面には横位の擦痕が付いている。

346から352は幅 1 cm を超える工具で刻目文を付ける一群である。346、349、350は平縁で、口縁部に沿って幅の違う2つの木端状工具を組み合わせて刻目文を付けている。いずれも内面には横位の擦痕が付いている。347は平縁で、口縁に沿って木端状工具で矢羽根状の刻目文を付けている。351は爪状の刻目文を施している。348は平縁で、口縁に沿って刻目文を2段付けている。352は木端状工具で刻目文を横位に付けている。

II群1類k (第134図353 図版48)

釀迦堂乙式で、L R の縄文と R L の縄文で羽状縄文を付けており、補修孔を施している。

II類2群a (第135図354~364 図版50)

354から357は地文に R L の縄文を施し、ヘラ状工具で浅い斜位の刻みを付け、浮線文を弧状に貼り付けている。358は浮線文を梯子状に貼り付け、下にはヘラ状工具で浅い斜位の刻みを施した浮線文を横位に貼り付け、円形刺突を施している。359から362は地文に R L の縄文を施し、半截竹管状工具で沈線を横位に付けている。363は地文に上部は L 、下部は R L の縄文を施し、沈線を横位に付けている。

II群2類b (第135図365~373 図版50)

北陸系の観ヶ森式に似た土器を本類とした。いずれも外面に横位または斜位の擦痕が付いている。

II群2類c (第135図374~第140図430 図版50~52)

諸磯c式で、374は緩やかな波状口縁を有する。器面全体に半截竹管状工具で沈線を横位と斜位に重ねて施し、口縁部にボタン状の貼付文を2個付けている。

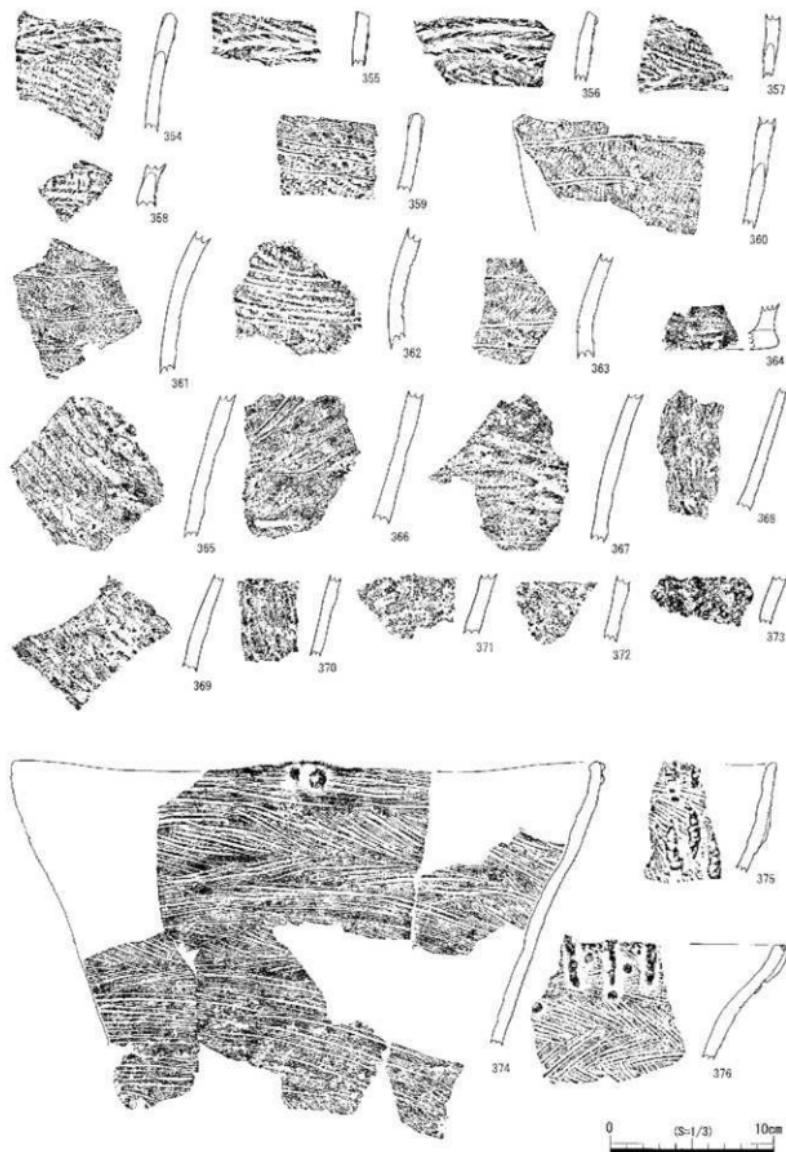
375から385は地文に半截竹管状工具で斜位の集合沈線を施し、両端を尖らせた棒状の粘土紐を縦位に貼り付け、粘土紐上に刻みを施している一群である。375はゆるやかな波状口縁を有し、口唇部から棒状の粘土紐を貼り付けている。376、377、379、380は平縁で、胴上部が外弯気味に大きく聞く。いずれも口唇部に棒状の粘土紐を貼り付けている。376、379、380は口唇部直下に半截竹管状工具で爪形文を施し、地文に同一工具で横矢羽根状の集合沈線を付け、棒状の粘土紐とともに円形貼付文を施している。

386から405は地文に半截竹管状工具で集合沈線を付け、単独または2個1対の円形貼付文を施している一群である。器面全体に綾杉状の集合沈線を付けるものが主体であるが、胴中央部から下部の集合沈

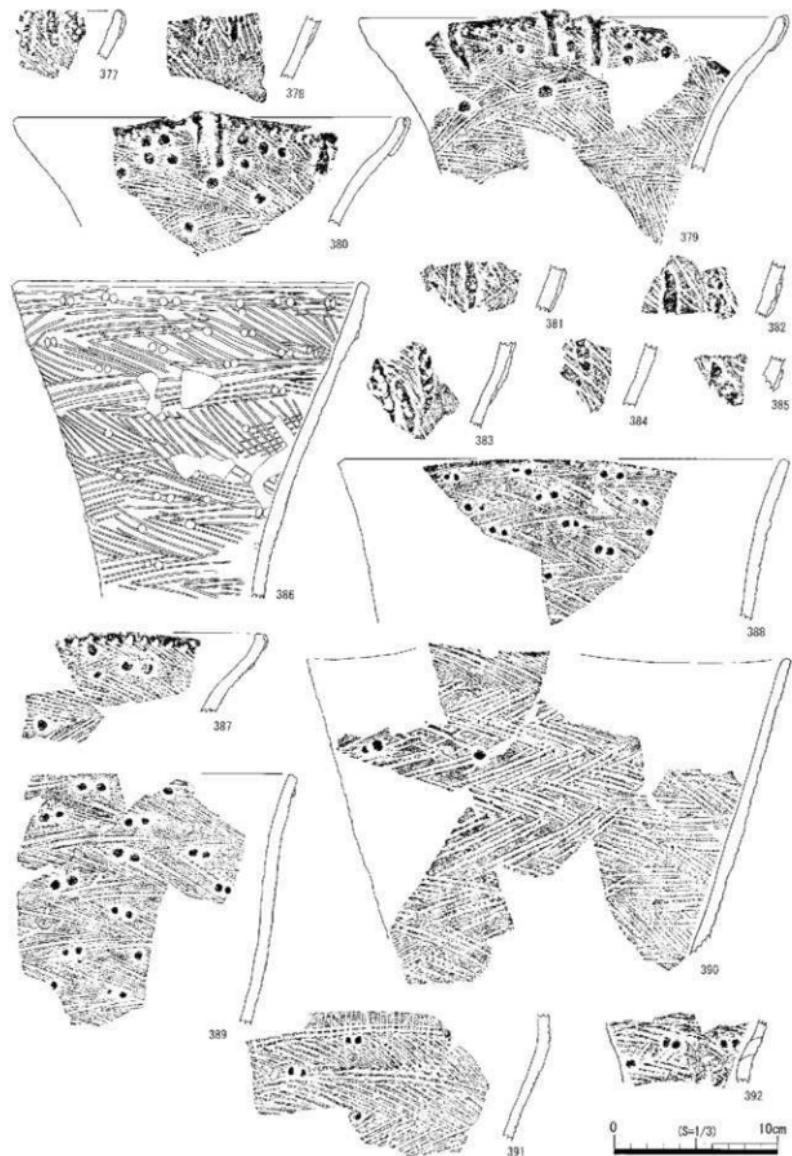
線が縦位と縱矢羽根状になるもの、底部付近の集合沈線が横位となるものも見られる。386は平線で胴下部から口縁部にかけて直線的に開く。口唇部直下に横位の集合沈線を付け、器面全体に綾杉状沈線を施し、円形貼付文を付けている。387は平線で胴上部が外寄気味に大きく開く。口唇部に沿って半截竹管状工具で爪形文を付け、地文に同一工具で横矢羽根状の集合沈線を施し、円形貼付文を付けている。388と389は平線で、胴部がわずかに膨らみ、口縁部の開きは小さい。390は緩やかな波状口縁を有し、円形貼付文は胴上部のみ見られる。391は胴部が膨らみ、この位置を境に、胴上部は半截竹管状工具で横位の区画を作り、中に沈線を縦位に施し、同一工具で沈線を斜位に付けている。胴下部は横矢羽根状の集合沈線を施している。393は平線で口縁部が直線的にわずかに開く。集合沈線を細かく付けている。394は縦位の集合沈線で区画した中に、同一工具による縱矢羽根状の集合沈線を付けて菱形や流線形の無文部を残している。395は胴上部が内側に屈曲し、この屈曲を境に、胴上部は斜位、胴下部は縦位と縱矢羽根状の集合沈線を施している。396は胴上部を横位の集合沈線で区画し、中に鋸歯状の集合沈線を付け、縦位の結節浮線文を施している。胴下部は縦位と縱矢羽根状の集合沈線を付けている。

406から421は器面全体に半截竹管状工具で結節浮線文を付けている一群である。406から412は4単位の大波状口縁を有する。406は口縁部に沿って細い粘土紐を貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。胴中央部に横位の結節浮線文を付け、上半部は左右対称の渦巻状の結節沈線文を施している。下半部は縦位、縱矢羽根状、弧状の結節浮線文を付けている。407と408は結節浮線文を左右対称の渦巻状に付けている。409はまばらな結節浮線文を左右対称の渦巻状に付けている。410は口縁部が外傾し、内面に稜を有する。口縁部と胴部の境に無文帶を有し、無文帶から上は渦状または弧状に結節浮線文を付けている。無文帶から下は左右対称の渦巻状の結節浮線文を付けている。411は口縁部に沿って結節浮線文を施し、地文に斜位の沈線を付けてから、流線形と左右対称の渦巻状の結節浮線文を重ねている。412も411と類似した施文を施している。413は横位の集合沈線を付け、上下に左右対称の渦巻状の集合沈線を付けている。414は口唇部に結節浮線文を付けている。地文に半截竹管状工具で斜位の沈線を付け、波頂部に棒状貼付文を垂下し、棒状貼付文全体に結節浮線文を付けている。415と416は鋸歯状、弧状の結節浮線文を付け、菱形や三日月形の無文部を残している。417は破片の上部は渦巻状の結節浮線文、中央部は横位と弧状の結節浮線文、下部は縱矢羽根状の沈線を付けている。418は立ち上がりが大きく内側に屈曲する底部である。結節浮線文を流線形や弧状に付けている。419は小形の底部であり、結節浮線文を横位、斜位、弧状に付けている。420は地文に横位の集合沈線を付け、その上に粘土紐をV字形の入れ子状、流線形に貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。421は平線の深鉢であり、地文に横位の集合沈線を付け、その上に粘土紐を横位、流線形、左右対称の渦巻状に貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。422は胴上部に半截竹管状工具で横位の線2本を施し、下段の線の直下に粘土紐を貼り付けて区画を作る。中に綾杉状の集合沈線を地文として施し、粘土紐を菱形、弧状に貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。菱形の中には同じ技法で縦位の結節浮線文を付けている。胴中央部から下部は縦位の集合沈線で区画し、中に流線形の集合沈線を付けている。423から425は大波状口縁を有し、口縁部を折り返しており、口唇部に角状の突起が付く。口縁に沿って結節浮線文を付け、胴部は左右対称の渦巻状に結節浮線文を付けている。426は図上復元で最大径が60cmを超える大型品である。胴上部は地文に半截竹管状工具で沈線を横位に付け、結節浮線文を施した横位の粘土紐を貼り付けて区画を2段作る。2段とも区画内に粘土紐を左右対称の渦巻状、弧状、鋸歯状に貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。胴下部は半截竹管状工具で縦位と縱矢羽根状の集合沈線を施し、器面全体に2個1単位の円形貼付文を付けている。

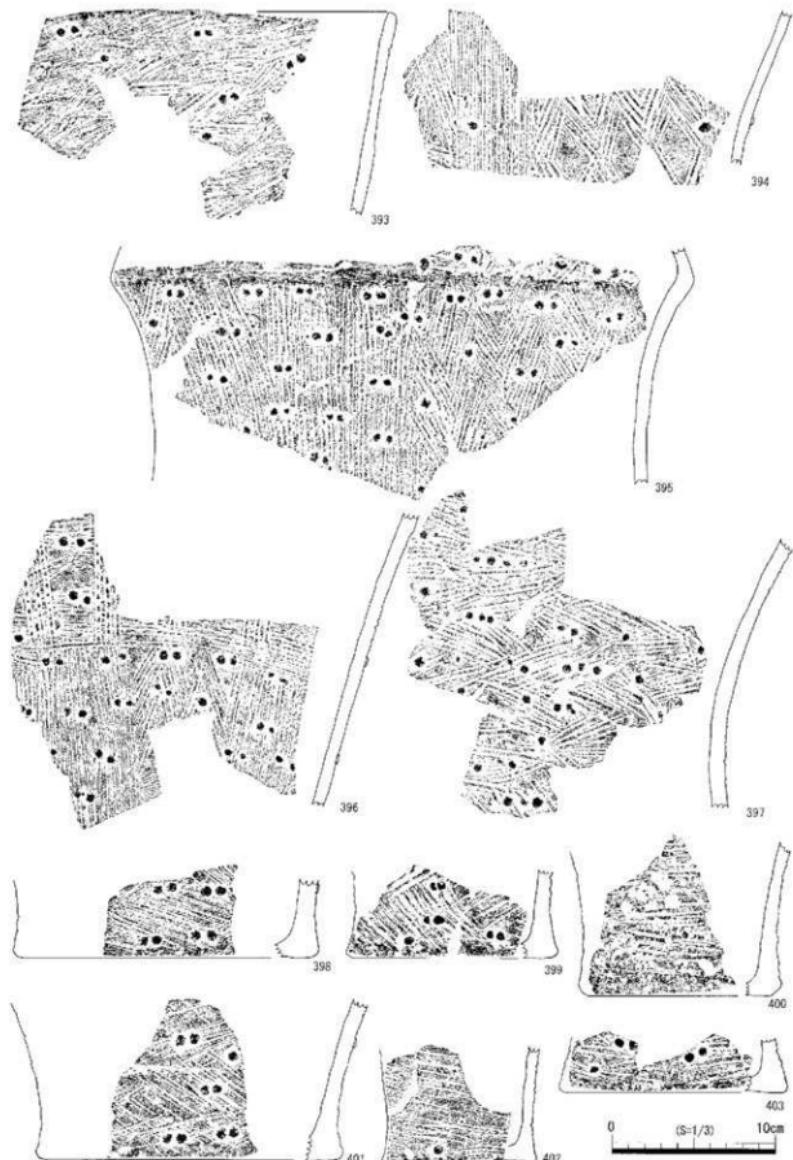
427から430は無文の浅鉢形土器であり、427が口縁部で直立する。428は胴部に段を有し、肩部と胴部の境はくの字状に屈曲している。429は補修孔が見られる。430は肩部に円孔を穿っている。



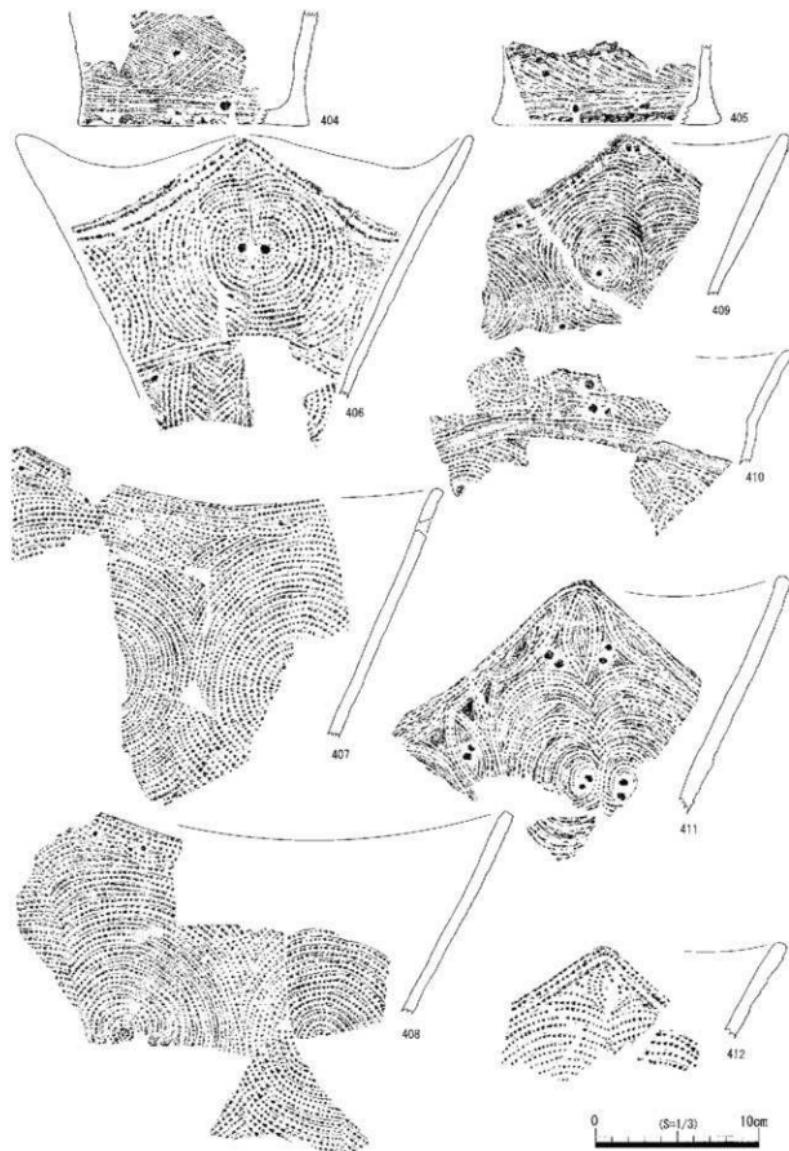
第135図 包含層出土土器 7



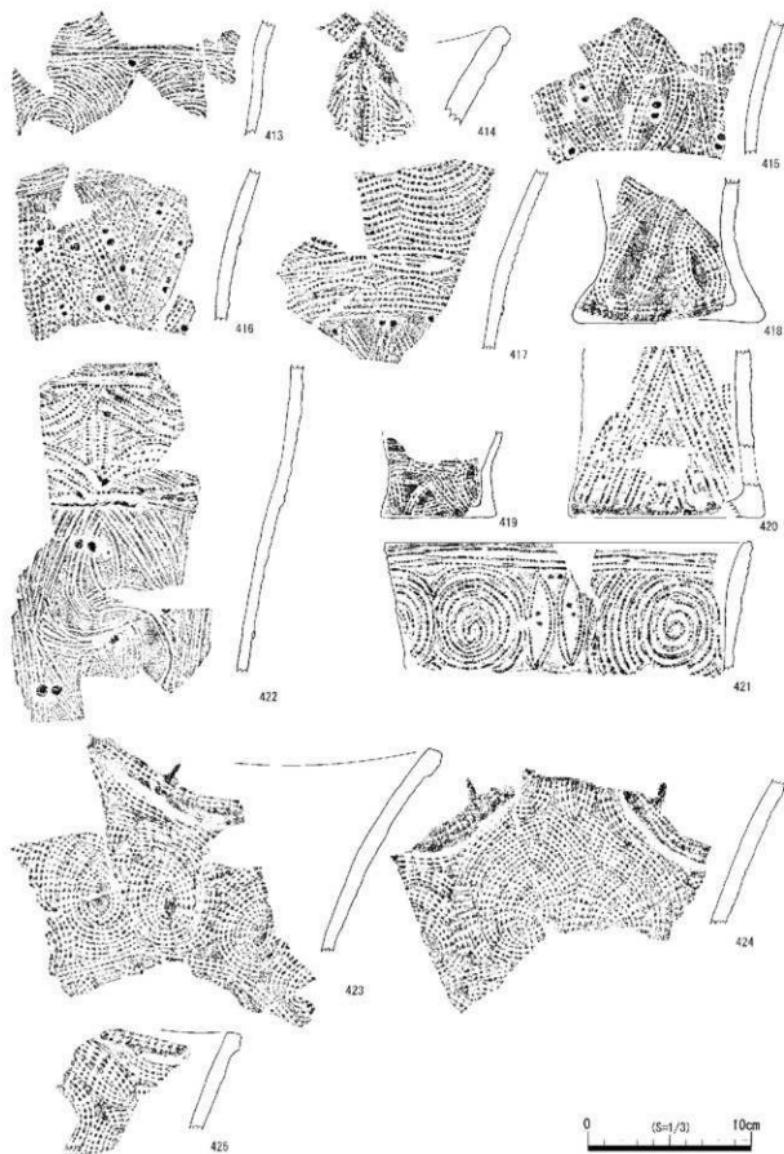
第136図 包含層出土土器 8



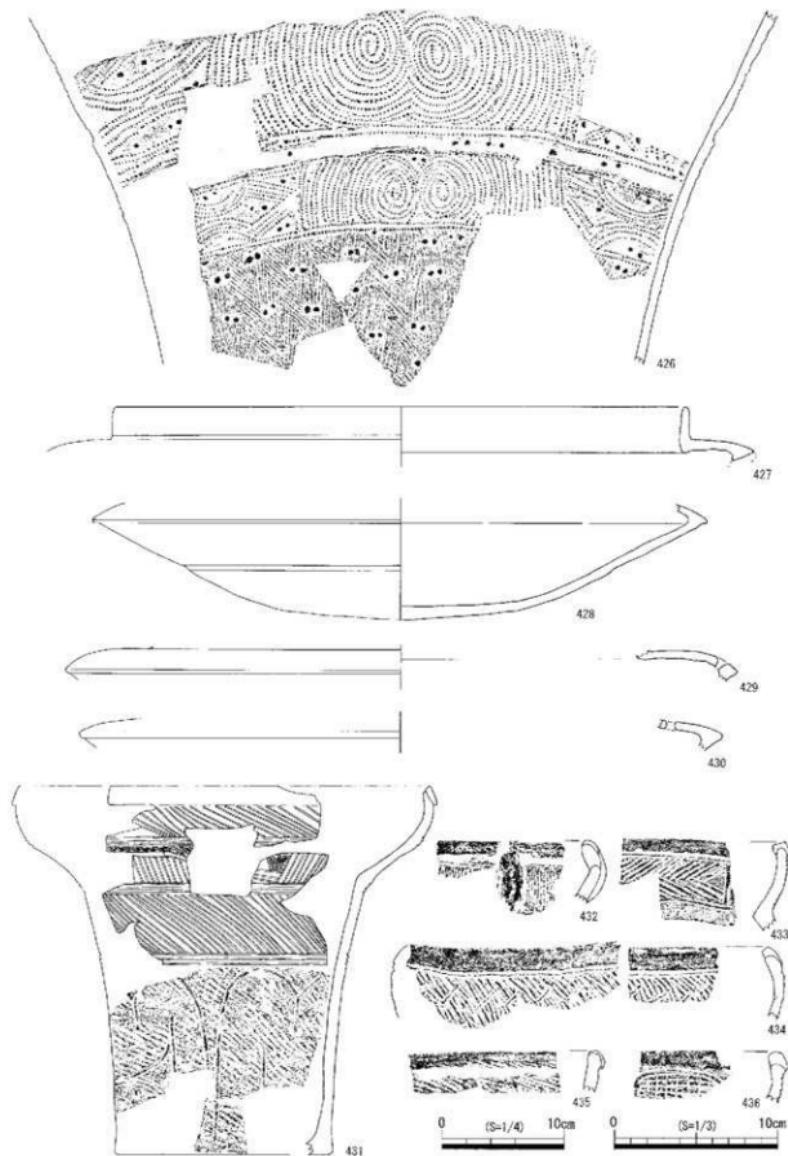
第137図 包含層出土土器 9



第138図 包含層出土土器10



第139図 包含層出土土器11



第140図 包含層出土土器12

II類2類d（第140図431～第142図469 図版52）

十三菩提式土器で、431から437は平縁で、口唇部に粘土紐を貼り付け、外面口唇部直下に無文帯をつくる一群である。431は胴上部から口縁部にかけて大きく弯曲して聞く深鉢である。胴上半は沈線を横位に引いて3段の区画を作り、1段目と3段目の中に半截竹管状工具による密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付けている。2段目は地文にRLの多条縄文を施し、密接蒲鉾状平行沈線を縦位に付けている。胴下半は地文にRLの縄文を施し、同一原体でY字状、U字状、弧状の沈線を付けている。432は口縁部が内弯する。口縁部に無文帯を作り、棒状の粘土紐を貼り付けて区画を作り、中に半截竹管状工具で縦位の沈線を付けている。433は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部は内弯する。口縁部の無文帯の下は横位と縦位の沈線で区画し、中に横矢羽根状の沈線を付けている。434は口縁部が内弯する。口縁部の無文帯の下に横位の沈線を付けてからその下に斜位の沈線を付け、鋸歯状の沈線を付けている。435は口縁部が直線的に立ち上がる。口唇部に粘土帯を貼り付け、下にRLの縄文を付ける。436は口縁部がわずかに内傾する。口縁部の無文帯の下に沈線で橢円形の区画を作り、中に横位と縦位の沈線を付けている。437は口縁部の無文帯を包むように粘土紐を突起状に貼り付け、無文帯の下にRLの縄文を付ける。

438から442は波状口縁を有し、口唇部に粘土帯を断面形が三角形になるように筒状に貼り付けた一群である。438は口唇部に半截竹管状工具で密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付ける。口縁部は三角形の印刻文を施し、周囲を粘土紐で縁取る。胴部は横位の沈線を付けて区画を作り、上に密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付け、下は地文にRLの縄文を施し、鋸歯状の沈線を2段付けている。439は口唇部に密接蒲鉾状平行沈線を斜位に施し、粘土紐2本を橋状に貼り付けている。胴部も密接蒲鉾状平行沈線を斜位に施している。440は口唇部の外縁部に沈線を付けてから密接蒲鉾状平行沈線を斜位に施している。胴部は横位の沈線で区画し、中に密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付けている。441は外面に粘土帯を貼り付けて口唇部に突起を施している。口縁部の粘土帯は沈線を斜位に付け、三角形の連続印刻文を施している。粘土帯の下はRLの縄文を付けている。442は口唇部に橋状把手を付けて橢円形の区画を作り、中に密接蒲鉾状平行沈線を縦位に施している。胴部は密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付け、横位の沈線で区画している。

443から446は平縁で、口唇部が内側に屈曲し、外面全体に縄文を付ける一群である。445以外は口唇部にも縄文を付けている。447は口唇部に突起を付けているが欠損している。外面にはLの縄文を付けている。

448はRLの縄文を付け、半截竹管状工具による沈線で縦位の区画を作り出している。449と451は、上部に密接蒲鉾状沈線文、下部に縄文を付けている。

452は口唇部に粘土紐を貼り付け、無文帯を包むように粘土紐を突起状に貼り付ける。地文にRLの縄文を付け、口縁直下に鋸歯状の密接蒲鉾状平行沈線文を付ける。その下には横位の密接蒲鉾状沈線文を付け、同一工具による沈線で菱形文を付けている。

453から459までは印刻文を付ける一群である。半截竹管状工具による沈線で区画を作り、区画内に横位の密接蒲鉾状平行沈線文を付け、さらに格子状にヘラ状工具で沈線を施している。

460から462は横位の密接蒲鉾状平行沈線を付け、同一工具による沈線で縦位や鋸歯状の文様を施している。

465は口縁部に付けた大型の把手である。側縁部などに密接蒲鉾状平行沈線を付けている。

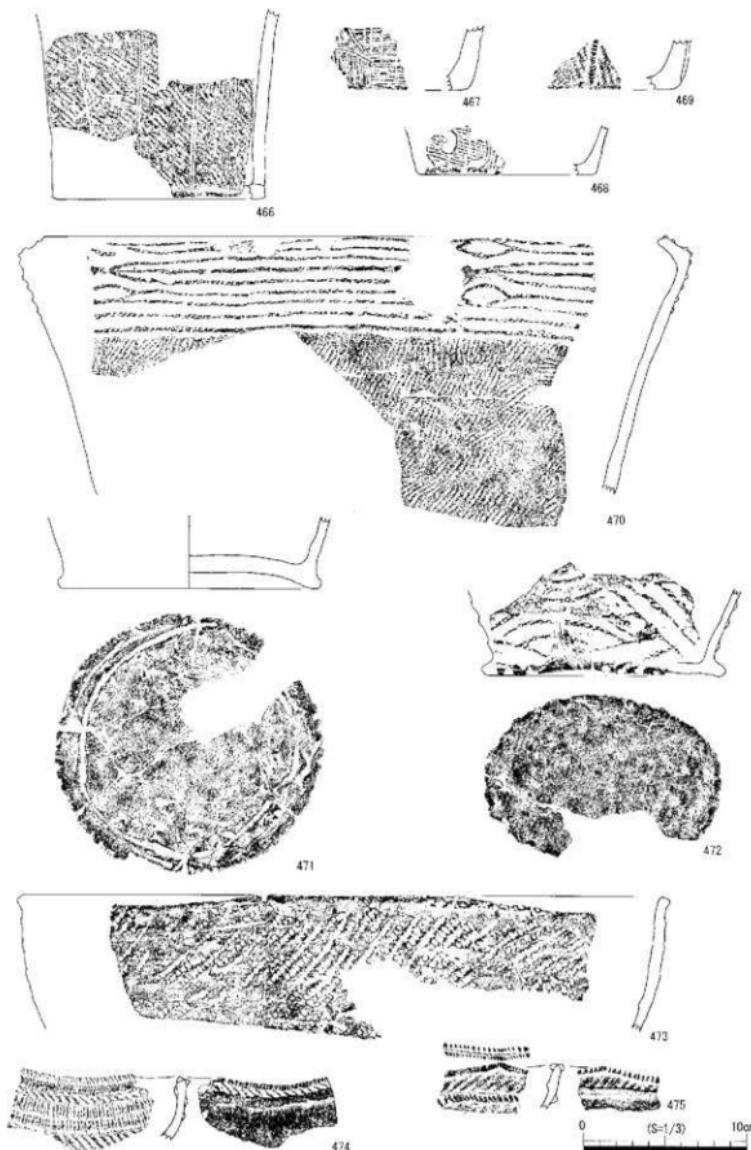
466から469は底部である。466は地文にRLの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位の沈線を施している。467と468は印刻文と格子状の沈線が見られる。469は地文にRLの縄文を施し、粘土紐を貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。

II群2類f（第142図470～473 図版53）

北白川III式で、470は口縁部がくの字状に内側に折れる。上から見た胴部の形状は橢円形を呈する。口



第141図 包含層出土土器13



第142図 包含層出土土器14

縁部に沿って粘土紐を付け、粘土紐の一部を流線形に交差させる。粘土紐の上と胴部はLRの縄文を施している。471は470の底部であり、円形を呈し、上げ底である。底部は外に張り出し、刻みを付けている。底面には半截竹管状工具で沈線を施している。472は梢円形を呈する底部であり、底部は外に張り出し、貝殻状の圧痕を付けている。胴部は弧状に粘土紐を貼り付け、その上にLRの縄文を施している。473は器面や口唇部の調整が粗い個体でLRの縄文を施している。

II群2類g（第142図474～第143図488 図版53）

大歳山式で、474は緩やかな波状口縁を有し、口唇部にΣ字状の連続刺突を付け、内面にRLの多条縄文を施している。外面は地文に同一原体で縄文を施し、粘土紐を2本弧状に貼り付け、粘土紐上に竹管状工具で連続爪形文を施している。475から482は口唇部に竹管状工具でΣ字状の連続刺突を付け、内面口唇部直下に多条縄文を施し、外面は器面全体に地文に多条縄文を付け、断面三角形の粘土紐を貼り付けている。476は平縁で、475、477から482が緩やかな波状口縁を有する。475は地文の上に口縁に沿って波状と横位の粘土紐を貼り付け、V字状浮線文を施している。476は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部が開く。地文の上に口縁に沿って粘土紐を貼り付け、粘土紐上に竹管状工具で浮線文を付けている。胴部は粘土紐を弧状や直線状に貼り付け、V字状の浮線文を付けている。477は口縁部が内弯して立ち上がり、波頂部で緩やかに外反する。器面全体に粘土紐を口縁に沿って貼り付け、V字状浮線文を施している。478から482は内弯する口縁部を有する。478は口縁に沿って2段、下には弧状に粘土紐を貼り付け、浮線文を施している。479は口縁に沿って粘土紐を貼り付け、V字状の浮線文を施している。480と481は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部は内弯する。口縁部に沿って粘土紐を貼り付け、半截竹管状工具で浮線文を施している。頸部附近と胴部は、口縁部の粘土紐より細い粘土紐をΩ状または弧状に貼り付け、竹管状工具で浮線文を施している。482は粘土紐を弧状に2段貼り付け、浮線文を付けている。483は地文に0段多条のRLの縄文を施し、粘土紐を弧状に貼り付け、浮線文を施している。484から487は地文に多条縄文を施し、粘土紐を横位または弧状に貼り付け、浮線文を付けている。488は底部である。地文にRLの多条縄文を付け、粘土紐を縱位に貼り付け、上部に圧痕を施している。底面は指頭で多角形を作っている。

II群2類h（第143図489・490 図版53）

489は胴部が張った深鉢である。形状は大歳山式土器に似るが、器壁に厚みがある。外面全体にLRの縄文を付けている。490は波状口縁を有し、口唇部に連続刺突を施している。外面は粘土紐を横位または弧状に貼り付け、棒状工具で連続刺突文を施している。

II群2類i（第143図491～第144図515 図版53）

形状は大歳山式土器に似るが、粘土紐の施文方法が異なるものなどを本類とした。

491は平縁で、内弯する口縁部である。地文にLRの縄文を施し、横位の粘土紐を1段、横波状の粘土紐を2段貼り付け、粘土紐上に半截竹管状工具で結節浮線文を施している。492は緩やかな波状口縁を有する。内面はRLの縄文を施し、口縁部に沿って粘土紐を貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。外面は器面全体にRLの縄文を付け、口縁部は横位に2本、胴部はハの字状に粘土紐を貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。493と494は頸部がくの字状に屈曲する。495は弯曲する胴上部である。地文にRLの縄文を施し、粘土紐を弧状と円形に貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。496から506は地文に縄文を施し、粘土紐を貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。507から510は地文に縄文を施し、断面三角形の粘土紐を貼り付け、粘土紐の下半部のみに竹管状工具で連続爪形文を施している。511は胴部に粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐も含めて器面全体にLRの縄文を施している。512は地文にRLの縄文を施し、T字状に粘土紐を貼り付け、横位の粘土紐に片側のみ連続刺突文を施している。縦位の粘土紐には圧痕が残る。513は地文にRLの縄文を付け、粘土紐で方形の区画を作り



第143図 包含層出土土器15

出している。514と515は底部である。いずれも地文にR Lの縄文を施し、縦位の粘土紐を貼り付け、粘土紐上に結節浮線文を施している。

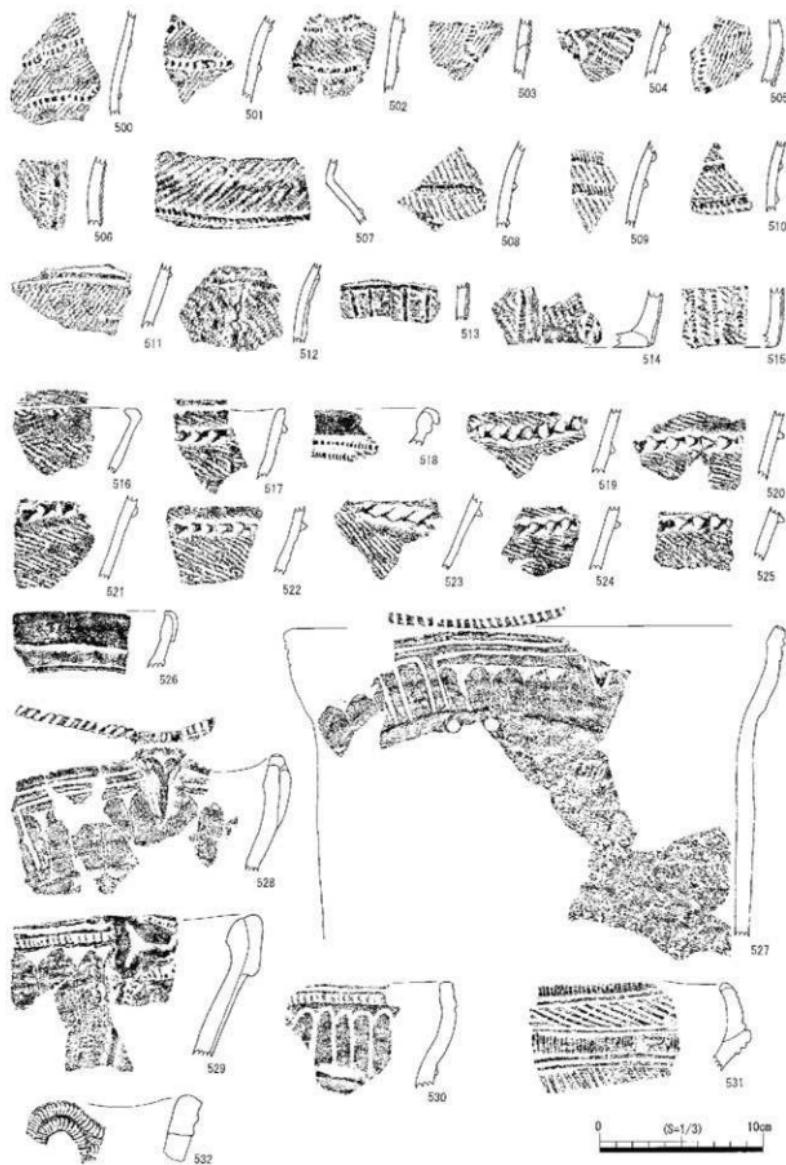
II群2類j（第144図516～526）

516は平縁で、口縁部をくの字状に内側に曲げている。器面全体にR Lの羽状縄文を付けている。517は緩やかな波状口縁を有する。口唇部と器面全体にR Lの縄文を付け、断面三角形の粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上に棒状工具で刻みを施している。518は口縁部を折り返している。地文にR Lの縄文を施し、粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上に半截竹管状工具で結節浮線文を施している。519から525は器面全体にR Lの縄文を付け、断面三角形の粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上に棒状工具で刻みを施している。526は口縁部を折り返し、無文帶の下に半截竹管状工具で横位の沈線を施している。

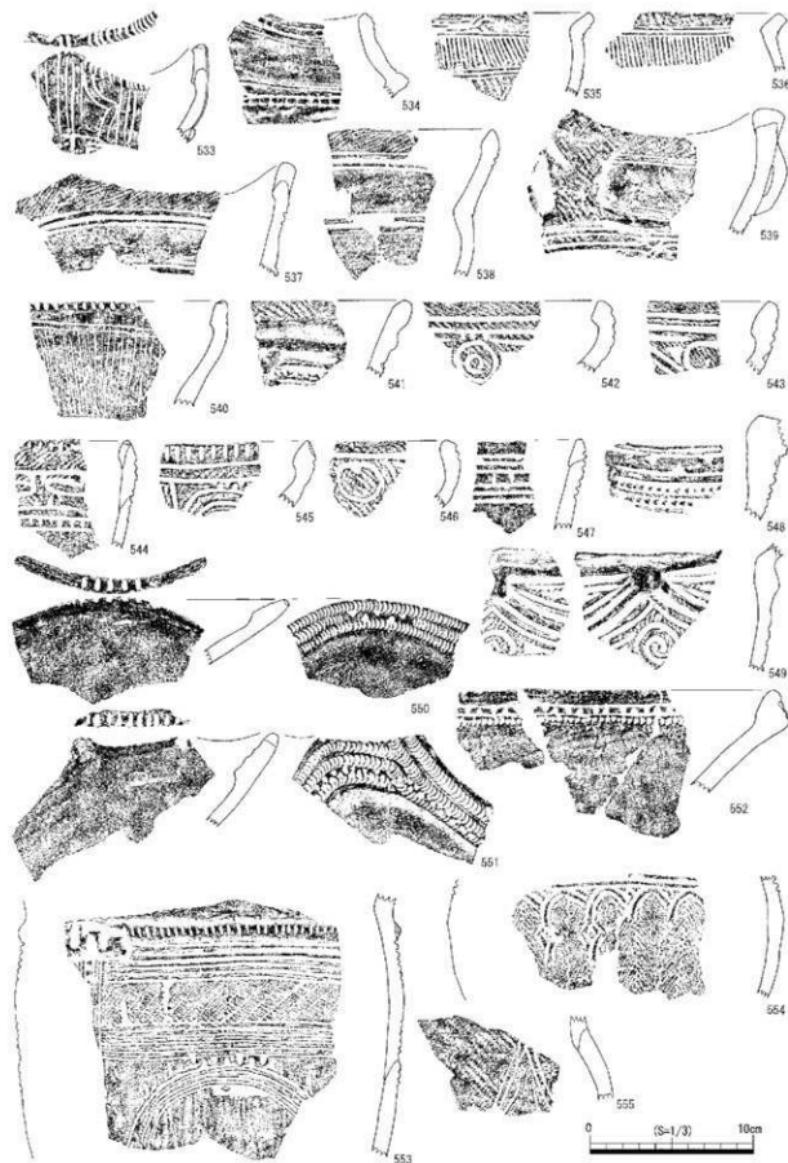
III群1類a（第144図527～第146図574 図版54）

五領ヶ台式で、527から529は胴上部に三角印刻文を付けた一群である。いずれも三角印刻文の下端から沈線を垂下させている。527は平縁で、胴上部がわずかに開く。口唇部に半截竹管状工具で刻み状の沈線を施し、胴上部を沈線で区画し、区画内に三角印刻文を付けている。胴中央部より下は粗く削っている。528は口縁部に粘土紐で三叉状の突起を貼り付けている。口唇部は半截竹管状工具で刻み状の沈線を施している。口縁に沿って沈線を付け、下に三角印刻文を施している。529は緩やかな波状口縁を有する。波頂部に粘土紐で三叉状の突起を貼り付け、下端に細い粘土紐を垂下させている。口唇部に沿って横位沈線と竹管状工具で連続爪形文を施し、下に三角印刻文を付けている。突起の右側は連続爪形文で縁取る。

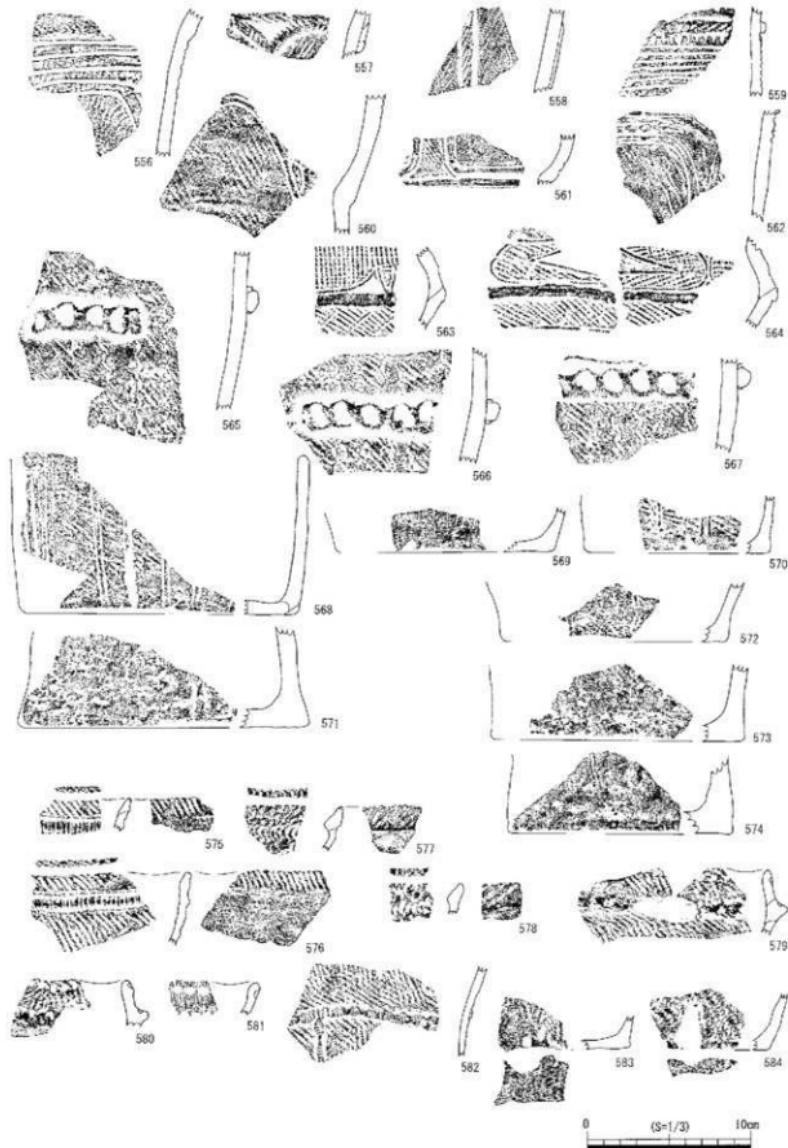
530は平縁で、口縁に沿って沈線と連続爪形文を施し、細い押引沈線を逆U字状に付けている。その下には断面三角形の粘土紐を貼り付けている。531は緩やかな波状口縁を有し、口縁部は内弯する。口唇部に半截竹管状工具で連続爪形文を施している。口縁の張り出した位置に粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上に連続爪形文を付けている。口縁直下と粘土紐の上下に蒲鉾状沈線で区画した中に密接蒲鉾形平行沈線を斜位に付け、浅い平行沈線を交差させる。粘土紐から下は地文に縄文を付け、密接蒲鉾形平行沈線を斜位に付けている。532は把手であり、孔を作出している。外面に竹管状工具による連続爪形文を2段付けている。533と534はともに波状口縁を有する。533は口唇部に半截竹管状工具で連続爪形文を付けている。胴上部には沈線を縦位と逆くの字状に付け、胴上部と中央部のくびれ部に粘土板を貼り付けている。534は口縁部がくの字状に内傾する。口唇部直下と屈曲する位置に半截竹管状工具による沈線と押引沈線を付けている。535と536は平縁で、口縁部が短く外傾する。535は口唇部直下に蒲鉾状沈線を弧状に付けている。胴部は蒲鉾状沈線で横位に区画し、中に密接蒲鉾状集合沈線を斜位に付けている。区画の下にはL Rの縄文を付けている。536は口縁部に0段多条のL R縄文を付け、くびれの位置には横位の蒲鉾状沈線、胴部には斜位の密接蒲鉾状平行沈線を施している。537から539は地文に縄文を付け、蒲鉾状沈線で横位の区画を作り、中の縄文を磨り消す一群である。537は波状口縁、538は平縁を有する。539は緩やかな波状口縁を有し、波頂部の口唇部直下には橋状把手を貼り付ける。地文に口唇部直下はL R、橋状把手から下はR Lの縄文を施している。胴上部の区画内に三角形の刺突を付けている。540は平縁で、口唇部に棒状工具で刻みを付けている。外面に半截竹管状工具で沈線を縦位に施してから口縁に沿って沈線を付けている。541は口縁部に沿ってR Lの縄文を付け、太い沈線で区画し、中に粘土紐を貼り付け、粘土紐上に半截竹管状工具で刻みを付けている。542から546はいずれも平縁で、地文に縄文を付け、半截竹管状工具で横位、円形、弧状の沈線と刻みを付けている一群である。543は三角印刻文が見られる。545は弧状沈線の上部に相互刺突が見られる。547は平縁で、口縁部に沿って半截竹管状工具で押引沈線を横位に付け、細い竹管状工具で相互刺突を施している。548は口唇部が一部欠損するが肥厚させている。胴上部に半截竹管状工具で沈線を弧状に施し、中に三角形の刻目で相互刺突を付け、下に押引沈



第144図 包含層出土土器16



第145図 包含層出土土器17



第146図 包含層出土土器18

線を施している。549は胴上部に橋状把手を貼り付け、下にハの字状に貼り付けた粘土紐と一体化させる。地文にLRの縄文を施し、半截竹管状工具で沈線を三角形状、渦巻状に付けている。

550から552は直線的に外側に大きく聞く浅鉢の口縁部である。550は平縁で、口唇部の一部に半截竹管状工具で刻みを付けている。内面は口縁部に沿って連続爪形文を施し、一部に三角形刻目で相互刺突を付けている。551は波状口縁を有し、波頂部に平坦面を持つ。内面に口縁部に沿って連続爪形文を3段付けている。552は口縁部が肥厚し、口唇部と一体化する。口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を横位に付け、相互刺突を施しており、下に細い棒状工具で刻目文を付けている。

553は胴上部に粘土紐を貼り付け、粘土紐上に半截竹管状工具で刻みを施している。粘土紐の下は半截竹管状工具で垂下する沈線を施し、中央の沈線に相互刺突を付けている。粘土紐の下は半截竹管状工具による沈線を横位に施して区画し、中に斜格子状の沈線を施す。胴下部は沈線文を弧状に付けている。554は半截竹管状工具で沈線を横位に付けて区画し、地文に結節縄文を縦位に施し、アーチ形に沈線を付けている。555は地文にRLの縄文を施し、半截竹管状工具で沈線を付けている。556から559は器面に貼り付けた粘土紐上に縄文を施している。556は厚みの少ない粘土紐を横位に貼り付け、地文にRLの多条縄文を施し、半截竹管状工具で横位と弧状の沈線を付けている。557は粘土紐を三叉状に貼り付け、RLの縄文を施している。558はRLの結節縄文を縦位に付けている。559は粘土紐を横位に貼り付け、地文にLRの縄文を付け、粘土紐の直下に竹管状工具で横位の連続刺突文を施し、半截竹管状工具で横位の沈線を付けている。560と561は沈線区画内に縄文を付ける。560は地文にRLの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を弧状に施している。561は半截竹管状工具で区画し、中にLの縄文を付けている。563と564はくの字状に内反した胴部である。半截竹管状工具による沈線で区画し、中に印刻や密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付け、さらに斜位の沈線を交差させる。屈曲する部分に粘土紐を横位に貼り付けている。565から567は地文に2連のLRの結節縄文を縦位に付け、粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐の上を指でつまんでいる。

568から574は底部である。568と570は地文にRLの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を縦位に施している。572は地文にRLの縄文を施し、沈線を鋸歯状に付けている。

III群1類c（第146図575～584 図55）

575と576は緩やかな波状口縁を有する。内面は口縁に沿って0段多条のRLの縄文を付ける。口唇部にも同一原体の縄文を施している。外面は地文に同一原体で縄文を付け、低い粘土紐を口縁に沿って貼り付け、粘土紐上に竹管状工具で連続爪形文を施している。577と578は平縁で、口唇部にヘラ状工具で刻みを付ける。内面口縁部が肥厚し、段を有する。内面は口縁に沿ってLRの多条縄文を付ける。外面は地文に同一原体で縄文を施し、下に半截竹管状工具で連続爪形文を付けている。579と580は緩やかな波状口縁を有し、上方へ摘み上げた横位の粘土紐を付けている。地文に0段多条のRL縄文を付け、口唇部直下と粘土紐の直上に円形竹管状工具による連続刺突文を施している。581は緩やかな波状口縁を有する。地文に竹管状工具で沈線を縦位に付け、口縁に沿って円形竹管状工具による連続刺突文を2段付けている。

582は地文に0段多条のRL縄文を施し、粘土紐をT字状に貼り付け、粘土紐上に二枚貝の貝殻で圧痕を施している。

583と584は底部である。ともに底面付近で側面を花弁状に凹め、RLの縄文を付けている。

III群1類d（第147図585～595 図版55）

北裏c式で、585は魚尾形の波頂部を有する。口縁に沿って粘土紐を貼り付け、粘土紐上に半截竹管状工具で連続爪形文を施す。連続爪形文を付けた粘土紐で三角形状の区画を作り、中に地文の縄文を施してから竹管状工具で沈線を縦位に付けている。586と587は波状口縁に沿って粘土紐を2本密接して貼り

付け、それぞれの粘土紐上に連続爪形文を付ける。上下の粘土紐の境に横位の刺突を付けている。588は波状口縁に沿って粘土紐を2条、一部は3条密接して貼り付け、それぞれの粘土紐上に連続爪形文を施している。589は平縁で、内弯する口縁部である。地文にL Rの繩文を施し、口縁部に沿って半截竹管状工具による蒲鉾状沈線で区画し、中に相互刺突を付けている。

590は太い半截竹管状工具による沈線を横位に付けて区画し、中に粘土紐で梢円形の区画を複数個作り、粘土紐上に連続爪形文を施している。梢円形区画の中は細い半截竹管状工具で沈線をX字状に付けている。それぞれの梢円形区画の間には三角印刻文を付けている。591は粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上に連続爪形文を付ける。粘土紐の上下に縱位と横位の蒲鉾状平行沈線で区画を作り、中に竹管状工具で円形の連続刺突文を施している。592は地文にL Rの繩文を施し、粘土紐を横位に貼り付け、連続爪形文を施した粘土紐の際に蒲鉾状沈線を引いている。594は粘土紐を2本密接して横位に貼り付け、粘土紐上に連続爪形文を施す。下にR Lの繩文を地文として付け、縱位の沈線を施している。595は地文にR Lの繩文を付け、粘土紐を弧状に貼り付け、粘土紐の際に蒲鉾状沈線を施している。

III群2類a（第147図596～598 図版55）

596は平縁で、口縁に沿って角押文を2条付け、下に同一工具で角押文を縱位に施している。597は粘土紐を横位に貼り付け、両際に角押文を施し、上下に同一工具による角押文を小波状に付けている。598は粘土紐を横位に貼り付け、両間に角押文を施し、下に同一工具による角押文を鋸歯状に付けている。

III群2類b（第147図599～601 図版55）

新道式で、599は粘土紐を縱位と横位に貼り付けて区画し、内側の際に三角押文を施している。600は粘土紐を梢円形に貼り付けて区画し、内側の際に角押文を付けている。区画の中には角押文を小波状に付けている。601は粘土紐を横位に貼り付け、上下の間に三角押文を付けている。

III群2類c（第147図602～605 図版55）

阿玉台式で、602と603は粘土紐を梢円形に貼り付けて区画し、粘土紐の内側の際に三角押文を付けている。603は区画の中に三角押文を鋸歯状に付けている。604は粘土紐を弧状に貼り付け、外側の際に角押文を付けている。605は横位、Y字状、弧状の粘土紐を付けている。

III群2類d（第147図606 図版55）

勝坂式で、低い粘土紐を縱位に貼り付け、際に沈線を施している。

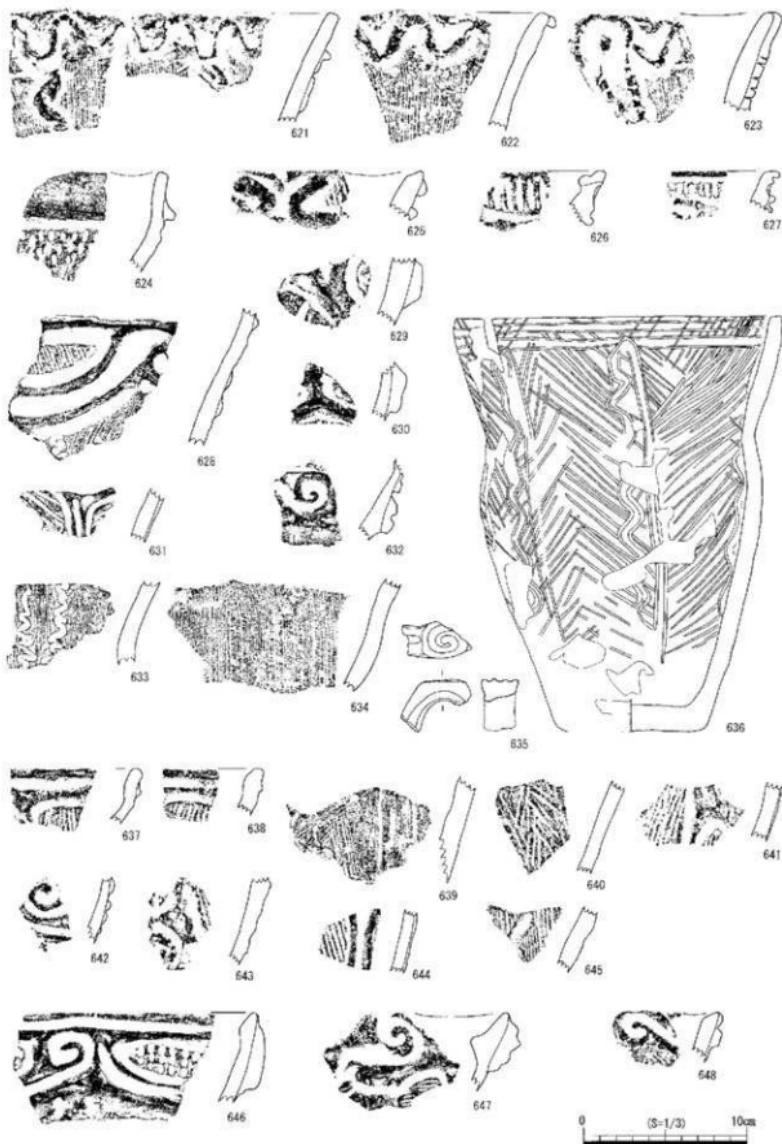
III群3類a（第147図607～第148図634 図版55・56）

曾利III式であるが、607から612は曾利II式期まで遡る可能性もある。607から611は低い隆帶で区画を作り、中に棒状工具で刺突を付けており、同一個体と思われる。612は隆帶で区画を作り、中に棒状工具による刺突文を付けている。

613は波頂部に平坦面を有する。外面口縁部直下に隆帶を貼り付けて口唇部に凹みを作り出している。波状口縁に沿って隆帶と竹管状工具による沈線で渦巻文と隅丸方形の区画を作り、中に縱位の沈線を付ける。下に半截竹管状工具による蒲鉾状平行沈線を縱位に施して区画し、中に同一工具による斜位沈線を付けている。614は平縁で、口縁部は低い隆帶と半截竹管状工具による沈線で梢円形に区画し、中に円形の刺突を施している。胸部は低い隆帶と沈線で方形、円形などに区画し、細い竹管状工具による粗い斜位の沈線を付けている。615は口唇部に半截竹管状工具で沈線を施している。口縁部は波状口縁に沿って隆帶と沈線で梢円形に区画し、中に半截竹管状工具による沈線を縱位に付ける。波頂部は渦巻状の文様を作り、中心に円形の孔を穿っている。胸部は沈線で縱位に区画し、中に斜位と緩波状の沈線を付けている。616は口縁部に隆帶で方形の区画と渦巻状の文様を作り、中に半截竹管状工具で縱位の沈線を付ける。胸部は細い竹管状工具で沈線を縱位に施している。617は波状口縁を有する。内面口縁部に隆帶を貼り付ける。外面口縁部は粘土紐と半截竹管状工具による沈線で弧状の区画を作り、沈線を縱位に施し



第147図 包含層出土土器19



第148図 包含層出土土器20

ており、胸部に細い半截竹管状工具で粗い斜位の沈線を付けている。618は口唇部に半截竹管状工具で沈線を付けている。口縁部は隆帶と沈線で梢円形に区画し、中に沈線を縱位に施している。619は外面口唇部直下に半截竹管状工具で沈線を施しており、口縁部は隆帶と沈線で梢円形に区画し、中に刺突を施している。620は口縁部に隆帶を弧状に貼り付け、下に細い斜位と縱波状の沈線を施している。621から623は同一個体と思われ、地文に細い半截竹管状工具で沈線を縱位に施し、口縁部に断面三角形の隆帶を波状に貼り付けている。621は縱波状の隆帶を垂下させている。623は断面三角形の隆帶を隅丸方形状に垂下させて区画し、中に上部は円形貼付文を、隆帶上に半截竹管状工具で刻みを施している。624は胴上部に隆帶を波状口縁に沿って貼り付け、隆帶の直下に半截竹管状工具による沈線で区画し、棒状工具で刺突文を付けている。625は口縁部に隆帶をX字状に貼り付けて区画し、中に半截竹管状工具で沈線を縱位に施している。626と627は隆帶と半截竹管状工具による沈線で弧状の区画を作り、中に沈線を縱位に付けている。

628は低い隆帶と太い沈線で区画を作り、中に細い竹管状工具で沈線を斜位に付けている。629から632は隆帶と半截竹管状工具による沈線で区画を作っている一群である。631は区画内に沈線を斜位に付けている。632は隆帶と沈線で渦巻文を付けている。633と634は地文に竹管状工具の沈線を縱位に付けている。633は地文に沈線を付け、上に縱波状の沈線を2条付けている。

III群3類b（第148図635 図版56）

635は吊手土器の把手である。上部に沈線を渦巻状に付け、橋部にも沈線を付ける。

III群3類c（第148図636 図版56）

曾利IV式で、636は平縁の深鉢である。器面全体に半截竹管状工具で沈線を斜位に付け、口縁部に同一工具による沈線を横位に付ける。7方に底部から同一工具を引き上げて縱位の沈線を付け、口縁部付近で折れ曲がって縱波状の沈線を胴下部まで引いている。

III群3類d（第148図637～645 図版56）

曾利IV・V式で、637と638は口縁部に沈線を横位に施し、下に沈線で梢円形の区画を作り、中に細い竹管状工具で沈線を縱位に付けている。

639と640はハの字状沈線を付けている。641は太い沈線で区画を作り、中に細い竹管状工具で沈線を斜位に付けている。642と643は沈線を渦巻状に付けている。644は低い隆帶で区画を作り、中に半截竹管状工具で沈線を斜位に付けている。645は地文に細い沈線を縱位に付け、太い沈線で縱波状文を施している。

III群3類e（第148図646～第149図659 図版56）

加曾利E3式で、646から648は口縁部に幅広い粘土を貼り付け、半截竹管状工具で渦巻文を付けた一群である。646は平縁で、渦巻文と併せて梢円形の区画を作り、中に棒状工具で刺突を付けている。647は内弯する口縁部に粘土を厚く貼り付け、波頂部を作り出している。波頂部に渦巻文を付け、下に作られた区画の中にL Rの繩文を施している。648は渦巻文の下にL Rの繩文を付けている。649から652は同一個体の可能性がある。649は平縁で、口縁部に沿って棒状工具による交互刺突を付け、下に半截竹管状工具で横位の区画を作り、中にLの燃糸文を施している。653は平縁で、口縁部に半截竹管状工具による沈線を施した粘土紐を弧状に貼り付けて区画し、中に沈線を縱位に施している。区画の下にはR Lの繩文を付けている。654は地文にL Rの繩文を付け、細い粘土紐を縱波状に付けている。655は粘土紐で横位の区画を作り、中にR Lの繩文を施し、半截竹管状工具で沈線を付けている。656は粘土紐で区画を施し、R Lの繩文を付けている。657と658は同一個体の可能性がある。地文にLの燃糸文を付け、半截竹管状工具で沈線を縱波状に施している。

659は加曾利E4式期まで時期が下る可能性がある。口縁部に粘土紐で梢円形の区画を作り、中に半截



第149図 包含層出土土器21

竹管状工具で縫位の沈線を付けている。

IV群 a (第149図660 図版56)

加曾利B式で、半截竹管状工具で区画を作り、中にL Rの縄文を付けている。

IV群 b (第149図661・662 図版56)

堀之内式で、661は緩やかな波状口縁を有する。口縁部に幅が広い粘土帯を貼り付け、一部を橋状把手状につまんで肥厚させている。粘土の接合部は半截竹管状工具で斜位の刺突を連続して弧状に施す。胴部は6本単位の櫛齒状工具で雑な縦波状の沈線を付けている。662は地文にRの捺糸文を付け、半截竹管状工具で楕円形の区画を作り、中の文様を磨り消している。

型式不明の底部 (第149図663)

底面に網代痕が付いている。

土製品 (第149図664～668・第37表 カラー図版4)

664はIII群2類d(勝坂式)土器の胴部に付けた顔面文の部分である。粘土帶で顔の輪郭を作り、中にハート形に粘土を貼り付け、竹管状工具で目と口を彫刻し、鼻の部分に粘土を貼り付けている。665から668はいずれもIII群1類の土器片を使用した土製円板である。(岩崎)

(3) 包含層出土石器・石製品 (第38表)

有茎尖頭器 (第150図669 図版57)

先端部が欠損している。逆刺が発達せず、細形で長い身部をもつと推定される。

石鎌 (第150図670～682 図版57)

670と671はI類である。670は幅が長さを凌駕する。671は小型で細長い。周縁加工で素材剥離面を残している。672は大型の石鎌である。周縁加工で素材剥離面を残している。

673はII A 1類である。幅が長さを凌駕する。674はII A 2類である。675と676はII B 1類である。676は周縁加工で素材剥離面を残している。677は大型の石鎌で、側縁を鋸歯状に加工している。678は小型の製品である。側縁がやや内弯し、逆刺の部分の開きが小さい。679は小型のII B 2類である。680はII B 3類である。左側縁のみ逆刺が見られる。

681はチャート製の五角形鎌である。682は先端部に突起がある特殊な形状の石鎌である。

石匙 (第150図683～第152図691 図版57)

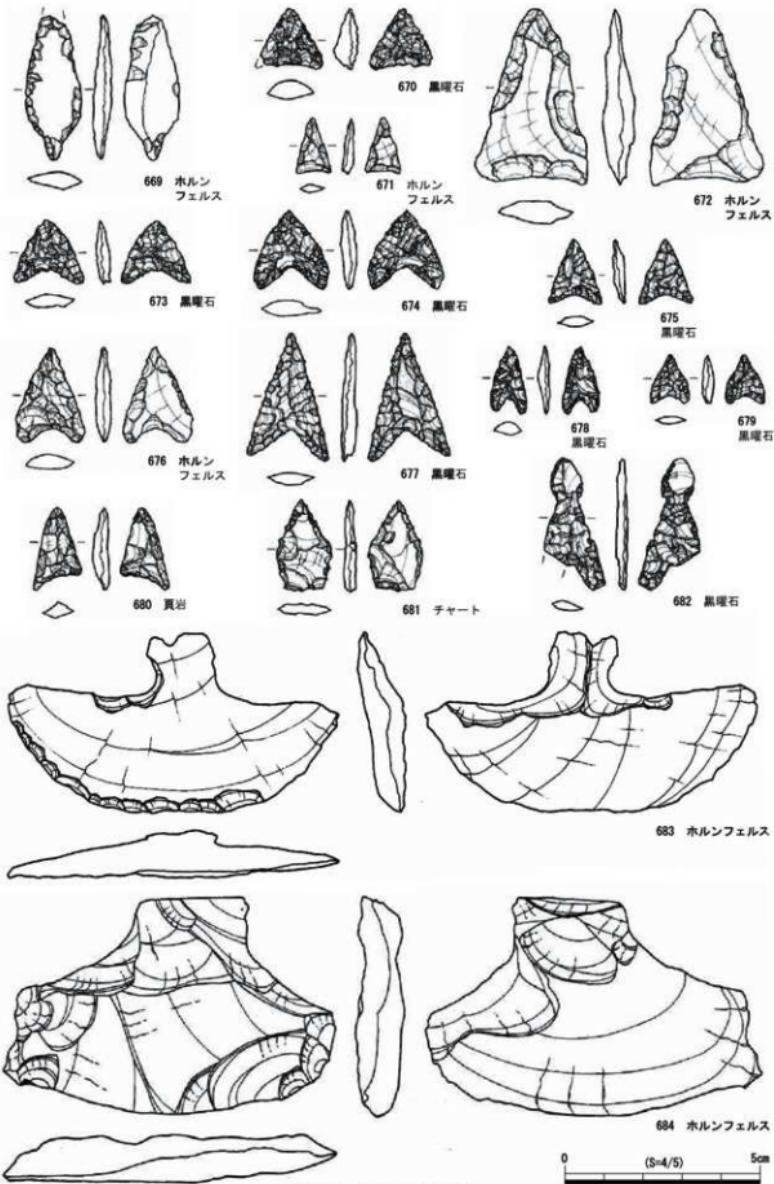
683から686は比較的対称的な平面形を呈する横型の石匙である。石材はいずれもホルンフェルスである。683は刃部が弧状を呈し、表面に剥離を施している。684は素材剥片の形状を生かして刃部としている。685は表皮付き剥片を素材とし、刃部と左辺に剥離を施している。刃部は比較的直線的である。686は円形の剥片の裏面に平坦剥離を施してつまみを作り出している。刃部は弧状で、剥片の裏面に急斜度の剥離を施している。

687から690は左右非対称な横型の石匙である。687はつまみの位置はやや右に片寄る。頁岩を素材とし、表面を中心に精緻な加工を施している。刃部は表面が急斜度の剥離、裏面は平坦剥離を施している。688はつまみの位置は左に片寄る。刃部は素材剥片の形状を生かし、表面に急斜度の剥離を施している。689はつまみが極端に細く、位置は右に片寄る。刃部の形状は688とほぼ同じである。690はつまみの位置が極端に右に片寄る。刃部は直線的で、表面に細かい急斜度の剥離を施している。

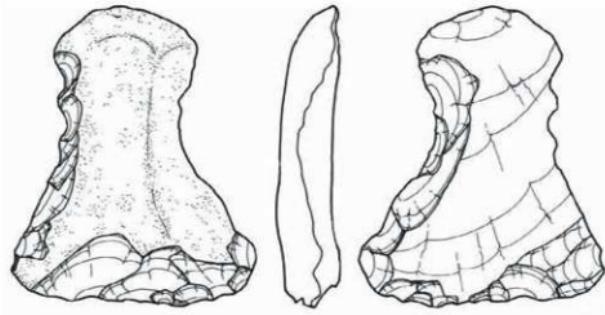
691は左右非対称の縫型の石匙である。剥片の打点の位置をつまみとし、表面の右側縁に平坦剥離を施している。刃部は加工を加えず、剥片の形状を生かしている。

石錐 (第152図692～第153図697 図版58)

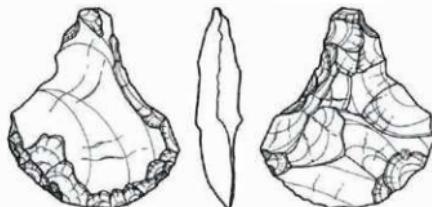
692は円形の基部に細長く、先端が尖った尖頭部が付く。693は楕円形の基部を持ち、基部と尖頭部の間に括れを有する。表面は基部の右側縁と尖頭部、裏面は基部と尖頭部の境の右側面に剥離を施して



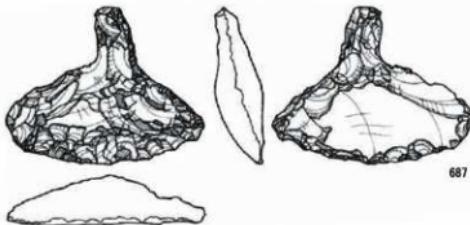
第150図 包含層出土石器 1



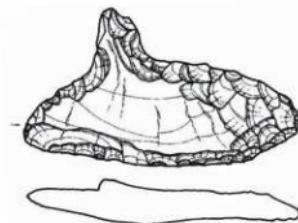
685 ホルンフェルス



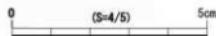
686 ホルンフェルス



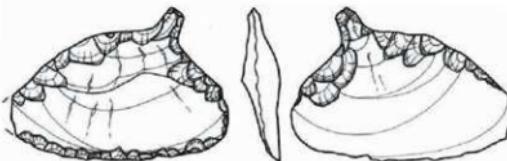
687 灰岩



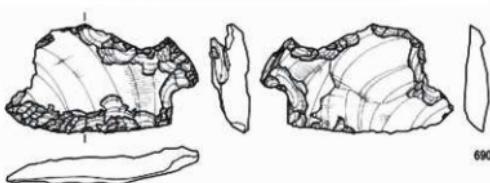
688 ホルンフェルス



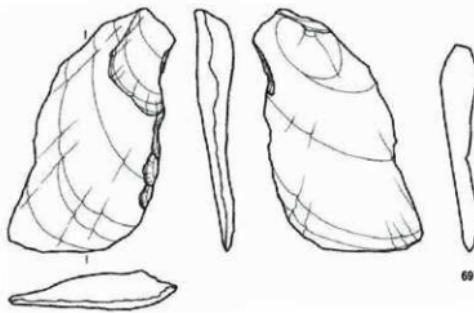
第151図 包含層出土石器 2



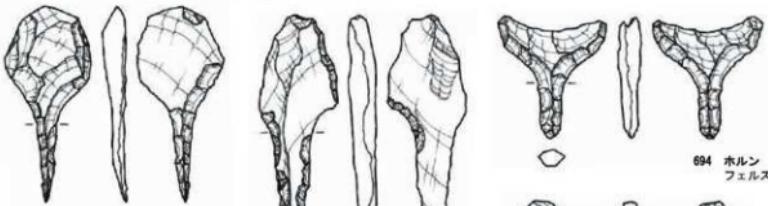
689 ホルンフェルス



690 黒曜石



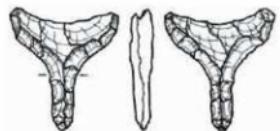
691 ホルンフェルス



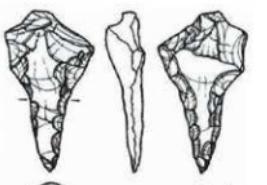
692 ホルンフェルス



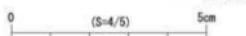
693 貝岩



694 ホルン
フェルス

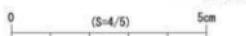


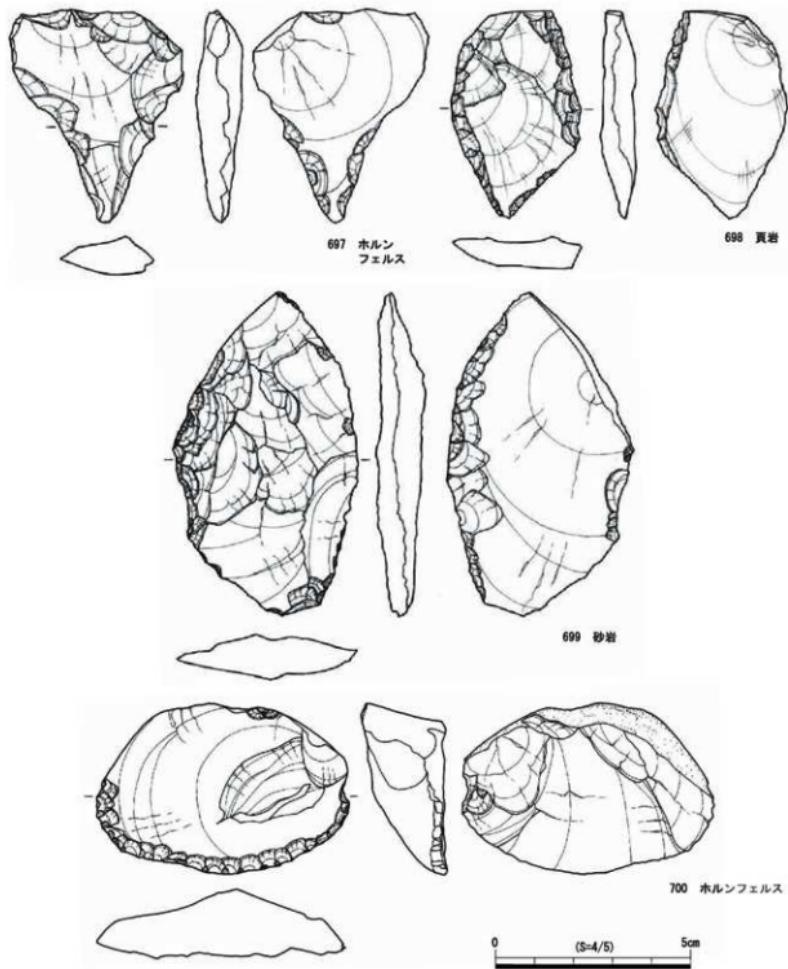
695 ホルン
フェルス



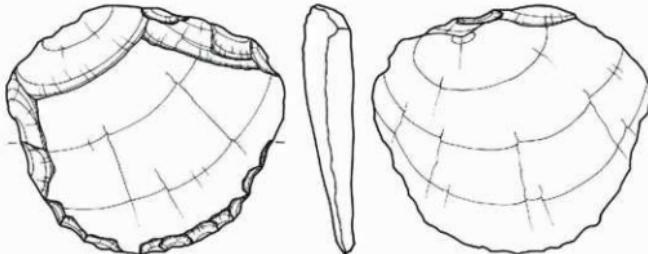
696 ホルン
フェルス

第152図 包含層出土石器 3

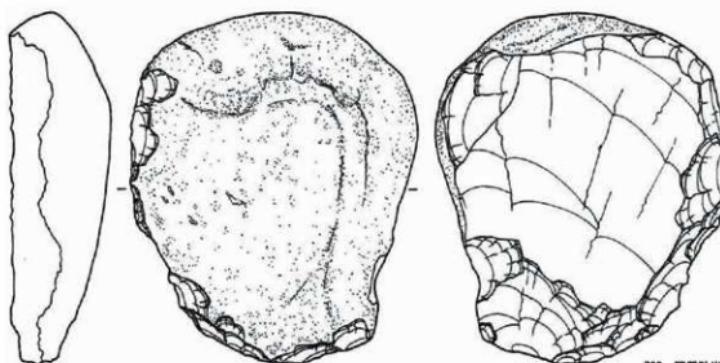




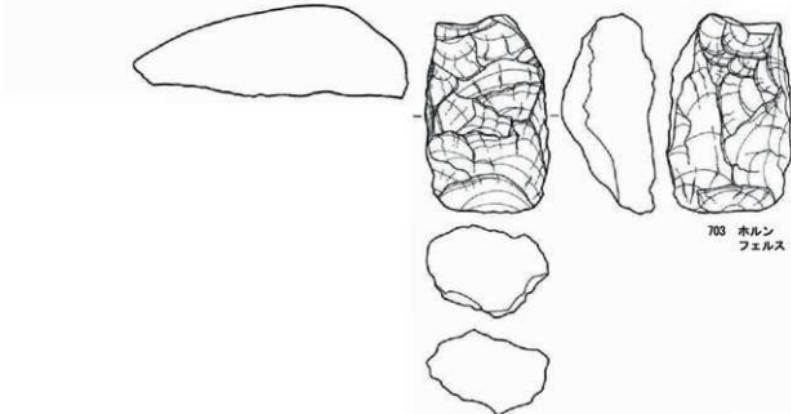
第153図 包含層出土石器4



701 ホルンフェルス



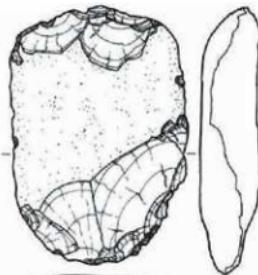
702 黒賀砂岩



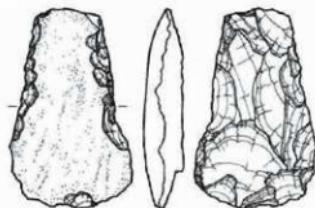
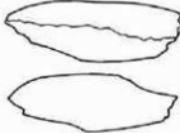
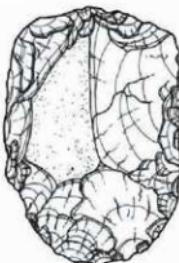
703 ホルン
フェルス



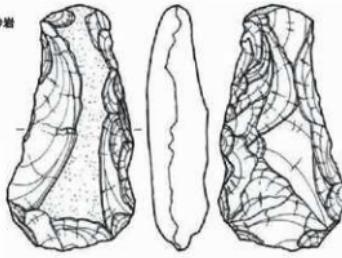
第154図 包含層出土石器 5



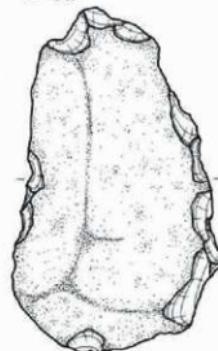
704 砂岩



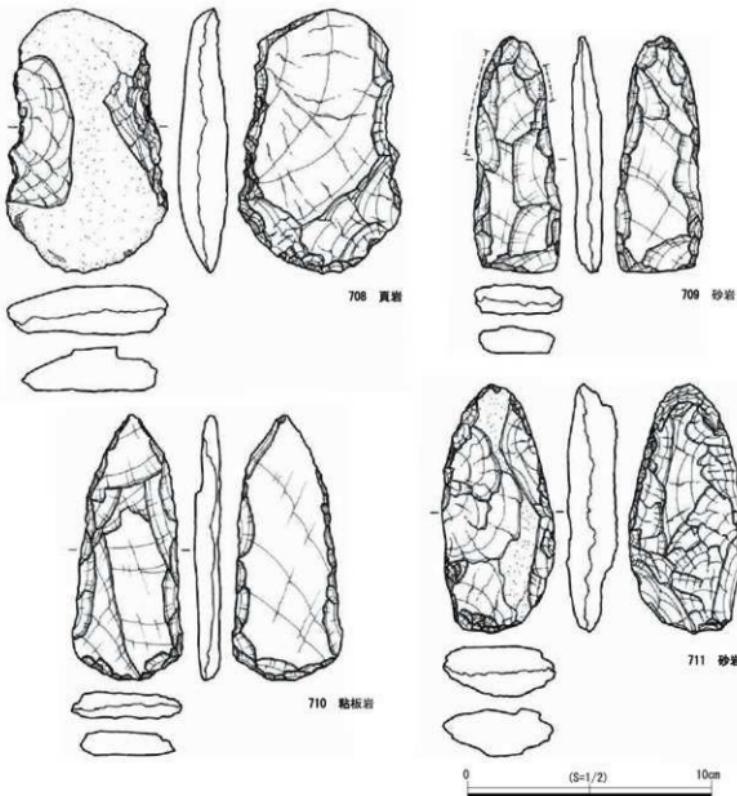
705 ホルン
フェルス



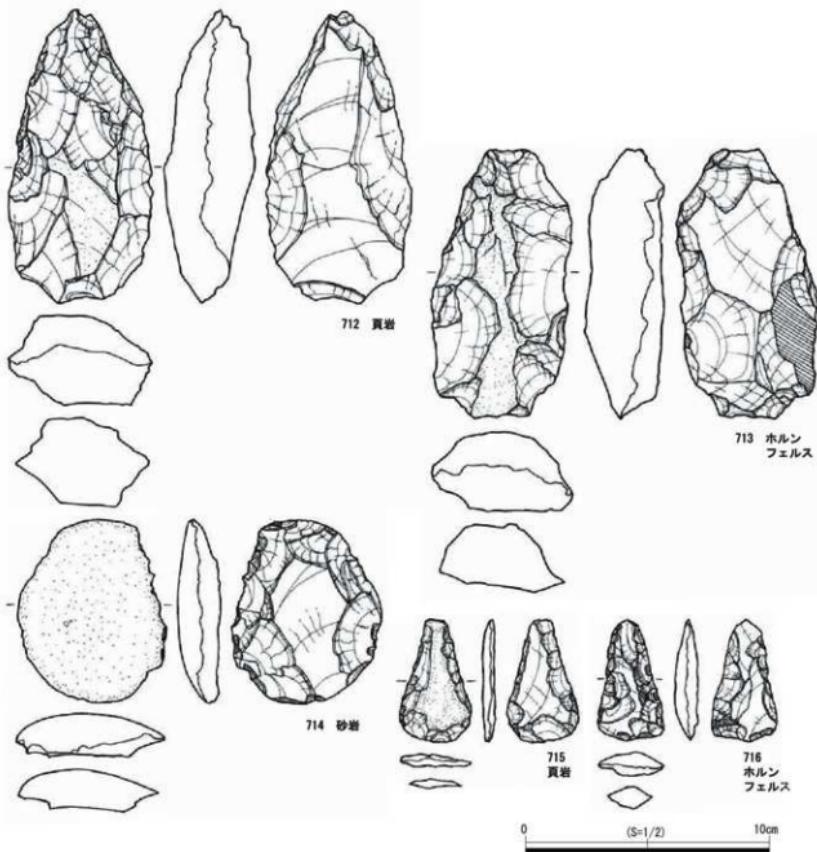
706 砂岩



第155図 包含層出土石器 6



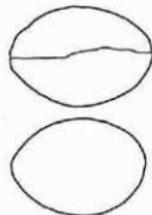
第156図 包含層出土石器 7



第157図 包含層出土石器 8



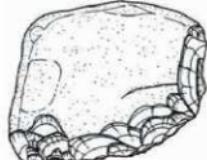
718 砂岩



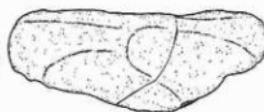
717 ドレライト



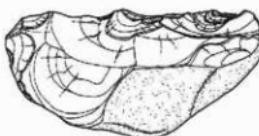
719 真岩



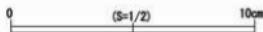
720 ホルンフェルス

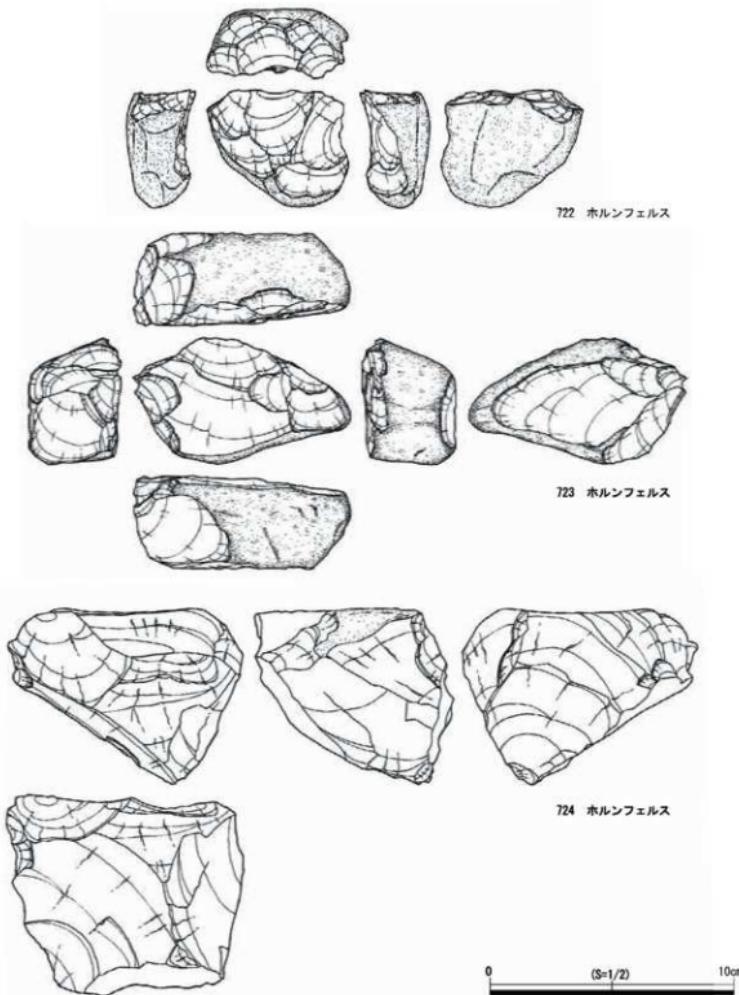


721 ホルンフェルス

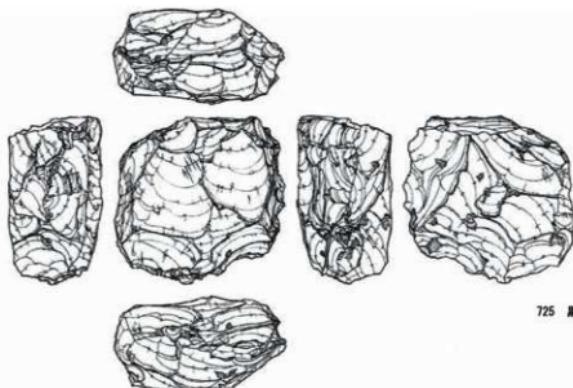


第158図 包含層出土石器 9

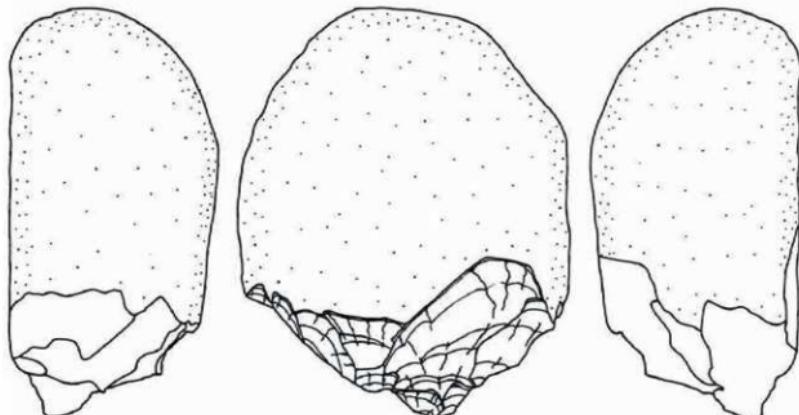




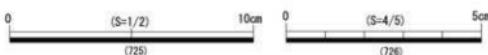
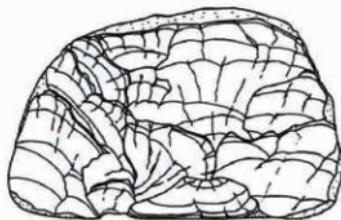
第159図 包含層出土石器10



725 黒曜石



726 ホルン
フェルス



第160図 包含層出土石器11

いる。694は基部に抉りが入り、T字またはY字状の形状を呈する。両面とも側縁部から尖頭部にかけて剥離を施している。695の形状は棒状に近い二等辺三角形を呈する。696と697の形状は五角形を呈する。ともに両面に剥離を施して尖頭部を作り出している。

スクレイパー（第153図698～第154図702 図版58）

698と699は五角形のサイドスクレイパーである。698は横長剥片の右辺を切断し、表面は両側縁に平坦剥離を施し、裏面は右側縁となる切断部に急斜度の剥離を施している。699は横長剥片の打点を左側縁とし、表面は左側縁に急角度の剥離を施し、裏面は剥片の端部となる右側縁に平坦剥離を施している。700から702はラウンドスクレイパーである。700は厚手の表皮付き剥片の打点を右に置き、素材剥片の裏面に急角度の剥離を施して刃部を作り出している。701は素材剥片の形状を生かし、表面に平坦剥離を施して刃部を作り出している。702は薄い円盤の形状を生かして整形した後、表面の左側縁から下部にかけて急角度の剥離を施して刃部を作り出している。

打製石斧（第154図703～第157図716 図版58）

703と704はI類である。ともに刃部の幅に比して長さが短い。703は厚手で刃部が直線的である。704は薄い円盤を素材とし、刃部が弧状をなしている。

705から707はII類である。いずれも刃部は弧状をなしている。705と706は表皮付き剥片に周縁加工を施している。707は大型の製品である。表皮付き剥片の形状を生かし、表裏面とも外縁部にわずかに剥離が見られる。

708はIII類である。刃部は弧状をなしている。表面の両側縁を抉るように剥離を施して分銅形の形状を作り出している。

709から713はIV類である。709と710は側縁部の形状がI群に類似し、薄手の板状の剥片を素材としている。刃部の形状は、709は直線状、710は弧状をなしている。711から713は側縁部の形状がII類に類似し、厚手の表皮付き剥片を素材としている。

714は円形の表皮付き剥片の裏面のみに階段状の剥離を施している。715と716は小型の撥型の石斧である。715は薄い頁岩の剥片の周縁に平坦剥離を施している。716は厚手のホルンフェルスの剥片の周縁に平坦剥離を施している。

磨製石斧（第158図717～719 図版58）

717は両刃の乳棒状磨製石斧である。刃部は弧状である。718は片刃の乳棒状磨製石斧である。刃部は直線的で、斜めに傾く。719は定角式磨製石斧である。刃部は破損している。

石核（第158図720～第160図725 図版58）

いずれも大型の石核である。石材は720から724はホルンフェルス、725は黒曜石である。720は図中の表面と右側面、721は表面と左側面、722は表面と打面が主たる作業面となっている。723は図中の表面、左側面、裏面が主たる作業面となっている。724は下面が尖っており、図中の表面、右側面、裏面が主たる作業面となっている。725は表面と裏面が主たる作業面となっており、との4面は打面調整を行っている。

礫器（第160図726 図版58）

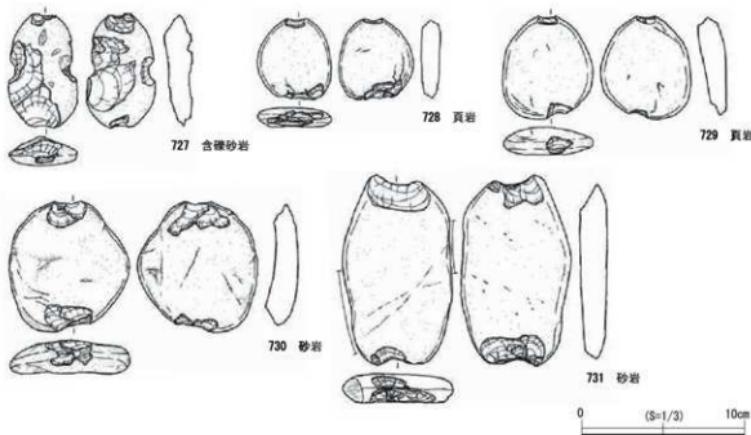
片面に平坦面を持つホルンフェルスの円盤の一辺に錐状の刃部を設けている。

石錐（第161図727～731）

727は楕円盤の上下左右4方向に紐掛け部を設けている。728から730は円盤の両端を打ち欠いて紐掛け部を設けている。731は楕円盤の両端を打ち欠いて紐掛け部を設けている。両側縁に磨痕が見られる。

磨石・敲石・凹石・石皿（第162図732～第167図777）

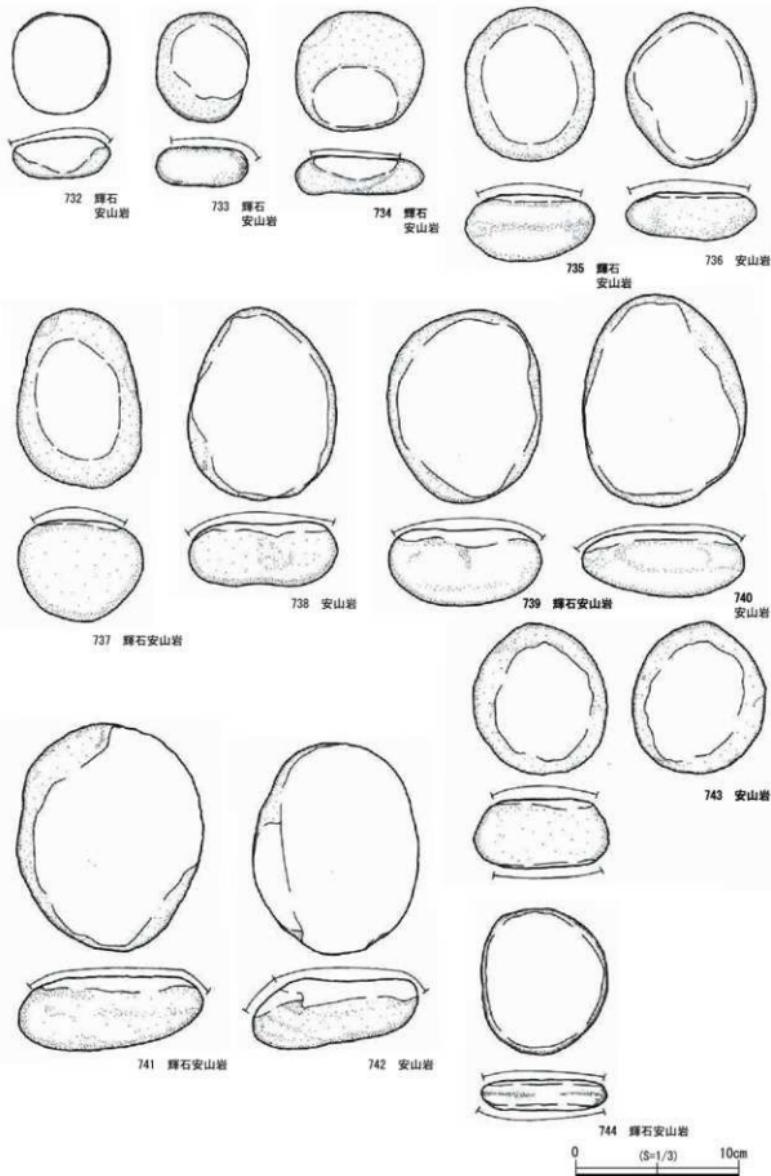
732から748はI類の磨石である。732から742は片面のみ磨面がある。733と734は磨面がやや側縁に片



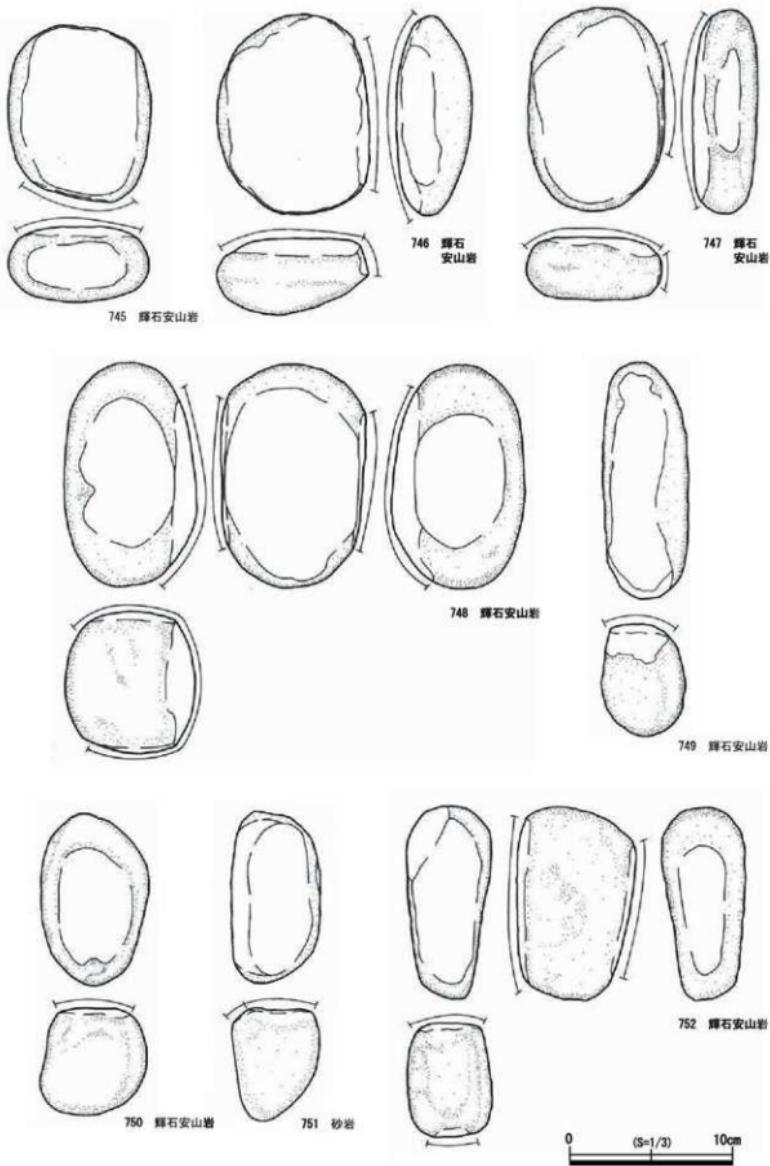
第161図 包含層出土石器12

寄る。742は側縁部に近い部分を磨った後に平坦面を磨っている。743と744は表裏両面に磨面がある。745から748は表裏両面と側縁に磨面がある。749から752はⅡ類の磨石である。752は磨面が上下にある。753から755はⅢ類の磨石である。753は円柱状の礫を素材とし、側縁1箇所のみ磨面が見られる。755は四角柱の礫の角すべてに磨面が見られる。756から764はⅣ類の磨敲石である。756から758はⅠ類の磨石の磨面に敲打痕がある。759は磨面の裏に敲打痕がある。760から763は側縁部に敲打痕が見られる。764は側縁の一部を強く磨り、さらに敲打して使用したものと考えられる。765から767はⅤ類の敲石である。766は歪んだ円盤状の礫を素材としている。歪んだ部分に集中して敲打痕が見られる。768から770はⅥ類の凹石である。

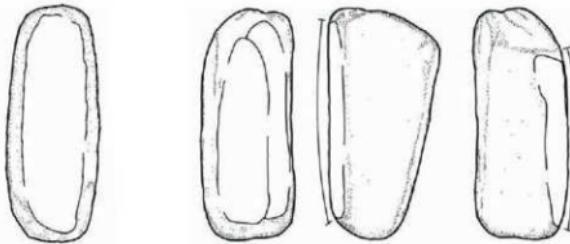
771から774はⅠ類の石皿である。775から777はⅡ類の石皿である。



第162圖 包含層出土石器13



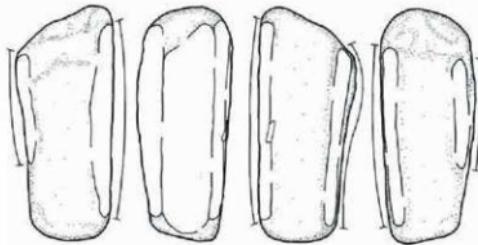
第163図 包含層出土石器14



754 脣石安山岩



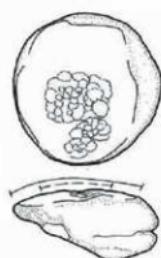
753 脣石安山岩



755 脣石安山岩



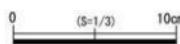
756 脣石安山岩



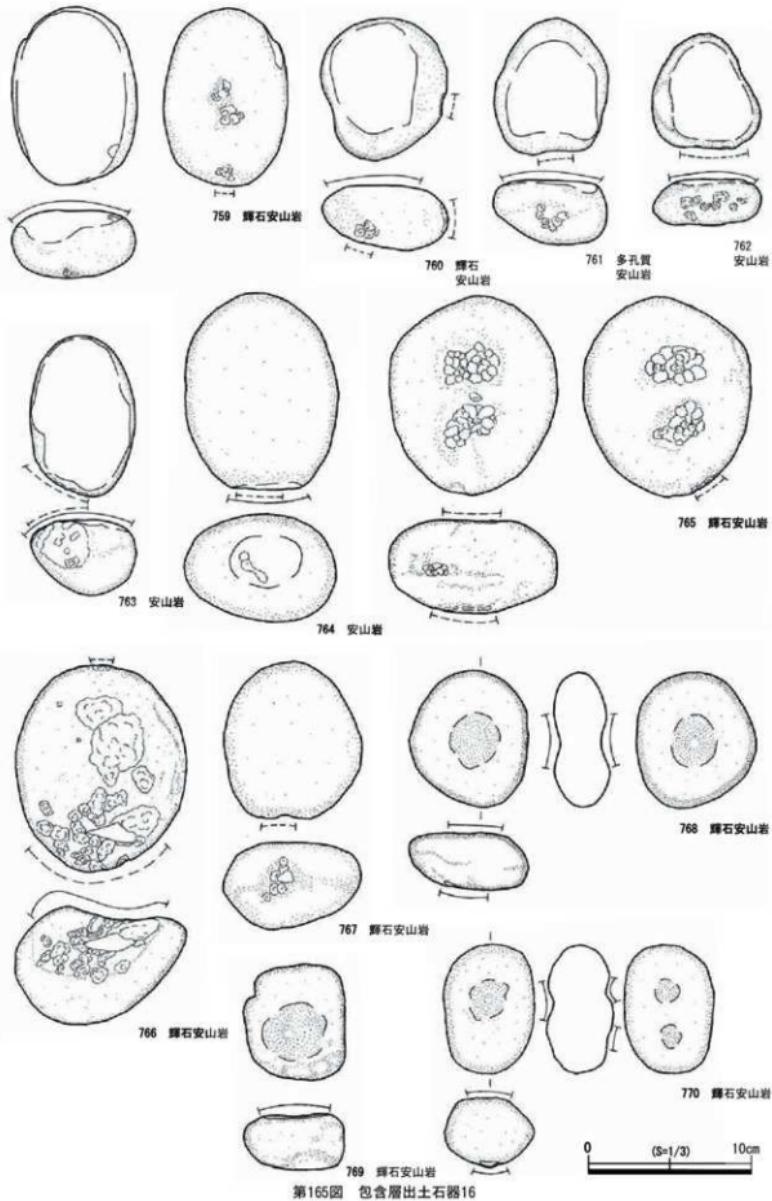
757 安山岩

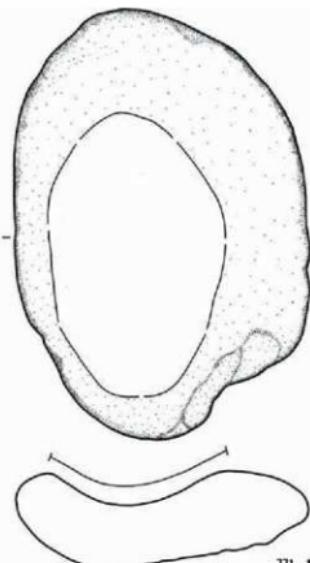


758 安山岩

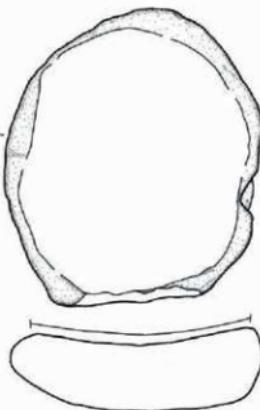


第164図 包含層出土石器15

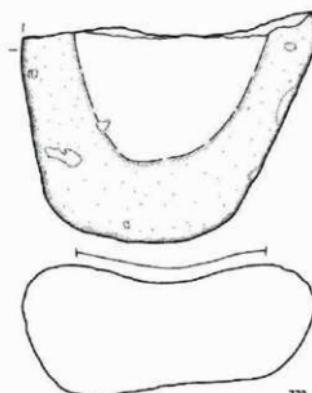




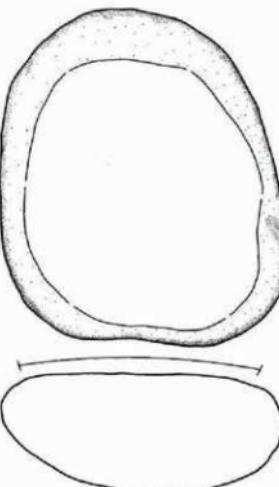
771 輝石安山岩



772 安山岩



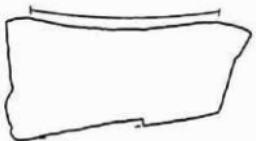
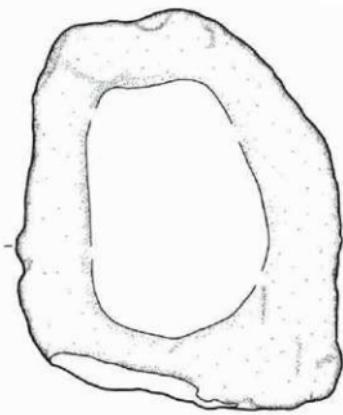
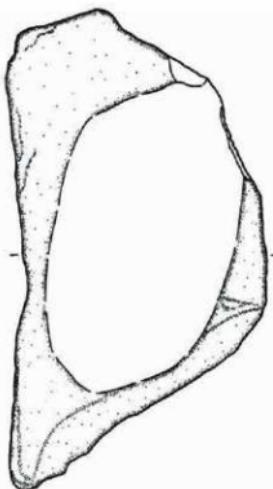
773 輝石安山岩



774 輝石安山岩



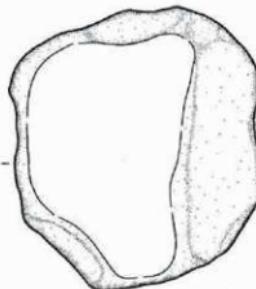
第166図 包含層出土石器17



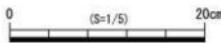
775 輝石安山岩



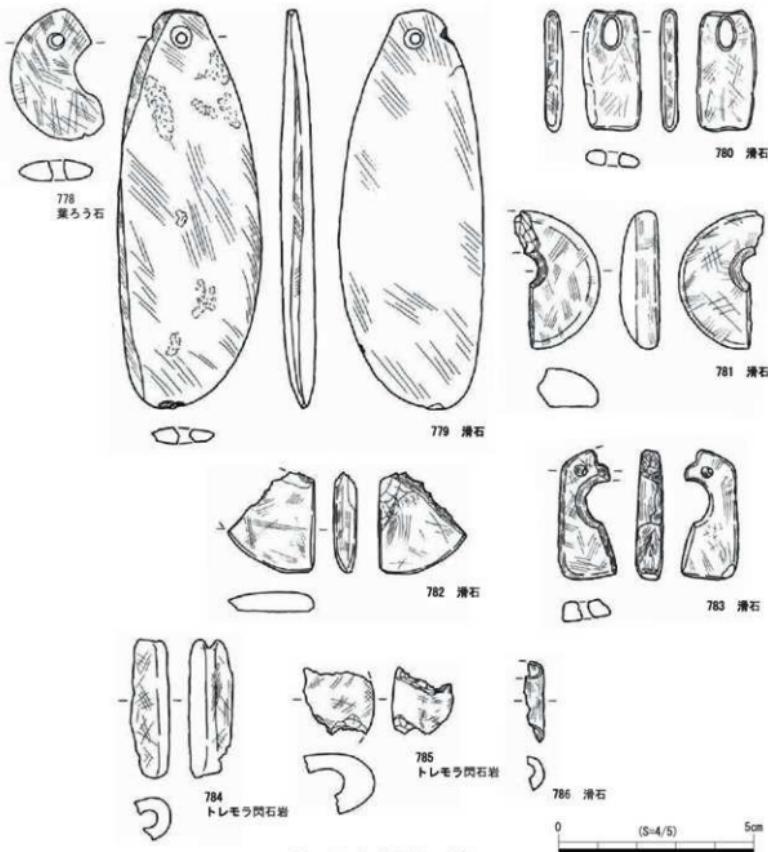
776 輝石安山岩



777 輝石安山岩



第167図 包含層出土石器18



第168図 包含層出土石製品

石製品（第168図778～786・第39表 図版59）

石材は778が葉ろう石、784と785がトレモラ閃石岩、その他の製品は全て滑石である。

778は勾玉である。形状は金環型の玦状耳飾に似る。孔は両面から穿たれており、穿孔後全面を研磨して仕上げている。

779と780は垂飾である。779は長さ12cmを測る大型品で、形状は長いティアドロップ形を呈する。孔は両面から穿たれており、穿孔後全面を研磨して仕上げている。780の形状は扁平な短冊状を呈する。孔の形状は梢円形を呈し、上部には紐状のものを通して使用したと思われる擦れが確認できる。孔の穿孔後全面を研磨して仕上げている。

781から783は玦状耳飾である。781は金環形を呈する。切れ目の長さが中央孔の径より長い。中央孔は両面から穿たれており、穿孔後全面を研磨して仕上げている。断面形は表面の中央部が盛り上がり、裏

面は平坦である。782は破損しているが、781と同じ形態のものと考えられる。783は中央部を切った扁平な短冊状の块状耳飾である。中央孔の上に小孔が穿たれている。

784から786は管玉である。784と785は断面形が楕円形を呈する。784には上部に抉りが見られる。785と786は断面の厚みが一定ではない。3点とも穿孔後全面を研磨して仕上げている。(岩崎)

第6節 旧石器時代の遺物

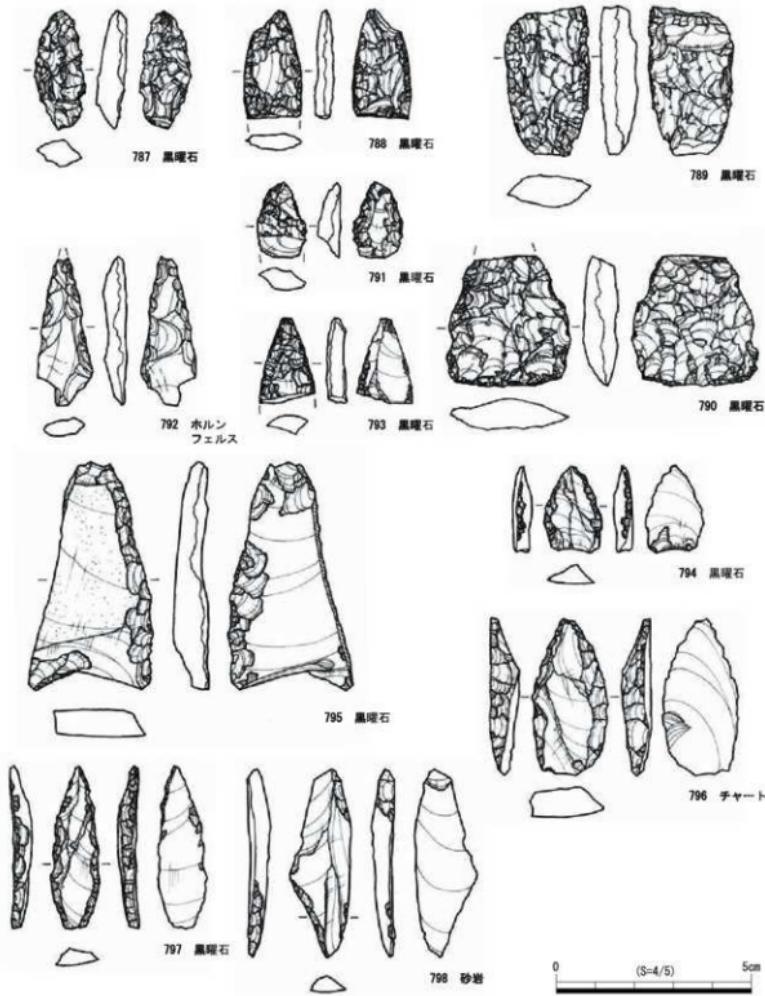
本遺跡で出土した旧石器時代の遺物は、第7層休場層より上位の遺物包含層から出土したものである。
尖頭器（第169図787～795・第40表 図版59）

787から789は両面加工の尖頭器である。787は小型で厚みがある。788と789は先端部と基部を欠損しているが、柳葉形のものと考えられる。788は両面、789は表面に、周縁を主体に剥離を加えて整形している。790は形状が三角形であると考えられる両面加工の尖頭器である。791と792は半両面加工の尖頭器である。791は基部を欠損している。787とほぼ同じ形状であると考えられる。792は縦長剥片を用いている。裏面の周縁に剥離を施している。793は素材剥片の表面は丁寧な平坦剥離で、裏面は大きく削って先端部を作出している。周縁には両面とも細かい剥離が見られる。794は片面加工の尖頭器である。丁寧な周縁加工を施している。795は未製品である。表面に自然面を残していることから、石核から早い段階で得られた縦長剥片を用いていると考えられる。先端部となる打面と右側縁に剥離を施している途中で制作を止めている。

ナイフ形石器（第169図796～798・第40表 図版59）

796から798は二側縁加工のナイフ形石器である。796は縦長の剥片を用い、打面側を基部として、両側縁に丁寧なプランティングを施している。797と798は縦長の剥片を用い、打面側を先端として、両側縁にプランティングを施している。797は右側縁のプランティングは丁寧であるが、左側縁のプランティングは途中で止めている。798は左側縁下位と右側縁上位にプランティングを施している。(岩崎)

(註) 戸田哲也氏の御教示による。



第169図 包含層出土石器（旧石器）

第27表 向山遺跡竪穴建物の概要

() は残存値

遺構名	坪 図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	平面形態	規模(m) 長軸×短軸	柱穴数	掘方	燎形態	出土遺物
SH1	94, 95	31, 34	KU～FB	D-8	N-33°～W	橢円形	6.6×5.6	4	円形?	地床帯 ²	第105図2, 3
SH2	94, 96	31, 34	KU～FB	C, D-8	N-14°～W	隅丸方形	3.8×3.5	4	円形	置石炉 ³	
SH10	94, 97, 108	32, 34	KU～FB	C, D-6, 7	N-15°～E	橢円形	6.6×5.7	4	円形	地床帯 ² の可能性	第105図4～12
SH11	94, 98, 99	32～34	KU～FB	D, E-7, 8	N-15°～W	橢円形	7.8×6.7	4	円形	置石炉 ³ の可能性	第106図13～18 第107図19～25
SH14	108～110	36	YLU上面	C, D-7	N-6°～E	円形	4.0×3.6	6	平坦	石圓炉 ²	第120図28～39 第121図40～42 第122図43～46

第28表 向山遺跡竪穴状遺構の概要

() は残存値

遺構名	坪 図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	規模(m) 長軸×短軸	深さ (m)	ピット数	出土 遺物
TA1	108, 111	37	YLU上面	D-10	—	3.6×(1.3)	0.1	0	
TA2	108, 112	37	YLU上面	D-9	—	3.5×2.6	0.2	0	第122図47～51
TA3	108, 112	37	YLU上面	C, D-8, 9	—	2.9×2.8	0.3	0	第123図52～57
TA4	108, 113	38	YLU上面	C-8, 9	N-47°～W	3.5×2.9	0.2	3	第124図58～60
TA5	108, 113	38	YLU上面	C-8	—	2.7×2.4	0.1	1	
TA6	108, 114	38	YLU上面	E-6	—	3.2×2.7	0.2	1	第124図61～76
TA7	94, 100	33	KU	E, F-6	—	(4.5)×(1.3)		3	

第29表 向山遺跡掘立柱建物の概要

遺構名	坪 図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	柱間規模	桁行 (m)	梁間 (m)	柱穴平面形態
SB1	94, 101	—	KU	D, E-5, 6	N-30°～E	1間×2間	2.5	2.6	橢円形・隅丸方形

第30表 向山遺跡溝状遺構の概要

() は残存値

遺構名	坪図	図版	検出面	グリッド	全長 (m)	最大幅 (m)	最大深 (m)	遺 物
SD2	94, 102	—	KU	E-6, 7	(5.4)	0.7	0.1	
SD1	89, 90	30	クロ	B-9, 10, C-8～10	(17.7)	1.4	0.2	第93図1 第107図27
SD3	89, 90	—	クロ	C, D-7	(7.6)	1.1	0.1	

第31表 向山遺跡集石の概要

遺構名	坪 図	図版	検出面	グリッド	規模 (m) 長径×短径	確 数	赤化比率	遺 物
SY1	108, 116	42	KU～FB	D-9	1.0×1.0	30	0.03%	第127図99
SY2	108, 115	39	KU～FB	C-9	0.9×0.7	6	0.33%	第125図77, 78
SY3	108, 116	41	KU～FB	C, D-7	1.4×1.1	30	0.23%	第126図87, 88
SY4	108, 115	41	KU～FB	D-9	0.2×0.2	5	0.40%	
SY5	108, 115	39	KU～FB	D-8	0.7×0.7	13	0.15%	第125図79, 80
SY6	108, 115	40	YLU上面	D-8	0.7×0.6	13	0%	第125図83
SY7	108, 115	39	KU～FB	D-9	0.7×0.3	5	0.20%	第125図81, 82
SY8	108, 116	42	KU～FB	C-8	2.2×1.4	72	0.26%	第126図91～96 第127図97, 98
SY9	108, 115	40	YLU上面	D-7	0.4×0.3	15	0.20%	
SY10	108, 116	41	KU～FB	C-7	1.4×1.0	28	0.14%	第126図89, 90
SY11	108, 115	40	YLU上面	C-7	0.6×0.4	5	0%	第125図84～86

第32表 向山遺跡土坑・小穴の概要

() は残存値

遺構名	神 国	図版	検出面	グリッド	種 類	規模 (m) 長径×短径	最大深 (m)	平面形態	遺 物
SK1	89, 91		obs	D-8	土坑	3.6×3.6	0.2	円形	
SK2	89, 91		obs	D-8	土坑	1.0×1.0	0.1	円形	
SK3	89, 91	30	obs	E-8	土坑	1.1×1.0	0.1	円形	
SK47	89, 91		obs	E-6	土坑	1.2×1.2	0.1	円形	
SK48	89, 91		クロ	E, F-5	土坑	1.1×1.0	0.3	円形	
SK49	89, 91	30	クロ	E-6	土坑	1.3×1.0	0.3	椭円形	
SK50	89, 91		クロ	E-5	土坑	1.2×1.2	0.1	円形	
SK51	89, 91		クロ	E-6	土坑	1.2×1.0	0.3	椭円形	
SK52	89, 91		obs	E-6	土坑	1.1×1.0	0.1	椭円形	
SK53	89, 92		クロ	F-6	土坑	1.3×1.2	0.1	円形	
SK55	89, 92		クロ	F-5	土坑	0.9×0.9	0.2	円形	
SK56	89, 92		クロ	D-7	土坑	1.2×1.1	0.2	円形	
SK57	89, 92		obs	C-7	土坑	1.1×1.1	0.1	円形	
SK4	94, 102	35	KU～FB	D-10	土坑	(1.3) × (0.8)	0.1	不整形	
SK72	94		KU～FB	D-8, 9	土坑	1.0×0.5	0.3	長槽円形	
SK73	94		KU～FB	D-8	土坑	0.8×0.5	0.1	不整形	
SK74	94		KU～FB	D-8	土坑	0.7×0.6	0.3	椭円形	
SK75	94		KU～FB	D-8	土坑	0.9×0.4	0.1	長槽円形	
SK76	94		KU～FB	D-8	土坑	0.6×0.4	0.4	椭円形	
SK77	94		KU～FB	C-9	土坑	0.7×0.6	0.8	不整形	
SK78	94		KU～FB	C-9	土坑	0.6×0.4	0.8	長槽円形	
SK79	94		KU～FB	C-9	土坑	0.6×0.5	0.9	椭円形	
SK134	94, 103	35	KU～FB	E-5	土坑	—	—	椭円形	
SK135	94, 103	35	KU～FB	E-5	土坑	—	—	椭円形	
SK80	94		KU～FB	D-8	土坑	0.7×0.5	0.4	長槽円形	
SP1	94		KU～FB	E-8	小穴	0.4×0.4	0.2	円形	
SP3	94		KU～FB	E-8	小穴	0.6×0.5	0.2	椭円形	
SP4	94		KU～FB	D-8	小穴	0.4×0.3	0.4	円形	
SP7	94		KU～FB	D-9	小穴	0.3×0.3	0.3	円形	
SP9	94		KU～FB	D-9	小穴	0.4×0.3	0.8	円形	
SP12	94		KU～FB	D-8	小穴	0.5×0.4	0.1	椭円形	
SP13	94		KU～FB	D-8	小穴	0.4×0.4	0.6	円形	
SP19	94		KU～FB	D-7	小穴	0.4×0.4	0.3	椭円形	
SP21	94		KU～FB	C-8	小穴	0.4×0.3	0.6	椭円形	
SP22	94		KU～FB	C-8	小穴	0.4×0.3	0.4	円形	
SP23	94		KU～FB	C-8	小穴	0.3×0.3	0.3	円形	
SP26	94		KU～FB	C-8	小穴	0.4×0.4	0.3	椭円形	
SP27	94		KU～FB	C-8	小穴	0.4×0.3	0.5	円形	
SP29	94		KU～FB	C-8	小穴	0.3×0.3	0.6	円形	
SP30	94		KU～FB	C-8	小穴	0.5×0.4	0.6	椭円形	
SP32	94		KU～FB	C-8	小穴	0.4×0.3	0.4	椭円形	
SP33	94		KU～FB	C-9	小穴	0.4×0.3	0.1	椭円形	
SP34	94		KU～FB	C-9	小穴	0.2×0.2	0.1	椭円形	
SP37	94		KU～FB	D-9	小穴	0.5×0.4	0.9	椭円形	
SP38	94		KU～FB	D-9	小穴	0.4×0.3	0.2	椭円形	
SP39	94		KU～FB	D-9	小穴	0.5×0.3	0.1	長槽円形	
SP40	94		KU～FB	D-9	小穴	0.3×0.3	0.2	椭円形	
SP42	94		KU～FB	C-9	小穴	0.5×0.4	0.2	不整形	
SP44	94		KU～FB	D-9	小穴	0.3×0.3	0.2	椭円形	
SP45	94		KU～FB	D-9	小穴	0.4×0.3	0.7	椭円形	
SP46	94		KU～FB	D-9	小穴	0.4×0.3	0.8	椭円形	
SP47	94		KU～FB	C, D-9	小穴	0.2×0.2	0.2	円形	
SP48	94		KU～FB	C-9	小穴	0.4×0.3	0.6	椭円形	
SP52	94		KU～FB	C-9	小穴	0.5 × (0.3)	(0.3)	椭円形	
SP53	94		KU～FB	C-9	小穴	0.4×0.4	0.1	椭円形	
SP54	94		KU～FB	C-9	小穴	0.3×0.3	0.2	円形	
SP55	94		KU～FB	D-9	小穴	0.3×0.3	0.8	円形	
SP57	94		KU～FB	C-9	小穴	0.4×0.3	0.6	椭円形	
SP59	94		KU～FB	C-9	小穴	0.3×0.3	0.4	椭円形	
SP61	94		KU～FB	C-9	小穴	0.4×0.4	0.2	椭円形	
SP62	94		KU～FB	C-9	小穴	0.3×0.3	0.3	椭円形	
SP65	94		KU～FB	C-9	小穴	0.4×0.3	0.8	椭円形	
SP66	94		KU～FB	D-8	小穴	0.5×0.4	0.3	椭円形	
SP67	94		KU～FB	D-8	小穴	0.4×0.4	0.9	円形	
SP70	94		KU～FB	D-8	小穴	0.3×0.3	0.3	円形	
SP72	94		KU～FB	C-9	小穴	0.4×0.4	0.5	椭円形	
SP75	94		KU～FB	C-9	小穴	0.5×0.5	0.3	円形	

遺構名	種類	図版	検出面	グリッド	種類	規模 (m) 長径×短径	最大深 (m)	平面形態	遺物
SP76	94	KU~FB	B, C-9	小穴	0.4×0.4	0.5	楕円形		
SP77	94	KU~FB	C-9	小穴	0.4×0.4	0.5	楕円形		
SP80	94	KU~FB	C-9	小穴	0.4×0.5	0.5	楕円形		
SP81	94	KU~FB	C-9	小穴	0.4×0.3	0.2	楕円形		
SP82	94	KU~FB	C-9	小穴	0.4×0.3	0.1	楕円形		
SP85	94	KU~FB	C-10	小穴	0.3×0.3	0.2	楕円形		
SP90	94	KU~FB	D-10	小穴	0.4×0.3	0.3	楕円形		
SP94	94	KU~FB	D-9	小穴	0.5×0.4	0.2	楕円形		
SP95	94	KU~FB	C-8	小穴	0.4×0.4	0.4	円形		
SP96	94	KU~FB	C-9	小穴	0.3×0.3	0.2	円形		
SP99	94	KU~FB	D-9, 10	小穴	0.3×0.3	0.4	楕円形		
SP101	94	KU~FB	D-9	小穴	0.4×0.4	0.5	円形		
SP102	94	KU~FB	D-9	小穴	0.2×0.2	0.4	円形		
SP103	94	KU~FB	D-9	小穴	0.3×0.2	0.5	円形		
SP104	94	KU~FB	D-9	小穴	0.3×0.3	0.7	円形		
SP108	94	KU~FB	E-8	小穴	0.3×0.3	0.6	楕円形		
SP111	94	KU~FB	E-8, 9	小穴	0.6×(0.2)	0.1	長椭円形		
SP119	94	KU~FB	D-7	小穴	0.4×0.4	0.1	楕円形		
SP120	94	KU~FB	E-6	小穴	0.2×0.2	0.1	円形		
SP122	94	KU~FB	E-6	小穴	0.4×0.4	0.3	円形		
SP127	94	KU~FB	E-5	小穴	0.4×0.3	0.2	楕円形		
SP129	94	KU~FB	E-6	小穴	0.3×0.2	0.2	楕円形		
SK5	108	YLU上面	D-9	土坑	0.6×0.6	0.2	円形		
SK6	108, 117	YLU上面	D-9	土坑	1.3×0.9	0.3	長椭円形		
SK7	108, 118	YLU上面	D-9	土坑	1.6×1.2	0.2	不整形		
SK9	108	YLU上面	C-9	土坑	1.0×0.7	0.3	楕円形		
SK10	108, 118	YLU上面	D-7	土坑	2.0×1.3	0.1	長椭円形	第127図113, 114 第127図112	
SK11	108, 118	YLU上面	D-8	土坑	1.4×1.3	0.6	円形		
SK12	108	YLU上面	E-8	土坑	1.1×0.8	0.2	楕円形		
SK13	108, 117	YLU上面	C, D-8	土坑	1.1×0.9	0.4	楕円形	第127図104	
SK14	108	YLU上面	D-9	土坑	0.8×0.7	0.3	楕円形		
SK15	108, 117	YLU上面	D-8	土坑	0.8×0.8	0.3	楕円形	第127図105	
SK16	108	YLU上面	D-8	土坑	0.6×0.5	0.3	楕円形		
SK17	108	YLU上面	D-8	土坑	0.6×0.5	0.3	円形		
SK18	108	YLU上面	D-9	土坑	0.6×0.5	0.1	楕円形		
SK20	108	YLU上面	D-9	土坑	0.5×0.5	0.2	楕円形		
SK25	108	YLU上面	D-10	土坑	0.5×0.4	0.2	楕円形		
SK26	108	YLU上面	C-9	土坑	1.3×0.9	0.3	長椭円形		
SK28	108, 117	YLU上面	C-8	土坑	0.9×0.6	0.2	楕円形	第127図108 第127図100	
SK29	108, 117	YLU上面	D-8	土坑	1.0×0.7	0.2	長椭円形		
SK30	108	YLU上面	C, D-8	土坑	0.7×0.7	0.2	楕円形		
SK31	108	YLU上面	D-9	土坑	0.8×0.6	0.3	楕円形		
SK32	108, 117	YLU上面	C-8	土坑	1.0×0.8	0.2	楕円形	第127図109~111	
SK34	108	YLU上面	C-8	土坑	0.6×0.4	0.1	楕円形		
SK35	108	YLU上面	C-8	土坑	0.5×0.4	0.1	楕円形		
SK36	108, 117	YLU上面	C-8	土坑	0.5×0.5	0.1	楕円形	第127図101~103	
SK38	108	YLU上面	D-8	土坑	0.8×0.6	0.4	長椭円形		
SK39	108, 118	YLU上面	B, C-9	土坑	2.5×1.2	0.2	長椭円形	第127図117, 118 第127図120, 121	
SK41	108, 118	YLU上面	C-9	土坑	2.0×1.6	0.3	長椭円形		
SK42	108	YLU上面	D-9	土坑	0.8×0.7	0.2	楕円形		
SK43	108, 118	YLU上面	C-9	土坑	1.1×0.8	0.7	長椭円形	第127図115, 116	
SK44	108, 118	YLU上面	C-9	土坑	1.2×0.8	0.2	長椭円形		
SK45	108	YLU上面	C-8	土坑	0.7×0.5	0.2	長椭円形		
SK46	108	YLU上面	C-8	土坑	0.6×0.5	0.1	楕円形		
SK63	108, 117	YLU上面	D-7	土坑	0.7×0.6	0.4	円形		
SK64	108, 117	YLU上面	D-7	土坑	0.7×0.5	0.2	長椭円形		
SK65	108, 117	YLU上面	E-7	土坑	0.6×0.4	0.1	長椭円形		
SK67	108	YLU上面	D-5	土坑	0.5×0.3	0.2	長椭円形		
SK68	108	YLU上面	D-5, 6	土坑	0.7×0.6	0.3	楕円形		
SK70	108, 117	YLU上面	C-5	土坑	0.5×0.3	0.3	長椭円形	第127図106, 107	
SK82	108	YLU上面	E-8	土坑	0.9×0.8	0.1	円形		
SK81	108	YLU上面	C-8	小穴	0.6×0.4	0.7	長椭円形		
SP112	108	YLU上面	C-8	小穴	0.4×0.3	0.2	楕円形		
SP113	108	YLU上面	C-8	小穴	0.5×0.4	0.5	楕円形		
SP115	108	YLU上面	C-8	小穴	0.4×0.4	0.2	円形		
SP116	108	YLU上面	C-8	小穴	0.4×0.4	0.2	円形		
SP132	108	YLU上面	D-5	小穴	0.4×0.3	0.2	楕円形		
SP133	108	YLU上面	C, D-5	小穴	0.3×0.3	0.2	円形		

第33表 向山遺跡中世・古墳時代土器觀察表

地図 図版 番号	出土位置	種別	器種	部 位	残存率 (%)	高さ (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	調整	備考	
1	SD1覆土	陶器	壺	底部	95	(2.9)	(6.4)	10YR7/4に赤い黄褐色	外面: 四枚ナデ 粘付高台 底部系切り直し 内面: 四枚ナデ			
2	SH1覆土	土師器	壺	底部		(2.1)			10YR5/3に赤い黄褐色	外面: 横ハラ後縁へラミガキ 内面: 横ハラ後ナデ		
3	SH1覆土	土師器	小型鉢			(2.55)	(6.5)	(5.2)	10YR7/4灰黃褐色	外面: 横ハラミガキ 内面: 横ハラミガキ		
4	43 SH10床面	土師器	壺		70	18.4	(10.9)	7.5	5YR6/4に赤い橙	外面: 口縁部斜めハケ 脚部横へラミガキ 内面: 脚部横ハケ	外内面磨滅	
5	43 SH10床面	土師器	壺	口縁部～頸部		(11.0)	(13.6)		2.5Y7/2灰黃褐色	外面: 不明		
6	43 SH10床面	土師器	壺	口縁部～頸部		(8.7)	(15.5)		10YR6/4に赤い黄褐色	外面: 横ハラミガキ 内面: 横ハラミガキ	外内面磨滅	
7	43 SH10床面	土師器	壺	口縁部～頸部		(11.0)	(17.2)		5YR6/4に赤い橙	外面: 口縁部～頸部横へラミガキ 脚部 LR縫文2段 内形浮文 内面: 頸部横へラミガキ 口縁部LR縫文		
8	43 SH10床面	土師器	壺	頸部～底部		(16.9)		9.8	5YR7/6橙	外面: 斜めハケ後へラミガキ？ 内面: 横ハケ・斜めハケ	外向磨滅 底部木葉模	
9	SH10床面	土師器	壺	頸部～底部		(7.9)		9.0	7.5YR7/6橙	外面: 横ハラミガキ 内面: 横ハラ後ナデ	底部木葉模	
10	SH10覆土	土師器	壺	底部		(4.9)	(11.2)	7.5YR6/6橙	外面: 斜めハケ後ナデ 内面: 斜めハケ後ナデ			
11	SH10覆土	土師器	壺	底部		(2.4)		(9.6)	10YR4/2灰黃褐色	外面: 横ハラミガキ 内面: 横ハケ		
12	SH10床面	土師器	壺	口縁部		(4.5)	(17.4)		7.5YR6/6橙	外面: 横ハラミガキ 内面: 横ハラ後縁へラミガキ		
13	43 SH11覆土	土師器	壺		80	21.3	(12.0)	8.6	7.5YR7/4に赤い橙	外面: 口縁部～頸部横へラミガキ 脚部 斜めハケ 内面: 横ハケ	外内面磨滅 底部木葉模	
14	43 SH11覆土	土師器	壺			90	28.2	(15.5)	8.8	7.5YR7/6橙	外面: 横ハラミガキ 脚部内形浮文 底部 斜めハケ 内面: 横ハケ	底部木葉模
15	43 SH11覆土	土師器	壺			95	20.4	9.1	9.1	7.5YR6/3に赤い黄褐色	外面: 横ハラミガキ 内面: 口縁部横へラミガキ 脚部横へラミガキ 内面: 頸部横へラミガキ 頸部 足部 前部横へラミガキ	
16	43 SH11覆土	土師器	壺	口縁部		(12.3)	(24.0)		10YR7/4に赤い黄褐色	外面: 斜めハケ後縁へラミガキ 内面: 斜めハケ	外内面磨滅	
17	SH11覆土	土師器	壺	底部		(2.5)		(10.2)	7.5YR5/3に赤い褐色	外面: 斜めハケ後縁へラミガキ 内面: 斜めハケ		
18	SH11覆土	土師器	壺	底部		(2.1)		(11.4)	7.5YR6/4に赤い橙	外面: 横ハラミガキ 内面: 横ハケ		
19	43 SH11覆土	土師器	台付壺				(28.3)	(20.5)		5YR7/8橙	脚部前面: 口縁部斜めハケ 脚部横ハケ 脚部外面: 横ハケ 脚部背面: 横ハケ 脚部内面: 横ハケ	
20	43 SH11覆土	土師器	台付壺			80	23.1	17.2	9.0	7.5YR7/4に赤い橙	脚部前面: 口縁部横ハケ 脚部縦ハケ 脚部背面: 横ハケ 口脣部キザミ 脚部外面: 横ハケ後ナデ 脚部内面: 横ハケ	
21	44 SH11覆土	土師器	壺	口縁部～頸部		(20.5)	21.9		7.5YR7/4に赤い橙	外面: 口縁部縦ハケ 脚部横ハケ 内面: 横ハケ		
22	44 SH11覆土	土師器	台付壺	脚部		(7.2)			7.5YR6/4に赤い橙	外面: 横ハケ 内面: 横ハケ		
23	44 SH11覆土	土師器	台付壺			(8.4)		(10.3)	7.5YR7/6橙	外面: 横ハケ後縁へラミガキ 内面: 横ハケ		
24	SH11覆土	土師器	小型鉢		25	3.5	(8.7)	(5.0)	10YR5/3に赤い黄褐色	外面: ナデ 内面: 横ハケ		
26	44 KU	土師器	小型鉢		100	4.8	5.5	3.8	5YR5/6明赤褐色	外面: 指痕ナデ 内面: 指痕ナデ		

第34表 向山遺跡古墳時代金属製品属性表

押因番号	図版番号	出土遺構	層位	器種	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
25	44	SH11	覆土	銅鏡	(2.20)	(1.05)	(0.30)

第35表 向山遺跡古墳時代石製品属性表

押因番号	図版番号	出土遺構	層位	器種	石 材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
27	44	SD1		磨製石器	珪質頁岩	4.00	1.65	0.2	1.68

第36表 向山遺跡縄文時代土器観察表

標因 番号	図版 番号	追繩 番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
28	44	SH14 P1	覆土	田群3類 a	SYR4/6燈	長石・灰色・黒色砂粒	渦巻状・梢円形・逆U字状の陰帯と複数の区画内に縱位・斜位の沈線
29	44	SH14	覆土	田群3類 a	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・石英	口脇部横巻状の沈線、口縁に環状把手を付け、円形の沈線区画内に斜位、側面の横巻
30	44	SH14	覆土	田群3類 a	SYR5/6明赤萬	長石・石英	横円形の沈線、台形の陰帯と沈線の区画内に縱位・斜位の沈線
31	44	SH14	覆土	田群3類 a	10YR7/4に、いゝ黃賀	長石・石英	陰帯と沈線の区画内に縱位沈線
32	44	SH14	覆土	田群3類 a	SYR5/6明赤萬	長石・石英	渦巻状の陰帯と沈線の区画内に縱位沈線
33	44	SH14	覆土	田群3類 a	SYR6/6燈	長石・石英	渦巻状の陰帯と沈線の区画内に縱位沈線
34	44	SH14	覆土	田群3類 a	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・石英	渦巻状の陰帯と沈線の区画内に縱位・斜位の沈線
35	44	SH14	覆土	田群3類 a	10YR5/4に、いゝ黃賀	長石・石英	口脇部横円形の沈線、外輪様位沈線、特殊な形態
36	44	SH14	覆土	田群3類 a	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・石英	相互刺繡、横波状沈線、L字系文、弧状沈線
47	44	TA2	覆土	田群1類 b	7.SYR4/3萬	長石・石英	LR構文とLRの環狀圖文
48	44	TA2	覆土	田群1類 b	10YR4/3に、いゝ黃賀	長石・石英	LR構文
49	44	TA2	覆土	田群1類 b	SYR5/6明赤萬	長石・石英	外面部底、内面部指痕
50	44	TA2	覆土	田群1類 b	10YR5/4に、いゝ黃賀	長石・石英	指痕
51	44	TA2	覆土	田群1類 b	7.SYR4/4萬	長石・石英	外面部無文、内面部指痕
52	44	TA3	覆土	田群1類 b	7.SYR5/4に、いゝ黃賀	長石・石英	横位の筋・み痕、擦痕、指頭の調整痕
58	44	TA4	覆土	I群1類 g	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・石英	横位の筋・全体压痕、内面部底
59	44	TA4	覆土	I群2類 j	SYR5/6明赤萬	長石・石英	LR構文
61	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR4/2灰萬	長石・石英	波状紋、口脇部直下に連續爪形文、横位の沈線区画、上段は横位矢羽根状横紋、下段は縦位矢羽根状横紋、横位結合部横文
62	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR4/3萬	長石・石英	口脇部直下に連續爪形文、横位の沈線区画、上段は縦位矢羽根状横紋、下段は縦位矢羽根状横紋、横位結合部横文
63	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・石英	矢羽根状沈線、円形點付文
64	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR4/4萬	長石・金質母	横位矢羽根状沈線、円形點付文
65	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・石英	矢羽根状沈線
66	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR4/4萬	長石・金質母	横位沈線、円形點付文
67	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR4/3萬	長石・石英	横位矢羽根状沈線、一部に菱形文、円形點付文
68	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・金質母	横位結合部横文、円形點付文
69	44	TA6	—	I群2類 c	10YR4/3に、いゝ黃賀	長石・石英	横位・斜位の筋・横線、斜位の筋結合部横文、円形點付文
70	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・金質母	斜位沈線、円形浮彫文
71	TA6	—	I群2類 c	7.SYR4/3萬	長石・金質母	横位沈線	
72	44	TA6	—	I群2類 c	7.SYR4/3萬	長石・金質母	横位沈線
73	TA6	—	I群2類 c	7.SYR4/4萬	長石・石英	無文、円孔	
101	44	SK36	—	I群2類 l	SYR5/6明赤萬	長石・赤色粒子・細砂・織維	外面部底の刻目、内面部調整痕
102	SK36	—	I群2類 l	SYR5/6明赤萬	長石・織砂	外面部斜位の擦痕、内面部調整痕	
103	SK36	—	I群2類 l	SYR6/6燈	石英・長石・織砂	外面部斜位・斜位の擦痕、内面部底	
104	SK13	—	I群1類 e	7.SYR4/3萬	長石・黒雲母	外面部底、斜位の擦痕、内面部擦痕	
105	44	SK15	—	I群1類 b	7.SYR6/6燈	長石・織砂	波状紋、口縁に沿った紺土紐に斜位の刻目
106	SK79	—	田群1類 a	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・質母・黑色粒子	縦位調整痕	
107	44	SK79	—	田群1類 a	SYR5/6明赤萬	石英・質母・織砂	地文にRL構文、斜位の溝鉢状沈線
108	SK28	—	I群1類 e	SYR5/6明赤萬	石英・織砂	横位擦痕	
109	SK32	—	I群1類 l	7.SYR5/4に、いゝ萬	織砂・長石	外面部斜位擦痕、内面部底	
110	SK32	—	I群1類 l	7.SYR6/6燈	長石・織砂	内面部擦痕	
112	44	SK11	—	I群1類 c	SYR4/3に、いゝ赤褐色	長石・質母・黑色粒子	菱形状横線、3刻1単位の円形點付文
113	44	SK10	—	I群1類 g	SYR6/6燈	長石・赤褐色粒子・織維	横位の筋・横線に縦位
114	SK10	—	I群1類 g	7.SYR6/6燈	長石・質母・織砂	外面部斜位調整痕、内面部擦痕	
115	44	SK43	—	I群2類 g	10YR3/2灰萬	長石・織砂	横位の刻目
116	SK43	—	I群2類 g	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・黑色粒子・織維	風化化のため文様不明	
117	SK39	—	I群1類 l	7.SYR6/6燈	長石・織砂	外面部斜位擦痕、内面部擦痕	
118	44	SK39	—	I群1類 l	10YR7/4に、いゝ黃賀	長石・織砂	斜位の筋・全体压痕
119	44	SP133	—	田群1類 a	7.SYR4/4萬	長石・石英	丫字状の粘土紐に垂直落葉状平行沈線と斜線の斜格子文
120	44	SK41	—	I群1類 a	10YR7/4に、いゝ黃賀	長石・石英・織砂	口脇部斜位、外面部斜位の擦痕、内面部擦痕
121	SK41	—	I群1類 a	7.SYR6/6燈	長石・石英・織砂	外面部擦痕、内面部斜位擦痕	
122	44	SK3	KU	田群3類 a	7.SYR5/4に、いゝ萬	長石・石英・灰色砂粒	渦巻状の陰帯と沈線の区画内に縦位沈線
127	46	KU	I群1類 a	10YR5/3に、いゝ萬	長石・質母	縦位の擦痕系文	
128	46	KU	I群1類 a	10YR5/3に、いゝ萬	長石・質母	縦位の擦痕系文	
129	46	KU	I群1類 a	10YR5/3に、いゝ萬	長石・質母	縦位の擦痕系文	
130	46	KU	I群1類 a	10YR5/3に、いゝ萬	長石・質母	縦位の擦痕系文	
131	46	KU	I群1類 a	10YR5/3に、いゝ萬	長石・質母	縦位の擦痕系文	
132	46	KU	I群1類 a	7.SYR6/4に、いゝ萬	長石・質母・織砂	縦位の擦痕系文	
133	46	KU	I群1類 a	10YR6/4に、いゝ萬	長石・質母	縦位の擦痕系文	
134	46	KU	I群1類 a	10YR6/3に、いゝ萬	長石・質母	縦位の擦痕系文	
135	KU	I群1類 c	10YR6/4に、いゝ萬	長石	梢円押型文		
136	KU	I群1類 c	7.SYR5/3に、いゝ萬	長石	梢円押型文		
137	46	KU	I群1類 c	10YR6/4に、いゝ萬	長石・質母	梢円押型文	
138	46	KU	I群1類 c	10YR6/4に、いゝ萬	長石・質母	梢円押型文	
139	46	KU	I群1類 c	10YR6/4に、いゝ萬	長石・黒色粒子	梢円押型文	

碑固 番号	固通 番号	道標 番号	位置	分類	色調	胎 土	文様・調整等
140	46	KU	I群1頭.c	7SYR4/2灰褐色	長石・雲母	横位・縦位の梢円押型文	
141	46	KU	I群1頭.c	5YRS/6明赤褐色	長石	梢円押型文	
142		KU	I群1頭.c	10YR6/3に赤い黄褐色	長石	梢円押型文	
143	46	KU	I群1頭.c	10YR6/3に赤い黄褐色	長石・小穢	梢円押型文	
144	46	KU	I群1頭.c	10YR6/3に赤い黄褐色	長石	梢円押型文	
145	46	KU	I群1頭.c	10YR6/4に赤い黄褐色	長石	梢円押型文	
146	46	KU	I群1頭.c	10YR7/4に赤い黄褐色	長石	梢円押型文	
147		KU	I群1頭.c	10YR7/4に赤い黄褐色	長石	梢円押型文	
148	46	KU	I群1頭.c	10YR6/3に赤い黄褐色	長石	梢円押型文	
149	46	KU	I群1頭.c	5YRS/2灰褐色	長石	梢円押型文	
150		KU	I群1頭.c	10YR6/3に赤い黄褐色	長石	梢円押型文	
151	46	KU	I群1頭.c	10YR5/3に赤い黄褐色	長石	山形風に則した梢円押型文	
152	46	KU	I群1頭.c	10YR6/4に赤い黄褐色	長石	梢円押型文	
153	46	KU	I群1頭.c	7.5YR6/4に赤い褐色	長石	縦位の山形押型文	
154	46	KU	I群1頭.c	7.5YR5/3に赤い褐色	長石	縦位の山形押型文	
155	46	KU	I群1頭.c	10YR7/4に赤い黄褐色	長石・小穢	縦位の山形押型文	
156	46	KU	I群1頭.c	10YR7/4に赤い黄褐色	長石	縦位の山形押型文	
157	46	KU	I群1頭.c	10YR6/4に赤い黄褐色	小穢	縦位の山形押型文	
158		KU	I群1頭.c	7.5YR6/4に赤い褐色	赤褐色粒子	斜位の山形押型文	
159		KU	I群1頭.c	7.5YR7/4に赤い褐色	長石	斜位の山形押型文	
160		KU	I群1頭.d	5YR4/3に赤い赤褐色	長石・金雲母	地文に斜位沈線、横位沈線	
161		KU	I群1頭.e	7.5YR6/4に赤い褐色	長石・小穢・白色粒子・織維	□縫隙部分: II剖部斜位のI格条件圧痕、有段部斜位のII格条件圧痕、下に横位のI格条件圧痕	
162	46	KU	I群1頭.e	5YR4/6赤褐色	長石・小穢・白色粒子・織維	□縫隙部分: II剖部斜位のI格条件圧痕、有段部斜位のII格条件圧痕、下に横位のI格条件圧痕	
163	46	KU	I群1頭.e	5YR6/6燈	長石・小穢・黒色・白色粒子・織維	□縫隙部分: II剖部斜位のI格条件圧痕、有段部斜位のII格条件圧痕、下に横位のI格条件圧痕	
164		KU	I群1頭.e	7.5YR6/6燈	長石・小穢・白色粒子・織維	斜格子状のI格条件圧痕、補修孔	
165	46	KU	I群1頭.e	7.5YR6/6燈	長石・小穢・白色粒子・織維	断面衝突のI格条件圧痕	
166	46	—	I群1頭.e	7.5YR6/6燈	長石・小穢・白色粒子・織維	斜位のI格条件圧痕	
167		KU	I群1頭.e	7.5YR6/6燈	長石・小穢・白色粒子・織維	斜位のI格条件圧痕	
168		KU	I群1頭.e	7.5YR6/6燈	長石・小穢・白色粒子・織維	断面衝突のI格条件圧痕	
169		KU	I群1頭.e	7.5YR6/6燈	長石・小穢・白色粒子・織維	斜位のI格条件圧痕	
170	46	KU	I群1頭.f	5YR5/6明赤褐色	長石・小穢・織維	縦位のI格条件圧痕	
171		KU	I群1頭.f	5YR6/6燈	長石	□剖部斜位のI格条件圧痕、縦位のI格条件圧痕	
172		KU	I群1頭.f	5YR5/6明赤褐色	長石・小穢	□剖部斜位のI格条件圧痕、縦位のI格条件圧痕	
173	46	KU	I群1頭.f	7.5YR6/6燈	長石・小穢	縦位のI格条件圧痕	
174	—	KU	I群1頭.f	5YR5/6明赤褐色	長石・小穢	縦位のI格条件圧痕	
175	46	KU	I群1頭.g	5YR6/8燈	長石・黑色・赤褐色・白色粒子・織維	横位の微隆起線にI格条件圧痕、下に横位・斜位のI格条件圧痕	
176	46	—	I群1頭.g	7.5YR6/6燈	長石・黒・赤褐色・白色粒子・織維	横位の微隆起線、下に横位のI格条件圧痕	
177		KU	I群1頭.g	7.5YR6/6燈	長石・黑色・白色粒子・織維	横位の微隆起線、上に横位のI格条件圧痕	
178		KU	I群1頭.g	5YR6/6燈	長石・小穢・白色粒子・織維	横位の微隆起線、上に横位のI格条件圧痕	
179		KU	I群1頭.g	5YR6/6燈	長石・小穢・白色粒子・織維	横位の微隆起線、上に横位のI格条件圧痕	
180		KU	I群1頭.g	5YR6/6燈	長石・黑色・赤褐色・白色粒子・織維	横位の微隆起線にI格条件圧痕、上に斜位のI格条件圧痕	
181		KU	I群1頭.g	5YR6/6燈	長石・赤褐色・白色粒子・織維	横位の微隆起線、下に横位のI格条件圧痕	
182		KU	I群1頭.g	5YR5/3に赤い赤褐色	長石・赤褐色・白色粒子・織維	横位の微隆起線、上に横位のI格条件圧痕	
183		KU	I群1頭.g	5YR5/6明赤褐色	長石・白色粒子・織維	□剖部斜位のI格条件圧痕、横位のI格条件圧痕、一部斜位の軸の輪柱子に付く	
184	46	KU	I群1頭.g	7.5YR6/6燈	長石・小穢・白色粒子・織維	□剖部斜位のI格条件圧痕、横位のI格条件圧痕、内面調整痕	
185	46	KU	I群1頭.g	5TR6/6燈	長石・白色粒子・織維	横位のI格条件圧痕	
186	46	KU	I群1頭.g	5YR5/6明赤褐色	長石・小穢・白色粒子・織維	横位のI格条件圧痕	
187		KU	I群1頭.g	7.5YR4/4輪	長石・黑色・白色粒子・小穢・織維	横位のI格条件圧痕	
188		KU	I群1頭.g	7.5YR6/4に赤い褐色	長石・白色粒子・小穢・織維	横位のI格条件圧痕	
189		KU	I群1頭.g	7.5YR6/6燈	長石・黑色・白色粒子・織維	横位のI格条件圧痕	
190		KU	I群1頭.g	5YR6/4に赤い褐色	長石・黑色・白色粒子・小穢・織維	横位・斜位のI格条件圧痕	
191	46	KU	I群1頭.g	7.5YR7/4に赤い褐色	長石・黑色・白色粒子・小穢・織維	横位のI格条件圧痕	
192	46	KU	I群1頭.g	5YR5/6明赤褐色	長石・黑色・白色粒子・織維	～の字状のI格条件体の軸の片面圧痕	
193		KU	I群1頭.g	7.5YR6/6燈	長石・赤褐色・白色粒子・小穢・織維	横位のI格条件体の軸の片面圧痕	
194		KU	I群1頭.g	7.5YR7/6燈	長石・白色粒子・織維	斜位のI格条件体の軸の片面圧痕	
195		KU	I群1頭.g	5YR5/6燈	長石・赤褐色・白色粒子・小穢・織維	横位のI格条件体の軸の片面圧痕	
196	—	KU	I群1頭.g	5YR5/6明赤褐色	長石・白色粒子・織維	横位・斜位のI格条件体の軸の片面圧痕	
197		KU	I群1頭.g	7.5YR6/4に赤い褐色	長石・小穢・白色粒子・織維	横位のI格条件体の軸の片面圧痕	
198		KU	I群1頭.g	7.5YR6/6燈	長石・黑色・白色粒子・織維	横位のI格条件体の軸の片面圧痕	
199	46	KU	I群1頭.g	7.5YR6/6燈	長石・白色粒子・織維	横位のI格条件体の軸の片面圧痕	

地図番号	国版番号	通鑑番号	位置	分類	色調	胎 土	文様・調整等
200	KU	I群1類g	7.SYR6.6燈	長石・小礫・白色粒子・織維	横位のr縞条体圧痕、内面横位の調整痕		
201	KU	I群1類g	7.SYR6.6燈	長石・小礫・白色粒子・織維	横位のr縞条体圧痕		
202	KU	I群1類g	7.SYR6.6燈	長石・小礫・白色粒子・織維	横位のr縞条体圧痕		
203	KU	I群1類g	7.SYR6.6燈	長石・小礫・白色粒子・織維	横位のr縞条体圧痕		
204 46	KU	I群1類g	7.SYR5.4/にい黄焉	長石・黒色・白色粒子・織維	横位のr縞条体圧痕		
205	KU	I群1類g	SYR6-6燈	長石・白色粒子・織維	斜位擦痕、斜位のr縞条体圧痕		
206	KU	I群1類g	7.SYR7.6燈	長石・白色粒子・織維	斜位のr縞条体圧痕		
207 46	KU	I群1類g	7.SYR6-6燈	長石・雲母・白色粒子・織維	斜位のr縞条体圧痕		
208	KU	I群1類g	7.SYR5.4/にい黄焉	長石・黒色・白色粒子・小礫・織維	斜位のr縞条体圧痕		
209	KU	I群1類g	SYR6.6燈	長石・白色粒子・織維	斜位のr縞条体圧痕		
210	KU	I群1類g	7.YR7.4/にい黄焉	長石・雲母・白色粒子・織維	斜位のr縞条体圧痕		
211 46	KU	I群1類g	7.SYR6.6燈	長石・白色粒子・小礫・織維	波状口縞、口部間にr縞条体圧痕、口縫に沿ったr縞条体圧痕、内面擦痕		
212	KU	I群1類g	10YR6-4/にい黄焉	長石・白色粒子・小礫・織維	口部間にr縞条体圧痕、横位のr縞条体圧痕		
213	KU	I群1類g	7.YR5.4/にい赤焉	長石・雲母	織紋状羽状の弦線、円形刺突文		
214 47	KU	I群2類a	10YRにい黄焉	長石	横位・斜位の刻目		
215	KU	I群2類a	7.SYR7.6燈	長石・織維	波状口縞、外面部に条痕、外面部口部間に刻目		
216 47	KU	I群2類a	7.SYR6.6燈	長石・織維	波状口縞、外面部に条痕、外面部口部間に刻目、横位の刻目文		
217 47	KU	I群2類a	7.SYR6.4/にい黄焉	長石・石英・織維	外面部に条痕、口部間に刻目、横位の刻目文		
218	KU	I群2類a	SYR6.6燈	長石・織維	波状口縞、外面部口部間に刻目		
219 47	KU	I群2類a	SYR6.6燈	長石・石英	口部間に刻目、横位の刻目文		
220 47	KU	I群2類a	7.YR6.6燈	長石・織維	波頂部の横円形の突起に刻目、横位の刻目文		
221 47	KU	I群2類a	7.SYR7.4/にい黄焉	長石・織維	波頂部の横円形の突起、地文に条痕、横位の刻目文		
222 47	KU	I群2類a	2.5YR4.4/にい赤焉	長石・小礫・織維	波頂部の突起に刻目、口部具鉢腹縫の刻目、内面横位の貝殻腹縫文		
223	KU	I群2類a	SYR5.6明赤焉	長石	口部斜面、横位の刻目文		
224	KU	I群2類a	7.SYR4.6燈	長石	口部斜面、横位の刻目文		
225 47	KU	I群2類a	10YR7.4/にい黄焉	長石・織維	外面部条痕、横位の刻目文		
226 47	KU	I群2類a	10YR7.4/にい黄焉	長石・石英・織維	外面部条痕、横位・斜位の刻目文		
227 47	KU	I群2類a	SYR6.6燈	長石・白色粒子・小礫・織維	斜位の刻目文		
228 47	KU	I群2類a	10YR4.2赤黃焉	長石・石英・織維	斜位擦痕、横位・斜位の刻目文		
229 47	KU	I群2類a	7.SYR7.6燈	長石・織維	外面部条痕、横位の刻目文		
230 47	KU	I群2類a	7.SYR7.6燈	長石・織維	口部斜面、横位の刻目文		
231	—	I群2類a	7.SYR6.4/にい黄焉	長石・石英・織維	外面部条痕、横位の刻目文		
232	KU	I群2類a	10YR6.4/にい黄焉	長石・織維	斜位条痕、横位の刻目文		
233 47	KU	I群2類a	10YR6.4/にい黄焉	長石・黑色粒子	波状口縞、口部間に刻目、弧状の紺目縫に刻目		
234 47	KU	I群2類a	10YR6.3赤黃焉	長石・小礫	口部間に刻目、横位の粘土縫に刻目		
235	KU	I群2類a	10YR7.4/にい黄焉	長石	横位の粘土縫に刻目		
236	KU	I群2類a	10YR7.4/にい黄焉	長石	横位の粘土縫に刻目		
237	KU	I群2類a	2.5YR3.4赤黃焉	長石	横位の粘土縫に刻目		
238	KU	I群2類a	SYR6.6燈	長石	横位の粘土縫に刻目		
239 47	KU	I群2類a	7.SYR5.6明焉	長石・小礫	口部斜面に斜位の伏縫、横位の微隆起縫状の粘土縫に刻目		
240	KU	I群2類a	SYR5.6明赤焉	長石	横位の微隆起縫状の粘土縫に刻目		
241	KU	I群2類a	SYR4.6赤焉	長石	横位の微隆起縫状の粘土縫に刻目		
242 47	KU	I群2類a	SYR5.6明赤焉	長石	横位の微隆起縫状の粘土縫に刻目		
243	KU	I群2類a	SYR5.6明赤焉	長石	横位の微隆起縫状の粘土縫に刻目		
244	KU	I群2類a	SYR5.4/にい赤焉	長石	横位の微隆起縫状の粘土縫に刻目		
245	KU	I群2類a	SYR5.4/にい赤焉	長石	横位の微隆起縫状の粘土縫に刻目		
246	KU	I群2類a	7.SYR5.6明焉	長石	波状口縞、口部間に刻目、口縫に沿った粘土縫に刻目		
247 47	KU	I群2類a	10YR6.4/にい黄焉	長石	口部斜面に指で擦み、横位の粘土縫に刻目		
248	KU	I群2類a	10YR6.4/にい黄焉	長石	口部斜面に指で擦み、横位の粘土縫に刻目		
249 47	KU	I群2類a	7.SYR6.6燈	長石	横位の粘土縫に刻目		
250	KU	I群2類a	7.SYR6.4/にい黄焉	長石	横位の粘土縫に刻目		
251	KU	I群2類a	10YR7.4/にい黄焉	長石・織維	波状口縞、口部間に貝殻背圧痕、横位の低い粘土縫に貝殻背圧痕、区画内に刻目文		
252	KU	I群2類a	10YR8.3赤黃焉	長石・織維	區状の低い粘土縫に貝殻背圧痕		
253	KU	I群2類a	7.SYR7.3/にい黄焉	長石・織維	區状の低い粘土縫に貝殻背圧痕		
254 47	KU	I群2類a	7.SYR6.3/にい黄焉	長石・織維	波状口縞、口部間に貝殻背圧痕、區状の低い粘土縫に貝殻背圧痕、区画内に刻目文		
255 47	KU	I群2類a	7.SYR7.4/にい黄焉	長石・織維	區状の低い粘土縫に貝殻背圧痕		
256 47	KU	I群2類a	SYR6.6燈	長石・小礫・織維	横位の刻目文、内面擦痕		
257	KU	I群2類a	10YR8.4赤黃焉	長石	外面部条痕、内面擦痕		
258	KU	I群2類a	10YR6.4/にい黄焉	長石・黑色粒子・小礫	外面部調整痕、内面横位条痕		
259	KU	I群2類a	7.SYR7.6燈	長石・黑色粒子	外面部条痕、内面横位条痕		
260	KU	I群2類a	c SYR3/4明赤焉	長石・織維	口部斜面に貝殻腹縫文、外面部に斜位条痕、口部斜面直下に斜位の連續且波腹縫文		
261	KU	I群2類a	c SYR6.6燈	長石・織維	口部斜面下に斜位の連續且貝殻腹縫文		
262 47	KU	I群2類c	7.SYR4.3尚	長石・石英・織維	口部斜面に貝殻腹縫文、外面部に斜位条痕、口部斜面直下に斜位の連續且波腹縫文、内面横位条痕		
263 47	KU	I群2類c	SYR6.6燈	小礫・織維	斜位の連續且貝殻腹縫文		
264	KU	I群2類c	7.SYR6.6燈	長石・織維	横位の粘土縫に斜位の連續且貝殻腹縫文		
265	KU	I群2類c	SYR6.6燈	長石・織維	横位の粘土縫に斜位の連續且貝殻腹縫文		

地図番号	国版番号	通標番号	位置	分類	色調	胎 土	文様・調整等
266	47	KU	I群2類e	7SYR6-6橙	長石・鐵礫	標位の粘土織に斜位の連続貝殻模様線	
267		KU	I群2類e	7SYR6-6橙	長石・鐵礫	標位の粘土織に斜位の連続貝殻模様線	
268	47	KU	I群2類d	7SYR4/2灰褐	長石・雲母	標位の斜位	
269	47	KU	I群2類d	7SYR6-6橙	黑色粒子・小礫	菱形の刻目文	
270	48	KU	I群2類e	2.5SYR6/3にい黃	長石	圓筒状工具の弧状の浅縁	
271	48	クロ	I群2類e	2.5SYT/3浅黃	長石	圓筒状工具の弧状の浅縁	
272	48	KU	I群2類e	2.5SYT/3浅黃	長石	圓筒状工具の弧状の浅縁	
273	48	KU	I群2類f	7SYR5/6明赤褐	長石・礫	口脣部に斜位条痕、外内面に斜位条痕	
274	48	KU	I群2類f	7SYR4/6明赤褐	長石・礫	外面部斜位条痕、内面部斜位条痕	
275		I	I群2類f	7SYR6-6橙	長石・黑色粒子	外面部斜位条痕、内面部斜位条痕	
276	48	KU	I群2類g	7SYR5/6にい赤褐	長石・黑色粒子	波状口縁、口脣部下面に階級状の斜位條線、暗帶・圓筒状の貝殻模様線、内面横位条痕	
277	48	KU	I群2類g	7SYR2/1黑	長石・礫	口脣部下面に斜位条痕、横位・菱形の貝殻模様線	
278	48	KU	I群2類g	7SYR5/4にい黒	長石・黑色粒子	圓筒状の貝殻模様線、内面横位条痕	
279	48	KU	I群2類g	7SYR3/3にい赤褐	長石	貝殻模様線	
280	48	KU	I群2類g	7SYR5/6明赤褐	長石・礫	口脣部に貝殻压痕、外面部横位の連続貝殻模様線、内面横位条痕	
281	48	KU	I群2類g	7SYR2/1黑褐	長石・礫	斜位の貝殻模様線	
282	48	KU	I群2類g	7SYR5/4にい赤褐	長石・礫	圓筒状の貝殻模様線	
283	48	KU	I群2類g	7SYR5/6明赤褐	黑色粒子	外面部圓筒状の貝殻模様線、内面横位条痕	
284	48	KU	I群2類g	7SYR5/6明赤褐	黑色粒子・礫	外面部圓筒状の貝殻模様線、内面横位条痕	
285	48	KU	I群2類g	7SYR4/6にい赤褐	長石・礫	縱位条痕	
286	48	KU	I群2類g	7SYR4/6赤褐	長石・礫	縱位条痕	
287	48	KU	I群2類h	7SYR6/4にい一橙	長石・雲母	波状口縁、口縁に沿った粘土織と口脣部に刻目、外面部格子状の浅縫	
288	48	KU	I群2類h	10YR7/3にい黃褐	長石・雲母	弧状の粘土織に刻目	
289	48	KU	I群2類h	7SYR6/4にい一橙	長石・雲母	口脣部に刻目、横位の粘土織に刻目	
290	48	KU	I群2類h	7SYR6-6橙	長石・雲母	横位の前面三角形の粘土織に刻目	
291	48	—	I群2類h	7SYR6/4にい一橙	長石・雲母・礫	横位の前面三角形の粘土織に刻目	
292	48	KU	I群2類h	10YR7/3にい黃褐	長石・雲母・礫	横位・波状の粘土織に貝殻压痕	
293		KU	I群2類h	10YR4/3にい黃褐	長石・雲母	口脣部に刻目	
294		KU	I群2類h	7SYR4/3にい赤褐	長石・雲母	横位條痕	
295		KU	I群2類h	7SYR5/4にい赤褐	長石・雲母	横位條痕	
296		—	I群2類h	7SYR6/6明赤褐	長石・雲母・砂粒	内面調整痕	
297		—	I群2類h	7SYR5/4にい赤褐	長石・雲母	内面横位条痕	
298		—	I群2類h	7SYR6-6橙	長石・雲母	外面部調整痕、内面横位条痕	
299	48	KU	II群1類a	7SYR6-6橙	長石・雲母	横位の斜位・縦に刻目	
300	48	KU	II群1類a	7SYR5/4にい黒	長石・雲母	口脣部に刻目、横位の粘土織に刻目、内面部斜位条痕	
301	48	KU	II群1類a	7SYR5/4にい黒	長石・雲母・黑色粒子	外面部圓筒状工具の弧状・斜位・横位條線	
302	48	KU	II群1類a	7SYR5/3にい黒	長石・雲母・礫	圓筒状工具の波状浅縫	
303	48	KU	II群1類b	2.5SY/4灰灰黃	長石・雲母	波状口縁、口脣部と側部の端に横孔の捕み瓶、外面部に指痕痕	
304	48	KU	II群1類b	10YR7/3にい一黃褐	長石・雲母	口脣部と側部の境に横位の捕み瓶、斜位浅縫	
305	48	KU	II群1類b	10YR8/4浅黃褐	長石・雲母	口脣部と側部の境に横位の捕み瓶、斜位浅縫、内面に指痕痕	
306	48	KU	II群1類b	10YR7/4にい一黃褐	長石・雲母	口脣部と側部の境に横位の捕み瓶、斜位浅縫、内面に指痕痕	
307	48	KU	II群1類b	2.5SY/4浅黃	長石・雲母・黑色粒子	口脣部と側部の境に横み瓶、下に斜位浅縫	
308	48	KU	II群1類c	10YR7/4にい一黃褐	長石・雲母	波状口縁、口脣部爪状の削目、圓筒状工具の斜位條線、内面に指痕痕	
309	48	クロ	II群1類c	2.5SY/4灰灰黃	長石・雲母	波状口縁、口脣部爪状の削目、内面に指痕痕	
310	48	—	II群1類c	10YR7/4にい一黃褐	長石・雲母	波状口縁、口脣部爪状の削目	
311	48	KU	II群1類c	10YR7/6黑黃褐	長石・雲母	口脣部と側部の境に直縫	
312	48	KU	II群1類c	2.5Y/4にい黒	長石・雲母	外面部斜位調整痕、内面に指痕痕	
313	48	KU	II群1類c	7SYR6-6黑	長石・雲母	外面部の調整痕、内面に指痕痕	
314	48	—	II群1類c	2.5SY/4灰黃	長石・雲母	外面部の調整痕、内面に指痕痕	
315	48	KU	II群1類c	2.5SY/4灰黃	長石・雲母・黑色粒子	外面部圓筒状工具の斜位條線、内面に指痕痕	
316	48	KU	II群1類d	10YR6/4にい一黃褐	長石・雲母	内面に指痕痕	
317	48	KU	II群1類d	10YR7/6明黃褐	長石・雲母・礫	外面部斜位調整痕、内面に指痕痕	
318	48	KU	II群1類d	2.5SY/3黑黃	長石・雲母	外面部圓筒状工具の斜位條線、内面に指痕痕	
319	48	KU	II群1類d	10YR6/4にい一黃褐	長石・雲母	外面部圓筒状工具の斜位條線、内面に指痕痕	
320	49	KU	II群1類e	7SYR5/4にい黒	長石・雲母	波状口縁、器面全体にLR織文、口脣部に沿って0段多条のLR織文のループを2段、側部のくびれに同一のループを4段回転推文	
321	49	KU	II群1類f	7SYR4/3褐	長石・雲母	波状口縁、器面全体にLR織文、口脣部に沿って0段多条のLR織文のループを2段、側部のくびれに同一のループを4段回転推文	
322	49	KU	II群1類g	7SYR5/4にい黒	長石・雲母	器面全体にRLとLRの羽状織文、側部のくびれにRLとLR織文のループを2段、側部のくびれに同一のループを2段回転推文	
323	49	KU	II群1類g	5YR5/3にい赤褐	長石・石英	器面全体にRLとLRの羽状織文、側部のくびれに同一のループを2段回転推文	
324	49	KU	II群1類g	7SYR5/4にい黒	長石・雲母	多条織文の組紐	
325	49	KU	II群1類g	7SYR6/4にい一橙	長石・石英	地面上に反の合の斜位織文、地面上に菱形の浅縫	
326	49	KU	II群1類g	7SYR5/6明褐	長石・雲母	地面上に反の合の斜位織文、菱形の浅縫	
327	49	KU	II群1類g	7SYR6/6黑	長石・雲母	地面上に反の合の斜位織文、菱形の浅縫	
328	49	KU	II群1類g	7SYR6/4にい一橙	長石・雲母	地面上に反の合の斜位織文、菱形の浅縫	
329	49	KU	II群1類g	10YR6/4にい一黃褐	長石・雲母	地面上に反の合の斜位織文、菱形の浅縫	
330	49	KU	II群1類g	7SYR6/6橙	長石・雲母	地面上に反の合の斜位織文、張状・斜位の浅縫	
331	49	KU	II群1類h	7SYR4/2灰褐	長石・雲母	波状口縁、斜位横位、横位の削目2段、3段目は浅く部分的	

辨別番号	図版番号	通欄番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
332 49	KU	Ⅱ群1類1	10YR4/2灰黃褐	長石・雲母	横位の割目文3段		
333 49	KU	Ⅱ群1類1	10YR4/2灰黃褐	長石・雲母	外面部透板、横位の割目文2段、内面横位透板		
334 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR6.6橙	長石・雲母・砂粒	横位の割目文2段		
335 49	KU	Ⅱ群2類1	10YR6/4にぶい黃褐	長石・雲母	横位の割目文3段		
336 49	KU	Ⅱ群2類1	10YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	横位の割目文3段		
337 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR6/6橙	長石・雲母・黑色粒子	横位の割目文2段		
338 49	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	横位の割目文1段		
339 49	KU	Ⅱ群1類1	10YR5/3にぶい黃褐	長石・雲母	横位の割目文3段		
340 49	—	Ⅱ群1類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	横位の割目文3段		
341 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	横位・斜位の透板、横位の割目文2段		
342 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	横位透板、側面の段に横位の割目文		
343 49	KU	Ⅱ群1類1	10YR4/3にぶい黃褐	長石・雲母	口縫部横位の割目文3段、側部のくびれに横位の割目文1段、内面横位透板		
344 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	横位の割目文		
345 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR4/3褐色	長石・雲母	横位の割目文		
346 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	口縫部に疣状、幅の違う木槌状工具を組み合わせた原体で横位の割目文2段、内面横位透板		
347 49	KU	Ⅱ群1類1	10YR5/3にぶい黃褐	長石・雲母	横位の木槌状透板		
348 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	幅の違う木槌状工具を組み合わせた原体で横位の割目文2段、内面横位透板		
349 49	KU	Ⅱ群1類1	10YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	幅の違う木槌状工具を組み合わせた原体で横位の割目文2段、内面横位透板		
350 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR4/3褐色	長石・雲母	幅の違う木槌状工具を組み合わせた原体で横位の割目文2段、内面横位透板		
351 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR6/4にぶい黃褐	長石・雲母	爪状の横位の割目文		
352 49	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR6/4にぶい黃褐	長石・雲母・褐色砂粒	横位の割目文		
353 48	KU	Ⅱ群1類1	7.5YR4/4褐色	長石・金雲母・纏	LR・RLの透板模様、補修孔開けかけている		
354 50	KU	Ⅱ群1類1	5YR5/6明赤褐	長石・石英・金雲母	地文にRL・純文、弧形の扁平な浮織文		
355 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR6/8橙	長石・石英・金雲母	地文にRL・純文、弧形の扁平な浮織文		
356 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・石英・金雲母	地文にRL・純文、弧形の扁平な浮織文		
357 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・金雲母	地文にRL・純文、弧形の扁平な浮織文		
358 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/3にぶい黃褐	長石	棒子状の扁平な浮織文、円形剥突		
359 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR4/4褐色	長石・石英	地文にRL・純文、横位の沈織文		
360 50	KU	Ⅱ群2類1	5YR4/6赤褐色	長石・石英	地文にRL・純文、横位の沈織文		
361 50	KU	Ⅱ群2類1	5YR4/6赤褐色	長石・石英・金雲母	地文にRL・純文、横位の沈織文		
362 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR4/3褐色	長石・石英・金雲母	地文にRL・純文、横位の沈織文		
363	KU	Ⅱ群2類1	5YR5/6明赤褐	長石・石英	地文にRL・純文とRL・純文、横位の沈織文		
364	KU	Ⅱ群2類1	5YR4/6赤褐色	長石	爪状の压痕		
365 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR6/7褐色	長石・雲母・纏	斜位透板		
366 50	KU	Ⅱ群2類1	10YR6/6明黄褐	長石・黑色粒子・纏	斜位透板		
367 50	KU	Ⅱ群2類1	10YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母・纏	横位・斜位の透板		
368 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	縱位・斜位の透板		
369 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR6/9褐色	長石・雲母・黑色粒子	斜位透板		
370 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR4/4褐色	長石・黑色粒子	縱位透板		
371 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母・纏	斜位透板		
372 50	KU	Ⅱ群2類1	10YR4/2灰黃褐	長石・雲母・纏	斜位透板		
373 50	ヲ	Ⅱ群2類1	5YR5/6明赤褐	長石	斜位透板		
374 50	KU	Ⅱ群2類1	5YR4/3にぶい赤褐	長石・石英・金雲母	波状口縫、横位・斜位の沈織、口縫部にボタン状貼付文2個		
375 52	KU	Ⅱ群2類1	10YR4/3にぶい黃褐	長石・雲母	波状口縫、地文に斜位透板、縱位神社貼付文に斜目		
376 51	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR4/4褐色	長石・雲母	口縫部に連續爪形文、地文に横矢羽根状集合透織、縱位神社貼付文に円形貼付文		
377 52	タロ	Ⅱ群2類1	10YR6/4にぶい黃褐	長石・雲母・砂粒	地文に斜位透織、縱位神社貼付文に斜目		
378 52	KU	Ⅱ群2類1	10YR5/4にぶい黃褐	長石・石英	地文に斜位透織、縱位神社貼付文に斜目		
379 51	KU	Ⅱ群2類1	10YR4/3にぶい黃褐	長石・黒雲母	口縫部に連續爪形文、地文に横矢羽根状集合透織、縱位神社貼付文、円形貼付文		
380 51	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR4/4褐色	長石・雲母	口縫部に連續爪形文、地文に横矢羽根状集合透織、縱位神社貼付文、円形貼付文		
381 52	KU	Ⅱ群2類1	5YR5/6明赤褐	長石・雲母	地文に斜位透織、縱位神社貼付文		
382 52	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・雲母	地文に斜位透織、縱位神社貼付文		
383 52	KU	Ⅱ群2類1	10YR3/2黒褐	長石・石英	地文に斜位透織、縱位神社貼付文に斜目		
384 52	KU	Ⅱ群2類1	10YR4/3にぶい黃褐	長石・雲母	地文に斜位透織、縱位神社貼付文に斜目		
385 52	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/4にぶい黃褐	長石・砂粒	地文に斜位透織、縱位神社貼付文に斜目		
386 50	KU	Ⅱ群2類1	5YR6/4にぶい纏	長石・石英	地文に斜位透織、縱位神社貼付文に斜目		
387 51	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR4/4褐色	長石・黒雲母・金雲母	口縫部に連續爪形文、地文に横矢羽根状集合透織、円形貼付文		
388 51	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR4/3褐色	長石・金雲母	地文に斜位透織、縱位神社貼付文、2個1単位の円形貼付文		
389 51	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR3/3褐色	長石・雲母	地文に斜位透織、縱位神社貼付文、2個1単位の円形貼付文		
390 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR6/4にぶい纏	長石・雲母	波状口縫、地文に横矢羽根状集合透織、円形貼付文		
391 51	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/4にぶい纏	長石・金雲母	縦位の透板区画内に、縱位・斜位・横矢羽根状集合透織、円形貼付文		
392 51	KU	Ⅱ群2類1	5YR5/6明赤褐	長石・金雲母	横矢羽根状集合透織、円形貼付文		
393 51	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR4/3褐色	長石・雲母	横矢羽根状集合透織、2個1単位の円形貼付文		
394 51	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR4/3褐色	長石・雲母	縱位透織、横矢羽根状集合透織で菱形・菱形織の無文部を作る、円形貼付文		
395 50	KU	Ⅱ群2類1	7.5YR5/4にぶい纏	長石・雲母・黑色粒子	斜位・縱位・横矢羽根状の集合透織、2個1単位の円形貼付文		

地図番号	国版番号	通鑑番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
396	52	KU	II群2頸c	7.5YR4/3褐	長石・雲母	横位後縫線上は集合後縫線、縫縫の結合浮縫文、下は縫位・縫矢羽根状・弧状の集合後縫線、2個1単位の円形貼付文	
397	51	KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・雲母・黒色粒子	縫位・縫矢羽根状集合後縫線、円形貼付文	
398		KU	II群2頸c	7.5YR5/4にない褐	長石・雲母・黒色粒子	斜位後縫線、2個1単位の円形貼付文	
399		KU	II群2頸c	10YR5/4にない黄	長石・雲母	斜位後縫線、2個1単位の円形貼付文	
400		KU	II群2頸c	7.5YR4/3褐	長石・雲母・砂粒	横位後縫線、2個1単位の円形貼付文	
401		KU	II群2頸c	7.5YR5/4にない褐	長石・石英・金雲母	横矢羽根状・弧状、2個1単位の円形貼付文	
402		KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・雲母	横位後縫線、円形貼付文	
403		KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・雲母	横位後縫線、2個1単位の円形貼付文	
404	52	KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・金雲母	斜格子状・横位後縫線、円形貼付文	
405		KU	II群2頸c	7.5YR5/4にない褐	長石・雲母	横矢羽根状・弧状・後縫線、円形貼付文	
406	50	KU	II群2頸c	7.5YR5/4にない褐	長石・雲母	大波狀1脚線、左右対称の渦巻状の胎土紐に結合浮縫文、左右対称の渦巻状の胎土紐に結合浮縫文、中心に円形貼付文、横位・縫矢羽根状・弧状の粘土紐に結合浮縫文	
407	51	KU	II群2頸c	10YR4/3にない黄	長石・金雲母・砂粒	大波狀1脚線、右対称の渦巻状の粘土紐に結合浮縫文、円形貼付文、補修孔	
408	51	KU	II群2頸c	7.5YR4/4褐	長石・雲母・黒色粒子	大波狀1脚線、右対称の渦巻状の粘土紐に結合浮縫文、円形貼付文	
409	51	KU	II群2頸c	7.5YR5/4にない褐	長石・石英	大波狀1脚線、右対称の渦巻状の粘土紐に結合浮縫文、円形貼付文	
410		KU	II群2頸c	7.5YR4/4褐	長石・雲母	縫位・縫矢・既付・右対称の渦巻状の胎土紐に結合浮縫文、円形貼付文、側部上部に縫合部	
411	51	KU	II群2頸c	7.5YR4/3褐	長石・石英・雲母	大波狀1脚線、口縫に沿って結合浮縫文、地文に斜位後縫線、渦巻形、左右対称の渦巻状の粘土紐に結合浮縫文、2個1単位の円形貼付文	
412		KU	II群2頸c	7.5YR4/3褐	長石・雲母・雲母	大波狀1脚線、渦巻形・左右対称の渦巻状の粘土紐に結合浮縫文	
413		KU	II群2頸c	7.5YR5/4にない赤褐	長石・雲母	縫位・左対称の渦巻状の集合後縫線、円形貼付文	
414		KU	II群2頸c	7.5YR4/4褐	長石・金雲母・砂粒	波狀口縫、口縫部に結合浮縫文、地文に斜位後縫線、波狀部の棒状貼付文に結合浮縫文	
415	52	KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・金雲母	前歯状・弧状の結合浮縫線で菱形・三日月形の無文部を作る、2個1単位の円形貼付文	
416	52	KU	II群2頸c	SYR4/3にない赤褐色	長石・金雲母	脚上部に横位後縫線、斷面後縫・弧状の結合浮縫文で菱形・三日月形の無文部を作ると、2個1単位の円形貼付文	
417	52	KU	II群2頸c	7.5YR4/3褐	長石・金雲母	地文に後縫線、右対称の渦巻状の結合浮縫文、縫位・縫矢羽根状・後縫線、2個1単位の円形貼付文	
418	52	KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・金雲母	縫面形・弧状の結合浮縫文	
419	52	KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・雲母	縫位・側位・弧状の結合浮縫文	
420	52	KU	II群2頸c	7.5YR5/4にない褐	長石・石英・金雲母	地文に縫位集合沈縫、V字形の入れ子状・複雑形の胎土紐に結合浮縫文、円形貼付文	
421	51	KU	II群2頸c	7.5YR4/4褐	長石・石英・金雲母	地文に縫位集合沈縫、横位・渦巻形・左右対称の渦巻状の粘土紐に結合浮縫文、波狀2脚1単位の円形貼付文	
422	52	KU	II群2頸c	7.5YR5/4にない褐	長石・雲母	脚上部に縫合部の集合後縫線、縫位の胎土紐に結合浮縫文、同上2脚1単位の円形貼付文	
423	51	KU	II群2頸c	7.5YR4/3褐	長石・金雲母	折り返し・大波狀1脚線、口縫部に角状の突起、口縫に沿った結合浮縫文、左右対称の渦巻状の結合浮縫文	
424	51	KU	II群2頸c	7.5YR4/3褐	長石・金雲母	折り返し・大波狀1脚線、口縫部に角状の突起、口縫に沿った結合浮縫文、左右対称の渦巻状の結合浮縫文	
425		KU	II群2頸c	7.5YR4/3褐	長石・金雲母	折り返し・大波狀1脚線、口縫に沿った結合浮縫文、弧状の結合浮縫文	
426	50	KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・雲母・黒色粒子	地文に縫合後縫・脚上部右対称の渦巻状・弧状・断面後縫の胎土紐に結合浮縫文、V字形の入れ子状の複雑形の地文を作ると、既述の結合浮縫文、脚下部脚位の集合後縫線の弧状内凹・複雑形の集合後縫、2脚1単位の円形貼付文	
427		KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・金雲母	無文の既述、口縫部脚位直立	
428		KU	II群2頸c	SYR5/6明赤褐	長石・雲母・黒色粒子	無文の既述、脚部に段段、脚部と脚部の境をくの字状に彫曲	
429		KU	II群2頸c	SYR5/6明赤褐	長石・雲母	無文の既述、縫修孔	
430		KU	II群2頸c	SYR5/4にない赤褐	長石・黑色粒子・金雲母	口縫部斜1脚線、脚部に円孔	
431	52	KU	II群2頸d	7.5YR6/4にない橙	長石・石英・黒色粒子	口縫部斜1脚線の無文部、脚上部脚位の後縫区画3段、1-3段目は斜位の密接後縫状平行沈縫、2段目は地文にRL多条縫文、縫位の密接後縫状平行沈縫、脚上部地文にRL縫文、Y字状・U字状の弧状沈縫	
432	52	クロ	II群2頸d	10YR6/3にない黄	長石・石英	口縫部斜1脚線の無文部、縫位貼付文、縫位改歴	
433	52	KU	II群2頸d	7.5YR5/4にない赤褐	長石・石英	口縫部斜1脚線の無文部、縫位・横位の後縫区画内に横矢羽根状後縫	
434	52	KU	II群2頸d	7.5YR4/4褐	長石・金雲母	口縫部斜1脚線の無文部、縫位の後縫区画内に斜位・縫合後縫状沈縫	
435		KU	II群2頸d	7.5YR5/6明赤	長石・石英・金雲母	口縫部斜1脚線の無文部、RL縫文	
436	52	KU	II群2頸d	SYR5/6明赤褐	長石・石英・黒雲母	口縫部斜1脚線の無文部、横円形の後縫区画内に格子状沈縫	
437	52	KU	II群2頸d	10YR6/4にない黄	長石・金雲母	口縫部斜1脚線の無文部に胎土紐の突起、RL縫文	
438	52	KU	II群2頸d	10YR6/2灰黃	長石・黒雲母	黃状口縫、口縫部胎土紐と断面三角形の筒状に貼り付け、口縫部斜位の密接後縫状平行沈縫、口縫部直下は三角印脚文と胎土紐で縫合する、縫位の後縫区画内に上段は斜位の密接後縫状平行沈縫、下段はRL縫文に断面の角縫状沈縫	
439	52	KU	II群2頸d	7.5YR6/4にない橙	長石・石英・金雲母	断面口縫、口縫部胎土紐と断面三角形の筒状に貼り付け、口縫部斜位の密接後縫状平行沈縫、外面部斜位に胎土紐を貼り付け	
440	52	KU	II群2頸d	7.5YR5/4にない褐	長石・石英	斜位後縫、口縫部胎土紐と断面三角形の筒状に貼り付け、外面部斜位に胎土紐を貼り付け	
441	52	KU	II群2頸d	7.5YR5/6明褐	長石・石英	断面口縫、口縫部胎土紐と断面三角形の筒状に貼り付け、外面部斜位に密接後縫状平行沈縫	
442	52	KU	II群2頸d	7.5YR5/4にない褐	長石・金雲母	断面口縫、口縫部胎土紐と断面三角形の筒状に貼り付け、外面部斜位に縫位の密接後縫状平行沈縫	

辨別番号	固版番号	通欄番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
443		KU	Ⅱ群2類d	7.0YR6/4に、い黄	長石	口部LR織文、外面LR織文	
444	52	KU	Ⅱ群2類d	7.0YR6/4に、い黄	長石	口部RL織文、外面RL織文、補修孔	
445		KU	Ⅱ群2類d	10YR7/4に、い黄	長石	LR織文	
446	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR6/6橙	長石	口部LR織文、外面LR織文	
447	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR6/6橙	長石・石英	口部白色の痕跡、外面LR織文	
448	52	クロ	Ⅱ群2類d	5YR5/4に、い赤褐	長石	RL織文、縦位沈線	
449		KU	Ⅱ群2類d	7.5YR5/4に、い褐	長石・雪母・小礫	横位の繩状沈線の区画3段、上段は三角形の区画内に縦位と横位の密接繩状平行沈線、中段は縦位の密接繩状平行沈線、下段はRL織文	
450	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR5/4に、い褐	長石・石英・黒雲母	横位の繩状沈线平行区画内に上段は斜位、下段は縦位の密接繩状平行沈線	
451	52	KU	Ⅱ群2類d	10YR6/4に、い黄	長石・金雲母	横位の繩状沈线平行区画内に上段は斜位の密接繩状平行沈線、下段はLR織文	
452	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR5/4に、い褐	長石・黒雲母	口部鉢上部の無文部、縦位の突起、地文にRL織文、断面衝・横位の密接繩状平行沈線、菱形文	
453	52	クロ	Ⅱ群2類d	7.5YR4/3褐	長石・黒雲母	凸唇状・方形の繩状沈線区画内に密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、無文部は印刷	
454	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR5/4に、い褐	長石	繩状沈线区画内に密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、無文部は印刷	
455	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR5/4に、い褐	長石・石英・黒雲母	繩状沈线区画内に密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、無文部は印刷	
456	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR5/4に、い褐	長石・金雲母	三角印刷文、上段は密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、下段は同一技術の格子文	
457	52	KU	Ⅱ群2類d	5YR4/6赤褐	長石・石英・黒雲母	繩状沈线区画内に密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、無文部は印刷	
458	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR4/3褐	長石・石英	繩状沈线区画内に密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、無文部は印刷	
459	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR5/4に、い褐	長石・石英	密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、無文部は印刷	
460		KU	Ⅱ群2類d	5YR5/6明赤褐	長石・黒雲母	横位の密接繩状平行沈線、縦位の横位沈線	
461	52	KU	Ⅱ群2類d	5YR5/6明赤褐	長石・黒雲母	横位の密接繩状平行沈線、縦位の密接繩状平行沈線	
462	52	KU	Ⅱ群2類d	5YR5/6橙	長石	横位の密接繩状平行沈線、縦位と横位断面衝の密接沈线	
463	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR6/6橙	長石・石英・金雲母・黒雲母	地文にRL多条織文、密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、V字状の密接沈线、円形貼付文	
464	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR6/6橙	長石・石英・黒雲母	RL織文、密接繩状平行沈線	
465	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR6/6に、い褐	長石	大型の點位、周縁部に密接繩状平行沈線	
466	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR5/4に、い褐	長石・金雲母	地文にRL織文、密接繩状平行沈線	
467	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR5/6明褐	長石・石英	繩状沈线区画内に密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、無文部は印刷	
468	52	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR4/3褐	長石・黒雲母	凸唇状の繩状沈线区画内に密接繩状平行沈線と沈線の格子目文、無文部は印刷	
469	52	KU	Ⅱ群2類d	5YR4/4に、い赤褐	長石・金雲母	RL織文、縦位の粘土紐に結節浮織文	
470	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR5/4に、い黄	長石・雪母	脚部梢円形、脚上部側の粘土紐本貼付、一部模様紋に交差、粘土紐と脚部全体にRL織文、471と同一個体	
471		KU	Ⅱ群2類d	10YR5/3に、い黄	長石・雪母・礫	上げ口外に張り出し肩口、底面に沈線、470と同一個体	
472	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR5/3に、い黄	長石・雪母	梢円形の底部、外に張り出し貝皿状の压痕、脚部弧状の粘土紐にLR織文	
473	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR6/4に、い黄	長石・雪母・黒色粒子	LR織文、内面に指痕	
474	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR5/4に、い黄褐色	長石・砂粒	波状口縁、口部に二字状剥刻、外内面RL多条織文、弧状の粘土紐にV字状剥刻文	
475	53	KU	Ⅱ群2類d	2.5Y7/2灰黃	長石・雪母・砂粒	波状口縁、口部に二字状剥刻、外内面LR多条織文、横位の粘土紐にV字状剥刻文	
476	53	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR6/4に、い黄	長石・雪母・砂粒	口部下方二字状剥刻、外内面RL多条織文、口縁に沿った粘土紐に浮織文	
477	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR6/4に、い黄	長石・砂粒	波状口縁、口部に二字状剥刻、外内面RL多条織文、底辺の粘土紐にV字状剥刻文	
478	53	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR7/4に、い褐	長石・砂粒	波状口縁、口部に二字状剥刻、外内面RL多条織文、横位・弧状の粘土紐に浮織文	
479		KU	Ⅱ群2類d	10YR6/3に、い黄	長石・砂粒	波状口縁、口部に二字状剥刻、外内面RL織文、弧状の粘土紐に浮織文	
480	53	KU	Ⅱ群2類d	2.5Y6/2灰黃	長石・雪母・砂粒	波状口縫、口部に二字状剥刻、外内面RL多条織文、口縁に沿った粘土紐に浮織文	
481	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR7/3に、い黄	長石・雪母・砂粒	波状口縫、口部に二字状剥刻、外内面RL多条織文、口縁に沿った粘土紐に浮織文	
482	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR6/4に、い黄	長石・砂粒	波状口縫、口部に二字状剥刻、外内面RL多条織文、弧状の粘土紐に浮織文	
483	53	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR6/4に、い褐	長石・砂粒	0段多条のRL織文、弧状の粘土紐に浮織文	
484	53	KU	Ⅱ群2類d	2.5Y6/3に、い黄	長石・雪母・砂粒	LR多条織文、弧状の粘土紐に浮織文	
485	53	KU	Ⅱ群2類d	7.5YR7/4に、い褐	長石・砂粒	RL多条織文、弧状の粘土紐に浮織文	
486	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR7/4に、い黄	長石・砂粒	RL多条織文、弧状の粘土紐に浮織文	
487	—	Ⅱ群2類d	7.5YR5/4に、い褐	長石・砂粒	RL多条織文、弧状の粘土紐に浮織文		
488		KU	Ⅱ群2類d	10YR7/3に、い黄	長石・雪母・砂粒	RL多条織文、縦位の粘土紐に压痕、底部に花弁状の凹み	
489		KU	Ⅱ群2類d	10YR6/4に、い黄	長石	LR織文	
490	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR7/3に、い黄	長石・砂粒	波状口縫、口部に削刻、横位・弧状の粘土紐に削痕	
491	53	KU	Ⅱ群2類d	10YR5/4に、い黄褐色	長石	LR織文、横位・弧状の粘土紐に結節浮織文	
492	53	クロ	Ⅱ群2類d	10YR6/3に、い黄	長石・石英・金雲母	波状口縫、外内面RL織文、外面部横位の粘土紐に結節浮織文、底部への字状の粘土紐に結節浮織文、内面部縫部に沿った粘土紐に浮織文	
493	クロ	Ⅱ群2類d	10YR6/4に、い黄	長石・砂粒	LR織文		

地図番号	図版番号	遺構番号	位置	分類	色調	胎 土	文様・調整等
494	53	KU	巨群2類 i	10YR4/6に、い、黄橙	長石・石英・砂粒	LR純文	
495	53	KU	巨群2類 i	10YR6/4に、い、黄橙	長石・石英	RL純文、円形・弧状の粘土縫に結節浮線文	
496		KU	巨群2類 i	10YR6/4に、い、黄橙	長石・砂粒	RL純文、弧状の粘土縫に結節浮線文	
497	53	KU	巨群2類 i	7.5YR6.6燈	長石	LR純文、縱波状の粘土縫に結節浮線文	
498		KU	巨群2類 i	10YR6/4に、い、黄橙	長石	LR純文、T字状の粘土縫に結節浮線文	
499	53	KU	巨群2類 i	7.5YR6.6燈	長石	LR純文、T字状・波状の粘土縫に結節浮線文	
500	53	KU	巨群2類 i	10YR6/4に、い、黄橙	長石・石英	LR純文、斜位の粘土縫に結節浮線文	
501		KU	巨群2類 i	7.5YR6.6燈	長石	LR純文、弧状の粘土縫に結節浮線文	
502		KU	巨群2類 i	5YR5.6明赤鶏	長石・砂粒	RL純文、弧状の粘土縫に結節浮線文	
503		KU	巨群2類 i	7.5YR6.6燈	長石	LR純文、縱波状の粘土縫に結節浮線文	
504		KU	巨群2類 i	7.5YR6/4に、い、黒	長石	RL純文、弧状の粘土縫に結節浮線文	
505		KU	巨群2類 i	7.5YR5.6明鶏	長石・石質	LR純文、縱波状の粘土縫に結節浮線文	
506		KU	巨群2類 i	10YR5/3に、い、黄橙	長石・黑雲母	RL純文、縱波状の粘土縫に結節浮線文	
507	53	KU	巨群2類 i	10YR5/3に、い、黄橙	長石・砂粒	LR純文、横位の粘土縫の下部に連續爪形文	
508		KU	巨群2類 i	7.5YR5.6明鶏	長石・砂粒	RL多条純文、横位の粘土縫の下半部に連續爪形文	
509		KU	巨群2類 i	7.5YR5/4に、い、黒	長石・矽穀	RL多条純文、横位の粘土縫の下半部に連續爪形文	
510		—	巨群2類 i	10YR6/4に、い、黄橙	長石	RL多条純文、横位の粘土縫の下半部に連續爪形文	
511		KU	巨群2類 i	10YR6/3に、い、黄橙	長石・砂粒	横位の粘土縫を含めてLR純文	
512		KU	巨群2類 i	10YR6/4に、い、黄橙	長石・石英・砂粒	RL純文、T字状の粘土縫、横位の粘土縫の片側に連續鉄突文、縱位の粘土縫に斜位	
513	53	KU	巨群2類 i	7.5YR4/6燈	長石・砂粒	RL純文、横位と縱位の粘土縫	
514		KU	巨群2類 i	5YR5.6明赤鶏	長石・金雲母	RL純文、縱位の粘土縫に結節浮線文	
515		KU	巨群2類 i	7.5YR5.6明鶏	長石・金雲母	RL純文、縱位の粘土縫に結節浮線文	
516		KU	巨群2類 j	10YR4/2灰鶏	長石・砂粒	RL羽状純文	
517		KU	巨群2類 j	2.5Y3/1黒鶏	長石・金雲母	波状口縫、10厘米の幅でLR純文、外側RL純文、横位の粘土縫に斜界	
518		KU	巨群2類 j	10YR4/3に、い、黄橙	長石・金雲母	口縫部粘土縫の無口縫、外側RL純文、横位の粘土縫に斜界	
519		KU	巨群2類 j	2.5Y3/2黒鶏	長石・金雲母	RL純文、横位の粘土縫に斜界	
520		KU	巨群2類 j	10YR6/4に、い、黄橙	長石・金雲母	RL純文、横位の粘土縫に斜界	
521		KU	巨群2類 j	7.5YR5.6明鶏	長石・金雲母	RL純文、横位の粘土縫に斜界	
522		KU	巨群2類 j	10YR3/2黒鶏	長石・金雲母	RL純文、横位の粘土縫に斜界	
523		KU	巨群2類 j	10YR5/6明鶏	長石・金雲母	RL純文、横位の粘土縫に斜界	
524		KU	巨群2類 j	2.5Y3/2黒鶏	長石・金雲母・釋	RL純文、横位の粘土縫に斜界	
525		KU	巨群2類 j	7.5YR5.6明鶏	長石・金雲母	RL純文、横位の粘土縫に斜界	
526		KU	巨群2類 j	10YR5/3に、い、黄橙	長石・金雲母	口縫部粘土縫の無口縫、横位沈縫	
527		クロ	田群1類 a	10YR4/3に、い、黄橙	長石・金雲母・黑色粒子	口部羽状目状の代紋、外側面横位の沈縫区画内に細斜線を垂下させた二角印刷文	
528	54	KU	田群1類 a	7.5YR5/3に、い、黒	長石・金雲母	角印刷文、橫位沈縫2個	
529	54	クロ	田群1類 a	7.5YR5/4に、い、黒	長石・金雲母	横位沈縫、横位沈縫爪形文、外側面横位の沈縫区画内に細斜線を垂下させた三角印刷文	
530	54	クロ	田群1類 a	5YR5/6明赤鶏	長石・金雲母	横位沈縫、橫位沈縫爪形文、形文は字状の厚口代紋、横位の粘土縫	
531	54	KU	田群1類 a	5YR5/6明赤鶏	長石・金雲母	波状口縫、口縫部内側、口部厚、口部の頭部した位置に横位の粘土縫爪形文、間に連續状況縫、上段の口部内側に密接連續状況縫平行代紋と後縫の斜格子文、下段は地文でRL純文、斜位の密接連續状況縫平行代紋	
532		KU	田群1類 a	5YR5/6明赤鶏	長石・金雲母	円孔を穿った把手、連續爪形文2段	
533	54	KU	田群1類 a	5YR5/6明赤鶏	長石・金雲母	波状口縫、口部厚、連續爪形文、外側面横位の沈縫区画内に細斜線、側部のくびれの位置に粘土板	
534	54	KU	田群1類 a	2.5YR3/4暗赤鶏	長石	波状口縫、くぼ字状に屈曲、口縫に沿った沈縫と押引代紋、弧状の沈縫、横位の沈縫	
535	54	KU	田群1類 a	7.5YR5/4に、い、黒	長石・金雲母	口縫部沈縫弦、脚部横位の蒲状沈縫区画2段、上段は斜位の密接連續状況縫平行代紋	
536	54	KU	田群1類 a	7.5YR5/4に、い、黒	長石・金雲母	口縫部2段多条のLR純文、脚部横位の蒲状沈縫状況、斜位の密接連續状況平行代紋	
537	54	KU	田群1類 a	7.5YR4/2灰鶏	長石・金雲母・黑色粒子	波状口縫、LR純文、横位の沈縫区画内の織文を握り消す	
538	54	KU	田群1類 a	10YR5/3に、い、黄橙	長石・黑色粒子	RL純文、横位の沈縫区画内の織文を握り消す	
539	54	KU	田群1類 a	5YR5/4に、い、赤鶏	長石・金雲母	波状口縫、口部直下はLR純文、横位把手から下はRL純文、横位の沈縫区画内の織文を握り消す	
540	54	KU	田群1類 a	7.5YR5/4に、い、黒	長石・金雲母	口部厚に斜目、横位・横位沈縫	
541	54	クロ	田群1類 a	2.5YR4/3に、い、赤鶏	長石・金雲母	RL純文、太い横位の沈縫区画内の粘土縫に斜目	
542	54	KU	田群1類 a	5YR5/6燈	長石・金雲母	地文にRL純文、横位・円形沈縫、斜交	
543	54	KU	田群1類 a	2.5YR4/3に、い、赤鶏	長石・金雲母	口部厚に斜目、LR純文、横位の沈縫区画内に圓状沈縫、斜角印刷文	
544		KU	田群1類 a	5YR5/4に、い、赤鶏	長石	口部厚に斜目、横位把手から下はRL純文、横位・横位・横位沈縫、相互通刺突	
545	54	KU	田群1類 a	5YR5/6明赤鶏	長石・金雲母	口部厚下斜刺突の代板文、地文にLR純文、横位・横位・横位沈縫、相互通刺突	
546	54	KU	田群1類 a	2.5YR4/4に、い、赤鶏	長石・金雲母	地文にRL純文、横位・円形沈縫	
547	54	KU	田群1類 a	5YR5/4に、い、赤鶏	長石・金雲母	横位押引沈縫、相互刺突	
548	54	KU	田群1類 a	5YR4/4に、い、赤鶏	長石・石英・金雲母	横位沈縫に三角形の字の相互刺突、横位の結節浮線文	
549	54	KU	田群1類 a	5YR4/4に、い、赤鶏	長石・金雲母・黑色粒子	地文にLR純文、横位・斜角・圓状沈縫、三角角印刷文	
550	54	KU	田群1類 a	5YR5/4に、い、赤鶏	長石・金雲母	地文にRL純文、横位・円形沈縫	
551	54	KU	田群1類 a	7.5YR5/4に、い、黒	長石・金雲母	横位押引沈縫、地文に連續爪形文3段、三角形の刺突	
552	54	KU	田群1類 a	5YR4/6赤鶏	長石・石英・金雲母	口部厚沈縫に斜刺突、横位の連續斜縫	
553	54	KU	田群1類 a	5YR5/6明赤鶏	長石・金雲母	脚上部横位の粘土縫に斜目、横位の吹き出しに相互刺突、横位の沈縫区画内に斜格子状沈縫、相互刺突	

辨認番号	図版番号	通鑑番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
554	54	KU	田群1頸a	5YR6/6明赤陶	長石・金雲母	地文に結節繩文を縦位施文、横位・アーチ形の連鉢状弦線	
555		KU	田群1頸a	5YR4/3にない赤陶	長石・金雲母	地文にRL繩文、山形沈線	
556		KU	田群1頸a	5YR4/4にない赤陶	長石・金雲母	横位の幅広の粘土紐を含めて地文にRL多条繩文、横位・弧状の沈線	
557		KU	田群1頸a	10YR6/4にない黄橙	長石・金雲母	三叉状の粘土紐を含めて地文にRL多条繩文、横位・弧状の沈線	
558		KU	田群1頸a	5YRにない赤陶	長石・金雲母	縦位の粘土紐を含めてRL結節繩文を縦位施文	
559	54	KU	田群1頸a	7.5YR4/4赤	長石・金雲母	横位の粘土紐を含めて地文にLR繩文、横位の連鉢状文、横位沈線	
560		KU	田群1頸a	7.5YR5/4にない赤	長石・金雲母	地文にRL繩文、弧状沈線	
561		KU	田群1頸a	7.5YR5/4にない黒	長石・黑色粒子	横位・弧状の沈線の区画内にLR繩文	
562		KU	田群1頸a	5YR4/4にない赤陶	長石・金雲母	地文にLR繩文、弧状沈線	
563	54	KU	田群1頸a	5YR6/6明赤陶	長石・金雲母	横位の粘土紐の上段に弧状の薄輪状弦線区画内に密接薄輪状平行沈線と沈線の格子目文、下段は密接薄輪状平行沈線と沈線の格子目文、無文部に印押	
564	54	KU	田群1頸a	5YR5/6明赤陶	長石・金雲母	横位の粘土紐の上段は弧状の薄輪状弦線区画内に密接薄輪状平行沈線と沈線の格子目文、下段は密接薄輪状平行沈線と沈線の格子目文、無文部に印押	
565	54	KU	田群1頸a	7.5YR5/6明陶	長石・金雲母	地文に連LR結節繩文を縦位施文、横位の粘土紐を指でつまむ	
566		KU	田群1頸a	5YR4/4にない赤陶	長石・金雲母	地文には連LR結節繩文を縦位施文、横位の粘土紐を指でつまむ	
567		クロ	田群1頸a	5YR4/4にない赤陶	長石・金雲母	地文には連LR結節繩文を縦位施文、横位の粘土紐を指でつまむ	
568		KU	田群1頸a	7.5YR6/6黒	長石・金雲母	RL・繩文、横位沈線	
569		KU	田群1頸a	10YR6/4にない黄橙	長石・金雲母	縦位・弧状	
570		KU	田群1頸a	10YR6/4にない黄橙	長石・金雲母	RLのQ形多条繩文、縦位沈線	
571		KU	田群1頸a	7.5YR5/4にない赤	長石・金雲母・黒色粒子	縦位の粘土紐、横位の粗い調整痕	
572		KU	田群1頸a	7.5YR5/6黒陶	長石・金雲母	RL・多条繩文、縦位網面状沈線	
573		KU	田群1頸a	7.5YR5/6明陶	長石・金雲母・黒色粒子	L繩文	
574		KU	田群1頸a	7.5YR5/4にない赤	長石・金雲母	縦位の調整痕	
575	—	田群1頸c	7.5YR5/4にない赤	長石・雲母・纏	波状口縫、口部に沿った粘土紐に連続爪形文、外面部に粘土紐に沿った連続爪形文		
576	55	KU	田群1頸c	7.5YR5/3にない赤	長石・雲母・纏	波状口縫、口部に沿った粘土紐に連続爪形文、外面部に粘土紐に沿った連続爪形文	
577	55	KU	田群1頸c	10YR7/4にない黄橙	長石・雲母	口脣部に刻目、外面部に段多条RL繩文、連続爪形文	
578		KU	田群1頸c	7.5YR7/4にない纏	長石・雲母	口脣部に刻目、外面部の段多条RL繩文、連続爪形文	
579	55	KU	田群1頸c	7.5YR4/3纏	長石・雲母	波状口縫、横の断面に三角形の粘土紐を食入して地文に段多条RL繩文、口縫に沿って円形の豊状工具の縦位の連続刻文、580と同一個体	
580	55	KU	田群1頸c	10YR6/3にない黄橙	長石・雲母・纏	579と同一個体	
581		KU	田群1頸c	7.5YR5/4にない赤	長石・雲母	波状口縫、横位沈線、円形竹管状工具の横位の連続刻文	
582	55	KU	田群1頸c	10YR6/4にない黄橙	長石・雲母	地文に連RL多条繩文、T字状の粘土紐に二枚貝具の痕痕	
583		KU	田群1頸c	10YR5/3黒黄	長石・雲母	RL・繩文、底部に花状孔の凹み	
584		KU	田群1頸c	10YR5/3にない黒黄	長石・雲母	RL・繩文、底部に花状孔の凹み	
585	55	KU	田群1頸d	5YR6/6纏	長石・金雲母	波状口縫、口部に沿った粘土紐に連続爪形文、三角形状の連続爪形文を付けた粘土紐の小区画を付ける。中にX形沈線、小X形外に三角印記	
586	55	KU	田群1頸d	7.5YR6/6纏	長石・纏	波状口縫、口部に沿った粘土紐に連続爪形文	
587		KU	田群1頸d	7.5YR6/6纏	長石・纏	口縫に沿った粘土紐に連続爪形文2段	
588	55	KU	田群1頸d	5YR5/4にない赤陶	長石・金雲母	波状口縫、口部に沿った粘土紐に連続爪形文3段、3段目は部分的	
589	55	KU	田群1頸d	10YR5/3にない黒	長石・纏	地文にLR・繩文、波状弦線区画内に粗面印記	
590	55	KU	田群1頸d	7.5YR5/3にない赤	長石・黑色粒子・纏	縦位の粘土紐に連続爪形文、縦位・横位の薄輪状弦線区画内に円形の連続刻文	
591	55	KU	田群1頸d	2.5YR6/3にない黒	長石・黑色粒子・纏	縦位の粘土紐に連続爪形文、縦位・横位の薄輪状弦線区画内に円形の連続刻文	
592	55	—	田群1頸d	2.5YR6/3にない黒	長石・纏	地文にLR・繩文、横位の薄輪状弦線、横位の粘土紐に連続爪形文	
593	55	—	田群1頸d	2.5YR5/3黒黄	長石・纏	縦位の粘土紐に連続爪形文	
594	55	KU	田群1頸d	2.5YR7/3黒黄	長石・纏	縦位の粘土紐に連続爪形文	
595	55	KU	田群1頸d	7.5YR6/6纏	長石・金雲母・纏	地文にRL・繩文、弧状の粘土紐・粘土紐に沿った薄輪状弦線	
596	55	KU	田群2頸a	5YR6/4にない黒	長石・雲母	縦位角押文2段、縱位角押文	
597	55	KU	田群2頸a	5YR4/3にない赤陶	長石・雲母	縦位の粘土紐・粘土紐の間に角押文、上下に小波状角押文	
598		KU	田群2頸a	5YR5/4にない赤陶	長石・雲母	縦位の粘土紐・粘土紐の間に角押文、縱衛伏の角押文	
599	55	—	田群2頸a	5YR5/6明赤陶	長石・黒雲母・纏	縦位・縦位の粘土紐の区画内に三角押文	
600	55	KU	田群2頸a	5YR5/4にない赤陶	長石・雲母	横円形の粘土紐の区画内に角押文・小波状角押文	
601		KU	田群2頸a	5YR5/4にない赤陶	長石・黒雲母	縦位の粘土紐の間に三角押文	
602		KU	田群2頸a	5YR5/4にない赤陶	長石・雲母	横円形の粘土紐の区画内に三角押文	
603	55	KU	田群2頸a	5YR5/4にない黒	長石・雲母	横円形の粘土紐の区画内に三角押文	
604	55	KU	田群2頸a	5YR5/4にない黒	長石・雲母	弧状の粘土紐の間に角押文	
605	55	KU	田群2頸a	2.5YR5/4にない黒	長石・金雲母	縦位・Y字状・弧状の粘土紐	
606	55	—	田群2頸a	5YR4/4にない赤陶	長石・雲母	縦位の粘土紐の間に角押文	
607	55	KU	田群2頸a	2.5YR3/3黒	長石・金雲母	縦位・弧状の粘土紐と沈線の区画内に刺突文	
608	55	KU	田群2頸a	10YR7/4にない黄橙	長石・黑色粒子	陳帶と沈線の区画内に刺突文	
609	55	KU	田群2頸a	10YR6/3にない黄橙	長石・金雲母	弧状の粘土紐と沈線の区画内に刺突文	
610	55	KU	田群2頸a	2.5YR6/3にない黒	長石	横円形の粘土紐と沈線の区画内に刺突文	
611	55	KU	田群2頸a	2.5YR6/3にない黒	長石	陳帶と沈線の区画内に刺突文	
612	55	クロ	田群2頸a	10YR5/3にない黒	長石・金雲母	縦位の粘土紐の区画内に連続刺突文	
613	55	KU	田群3頸a	5YR5/6明赤陶	長石・黑色粒子	波状口縫、渦文・扇文・扇円形の陳帶と沈線の区画内に縦位沈線、縦位陳帶と沈線の方型・円形などの区画内に斜位沈線	
614	55	KU	田群3頸a	5YR5/6明赤陶	長石・纏	横円形の陈帶と沈線の区画内に円形刺突文、部隊陳帶と沈線の方型・円形などの区画内に斜位沈線	

辨認番号	国版番号	遺構番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等
615	55	KU	Ⅲ群3頸 a	7.5YR5/4にい赤褐	長石・黒	波状口縁、口脚部に沈線、済用文・横円形の降帯と沈線の区画内に継位沈線	
616	55	KU	Ⅲ群3頸 a	10YR6/4にい黄褐	長石・黒・白色粒子	波状口縁、口脚部済用文・方形の降帯と沈線の区画内に継位沈線、削部	
617	55	KU	Ⅲ群3頸 a	10YR5/4にい黄褐	長石・黒	波状口縁、口脚部弧状の降帯と沈線の区画内に継位沈線、削部斜尻縁、内面に降帯	
618	55	KU	Ⅲ群3頸 a	10YR6/4にい黄褐	長石	横位沈線、梢円形の降帯と沈線の区画内に継位沈線	
619	55	KU	Ⅲ群3頸 a	10YR6/4にい黄褐	長石	横位沈線、梢円形の降帯と沈線の区画内に斜刺	
620	55	KU	Ⅲ群3頸 a	10YR7/6明黄褐	長石・黒色粒子	弧状の降帯、斜位・波状状の代用	
621	55	KU	Ⅲ群3頸 a	7.5YR7/6暗	長石・黒	地文に継位沈線、口縁部前面三角形の横位波状降帯、継位波状降帯	
622	55	KU	Ⅲ群3頸 a	2.5Y7/4浅黄	長石・黒	地文に継位沈線、口縁部前面三角形の横位波状降帯	
623	55	KU	Ⅲ群3頸 a	7.5YR7/6暗	長石・黒	地文に継位沈線、口縁部前面三角形の横位波状降帯、開丸方形の幾帯の区画内に横形筋付文、降帯に刻目	
624	56	KU	Ⅲ群3頸 a	2.5Y6/4にい黄	長石・黒・白色粒子	波状口縁、横位波状降帯、斜線、削突	
625	56	KU	Ⅲ群3頸 a	7.5YR5/6暗	長石	X字状の降帯の区画内に継位沈線	
626	56	KU	Ⅲ群3頸 a	10YR7/4にい黄褐	長石	弧状の降帯と沈線の区画内に継位沈線	
627	56	クロ	Ⅲ群3頸 a	7.5YR5/3にい黄	長石・黒色粒子	弧状の降帯と沈線の区画内に継位沈線	
628	56	KU	Ⅲ群3頸 a	5YR5/4にい赤褐	長石	弧状の降帯と沈線の区画内に斜位沈線、区画外には斜位・継位波状沈線	
629	56	KU	Ⅲ群3頸 a	5YR5/4にい赤褐	長石	降帯と沈線の区画	
630	56	KU	Ⅲ群3頸 a	2.5Y6/4にい黄	長石	降帯と沈線の区画	
631	56	KU	Ⅲ群3頸 a	7.5YR5/1赤褐	長石	降帯と沈線の区画内に斜位沈線	
632	56	KU	Ⅲ群3頸 a	5YR5/4にい赤褐	長石・黒	降帯と沈線の済用文	
633	56	KU	Ⅲ群3頸 a	7.5YR5/3にい黄	長石・黒	地文に継位沈線、継位波状沈線	
634	56	KU	Ⅲ群3頸 a	10YR6/4にい黄褐	長石・黒	継位沈線	
635	56	KU	Ⅲ群3頸 a	10YR5/4にい黄褐	長石・金雲母	手土器の把手、上部に済用沈線、柄部に沈線	
636	56	KU	Ⅲ群3頸 c	2.5Y6/4にい黄	長石・砂粒	口縁部に斜位沈線、表面全体への字状沈線、瓶底から継位波状に変化する沈線	
637	56	—	Ⅲ群3頸 d	7.5YR6/3にい黄	長石・黒色粒子	横位沈線、梢円形の沈線の区画内に継位沈線	
638	56	—	Ⅲ群3頸 d	7.5YR6/6暗	長石	横位沈線、梢円形の沈線の区画内に継位沈線	
639	56	クロ	Ⅲ群3頸 d	7.5YR5/6明暗	長石	継位の沈線の区画内に継位沈線	
640	56	KU	Ⅲ群3頸 d	10YR5/4にい黄褐	長石	ハの字状沈線	
641	56	クロ	Ⅲ群3頸 d	7.5YR5/4にい黄	長石・黒	降帯の区画内に斜位沈線	
642	56	KU	Ⅲ群3頸 d	10YR5/4にい黄褐	長石・黑色粒子	済用沈线	
643	56	—	Ⅲ群3頸 d	5YR6/6暗	長石・黑色粒子	済用沈线	
644	56	KU	Ⅲ群3頸 d	10YR7/4にい黄褐	長石	降帯の区画内に斜位沈線	
645	56	クロ	Ⅲ群3頸 d	2.5Y5/3浅黄	長石	地文に継位沈線、継位波状沈線	
646	56	KU	Ⅲ群3頸 e	7.5YR5/3にい黄	長石・黒	横位沈線、弧状・済用文・横円形の降帯と沈線の区画内に斜刺	
647	56	—	Ⅲ群3頸 e	7.5YR5/6明赤褐	長石	波状口縁、弧状・済用文の降帯と沈線の区画内にLR織文	
648	56	KU	Ⅲ群3頸 e	7.5YR5/4にい黄	長石・黒	済用文の降帯と沈線の区画内にLR織文	
649	56	—	Ⅲ群3頸 e	5YR4/4にい赤褐	長石	横位文・削突、横位の沈線の区画内にLR織文系	
650	56	—	Ⅲ群3頸 e	5YR4/4にい赤褐	長石	横位文・横円形の沈線の区画内にLR織文系	
651	56	KU	Ⅲ群3頸 e	7.5YR5/6明暗	長石	L燃文、横位沈線	
652	56	KU	Ⅲ群3頸 e	5YR5/4にい赤褐	長石	L燃文、横位沈線	
653	56	KU	Ⅲ群3頸 e	7.5YR4/2赤	長石	弧状の沈線と沈線の区画内に継位沈線、区画外にLR織文	
654	56	KU	Ⅲ群3頸 e	5YR5/6明赤褐	長石	地文にLR織文、横状状の粘土組	
655	56	KU	Ⅲ群3頸 e	5YR5/4にい赤褐	長石	継位の粘土組の区画内にLR織文、弧状沈線	
656	56	KU	Ⅲ群3頸 e	7.5YR5/6明暗	長石	粘土組の区画内にLR織文	
657	56	クロ	Ⅲ群3頸 e	10YR7/4にい黄褐	長石・黒	地文にL燃文系、継位波状沈線	
658	56	クロ	Ⅲ群3頸 e	7.5YR6/6暗	長石・黒	燃りのこったL燃文系、継位波状沈線	
659	56	クロ	Ⅲ群3頸 e	5YR5/4にい黄	長石・黒	横円形の粘土組の区画内に継位沈線	
660	56	—	IV群 a	10YR7/4にい黄褐	長石	沈線区画内にLR織文	
661	56	KU	IV群 b	2.5Y7/3浅黄	長石・黒	波状口縁、口脚部の粘土組の一部を橋状把手状に構む、弧状の連続矧目文、難な櫻吹文の継位波状沈線	
662	56	KU	IV群 b	5YR5/6明赤褐	長石・黑色粒子	地文にL燃文系、横円形の沈線の区画内に文様を振り消す	
663	56	クロ	底部	7.5YR5/4にい黄	長石・黑色粒子	底面網代紙	

第37表 向山遺跡時代土器製品観察表

辨認番号	国版番号	位置	分類	色調	胎土	文様・調整等	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)
664	カラ-4	KU	Ⅲ群2頸 d	5YR4/4にい赤褐	長石	胴部に粘土組で頭の輪郭を付け、その中にハート形に粘土板を貼り、目・口を彫刻。鼻點付	6.2	5.5	2.3
665		KU	Ⅲ群1頸 a	5YR4/6赤褐	石英・長石・雪母	継位沈線	5.3	4.9	1.2
666		クロ	Ⅲ群1頸 a	7.5YR5/6明褐	石英・長石・雪母	横位沈線	3.9	3.4	1.6
667		KU	Ⅲ群1頸 a	5YR7/8橙	石英・雪母	継位沈線	3.0	2.8	1.1
668		—	Ⅲ群1頸 a	7.5YR4/3褐	石英・長石・雪母	継位沈線	3.0	2.8	0.9

第38表 向山遺跡縄文時代石器属性表

辨認番号	図版番号	出土遺構	層位	器種	分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
37	45	SH14	覆土	石鏟	II A 2	黒曜石	2.00	1.80	0.30	0.62	
38	45	SH14	覆土	石鏟	II B 2	黒曜石	1.95	1.90	0.25	0.65	
39	45	SH14	覆土	石鏟	II B 1	黒曜石	1.65	1.30	0.35	0.52	
40	45	SH14	覆土	石匙	横型	ホルンフェルス	7.10	5.80	1.70	79.27	
41	45	SH14	覆土	スクレイパー		ホルンフェルス	9.27	7.22	2.08	137.84	
42	45	SH14	覆土	打製石斧	IV	砂岩	11.00	4.75	1.85	108.40	
43	45	SH14	覆土	打製石斧	II	砂岩	10.80	7.72	2.80	221.80	
44	45	SH14	覆土	磨製石斧		砂岩	14.85	4.77	3.50	384.20	
45		SH14	覆土	石削	I	安山岩	11.50	9.10	4.80	645.00	
46		SH14	覆土	石皿	II	輝石安山岩	36.30	27.00	15.50	24900.00	
53	45	TA3	覆土	打製石斧	V	頁岩	12.95	4.53	2.31	93.00	
54		TA3	覆土	磨石	I	安山岩	13.10	6.70	8.30	1003.70	
55		TA3	覆土	磨石	II	輝石安山岩	9.60	8.40	3.70	408.50	
56		TA3	覆土	石皿	I	輝石安山岩	40.90	32.90	10.50	18800.00	
57		TA3	覆土	石皿	I	輝石安山岩	42.30	29.90	15.50	28000.00	
60		TA4	覆土	磨石	I	安山岩	8.30	7.40	2.30	198.00	
74	45	TA6	覆土	石匙	横型	赤玉石	1.60	1.70	0.50	11.30	
75	45	TA6	覆土	石匙	横型	チャート	3.90	4.60	0.55	5.64	
76		TA6	覆土	磨石	I	安山岩	7.70	7.20	4.10	329.30	
77		SY2		磨石	I	輝石安山岩	11.20	6.80	4.00	353.20	
78		SY2		石皿	I	輝石安山岩	26.30	16.10	5.50	3250.00	
79		SY5		磨石	I	安山岩	8.90	7.10	2.30	190.00	
80		SY5		磨石	V	輝石安山岩	11.40	8.30	5.50	622.40	
81		SY7		磨石	I	輝石安山岩	7.10	5.70	2.70	130.10	
82		SY7		磨石	I	安山岩	9.20	8.10	3.30	325.90	
83		SY6		石皿	II	輝石安山岩	11.00	12.40	5.00	1178.80	
84		SY11		磨石	I	安山岩	13.00	8.90	4.30	740.40	
85		SY11		敲石	V	輝石安山岩	10.00	10.10	7.20	812.00	
86		SY11		石皿	II	輝石デイサイト	13.00	16.10	5.00	1900.00	
87		SY3		磨石	I	安山岩	11.20	10.50	5.90	831.70	
88		SY3		磨敲石	IV	輝石安山岩	11.50	8.60	4.70	603.20	
89		SY10		磨石	I	輝石安山岩	8.70	6.50	3.20	290.10	
90		SY10		石皿	I	安山岩	15.40	11.90	5.40	1210.00	
91		SY8		磨石	I	輝石安山岩	7.90	6.30	2.20	136.60	
92		SY8		磨石	I	輝石安山岩	10.70	10.70	3.50	575.40	
93		SY8		磨敲石	IV	輝石安山岩	7.50	6.80	3.00	189.00	
94		SY8		石皿	I	安山岩	29.50	20.00	10.70	8500.00	
95		SY8		石皿	I	安山岩	18.90	13.80	6.30	2500.00	
96		SY8		石皿	I	輝石安山岩	12.40	22.00	6.00	2190.00	
97		SY8		石皿	I	輝石安山岩	32.30	29.40	12.30	18100.00	
98		SY8		石皿	I	輝石安山岩	23.20	22.50	10.10	8325.00	
99		SY1		磨石	I	輝石安山岩	7.70	6.30	3.00	202.30	
100		SK29	覆土	磨石	I	輝石安山岩	7.90	7.70	2.20	228.80	
111	45	SK32	覆土	石鏟	II A 2	黒曜石	1.60	1.60	0.50	0.84	
123	45	SX3		スクレイパー		頁岩	6.76	6.19	2.40	84.30	
124		SX3		磨石	I	輝石安山岩	7.40	5.20	4.30	200.70	
125		SX3		磨石	I	輝石安山岩	9.30	8.00	5.50	653.60	
126		SX3		石皿	II	輝石安山岩	35.50	42.90	12.40	22800.00	
669	57	KU		有茎尖頭器		ホルンフェルス	3.70	1.42	0.51	2.01	
670	57	KU		石鏟	I	黒曜石	1.52	1.59	0.60	1.00	
671	57	KU		石鏟	I	ホルンフェルス	1.42	0.90	0.30	0.30	
672	57	KU		石鏟	I	ホルンフェルス	4.50	2.90	0.80	8.04	
673	57	KU		石鏟	II A 1	黒曜石	1.60	1.75	0.35	0.63	
674	57	KU		石鏟	II A 2	黒曜石	2.00	1.90	0.40	0.94	
675	57			槌丸	石鏟	II B 1	黒曜石	1.65	1.35	0.30	0.42
676	57	KU		石鏟	II B 1	ホルンフェルス	2.42	1.75	0.38	1.37	
677	57	KU		石鏟	II B 1	黒曜石	3.25	2.10	0.40	1.58	
678	57	KU		石鏟	II B 1	黒曜石	1.70	0.90	0.30	0.32	
679	57	KU		石鏟	II B 2	黒曜石	1.23	0.99	0.28	0.24	
680	57	KU		石鏟	II B 3	頁岩	2.09	1.22	0.43	0.77	
681	57	KU		石鏟	IV	チャート	2.30	1.37	0.32	0.96	
682	57	KU		石鏟	IV	黒曜石	3.35	1.55	0.30	0.99	
683	57	KU		石匙	横型	ホルンフェルス	4.60	8.50	1.20	29.17	
684	57	KU		石匙	横型	ホルンフェルス	5.60	8.51	1.25	53.93	
685	57	KU		石匙	横型	ホルンフェルス	7.70	6.30	1.60	68.66	
686	57	KU		石匙	横型	ホルンフェルス	5.15	4.40	1.12	18.57	
687	57	KU		石匙	横型	頁岩	4.01	5.05	1.25	16.84	
688	57	KU		石匙	横型	ホルンフェルス	4.06	7.06	1.10	21.31	
689	57	KU		石匙	横型	ホルンフェルス	3.90	5.53	0.95	15.74	
690	57	KU		石匙	横型	黒曜石	2.80	4.90	1.00	8.93	
691	57	KU		石匙	縱型	ホルンフェルス	6.20	4.30	1.00	19.32	

拂図番号	國版番号	出土遺構	層位	器種	分類	石材	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
692	58	KU	石錐			ホルンフェルス	5.00	2.20	0.60	4.74
693	58	KU	石錐			頁岩	6.00	2.00	0.70	5.47
694	58	KU	石錐			ホルンフェルス	3.10	2.80	0.60	2.88
695	58	クロ	石錐			ホルンフェルス	4.38	1.60	0.82	3.11
696	58	KU	石錐			ホルンフェルス	4.09	2.27	0.90	4.91
697	58	KU	石錐			ホルンフェルス	5.48	4.43	1.25	22.80
698	58	KU	スクレイバー			頁岩	5.30	3.35	0.90	14.80
699	58	KU	スクレイバー			砂岩	8.28	4.70	1.30	43.30
700	58	KU	スクレイバー			ホルンフェルス	4.39	6.46	2.20	58.73
701	58	KU	スクレイバー			ホルンフェルス	6.40	7.10	1.30	58.69
702	58	KU	スクレイバー			礫質砂岩	9.00	7.40	2.60	212.60
703	58	KU	打製石斧	I		ホルンフェルス	8.10	5.06	3.80	177.85
704	58	KU	打製石斧	I		砂岩	10.52	7.28	2.50	211.70
705	58	KU	打製石斧	II		ホルンフェルス	10.06	5.27	2.50	142.74
706	58	クロ	打製石斧	II		砂岩	8.20	5.00	1.60	74.10
707	58	表土	打製石斧	II		ホルンフェルス	14.20	8.60	2.80	367.66
708	58	KU	打製石斧	III		頁岩	10.77	6.62	2.00	173.00
709	58	KU	打製石斧	IV		砂岩	9.65	3.66	1.20	55.60
710	58	KU	打製石斧	IV		粘板岩	10.80	4.50	1.10	63.40
711	58	KU	打製石斧	IV		砂岩	11.17	4.58	2.10	111.40
712	58	KU	打製石斧	IV		頁岩	11.91	5.92	3.70	274.00
713	58	KU	打製石斧	IV		ホルンフェルス	11.00	5.80	3.30	225.33
714	58	KU	打製石斧	V		砂岩	7.49	6.10	1.75	97.00
715	58	KU	打製石斧	V		頁岩	5.00	2.90	0.50	8.05
716	58	KU	打製石斧	V		ホルンフェルス	4.91	2.66	0.95	11.11
717	58	KU	磨製石斧			ドレライト	14.73	5.85	4.10	486.70
718	58	クロ	磨製石斧			砂岩	8.85	4.60	0.28	156.80
719	58	KU	磨製石斧			頁岩	8.67	4.59	3.25	217.30
720	58	KU	石核			ホルンフェルス	3.72	8.08	6.69	299.39
721	58	KU	石核			ホルンフェルス	4.19	10.66	5.30	254.59
722	58	KU	石核			ホルンフェルス	4.80	5.80	2.80	90.49
723	58	KU	石核			ホルンフェルス	5.20	8.90	3.80	222.86
724	58	KU	石核			ホルンフェルス	7.20	9.59	8.20	606.40
725	58	クロ	石核			黒曜石	6.90	7.00	3.85	210.34
726	58	KU	礫器			ホルンフェルス	10.50	8.50	5.35	687.40
727	クロ		石錐			含鈷砂岩	7.13	4.30	1.80	60.00
728	KU		石錐			頁岩	5.00	4.60	1.20	43.80
729	KU		石錐			頁岩	6.40	5.60	1.70	78.20
730	KU		石錐			砂岩	8.10	7.50	2.10	169.70
731	KU		石錐			砂岩	11.83	6.85	1.80	233.50
732		複乱	磨石	I		輝石安山岩	7.10	6.80	2.90	215.70
733	KU		磨石	I		輝石安山岩	6.80	5.80	2.50	128.40
734		複乱	磨石	I		輝石安山岩	7.40	8.00	2.40	226.30
735		複乱	磨石	I		輝石安山岩	9.60	8.10	4.10	423.40
736	KU		磨石	I		輝石安山岩	9.70	8.20	3.00	316.30
737		複乱	磨石	I		輝石安山岩	11.00	7.80	6.30	745.20
738	KU		磨石	I		輝石安山岩	12.00	9.30	3.90	650.00
739	KU		磨石	I		輝石安山岩	11.90	9.50	4.70	724.50
740	KU		磨石	I		輝石安山岩	13.20	10.20	4.00	724.50
741	KU		磨石	I		輝石安山岩	14.00	11.00	4.60	930.50
742	KU		磨石	I		輝石安山岩	13.10	9.50	4.40	850.00
743	KU		磨石	I		輝石安山岩	9.40	8.40	4.30	481.60
744	KU		磨石	I		輝石安山岩	9.10	7.90	1.90	229.10
745	KU		磨石	I		輝石安山岩	10.50	8.80	4.70	750.30
746	KU		磨石	I		輝石安山岩	12.40	9.50	4.70	771.50
747	KU		磨石	I		輝石安山岩	12.70	8.50	4.00	648.20
748	KU		磨石	I		輝石安山岩	13.90	8.20	9.00	1300.00
749	KU		磨石	II		輝石安山岩	14.70	5.40	7.00	820.00
750	KU		磨石	II		輝石安山岩	10.50	6.30	6.70	710.00
751	KU		磨石	II		砂岩	10.60	5.50	7.00	635.40
752	KU		磨石	II		輝石安山岩	11.90	5.20	7.10	630.00
753	KU		磨石	III		輝石安山岩	14.70	5.80	4.90	647.90
754	KU		磨石	III		輝石安山岩	14.40	5.30	6.70	950.00
755	KU		磨石	III		輝石安山岩	14.50	5.60	6.10	930.80
756	クロ		磨載石	IV		輝石安山岩	10.90	7.10	4.10	425.90
757	KU		磨載石	IV		輝石安山岩	9.50	8.50	4.30	385.20
758	KU		磨載石	IV		輝石安山岩	11.80	10.30	5.00	987.40
759	KU		磨載石	IV		輝石安山岩	11.10	7.20	4.20	504.80
760	KU		磨載石	IV		輝石安山岩	8.80	7.70	4.00	412.60
761	KU		磨載石	IV		多孔質安山岩	8.20	7.10	4.00	310.80
762		複乱	磨載石	IV		安山岩	7.10	6.80	2.90	215.70
763	KU		磨載石	IV		安山岩	9.80	6.60	4.70	406.60
764	KU		磨載石	IV		安山岩	12.20	9.50	6.70	1028.70

拂団番号	図版番号	出土遺構	層位	器種	分類	石材	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
765		KU	敲石	V	輝石安山岩	12.40	10.50	5.70	923.40	
766		複乱	敲石	V	輝石安山岩	12.80	10.70	7.30	1310.00	
767		KU	敲石	V	輝石安山岩	9.70	8.40	5.30	529.90	
768		KU	凹石	VI	輝石安山岩	8.40	7.00	3.60	247.00	
769		KU	凹石	VI	輝石安山岩	7.20	6.30	3.50	256.70	
770		KU	凹石	VI	輝石安山岩	8.10	5.60	4.40	227.70	
771		KU	石皿	I	輝石安山岩	43.90	30.30	8.10	15300.00	
772		KU	石皿	I	安山岩	30.00	26.20	7.00	9400.00	
773		複乱	石皿	I	輝石安山岩	21.70	30.10	13.40	12650.00	
774		KU	石皿	I	輝石安山岩	33.70	29.10	11.90	17400.00	
775		KU	石皿	II	輝石安山岩	47.00	25.10	12.40	20600.00	
776		KU	石皿	II	輝石安山岩	40.00	33.50	11.90	23000.00	
777		KU	石皿	II	輝石安山岩	28.40	25.60	8.10	8450.00	

第39表 向山遺跡縄文時代石製品属性表

拂団番号	図版番号	層位	器種	石材	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
778	59	KU	勾玉	葉ろう石	3.37	2.40	0.57	5.89
779	59	KU	垂飾	滑石	12.00	3.72	0.87	48.82
780	59	複乱	垂飾	滑石	3.08	1.50	0.45	3.24
781	59	KU	块状耳飾	滑石	3.43	2.32	1.00	9.05
782	59	KU	块状耳飾	滑石	2.59	2.24	0.60	4.31
783	59	KU	块状耳飾	滑石	3.34	1.49	0.73	4.69
784	59	KU	管玉	トレモラ閃石岩	3.58	1.02	1.14	4.17
785	59	KU	管玉	トレモラ閃石岩	1.72	1.82	1.55	4.12
786	59	KU	管玉	滑石	2.08	0.53	0.95	0.93

第40表 向山遺跡旧石器時代石器属性表

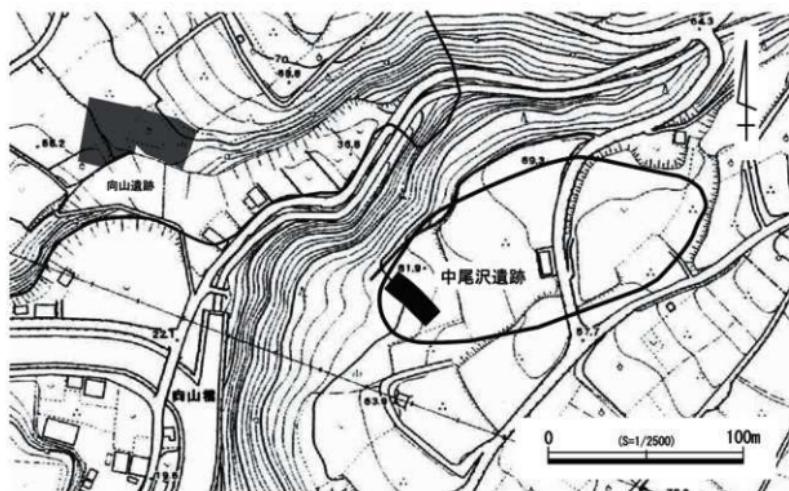
拂団番号	図版番号	層位	器種	石材	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
787	59	表土	尖頭器	黒曜石	3.01	1.28	0.80	2.30
788	59	KU	尖頭器	黒曜石	2.77	1.46	0.49	1.91
789	59	KU	尖頭器	黒曜石	3.81	2.17	0.93	8.39
790	59	KU	尖頭器	黒曜石	3.34	3.17	0.91	8.68
791	59	KU	尖頭器	黒曜石	1.91	1.24	0.58	1.05
792	59	KU	尖頭器	ホルンフェルス	3.78	1.41	0.58	2.56
793	59	KU	尖頭器	黒曜石	2.17	1.41	0.52	1.23
794	59	KU	尖頭器	黒曜石	2.20	1.50	0.50	1.40
795	59	複乱	尖頭器未製品	黒曜石	5.82	3.20	0.90	15.38
796	59	KU	ナイフ形石器	チャート	3.97	1.95	0.75	5.81
797	59	KU	ナイフ形石器	黒曜石	4.15	1.21	0.55	2.24
798	59	YL	ナイフ形石器	砂岩	4.80	1.62	0.60	3.30

第7章 中尾沢遺跡

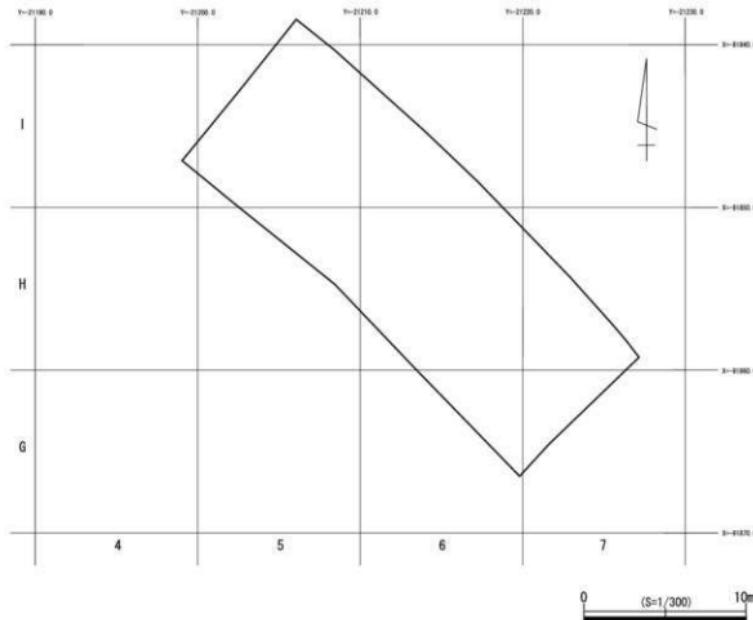
第1節 基本土層と土層の堆積状況

本遺跡の大淵スコリア層は粒子の量によって2層に分層できる。上層は粒子を多く含んだ腐食土層、下層は粒子の密集した層である。クロボク土層も発達しており、3層に分層できる。土中に混じるスコリアの量は下層に進むほど少くなり、色調も濃くなつてゆく。

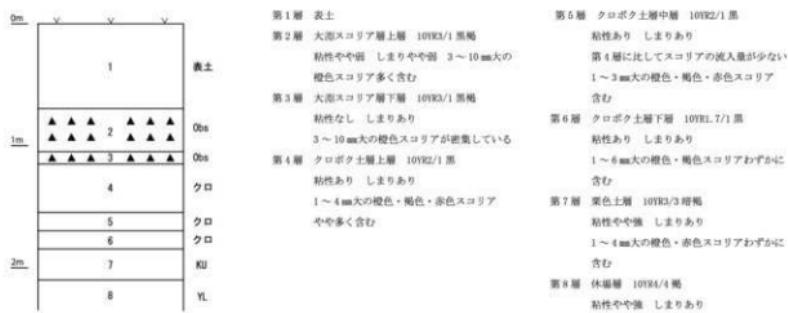
堆積状況を見ると、調査区南東側は大淵スコリア層及びクロボク土層の堆積が厚く、北西側は薄い。北西側ではB B I層より上層の土は削平されている。また、ニセローム層以下の愛鷹上部ロームの発色は不明瞭である。(岩崎)



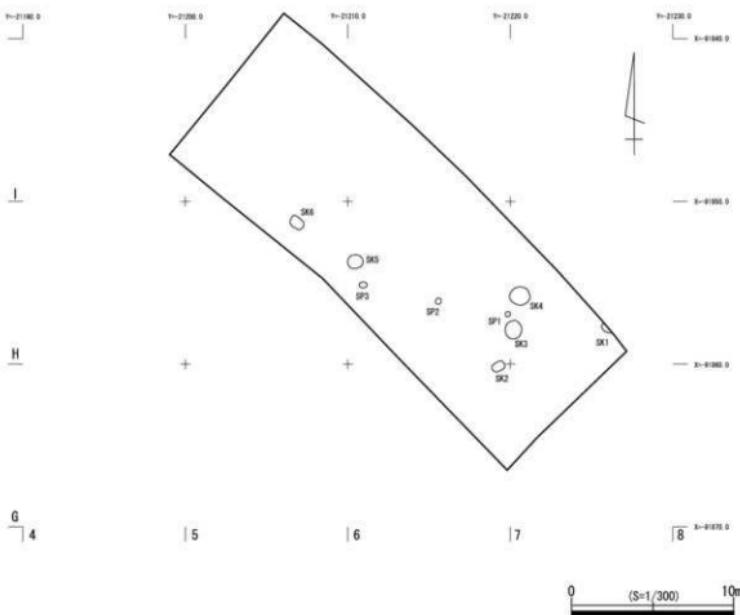
第170図 調査区位置図



第171図 グリッド配置図



第172図 基本土層柱状図



第173図 第1遺構面遺構配置図

第2節 古墳時代前期以降の遺構

第4層クロボク土層上面にて、土坑6基と小穴3基が検出された。柱穴などの可能性を指摘できるものではなく、性格は不明である。これらの土坑・小穴は大淵スコリアを覆土とする事を特徴とする。

(1) 土坑

円形・楕円形を呈するものが検出された。

ア SK1・SK2・SK6 (第174図・第44表)

平面形が楕円形の土坑をまとめた。平面規模は長径0.8~0.9m、短径0.6~0.7m、残存する深さは20~26cmを測る。断面形は底面の平坦面が広く立ちあがっている逆台形状である。

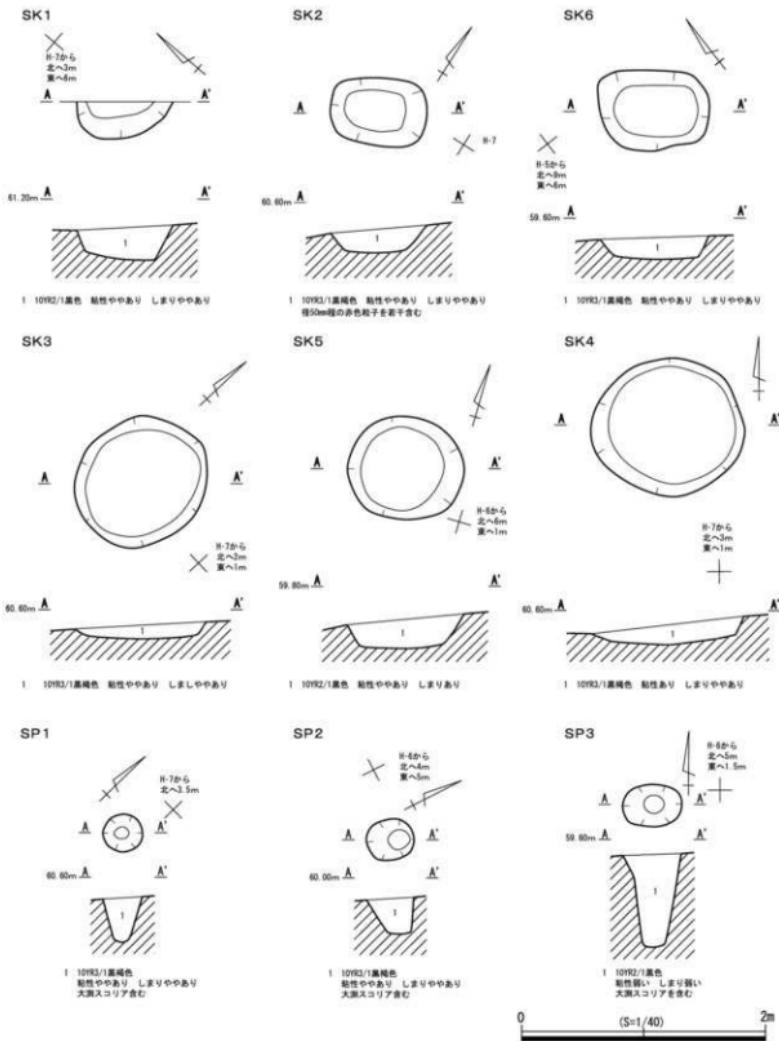
イ SK3~5 (第174図・第44表)

円形を呈する土坑である。平面規模は径0.7~1.1m、残存する深さは10~24cmである。断面形は底面の平坦面が広く立ちあがっている逆台形状である。

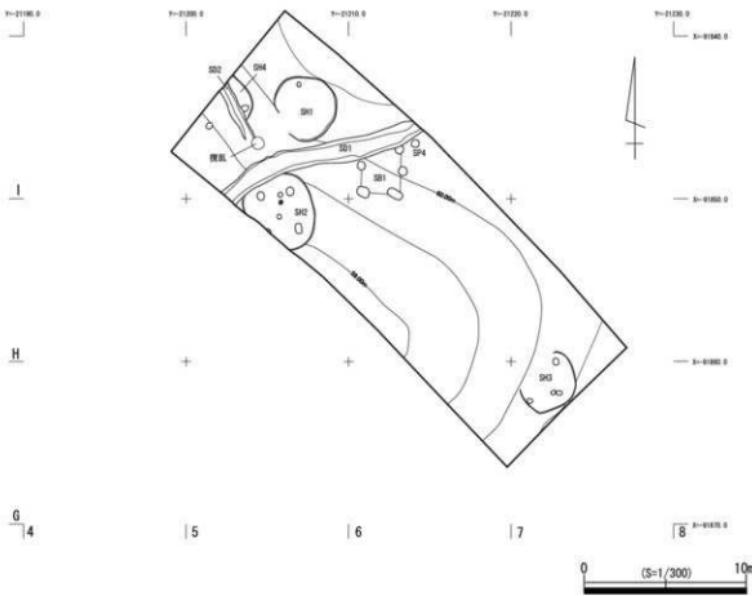
(2) 小穴 SP1~3 (第174図・第44表)

H7グリッドからH6グリッドにかけての、調査区南側で検出された3基の小穴である。

遺構底面の標高値の違いから、建物の柱穴や柵列とするには考えにくい。平面形は全て円形を呈し、断面形は立ち上がりが急な逆台形状である。(西田)



第174図 第1遺構面 土坑・小穴



第175図 第2遺構面遺構配置図

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1 遺構

古墳時代の遺構は本来の掘り込み面であるクロボク土層と遺構覆土の判別が困難であるため、第7層栗色土層上面にて検出した。

遺構は緩斜面上に竪穴建物4基、掘立柱建物1基、溝2基、小穴1基を検出した。

(1) 竪穴建物（第41表）

ア SH1（第176図）

I-5グリッド中央東寄り、調査区北側に立地する。削平と擾乱の影響を受けている。

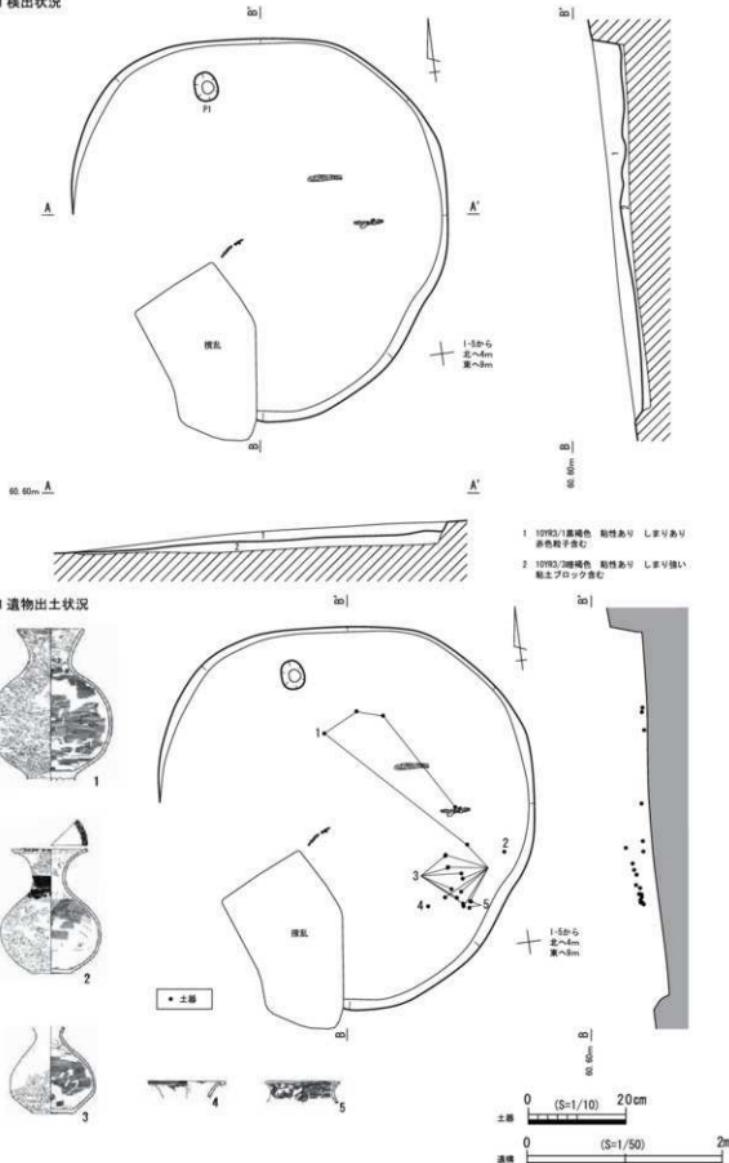
構造 平面形は不整形な円形をなす。床面は、建物の南西部分は削平と擾乱により、本来の面を失っている。床面構築土が認められており、その厚さは4~12cmと薄い。掘方は平坦に作られている。柱穴なのか判断がつかないが、小穴を1基検出している。平面形は楕円形で、長径30cm、短径22cm、床面からの深さは38cmであった。

遺物出土状況 遺物は床面直上からサカキの炭化材が出土した他、壺が建物南東側で出土している（第183図）。古墳時代前期の遺構である。

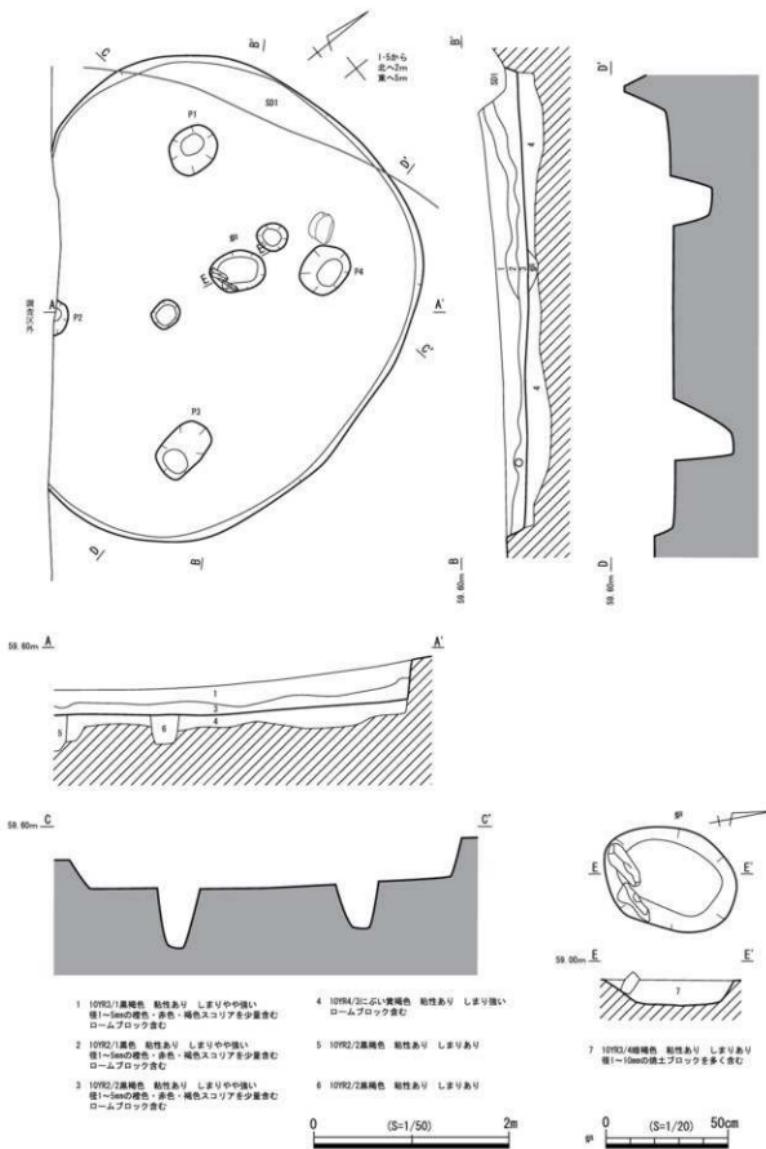
イ SH2（第177・178図）

H-5グリッド北寄り、調査区北西に位置する。北側部分の壁面と覆土の一部はSD1に切られてい

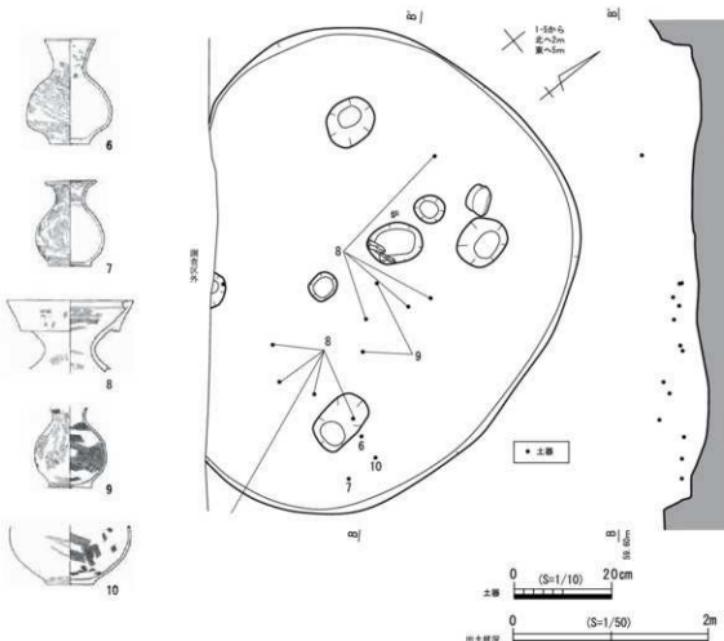
SH1 検出状況



第176図 SH1



第177図 SH 2



第178図 SH 2遺物出土状況

る。

構造 建物の平面形は各辺がやや直線的な楕円形である。床面は平坦に形成されている。第4層は床面構築土で、厚さはおよそ10cm~25cm程度である。掘方は中心部分で平坦面を形成し、外側は円形の溝状に掘り込まれている。

炉は置石炉で中央のやや北寄りで検出された。規模は長径56cm、短径41cm、深さ10cmを測る。置石は掘方の南側に細長い石を2点据えている。

柱穴は主柱穴が4本確認できる。平面形は楕円形と方形である。

遺物出土状況 遺物は床面直上及び覆土から出土し(第184図6~10)、8は包含層で出土した土器片とも接合関係にある。出土遺物から、SH 2は古墳時代前期と考えられる。

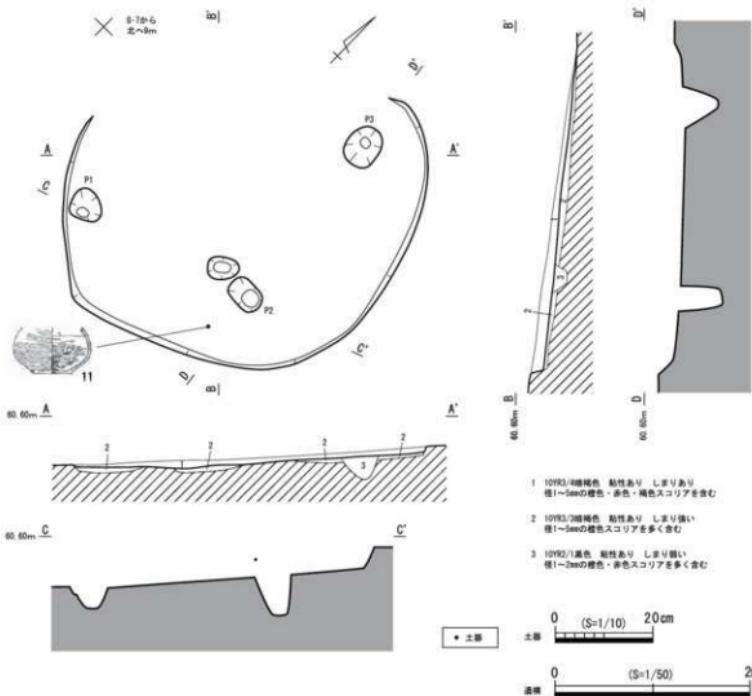
ウ SH 3(第179図)

G-7グリッド北西、調査区南東に立地する。

構造 平面形は不整形な円形をなす。掘方はほぼ平坦に構築されている。掘方に充填されている第2層は床面構築土で、最も厚い箇所で8cmを測る。

主柱穴としたものはP1~P3で、3基確認した。柱穴の平面は不整形で最大径が32~42cmを測る。深さは掘方から20~42cmを測る。

遺物出土状況 壺が覆土中から1点出土している(第184図11)。出土遺物から、古墳時代前期の遺構と



第179図 SH 3

考えられる。

エ SH 4 (第180図)

I-5グリッド中央西寄り、調査区北側に位置する。SD 2に造構中央を切られるほか、建物の西側、およそ半分は削平を受けており、柱穴のみの検出となった。

構造 平面形は、残存する北東部でやや直線的な部分があり、コーナーは曲線的にカーブを描くことから、隅丸方形に近い形であったと考えられる。

掘方は平坦に作られ、深さは一番深い箇所で7cmを測る。上面は削平を受けて床面とおぼしき硬化面が確認できなかったため、第1層および第3層が床面構築土であるのかは判断できない。柱穴はP1・P2の2基が検出されている。平面形が長径40cm前後の梢円形で、残存する深さは30cmを測る。炉は検出されていない。

遺物出土状況 遺物の出土はない。時期は不明であるが、ほかの竪穴建物と同じく古墳時代前期の可能性が高いものと考えられる。

(2) 挖立柱建物 SB 1 (第181図・第42表)

I-6グリッド南西、調査区中央に位置する。

柱間は1間×2間の掘立柱建物で、SD 1によって北側部分は切られる。

柱穴の平面形は円形を呈し、P1・4・5は径およそ60cm、P2は径74cm、P3は1mを測る。北側と中央の柱穴P1・4・5の平面規模は近い値を示し均一的であるが、南端右側の柱穴P3は他の柱穴よりも規模が大きく、平面形も隅丸長方形とやや不自然である。これは近接していた2つの小穴を掘削時に一つの土坑として認識し検出したものと思われる。

(3) 溝状造構（第43表）

ア S D 1 (第182図)

I-5-I-6グリッドに位置し、調査区北側を横断し調査区外へ続いている。検出できた長さは12.9m、幅は最大で1.4m、深さは30cmを測る。S B 1を切り、溝は調査区外に続いている。

遺物の出土はなく詳しい時期は不明である。

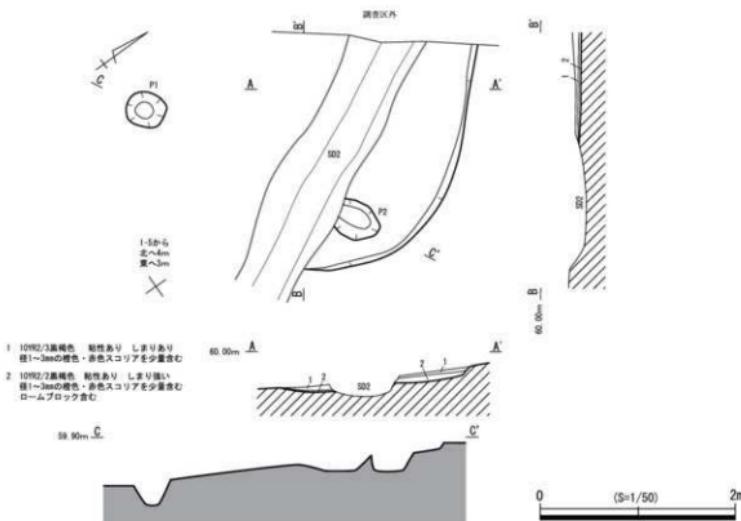
イ S D 2 (第182図)

I-5グリッド西寄り、調査区北側に位置し、南北にのびるが、南側は擾乱により溝が切られ、北側の調査区外へ続いている。長さは3.9m、最大幅80cm、深さ20cmを測る。遺物の出土はなく詳しい時期は不明である。

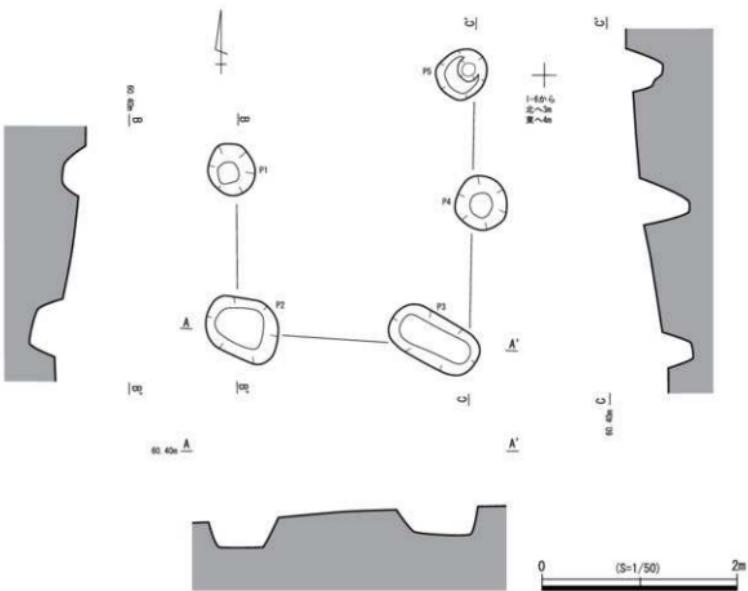
(4) 小穴 S P 4 (第44表)

小穴は1基検出されており、I-6グリッド南西、調査区中央北東の掘立柱建物の脇に位置する。

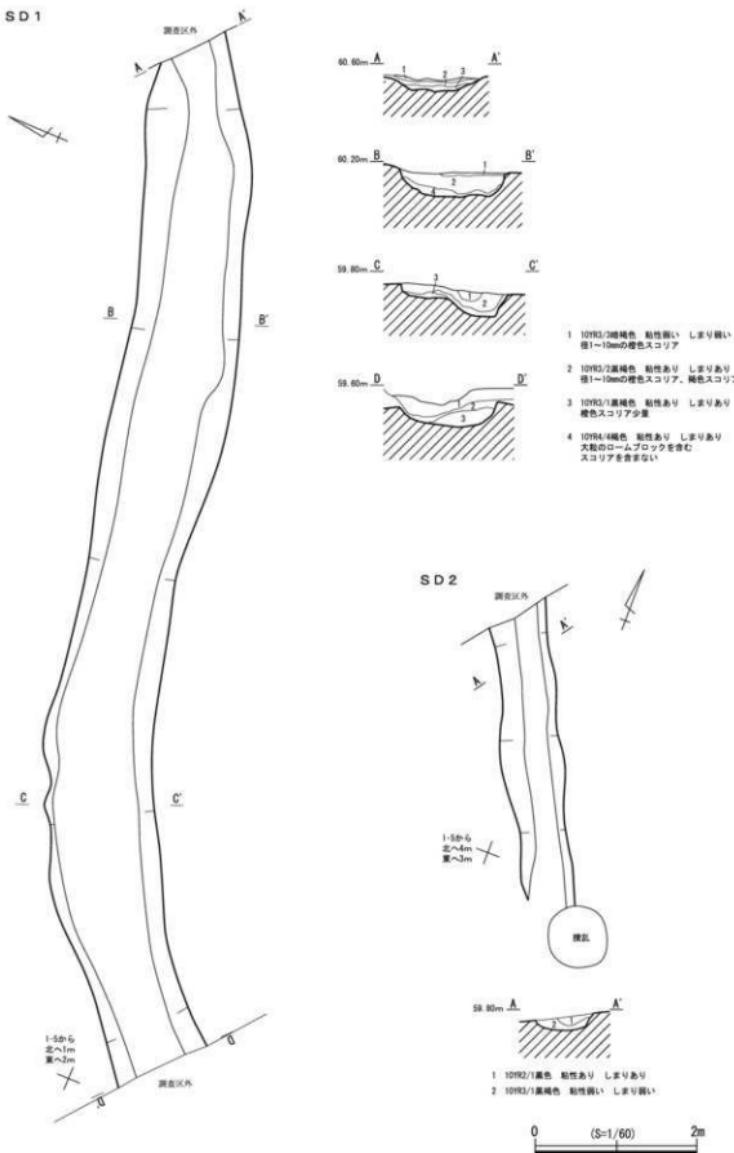
平面形は隅丸方形をなし、径50cm、深さ50cmを測る。断面形は立ち上がりが急角度な逆台形状である。
(西田)



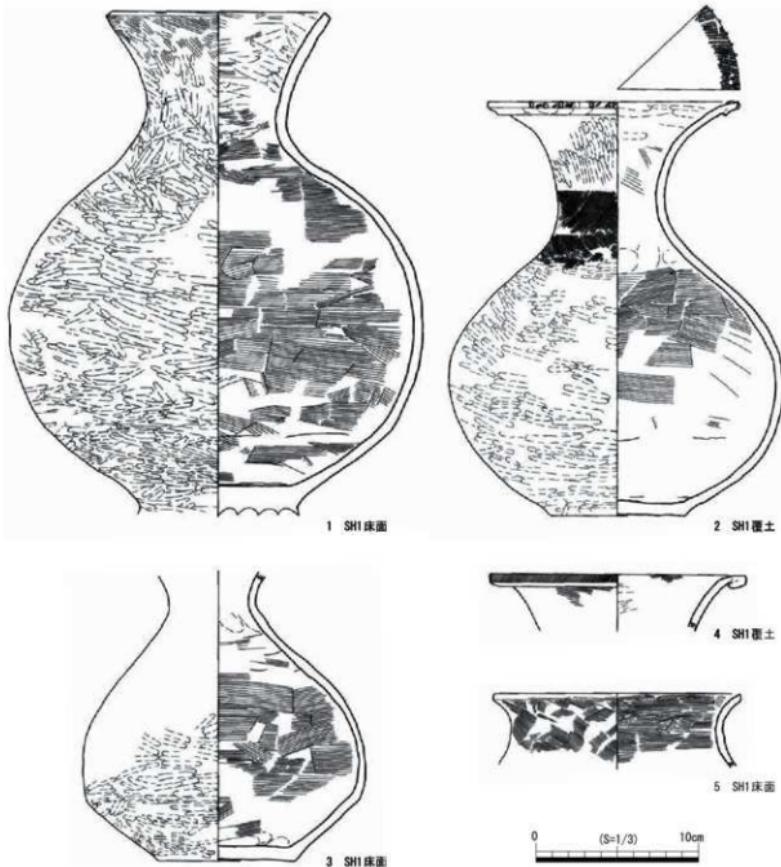
第180図 S H 4



第181図 SB 1



第182図 第2遺構面溝状遺構



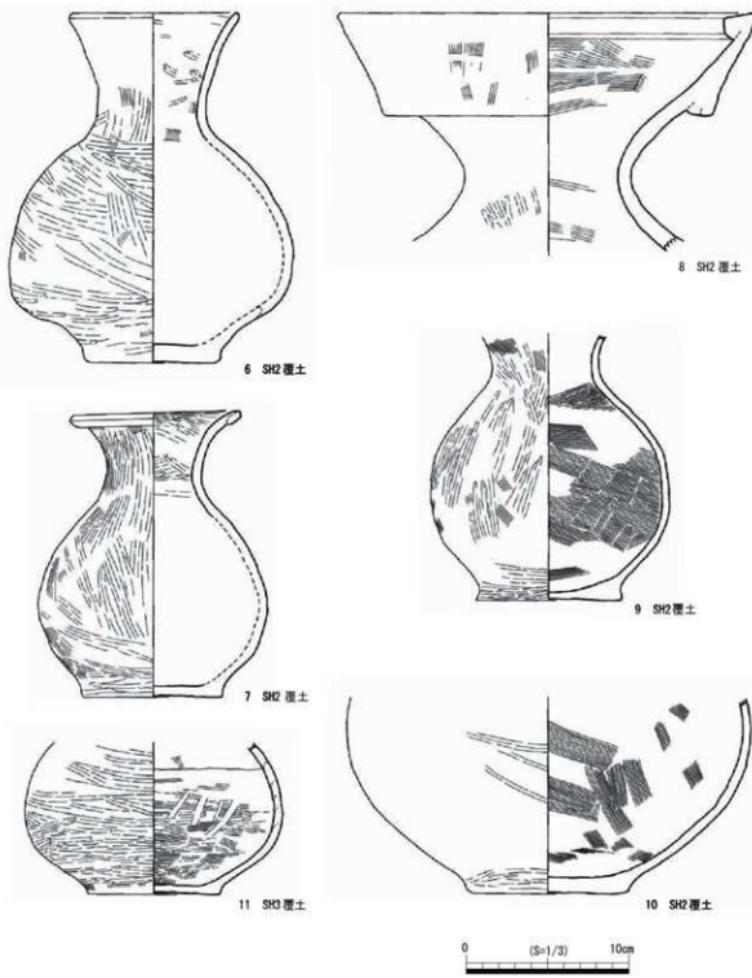
第183図 遺構出土遺物 1

2 遺 物

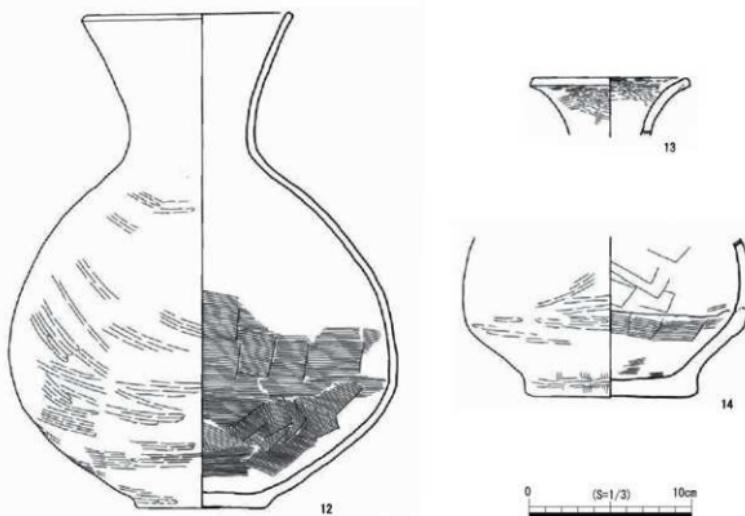
出土した土器の時期は古墳時代前期と考えられる。

(1) SH1 出土遺物 (第183図 1~5・第45表 図版64)

1は単純口縁壺である。胴部は丸く、中央部に最大径を有する。口縁部は直線的に開く。2は折り返し口縁壺である。胴部の形状は潰れた球形で、中央部に最大径を有する。頸部は細く、口縁部は大きく外反して開く。外面頸部、口唇部、内面口縁部に縄文を施文している。さらに口唇部には棒状浮文、内面口縁部には円形浮文を貼り付けている。3は壺の胴部である。胴下部に最大径を有し、にぶい稜を持つ。頸部は細く、緩やかに屈曲する。4は折り返し口縁壺である。口縁部が外反して開き、口唇部に縄文を施文している。



第184図 造構出土遺物 2



第185図 包含層出土土器（古墳時代前期）

5は壺の口縁部である。頸部の屈曲は緩やかである。口縁部は外反して開き、口唇部は面取りしている。

(2) SH2出土遺物（第184図6～10・第45表 図版64）

6は単純口縁壺である。胴下部に最大径を有する。底部から胴下部にかけては大きく弯曲して開いている。口縁部の開きは1に類似する。口唇部は磨滅している。7は折り返し口縁壺である。胴部は丸いが、張りは小さい。口縁部は緩やかに外反して開く。8は大型の複合口縁壺である。胎土に白色粒を含む。頸部は短く、口縁部は直線的に大きく開く。内面口唇部直下には鉤状の肥厚帯が見られる。9と10は壺の胴部である。9は7に類似した胴部を有する。

(3) SH3出土遺物（第184図11・第45表 図版64）

11は壺の胴部である。胴下部に最大径を有する。

(4) 包含層出土遺物（第185図12～14・第45表 図版64）

12、13は単純口縁壺である。12は胴下部に最大径を有する。胴部は丸い。口縁部の開きは1、6に類似する。頸部は1、6に比してやや長い。13は口縁部が外反して開く。14は壺の胴部である。（岩崎）

第4節 縄文時代の遺物

1 縄文土器

本遺跡では、縄文時代の遺構は検出されなかったが、第7層から縄文時代の遺物が出土した。I群2類k・II群2類a・III群1類a土器が出土している。

(1) I群2類k (第186図15~20・第46表)

厚手で胎土に纖維を含んでおり、表面に纖維痕と斜位の調整痕、内面には横位の擦痕が付けられている。これらはI群2類k種土器で早期末の無文土器とした。

(2) II群2類a (第186図21~32・第46表 図版65)

地文に縄文を施し、平行沈線および浮線文を貼り付けた、器厚がやや厚手の諸磧b式土器である。

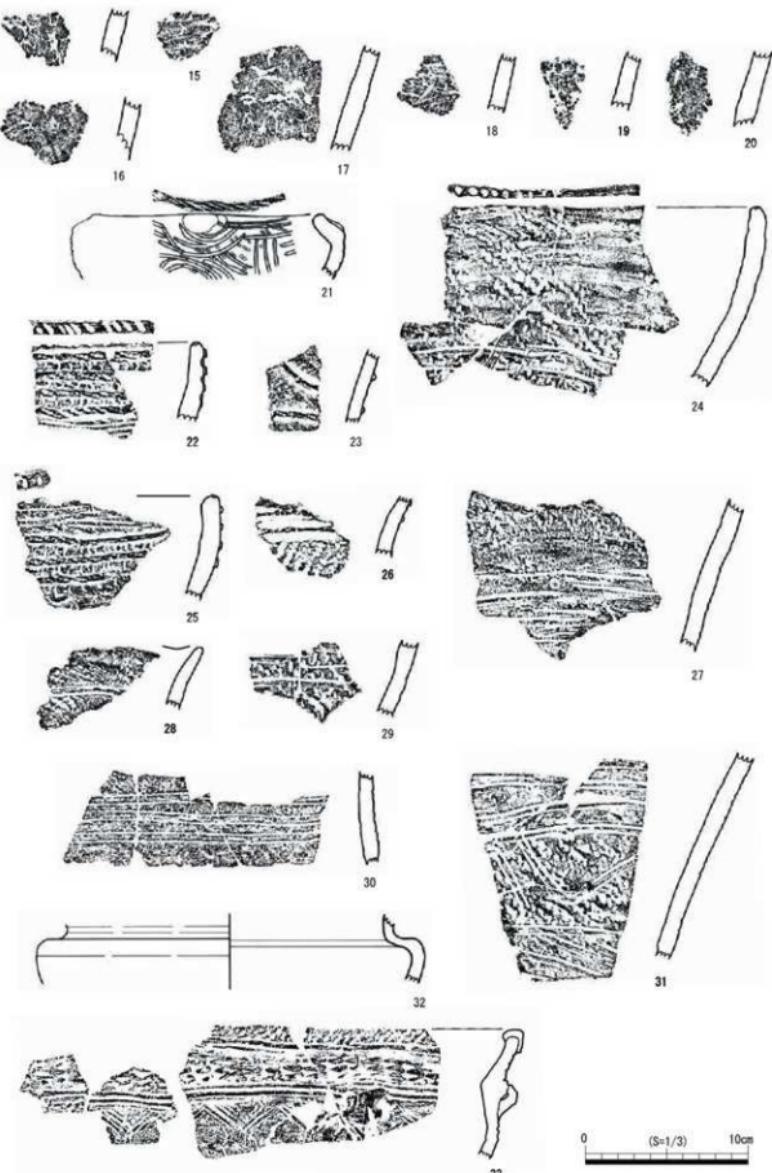
21は深鉢の口縁部であり、口唇部に沈線を施し、口縁部は半截竹管状工具で斜位沈線と爪形文を付けながら沈線を施す。地文に縄文、口唇部に円形の突起を付け、弧状沈線を付ける。24は深鉢の口縁部、27・29他は24と同一個体の体部である。口唇部に棒状工具で刺突をし、地文にはR L縄文を施文する。半截竹管状工具で横位沈線をやや雜に施文している。32は無文の浅鉢の胴部である。

(3) III群1類a (第186図33・第46表 図版65)

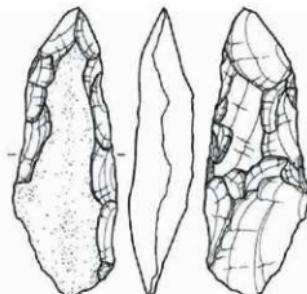
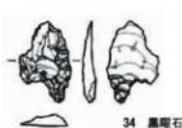
五領ヶ台式土器である。33は口唇部直下にL R縄文を施文し、横位区画内に半截竹管状工具で押引文を施し、橋状把手を口縁部と胴部の境に付ける。胴部上半から結節縄文を垂下した上に、工具でY字状に沈線を付けている。(西田)

2 包含層出土石器 (第187図34~第188図41・第47表 図版65)

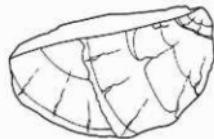
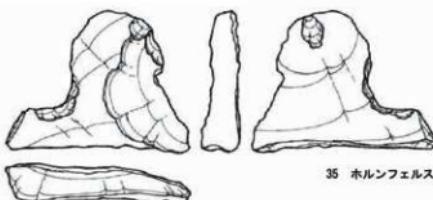
34は石鎌の未製品である。35は石匙のつまみの部分である。36はIV類の打製石斧である。側縁部の形状は刃部の開きが小さいII類に類似する。厚手の表皮付き剥片を素材に用い、比較的大きな剥離で基部と刃部を尖頭状に作り出している。37はホルンフェルスの石核である。38から40はI類の磨石である。40は側面にも磨痕が見られる。41はII類の石皿である。(岩崎)



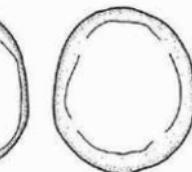
第186図 包含層出土土器



36 ホルン
フェルス



37 ホルンフェルス



38 輝石安山岩



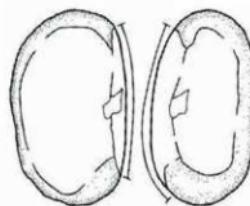
39 輝石安山岩

0
(S=4/5)
(34, 35)

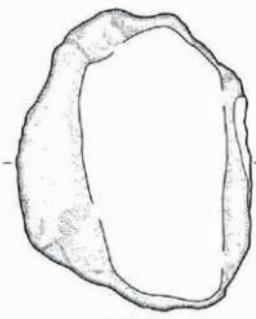
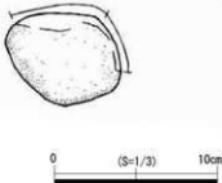
0
(S=1/2)
(36, 37)

0
(S=1/3)
(38, 39)

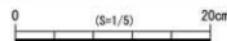
第187図 包含層出土石器 1



40 輝石安山岩



41 砂岩



第188図 包含層出土遺物 2

第41表 中尾沢遺跡堅穴建物の概要

遺構名	拝図	図版	検出面	グリッド	主軸方位	平面形態	規模(m) 長軸×短軸	主柱穴数	側方	剖面形態	出土遺物
SH1	175, 176	61	KU	I-5	N-5°-E	円形	3.9×3.9	平組			第183図1~5
SH2	175, 177, 178	61	KU	H, I-5	N-7°-W	椭円形	4.8×4.2	4	円形	置石8t	第184図5~10
SH3	175, 179	62	KU	G, H-7	N-16°-W	円形	3.5×(3.4)	3	平組		第184図11
SH4	175, 180	62	KU	I-5	N-26°-W	—	(3.2)×(2.6)	2	—		

第42表 中尾沢遺跡掘立柱建物の概要

遺構名	拝図	検出面	グリッド	主軸方位	柱間規模	桁行(m)	梁間(m)	柱穴平面形態
SB1	175, 181	KU	I-6	N-3°-E	1間×2間	3.4	2.3	円形

第43表 中尾沢遺跡溝状造構の概要

遺構名	拝図	検出面	グリッド	全長(m)	最大幅(m)	最大深(m)
SD1	175, 182	KU	H-5, I-5, 6	(12.9)	(1.4)	0.3
SD2	175, 182	KU	I-5	(3.9)	0.8	0.2

第44表 中尾沢遺跡土坑・小穴の概要

遺構名	拝図	検出面	グリッド	種類	規模(m) 長径×短径	最大深(m)	平面形態
SK1	173, 174	クロ上層	H-7	土坑	0.8×(0.3)	0.3	楕円形
SK2	173, 174	クロ上層	G, H-6	土坑	0.8×0.6	0.2	楕円形
SK3	173, 174	クロ上層	H-6, 7	土坑	1.1×1.1	0.1	円形
SK4	173, 174	クロ上層	H-7	土坑	1.3×1.1	0.2	円形
SK5	173, 174	クロ上層	H-6	土坑	1.0×0.8	0.2	円形
SK6	173, 174	クロ上層	H-5	土坑	0.9×0.7	0.2	楕円形
SP1	173, 174	クロ上層	H-6, 7	小穴	0.3×0.3	0.4	円形
SP2	173, 174	クロ上層	H-6	小穴	0.4×0.3	0.3	円形
SP3	173, 174	クロ上層	H-6	小穴	0.5×0.3	0.8	楕円形
SP4	175	KU	I-6	小穴	0.5×0.5	0.5	楕円形

第45表 中尾沢遺跡古墳時代土器観察表

神図 番号	出土地位置	種別	器種	部位	残存率 (%)	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色調	調 整	備 考
1 64	SH1床面	土師器	壺	口縁部～胴部	90	(31.3)	14.0		5YR7.8橙		
2 64	SH1覆土	土師器	壺		90	25.7	15.8	8.4	10YR6/4に付い黄褐	外周：口縁部～頸部斜めヶ後縦へラミガキ 壁部斜めヶ後縦へラミガキ 内周：口縁部～頸部横ハケ後縦へラミガキ	内面部縁部～頸部・胴部斜めヶ後縦へラミガキ
3 64	SH1床面	土師器	壺	頸部～底部	75	(17.9)		8.6	7.5YR6.6橙	外周：頸部横ハラミガキ 内周：頸部ナデ・胴上部横ハケ後ナデ・胴中央部横ナケ 壁部斜めヶ後縦へラミガキ	外部帶滅 脱部木葉張
4	SH1覆土	土師器	壺	口縁部	20	(3.5)	(16.0)		10YR7/4に付い黄褐	外周：口縁部RL織文・円形浮文5箇所 横へラミガキ 壁部斜めヶ後縦へラミガキ	外内面部滅
5 64	SH1床面	土師器	壺	口縁部	35	(4.5)	(15.4)		5YR7.8橙	外周：斜めヶ 内周：横ナケ	
6 64	SH2覆土	土師器	壺		100	21.7	10.2	8.4	7.5YR5/4に付い褐	外周：頸部横ハラミガキ 壁部横ハラミガキ 壁部ナデ?	外内面部 斜めヶ
7 64	SH2覆土	土師器	壺		85	17.5	10.3	8.6	5YR6.6橙	外周：口縁部～胴部横ハケ後縦へラミガキ 壁部斜めヶ後縦へラミガキ 内周：口縁部～頸部横ハラミガキ 壁部ナデ?	底部木葉張
8	SH2覆土	土師器	壺	口縁部～頸部	40	(14.8)	(26.2)		7.5YR6.6橙	外周：口部部横ハケ 頸部横へラミガキ 内周：横ナケ	外内面部滅
9 64	SH2覆土	土師器	壺	頸部～底部	70	(16.5)		9.0	10YR7/4に付い黄褐	外周：横ナケ・胴部横ハケ・斜めハケ後縦へラミガキ 底部横へラミガキ 壁部横へラミガキ	
10 64	SH2覆土	土師器	壺	胴部～底部	30	(12.2)		10.0	5YR6.6橙	外周：横ナケ後縦へラミガキ 内周：斜めハケ後ナデ	底部木葉張
11 64	SH3覆土	土師器	壺	頸部～底部	40	(9.4)		8.2	7.5YR6.3に付い褐	外周：横ナケ後縦へラミガキ 内周：横ナケ	底部木葉張へラミガキで消す
12 64	KU	土師器	壺		95	30.6	12.5	8.0	7.5YR7/4に付い褐	外周：脚部横ハラミガキ 内周：脚部横ハケ	外内面部滅 底部木葉張
13	KU	土師器	壺	口縁部	20	(3.6)	(9.6)		7.5YR6.6橙	外周：横ナケ後縦へラミガキ 内周：横ナケ後縦へラミガキ	
14 64	KU	土師器	壺	胴部～底部	20	(9.9)		10.7	7.5YR7/4に付い褐	外周：底へラミガキ 内周：胴上部板ナデ・胴下部板へラミガキ	外内面部滅

第46表 中尾沢遺跡縄文時代土器觀察表

辨団番号	分類	色調	胎土	文様・調整等
15	I群2類k	SYR5/6赤褐色	石英・白色粒子・細砂・織維	外面部調整痕、内面横位条痕
16	I群2類k	SYR4/6赤褐色	白色・黑色粒子・細砂・織維	外面部調整痕、内面横位擦痕
17	I群2類k	SYR5/6明赤褐色	長石・石英・細砂・織維	外面部調整痕、内面横位擦痕
18	I群2類k	SYR5/6明赤褐色	白色・黑色粒子・織維	外面部調整痕、内面横位擦痕
19	I群2類k	SYR5/6明赤褐色	長石・赤褐色粒子・細砂・織維	外面部調整痕、内面横位擦痕
20	I群2類k	SYR5/6明赤褐色	長石・石英・赤褐色粒子・織維	外面部調整痕、内面横位擦痕
21	II群2類a	SYR5/6明赤褐色	長石・細砂	口脣部斜位沈線、外面部にRL繩文、爪形突起、弧状、横位沈線
22	II群2類a	SYR4/6赤褐色	長石・細砂	口脣部斜位割目、横位の粘土紐を含めて地文にRL繩文、横位沈線に半截竹管の連續剥突文
23	II群2類a	7.5YR4/3褐色	長石・雲母・黑色粒子・細砂	地文にRL繩文、弧状の粘土紐
24	II群2類a	SYR5/6明赤褐色	長石・雲母・細砂	口脣部割目、地文にRL繩文、横位沈線
25	II群2類a	SYR4/6赤褐色	長石・細砂	口脣部割目、横位の粘土紐を含めて地文にRL繩文、粘土紐の間に半截竹管の連續剥突文
26	II群2類a	7.5YR5/4にぶい褐色	長石・石英・細砂	横位の粘土紐を含めてRL繩文
27	II群2類a	SYR5/6明赤褐色	長石・雲母・細砂	RL繩文、横位沈線
28	II群2類a	SYR5/4にぶい赤褐色	長石・細砂	RL繩文、横位沈線
29	II群2類a	7.5YR5/4にぶい褐色	長石・雲母・細砂	RL繩文、横位沈線
30	II群2類a	7.5YR4/6褐色	長石・細砂	LR繩文、横位沈線
31	II群2類a	SYR5/6明赤褐色	長石・雲母・細砂	RL繩文、横位・斜位沈線
32	II群2類a	SYR4/4にぶい赤褐色	長石・白色粒子・砂粒	無文の浅鉢
33	III群1類b	SYR4/4にぶい赤褐色	長石・雲母・細砂	口脣部直下にLR繩文、横位の薄片状沈線区画内に押引文、口縁部と側面部の縁に鶴状把手、側面部結節部に横位施文し、Y字状の沈線

第47表 中尾沢遺跡縄文時代石器属性表

辨団番号	国版番号	層位	器種	分類	石材	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
34	65	KU	石器未製品		黒曜石	2.06	1.31	0.35	0.56
35	65		石匙	不明	ホルンフェルス	3.60	4.70	1.00	12.12
36	65	KU	打製石斧	IV	ホルンフェルス	11.18	4.30	2.60	130.20
37		KU	石核		ホルンフェルス	5.90	8.50	5.40	223.83
38		KU	磨石	I	輝石安山岩	11.10	8.80	4.10	561.20
39		KU	磨石	I	輝石安山岩	10.20	8.70	3.50	523.40
40		表揮	磨石	I	輝石安山岩	11.90	6.70	5.70	627.70
41			石皿	II	砂岩	30.30	24.10	6.00	7680.00

第8章 分地遺跡

第1節 基本土層と土層の堆積状況

本遺跡では第5層栗色土層と第6層～第7層の富士黒色土層が発達している。

調査区の地形は北西から南東へ下る緩斜面となっており、尾根上は擾乱されている。土層は谷部で大淵スコリア層が厚くなる他はほぼ地形に沿って堆積している。(岩崎)

第2節 遺構と遺物

1 遺構

本遺跡で出土した遺構は、溝状遺構3基、土坑4基、小穴15基である。これらの遺構の検出面は第4層暗褐色土層～第5層栗色土層上面であるが、掘り込み面は3層のクロボク土層である。

(1) 溝状遺構（第48表）

ア SD1（第193図）

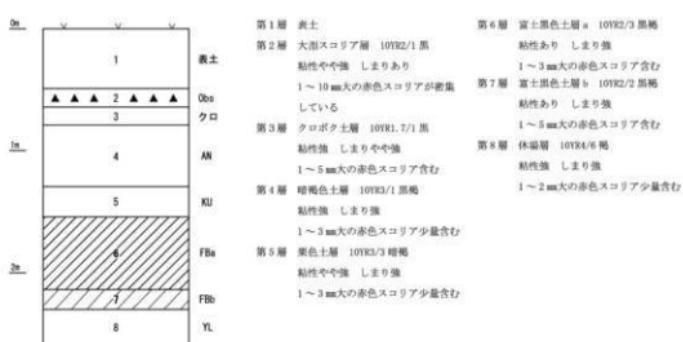
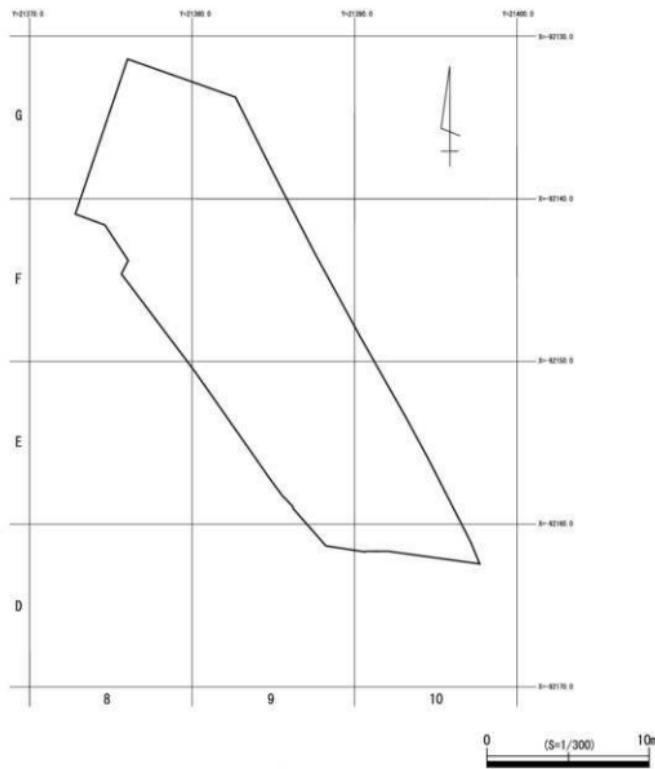
SD1は調査区中央のE-9・E-10グリッドにまたがり、東西に5.6mのびている。削平を受けており、一番深い箇所でも20cmと浅い。

イ SD2（第193図）

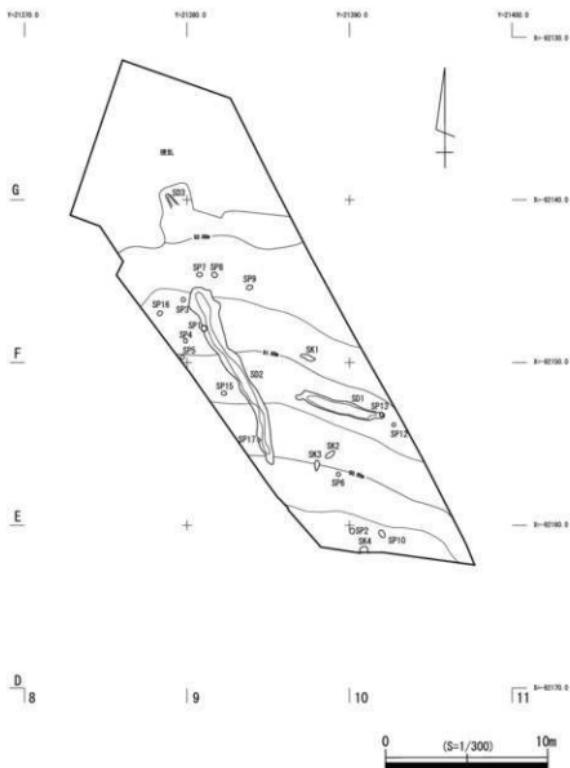
SD2は調査区中央のE-9・F-9グリッドにまたがり南北に1.6mのびている。断面形は皿状をなし、深さは最も浅い箇所で15cm、深い箇所で30cmである。覆土の黒色土には流れ込みと思われる縄文時代の遺物が出土している（第195図）。



第189図 調査区位置図



第191図 基本土層柱状図



第192図 造構配置図

ウ S D 3 (第193図)

S D 3は両側を搅乱によって失っている。残存する長さは1mで、断面形は皿状で立ち上がりが緩やかで、深さは10cmを測る。

(2) 土坑および小穴

土坑・小穴は、土坑墓などの可能性を指摘できるものではなく、性格が不明である。遺物の出土もなく、時期の特定は困難である。多くは第3層のクロボク土層を覆土としていることから、少なくとも第4層の縄文時代の層である暗褐色土層よりも新しい時期のものであると言える。

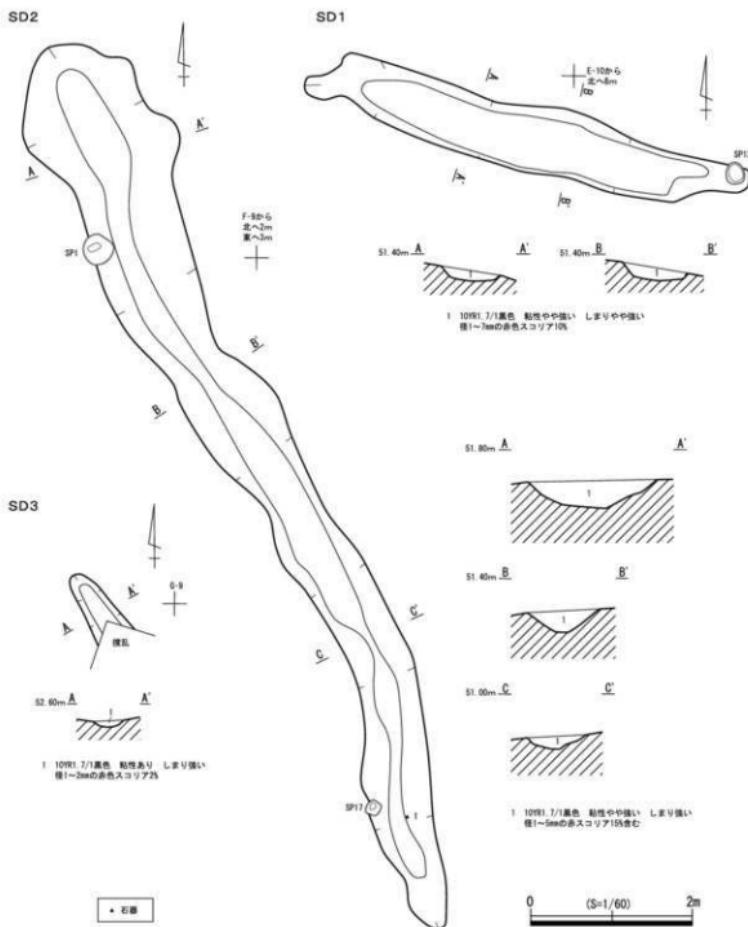
ア 土坑 (第194図・第49表)

土坑とした造構は4基である。覆土は分層が困難で、堆積の状況は不明である。

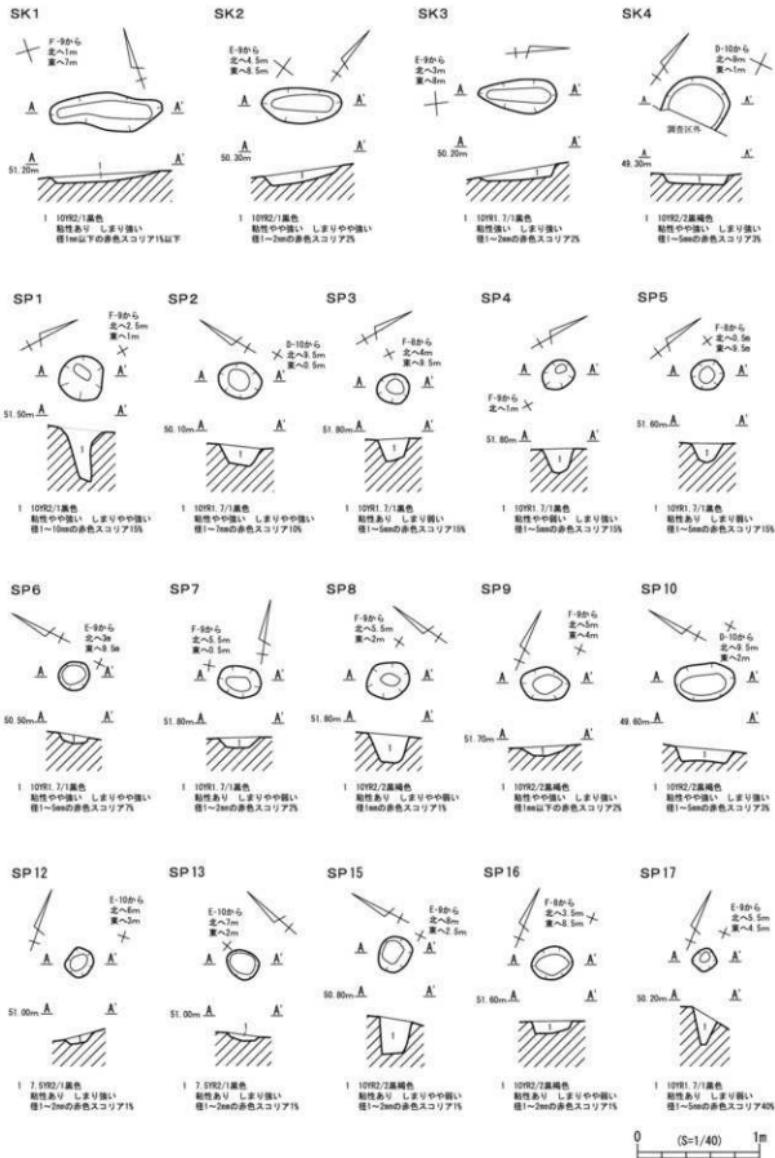
S K 1～S K 3は、平面形は細長く明確な形を持たない。断面の立ち上がりも緩やかである。S K 4は一部が調査区外であるために平面形は不明である。

イ 小穴（第194図・第49表）

15基の小穴の平面形は円形である。断面は皿状のもの、擂鉢状のもの、立ち上がりが急なものなどが検出されている。SP1はSD2より後の遺構であり、SP17はSD2に切られている。

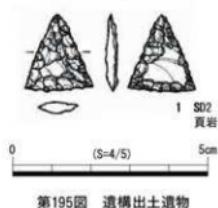


第193図 溝状遺構



第194図 土坑・小穴

2 出土遺物



第195図 遺構出土遺物

(1) SD2出土遺物 (第195図1・第51表 図版65)

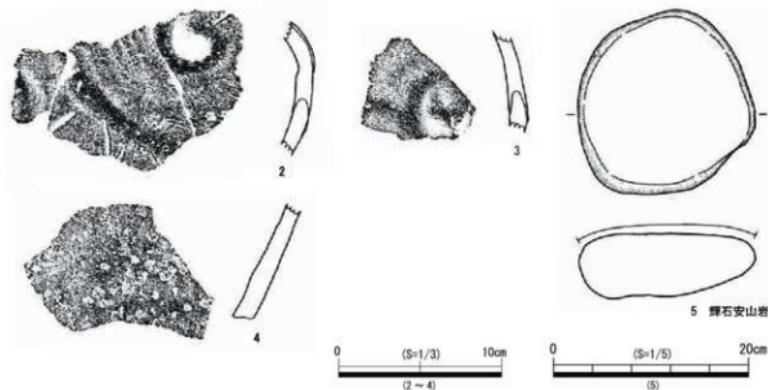
遺物は石器と土器が出土したが、図化することができたのは1点のみである。これらの遺物は先述のとおり、遺構本来の時期を示す遺物でなく、流れ込みによるものであると考えられる。1はI類の平基で二等辺三角形を呈する石礫である。石材は貝岩である。(岩崎・西田)

(2) 遺構外出土土器 (第196図2~4・第50表 図版65)

2・3・4は全て同一個体である。器面は風化しており、地文の有無は不明である。2・3は胴部で、粘土紐により渦巻文を作出している。4は底部付近の胴部の破片である。胎土・文様から、縄文時代中期後葉・曾利式に相当する可能性がある。(西田)

(3) 遺構外出土石器 (第196図5・第51表)

石皿が1点出土している。5は平坦な碟を利用したI類の石皿であり、比較的磨面は平坦である。長さ18.7cm、幅18.1cm、厚さ6.8cmを測る。(岩崎・西田)



第196図 包含層出土遺物

第48表 分地遺跡溝状遺構の概要

() は残存値

遺構名	排 図	図 版	検出面	グリッド	全長 (m)	最大幅 (m)	最大深 (m)
SD1	192, 193	63	AN	E-9, 10	5.6	0.8	0.2
SD2	192, 193	63	AN	E, F-9	12.1	1.6	0.3
SD3	192, 193		AN	F, G-8	(1.0)	0.4	0.1

第49表 分地遺跡土坑・小穴の概要

() は残存値

遺構名	排 図	検出面	グリッド	種 類	規模 (m) 長径×短径	最大深 (m)	平面形態
SK1	192, 194	AN	F-9	土坑	1.0×0.3	0.1	不整形
SK2	192, 194	AN	E-9	土坑	0.7×0.3	0.1	不整形
SK3	192, 194	AN	E-9	土坑	0.6×0.3	0.1	不整形
SK4	192, 194	AN	D-10	土坑	0.5× (0.4)	0.1	—
SP1	192, 194	AN	F-9	小穴	0.4×0.4	0.4	円形
SP2	192, 194	AN	D-10	小穴	0.4×0.3	0.2	円形
SP3	192, 194	AN	F-8	小穴	0.3×0.2	0.2	円形
SP4	192, 194	AN	F-8, 9	小穴	0.3×0.2	0.2	円形
SP5	192, 194	AN	F-8	小穴	0.3×0.2	0.2	円形
SP6	192, 194	AN	E-9	小穴	0.3×0.2	0.1	円形
SP7	192, 194	AN	F-9	小穴	0.4×0.3	0.1	橢円形
SP8	192, 194	AN	F-9	小穴	0.3×0.3	0.2	橢円形
SP9	192, 194	AN	F-9	小穴	0.4×0.3	0.1	橢円形
SP10	192, 194	AN	D-10	小穴	0.5×0.3	0.1	長椭円形
SP12	192, 194	AN	E-10	小穴	0.2×0.2	0.1	橢円形
SP13	192, 194	AN	E-10	小穴	0.3×0.2	0.1	橢円形
SP15	192, 194	AN	E-9	小穴	0.3×0.3	0.3	橢円形
SP16	192, 194	AN	F-8	小穴	0.3×0.3	0.1	橢円形
SP17	192, 194	AN	E-9	小穴	0.2×0.2	0.3	橢円形

第50表 分地遺跡縄文時代土器観察表

排図番号	図版番号	遺構番号	位 置	分 類	色 調	胎 土	文 様 ・ 調 整 等
2	65		クロ	不明	5YR5/6明赤褐色	長石・石英・細砂	低い粘土繊による渦巻文
3	65		クロ	不明	5YR5/6明赤褐色	長石・石英・細砂	低い粘土繊による渦巻文
4			Obs	不明	5YR5/6明赤褐色	長石・石英・細砂	風化のため文様不明

第51表 分地遺跡縄文時代石器属性表

排図番号	図版番号	出土遺構	層 位	器 種	分 類	石 材	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
1	65	SD2	覆土	石鎚	I	頁岩	1.95	1.70	0.30	0.74
5			クロ	石皿	I	輝石安山岩	18.70	18.10	6.80	3260.00

第9章　まとめ

1 富士岡1古墳群検出の遺構について

富士岡1古墳群では、二面の遺構面が確認でき、縄文時代と古墳時代の遺構を検出した。出土遺構について報告した内容を要約するとともに、遺構について若干の考察を加えたい。

(1) 縄文時代

富士岡1古墳群では縄文時代に属する竪穴状遺構が1基、集石が5基、性格不明遺構1基等を検出した。竪穴状遺構は前期末の十三菩提式期、性格不明遺構は中期初頭の五領ヶ台式期の遺構と考えられる。性格不明遺構は第1遺構面から出土している点を考慮すると、古墳時代の遺構面によりいくらかの縄文の遺構が破壊されている事が考えられ、遺物の出土量に比べ遺構の検出数が少なかったものとみられる。

(2) 古墳時代前期

集落跡 竪穴建物5軒、掘立柱建物1軒、竪穴状遺構1基、土坑・小穴を検出した。竪穴建物は出土遺物が少なかったため、出土遺物から建物間の変遷を追う事はできない。しかしながら、SH5は平面形が隅丸方形を呈し、掘方を円形に掘り込むのに対して、その他の竪穴建物は隅丸方形で掘方を平坦に掘り込んでいる。構築方法に違いが認められる事から、竪穴建物間では時期差が認められる可能性が考えられる。

方形周溝墓群 竪穴建物群が建てられた後、方形周溝墓群が形成される。1区では5基、2区でも方形周溝墓の可能性のある溝状遺構SD22を検出している。出土遺物からは方形周溝墓間では明確に大きな時期差は認められないが、遺構の切り合い関係ではSZ1とSZ2は重複しており、SZ1を切るSZ2が新しい。

(3) 古墳時代中期以降

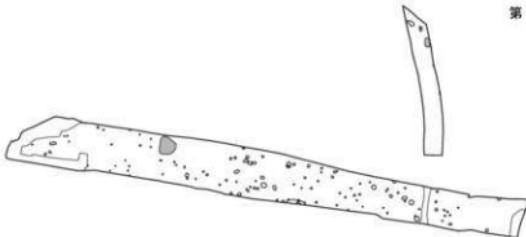
古墳時代中期以降の遺構は、3基の古墳の周溝と、溝状遺構2基、土坑・小穴である。

2号古墳周溝では、墳丘は削平されていたが、古墳構築の際に掘り込まれたと考えられる墳丘内埋没溝の可能性のある溝を検出した。また、3基の古墳周溝およびその可能性のあるSD13では、溝内の全面から多量の河原石が出土している。3号古墳周溝では河原石の法量を計測したが、長径12~20cm程度の楕円形の石が最も多く、規模がある程度揃っていた。古墳を構成する石材であったものとみられる。

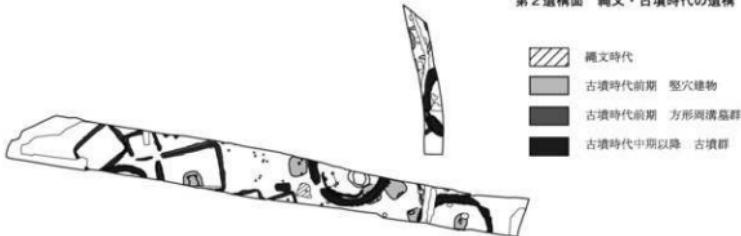
古墳周溝の築造年代について 古墳の周溝は、遺物の出土が少量である事から時期の特定はできない。3号古墳周溝の第4層に大淵スコリアが混入している点を考えると、遺構の時期を考察するには、大淵スコリアの噴出時期が重要な鍵となりそうであるが、時期については考古学的な立場から様々な見解がある。これについて大淵スコリア層内から出土した3号古墳周溝の須恵器模倣坏(24頁第15図)と同種の土器が、富士岡古墳群東の愛鷹山麓に位置する宮添遺跡の大淵スコリアを覆土とする竪穴建物内で出土しているほか、大淵スコリアの降下時期について着目する見解がなされている。同種の土器が出土したのはD地区のSB11で、共伴した須恵器によってMT15併行期と考えられている。SB11に遡る例としては、火山噴火から直接地表に降下した可能性の高いE地区SB24があり、出土遺物からTK47併行期とされる。これにより大淵スコリアの噴出時期はTK23~TK47併行期と考えられている(佐藤2011)。

この例を参考にし、第4層を人為的な土層と解釈し、周溝内には大淵スコリア層のみが堆積していた事を考慮するならば、古墳時代後期前半代以降に築造されたことが考えられる。(西田)

第1遺構面 縄文時代の遺構



第2遺構面 縄文・古墳時代の遺構



第197図 富士岡1古墳群遺構変遷図

2 富士岡1古墳群出土の縄文土器について

富士岡1古墳群では、早期前半葉から後期にかけての多様な土器が出土しており、断続的にではあるが、縄文時代の複数の時期に人為が及んでいることがわかった。当該遺跡で最も出土したのは、前期後葉～中期初頭の土器である。これまで愛鷹山麓の発掘調査によって、周辺遺跡では前期後葉～中期初頭にかけての土器が出土しているものの、断片的に捉えられるのみであった。今回の発掘調査により、当該遺跡周辺に、2遺跡にまたがって広範囲に包含層が存在する事が明らかとなった事は今回の調査の成果と言えるだろう。ここでは、富士岡1古墳群出土の各時期の縄文土器の特徴を述べまとめとしたい。

早期 早期前葉の表裏縄文土器、中葉の押型土器が少量出土した。早期後葉では野鳥式土器が一定量出土した。1区では沈線のみで文様を付ける土器のみが出土し、2区では野鳥式はほとんど出土しなかつたが、1区では出土していない細隆起線文で文様を構成する土器が出土した。

前期前葉～中葉 木鳥VII式・木鳥IX式・関山II式を中心として少量出土している。加えて2区では胎土に繊維を含まず、縄文や羽状縄文を施す糀迦堂Z式が出土した。糀迦堂Z式は、前期中葉の諸磯b式と分布が重なる状況が確認できた。

前期後葉～中期初頭 前期後葉の諸磯b式、十三菩提式、中期初頭の五領ヶ台式土器等が出土している。1区の諸磯b式は胎土が違う土器片が複数あり、産地の違いが想定される。特に白みがかった黄橙色の胎土を持つ土器の文様は、地文を縄文とし、結節浮線文を施すものに限られる点が指摘できる。また、1区出土の十三菩提式では、三角印刻文を多用した土器が多く出土したほか、真脇式とも呼称され、石川県真脇遺跡に類例のある口縁部が筒型波状を呈する土器が出土したことも重要で、北陸との交流も考えなければいけないであろう（第50図167）。前期末葉の十三菩提式に併行する土器として、東北の要素を持つ大木6式に併行する土器が出土した事は、分布圏として西側の出土資料として注目できる（第50

図168・169)。

五領ヶ台式土器は、半截竹管状工具による沈線区画内に文様を充填した五領ヶ台式古段階の土器が主体をなしている。また、人面把手付土器が出土しており、貴重な資料といえよう。そのほか、五領ヶ台式に併行する時期の土器として、鷹島式、北裏式も少量ではあるが出土した。

また、大歳山式と大歳山併行の土器も少量出土している。本報告書にある大歳山併行の土器とは、大歳山式に類似しているものの、大歳山とするには器厚や隆縁の形が違う土器を便宜的に大歳山併行の土器としている。大歳山式としたものは、貼り付けられた粘土紐の断面が三角形であり、大歳山式としたが、大歳山式に併行するものは断面が蒲鉾状で器厚は厚いという特徴があげられる。

中期後葉～後期前葉 中期後葉では曾利式・加曾利E式、後期前葉では堀之内式土器が少量出土している。堀之内式土器は、特殊な原体を持つ薄手の土器が出土した(第53図262～266)。

3 向山遺跡検出の遺構について

出土遺物の検討によって、第1遺構面は縄文時代の遺構面、第2遺構面は古墳時代前期を中心とした遺構面であることがわかっている。ここではその結果から、集落を構成する主要遺構の時期と変遷をまとめた。

(1) 縄文時代前期前葉

堅穴状遺構2基を検出した。TA2の時期については、関山II式、木鳥式土器が出土しており、木鳥式土器がX式の新段階であると考えられ、関山II式・木鳥式X新式期の遺構と捉えられる(註1)。関山式期では、小型の堅穴住居が検出される事があるという(註2)。TA3は長軸3.5m、短軸2.6mの不整橢円形の遺構である。TA3は木鳥VIII式期の堅穴状遺構であり、石皿や磨石といった生活用具が出土している。

その他にも規模が類似する堅穴状遺構が出土しているが、時期は特定できない。TA1・TA5は遺物の出土ではなく時期は不明である。TA4に関しては前期の土器の小片が出土しているが、遺構の年代は不明な点がある。

(2) 縄文時代前期後葉

前期後葉の遺構は1基である。TA6は諸磯c式期の堅穴状遺構である。ほかSK11が諸磯c式の破片が出土しているが、遺構の年代を示す遺物であるかは根拠に欠ける。包含層からは最も多くのこの時期の土器が出土しているが、当該時期の遺構となる可能性のあるものは他に検出されなかった。

(3) 縄文時代中期後葉

中期中葉の遺構は2基検出した。石圓炉を伴うSH14と、性格不明遺構で屋外炉の可能性があるSX3が検出された。ともに曾利III式期の遺構に位置付けられる。

(4) 古墳時代前期

検出できた遺構は、堅穴建物4軒、掘立柱建物1軒、堅穴状遺構1基、土坑、小穴、性格不明遺構2基である。遺物からも判明しているが、堅穴建物は、顕著な建て替えや建物の重複が確認できないため、存続期間は短期間であったと推定できる。富士市が行った過去の調査では、さらに古い古墳時代初頭の堅穴建物が検出されているが、当該時期は断片的に様相を知る事しかできない。

(5) 古墳時代以降

円形の土坑と清からなる遺構群である。覆土に大淵スコリアが混入しているが、大淵スコリア層そのものではなく、巻き上げられて上層の土に混入したものか覆土として堆積したものとみられる。愛鷹山で多く類例のある中近世の土坑および溝であると考えられる。(西田)

4 向山遺跡出土の縄文土器について

富士岡1古墳群同様、早期から後期にかけての多様な土器が出土した。

早期の土器は絡条体圧痕文を施した清水柳E類土器が多く出土した。愛鷹山麓では長泉町梅ノ木沢遺跡、沼津市清水柳遺跡、同清水柳北遺跡、同木戸上遺跡、同二ツ洞遺跡、同尾上第2遺跡、同秋葉林遺跡などでこの型式の土器が出土している。

前期はII群1類と2類の間に空白期が見られる。諸磯b式土器が少量出土し、諸磯c式、十三菩提式、大歳山式土器が多量に出土した。また、北陸地方の蜆ヶ森式の影響を受けた土器も見られる。本遺跡で出土した諸磯b式土器と諸磯c式土器については、今後系統的な流れについて検討する必要（註1）があろう。

中期前葉の五領ヶ台式土器も多量に出土した。本遺跡では新段階と思われるものも出土した（註2）ことから、中期初頭についても系統的な型式変遷を検討しなければならない。（岩崎）

5 富士岡1古墳群・向山遺跡出土の縄文土器の概観

早期の土器は、富士岡1古墳群では野島式土器、向山遺跡では絡条体圧痕文を施した清水柳E類土器が多く出土した。逆に富士岡1古墳群では清水柳E類、向山遺跡では野島式土器の出土量が少ない。愛鷹山麓では長泉町梅ノ木沢遺跡、沼津市清水柳遺跡、同清水柳北遺跡、同尾上第2遺跡、同秋葉林遺跡で両型式の土器が揃って出土している。長泉町梅ノ木沢遺跡では出土した地点により、両型式の組み合わせが抽出でき、野島式土器が含まれないグループに細隆起線文を持たない清水柳E類土器が存在し、細隆起線文が含まれる時期には野島式土器の文様構成は単純な弦線となり、また、文様帶に沈線を充填するタイプの野島式土器に清水柳E類土器はほとんど伴わないという結論が出ている（理文研2008）。両遺跡での出土状況を見ると、周辺の遺跡間で住み分けが行われていたのではないかとも考えられる。

前期の土器は、富士岡1古墳群では諸磯b式、向山遺跡では諸磯c式の有孔浅鉢形土器が出土している。これらの土器は静岡県内の出土例が少なく、今後重要な資料となるであろう。また、富士岡1古墳群、向山遺跡とともに十三菩提式土器と大歳山系土器が揃って出土した。本書では大歳山「系」として扱った土器は、施文方法が通常の大歳山式土器と異なるものが主体である。富士岡1古墳群及び向山遺跡で出土したΣ字状刺突を受けた断面三角形の粘土紐を貼り付けた土器は、当時の地域間交流等を知るうえで貴重な資料となり得るものである。

富士山南麓及び愛鷹山南西麓は平野部から離れた丘陵上に立地する遺跡の調査事例がまだ少ない。今回の調査によってこの地域が縄文時代的一大集落域であったことが明らかになったことは成果のひとつと言ってよいであろう。（岩崎）

6 古墳時代前期の土器について

富士岡1古墳群、向山遺跡、中尾沢遺跡で出土した古墳時代前期の土器について概観を述べてゆく。

同一遺跡内における土器の時期差は、遺構ごとに出土量と器種の偏りがあることと、遺物を伴って検出された遺構の中に切り合い関係が認められるものがないため、現状では判断が難しい。しかし、富士岡1古墳群S Z 3出土第31図15、同S K 1出土第33図24、向山遺跡S H11出土第106図16、中尾沢遺跡S H 2出土第184図8といった大型の壺が各遺跡で出土していることから、いずれの遺跡も時期は大歳式期として差し支えないであろう。

各遺跡から出土した土器を観察すると、富士岡1古墳群では口縁部に横ナデを施した甕や鉢が普遍的に出土しているが、向山遺跡、中尾沢遺跡ではこのような調整を施した甕や鉢は出土していない。また、富士岡1古墳群では、沼津市高尾山古墳で出土した大歳III式期と考えられる小型壺（渡井2012）とほぼ

同じ形状を呈する遺物集中2（S25）出土第32図22と同23が出土している。これらのことから敢えて時期を細分すると、富士岡1古墳群の堅穴建物、向山遺跡、中尾沢遺跡出土土器は大廓II式、富士岡1古墳群の方形周溝墓と遺物集中出土土器が大廓III式であると思われる。

富士市域の遺跡を見ると、富士岡1古墳群と同一丘陵の先端部に立地する祢宜ノ前遺跡は古墳時代前期の堅穴建物が調査されている。在地の土器型式を基本しながら、東海西部系の土器が比較的多く出土している。この他丘陵先端部に立地する遺跡として宮添遺跡と宇東川遺跡があげられる。宮添遺跡は弥生時代後期から中世まで続く集落跡である。古墳時代前期の堅穴建物も検出されており、大廓式土器とともにS字彫が出土している。宇東川遺跡は縄文時代中期と古墳時代前期から平安時代まで続く集落跡である。堅穴建物から大廓式土器とともにS字彫や北陸地方の月影式土器が出土している。平野部を見ると、田子の浦砂丘上に立地する三新田遺跡は古墳時代前期と同後期から平安時代まで続く集落跡である。堅穴建物から大廓式土器とともにS字彫が顕著に出土している。

田方平野まで範囲を広げて見ると、畿内以西の影響が認められる清水町恵ヶ後遺跡、庄内壺の出土が知られる伊豆の国市山木遺跡などの狩野川流域における外来系土器の出土が顕著な遺跡と、愛鷹山南麓に立地する沼津市八兵衛洞遺跡、同植出遺跡（北神馬土手遺跡）などの在地色の強い遺跡が故意に地域を分けるかのように分布している。今回調査した3遺跡とも小型精製土器が出土しておらず、外来系の土器はほとんど出土していない。また、集落の継続期間が短く、古墳時代前期で居住域としての機能がなくなる。よって3遺跡は時期差があるものの愛鷹山南麓の遺跡群に似たあり方を示している。

向山遺跡では平成3年度の富士市教育委員会による発掘調査で古墳時代初頭の堅穴建物が検出された。富士岡1古墳群から東南東に約2.5km離れた丘陵上に立地する富士市平椎遺跡は弥生時代後期前半と後期末から古墳時代初頭の集落跡である。富士山南麓及び愛鷹山南西麓においては、前節で述べたように、平野部から離れた丘陵上に立地する集落遺跡の調査事例が少ないせいか、遺跡ごとに画期のばらつきがある。今後の資料の増加を待って、この地域の様相について検討を続けたい。（岩崎）

註1 濵谷昌彦氏の御教示による。

註2 谷藤保彦氏の御教示による。

引用・参考文献

- 赤塙 仁 2008 「十三菩提式土器」「總覽縄文土器」總覽縄文土器刊行委員会
- 飯塚正治 2008 「貝殻・沈線文系土器」「總覽縄文土器」總覽縄文土器刊行委員会
- 井鍋晋之 2008 「原分古墳にみる古墳構築過程の復原」「原分古墳 調査報告編」附 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小川賢之輔 1974 「地質・地形」「富士・愛鷹山麓地域の自然環境保全と土地利用計画調査報告書」
- 小野正文 1986 「积迦堂遺跡Ⅰ」山梨県教育委員会
- 金子直行 2008 「条痕文系土器」「總覽縄文土器」總覽縄文土器刊行委員会
- 小松原純子・穴倉正展・岡村行信 2007 「静岡県浮島ヶ原低地の水位上昇履歴と富士川河口断層帯の活動」「活断層・古地震研究報告7」
- 笹津海祥・瀬川裕市郎・関野哲夫・杉山治夫 1976 「清水柳遺跡の土器と石器」「沼津市歴史民俗資料館紀要1」
- 佐藤祐樹 2011 「E地区における調査成果」「宮添遺跡IV」富士市教育委員会
- 静岡県考古学会 2009 東部例会ミニシンポジウム「清水柳E類土器を考える」資料集
- 濱谷昌彦 1982 「木島式土器の研究」「静岡県考古学研究」11 静岡県考古学会
- 濱谷昌彦 2002 「上の坊式土器と有尾式土器」「平野吾郎先生還暦記念論文集」

- 瀧谷昌彦 2008 「塩屋式・木島式・中越式土器」「総覧縄文土器」総覧縄文土器刊行委員会
- 瀧谷昌彦 2009 「神之木台I式土器の研究」「地域と学史の考古学」六一書房
- 瀧谷昌彦 2012 「中越式土器から見た土器型式間の交渉」「縄文時代」第23号
- 鈴木康二 2008 「特殊凸帯文系土器（北白川III式・大歳山式土器）」「総覧縄文土器」総覧縄文土器刊行委員会
- 閔根慎二 2008 「諸磯式土器」「総覧縄文土器」総覧縄文土器刊行委員会
- 谷藤保彦・閔根慎二編 1999 「前期後半の再検討」縄文セミナーの会
- 谷藤保彦 2006 「二ッ木から閔山式へ土器文様の変遷と異系統土器」「第19回縄文セミナー早期末・前期初頭の諸様相」縄文セミナーの会
- 谷藤保彦・閔根慎二編 2010 「縄文時代前期浅鉢形土器の諸様相」縄文セミナーの会
- 戸田哲也 1998 「南関東における加曾利E式末期の土器様相」「列島の考古学」渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
- 戸田哲也 2004 「尖底土器とその文化」「第39回企画展 底の尖った土器」笠懸野岩宿文化資料館
- 富山大学考古学同好会編 1954 「蜆ヶ森貝塚調査報告書」富山県教育委員会
- 中野国雄・後藤守一 1958 「吉原市の古墳」吉原市教育委員会
- 山下勝年 2008 「東海条痕文系土器」「総覧縄文土器」総覧縄文土器刊行委員会
- 山内清男 1979 「日本先史土器の縄紋」
- 山本典幸 2008 「五領ヶ台式土器」「総覧縄文土器」総覧縄文土器刊行委員会
- 渡井英吾 2012 「高尾山古墳の出土土器について」「高尾山古墳発掘調査報告書」沼津市教育委員会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997a 「北神馬土手遺跡 Ⅰ」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997b 「葷山城跡・葷山城内遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 「梅ノ木沢遺跡Ⅰ」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a 「秋葉林遺跡Ⅱ」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010b 「の場古墳群・的場遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010c 「富士山・愛鷹山麓の遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010d 「富士山・愛鷹山麓の古墳群」
- 清水町教育委員会 2010 「恵ヶ後遺跡」
- 沼津市教育委員会 1979 「八兵衛洞遺跡発掘調査報告書」
- 沼津市教育委員会 1985 「埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 沼津市教育委員会 1991 「広合遺跡（e区）・ニツ洞遺跡（a区）発掘調査報告書」
- 沼津市教育委員会 2007 「尾上第2遺跡発掘調査報告書」
- 沼津市教育委員会 2010 「尾志遺跡（第2次） 清水柳北遺跡（第2次）発掘調査報告書」
- 沼津市教育委員会 2012 「高尾山古墳発掘調査報告書」
- 富士市教育委員会 1983 「三新田遺跡発掘調査報告書」
- 富士市教育委員会 1991 「宇東川遺跡A・B・C地区発掘調査概報」
- 富士市教育委員会 1992 「向山遺跡」
- 富士市教育委員会 2005 「上ノ山第1号墳」
- 富士市教育委員会 2009 「祢宜ノ前遺跡」
- 富士市教育委員会 2010 「宮添遺跡III」
- 富士市教育委員会 2011 「宮添遺跡IV」

富士岡1古墳群、向山遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

富士岡1古墳群(SFJO)は、静岡県富士市富士岡(北緯 $35^{\circ} 10' 22''$ 、東経 $138^{\circ} 43' 42''$)に所在し、富士山南麓の丘陵上に立地する。測定対象試料は、TA2床面出土木炭(4:IAAA-120976)、包含層の栗色土層(KU)出土土器付着炭化物(16:IAAA-120977)の合計2点である(第52表)。TA2からは縄文土器が少量出土しているが、遺構の時期は不明である。16の土器は、縄文時代前期だが詳細な型式は不明とされる。土器付着炭化物は土器の内面より採取された。

向山遺跡(SMY)は、静岡県富士市中里(北緯 $35^{\circ} 10' 19''$ 、東経 $138^{\circ} 43' 49''$)に所在し、愛鷹山南西麓の丘陵上に立地する。測定対象試料は、SH11覆土1出土木炭(8:IAAA-120978)、SH14覆土1出土木炭(13:IAAA-120979)、SK36覆土1出土土器付着炭化物(17:IAAA-120980)の合計3点である(第52表)。遺構の形態と出土土器から、SH11は古墳時代前期、SH14は縄文時代中期と推定されている。17の土器は縄文時代早期末と考えられている。土器付着炭化物は土器の外側より採取された。

なお、4、8、13については樹種同定が行われている(樹種同定報告参照)。

2 測定の意義

富士岡1古墳群出土試料については、4の測定で時期不明の遺構TA2の年代を明らかにし、16の測定で出土遺物の相対年代との比較を行う。

向山遺跡出土試料の測定では、出土遺構・遺物の相対年代との比較を行う。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第52表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシウ酸(HOx

II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (第52表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第52表に、補正していない値を参考値として第53表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第52表に、補正していない値を参考値として第53表に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第53表に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

富士岡1古墳群出土試料の ^{14}C 年代は、TA2床面出土木炭4が $1860 \pm 20\text{yrBP}$ 、包含層の栗色土層 (KU) 出土土器付着炭化物16が $4980 \pm 30\text{yrBP}$ である。历年較正年代 (1σ) は、4が $89 \sim 212\text{cal AD}$ の間に3つの範囲、16が $3775 \sim 3711\text{cal BC}$ の範囲で示される。4は弥生時代後期頃に相当する (小林2009) が、後述するように実際よりも古い値が示されている可能性がある。16は縄文時代前期後葉頃に相当し (小林編2008)、土器の特徴と矛盾しない。

向山遺跡出土試料の ^{14}C 年代は、SH11覆土1出土木炭8が $1870 \pm 20\text{yrBP}$ 、SH14覆土1出土木炭13が $4140 \pm 20\text{yrBP}$ 、SK36覆土1出土土器付着炭化物17が $7900 \pm 30\text{yrBP}$ である。历年較正年代 (1σ) は、8が $86 \sim 211\text{cal AD}$ の間に3つの範囲、13が $2864 \sim 2638\text{cal BC}$ の間に5つの範囲、17が $6812 \sim 6685\text{cal BC}$ の間に2つの範囲で示される。8は弥生時代後期頃に相当し (小林2009)、遺構の形態と出土遺物から推定される古墳時代前期より古い年代値であるが、後述するように実際よりも古い値が示されている可能性がある。13は縄文時代中期後葉頃、17は縄文時代早期中葉頃に相当する (小林編2008)。13は遺構の形態と出土遺物から推定される縄文時代中期に含まれる年代値であるが、17は推定より古い値と

なっている。

なお、4、8が含まれる1～3世紀頃の曆年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCal09に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾崎2009、坂本2010など）。その日本版較正曲線を用いてこれらの測定結果を曆年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて50%を超える、化学処理、測定上の問題は認められない。

第52表 富士岡1古墳群、向山遺跡における放射性炭素年代

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age(yrBP)	pMC (%)	
IAAA-120976	4 (遺物番号3746)	TA2 床面	木炭	AAA	-24.45 ± 0.26	1,860 ± 20	79.31 ± 0.23
IAAA-120977	16 (遺物番号21191)	包含層 栗色土層 (KU)	土器付着 炭化物	AaA	-24.64 ± 0.29	4,980 ± 30	53.81 ± 0.18
IAAA-120978	8 (遺物番号17541)	SH11 覆±1	木炭	AAA	-32.50 ± 0.51	1,870 ± 20	79.27 ± 0.23
IAAA-120979	13 (遺物番号25125)	SH14 覆±1	木炭	AAA	-27.27 ± 0.36	4,140 ± 20	59.70 ± 0.18
IAAA-120980	17 (遺物番号13525)	SK36 覆±1	土器付着 炭化物	AaA	-27.87 ± 0.34	7,900 ± 30	37.39 ± 0.14

{#5274,5275}

第53表 富士岡1古墳群、向山遺跡における放射性炭素年代（参考値）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-120976	1,850 ± 20	79.40 ± 0.22	1,862 ± 22	89calAD-102calAD (9.7%) 123calAD-175calAD (42.6%) 192calAD-212calAD (15.8%)	82calAD-223calAD (95.4%)
IAAA-120977	4,970 ± 30	53.85 ± 0.18	4,977 ± 27	3775calBC-3711calBC (68.2%)	3904calBC-3880calBC (3.4%) 3801calBC-3693calBC (90.0%) 3681calBC-3665calBC (2.0%)
IAAA-120978	1,990 ± 20	78.06 ± 0.21	1,865 ± 23	86calAD-106calAD (15.4%) 121calAD-174calAD (39.4%) 192calAD-211calAD (13.3%)	80calAD-222calAD (95.4%)
IAAA-120979	4,180 ± 20	59.42 ± 0.18	4,143 ± 24	2864calBC-2835calBC (14.8%) 2817calBC-2807calBC (4.9%) 2759calBC-2717calBC (21.9%) 2712calBC-2664calBC (23.3%) 2646calBC-2638calBC (3.3%)	2873calBC-2830calBC (18.6%) 2823calBC-2628calBC (76.8%)
IAAA-120980	7,950 ± 30	37.17 ± 0.13	7,903 ± 29	6812calBC-6785calBC (12.0%) 6779calBC-6685calBC (56.2%)	7023calBC-7013calBC (0.9%) 7006calBC-6968calBC (4.4%) 6946calBC-6936calBC (0.9%) 6915calBC-6882calBC (5.3%) 6837calBC-6649calBC (84.0%)

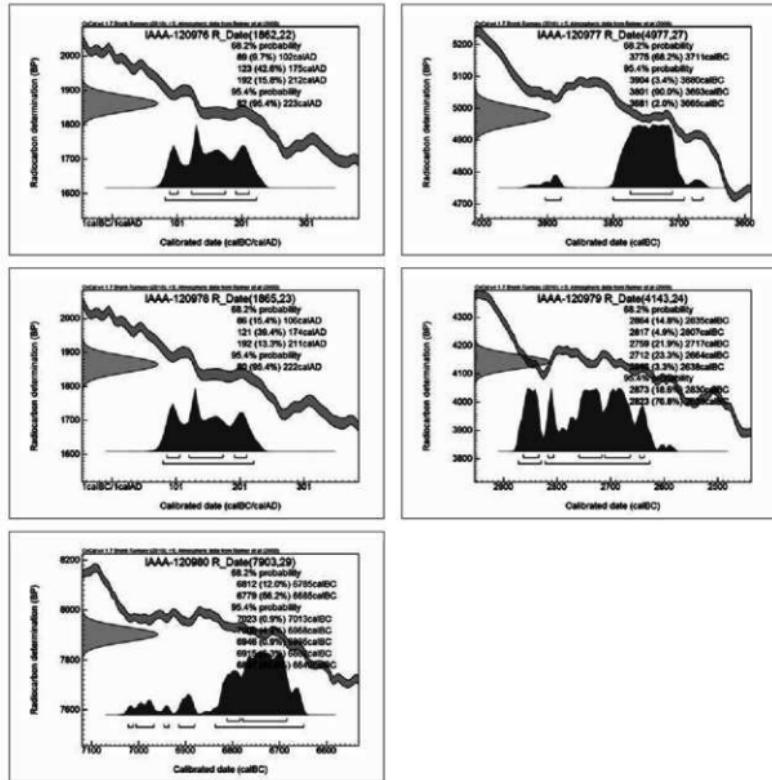
文 献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360

小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編、新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代、雄山閣、55-82

小林達雄編 2008 総覧縄文土器、総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション

- 尾崎大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代、弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭、同成社、225-235
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP; *Radiocarbon* 51 (4), 1111-1150
- 坂本 稔 2010 較正曲線と日本産樹木—弥生から古墳へ—、第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集、(株)加速器分析研究所、85-90
- Sstuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363



第198図 層年較正年代グラフ

富士岡1古墳群、向山遺跡、中尾沢遺跡 出土炭化材の樹種

はじめに

富士岡1古墳群（SFJO）、向山遺跡（SMY）、中尾沢遺跡（SNO）で検出された縄文時代や古墳時代の遺構等から出土した炭化材を対象として、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

I 富士岡1古墳群

1 試 料

試料は、住居跡SH2、SH3のP1、土坑TA2から出土した炭化材4点（試料番号1～4）である。住居跡SH2、SH3は古墳時代前期と推定されている。なお、試料4については放射性炭素年代測定が行われている（年代測定報告参照）。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3 結 果

樹種同定結果を第54表に示す。炭化材は、広葉樹2分類群（コナラ属アカガシ亜属・ハイノキ属ハイノキ節）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。

- ハイノキ属ハイノキ節 (*Symplocos* sect. *Lodhra*) ハイノキ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では多角形～角張った梢円形、単独または2～5個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

第54表 富士岡1古墳群（SFJO）の樹種同定結果

試料番号	遺 構	遺物番号	種 類
1	SH2	3108	コナラ属アカガシ亜属
2	SH3P1	3896	コナラ属アカガシ亜属
3	TA2	3597	ハイノキ属ハイノキ節
4	TA2	3746	コナラ属アカガシ亜属

4 考 察

古墳時代前期と推定される住居跡SH2とSH3から出土した炭化材は、住居の建築部材に由来する可能性がある。とくに、SH3の炭化材はP5から出土しており、柱材の可能性がある。炭化材は、いずれも常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。アカガシ亜属は、暖温帶性常緑広葉樹林を構成する常緑高木であり、木材は重硬で強度が高い。今回の結果から、遺跡周辺に常緑広葉樹のアカガシ亜属が生育しており、その木材を利用したことが推定される。また、住居構築材として、強度の高い木材を選択したことか推定される。

本遺跡周辺地域では、立地環境が多少異なるが、愛鷹山南西麓に位置する向山遺跡の古墳時代前期とされる住居跡から出土した炭化材にヒノキ科、アカガシ亜属、シキミが確認されている（本稿II参照）。アカガシ亜属の利用は、本遺跡の結果とも調和的である。

一方、時期および性格が不明の土坑TA2から出土した炭化材は、常緑広葉樹のアカガシ亜属とハイノキ節に同定された。

II 向山遺跡

1 試 料

試料は、住居跡SH1、TA1、TA3、TA5、SH11、SH14から出土した炭化材10点（試料番号5～14）である。SH14は縄文時代中期、SH1、SH11は古墳時代前期と推定されている。なお、試料8、13については放射性炭素年代測定が行われている（年代測定報告参照）。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3 結 果

樹種同定結果を第55表に示す。炭化材は、針葉樹1分類群（ヒノキ科）と広葉樹4分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・シキミ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

- コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材であるが、いずれも年輪界で割れており、早材部の一部と晩材部が観察できる。晩材部の道管は、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2-4個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列、道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

第55表 向山遺跡(SMY)の樹種同定結果

試料番号	遺構	遺物番号	種類
5	TA1	10338	コナラ属コナラ亜属コナラ節
6	TA3	13234	クリ
7	TA5	13434	クリ
8	SH11	17541	コナラ属アカガシ亜属
9	SH11	17558	シキミ
10	SH11	17570	コナラ属アカガシ亜属
11	SH1	4159	ヒノキ科
12	SH11	17583	コナラ属アカガシ亜属
13	SH14	25125	クリ
14	SH14	25128	クリ

4 考 察

炭化材には、合計5分類群が認められた。各分類群の材質などをみると、ヒノキ科にはヒノキ、サワラ、アスナロなどの有用材が含まれる。いずれも常緑高木で、木材は木理が直線で割裂性・耐水性が比較的高い。広葉樹のアカガシ亜属は、暖温帶性常緑広葉樹林を構成する常緑高木で、木材は重硬で强度が高い。コナラ節とクリは、二次林などを構成する落葉高木で、木材は比較的重硬で强度が高く、クリでは耐朽性も高い。シキミは、常緑広葉樹林等に生育する常緑高木で、木材は比較的强度が高い部類に入る。

時代別にみると、縄文時代中期と推定されるSH14から出土した炭化材は、住居の建築部材に由来する可能性がある。炭化材はいずれも落葉広葉樹のクリに同定された。クリは、二次林などに生育する落葉高木で、木材は重硬で强度・耐朽性が高い。この結果から、建築部材として强度・耐朽性の高い木材を選択・利用したことが推定される。

一方、古墳時代前期と推定されるSH1およびSH11の炭化材も建築部材の可能性があるが、ヒノキ科、アカガシ亜属、シキミで構成されており、クリは認められない。この結果から、縄文時代中期と古墳時代前期とで木材利用が異なる可能性がある。SH11では、アカガシ亜属を中心にシキミが混じる結果であり、强度の高い常緑広葉樹を利用したことが推定される。一方、SH1は針葉樹のヒノキ科であり、SH11とは木材利用が異なる。ヒノキ科は、割裂性が高く、分割加工が容易であることから、板状のものによく利用される。

時期不明の住居跡のうち、TA3とTA5の炭化材はいずれもクリであり、縄文時代中期のSH14と木材利用の傾向が似ている。TA1は、落葉広葉樹のコナラ節であった。この結果から、コナラ節も住居の建築部材などに利用されたことが推定される。

縄文時代中期の住居跡から出土した炭化材の樹種を明らかにした例は、本遺跡周辺地域では確認できないが、愛鷹山の東麓に位置する上山地遺跡や箱根山南西麓に位置する押出シ遺跡では調査した炭化材

が全てクリに同定されており、今回の結果とよく似ている（伊東・山田, 2012）。この結果から、縄文時代中期では、愛鷹山麓やその周辺の広い範囲でクリを主体とした木材利用が見られた可能性がある。一方、古墳時代前期については、富士岡1古墳群において、住居跡から出土した炭化材にアカガシ亜属の利用が確認されており、今回の結果とも調和的である（本稿I参照）。

III 中尾沢遺跡

1 試 料

試料は、住居跡SH1から出土した炭化材1点（試料番号15）である。この住居跡は古墳時代前期と推定されている。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3 結 果

炭化材は、常緑広葉樹のサカキに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、單列、1-20細胞高。

4 考 察

古墳時代前期と推定される住居跡SH1から出土した炭化材は、常緑広葉樹のサカキに同定された。サカキは、暖温帯常緑広葉樹林内に生育する常緑小高木であり、木材は重硬で強度が高い。この結果から、建築部材などに強度の高いサカキを利用した可能性がある。サカキは、希に直径が30cmを超える個体があるとされるが、一般には直径20cm以下の小径木が多いことから、建築部材の場合は、主柱ではなく垂木などの用途が考えられる。

周辺地域では、富士岡1古墳群や向山遺跡で古墳時代前期の住居跡出土炭化材にアカガシ亜属が多い結果が得られている（本稿I、II参照）。サカキもアカガシ亜属と共に生育する常緑広葉樹である点は共通点があり、古墳時代前期の本地域には常緑広葉樹を主体とした植生がみられたことが推定される。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

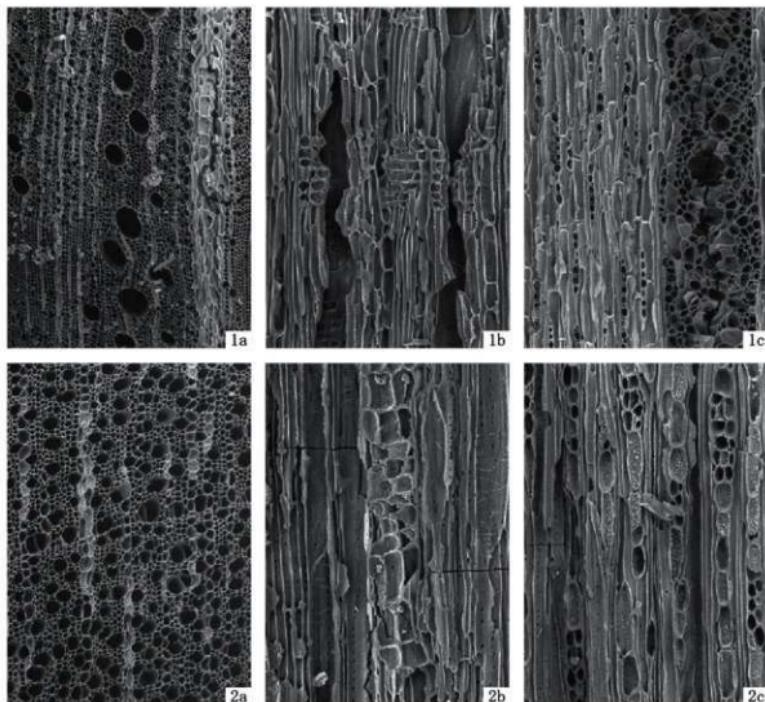
伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載IV, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30–166.
伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載V, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47–216.
伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449p.

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 鈎葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

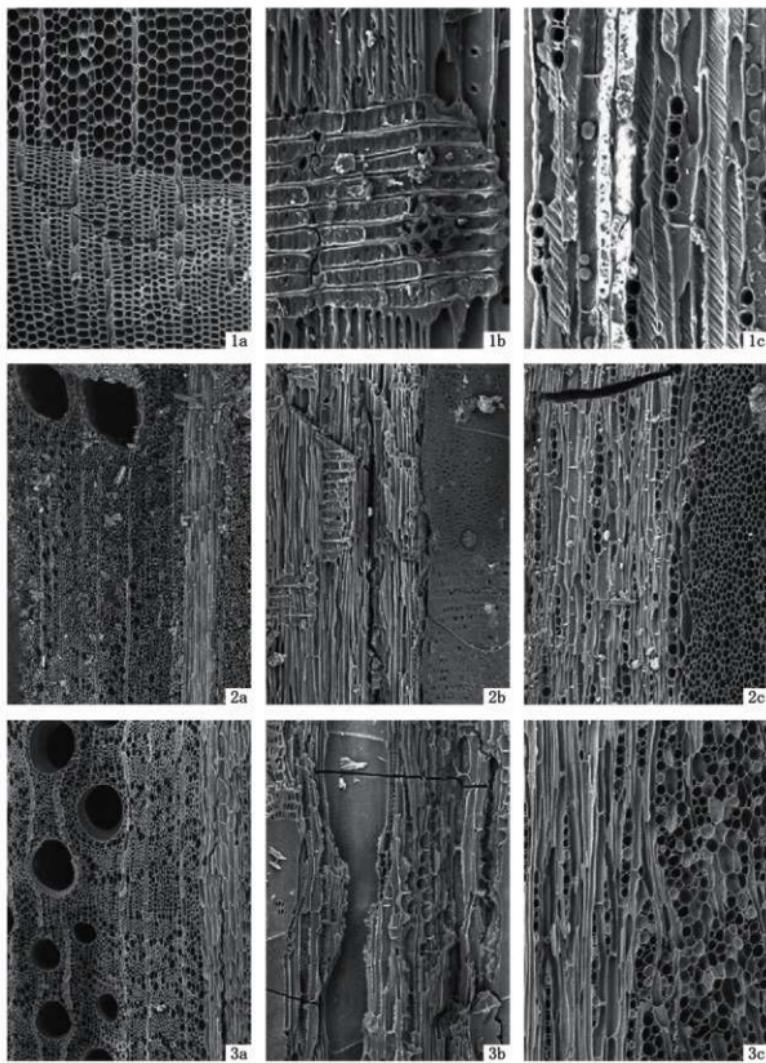
(※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



1. コナラ属アカガシ亜属(試料番号2)
 2. ハイノキ属ハイノキ節(試料番号3)
- a:木口, b:粂目, c:板目

200 μm:a
200 μm:b, c

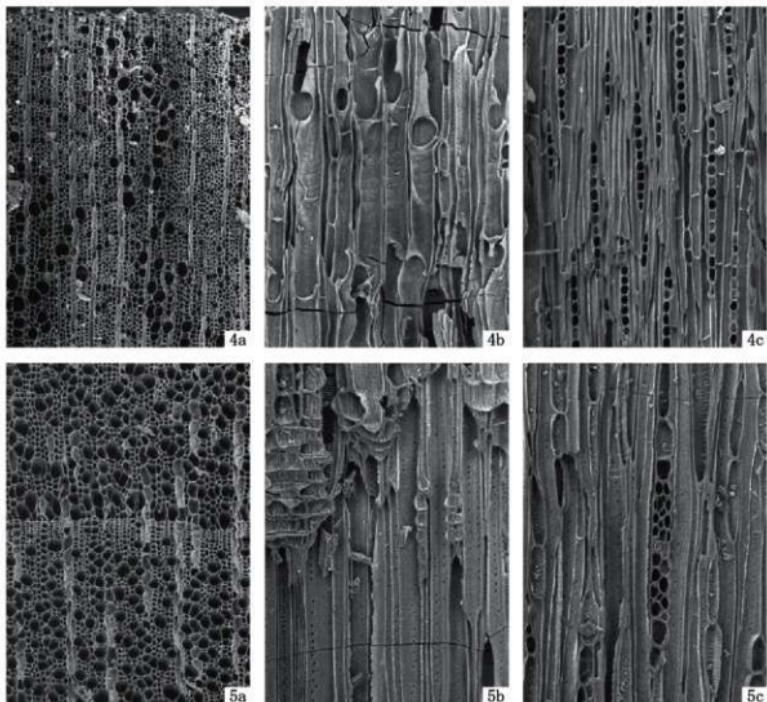
第199図 富士岡1古墳群の炭化材



1. ヒノキ科(試料番号11)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号5)
 3. コナラ属アカガシ亜属(試料番号12)
- a:木口, b:柾目, c:板目

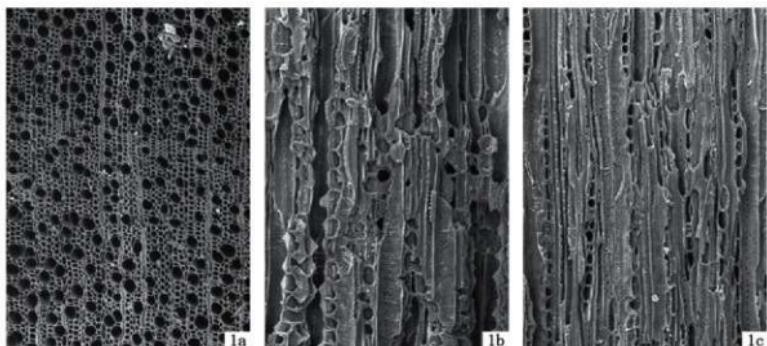
200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c

第200図 向山遺跡の炭化材(1)



4. クリ(試料番号13)
5. シキミ(試料番号9)
a:木口, b:柾目, c:板目

第201図 向山遺跡の炭化材(2)



1. サカキ(試料番号15)
a:木口, b:柾目, c:板目

第202図 中尾沢遺跡の炭化材